

願い、雨

夜泣マクーラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

memories of シリーズの二次創作です。

知らない方も多いでしょうが、初代主人公三上智也と、それからのヒロイン、陵いのがメインのお話です。

興味がある方は是非どうぞ。興味のない方も歓迎です。

目次

プロローグ

プロローグ

1

第一章

彼女の嘘、彼の嘘

53

彼の後悔、彼の希望

110

彼の馬鹿、彼女の愚か

158

彼の孤独、彼女の慟哭

205

彼の忘却、彼女の贖罪

259

彼の導き、彼の帳

331

彼の思惑、彼の覚悟

363

二人の重ね、一人の咎人

412

二人の仮面、二人の月

461

幕間

彼に陽射しを、彼女に愛しき日々を、彼に立ち向かう勇気を

529

第二章

彼の十字架、彼女の美醜

564

彼の水底、彼女達の水面

596

彼の孤独の未来、彼女の受け継いだも

の

625

彼女達の雨宿り

658

彼の凶器、彼女の背中

708

彼の帰宅、彼等の始まり

755

彼女のバースデイ、彼女の一人恋愛

838

彼等の聖夜、彼女のサンタ

907

彼等の合コン、彼女等の獲物く前編く

994

プロローグ

プロローグ

耳の奥に響き続ける雨音。冷たく、悲しく、虚しく、果てることなく降り続ける雨。その雨はこの世界全ての悲しみの涙その物の様で、長い間俺を深い、深い曇り空の下に縛り続けていた。

そこから抜け出る方法は知っていた。知っていたが、どうしてもそこから離れることなんて出来なくて……だってさ、その雨は確かに悲しみと痛みばかりだったけれど、それでもその中には小さくとも、何よりも温かい愛しさがあつたんだ。

俺の生涯を捧げてでも、ただ雨の中で立ち尽くしていたかった。

だが、そんな俺の身勝手な自傷とも言えなくもない日常は、周りの大切な人達を少しずつ傷つけていった。目に見えない形で、けれども確実に、俺の中の雨は周りまでも浸食していったんだ。

あの、忘れえぬ秋雨の季節。俺は掛け替えのない存在……恋人以上家族以上。あいつを……桜月彩花を失った。

今でも明瞭に思い出せる。紅が膠着（こびりつ）いたアスファルト、虚しく揺れる落

ちた真つ白な傘。

その傘は彩花のお気に入りで、転がっているソレがそうだって気付いた俺は、なんて叫んだだろう？なんて怨嗟を神に叩きつけたんだろう？それとも、獣のように哭いていただけかもしれない。

ありふれた交通事故だった。でも、そんな交通事故が俺から唯一を奪った。

あれから、あの日の雨が俺の中で止むことなく降り続けた。

俺はずっと、この雨を感じながら生きていくんだと思っていたんだが、時間つてのは残酷だよな。

彩花を失った中学三年から、もう五年も月日が流れてしまった。子供が大人になるには十分な時間だ。

いつまでも子供のまま、我侷に浸っていられる時間は終わり、冷静に昔の自分と現在の自分を見れるようになった。

身勝手に殻に閉じこもり、平気な振りして馬鹿やって……彩花への想いを言い訳に、度々思い出しては涙を堪えて……そんな馬鹿を演じ切れてない馬鹿を見て、周りが平気なわけないんだよな。

信も、唯笑も、みんなが雨の中にいたのに、俺は自分の中にある彩花を愛している……その想いだけしか見ていなかった。そんなの、さ……彩花が許してくれるわけねえんだ

よ。

彩花は、俺と同じように唯笑を大事に想っていた。だから、唯笑の涙を拭えずにいた俺を、あいつはきつと辛い思いをして見ていたに違いない。

愛している女の子を傷つけて、大切な幼馴染を泣かせ続けて……そんな自分に気付いてしまった俺は、もう彩花と笑っていた頃の俺のままではいられなくて、自分と周りの大事な奴等の為に、顔を上げて進まなければいけなかった。

そうして、高校卒業と同時に、俺は彩花への執着を卒業したんだ。もちろん、彩花の眠る墓まで行って、それまでの自分の身勝手さをひたすら謝ったけど……そんな俺を見て、彩花がしょうがないなあって、笑ってくれた気がするんだ。

そして、千羽谷大学文学部二年となった現在、俺の中に降り続けていた雨は、もう悲しいだけのものじゃない。悲しさも愛しさも優しさも温もりも、全ての雨粒が宝石のようにキラキラと輝いて、俺をそっと濡らし続けてくれている。

だから、もう大丈夫だよ彩花。俺はお前への変わらない想いを抱いたまま、ちゃんと顔を上げて笑って歩いていくから……だからさ……

——また、いつか幼馴染以上、恋人以上、家族以上って関係をしような……——

九月になり、夏はとつくに終わったというのに、どうして女々しく夏は残暑なんて形に変わって残るのだろうか？そんなだから春に捨てられるわけだよ。男だろ？男なら潔く、立つ鳥跡を濁さず去れよ。ていうか、もうほんと勘弁してくれ。俺の灰色の脳細胞が沸騰してしまう。

「そうだね、沸騰しちゃうね、この暑さ。でもね智ちゃん、捨てられたのは夏じゃなくて、智ちゃんだよ。ついさつき、見事にかおるちゃんに捨てられたもんね」
「お前は黙ってこれでも喰らえッ」

近くでへばっているニン猫を唯笑の顔に押し付けてやる。

「うわあ、ニンニン猫びよん、ふつかふかで気持ち……良くないよおッ！ジメジメしてるのに余計に不快に」

「いつものように。ふいふいやってる貴様は」

今は唯笑の相手をしていない場合ではないのだ。

じっと、テーブルの上にある奴を睨みつける。

「正直さ、大学生なんてお気楽なもんだと思ってたんだよ俺は。夏休みと春休みがやけに長いし？普段も適当に遊んでバイトして、講義サボって？超余裕じゃんって。適当に講義に出て、単位取って、それで卒論はコピペで？みたいなの？」

「智ちゃん智ちゃん、その喋り方なんかイラッとするよ。大学どころか人生も舐めてそ

うだもん」

「それが現実はどうだよツ！講義ではレポートの嵐！ノートを提出しないと単位は上げませんって……倫理学概論ってなんじやい！語るなら自分の言葉で語れよツ！リーディング？英語もあやふやなのにドイツ語なんざ喋れるかよ！ビール旨いわ！」

「ああ！ダメだよ智ちゃん！せつかく途中までかおるちゃんが教えてくれたのに、めちやくちやにしちやあ！」

「うっせえーツ！」

真つ白なそれを、あらん限りの握力で握り潰し、猫のおトイレへシュートツ！

「ちつくしよ。せめてかおるがいれば……海外系は詩音も欲しい」

「詩音ちゃんは仕方ないよお」

「……つうかお前、いつから名前を呼び合う仲になってんの？」

「結構前からだよ？なんてことはどうでもいいんだよ！詩音ちゃんは今大変なんだよ？普段は調理師学校に通って、休みの日はお父さんのいる国の紅茶の研究して、休んでる暇なんてないんだから」

そりや、あいつの夢の為だから大変でもなんでもないだろう。むしろ、そこそこの紅茶さえ与えておけば大概のことは許してくれるという、わりとやす……心の優しい奴だ。

詩音は高校を卒業後、調理師学校に進んだ。なんでも、将来は紅茶専門のカフェなんでしょう。つうオサレな店でフイーバーしたいそうなの。

そんなわけで、長期休暇の時は遺跡発掘してる親父さんの下で、紅茶発掘している。なんてブルジョアな休日でせう。

「ええい！俺が呼んだらエジプトからでもその日に戻って来いってんだ！」

「何様なんだろ」

「大体よお、かおるも俺を見捨てるなんて酷いと思わないか？」

つい数分前までいた俺の信より頼れる友人は、非情にも俺をあつさり見捨てやがりました。

音羽かおる、俺様の友人になれたという榮譽を賜る内の一人。

現在は都内の大学に進学し、主に映像関係を学んでいる。将来の夢は、ハンバーグに似た名前の映画監督と肩を並べること。夢は大きく、胸は慎ましやかについて感じの友人だ。

そんなかおるが、こつちに戻ってきていると知った俺は、レポートの手伝いを頼んだわけだ。

こんなタイミングで帰ってくるなんて、俺の為に戻ってきたようなものだろ？神と俺がそう決めた。

それでだな、まあ途中までは和気藹々としてたのだが……

「酷いのは智ちゃんだよ」

「ぬわあにいい？」

俺の絶対的味方である唯笑の反抗に対し、俺は唯笑の頬をぶいぶいしてやる。

「いふあいいいふあいいい〜！」

「俺の何が酷いつて？」

教えられた範囲を終え、それをかおるに見直してもらっている間、朕は非常に暇であった。故に、奴が脚本を書いてみたというので、それをわざわざ読んでやったのだ。そうしたら……

『あく、これアレだろ？実はヒロインは幽霊でしたってオチ』

『え、なんでわかったの智也？まだ最後まで読んでないよね？』

『ん？だつてこれ、使い古されてもはやテンプレ脚本過ぎだろ』

『……へ、へえ、そうかなあ？あ、あたしは、ちよつとだけ自信あつただけだ』

『マジか？だとしたら一から書き直したほうがいいぞコレ。まず、主人公のすつたもんだ君の幼馴染、ボッコちゃんが一週間の失踪。それで、一週間後に家族旅行だつたつって帰ってきて、その辺りから街では誘拐事件が多発と。主人公の周りでも被害が広

まり、主人公は意図せずその事件に関わっていくことに……なんてストーリーはもう腐る位あるだろ。最近では、似たような作品でレインボーなんたらってゲームもあつたしなあ』

『……そうなんだ』

『んなわけで、もうオチまでわかって、ラストは感動も何も無し。泣くのはスイーツなハニーガール共だけで、男にとつちや拷問だなこの作品』

『ご、ごう、も……』

『そうだなあ。いつその事カンフー撮ろうぜ！カンフーならそこまで金は掛からないし、脚本が悪くても痛快なアクションでいくらでも客のテンションを……って、かおるさんかおるさん。もしかして顔引き攣ってます？』

『ひひひひ、引き攣ってなんかないって。そ、それにさあ、別にそれは候補ってだけでえ、撮ろうなんてしてないから』

『だよなあ。かおるさあ、俺を試すつもりでこれを読ませたんだろ？俺が手放して賞賛したりなんてしたら、お前のことだ。指差して俺様の審美眼を馬鹿にしたんだろ？』

『は、はは……あはははは！さすが智也！よくあたしのことわかってるね！』

『当然だろ、俺はお前の親友、だろ？』

『もう、心が繋がり過ぎて携帯いらずねあたし達』

『うはは！この俺と親友になれたことを神に感謝するがいい！……ところで、なんで涙目になってんだ？』

『え〜？泣いてないよ？ほんと……ぜん、ぜん……』

『か、かおる……さん？』

『泣いてないったら、泣いてないもんね！』

『か、かおる……!?!』

まさか、甲殻類の名言を叫びながら走り去るとは思わなかった。

「アレはかおるちゃんじゃなくても泣いて逃げるよ」

「嘘はいかんだろ嘘は。それに、まさか本気で書いた脚本だとは思わなかったんだ」

「……だから、何様なのかな？」

「あれでも柔らかかく伝えたつもりなんだがな」

「最近コミュニケーション障って病気が流行ってるから、智ちゃんも気をつけてね」

「さつきから一々うるさいな。というかな、唯笑よ。お前はなんで家にいるんだ？」

「ほえ？」

「俺と違ってお前は看護学校なんだから、今日は学校だろ？」

そう、こいつは何をとち狂ったか、看護学校に通っている。ま、まあ、唯笑のナース

服姿はその……あれなんだな。ちよつといいなとか思っちゃうんだな。怪我したら絶対男はこいつの勤務する病院に殺到するんだな。そして殺倒（さつとう）されるんだな！ちなみに造語だ。

頭お花畑が出来る仕事じゃないと、俺は心配で仕方ないんだよ。頭の中だけじゃなくて、患者さんをお花畑に取り込むに違いない。

「んん、今日は休みだよ……智ちゃん二人きりになんてしてあげないもん」

「そうなのか……なんだって？」

「なんでもないなんでもない」

「むむ、詩音とかおるがダメとなると他に頼れる奴は……」

信はダメだ。雑学しか使えない赤点野郎だし。小夜美さんは……最近、入社した会社の上司にセクハラされている所為で、ストレスの捌け口としてすぐに俺を利用しようとするから却下。もう、あの人の作った料理で救急車に乗りたくない。白河ととはすぐに漫才を始めるからこれも使えない。そもそも白河の頭は唯笑級だ。頭は悪くないが、俺の理解の範疇外の行動を起こす。

むむむと頭を捻っていると、ちよんちよんと俺の肩をアホが突いてくる。

「ん、んッ」

人差し指で自分を指している。なるほど、つまり……

スツとレポートを唯笑の前に滑らせて俺は立ち上がる。

「あ、あれ？ 智ちゃん智ちゃん、これはどゆこと？」

「どゆことも何も、お前が後は任せろって言ったんじゃないか」

「どんな手話の解釈してるの!？」

「いやあ、持つべきものは可愛い唯笑だなあ」

「か、可愛い？」

「俺が困つてるとき、いつも助けてくれて……もう、唯笑無しじゃ生きていけない俺」

「ゆ、唯笑と結婚する未来しか見えない!？」

誇大解釈しているようだが、今だけだしとりあえず放置。

「それに、最近少し大人びたんじやないか?……コーヒーがブラックで飲める位には」

「そんなあ。美人になったなんてえ」

「そうだ! いつも世話になってばかりじゃあれだしさ、なんか冷たいもの食べたくない

か? 俺買つてくるからさ」

「ええ、そんなのいいよ。それより、智ちゃんが唯笑のことどう思ってるのか聞きたいな」

「ええ」

手の掛かるお花畑頭の妹としか思つてねえよ。

「そりゃあ……その、少し照れるし、なんだつたらその事について長く話したいしさ、

やっぱり少し何か買ってくる。唯笑はレポートを持って俺の部屋で待っていてくれよ」

「とととととと、智ちゃん部屋で二人きり!？」

「ああ、二人で勉強しような」

「……お、大人の?」

ハハハハハハ! 何言ってるのこいつ? 頬赤らめての上目遣いは禁止だぞ。マジになつてんじやね。

「それはどうかな? とにかく、すぐ帰ってくるから、俺が戻ってくるまでレポート進めといてくれ」

なんて適当に言っておけば、お人好しのこいつは確実にレポートをやっていてくれる。頼れる幼馴染だよ。彩花……俺達の唯笑はこんなに頼もしく成長したぜ。

「う、うん……いつてらっしゃい」

「おう」

ぼけろつとしていた唯笑を残して玄関へ。今日は何処で暇つぶしようか考えていた。夏季休暇は今日までだな。

いざ行かんと扉を開こうとしたら、後ろから慌てて俺を呼び止める声が。

……チツ、まさか唯笑のくせに俺の逃走に気付いたわけではあるまいな?

「ど、どうしたんだ?」

「あ、あのね智ちゃん……こんなこと、ね？言いたくないんだけど……そのね？一応確認するね？」

「お、おう」

くつそツ！高校時代から唯笑の頭は成長していないと踏んでいたのは甘かったか？これで誤魔化せなければ他にどうすれば……

なんて考えを巡らせていたが、俺の心配は杞憂だった。確かに唯笑は成長していた……

「えっとね？あの……ひ、避妊具も買って……き、きききき、きて……な、なくんて」
「……はい」

まさかの唯笑の発言に、俺は俺らしからぬ返事をして家を出た。

そっか、唯笑ももう子供じやないんだな……彩花、唯笑のこんな成長を俺は喜ぶべきだろうか？

彩花がいたら確実に殴られているだろうな、なんて想像をしてしまい、苦笑してしまった。

本日の俺の任務が今決まった。コレしかない！

いつも利用させて貰っている個人経営の書店。その新刊コーナーには、思い出に変

わる君の作者の最新作『祝福の雨』が売られていた。

これは買うしかない。

少女漫画を買うときだけこの店を利用する。他の大型店だと知り合いに会う可能性があるからだ。かおるとかかおるとかかおるとかかおるとか。

「そういや、俺がこの店を利用するようになったのって、間接的に彩花の所為だよな」

元々は彩花に面白いからと無理矢理読ませられたのがきっかけで、それ以降は俺自身すつかり嵌ってしまい、この作者の作品は絶対に買い揃えるようになった。

端の方ではたきでばたばたしている、ぼたぼた焼きを焼いてそうなおじいちゃん店主と目が合う。

あの爺さんは俺と彩花に感謝するべきだな。この店が潰れないのは俺の力によるものに違いない。

新刊なのに一冊しかないそれを手に取り会計を済ませる。

財布の中身が少し寂しくなったが仕方ない。明日は親父から生活費が振り込まれる日だし、別に少しくらいの散財は構わないだろう。

さて、家に帰って読みたいところだが、生憎と今は少し大人になった面倒な子供が俺の部屋を占拠している。となると、他に読める場所は……ならずやしか思い浮かばん。

あそこはなく、静流さんがいるから癒されたい時はいいんだが、店員が変な国の言葉

を話す女の子と、イケメン学生一匹の所為で落ち着いては読めないだろう。男のくせに少女漫画読んできるとか馬鹿にされたら、あのイケメンに静流さんと二人でダブルブレンバスターしてしまう。……イケメンくたばれとか思ってたなんかないぞ？

仕方ない。あまり人が来ない公園でゆったり読むとするか。

家の近くはまずいから、少しそこら辺でもぶらつこう。

そうして、なるべく知り合いに会わなそうな公園を探す旅へと出ることにした。

その日、私は一蹴がならずやでのアルバイトの日だから、夕食を作って帰りを待つていようと、買い物袋を両手に提げて公園の中を歩いていた。

まだ残暑が厳しくて、夕方になってもジメジメとして、汗が頬を伝って地面に落ちる。もうちよつと体力をつけたほうがいいかな？朝にジョギングとか……一蹴と一緒に。

二人で朝にジョギングする姿を想像すると、自然と頬が緩んでしまう。これじゃあ、校内でバカツプルと言われても仕方ないよね。

疲れて帰ってきた一蹴が喜んでくれるような料理を腕によりをかけて作ろう。

よしつ、と自分に気合を入れて、暑さで少し俯いてしまう顔を上げると、少し先に私を真つ直ぐに見ている男の人がいた。

……な、に？私を見るの？

試しに後ろを振り向いてみるけれど、後ろには誰もいない。

「……………ッ!？」

彼の視線に息を呑む。暑くて流れていたさつきまでの汗とは違う、冷たい汗がとつと流れる。

どう、して？

心臓の音が耳の奥で鳴り響いて、呼吸が乱れそうになる。

別に、そこまで取り乱すようなことじゃないのに、それでも今すぐに逃げ出したくて堪らない。

だって、彼の眼が雄弁に語っている。少なくとも私に友好的ではないということ。

敵意剥き出しの視線で睨まれて、足が竦んで動けない。

「……………いい、いつ、しゆう」

恐怖のあまり、最愛の人の名前を知らずに呟いていた。

「……………よお、随分と久しぶりだな」

ゆつくりと大柄なその人は私に近づいて来て、そして……

「なあ？——ちゃん」

もう、聞くことのないはずの名前を、彼は口にした。

「あ、あなた……………は……………」

この日、この瞬間、私の中で贖罪の雨が窓を叩くように心を叩き出した。

「ふう、やつぱり良い話を書くよなあ」

アイドルの彼と牛井屋の娘の恋、そして恋のライバルの豚井屋の娘。そうだよな、牛よりも豚にぐらつて来る気持ちわかる。わかるけどさ、そこはすきやきでも大活躍の牛を選ぶべきだよ。しょうが焼きとか、ポークカレーは最強だし、とんこつの素晴らしいコクもわかるけどなあ。次巻予告にラム屋の娘も出てくるらしいけど……その前に鶏から屋の娘も出そうぜ。

「眼が離せない素晴らしい作品だ……」

独特の世界観の余韻に浸りつつ、ぼくっとしていると……

「テメエ、アイツのこと忘れて随分幸せそうじゃねえか」

どつかで聞いたことのある声が聞こえた。つうか僕等のゆるキャラのトビーじゃん。

「わ、忘れてなんて……」

「忘れてないとも言うつもりか？ まんまとアイツの居場所を奪って笑っているお前が？」

「——ッ!？」

「俺は許せねえ……許せねえんだよ。あの野郎の相手がお前じゃなけりやまだ許せた。

だが、テメエと付き合ってますだ？ どういうことだ……なあ、おい？」

「そ、それは……一蹴は………ちゃんのことを覚えて……」

なんかトビーが美少女に言い寄っている。どうしよう………動画でも撮って信に送ろう。

即座に撮影を開始しながらコーヒーを一口。加賀にも送っておくか。

「あ？ 今なんつった？」

「だ、だから……一蹴は覚えて……」

「……ざけてんのか？」

「キヤツ!？」

おっつと！ 飛田選手！ 相手の左手を掴んだあ！ そこからどう相手を押さえ込むのか……見物ですね。てか、あんなキレそうなトビーも珍しいな。なんだかんだ言いつつ、ただのツンデレだったりするのに、今回はマジっぼいな。

「それでも、信には送るけどな」

俺と信の間に隠し事は無しだし。面白いこととか面白いこととか限定で。

「じゃあ何か？ 覚えていないあのクズに、これ幸いとテメエは近づき、見事に恋人になりましたってことかよ……あ、そいつはおもしろえ。面白すぎんぞ、ああッ!？」

「ひっ!？」

「上等だ……上等だよテメエ等」

トビー、トビー。お前がマジでキレちゃうから、彼女上手く泣けなくて呼吸も危ういんですけど。ヤンキーだけど良い子に育てたつもりなのに。信が。

「はっ、良い事思いついたぜ？……おい、アイツは今何処だ？」

「あ、アイツって？」

「テメエの愛しい彼だよ、馬鹿なのかテメエ？」

「あ、会って、どう、するんですか？」

「あ？そんなもん決まってるんだろ？」

何やら一際残忍な笑みでトビーが彼女に言い放つ。

「お前等二人まとめて潰してやる」

「そ、んな……」

ああ、ダメだこりや。こりや、トビーの完全勝利。十ラウンド保たなかったか、残念。やれやれと立ち上がった時……

「……せない」

「……あん？」

「そんなことさせないッ!!」

先程までの怯えきった彼女とは違う、確固たる意思を持った声が公園に響き渡った。

涙で濡れているであろう眼は、真つ直ぐにトビーへと刺すように向けられている。

「わ、私はもう一蹴から離れません！離れたくない！」

彼は一蹴つて名前なのか。蹴散らされそうな名前だな。

「だから、あなたを一蹴には会わせません……絶対につ」

強い声、強い言葉。その声と言葉にトビーは……

「はくん……なるほどなるほど……そこまで……」

ギリギリまで抑えていた理性を手放し、完全に怒りを爆発させた。

「舐めたことを言うなんてなッ!!」

振り上げる腕、襲いくるであろう衝撃に身を硬くして目を瞑る彼女……

「……テメエ、関係ねえ奴が何してんだ？」

そして、その腕を押しさえつつ間に入るイケメンな俺。

「おいおい、ここは俺に感謝する場面だろ？婦女暴行で捕まる寸前で止めてやったんだからな」

「は？…え？」

背中から間抜けな声。どうやら状況が掴めていないらしい。

「チツ、余計なことしてんじゃねえよ」

「そうじゃないよな？ありがとうございませす三上様だろ？」

「ぶっ飛ばすぞ」

「おう、怖い怖い」

俺の腕を振り払い、トビーが決まり悪く顔を背ける。

「ん、何があつたか知らんが、少し頭冷やせよ。なんだつたら信を殴つて憂さを晴らして来い」

「親友を売るお前に頭を冷やせとか言われたくねえな」

「あいつは限りなく親しい顔見知りだ」

「あ、あの……」

いきなり割つて入つた俺がなんなのか気になるらしいが、今は彼女のごことは置いておこう。

「ま、詳しいことは聞かないが、もうちよつと紳士にスマートにを心掛ける。良い子にしてたら、来月にはかきこおろぎを奢つてやるから」

「やっぱ殴つていいか？」

「おまわりさくん！犯人ここです！」

「……クソツ！テメエと話してると頭いてえ。今日は帰る」

「俺と手を繋いで？」

「マジで口を利けなくするぞ」

「わりいわりい。じゃあ、またなトビー」

溜息をつけて背中を向けて去るトビーは、一度も彼女に視線を向けることは無かった。

俺の前でキレてるところ見られるのはさすがに嫌だったんだろうな。信と俺と加賀とマグローとでたまに遊ぶし。伊波もたまに混ざるけど。仲間を大事にするって優しいところがあるんだけどなあ。

「あ、あのー」

「お、おう、悪い忘れてた」

俺の優先度的にトビーのが優先度上だったから忘れてた。

後ろを向くと、彼女は深々と頭を下げていた。……つむじ押したい。

「その、助けていただいてありがとうございました」

「いや、別にいいよ。てか、頭上げてくれ。その態勢だどつむじを押ししたい衝動に駆られてしまう」

「……は、はあ」

相手が唯笑だったら泣くまで押ししてやるのに……なんて無駄なことを考えつつ、彼女と初めてまともに目を合わせた。

逢って、しまった――

「ツ!?……あ、え?」

夕暮れの公園っていうのも悪かったのかもかもしれない。それでも、涙を目に溜めた彼女の顔はあいつに……彩花にとても良く似ていた。

「あの、どうかしましたか?」

どうかしたか、だって?それは俺が聞きたい。

「あ……その……」

指通りの良さそうな綺麗な長い髪、柑橘系の懐かしい匂い、大きく澄んだ瞳、スツと筋の通った鼻。整った綺麗な唇。どこもかしこも似ている。あいつの妹だって言われなくても不思議に思わないレベルだ。

似てないのは……まあ、胸だけか。彼女のが大きいな。

にしてもだ、動揺しすぎだろ。さすがに詩音と話したときのような失態はもうしないけどな。彩花は彩花で、この子は他人。

ただ、夕暮れの公園と、彼女の涙があの日、想いを確かめ合った時の事を思い出させて仕方ない。

と、とにかく何かアクションをスタートしないと!ルーなんとかさんちやうで。

「と、とりあえずだな……」

ポケットからティッシュを取り出して……

「これで鼻水拭きなよ」

見事に初手を誤った。

「あく……なんか、悪い」

「い、いえ……ふ、ふふ……気にふ、してませ……」

「無理に我慢しないで笑っていいからさ。逆になんかきついんだけど」

とりあえず、俺が本を読んでいたベンチに二人で座り、缶コーヒーを奢ったのだが、さつきから笑いを堪えるので辛そうだ。

そりゃあ、俺はそこまで女慣れしてるわけじゃないし、でも笑うことは無いんじゃないか？だって、鼻水出たし？むしろ鼻水たらしてた君のがギャグだし。

「す、すみません。なんだか、さつきまで怖くて怖くて仕方なかったのに、いきなりあの雰囲気壊れちゃうなんて……」

壊れちゃうっていうか、壊しちゃうの間違いじゃないか？目は口ほどに語るとはよく言ったものだ……だって、目が垂れ下がってるし。爆笑必死だろ。

「ま、まあさ、トビーとは知らない仲じゃないしね」

「トビー？」

「飛田扉。扉だから、トビー。俺のしんゆ……限りなく親しい顔見知りがつけたあだ名」

「そうなんですか」

え？こつちでは笑わないのかよ!?

ちくしょう、なんかあいつのフォローしてやろうと思っただけど止めようかな。実は口りとか言いふらしてやろうか？信発信つてことで。

そんなことしたら本気で絞められそうだから言わんが。

「それでさ、何があつたかは知らないけど、トビーってわけも無くあんなこと言ったり、手を上げたりする奴じゃないんだよ。普段はクールぶってるけれど、本当は優しいし。俺が金に困ってたら、文句言いながら貸してくれるし。俺の友達が金に困ってても貸してくれるし。あと！自販でコーヒー買おうとして、小銭無いときとかもさりげなく出してくれるし！」

「全部お金絡みなんですね」

あれ？なんか金に汚い奴に思われてる？てか、俺も金にだらしない奴に思われてない？

「いやいやいやいや！それだけじゃなくてだな！あととは……あと、は……そ、そうだ！あいつといると、ヤンキーとかに絡まれず、しかも問題が起きても解決してくれるぞ！」

「……ヤンキーって、暴力振るうんですね。怖いですね」

ふむふむ……これはあれだな。フォロー不可能。トビーのインプリンティング失敗

「が悪いんだよ。俺の所為じゃない。」

「よし!あいつの話は止めよう!」

「いたいけな彼女を怯えさす存在はダストシートで眠つとけ。」

「そういえば君って、浜咲学園なんだな」

「はい、そうですけど」

「じゃあさ、伊波健って知らない?あのスカしたイケメンで、白河の彼氏の」

「白河関連なら浜咲で知らん奴はいないだろうと振った話題だが……」

「ほ、ほたる先輩を知ってるんですか!?!」

「めっちゃ食いついてきたッ!」

「知ってるも何も、たまに遊ぶが……」

「たまに遊ぶ……奇抜な言動と行動……信?」

「なにやらぶつぶつ呟いて考え込んだ。」

「コーヒーを飲みながら少し待つとするか。」

「どうかした?」

「あ、間違ってたらすみません。もしかして、稲穂さんの親友の三上智也さん……で
しょうか?」

「ブウウウウッ!!」

「きやあッ!？」

コーヒーを噴射し、咳き込んでしまう。

あの野郎顔が広いな!じゃない、俺の何を話してんだよ!？」

「ま、まさか信のこと知ってるのか?」

「えっと……私の彼が住んでいるアパートに稲穂さんも住んでいました」

世間が狭いわけじゃない。信がいるから狭く感じるんだ。あいつの無駄に広い顔を整形してやりたい。

「それで、よく稲穂さんとお話するんですけど、何度も三上さんのことが話題に出るんです」

「あく、そうなの?ち、ちなみに何を信は話してるのかな?」

「えくと……そのく……あは、あはははは」

明日あいつを絞めよう。具体的には、あいつの後ろ髪を縛ってるゴムの隙間に線香花火を差し込んで火を点けてやる。

「あ!でもですね、実は私ピアノを習ってまして、ほたる先輩にたまに教わりながらお話をしたりするんです。そこで三上さんの話をほたるさんがしたりするんですよ」

「ほお、あのほわほわ女はなんと?」

「えっと、伊波さんにトラウマを植え付ける凶悪犯で、いつも周りを振り回す奇行ばかり

をする変な人って……って、三上さん？どこに電話してるんですか？」

「ちよつとな………よお、久しぶりだな頭ほわほわ女郎。今何処だ？ウイーン？おいおい、誰も自動ドアの真似なんて求めてねえよ」

「ほたる先輩に電話してるんですか!?それにウイーンは地名です!」

「今な、お前の後輩の……名前は知らん。お前のピアノと学校の後輩に会ったんだが、お前俺のことなんて言ってた?」

「す、すみません。自己紹介がまだでした。私は」

「何が正直に事実を伝えたただあ!遠くに離れてるからっていい気になるなよ!こつちには伊波っていう人質がいるんだからな!」

「みささ………はい?人質って、三上さん!」

「ふははははは!貴様は海外にいることを悔やむがいい!俺が直々に伊波にお前の罪を償ってもらうからなあ!ふは、ぶひゃひゃひゃひゃ!」

「ちよ、あの!電話変わってください!」

何やら横から手を出してくるので、携帯を持つ手を上に伸ばして回避する。こつちの彼女もあつちの彼女もピーチクパーチク。先輩後輩共々うるさい小娘共め。

電話の向こうから智ちゃん智ちゃん!とうるさい声をシャットアウト。海の向こうで心乱すがいいわ!

「あ、ああ……ごめんなさい、ほたる先輩」

「口は災いの元つて勉強したか？」

「そう、ですね。助けてくれたからつて良い人とは限らないつて学びました」

「なんだとう！ようし、そんなことを言う悪い小娘にはお仕置が必要だな。特別にトビーを召喚してやろう」

「すみませんすみません！もう言いませんから！」

トビーの名前を出しただけで泣きそうになられた。トラウマになつてんじゃねえか。

「ふう、冗談だ。別に伊波に何かしようだなんて思つてない」

信には報復はするがな。

「良かった……」

心底安心したように胸を撫で下ろす。

どうやらもう大丈夫だな。トビーめ、俺にアフターケアさせやがつて。

「よつと」

立ち上がり、飲み終わったコーヒーをゴミ箱に投げると、奇跡的に綺麗に入った。はずしたら恥ずかしかつたぜ。

「なにわともあれ、君にどんな事情があるのかもわからんし興味もないんだけどさ、ごちやごちや悩む必要は無いんじゃないか？」

「……………そう、ですか？」

「そうさ」

手の中で缶を揺らしながら、小さな声で悩みを滲ませながら応える。

「ま、何も知らん俺が言っても仕方ないかもしれなけどさ、君がそうやって悩んでる姿ってか？辛そうな姿を見て君の大事な彼はどう思うかね」

「……………」

「そりゃあさ、一緒に悩んで解決するならそれが一番だけど」

脳裏に過去の自分が蘇る。

傷を抱え、それを隠して笑い続ける自分。そんな俺をずっと見てきた奴等がどれだけ傷ついたか…………

「もし、今すぐに解決する問題じゃなくて、しかも二人だけじゃ重いならさ、あいつ……………
信にも背負ってもらえば良い」

「そんな……………稲穂さんにまで甘えられませんか。だって、全部私が悪いんですから」

彼女の抱える気持ちを軽くしたくて言ってみたが、余計に追い込んでしまったか？

なんつうか……………少し前の俺に似てるんだよな。一人じゃどうしようもないくせに、無理して笑って……………馬鹿だよな、ほんと。

「だ〜か〜ら〜！」

俯く彼女の頭をわしわしと乱暴に撫でる。

「わわわッ!?や、止めてください!」

「うっさいわ!その顔を止めろつてんだ!どうにもなんない問題なら開き直れ!どうしようもないんだから仕方ないつてな!それでどうにもなんないんだつたら、少しでも良くなるように前向いて笑うんだよ!」

「そんな、何も解決しないじゃないですか」

「そうか?少なくとも、今みたいに鼻水垂れ流して泣くよりは何億倍もマシだろ」

「鼻水なんて流してません!」

「流してるかどうかの問題じゃない!」

「……最初に言ったのは三上さんじゃ」

「小さいことに拘る女は良い女にはなれないぞ」

「大雑把過ぎるあなたよりはマシかと」

「とにかく!自分を追い込んで、良くなることなんざ何も無いんだよ!人生の先輩の言うことには黙って頷いとけ!これ社会の常識!」

「暴論ですけどね」

グチグチと細かいなこいつ。彩花のがもつと……おかんみたいに細かかったな。うん。

「んだよ……人がせつかく……」

「せつかく、なんですか?」

「なんでもない。もう勝手に追い込まれて泣き叫べば良いだろ! お前の母ちゃんですー!」

「……稲穂さんから聞いてた通りの子供です」

「毎日微妙な不幸ネタはがき送ってやる! そんなでもっと悩め!」

「励ましてくれてたんじゃなかったんですか!?!」

「だって、文句ばかりで腹立つし。信と二人で君と君の彼氏で遊んでやるからな」

「一蹴がストレスで倒れちゃうので止めてください」

「はん、知ったことか。だが、止めて欲しいならな……」

困り顔の彼女に手を伸ばすと、髪をぐしゃぐしゃにされると思ったらしく、頭を両手で抑えて目を瞑った。

……つとに、こういう頑固な馬鹿は生き辛いだろうに。見た目は彩花で、馬鹿などは俺っぽいつて? 俺とあいつの子供かよ。

劣るように優しくゆっくりと、その柔らかい髪を撫でてやる。

「……へ?」

「自分の問題から目を逸らさないで、それでも笑うんだよ。雨はさ、冷たいだけじゃない

んだって……そうすれば、時間が経てば気付くはずだから。そういうふうに出てくるもんだ。そんでな？今度俺が君と会ったらこう聞くよ……」

それは、俺を救ってくれた馬鹿の言葉で、一人泣く奴みんなに言つてやらなきゃいけない言葉。

あいつがくれた言葉を、俺は目の前のこの子にも言つてやろう。いつか出会う道の先で……

「雨は上がったか？つて。その時はさ、笑顔で君なりの答えを聞かせてくれるか？」

「それって……どういうことですか？」

「さてね、それは後に分かるさ。じゃ、その時までには答えを用意しておけよ小娘」

最後に乱暴にわしやわしやしてやつて手を離す。なにやら悲鳴を上げたようだが、聞こえにくい。

「うう……小娘じゃないです。私は」

何かを言おうとした小娘だったが、俺の携帯の着信がそれを遮った。

なにやら唯笑からお怒りメールが届いた。騙されたと気づくまでそこそこに時間が掛かったな。

「ん？なんか言つたか？」

「……なんでもありません」

大人しそうな子だと思ったが、頬を膨らませて苛ついている。情緒不安定な小娘め。と、いつまでも小娘で暇潰ししているわけにはいかないな。唯笑にはダツツでも買ってご機嫌を取っておこう。ダツツがあれば戦争も終わる。俺の財布も終わる。

「そんじゃあ、またな。精々青春しろよ小娘」

ひらひらと手を振って歩き出す。後ろから、小娘じゃありませんって抗議があつたが、どうせしばらく会うことはないんだ。名前を覚えても仕方ない。

この先、問題と向き合って自分なりの回答を出した小娘が、少しでも笑ってれば良いなど、柄にもなく願いつつ、公園を後にした。

「小娘じゃありませんッ！」

立ち去る背中に抗議をしたけれど、能天気にならなくて笑うだけで私の話をちゃんと聞いてくれないままいなくなってしまった。

「……もう、変な人だったなあ」

飛田さんから助けてくれたと思つたらむちゃくちゃなことばかりして、私の話は全然聞いてくれないし、髪の毛はぐちゃぐちゃにするし……

「だけど……なんだろう？」

少ししか話してないのに、思い出すとなんだか笑つちやいそうになつちやう。

本当におかしな人だったなあ。めちやくちやなのに、憎めなくて、どこかあったかくて……

「お兄ちゃんがいたら、こんな感じなのかな？」

うーん、もうちよつと賢くてカツコいいお兄ちゃんがいいかな。三上さんはやんちゃ過ぎて私がお姉さんみたいになつたりして。

「でも……」

三上さんに髪を撫でられた時、なんでか泣きそうになつちやつた。

何もかも包んでくれる毛布のようにあつたかかった。とても優しく……嫌じゃなかつた。

私の髪に触っていいのは一蹴だけ……そう、思つてたのに。

三上さんのおかげで、不安だった気持ちがあわりと軽くなつた。それは間違いなくて

……

「今度会うときは、笑つて会いたいな」

それが今日の恩返しになる気がするから。

ふと、ベンチに置いてある小さな袋が目にとまった。

「……あれ、これって？」

この神奈川には夢か絶望しかない。しみじみ感じつつ、ならずやでアールグレイを嗜む。所謂アフタヌーンティー。ついでに俺は夢側じゃなく、間違いなく絶望族だ。

きっと今の俺は誰よりもセンチメンタルに違いない。

「どうしたの智也君、なんだか元気がないようだけれど」

ならずや店長代理であり、天才ピアニスト白河ほたるの姉であり、更には全国の疲れた男性を癒してくれる菩薩様。静流さんが優しく声を掛けてくれる。

「……いえ、なんだか神奈川の風が少し冷たいなど……そう、感じてしまったので」

「……そ、そうなの？」

「だからかな？ 静流さんの淹れてくれた紅茶がやけにあつたかくて……いけね、涙が……」

「ほんとにどうしちやったの？ 相談ならいつでも乗るわよ？」

後光が！ 静流さんの頭上から後光が射していらっしやる！ 菩薩って言うか女神？ むしろアフロディーテ？

なんて、静流さんの果て無き慈愛に癒されているところに無粋な横槍が入ってきた。俺のすぐ右隣と、左隣の両方から。

「静流さん、あまりこいつを甘やかさなくていいんだって。心底自業自得なんだから」

「そうですよ。だって智也君はただ単に、因果応報でお金がすつからかんってだけなん

ですから」

右のなんちやってポニテと、左のムカつく程に爽やか優等生君がいらんコンビネーションを發揮しやがる。

「うっせえ、黙れ、くたばれ。お前等に俺の深く傷ついた心わかってたまるか！我が深淵を覗いてみるかゴラアツ！」

「大分底が浅い深淵だね」

「だよなあ」

情け容赦ない奴等だな。幾度となく助けてやった恩も忘れて、仇だけを返してきやがる。

「んくと、なにがあつたのかしら？」

「それがさ、つい二日前だっけ？唯笑ちゃんにレポートをキラーパスして、自分で自分はサボって出歩いたんだけど、途中ちよつとした修羅場に巻き込まれて、まったくサボった気がしないまま唯笑ちゃんを怒らせてしまったんだよな？」

「そうそう。そして、今坂さんならダツツ一個で機嫌が直ると安く見た結果、アメリカのお得パツクのアイスを五個買わされて無一文になつたんだよね」

ま、まあ信が俺が少女漫画を買って、それを無残にも置き忘れてきたってことを隠したことは褒めてやる。褒めてやるが、伊波め……

「はあく、智也君らしいと言えばらしいわね。唯笑ちゃんに甘えているところなんか特に」

ぐむう、静流さんに呆れた目で見られてしまった。

そりゃあ、俺が悪かったところも確かにある。それは認めよう。だが、唯笑の仕打ちもあんまりじゃないだろうか？俺の財布事情を知っていて、ギリギリ出せる金額の物を買うなんて。誰がそんな賢い子に育てたんだ？……彩花だな。そうだ、そういうことにしよう。

そ、それだけならまだいい。しかし悲劇は次の日にも起きたんだ。

そう！なんと、次の日に入るはずの生活費が一切振り込まれていなかった！読まなくて良い空気でも読んだの親父様？美味しくもなんともしねえよ。腹がちよつとも膨れねえもん！

連絡しても電話が通じないし、親父からの連絡を待つしかない状況だ。

というわけで、唯笑の会心の一撃により無一文となった俺は、昨夜の晩飯は恥を偲んで唯笑に土下座し、今坂家の食卓に加わらせて貰う事に……お婆さんの飯、マジで天にも昇る美味しさでございました。どっかのビューリホー女子大生に是非爪の垢を飲ませて頂きたい。ノット世界をどつきり料理！

さすがに唯笑に土下座したなんて、静流さんにはかつこ悪くて言えねえよな。

「……てわけできあく。これ証拠画像」

「あははははははッ！」

「お前は本気で俺のプライド粉々にするのが大好きな！つうかこの画像唯笑の野郎撮ったのかよッ！」

静流さんと、その妹の彼氏揃って大爆笑。静流さん、俺はあなただけは信じてたのに

……

「も、元はといえばお前の後輩の所為だろうがッ！」

「ふひひ、さーせんww」

「何キャラだよお前！俺を馬鹿にする時だけキャラ崩壊してんじやねえ！」

お互い大学生になった途端に俺を苛つかせる才能を開花させ、今ではサッカー以上の才能にまでなってしまった。

「ああ、後輩っていのりちゃんだろ？」

「ん、お前の知り合いの彼女らしいな」

「いのりちゃん？彼女がどうかしたの？」

いのりという名前が気になったらしい。そういや白河のピアノの後輩でもあるなら静流さんが知らないわけないか。

でもなあ、さすがにトビーの婦女暴行未遂を話すわけにもいかないし……ここは人心

掌握術に長けた彼にお願いしよう。

瞬き五回『頼んだぞ』の合図。それにすぐさま彼は対応してくれた。その対応力に惚れてしまいそうだ。

「実は、レポートをサボった智也君が公園に立ち寄ったんですけど、そこであることに陵さんが巻き込まれちゃってたんです」

さすがだな伊波。そのシリアスな声と顔で何人の女性を泣かせてきたことか……とここで信よ、真剣に誤魔化そうとしているのに、隣で俺が送った動画観て笑い堪えるの止めろ。

「巻き込まれたって……何か危ないことなの？」

「そう、ですね。危ないといえれば危ないし、危なくないといえれば危なくはないことですん、ん？アドリブに定評のある伊波家の健君？ちよ〜つと怪しい雲行きじゃないかい？」

「健君、それってどういうこと？詳しく聞かせて。いのりちゃんほたるの大事な後輩なの。だから、私も心配なのよ。だからもつとわかりやすく教えてくれないかしら」

「それは……ここ、これ以上僕の口からはなんとも……ただ、危ないようで危なくないとか」

「健君！私は真剣に聞いているの！はぐらかさないで！」

「え〜……その〜……」

静流さんの剣幕にだらだらと脂汗が流れ始める。だから信、笑うならトイレに行つて笑え。

お化け屋敷に放り込まれた子供のように、健が俺を潤んだ瞳で見つめてくる。やっべ、心底放置してえ。

「健君！」

「智也君！」

「お前はもうリア充止めちまえ！」

この程度で挫けやがって！浜咲至上最強のプレイボーイの影が微塵もねえな！

「智也君……何があつたのか話して」

ほら来たよ。アフロディーテの純心に目を背けられるわけねえじゃねえか。

ここは腹を括るしかないか。

「あく、静流さん。本気で言いにくいんですけどいいですか？」

「ええ」

怖い怖いッ！その真っ直ぐな瞳は止めて！罪悪感でぎゅんぎゅんしてしまう。

「実はですね、公園で彼女……カササギ」

「陵」

「そうそう。陵がですね、砂場に座り込んで泣いていたんです」

「す、砂場で？ どうしていのりちゃんは泣いていたの？」

「……あの、この話は絶対に白河には言わないで下さいね。ブササギの名誉のためにも」
「陵ね」

「そう、その陵のために。俺も不思議に思いましたよ。大人になろうかという彼女が砂場で泣いているんですよ？ これはただ事じゃないと俺は彼女に駆け寄りました」

「それで？」

「そしたらですね、なんかちよつと嗅ぎ慣れた臭いがしたんですよ、砂場から。その匂いは彼女が座っている場所から漂ってきて……よく見ると……ッ！ その……その場所だけ濡れていたんですッ！」

「まさか……そんな、いのりちゃん、が？」

信じられないという表情で、でもそれがどれほどの屈辱か想像して、静流さんは口元を抑えて肩を震わせた。

おいおい伊波。お前は別な意味で俺のことを信じられねえって目で見るなよ。お前の尻拭いしてんだぞ俺は。クササギの沽券を代償になッ！

「……まで言えばわかるでしょう？ あの年でそんなことがあったなんて……もしも俺だつたら言えません。言えるわけじゃないですかッ！」

「そう、ね……ごめんなさい。そんな事情があつたなんて……智也君達は必死に彼女の心を守っていたのに……無理に聞き出すなんて、最低ね私」

静流さん……お願いですから、そのままショックを受けていて下さい。決して、コーヒー片手に持ちつつ、ナプキンで鶴を折っている奴と、トビーの衝撃映像をリピート再生して腹抱えている奴には目を向けないで！

「……彼女、泣いてました。俺がコンビニで下着を買って渡しても、ずっと泣いてたんです。それなのに、俺……俺、はあッ！」

「ごめんなさい。ごめんね智也君。本当にごめんなさい」

顔を伏せて表情を見せない俺の頭を、静流さんはぎゅつと包んでくれた。

俺の頬に一つ、また一つと落ちてくる雨。それが誰が降らせているかなんて、見なくてもわかる。

……こんな俺の大根芝居に騙される純粋な彼女からだど。

「おい智也！そこ俺とかわぐふほおッ！」

余計なことを口走ろうとする奴を全身全霊の拳を腹に喰らわせ黙らせる。

「ちよっ、智也君！本来はそこは僕ツとんへー」

もう一匹も駆除完了。

逃げ出した敗残兵が一端の口を利くんじゃねえ。

勝者の特権を数分堪能した俺は、きつと誰より幸せな顔をしていただろう。母性サイコー。

そうして、うささぎの問題を上手くうやむやにし、本日の本題に議題は突入。

つまり、俺の今後の生活費！

「とりあえずバイトしろよ」

「そうね。……今日のここの御代はどうするのかも気になるわ」

「財布ならここに」

「それ僕の財布！いつの間に抜いたの!？」

お前がおねんねしてる間にだよ。

「というわけで、あと二、三日は平気です」

「ここの支払いだけじゃないんだ!?!普通に窃盗だからね!」

尻の穴の小さい男だな。あ、財布の中に四千円しかないじゃん。

「そうねえ、とりあえず今日は健君に奢ってもらおうとして」

「し、静流さん?なんか智也君に甘くありません?具体的には高校卒業辺りから」

「……じゃあさ、いつそのことここでバイトしたら良いんじゃないか?」

ならずやでバイトだと?あの電波娘と青臭いイケメンと……超絶美しい静流様と?

いいな、それ。

静流さんと二人で皿を洗って、二人でコーヒーと紅茶を淹れて、仕事が終わったら二人で窓際の席でまったりと……いらんビューリホー女子大生というコブ付きだが、それさえ目を瞑れば天国じゃないか。

「そ、そうか？なら俺」「それは駄目よ」

俺の妄想瞬殺。クイズ王より速いですね。

「どどど、どうして？」

「だって、小夜美に智也君を取ったって文句を言われるもの」

「庶民の戯言です。スルーして結構です」

「だって、小夜美ってば、拗ねると長引くんだもの。そうだ！それなら小夜美のところで雇ってもらうのがいいんじゃないかしら？」

「その提案は棄却されました」

小夜美さんは、大学を卒業後、小さな出版社で営業の仕事をしている。ただ、営業とは名ばかりで、実際は添削、編集、校正、その他全般やらされているらしい。

そんな激務の会社で俺に彼女の奴隷として働けと？社畜より悲惨な未来しか見えな

い。
「となると、あとはファミ」

「そこも棄却な。お前等の息の掛かった下僕共と働く気は皆無だ」

毅然と言い放つと、二人は無言。一人は苦笑を浮かべて、なんとも言えない空気が店内に蔓延した。

俺は悪くありません。俺の労働意欲を掻き立てない職場が悪いんです。

「もういいよ。バイトしなくても俺には頼りになる親友がいるし。金なんかじゃ切れない、タフな縁のさ」

ちよつと良い顔で両隣に視線を送る。そこで、微笑み（怒りマックス）の爆弾を返された。

「いやさ、真剣に友達として言うけど、智也君さ……世間舐めすぎじゃね？」

「最後に黒さが隠しきれてないなおい」

「健の言う通りだぜ智也。お前さ、今まで何を学んできたんだよ」

主にお前と二人で悪巧みしか学んでませんか？

「智也君……あなた、少しは将来を見据えないとこれからが大変よ？」

お、おう……ガチに心配されると、かなり刺さるんですけど。何一つ汚点のない人生を送ってきたと自負しているのに。

ジーツと三人の視線がずしやずしや刺さってきて、俺は思わず視線を逸らしてしま

う。
あ、あれ？ギャグのつもりが、経点を超えたらしいぞ。大分アウトな人間として俺の

名前が歴史に刻まれてしまう勢いだ。

ど、どうしよう？

頭をフル回転させて、どうにか言い訳を考えていると、俺を救うかのように携帯が震えた。

「お〜つと〜こいつはいけねえ、着信がきちまった。ちよいと失礼するよ」

落語家のように言い放ち、店の外に出る。

誰かは分からないが、今この瞬間最大の感謝を着信の主に捧げたい。魂を込めて感謝するぜ！

「もしもし」

『おう、残念ながら息災のようだな愚息』

神様神様、この世界の天敵に最大級の罰を与えて下さい。大至急！

「ふはっ、ふはははははは！これはこれは、テメエ様の息子を餓死させようと、生活費を与えなかったお方じやありませんか。なんの用だ貴様」

『ちよつと食えないくらいで文句を言うなよ。水で食い凌げるだろうが』

「それ食つてないじゃねえか！飲んでるって言うんです〜！やくい、やくい、バ〜カ！」

『お前、年末年始どうなるかわかってんだらうな？』

「貴様の顔が福笑いになるとか？」

『……やはりお前に頼み事をしようと思った俺が愚かだったらしい。初期装備の木の鎧でBOTAに挑むレベルだった』

「あん？頼み事だ？んなことよりせいか」

『週四日で日給6000円の簡単なバイトの依頼だったんだが、もういい』

「いやいや、だからせいか……なんだって？」

『お前がここまで使えないとなると後は……』

「お父上、お父上。誕生日にバラを年の数贈るんで待つて下さい」

『俺をシヨック死させる気かお前は』

「いえいえ、今までの僕は間違っておりました。ちょっと前の僕死ぬ。これからの僕ここにちわ」

『ははははは！言動が狂ってるのは変わってねえのな』

「そんなことよりもですね、その……今、なんとおっしゃったのでしょうか？」

『いいよもう。お前以外に頼むから』

「僕がやらなきや誰もやらないです！ハロー天職！カモン親父！」

『俄然頼む気が失せたわ』

「そんなこと言わずにい。お、と、う、さ、ま♪」

『きもいきもいきもい惨い！ちよ、話すから普段の慇懃無礼なお前に戻れ！ろくでなし』

の俺の息子だろお前は!』

「あ、そう。んじや、ろくでなし。俺になんだつて?」

『……マジで人生潰すぞ?』

「オーケー。ちよつとマジになるわ。このモードは数分しか保てないから時間には気をつけろ」

『お前が言葉遣いを気をつけろ』

「それで、もう一度詳しく説明してくれ」

『あく、あのな?俺の古い知り合いから頼まれたんだがな……』

大半を無駄な会話に費やした俺は、まさかのろくでなしから救いの手が伸ばされたのだった。

今度帰ってきたら親孝行してやるからな。コーヒーに擬態した何かを淹れてやるから、感謝しろよ親父。

なんてお気楽で賢い俺様だったが、一つ欠点があつたことは否めない。

俺の欠点、それは……

「ハイ、かな?」

手に持った地図を頼りに辿り着いたのは、閑静な住宅街に建つ一軒のお家。二階建て

の綺麗なお家で、庭も十分な広さで、バーベキューなんかも出来るかもしれない。

難点は隣のお家とくつつきそうな位に近いことだけど、隣のお家からは人が生活している気配が感じられない。空き家なのかな？

お父さんとお母さんが仕事でしばらく海外に行くことになって、自分達がいなくてもちゃんと勉強をするか心配だということで、二人の共通の友人であるお宅の息子さんに家庭教師を頼んだと、一方的に言われた。

普通なら私の家まで来て頂くのだけれど、子供だけでは心配だということで、こちらのお宅の今まで海外にいたお母さんが、わざわざ私の為に戻ってきてくれて、面倒を見てくれるのだという。帰りも送ってくれるのだという。

た、確かに男女が二人つきりっていうのは私も困る。見知らぬ男性と二人だなんて、想像しただけでも怖くなってしまおうし、なにより最愛の恋人、一蹴に申し訳なくて仕方がない。

「はあ〜」

一蹴のことを想い、溜息一つ。

そもそも、なんで家庭教師を頼むことになったのか……その原因は私にある。

高校に入って、一蹴と恋人になれてからというもの、一人暮らしの一蹴の家に毎日のように通い、勉強をする時間が必然的に減って、一年生の頃は上位にいたのに、今では

成績は上位に入れなくなってしまった。

それでも文句を言われない成績ではあったのだけれど、今回の両親の出張で私が一蹴に感（かま）けてばかりになると、二人は危惧して今回の件を友人に頼んだわけで……「……うゝ、確かに私が悪いところもあつたし、二人の心配も分かるけど」

それでも週四日は多いよお。一蹴はちゃんとご飯食べてるかな？とか、ちゃんと宿題してるかな？とか心配だし。そ、それにキスだつて、抱き合つたりだつて……髪だつて触つてくれる回数が減つちやう。

見る人が見たら、私はきつとふらふらしていて、ゾンビにだつて見えちゃうかもしれない。

と、とにかくなんとかして週三日にして貰うようお願いしてみよう！そうしよう！勉強とは別な目的を持って、意を決して私はその家……『三上』と表札の書かれた家の呼び鈴を押した。

もし、この日をもう一度やり直せるなら、私は絶対に呼び鈴を押したりなんてしない。あの玄関を跨がなければ……ううん。扉さえ開かなければ……わたし、は……

この日、あの扉が開いて、あの人と目が合った瞬間、きつと開けてはいけない扉まで開いたんだつて……後に知つて、打ちのめされる事になるのだから。

俺は想像もしてなかった。

親父から彼女の苗字を聞いても、何一つ思い浮かばなかったのだ……散々ならずやで話していた彼女がまさか、あの公園にいた彼女で、俺の収入源になるなんて。

呼び鈴が鳴り、仕方無しに玄関のドアを開けて、彼女と目が合った瞬間、二人同時に驚きで硬直し……そして、第一声。

「……は、初めまして？」

「……は、はあ。どうも」

俺の欠点……それはだな……

！
人の名前すら覚えられないクソツたれなこの出来損ないの脳みそだよ！ちくせうツ

第一章

彼女の嘘、彼の嘘

母さんが買い物に行つて帰つてきてないのは幸いだった。俺の狼狽える姿なんて、とてもじゃないが見せられん。

とりあえず陵を俺の部屋へ案内し、飲み物を用意してくると言つてキッチンへ一時退避した。

いや〜……マジないわあ〜。

つい先日の自分を振り返る。俺は別れ際になんて言つた？めちやくちやクールに決めて、しばらく会うことはないだろうみたいにならなかつたわけ？

「それがこんなに早く再会するとか……」

そりゃあさ、普通は思わんだろうが。見知らぬ他人と、数日後に再会するとかさ。世間狭すぎだろ。しかも、あの子は信と白河とも知り合いらしいし、これ誰かに俺の運命操作されてんじやねえの？とか疑うレベルじやねえか。

ま、まあ……作戦としては一つしかないな。このまま初対面を貫き通す。

もしかしたら、あの子は俺のことなんて覚えていないのかもしれない。ほら、アレだ

よ。一週間で記憶がりセットされるとかいう設定でさ。そういう病気が世の中にはあるとかないとか聞いたことがある。

そうじゃなくてもだ、見た目は利発そうなお子さんでいらつしやるし？俺の気まずい空気を読んで知らない振りをしてくれるかもしれない。

実際、玄関で間の抜けた挨拶をしてからほとんど会話もしてないし、あの子も何も聞いてこないし。

「そうだよな。俺に恥を掻かせるような、そんな悪作はしないでだろう」

人間ネガティブはいかんよ。笑う門には福来るとか言うじゃん。ポジティブが世界を救うんだよ。

てなわけで、目下俺が考えることは一つだけ。

「……紅茶ってどうやって淹れるんだよ」

コーヒーよりも紅茶派な見た目をしているし、紅茶を持っていこうと思うのだが、淹れ方が少しも分からん。近くのコンビニで買ってきてもいいが、前に自販のレモンティーを詩音に奢ったら、馬鹿みたいに渋い顔をされたトラウマがある。

……ああ、そうだ。詩音に聞こう。

あの紅茶は……博士ならご機嫌で講義をしてくれるはず。ただし、講義が長引く危険性があるため、引き際をしつかりしておくこと。具体的には、淹れ方を簡潔に聞いて、即

座に通話を切る。

てなわけで、電波が届く場所に来てくれと願いつつ詩音に電話をするのであった。

参った。いやね、この結果はわかってたよ？詩音が紅茶談義始めちゃったら、数分で話が終わるわけがないって。無理矢理に通話を終わらせようなんてさ、出来るわけないじゃん。だってあいつが拗ねると面倒臭いんだもん。それでも三十分で解放してくれたのは進歩だよな。高校時代なら平気で二時間は放してくれなかつたもん。

部屋のドアを一応ノックする。自分の部屋なのだから必要ないとは思うが、何かしらの不測事態が起こっているのかもしれない。例えば、汗を掻いてしまつて着替え中とか、学校外では私服主義だとか。昔、帰つて来て部屋に入ったら、彩花が着替え中だったなんてこともあった。

さすがの俺もあの時はビビツたね。中学生といえは思春期真っ只中で、まだ成長しきっていないあいつの身体でも、こうドギマギしたもんね。あ、今思つたけどドギマギって○どマギにイントネーションが似てるよな。

ノックの後、控えめな「はい」って声が聞こえ中に入ると、陵は綺麗にぴんと背筋を伸ばして、正座の姿勢で待っていた。

マジかよ……俺なら数分で脚が痺れて、我慢出来なくて立ち上がったあげくに、ふら

ついて筆筒の門に足の小指をぶつけて悶絶する未来が待つてゐるぞ。

「あゝ、すまん。待たせちゃって」

「いえ、気にしないで下さい」

「えつと、紅茶で良かったか？ 陵」

「あ、すみません。ありがとうございます」

「いやいや、はは、あははは」

……がう。なにこの白々しい会話？ この前のこと突つ込まないだけマシだけどさ。

俺も陵の対面に座り、この流れに乗って自己紹介なんてものをしてみようか。陵もこの前のことなんて気にしてないみたいだし、案外俺の気にし過ぎつてこともあるしな。

ようし、それなら仕事に専念しようじゃないか。バイトの初日の基本は自己紹介だ。ここでビシつと年上らしく決めちゃおうぜ俺。

「そんじゃ、挨拶でもしようか。初めまして。今日から君の家庭教師をさせて頂く三上智也です」

「はい、知ってますけど……というよりも、この前お会いしましたよね？」

「ですよねえ」

チツ、まだ高校生のガキだもんな！ 俺のこの察して空気なんて読めないよね！ もうちよつと人生経験積んでくれていれば読めただろうに。

「あのですね、さつきからずっと考えていたんですけれど、少しいいですか？」
「あゝ、なんででしょうか？」

どこか訝しげな視線を受けて、自分の部屋だつてのに居心地が悪くなる。

「もしかして三上さん、私のこと知ってたんじゃないのかなあゝつて」

うん、訝しげどころか、めつちや疑われた。

「どうしてそう思うんだ？」

「だって、父の知り合いに勉強を見て貰うつて言われて来てみたら、それがこの前会つた三上さんの家で、本当は私のこと知ってたんじゃないかなつて」

ああ、確かにそこらへんは疑いたくもなるわな。俺だつて信じられなくて無様に狼狽えてたわけだし。

「ないない」

「本当ですか？」

「本当だよ。デウスに誓つてもいい。大体だな、俺は君の名前すら知らなかつたんだぞ」
「……：そういえばそうでしたね」

「そうだよ。それに、俺だつていきなり親父に言われたんだから」

「お父さんにですか？」

「おう。なんか、君の両親が海外に行くから、彼氏と最近いちゃこらしてばかりの小娘の

監視をしろって」

「い、いちゃこら!?! な、どどど、どこまで私の事聞いてるんですか!?!」

「どこまでって……一人暮らししている彼氏の家に毎日のように通って、もはや通い妻のようになつているとか? 娘に学生の自分を思い出して欲しいとか?」

「かか、通い妻!?! ふ、ふふ……そ、そんな妻だなんて、お母さんもお父さんも気が早いんだから」

急に気持ち悪くなつたな。気が早いどころじゃなく、バージンロードまで見えてそうなんだけど。

仲良きことは美しきかな。いいねえ、青春だねえ。おいちゃんは羨ましいですよ。壁ドン代行求むわ。

「ま、まあ君の色恋沙汰は置いておいて、そういうわけで、あまり君と彼氏を二人つきりにはしたくないらしいね」

簡単に親父から聞かされたことを話すと、彼女は少しだけ困つたように笑んだ。「そうですね。そんなに一蹴にかまけてばかりじゃないんですけどね」

ふむり、軽く嘘をつくねこの子は。もしくは、この子の基準ではそうなのかもしれないな。大人からしたら行き過ぎじゃね? って行為も平気で無視出来る年頃だしな。

仕方ない、ここは少し大人の味方をしようかね。

「それはどうかかな？」

「……どういうことですか？」

「いやね、実は親父からだけじゃなくて、信からも色々聞いてるわけだよ」

「あ、そういうえば稲穂さんと親友だって……」

「し、親友かどうかはさておき、この間のことを信と話したんだ。俺も信もトビーの知り合いだしね。それで、君と彼氏の話もちよこちよこ信から聞いたりしていたんだ」

「えつとおく、稲穂さんはなんと？」

「そうだなあ、毎日のように彼氏の夕飯を用意したり、弁当を用意してやったり、別れ際にキスしたり……」

「そ、その位ならクラスの彼がいる子も……」

「泊まる時もそこそこにあって、信の部屋の天井がぎしぎしと」

「すみません、謝りますからそれ以上は止めてくださいいっつー！」

顔を真っ赤にして両手を目の前でばたきさせて、俺の言葉を阻止する。

なにこの生物、可愛くてちよつと飼いたいと思っっちゃったよ。こんな気持ちカメ吉以来なんだけど。

「で、君はそれでも高校生らしい付き合いをしていると？」

「い、いえ、それは……でも以前女性誌のアンケートですね、高校生のアレがですね、

アレでして」

「恥ずかしいなら言うな。ていうか言えてないし。」

「つまり、真剣に好きなら良いのではないでしょうか!？」

「出たよ。恋に盲目乙女。ちよつとイラつときちやつたよおじちゃん。」

「いいわけないだろ!親に心配掛けて胸張るな!」

「は〜い!おま言うとか抗議しないでねえ〜。リアル鯉職事件なんてありませんでした。」

「そういうことはな、親にちゃんと認めてもらつてからするもんなんだよ!周りがやつてるから自分も良いなんて子供の理屈が通ると思うな!」

「……すみません」

「しゅんとさせてしまったが、当然のことを言っただけだ。最近のガキは相手の人生に責任も取れないくせに、すぐに軽はずみな行動を取る。」

「俺はどうだったって?ははは!親父も母さんも彩花を嫁に迎える気満々だったし、俺もおばさんとおじさんに早く結婚しろとか言われてたから問題なし。あの人達は俺と彩花が結婚出来る年になったら、その瞬間式を挙げさせようとしてたし。」

「まったく、大人しそうで淑やかそうだと思つてたのにな。陵ねがい」

「いのりです」

「ん？何言つてんだ？お祈りしたいなら教会に行きなさい」

「そ、そうじゃなくて」

「なんだなんだ？また反抗ですか？反抗期つてこんなに拗らせられるもんかね。他人の俺にまで齒向かうなんて、ご両親も相当苦勞したことでしょうよ。」

「いのりなんです」

「いやいや、だからさあ、なにを」

「私の名前、ねがいじゃなくていのりです」

「……………じゃあ、今日は君の進路に応じて何を集中的に勉強するかを検討しようか」

「私、人の名前すらうろ覚えの人に説教されてたんですね」

目を住人のいない向かいの部屋に逸らすと、彩花が溜息をついている姿が見えたような気がした。てか、絶対呆れてるな。うん。

「あー！そうだよ！覚えてませんでした！ごめんなさい！人の揚げ足取つてないで文系か理系か答えろや小娘！」

「年上が小娘に逆ギレですか!?!」

そうしてまた軽い内戦を繰り広げた後、ようやくにして文系だという情報を得ることに成功。結構時間をロスした気がするが、文系ならとりあえずは古文と現代文学を今日はやろうと妥協案を出すと、そうですねと素直な返事をしてくれた。

「それじゃあ、まずはどこまで君が出来るかわからないから、俺が使つてた参考書で、古文と現代文の基礎テストがあるから、それを解いてもらおうか。わからない箇所があつても、終わるまでは質問はなし。終わつてから採点して、間違つてる場所があれば教えてくから」

「はい、わかりました……けど、あの……」

参考書をぱらぱらと捲りながら、おずおずと尋ねてくる。

終わるまでは質問はなしって言ったのに、仕方のない奴だな。

「この参考書、びつくりするくらい使つた形跡がないんですね」

「……時間はそれぞれ一時間。それじゃ黙つて始めろ」

だって、参考書よりも、かおるや静流さんが教えてくれたほうがわかりやすかつたし。小夜美さんは邪魔以外何もしてくれなかつたけどな。あと、みなもちゃんも可愛いから癒しが欲しいときは必須な。詩音は、英語以外は俺並だつたし、唯笑に至つてはあいつは理系のが得意だから役に立たなかつた。

黙々と参考書に書き込んでいく陵を見て、過去の自分を思い出しつつ俺は漫画を読むことに。漢ならやつぱり○牙ですよ。これ読み始めると一日があつという間で、レポートなんてやつてる暇ないもん！漢の口マンだよ。

俺は漫画を読み、片や陵は真剣に勉強していると、階下からただいまの声。

「ふう、ようやく帰ってきたか」

「お母さんでしょうか？」

「ん、そうみたいだ。一旦下に行くけど、気にせず勉強しててくれ」

「わかりました」

部屋を出て玄関に向かうと、そこそこに食材を買い込んできた母さんは、両手に買い物袋をぶら下げてよつこらしよと荷物を置いた。

よつこらしよって言うような年に見えないほど、俺の母親は若く見える。俺がイケメンなのは間違いなく母の血のおかげだろう。……だ、誰にも言われたことないけど、みんなイケメンだって思ってるよ？ 多分。

「ただいま。ねえ、もういのりちゃんは来てるの？」

「ああ、とつくに来て今は勉強中。だから挨拶は後で」

「まあまあまあ！ それじゃあすぐにケーキと紅茶を持っていくわね！ そうだ、お化粧も直さない」と

「待てや母親！」

すぐにもも陵に顔を出そうとする母さんの襟首を掴む。

俺の母親、三上董（みかみすみれ）は俺とは間逆で落ち着きのない性格であった。

「ぐふっ！ と、智也……お母さんの首が……」

「今は勉強中だつて言つてんだろ！後でちゃんと紹介するから、母さんは家事でも」
「そうねそうね！いやあくくん、私夢だったのよ。息子のお嫁さんと一緒にお料理するの」

「人の話聞けよ！つうか、嫁じゃねえし、しかも彩花と散々料理してただろうが！」

「それはそれ、これはこれ」

「ほんと黙つて。いいから今は大人しくしてくれ、本気で頼む」

「は〜い」

まったくよおく、いい年なんだから大人としてもう少し落ち着きを持つて欲しいものだ。

それじゃあと階段を上ろうとする俺を母さんが呼び止めてくる。

「あ、そうだ智也。私聞きたいこと会つたのよ」

「あん、なんだよ？」

「いのりちゃんとか唯笑ちゃんとかどつちがタイプ？」

立ち止まった俺が馬鹿だった。母さんを無視して部屋に戻る途中、背中からなにかしらの抗議が聞こえていた。

部屋に戻ると、思ったよりも早く基礎テストが終わつたらしく、ペンを置いて大人しく待つていた。

「なんだ、もう終わったのか」

「あ、はい」

「じゃあ、採点しちゃうから適当に……そうだな、漫画でも読んで」

「いいんですか？」

「ああ、少し時間掛かるし」

「じゃあ、お言葉に甘えますね」

「おう」

適当に返事をして採点を始める。て言っても、解答を見ながらだから採点自体は時間は掛からない。時間が掛かるのは間違つてるところを俺が理解できるかどうかかわけで……

ふむふむ、序盤は間違つてないな。となるとだ……あく、やっぱり古文の場合は同じ言葉でも意味が違うのがあるから引つ掛かっちゃうか。

「うわあく、やっぱり男の人が読む本って少年漫画ばかりなんですな」

「ん、まあね」

なんつって、少年漫画の後ろの更に後ろには少女漫画が隠れてるんだけどな。そこまでは探さないだろう。

この文法は……どう説明したらいいんだ？

「こういう戦うのって怖くてあまり……あれ？これって……」

伊波、今大丈夫かな。電話してあいつに教えてもらったほうが早いんじゃないか？

「もしかして、ベンチにあった漫画って……」

うっわ、あいつ出やがらねえ！金の無心かノートを貸してくれとでも言われると思っ
てんな。八割は間違いじゃないけどな。

「あのお、三上さん？」

「はいはい、ちよつと待ってなあ。静流さんは疲れてるだろうしな。かおるでいつか」

「いえ、この漫画の最新刊を公園のベンチに忘れて行きませんでした？」

「あ、そうなあ。あれ忘れてすんげえシヨッ……なんだって？」

聞き捨てならん言葉が聞こえた気がして、思わず顔を上げると、俺の眼前に例のブツ
が突きつけられていた。

「な、ななな！おま、適当に見て良いと言ったが、漁れなんて言っていないだろうが！なに
発掘してんだよ！」

「そんなこと言われても……」

俺の最大の秘密を暴かれるなんて、陵いのり恐ろしい子ッ！

そいつを集めてるなんて、偶然知ったかおると、唯笑しか知らないのに！

と、とにかく落ち着け。ここで下手を打つわけにはいかん。男の沽券に関わるから

な。

「そ、そうだ！実はそれはかおるのよな、あいつ俺の部屋にそれを置いていつてるんだよ」

「誰ですかその人。そして、最初にそうだって、思いついたように言いましたよね？」

「聞き間違いだ。耳の中洗剤で洗濯した方が良いんじゃないか？」

「三上さんは言い訳が下手な頭を洗濯したほうが良い気がしますよ」

「お前、案外容赦ないな」

「自分でもここまで人に失礼になれるんだって驚いています」

ぐむう、まるで鬼の首を取ったような顔をしておつて。ここまで俺を追い詰めるとは……確かに俺が公園に本を忘れたことがそもそもの原因かもしれんが、だからといって素直に認めるのも癪に障る。

「よし！じゃあ、今から君の頭を何か良い感じの固さの物で殴るから、俺が少女漫画を集めてる記憶だけを消去してくれ」

「錯乱して無理で物騒な提案をしないで下さい！」

「それが嫌なら、君は何も見えてない、俺は何も見られていない。そういうことでオツケー？」

「いろいろ危険な提案も却下です！」

そ、そうだな。今の発言はとある組織から滅法怒られるな。

クソツ、こうなったらこれしかないのか……この俺が、まさかこんな手段を取るしかないなんて、へへ……信や唯笑が見たらなんて言うかな？

「あのお、三上さん？」

腹を括り、いぎ尋常に！

「陵……」

「はあ、なんですか？」

「今までの無礼は水に流して、誰にも少女漫画のことは言わないでくれないか？」

ふんぞり返って頼み込んでみた。

「そんなに高飛車な頼まれ方初めてです。一蹴と稲穂さんにうっかり口が滑ってしまい
そうだなあ〜」

誠実に頼んだのに、素気無い反応。こいつの血の色は何色だよ。

「……ほう、つまり君はあれか？地に頭をこすり付けて泣いて縫れとそう言うわけか」

「そうは言ってません。ただですね、もう少し普通に頼んだり出来ないんですか？初めに会ったときから変わった人だなんて思っていましたけど」

「変わってるとか褒め言葉だな。オンラインワン最高。でだ、とりあえず……」

正座して頭を絨毯に押し付ける。

「え、えええええ!?!ほ、本当にやるんですか!?!ちよ、止めてください!」

「俺だつてやりたくなんかない!だが、あいつ(最新刊)の……あいつの命が危ないときに、意地なんか張つてられるか……」

「三上さん……」

「今までの失礼な態度は謝る。だから、どうかあいつの命だけはどうか……どうか!」

「それはいいですから顔を上げてください!じゃないと」

「助けて下さいッ!」「智也く、ご飯出来たわよおく」

……あ、れ?今、なんか第三者が?気な声で入つて来たような?

顔を上げると、満面の笑みでドアを開けたままの姿勢で固まった母さんがいて、陵は左手で額を押さえて横に首振っていた。

「か、母さん、これは……あれだ」

「失礼しましたく、ごゆつくりく」

「待てやー!ーッ!」「待つて下さいくくくッ!」

年下の制服女子の前で土下座する息子の図を見てフェードアウトしようと、良からぬ誤解をした母親を俺と陵は決死の形相で止めに掛かるのであった。

妙に買い込んできたなと思つたら、どうやら陵の分も夕食を用意したらしい。

夜まで勉強に専念するため、こちらで夕食の面倒を見るところのこと。

食卓には大量のから揚げにシーザーサラダ、コーンスープとフランスパンかご飯が並んでいる。

「夕食までお世話になって、すみません」

「いいのよ、馬鹿息子と二人で食事なんて味気ないし、可愛い子がいてくれたほうが私も嬉しいもの」

「か、可愛くなんて、全然」

「そうなく。年上の俺を土下座させるくらい可愛いなく」

横から気の利いた合の手を入れると、ジロツと睨まれたので黙々とから揚げを食べ、誤魔化する。

悔しいことに、母さんの作る料理に間違いはない。なんてったって、彩花の料理の師匠は母さんだからな。今にして思えば、小さい頃から俺の嫁としての英才教育を施していたのかもしれない。

「あ、このから揚げ凄く美味しいですね」

「そうでしょう。料理はねえ、私の唯一の武器なんだからあ。そうだ、今度何か教えてあげるわ」

「本当ですか？是非お願いします」

なんとまあ、嬉しそうに笑っちゃって。どうせ、彼氏に作ってあげようとか？喜んでくれるかな？とかスイーツ思考を巡らせているんだろう。吐き気がするわいな。僻んでなんかないけど。

「ええ、お安い御用よ。それにしてもいのりちゃんって、本当に可愛いわね。将来は間違いない美人さんになるわよ」

「え、えへへ。そうですか？」

ふははははは！母さんはいつの間に社交辞令がこんなに上手くなられたんでしょうね。息子はびつくりしすぎて、陵のから揚げを気付かれないように奪ってしまったよ。

「ふふ、これなら合格よ」

「はいはい、合格おめ……なんのだ？」

聞き逃そうとしたが、嫌な予感がして聞き返す。止められないのは長年の付き合いでわかっているが、この母親の思考を少しでも理解して被害を最小限に抑えたいからな。

「なんのって、決まってるじゃなくい。あんたのお嫁さん候補によ」

母さんの発言を予想していた俺は驚くことはなかったが、対面に座る陵は少々フリーズ気味だ。

「……………はい？」

返答までもがエラー気味である。可哀想に。

「あらあら、照れちやってもう」

「目が腐ってんのかよ。これはシヨックで固まってんだろ」

「ええ、どうしてえ？あ、もしかしてあんたが激しくいのりちゃんに嫌われてるからとか？」

「好かれようとも思わんが、そうじゃない。あのな母さん、あんたは知らないかもしれないが、いがな、実は陵には」

「彼がいるんでしょ？」

「そうそう……あん？」

あれあれあれ？目の前のこのお方はなんとおっしゃったのでしょうか？

「いやねえ、そんなの知ってるわよ。私だつて事情は聞いてるもの」

「じゃあホな事言うの止めろよ。おかげで事態が飲み込めてない小娘が、見事にオブジェと化してるじゃねえか」

ハンマーで叩いたら崩れてしまいそう。こう、砂のようにさらさらつてな。

「でもねえ、それとこれとは別じゃないかしら？別に結婚しているわけでもなし、それに好きなのよ私、りや・く・だ・つ・あ・い」

「良い年して腐ってんな」

「自分が巻き込まれるのは嫌だけど、見るのは楽しいじゃない？」

「大体の人間がそうだろうよッ！」

あの親父にしてこの母親ありだなッ！

あまりのショックに耐え切れず、陵が箸を逆に持って空気をパクついてますから！

「んもう、そんな事言つてく。実はあんただつていのりちゃんのこと嫌いじゃなくせに」

「ふあッ!？」

「コーンスープを鼻と耳から流し込んだらうかッ！」

何を事実無根なことを！陵も赤くなるのやめえや！こういうことに慣れてないのはわかるけどさ！

「そそそ、そうなんですか!？」

「信じてんじやねえ小娘！いいか？この人はな、すぐにこういうありもしないことを言うんだよ！」

唯笑はもちろんのこと、詩音、かおる、みなもちゃん、小夜美さん、静流さん等々、例を挙げたら切りがない。

「まあ、そうだけどね」

「……なんだ、そうなんですね。びつくりしました」

「たく、余計なこと言うなよ」

「はいはい、ごめんねえ……チラ」

意味深に俺をちらちら見てくるが無視する。

はあく、何を言いたいのかは言わなくてもわかってているが勘弁してくれ。

その後は他愛ない話にシフトして食事を済ませ、時間まで陵の勉強を見てやった。

と言つても、陵がわからないところは頼れる友人達に電話して聞きながら教えたんだけどな。別に俺が馬鹿とかじゃないぞ？ただ、アレだよ。大学生になつて基礎が疎かになつてはいけないと、みんなに思い出してもらつたために敢えて聞いて回つただけだから。……いや、マジで。

「智也く、そろそろ時間よ〜」

階下から声が掛かり、時計を見るともう九時半を針が指していた。

そうか、真面目に勉強するとこんな時間に時間つて早いんだな。おかげで人体の壊し方かなり詰め込めたぜ。今すぐにストリートファイトしたい気分だ。

「そんじゃ送つてくから、教科書とか閉まつたら下に来てくれ」

「そんな、送つてもらふなんてツ」

なにやら焦つて送ることを拒否されたんだが……彼氏に後ろめたいでも思つてんのかね。

「黙れガキ。お前みたいなガキを大人が一人で帰らせるわけにいかないだろ。世間体だつて大事なんだつて少しはこっちの事情も考えてくれ」

……少し突き放したような言い方になつちまつたけど、こう言えば渋々従うし、俺に對して悪感情は抱いても、悪いなどは思わないだろ。

「……わかりました。よろしくお願ひします」

勉強道具を鞆にしまう陵を部屋に置いて階下に向かうと、車の鍵を持った母さんが玄関で俺を待つていた。

「なんだ、わざわざ待つてなくても良かったのに」

母さんは自分の愛車、ボク〇〇の鍵をぶらぶらさせて何かを言いた気に俺を見ていた。

「……なんだよ？」

「別に。ただ、なんか少しあの子に對して冷たいなうって思つただけ」

「そうか？」

「そうよ。みなもちゃんへの態度とは随分違うなあつて」

「そりやそうだろ。みなもちゃんは俺にとつて妹みたいなもんだし、あの子はみなもちゃんと違つて赤の他人だろ」

「ま、そういういい訳も成り立つか」

含みの言い方に少しだけ苛立ってしまう。

そりやあさ、母さんは俺のことを誰よりも見てきた家族だし、俺が間違ってたならそれを責める権利がある。それでも、さ……少しはお手柔らかにしてくれてもいいんじゃないかねえかな？

「何が言いたんだよ？」

だから、止めてくれよ。その……

「わかつてるでしょ。そこまで頑なに別人だつて言い聞かせなくていいんじゃない？ 彩花ちゃんにあそこまで似てるから……ね？」

何もかも見透かした目、止めろよツ!!

叫んで八つ当たりしたい衝動が、胸の内で暴れまわる。衝動が溢れ出しそうになるのを理性で抑え、それでも厳しい眼で母さんを睨みつけてしまった。

「凶星を突かれたからって、怖い怖い。まだまだ子供ねえ〜」

「そうだな。高校の頃だったら怒鳴っていた。少しは成長した息子を褒めて欲しいもんだね」

「んふふ。そのくらい知ってるわよ」

俺の精一杯の反抗も何処吹く風。暖簾に腕押しとはこのことだ。

「チツ、車で待ってるからって陵に伝えてくれ」

「あいあいさ〜」

でも、このままやり込められたんじや悔しいから少しだけ仕返し。

「それと、息子に野暮焼くなんて、昔と違って年取ったんじやないか？そろそろ老後の心配でもどうだす？お肌とか最近……ねえ？」

「なっ!？」

「じゃあ、行つてきま〜す」

そそくさと撤退。扉の向こうから鬼の鳴き声が聞こえたが逃げるが勝ちだ。

心の中で、老後の面倒は俺が見てやるからと謝罪しつつ車に乗り込んだ。

数分待っていると、玄関から陵が出てきて助手席に乗り込んだ。

「それじゃあ、すみませんがお願いします」

「おう」

陵の家の住所を聞いて車を走らせる。

でかい車はあまり好きじゃないが、自分で維持出来ないから、自分の愛車を買うのは就職してから。本当はスポーツタイプが良いんだけどな。

少し走ると、国道に直通する曲がり角が見えてきた。

走りながら陵が時折道を示してくれて、その時もその角を曲がるように指示してくれた。

「あ、そこは右で」

「……………」

しかし夜の住宅街は本当に車通りが少ないな。まあ、道が狭い分助かるけど。

「三上、さん？」

「ん？ラジオじゃなくて曲でも掛けた方が良いか？白河とかもたまに乗るからクラシックも」

「そうじゃなくて道ですッ」

「道って…………あれ、間違えたか？」

俺が無視しているとも思ったのか、やけに機嫌の悪い声で注意された。

そりゃ、ほとんど初対面の男と狭い空間に二人きりじゃ不安にもなるだろうがな。

「間違えてはいないですけど、あそこを曲がらないと国道に出るのに遠回りになるんですけど」

「そう、だっけ？」

「そうだったって、三上さんのほうがこの辺りは詳しいんじゃないんですか？」

まあ、な。詳しく過ぎて陵に言われるまでもない。

つまり、最初から通る気なんてなかった。

「あゝ、悪いけどあの道嫌いなんだよ」

「そんな、嫌いって」

歩いていくなら我慢出来る。だけど、車でだけはあそこを通りたくない。

「だってさあ、見通しがめっちゃくちや悪いじゃん。急に人が飛び出してきたらどうすんの？」

「人って、こんな夜中に人なんてあまり通りませんよ」

「そうかもしれないけどさ、それでも危険は回避するのが利口なわけで。ほら、かもしれない運転って知らないか？教習所で習うんだけどさ」

白々しい言葉だって、自分で理解出来てしまう。てことはだ、他人にだってそんな言い訳通じるわけなんてないんだよな。

「三上さん、送って貰って置いてこんなこと言うのも失礼なんですけど……私、あまり好きな人以外の男性と二人でいたくないんです。彼に……一蹴に申し訳ないって思っちゃいますから。だからなるべく早く帰りたいんです」

「あ、ああ、わかってる。君の気持ちはわかってるよ。それでも、やつぱ命には代えられないって……」

陵の言い分は間違っていない。むしろ、とても誠実で純粹な恋心を抱いているのだと感心すらする。間違っているのは俺で、正しいのは俺よりも生きていない彼女。わかっている……わかってんだよ……

俺の要領を得ない言葉に、彼女はそれまでの業を煮やしきってしまったていた。

「わかりました、今日はいいです。でも、今度からはあつちの道からお願いします」

言葉の端々に隠そうともしていない棘が飛び出している。

ここで、ごめん。わかったよって……この場限りの嘘をつくことは出来る。出来るけれど、誠実ではない。身勝手な誠実だろうと、この事にだけは嘘をつきたくはなかった。だから俺は、陵の欲しい言葉とは逆の言葉で応えるしかなくて……

「……わりい、それは無理だ」

「——ッ!? どう、して……」

正直に彩花の事を話すつもりはない。多分話してしまつたらこの子は気に病むタイプだろう。それよりなにより、俺が話したくない。友人でも家族でも幼馴染でもなんでもない他人に、彩花の事を語りたくなんてない。

だからまた、同じ言い訳を俺は壊れたレコーダーのように繰り返すしかない。

「だからさつきから言ってるだろ? 人身事故をなるべく回避するためだつて」

「ですからこんな夜中なんですから」

「じゃあその確率がないと断言出来るのかよッ——!!」

少して良い。ほんの少しでも陵が引いてくれたらそれで良かったのに。そうしたら、こんな無様な姿を曝け出さずに済んだのに。

「み、かみ……:さん?」

俺の怒声に、彼女はただ呆然と俺の名を呼んだ。

ああ、止まらない。もう、止められない。

「ふざけんなッ!何が夜中だから人があまり通らないだ?お前みたいなガキが大丈夫だろうって考えた所為で人が死ぬんだぞッ!お前、それで人を轢いたらどうすんの?どうやって謝って、どうやって泣いて責任取るつもりだ?」

車を路肩に止め、自分より年下の少女を怒鳴りつけるなんて……それも、明らかに間違っているのは自分だって痛いくらい理解していることで。

「命に値する責任なんて誰も取れねえんだよッ!」

母さんが彼女を送れるのなら、俺は喜んで母さんに頼んだ。だけど、母さんは彩花と唯笑を本当の娘のように育ててたんだ。俺に対するように怒って、泣いて、喜んで……:そうして育てた娘が大人になる前に、自分より先に逝ってしまつて……:平気なわけがないんだ。

そんな彩花が交通事故で逝つてしまつて、俺と同じかそれ以上に壊れたのは母さんだった。

あの日、遅刻が多かつた俺は休日に学校に呼び出され、プリント作りを手伝わされた後、帰りに小降りの雨が降つてきて、彩花に傘を持ってきてくれと頼んだ。

別に、傘がなくても問題のない雨だったのに、俺はただ彩花に会いたくて……その日、彩花は学校に来る途中で事故に遭って……そして、そんな彩花を最後に見送ったのが母さんだった。

俺の傘を取りに行つて、その傘を渡したのが母さん。

あの日以来、母さんは車で事故現場の近くを走れなくなった。

俺だつて、近づきたくないけど、母さんに送らせるなんて酷なことは頼めない。だから俺がつて……なのに、こんな……情けねえ。

正論言われて？彼女の気持ちを蔑ろにして？そんで逆ギレ。笑えねえよ。

息を荒くして言つた後に、はつとして陵を見ると、彼女は俺の剣幕にすっかり萎縮してしまい、言葉を紡げなくなつていた。

「悪い。もちろん、陵の気持ちは良く分かる。でも、さ……俺には無理なんだ。だから、本当に申し訳ないんだけど、少しかだけ遠回りさせてくれ。この通り」

冷静になつて頭を下げるが、陵は俯いて黙つたまま。

……やつちまつた。

今日のことを親父に知れたら何を言われるかわかつたもんじやないが、少々のウザさは受け入れよう。今日のこととは全面的に俺が悪い。

「あゝ、それじゃあ行くぞ。怒鳴つちまつて悪かつた」

俺の謝罪が聞こえているのかどうかはわからないが、小さく頷いた陵を見て車を再度走らせる。今度は住所をカーナビに入力して。

帰る最中、陵はずっと無言のまま、俺を見ようともしなかった。

玄関の外から、車が去る音が聞こえた後、玄関を背にそのまま力なく私はずるずると腰を落とした。

家に帰宅した私は、玄関から一步も動けないまましやがみ込んだ。

(私……多分、三上さんを傷つけた)

あの時、私を怒鳴りつけた時の三上さんの顔がずっと頭から離れない。

(だって、あの表情(かお)は怒ってたんじゃないもん……泣き出しそうなのを堪えて我慢してる子供みたいだったから)

思い返せばハンドルを握る指だって震えていた。何かを恐れているように、ずっとハンドルの強く握って震えてたんだもん。

何が原因かなんて詳しいことは何も分からない。でも、多分あの道に近づいてからなのは間違いない。

何かが、あの先で何かがあったんだ。だって、様子がおかしくなったのはあの場所に近づいてからだから。

表情に余裕がなくなつて、心なしか冷や汗のようなものも掻いてて……だからこそ、私は誤解したんだもの。

自分に対して、邪な感情を抱いているんじゃないかって……そんな下衆で最低な勘繰りをした。

勝手に不安になつて、勝手に怯えて、勝手に吠えて……

(そんな人じゃないつて、知つてたのに……なのに、そんな最低な思い込みで私、三上さんを傷つけたんだ)

初めて逢つたあの公園での、頭を撫でられた手の温度を私は信じられなかった。信じられないどころか、忘れてしまつていた。

三上さんは何度も私に謝ってくれて、別れ際も本当に悪かつたつて言つてくれた。違うのに。

(謝らなきゃいけなかつたのは私なのに、三上さんの目を見れなかつた……)

ふと、公園での三上さんの言葉が脳裏に過ぎつた。

『自分の問題から目を逸らさないで、それでも笑うんだよ。雨はさ、冷たいだけじゃないんだつて……そうすれば、時間が経てば気付くはずだから。そういうふうに出てくるもんだ。そんでな? 今度俺が君と会つたらこう聞くよ……雨は上がったか? つて。その時はさ、笑顔で君なりの答えを聞かせてくれるか?』

そう、三上さんはそう言ってくれたんだ。

(だか、ら?)

でも、そう言えるってことはもしかして……

(三上さんにも癒えない傷が?)

経験したからあの言葉が言えたんじゃ……

「そう、だよね」

きつと、三上さんの心の中には今も癒せない傷があつて、その傷に気付かずには私も触れてしまったのかも……

それに気付かず、私は自分の中にある一蹴への想いにしか目を向けなくて、身勝手に三上さんの傷を抉ってしまったんだ。

「ごめん、なさい……」

こんな私は三上さんが言うように、確かに小娘以外の何者でもない。

「ごめ……なさい……」

明かりも点けず、真つ暗で少しだけ肌寒い家の中で一人、あの瞬間の三上さんの表情ばかりが頭を過ぎって、一つ、また一つと目から静かに涙が零れ落ちていた。

「それは智也君が悪いね」

「だな。三上が悪い」

「お前等に優しさを期待した俺が馬鹿だったよッ！」

陵を大人気無く怒鳴った翌日、千羽谷大学の学食で伊波と加賀にそれを話すと、精神をボツコボコにされていた。

二人は俺が珍しく真剣な顔をしているのが気になったらしく、何かあったのかと聞かれたのだが、始めはまったく違うことで悩んでいると思っただけらしい。

主に単位がやばくて留年の危機なのでは？とかな。

「何かと思つて聞いてみたら、そうだよねえ、留年なんてしないよねえ。散々僕達からノートを借りたり、勉強だつて見てあげたりしてるんだもん。それで留年なんてことになつたら……ねえ？」

暗に潰すよ？と言っているわけだが、笑顔で言うの止めろ。ほんと黒いなこいつ。

「にしてもさあ、なんだっけ？陵つて子だっけ？普通は適当に言い訳して誤魔化すだろ。それを怒鳴りつけるなんて……三上の所為で俺達はキレやすい若者とか言われるんだよ。わかつてるの？」

「お前等には友達を慰めようっていう優しきはねえのかよ」

「ないよ」

「あるわけないじゃん」

口を揃えてろくでなしだわこいつ等。

「マジでさあ、次に会ったらどうすればいいと思う?」

「とりあえず僕にさば味噌定食を奢ってくれればいいと思うよ」

「俺は焼肉定食な」

「真剣に聞いているんだよッ!」

俺が年に一度もないガチな悩みを抱えているというのに、二人はざまあとでも言いた気で、真面目に相談に乗ってくれない。これなら信を頼ったほうがマシだった。

「ん、そんなこと言われてもね。とにかく謝る以外に何も出来ないんじゃない?」
「んなことはわかっているんだよ。どう謝ればいいのかってことさ」

「そうだなあ……玄関で土下座待機して待ち伏せるとかどうだ?」

「この俺様に軽々しく地に頭をつけろと言う訳か貴様は?」

加賀の顎を掴みタコ口にしてシエイクしてやる。

「ふやめふおッ!」

「ふははははは!何を言っている?日本語を喋れよ、たはく君!」

「……相談する側の態度じゃないよね」

俺を精神的に追い詰めることに全力を注ぐお前が言うな。

加賀が涙目になったのを見て満足して解放してやる。

「ああ、顎がく」

「たく。もう少し考えて話せよ。その案はとつくに考えてたんだよ」

「考えてたのならなんで俺がこんな目に遭わされたんだよッ！」

「そりゃあ、加賀なら乱暴に扱っても構わないかと思つてな」

「そうだね」

「なにその歪んだ価値観!? つうか伊波もちやつかり同意するなよッ！」

「ごめん、つい。それよりさ、さつきから気になつてることがあるんだけど……」

「なんだ？」

伊波が缶コーヒーを飲みながら、チラツと横に座る加賀に視線を送りつつ言った。

「智也君のその問題はどうでもいいとして」

「お前、月夜の晩だけじゃねえからな、気をつけるよ」

「正午君に話してみたら？」

「何を？」

「陵さんと飛田君の公園でのこと」

なぜ伊波がそう提案するのはわからなかったが、俺を甦る事以外にも頭が回る奴だし、なにか考えがあるのかもしれない。

つて、そういうええそうさ。忘れていたが加賀つて……

「飛田？あいつがどうかしたのか？」

トビーに俺よりも詳しいじゃねえか。しかも、トビーと最も接点のあるマグロー（飛田の舎弟？）とも仲良いし、こいつに聞いてみるのが一番早いじゃん！

「ほら、飛田君の名前に食いついた。話しても良い？」

「……伊波、お前つて腹黒いだけじゃなかったんだな」

「今後智也君が留年の危機になっても絶対に手を貸さないつてここに誓うよ」

「まだちよつとは余裕があるから大丈夫……かもなあ」

予断は許さない状況とも言えるがな。

「三上の留年とか土下座とかは廃棄して、飛田がどうしたんだよ？」

「だからお前等のその俺への扱いをだな……まあいい。えつとな、そもそも俺と陵は家庭教師の時から初対面じゃなかったんだよ」

こいつ等の中での俺のヒエラルキーはこの際置いておいて、とにもかくにも加賀に陵との初対面の話をした。

確かに、俺の失態の話よりも陵とトビーの問題のが悔しいが重いわけで……俺のプライドとかほんとどうでもいいよな。うん。

俺の話をわりと真剣に聞きながら、加賀は少し首を捻って、俺の話の中で引つかかったことを尋ねてきた。

「あのさ、そもそもなんで飛田は陵の事とその彼氏の事を知ってるんだ？」
「それは知らん」

そういう情報収集は俺よりも適任がいるし、そっちに任せている。

あいつ他人の問題に手を貸すのが趣味だしなあ。

「あつそう。じゃあ、次。なんで飛田は陵と彼氏が付き合っている事に怒っているのか……これも不明と」

「ああ」

「じゃあ最後。これは俺に心当たりがあるんだけど、飛田が二人のことを知った経緯。確か陵は俺等の後輩、浜咲学園の三年だよな？」

「そうだけど、それがどうかしたのか？」

「どうしたも何も、マグローに妹がいるの知ってるか？」

「あいつの家族構成なんて知らねえよ」

「……多分、飛田に二人の情報を流したのはマグローだ。あいつなら飛田の事なにかしら知ってるだろうし、陵やその彼氏のことを知っていてもおかしくない。それで、それを意図したのかしてないのかは知らないけれど、マグローに二人の事を話したのがマグローの妹じゃないかな。あいつの妹も浜咲学園だしな」

なるほど、そう考えるとあの場で陵に会いに来たっぽいトビーがいた理由が繋がる。

つまりはマグローが余計なことを言ったわけだ。あいつ、後でコーヒーに見せかけた醤油のソース風味を飲ませてやる。

「なるほどねえ。それにしても正午君」

「なんだよ?」

「正午君つて馬鹿じゃなかったんだね」

「白河の男を見る目に疑問が出てきたんだけど。なんでこんな奴がモテたんだよ」

「それな」

こうして、俺の暴言問題はうやむやになり、陵とトビーの問題に思わぬところで近づいたわけだ。あとはあっち次第だが……

「そういえばさ、智也君……はい」

爽やかな笑顔で俺に手を出してくるイケメン。俺と握手したいわけじゃないだろう。ならば……

「あく、はいはい。ほれ」

掌の上に涎を垂らそうと顔を突き出す。

「ちよッ!?何してんのさ!」

「いや、俺の聖水が欲しいのかと思って」

「頭腐ってるの!?誰もそんな汚染水欲しくないよ!お金!この前貸したお金返してよ!

家庭教師で収入があつたんでしょ！」

ふむふむ、金に汚いこいつは、たかだかコーヒー一杯の金を返して欲しいとそういうわけか。卑しいやつめ。

「あゝ、それな……無理」

「ちよつと、何言つてるのかわかんない」

「お前頭良いくせに理解力のないのな」

「智也君は仁義を学ぼうね！」

男のくせにごちゃごちゃと小さい奴だな。器が知れるわ。

「つまりだな……」

そう、俺だつて六千円入つてくる算段でいたわけだよ。あんなことが陵とあつたわけだが、それでも家に帰り着く頃には、車を降りてスキップして家に入ったわ。お金があれば何があつても上機嫌になるのが人間つてもんだ。帰つてすぐに俺は母上に言いましたよ。今日のお給料よくこせ♪つて。母上もね、はいはいと笑顔でお財布からお金を抜いたわけです、はい。そうして俺の手に渡つてきたのはなんとびつくり二千円じゃないですか。おやおやおやく、おかしいなあ？五千円と千円を間違えちやつたのかな？つて思つて間違いを指摘したわけですが、どうにもそうじゃないと。

「……つまり、どういふこと？」

「それがな、その六千円から小娘の食費と送るときのガソリン代を抜かし、尚且つ俺が家庭教師出来るだけの学力がないということを加味した結果、一回につき二千円なのだろうだ」

この年で二千円って、月四日ペースだとしても月に約四万しか貰えない計算だ。労働組合に訴えるぞ。

「へえ、それは大変だねえ」

「そうだろう？だから返済は……」

「ごちやごちや五月蠅いよ。いいから返してね」

……有無を言わさぬ笑顔に、渋々俺は財布から五百円を伊波に渡す。

「加賀……こいつって高校でもこんなだったか？」

「俺が知る限り、三上と付き合ってからこんな容赦のない性格になったんだと思う」

そうか、俺には鬼畜を養成する才能があるのかもしれない。

軽くなった財布に涙し、俺達はそれぞれの講義へと向かった。

……もう、陵とトビーの問題なんかどうでもいいよ。俺の財布事情より重い問題じゃないもんツ！

コトコトと鳴るお鍋に、お豆腐を入れて蓋をし、隣のコンロで煮ているカレイの煮付

けの様子を見る。

うん、もうちよつとかな。

昨日は三上さんの家にした所為で一蹴に会えなかった分、今日は美味しいものを食べさせてあげたい。丁度一蹴もアルバイトがお休みで、今日は長い時間一緒にいられる。……もちろん、門限までには帰らないといけないけれど。

ピーピーと炊飯器の音が鳴り、もういいかなとおひたしとカレイの煮つけをお皿に盛り付けて、お味噌汁を仕上げに掛かる。

「いゝのゝりッ！」

「きやつ！」

後ろから一蹴がいきなり私を抱きしめてくれる。

ああ、なんて幸せなんだろう。彼の腕の中にいる度、私はいつもそう思う。

「もう、一蹴。今お料理中だから危ないよお〜」

本当はそんなこと思ってないけれど、一応は注意しないと。火事になったら大変だもんね。

「だつてさ〜、昨日は家庭教師の所為でいのりに会えなかったし、少しでもいのり成分を補給しとかなないと、俺がガス欠になつちまうよ」

「え〜、なにそれ〜？」

一蹴に抱かれたまま、私はお味噌汁の味を確かめる。

「うん、美味しい。一蹴、ご飯持つて行くから手伝つてくれる？」

「へっへえ、一昨日振りのいのりの手料理。もう、腹が減りすぎて死にそうだ」

「ご飯沢山炊いたから、おかわりしてくれると嬉しいな」

「おう。三杯くらい余裕だ。それとも、ジャーごと食べてやろうか？」

「ふふ、そんなに食べたらおなか壊しちゃうよ」

「いのりの料理は別腹なんだよ」

いつもの笑顔、いつもの温もり、いつもの一蹴との食卓。この風景があれば私は何もいらぬ。何を犠牲にしても、この日常を失いたくない。

卓袱台に料理が揃い、二人で手を合わせていただきますをして食べ始める。

でも、私は一蹴が食べるのを見てから食べ始める。

一蹴が私の料理を美味しいと食べてくれる表情が何よりも好きで、それを見てからじゃないと食べたくないの。

「うん、やっぱ美味しいな。てか、高校生が煮つけて凄いな」

「そんなことないよ、覚えちゃえば難しくなんてないもん」

本当は何度も練習して覚えたんだけどね。失敗作はお父さんが食べてくれたんだよね。ありがとう、お父さん。

他愛ない会話、今日学校で何があったとか、ならずやでこんなことがあったとか。それで、話が終われば良かったのに……そうはいかなかった。

「そういえばさ、家庭教師はどうだった？」

「へ？」

「ほら、向こうの家に出向いて勉強を教えて貰うって言ってたじゃん。あれ、どうなのかあ〜って」

何か別なことを聞きたそうだけれど、一蹴はじつと私を見るだけだった。

「どうって……凄く優しい人で、み、先生のお母さんもとても良くしてくれるの」

「そっか、向こうの親も一緒なのか」

ほっと溜息をついて一蹴は笑った。

あれ？もしかして、一蹴妬いてくれたのかな？男の人とは伝えていたけど……

そっか、そうなんだ。嫉妬、してくれたんだ。

一蹴の嫉妬が嬉しくて、一蹴の鼻をちよつと摘みたいかった。摘みたかったけれど

……

「ん？どうした、いのり？」

「え、何が？」

「いや、なんつうか、笑おうとして失敗してるような気がするんだけど」

なんで今、三上さんの複雑な表情を思い出すのッ！

「そ、そんなことないよ〜」

「そうか？」

「そうだよ。ただ、ちよつと一蹴の嫉妬が可愛いな〜って思っただけ」

「なッ!? べ、別に嫉妬なんて……ちよつとしかしてねえし」

顔を赤らめてそつぽを向く仕草が本当に可愛くて笑つてしまう。

そうだよ、ね。今は一蹴といえるんだもの。あの人の事なんて関係ない。今はただ一蹴に甘えたいの。私があの人を傷つけたことを少しでも忘れさせて欲しい。

一蹴の部屋に来るまで、ずつと一日あの人の方が頭から離れなかった。次に会う時、どんな顔をして会えばいいだろう……。なんて謝ればいいだろうって、そんなことばかり考えていて疲れてもいた。

だから、今日は一蹴に抱きしめてキスして欲しい。いつもよりもつと甘えさせて欲しいって思ったの。

「ま、まあ向こうも親と一緒にならいいや。しつかり勉強に励みたまえ」

「それは一蹴でしょ」

「俺は進学しないからいいんだよ」

「もう、しょうがないなあ」

「それより、おかわり」

「はい」

一蹴からお茶碗を受け取って台所へ。

テレビのバラエティを観ているのか、一蹴の大きな笑い声が聞こえる。

いつもなら一緒に私もテレビを見て笑い合うのだけれど、今日は上手く笑えそうになかった。

……三上さんの事よりも、飛田さんの事で悩むべきなのに、そのことまでも私は忘れていた。

「よお、久しぶりだな信」

「やあやあ、トビー」

夜、ファミレスでイタリアンハンバーグセットを食いながら、トビーに手を上げて応える。

トビーを席まで案内してくれた店員の子が、ご注文がなんたらかんたらとお決まりの台詞を言う前に、トビーはドリンクバーだけで良いとそっけなく言っただけで追い返した。

「トビーさ、もうちよつと愛想良くしたほうがいいぞ。せっかくイケメンなんだから。そんな顔に産んでくれた親に悪いだろ？」

「俺を施設の扉の前に捨てたクソなんざ知らねえよ。それより……」

「ああ、やつぱちヨコパフェが食いたくなつたんだろ。見た目に反して可愛いものが好きなんだからなあ」

「……お前も三上も人の話を聞きやがらねえな。そうじゃねえ、お前が俺を呼び寄せたブツを消せ。今すぐ」

「あゝ、だよなあゝ」

にへらと笑い、ちやちやつと例の動画をトビーの前で消去する。まあ、智也の携帯に永久保存されてるけどな。

普通に呼んでも来そうになかったから、悪いとは思つたが、いのりちゃんに悪漢の如く迫る動画をネタにトビーをここに呼んだんだ。

「これでいいだろ？」

「ああ。それじゃ俺は帰るぞ」

「……深歩ちゃんに告げ口しちやおうかなゝ」

トビーの愛しの君であり弱点の、荷嶋深歩（かしまみほ）。とある事情で足が悪く、トビーは彼女の世話を何かと焼いている。

席を立とうとしたトビーは舌打ちをして俺を睨んだ。

「コーヒー取ってくるから待ってろ」

「ごゆっくり」

そりや、深歩ちゃんには知られたくないだろうな。あの子が知ったら烈火の如くトビーを叱り嗜めるんだろうし。……あれ、それで問題解決するんじゃない？なんて思ったりしたけど、それじゃあ俺がつまらない。

（何より、あの馬鹿の頼みだしな）

智也がいのりちゃんの事を気に掛け、トビーに探りを入れるよう俺に頼んできた。あいつが他人の女の子を気にするなんて、かなり珍しい。

昔はどうだったか知らないけれど、あいつはああ見えて、彩花ちゃんを失ってから精神的引き籠もりなんだ。そうは見えないかもしれないけれど、こと恋愛に関しては他人の一切を拒絶してやんわりと壁を作る。

雨は上がったと優しい嘘をつく、そんな大馬鹿で、俺にとってあいつは、幸せになるのを見届けなければいけない親友。

そんなあいつがいのりちゃんを少しでも気に掛けた。なら、少し様子を見るのもおもしろ……良い兆候なんじゃないかと思えるわけで。

取りとめもない事を考えている間にトビーが戻ってくる。

「おかえりんさい」

「エセ京都弁止めろ」

ちやんと突っ込んでくれる優しい奴なんです、はい。

「で？俺に何が聞きたい？」

「泣かせた女の数」

「死ね」

おしほりを投げつけられるが、それをキャッチして顔を拭く。

沸点が低いのが偶（たま）に傷なんだよねえ。

「冗談だつて。軽口くらい許してくれよ」

「俺がそういうの嫌いだつて知ってるよな」

「ああ、知ってるよ。嫌いと言いつつ最後まで付き合ってくれるのものな」

「……うぜえ」

まあ、こつやつてずっと弄るのも面倒だし、さつさと聞き出す事を聞いてしまうか。

「聞きたい事は一つだよトビー……あの子、いのりちゃんと一蹴になんでちよつかいを出す？」

智也も俺も、トビーが大した理由もなく他人の恋路を邪魔する奴じゃない事は知ってる。だからこそそ気になる。どうしてトビーがあんな……あんな三流悪役になつてまったのかを！……別に馬鹿にしてはいない。笑うのを堪えてなんかないからな！

俺の視線を真っ直ぐに受けとめ……るかと思いきや、トビーは顔を逸らした。

「……関係ねえだろ」

トビーならそう言う事は予想済み。

「そうだけどさあ、ちよつとは話してみようとか思わないか？俺ってわりとそういういざこざに役に立つ男だつて自負してるんだけど」

「脇で笑つてるだけだろお前は」

「そんな事はないつて。あゝ、なんだか深歩ちゃんの声が聞きたくなって」

「あれは俺が施設にいたときの事だ」

「深歩ちゃん効果パないなツ！」

さつきまでの態度を悔い改め、敬虔なクリスチャンのように素直にトビーは語りだした。

ロリイって名前とかどうだろう。

そうして語られたのは俺が思っていたよりも重く、俺が知っている物語よりも不純で都合の良い……そんな三人の話だった。登場人物は三人、リナ、一蹴、トビー。時折、三人を見ていた一人が物語りに入ってきた。

元々一蹴とトビーは同じ孤児院にいたらしい。ここら辺の事情は知らなかったが、なるほどね。だからあいつは進学はしないわけだ。今の両親は養父母で、迷惑を掛けたくないんだらうな。

それで、二人は近くの病院に入院していたリナちゃんと出会い、よく遊びに行っていた。リナちゃんは難病で外に出れずにいたようで、いつも遊ぶのは病院内。

「リナは外に出て良いような体調じゃなかった。だが、それをあの野郎は……」

その事を一蹴は不憫に思い、なんとかしてやりたかつたんだろう。よくある天使の都合の良い御伽噺を信じて、教会に連れて行けば病気が治ると信じた一蹴。リナちゃんを連れて行こうと彼女を連れて病院を抜け出した。

当時の一蹴の優しさからの行動。責められるものじゃない。その気持ちを否定したら、他の純粋な想いも否定する事になってしまう。

そうしてリナちゃんを連れ出そうとしたが、二人は抜け出す途中、大人に見つかってしまい慌てて逃げた。逃げて……逃げて……逃げたその先の道路で、二人は交通事故に遭った。そして、それが切っ掛けでリナちゃんは……

「なる、ほどね……」

唇を噛み締めて話すトビーの姿が、かつての親友を思い出させる。

交通事故か……あながち俺も無関係を装えない内容だな。

「で、一蹴が原因なのは分かったけど、でもそれは子供の頃の事だろ？ 成長してそんなことをしたのなら問題だが……」

「んな事で恨んじやいねえ。俺だつてリナを助けたかった。だから、あいつのした事自

体を恨んでるわけじゃねえ。問題はその後だ」

きつと、リナちゃんを救えなかった事……その事が今もトビー自身許せないんだろうな。だから深歩ちゃんの事も、甲斐甲斐しく面倒を見るんだろう。

ここで話が終わりなら、俺はトビーを説得してちよつかいを出すのを止めさせられた。でも、話はここで終わらなかつた。トビーの言うように、問題はその後で、そして俺自身もトビーのように怒りに身を任せてしまいたくなりそうで怖かつた。

「事故の後、リナが亡くなった事がショックだったのか、それとも事故の所為なのか知らねえが、あいつはリナの事を覚えていなかつた……まさか今もそうだとは思わなかつたが」

事故の後、リナちゃんの事を忘れ、自分の殻に閉じ籠つた一蹴だったが、そんな彼の前に一人の少女が現れる……リナちゃん、一蹴はつばさちゃんと呼んでいたらしいが、その子の名前を騙る少女が。

「まさか、それが？」

「ああ、偶然同じ病室に入院してたあの女、陵いのりだ」

いつも三人を見ていた少女がこの時、初めて物語りに自分で自分の役を作つて登場した。

ああ、そうか。そういう……事、か……

確かにこれは駄目だ。どうしようもない。つまり、いのりちゃんはやつちまったわけだ。一蹴を助けたという想いかどうかは知らないが、人としてそれはやってはいけない事。

「あの女はな……信。リナを……リナの存在をあのクソ野郎の心から殺しやがったんだ。徹底的にッ」

爪が食い込み、トビーの掌から血が滲む。

「その後、あいつが養子に出てあいつらは離れた。それで終わってれば……けどよお、今あいつ等が再会して、しかもあの野郎はリナを忘れ、リナを騙った女と付き合っているだ？お前……そんなの許せるか？お前だったら許せるのかよ、なあ？」

「トビー……」

そう、だよな。許せないよな。トビーの痛みが俺にはよくわかる。俺だけじゃない、智也だってきつといのりちゃんと一蹴を許さないかもしれない。

俺も智也も忘れなかった。彩花ちゃんを一時たりとも忘れる事はなかった。二度も大切な人を殺すなんて出来るわけがない。そんなの、悪魔の所業だ。

彩花ちゃんと直接接点はないが、偶々事故現場に居合わせ何も出来なかった俺は、事故の後に走ってきた男子が泣き叫ぶ姿を見ているしか出来なかった。俺が早く動いていたら……適切な対処が出来ていたら、智也が優しい嘘をつく事も、彩花ちゃんが死ぬ

事もなかったかもしれない。

だからこそ、俺達はあの日に降り出した雨を忘れないんだ。忘れてはいけない。

それが生きている俺達が出来た唯一の事だから。それなのに……

「だからな、俺は絶対にあいつ等を許さない。何があるうと、リナを忘れさせてなんてやらねえ」

なんて声を掛ければ良いのか……今はもういのりちゃんの味方をする気には到底なれない。トビーの気持ちは間違いじゃない。むしろ正し過ぎて言葉もない。でも、智也ならなんて言う？あいつなら……

沸騰しそうになる頭を、息をつけて冷静にする。唯笑ちゃん、俺、智也……三人にとってトビーの話は心に刺さる。それでも、俺は言わなければいけない。トビーの気持ちやどれだけ正しくて、どれだけ理解出来ても、俺は言うんだ。

「……それじゃ駄目だ」

それが、あいつに雨はいつあがる？と言った俺の責任だから。

「あ？お前……」

「何リナちゃんを盾にして人の恋路ぶち壊そうとしてるんだよ。それはさ、違うだろトビー」

「……テメエ、いつ俺がリナを盾にした？」

「しているんだよ。つまり、アレだろ？リナちゃんの事をしつかり思い出させて、二人にリナちゃんに謝らせればいいだけじゃん……だろ？」

だよな。彼女を理由に人の愛情を壊しちゃいけない。二人が壊すのならまだしも、他人が壊している物じゃない。

俺の言葉に、トビーは鋭い睨みを利かせてきてちよつとびびっちゃいそうなんだけど。ガチだよこいつ。

「それでリナが許すと？は、何も知らねえテメエの言葉じゃ軽くて聞く気にも」

「知ってるよ」

「……何言ってるやがる？」

トビーは知らない。生まれた時から一緒に、ずっと長い時間恋してきた二人と、もう一人の幼馴染の悲しい恋物語を。トビーは知らない。そんな三人を守れたかもしれない、臆病な子供の話を。

「知っているんだけど、さ。それは俺の口からは話せない事なんだよ。だから、そうだな……智也と話してみたらどうだ？」

「あの何も考えてない馬鹿とか？」

「ま、まあその通りなんだけど、とにかく話してみろよ。そうしたら少しは考えが変わるんじゃないかと思うわけだ」

「……あいつと話すとお頭痛くなるんだよ」

「ん、今回は多分あいつが一番トビーの気持ちかわかるし、考えも変わるはずだから」

「どういうことだ？」

「それは智也と話してから、な？」

幼馴染以上、恋人以上、家族以上を失い、今も彼女を愛し続ける智也ならトビーを救えるとは俺は確信している。何より、あいつはトビーにこんな虚しい事して欲しくはないだろう。

「にしても、逆だったな」

智也がトビーに、俺がいのりちゃんと一緒に手を貸してやった方が良かったらしい。

これからあいつがどう行動するのか、想像すると少し笑えた。

だってさ……

「安心しろよトビー。俺とあいつがなんとかしてやるよ」

「……………」

「俺達がハッピーエンドは無理でも、グッドエンドにしてやるって事さ。俺の良い知恵と、あいつの良い馬鹿で、な？」

あいつは、周りが笑顔になるグッドエンドの為に優しい嘘をつく……そういう悲しい

馬鹿だから。

彼の後悔、彼の希望

向日葵が、枯れ落ちる時、俺落ちる。

三上智也心の句……なんて俳句を詠んで俺は現実から眼を背けていた。

いつの日か、こんな日が来るってわかっていた。彼女との関係が始まった日から、ずっと……ただ、一つだけ言いたい。

「……智ちゃん」

「な、なんだ？」

「……………唯笑、どうしたらいいかな？どうしたら……いいの？」

「ふむ、そうだな。とりあえず……」

眼下には、俺に押し倒されている形で放心したように固まっている俺の収入源。頭上には俺たちを見下ろす、生まれてから初めて見る、感情のない目をした唯笑。ちなみに……

「俺の頸動脈に空の注射器をあてんじやねえッ！」

とんでもない凶器を携えながらな！

どうしてこうなってしまったのか、過去が走馬灯のように流れていく。ていうか死に

かけなのかよ俺!?

ま、まあいい。良くねえけど。え、始まりはあの馬鹿と居酒屋に行ったんだったか

……

「と、いうわけだ」

「は〜ん」

ビールを飲みながら、信がトビーから聞いた話を淡々と話してくれた。それで。俺も淡々と返事をしながら聞き流す。正直、気持ちの良い話じゃないってのもあって、俺は序盤から聞く気が失せていた。いや、別に陵がどうしようがどうでもいいし、彼氏が昔のことを忘れていたからって、だから何? って話なんだよなあ。

……今の俺の状況なら誰でもこんな対応になるに違いない。

「おい、自称俺の親友」

「なんだよ、自他共に認める悪友」

「陵と彼氏の話はわかったよ。九割あいつらが悪いし、同情の余地もない。だから、ぶつちやけ二人がどうなるうが俺にとつちやどうでも良い」

今の俺を彩花が見たら、うっざい位なんとかしようよって干渉してくるだろうな。だけどな、そんなこと本気で心底どうでもいいんだよ! なぜならなあ!

「お前ね、いくらなんでも冷たいんじゃないか？ 気になるくせに」

「冷たい？ 俺が？ ははは、何を言ってるんだ……お冷しか飲めない貧乏な俺の前で、美味そうにビールを飲んでいるアホよりも温かいわ！」

もうね、これ見よがしに勝ち誇ったように呑みやがるわけですよ、この自称親友はよお！

「陵なんざ目の前のビールに比べたらスライム以下なんだよ！ わかるよな？ わかるだろうが！」

「折の中の飢えた猛獣みたいだな。心にゆとりを持ってねえのかなあ！」

「俺に奢ろうってゆとりを財布に持ってねえのかなあ！」

「貴重な情報を入手してきたんだ。謝罪されるならいざ知らず、文句を言われる筋合いはないなあ」

「その髪に焼き鳥挿すぞごらあ！」

ねぎま、つくね、ぼんじり、砂肝を指に挟んで信に襲い掛かる。

「ば、お前それタレじゃねえか！ 止めろ！」

「ふはははは！ ぎつとぎつとにされたくなければ奢れえ〜！」

「ふつぎけんな！ 誰が奢ってやるもんか！ あ、おいマジで刺すのかよ！ やめ、皮ははんそ……やめろお——！！！」

さあ、信の心が折れるまであと何本かなあ？なんて悪魔の所業を信は四本まで耐えたのだった。

「う、うう……汚されちゃったよお」

「ぶはあく！仕事を終えた後のビールはやっぱ最高だな！ほら、お前も遠慮しないで呑めよ」

「苦汁を呑ませたい」

「めそめそと女々しいやつめ」

「俺がどれだけこの髪を大事にしていると思っているんだ!？」

「俺と同じくらい?」

「ポジティブ過ぎるぞ澄空の双壁」

「黙れ片割れ」

とまあ、ジャブの応酬はこのくらいにしておこう。

「ジャブどころじゃねえだろ」

「おっと、口に出ていたか。それで、俺にどうしろって?」

「真人間になれ」

「世間に自慢できるほどの真人間だが?」

「イナケンの冷笑が目に浮かぶな、その台詞」

「一々うるさい奴め。いいからお前の考えを聞かせろよ」

信の話を聞いた俺は、そこそこに不機嫌で、そこそこに冷静でもあった。簡単に言えば、心が冷えていただけだ。

「ん、とりあえずさ、智也はトビーと話をしてやってくれないか？」

「俺が？何を話せつていうんだよ？」

「そこはお前に任せるよ。ただ、今のトビーは見ていて辛いんだ。リナちゃんの為つて言葉で彼女を傷つけて、それを無理に見ないようにしているみたいだな」

「……まるで、高校時代の俺みたいにつてか」

信の遣り切れない表情だけで、俺は信がトビーに誰を重ねて見ているのかすぐにわかってしまう。厄介なものだよな、限りなく親しい顔見知りつてのはさ。些細な表情一つで心が見えてしまうんだから。

核心を突かれた信は、苦虫を嘔み潰したようにして黙った。

「……ふう、まあ時間があればトビーと話してみるさ」

「悪いな」

その一言の中には重い謝罪が隠れている。トビーの問題に向き合うということは、とどのつまり俺自身の愛しい想い出を曝け出すということ。だからこそ、信は本気で俺へと謝罪している。

……馬鹿な奴だ。そんならい、こいつの役に立つならなんでもないのに。

「いいさ。お前もそんなくらいで謝るなよ。言っただろ……もう俺達は他人じゃないって」

俺が高校三年の秋……あの時に俺達の関係は変わった。彩花と唯笑と俺。そこにもう一人加わった大切な一日。あの日から、俺達は三人から四人になれたのだから。

「智也……」

「あゝ、時化した顔してんじやねえよ。それより、トビーは何とかなるが、あの小娘とそのクソガキはそれじゃ駄目だよなあ？」

とびつきりの悪い顔で笑うと、信は俺の意図が通じたのか同じように笑う。

「ま、だよなあ？二人は、ある意味俺等に喧嘩売ったわけだし？」

「バタフライ効果つてやつだわなあ。自分の行いで知らないところに影響を出すつて

……さあ、信」

「おう、智也」

『あの二人で遊ぼうか？』

澄空の双壁は不適に笑いながら生中を注文した。

「あ、二杯目は自腹な」

「……世知辛え〜」

次の日、労基法違反のバイトを講義の後に控え、俺は重い脚を無理やり引き摺って家路に着いた。母親は晩飯の食材を買いに出ているらしく、家には誰もいなかった。

「ふむ、俺の栄養製造マツスイ〜ンが不在か」

戸棚や冷蔵庫を開けるが、ちよつとした食材があるだけで何も無い。夕べの晩飯の残りもないか。

どうしようかと暫し熟考し、普段は思ってもやらないが自分で何か作るかと思に至る。ぶっちゃけ、客に何も出さないのは大人としてどうかという、非常に常識的な思考からだった。小腹も空いたしな。

「ふふふ、小夜美さんに教わった俺の腕をとくと披露してくれよう」

いつもはろくでもない事しか持ち込まないお姉たまに、今だけは感謝しよう。感謝したことに感謝するが良い。

「さ〜て、何を作つてやりますかね」

鼻歌を唄いながら、存分に俺は自分の才能を發揮したのだった。

どう、しよう。

いつもよりも重く感じる鞆をぶら下げて、私はとぼとぼと三上さんの家へと向かいながら溜息を吐く。

あの日から、一蹴という時以外はずっと車内での三上さんのあの表情が離れないまま、それが頭に浮かぶ度に気持ちが悪く、どんよりと重くなる。

会ったらなんて言えはいいのかな？この間はごめんささい？でも、いきなり謝つても三上さんには何の事か伝わらないかもしれない。それに、どちらかと言えば三上さんのほうが気にしているかもしれないし。変な人だけど、人の心を気遣う人でもあるわけだし。じゃなければ、公園での一件で私を励ましてなんてくれなかつただろう。

「優しい人……なんだよね」

そんな事、初めからわかっているからこそ、自分がしたことが許せなくて……

「ああ……どうしよう……」

なんて頭を抱え、こうでもないそうでもないなんてやっていると、不毛な時間はあつという間で、いつの間にか三上さん宅に着いてしまっていた。……心の準備も出来ていないのに。早いよ。早過ぎるよ。

「そうだ、今日はインフルエンザに掛かった事にしよう」

無理だよ。まだ流行ってないもん。なんて自分で心の中で突っ込む。

言い訳が下手だなあ、私。

「嘘は得意なのに、ね」

「百面相してどうしたのお〜？」

「ひゃいッ!？」

間近で声を掛けられて飛び上がったしまいそうだった。

横を見ると、両手に買い物袋を提げた姿がやけに絵になっている三上さんのお母さんが、ニヤニヤしながら私を見ていた。

しまった、タイムアップに……

「なんかあ、悩める乙女って感じでもとっても可愛かったあ〜ん。思わず写メっちゃいました」

「今すぐ消して下さい!」

「え〜、もう待ち受けにしちゃったも〜ん」

「うわあ〜! やっぱりこの人は三上さんの母親だよ〜! 行動がとてつもなく似ているもん!」

頭痛がしそうな額に手を当て、落ち着こうと深呼吸。と、とにかく心の準備だけでも

……

「智也〜! 美少女がご来店したわよ〜!」

「……ああ、なんて行動が早いのかなあ」

わざと空気を読んでいないこの感じは、紛れもなくあの人の母親だと痛感する。

どう謝ればいいのか、真っ白になりそうな頭で考えようとしていると、上からやたら能天気な返事が返ってきた。

「おー！ようやく来たか！早く上に来いや小娘〜！」

あれ？気になっているのは私だけだったのかな？なんて思ってしまうような声に拍子抜けしてしまう。

「まあ！愛しの彼女の名前くらいちゃんと呼びなさいっていつも言ってるでしょー！」

「あく、はいはい。早く来いよマタタビ〜！」

「陵ですー！」

語感でしか覚えていないですよ絶対！？とんでもない親子の応酬。お父さんもお母さんも、なぜよりによつて三上さんに私の面倒を頼んだの？違う意味で面倒だよ。

「それじゃ、夕飯までお勉強頑張つてねえ〜。大人の人間学とかね？」

「あく、はい。頑張ります」

まともに受け止めていたら一蹴の前でやつれた顔を見せてしましそうで、おぎなりに返事をして二階へと上がらせてもらった。

さっきので疲れてしまっていた私は、どう謝ればいだろうなんて悩んでいたことも

忘れて、失礼しますと部屋のドアを開けていた。正直、三上さんの事で気にしても杞憂になると思った部分もある。

そうしてドアを開けると、なにやらテーブルの前で行儀良く座って、やたら爽やかな笑顔を浮かべている、見も知らない三上さんがいた。

「いらつしやい、疲れただろう?」

「……あの、何があつたんですか?」

謝罪から始まるはずの第一声は、疑惑の第一声へと変わっていた。

なにか変わった事はないかと思ひ、部屋を見渡そうと……しなくても、すぐに異変に気がついてしまった。……今この瞬間盲目になつてしまいたい。

「ははは、何にもないさ。それよりほら、学校に行つて疲れたらう?小腹が減つたんじやないか?」

「いえ全然お構いなく」

目の前のテーブルには、三つのお皿の上に三品ほど形容しがたい物体が乗っている。

「遠慮するな。実はさ、この間俺さ、君の事怖がらせてしまったらう?だからそのお詫びにちよつと料理をご馳走しようかと思つてね」

「りよう、り?これがですか?」

小石のようにごつごつと歯が欠けてしまいそうな何かに、ぐちゃぐちゃの茶色のよう

な黄色のようなスライムに、内臓がはみ出た魚の遺体。これが？どこの民族の料理なのかな？

「あの、もしかして怒ってますか？」

「この間の失礼な態度にご立腹で、その報復にこんな拷問を？」

「何を馬鹿な事を言っているんだい？これは俺が真心を込めて丹精に作った最高傑作だよ」

「命を粗末にしているようにしか見えませんよ!？」

「いや、まあ見た目はそう見えるかもしれない。でもな？強面でも心が清い人だっているじゃないか」

「つまり？」

「つまりそういうことだよ」

とか言いながら目を逸らされる。それだけで三上さんの思考がなんとなく読めてしまった。たった数回会っただけなのにわかってしまうなんて……とても単純な人だなあ。

「おい、なんで憐れみの目で見る？」

「いえ、なんとなく」

多分、自分が食べるつもりで作ったのだけれど、上手くいかなかった。二品目、三品

目と挑戦した三上さんだけれど、結局上手くいかずに断念。そこで、残飯処理は誰かいないかと考え、そういうえば私が来るじやないかと最低な人選をしてみよう。しかし、ただ食べるといっても食べるわけがないので、この前の事を盾に食べさせよう……と、こんなところじやないかな？ 割と当たっているはず。

「あの、本当に私は大丈夫なので、遠慮なさらず食事をどうぞ」

「……いやいや、これは君の為に作った料理だよ？ 僕が食べるなんて」

「こつちを見ながら話して下さい」

「ごちやごちやうるせえ！ いいから食べよ！ 無残に散った命を弔おうとは思わんのか
！」

「殺害したのは三上さんじやないですか！ というか本性出てますけど!？」

「うっせえ！ 年功序列という言葉を知らんのか!？」

「なら三上さんが最初に食べて下さい！ それが年功序列です!！」

「あ、間違えた。小娘ファーストだよ馬鹿が!！」

「間違えたの自分じやないですか！ 本当に大学生なんですか!！」

「ぷつちくん。あ、今俺を馬鹿にしたな？ 年上で先生の俺を馬鹿にしたな貴様?！」

「三上さんは命を馬鹿にしています。なんですかこれは?！」

「見てわかるのか？ アホだな」

「一般家庭ではまずお目に掛かれない料理です」

「ふん。常識の檻から抜け出せない小娘に教えてやろう。これはな、俺がアレンジした一般家庭の料理で、から揚げ、オムライス、刺身だ」

眩暈がした。だって、本気で言ってるもの絶対。

刺身？確かに魚を刺殺したのでしょうか。埋葬されていないですが。オムライス？初級モンスターがやたら異臭を漂わせていますけど。から揚げだけはなんとなくわかる。人を殺せる硬度なのは間違いないけれど。

「一ついいですか？」

「なんだ？」

「三上さんって普段料理とかしませんよね？」

「舐めるな。さしすせそくらい知ってる。元ビュリーホー女子大生に教わったからな」

「ビュリーホーなんたらはわかりませんが、じゃあ言ってみてください」

「ふん、とことん馬鹿にするつもりらしいな？だが、俺にその勝負を」

「いいから言ってみてください」

ふんともう一度鼻を鳴らして、自信満々に、声高らかに三上さんは答えた。

「坂道を、しみじみ歩く、スパイダー、背中挟み開け、子供うじゃうじゃ」

想像して吐き気を催した。

「ふう、どうだ」

良い笑顔に卒倒しそうです。

「どうだって、短歌じゃないですかそれ！」

「あれ？スパイダーじゃなくて、スピ○バーグだっけ？」

「世界的に怒られてしまえば良いです。というか、それ三上さんのお笑い五大元素か何かですか？」

「うはは、何それちよーうけるー」

「……怒りますよ？」

「もう怒ってるじゃねえか」

「当たり前です！」

ヤバイ。本当に頭痛がしてきた。ストレスで胃までおかしくなりそう。帰ったら胃薬を飲もう。

「私、食材を無駄にするなんて許せないんです。お料理好きだからっていうのもありませんが、私達は他の生き物の命を貰っているんですよ？それなのに、こんな扱いをされて……可哀想とか思わないんですか？」

「あ、あれ？ガチで年下に説教されてる俺？」

「何ですか？」

軽く言うとうぶぎけて流されそうで、私は自分でもびっくりするくらい厳しい声を出していた。子供に説教しているみたいだなあ。

私の本気で怒っている事がわかったのか、三上さんは少し俯き、一言だけ小さく悪かったよと呟いた。

「……わかったなら良いんです」

「そうだよな。命を無駄にしてしまったなんて、最低だよな……」

あ、れ？本気で落ち込んで。そ、そんなにきつかったかな私？でも、間違った事は言っていないし……だけど年上の人にこんな生意気を言ってしまったって良かったのかな？

「あ、あの……そこまで落ち込まれると私……」

「いや、良いんだ。俺が悪かったしな。ほんと、無駄にしてしまって……俺には料理をする資格なんてないよな」

「で、ですからあまり落ち込まれると、私「てわけで、無駄にした俺に食する資格もないわけで」はい？」

箸でから揚げを持ち、私に悪漢のように三上さんが迫ってくる。というか凄く楽しそうなのはなんでですか!?

「いやあ、俺も命を無駄にするのはどうかと思つてさあ。この苦しみを分かち合お

うと陵を待つてたんだよ」

「なっ!?!」

なんて事!?! 三上さんは私が言った事は初めから百も承知で、どうにかしようとして自分以外の犠牲者として私を待つていた!?!

じりじり迫ってくる三上さんから距離を取ろうと下がり続け、背中にひんやりとした壁が当たると。絶体絶命!?!

「さあ、仲良く地獄に行こうぜ? 先生と生徒の禁断の関係だ」

「い、いやあー!?!」

「うおらあ! ジタバタすんじゃねえ小娘!」

客観的に見れば、幼い男の子同士がふざけてじゃれ合っているように見えるかもしれないけれど、良く見れば婦女暴行に近い事が行われていた。

逃げる私の服を引っ張り、なんとしてもから揚げを食べさせようとしてくる。

……一つ食べて気絶でもしたなら、意識のない私の口にありつたけ突っ込むに違いない。それだけは絶対に嫌だ!

必死に追う三上さんと、決死で抵抗する私。大きくなった体でそんな事をしていれば

……

「あっ」

「へっ?」

バランスを崩して倒れるのは自明の理なわけで。幸いだったのは、倒れた先がベッドの上だった事と、三上さんが私の後頭部を庇うように腕を回してくれた事……最悪なのは、三上さんはそれでもから揚げを手放していなかった事。

「もう、離さねえよ……」

台詞だけ聞くとロマンチックなのに。というか、そういう言葉は一蹴の口から聴いてみたいんだけどなあ。こんな暴漢紛いの人じゃなくて。

「えくと、れ、冷静に話し合いませんか?」

「無理だ。もう、抑えられそうにない」

「大丈夫です。邪悪な笑みは全然抑えられていません」

「責任、取ってくれるよな?」

「因果応報ってわかりますか?」

「こんなに熱くさせやがって……」

三上さんの額から私の頬へと一滴の汗が落ちてきた。こんなに下らない汗がこの世にあるなんて知らなかった。

「そ、それ以上（から揚げを）近づけたら大声を上げますよ!」

「いいぜ? 今、この部屋には俺とお前二人つきりなんだからな。好きなだけ鳴けよ」

「……………」

「………黙るなよ」

「いえ、普通に考えて今の会話はまずいのではないかと思ひまして」

「う、うむ。まあ、聞き様によつては心が汚れた奴が聞けば、まずい意味に捉えられるかもしれない」

自分の心は綺麗だとしても？

「そうですね？ 誰かに見られたりしたら大変な事になつてしまいます。なので、一旦離れ「じゃあ、誰か来る暇も与えないで食わせてやろう」て、なんかわかつてましたあ、この結果あ」

いつでもトツプギアで、エンストするか衝突するまで止まらない。それが三上智也さんなのです！……………バッテリーが上がってくれないかなあ。

「はい、あ〜ん」

お父さんお母さん、次に会えるのは病院のベッドの上だね。ごめんなさい。でも、娘をこんな非常識が服を着て歩いている人の所に預けた二人も悪いんだよ？ 腕の良い弁護士を探そうね。

一蹴……………ごめん、ね？ 私、こんな人に汚されちゃうみたい。抵抗してもね、駄目だったの。どうしてかな、こんな時に一蹴との楽しかった記憶が次々蘇るのは。変だね？

変、だよね……でも、どんなに汚されてもね、私は一蹴が……

「ふははははは！これで終わりじゃー……！」

大好きだよ。

「智ちゃん！唯笑ね……唯、笑……ねえ？」

で、今に至ると。

なるほど……思い返してはみたが、俺が悪かった事なんて一つもないじゃないか。食べ物で粗末にしないように画策した末の行動なわけで、やましい事は何もないと胸を張って言える。

「どの口で言うんですか」

「智ちゃんサイテーだよ」

「ですよねえ」

なんとか狂気と凶器から抜け出すことは出来たが、その代わりに俺は正座させられ、対面には疲れきった顔の陵と、液体窒素で凍らせたかのように覚めた目をした能天気娘。俺、そんなに悪いことしてないよ？

「それで、智ちゃん？」

「なんでせうか」

「あのね、ほんとなら最初に聞きたかったんだけどね」

「だから何だよ」

「敵しい目を保つたまま、一切隣を見ずに人差し指を指して乗り出しながら言った。

「この子は誰かな!?!」

うわあ、無駄に溜めたなあ。誰にそんな芸風を教わったんでしょね、この子つたら。

指を突きつけられた瞬間の陵の顔を是非写メりたかった。小動物のようにビクツとして怯える姿がやたら滑稽だったし。

「誰って、お前母さんに聞いてないのか?」

「全然」

「はあ? んなわけないだろ?」

「ほんとだもん」

「ちよつと待て。じゃあ、お前はなんて言われて俺の部屋に来た?」

普通の母親ならば先客がいれば、誰々がいるからとか説明するだろう。ていうか、仕事の中にいきなり入ってこられても迷惑だしさあ。真面目に仕事をしていたかどうかは別として。

「えつとね……おばさんに智ちゃんいますかかって聞いたらね？」

『智也なら自分の部屋で友達と遊んでるわよお。唯笑ちゃんも混ざってきたらしく』
「て言うからね、信くんと遊んでるのかなって思ったの」

あ・の・お・や~~~~!!

あの人の思考回路が手に取るようにわかり、俺は加賀ばりの溜息をして額に手を置いた。

「なのに、知らない女の子を智ちゃんが押し倒してて……つい注射器を当てちゃったの」

「お前のつい殺害衝動を抑えられなくなるのか！アホたれ！」

「唯笑は悪くないもん！浮気する智ちゃんが悪いんだもん！」

「人聞きの悪いことをでかい声で……ちよつと、待て」

呆気に取りられている金蔓と、今にも食って掛かってきそうな唯笑に、静かにするよう
に人差し指を口に当てて黙らせつつ、部屋のドアを躊躇なく開け放つ。すると、コツプ
をドアに当てていたらしい年齢にふさわしい格好の母親がそこにはいた。

「何、していやがる？」

笑顔を引くつかせているであろう俺を、母親は顔色一つ変えず見上げ、スツと立ち上
がると……

「……智也！あなた最低ね！」

「最低なのはあんただろうが！」

逆切れでこの場を切り抜けようとしやがった！

「最低？何を言ってるのかしらあ？私はただあゝ、昼ドラのような修羅場が見たかっただけだも〜ん」

「だも〜んじゃねえよ！実の息子に何させようとしてんだ！」

「実の息子だからこそじゃない！ちなみに、彩花ちゃんと唯笑ちゃんの智也争奪戦ももちろん記録しているわあゝ」

眩暈がした。それどころか血管が詰まって破裂しそうだ。

「まあ、ちよつとした復讐だからいいじゃない」

「なにをわけのわからんことを」

「戦場跡のような台所」

三上董、料理に一切の妥協を許さない女。俺が拵えたあの紛争地帯を見て立ち尽くす母の姿。うむ、難なく想像出来るな。悪鬼のような顔をしていたことだろう。だが、それにしたってこの仕打ちはないだろう？ほんのちよつとI Hをアイ全治三日にしてしまっただけなのに。

「修理費はちゃんとお給料から引いておくから心配しないでね？」

「ユニオンに訴えるぞおい」

大体だな、修理費なんて請求しなくてもちやんと俺は罰を受けるさ。

「じゃあ、頑張つて修羅場つて〜」

「ははは、何を言つてるんだ鬼母（きぼ）よ」

後ろからそつと俺の肩に手が置かれる。振り向かなくてもわかるさ、温度のない笑顔をした唯笑が幽鬼のように立っているんだろ？だからつまり、これから始まるのはな？

「今から行われるのは修羅場じゃねえ、冤罪を物ともしない厳しい取調べだろ？」

無言で体を引つ張られ、ドアの閉まる音が無常に響いた。

指で座るように促され、渋々俺は席に着いた。対面には氷の笑顔を湛えた唯笑と、呆れて物も言えない陵。これ詰んだな。

「智ちゃん、まず最初に聞きたいことがあるの。この子が誰か、教えてくれるかな？」

笑顔だけじゃなく声にまで温度がない。誰だよ、こいつにこんな怖い一面を植えつけた幼馴染はよ。

とりあえず、だ。ここは俺の小粋なジョークで場を和ませようじゃないか。そうすれば唯笑だつていつも通りの、アホな笑顔を見せてくれるはずだ。

「あ、ああ。その子はまたた「陵です」……いのりつて名前のクソ生意気な小娘だよチクシヨウ」

俺の小粋なジョークが不発に終わった。ていうか早いよ！喰い気味どころか完璧に

喰ってただろうが！空気読めよ！そういうおいしい突っ込みは今求めてねえんだよ！唯笑の好きな猫ネタで場を和ませようとしたつてのに、こいつ本気で俺の事嫌いだよ！「そうなんだ。陵いのりちゃんね。初めましてだね。唯笑はね、今坂唯笑っていうんだ。智ちゃんとはもう付き合い始めて結構長いんだよ」

「おま、その言い方じゃあ……」

「え!?三上さんに恋人がいらしたんですか!？」

「こういう誤解をされ……ん?今俺の事を馬鹿にしなかつたか貴様?」

「いえ全然」

しれつと答えられ、俺の聞き間違いかと首を捻る。そうか、あまり人を疑うのは良くないよな、うん。

「このアホ娘、紛らわしい言い方をするな。唯笑とはほぼ産まれた時からの付き合いだな。恋人じゃあない。こんなアホが俺様と釣り合うとでも?」

「三上さんが釣り合う人なんているんですか?」

「うん、やっぱ聞き間違いじゃないな。お前表に出ろ。公衆の面前でお尻ペンペンしてやるから表出ろ」

人生の先輩として、こういう子供の長い鼻は削ぎ落としてやらねばならん。わりと本気で。

「へえ、仲良いんだね二人とも」

「どこをどう見たらそうなる」

「いのりちゃんの上に覆い被さっている智ちゃんを見たらこうなるもん」

「その程度でか！なら俺は信とどれだけ仲が良いんだって話になるだろうが！」

「男の子同士は良いんだよ？全世界女子の常識だもん」

「気持ち悪い常識だな。まあとにかくだ、唯笑よ、お前は誤解しているんだ。俺と陵は仲良くもなければ、お互いに特に興味もない」

「あつたらもう二度と訪ねないです」

「ちよつと黙つてようか小娘。俺の堪忍袋がいくつあつても足らなくなるから」

いつまでも小さいことで怒っているなんて、器の小さなガキめ。少しは寛容な俺を見習つて欲しいものだ。

「いいか、唯笑。母さんが説明しなかつただろうから、俺が一から説明してやる。実はだな」

俺が陵の面倒を見ることになった経緯をあるがままに話す。こいつが彼氏持ちのスイーツだと知れば唯笑もきつとわかつてくれるに違いない。

こんこんと子供に言い聞かせるように丁寧の説明していくと、唯笑の顔もどんどんにこやかに……

「そつかあく、そういう事だったんだね」

「そうなんだよ。まったく迷惑な話しだよなあ」

「それで、その話が覆い被さっていたのと同じような関係があるのかな？」

ならなかった。

「三上さん、凄く無様です」

「うるさい。てかいつまで怒ってるんだ小娘」

「あれで怒らない女子がいたら、私はその人とは友達にはなれません」

「いつまでも女々しいやつめ」

「またいちやいちやしてる」

「お前の目は腐っているのか!? 渋○先生の義眼のがお前の目より絶対見えてるぞー」

くそう、仕方ない。ここは恥を忍んで真相を打ち明けるしかないか。まあ、唯笑や信

なら大した手間は要らないんだがな。だって、たった一言で済むのだから。

「なんだ、まあ。覆い被さっていた理由だがな、お前ならテーブルの上を見ればわかるだ

ろ? つまりはそういうことだ」

凄惨という表現がこんなに似合う料理もないであろう三品を両手を広げて示す。

「あの、それじゃあわからないんじゃないやあ……」

「なんだあく。いつもの智ちゃんのとんでも行動の所為だったんだねえ」

「通じたんですか!？」

甘い小娘。前後不覚になっていなければ、こいつはとつくに気づいていたんだ。ただ、いつもが保てない理由がどうしようもなくそこにあっただけなのだから。

「うん。アレでしょ？ 智ちゃん料理に失敗して、捨てるのは勿体無いから自分以外の人に無理矢理にでも処理させようとしたんだよね」

「イグザクトリイ」

「どうしてこれだけでわかるのか不思議です」

「えへへ、でもさあ智ちゃん？」

「なんだ？」

「豚の角煮ときんぴらごぼうは美味しく作れるのに、どうして他の料理は駄目なんだろうね」

「自分でもそれが不思議でならん」

「逆に凄いですねそれ!？」

陵が目を剥く勢いで驚いているが、高校の頃に小夜美さんにまともに教わったのがその二品だけだったからな。それ以外にもあの人と色々作ったが、全部ネタパン関係だった。ふむ、そう考えるとすべての元凶はあの自称ビュリホーOLに帰結するな。後で静流さんと二人で抗議の電話を入れてやろう。素知らぬ悪質クレマーを装ってな。

「というわけだ、俺にやましい事は何一つないわけだ」

「やらしいことはあるかもだけどね」

「ははは、誰がそんなアダルトな突込みを教えたく？」

唯笑の両頬を摘んでぷいぷいしてやる。

「いひやいひやい〜！おひえたほはほもひゃんらも〜ん！」

「誰がホモだコラー！」

「ひょんんびゃほとひつてはいよお〜！」

ふははははは！涙目になっても止めてやらんぞ！こうなりや、このままこいつも処理班のメンバーに加えてやろうと、右手は摘んだまま左手で魚の遺体を摘む。ちなみに、素材の味を最大限に生かす為には醤油も何もつけていない。職人のこだわりだ。

「ほ、ほもひゃん？ほ、ほちつほう」

「何を言っているのかわからんなあ？日本語を喋れよ、にんねこ民族」

がくがくと震える唯笑の可愛らしい小さな口を抉じ開けるように、自称刺身を捻じ込んでいく。

「く、くしゃいよお。こんなの、ひどいよお〜」

「はん、お前が見ちゃいけないものを見たのが運の尽きだ。もう逃がさないからな」

「……絶対わざと誤解される台詞を選んでますよね？」

まあな。ぶつちやけると、この悪漢ごっこがちよつと楽しくなってきた。

臭いよおくと泣きながら、唯笑は体の力が抜けたように、両腕をだらんと垂らしてされるがままになつてゐる。……カーテン閉めようかな？ なんか罪悪感がそこはかとな……ま、いつか。彩花も俺と一緒に笑つて見守つてるさ。ポジティブつて良い言葉だよな、うん。

視界の端で、そつとドアに向かつて動く小娘が見えたので、素早く小娘の顔すれすれに箸を投げた。端だけにね。

「ひうツ!？」

「逃がすかよ、生贄」

「なんの儀式ですか!？」

「サくバトサくバト♪」

「わ、私はまだ死ねません！一蹴ともう一度会うまでは!」

「ふつ、誰も俺からは逃げられん。さあ、三人で仲良くおねんねしようぜ?」

ぐふふと足を震わせる陵に近づく。一蓮托生、人類皆兄弟。ラブアンドデクス。

「い、良いんですか? 私には切り札があるんですよ」

その最後の希望に縋るかのような声に、俺は足を止めてしまった。

動きが止まった俺に、攻守逆転したかのように不敵に笑み、陵は鞆から一冊の本を取

り出した。

「ふっ、何かと思えば漫画本なんかで……?」

「ふふ、ただの漫画本だと思いですか?」

陵が持つ本に俺の目が釘付けになる。なぜなら、まさに俺の急所となる一冊が、その手の中にあるのだから。

「き、貴様それをどこで……いや、違うな。お前だったんだな?」

失くした後、すぐに公園に戻って探してもなかったわけだ。まさか、こいつが持ち去っていたとはな。盲点だったぜ。

「ええ、そうです。本当ならもつと和やかに返したかったです、致し方ありません。

この本と私の命、取引といきませんか?」

「クツ、小賢しいことを! 窃盗だぞ!」

「どの口が言うんですか!」

強い光が瞳に宿っている。なるほど、つまりは……

「しょうがない。その本とギャグは引き換えに出来ないからな。お前は下で待つてろ」

「へ?と、智ちゃん?」

「ありがとうございます」

「い、いのりちゃん?ま、待つて、唯笑も……」

亡者が釈迦に手を伸ばすが如く、唯笑は陵に手を伸ばす。が、その手を俺は掴んで引き寄せる。

「おいおい、生贄がこれ以上減るのは許さんぞ」

「すみません、今坂さん。私には生きなきやいけない理由があるんです」

「ゆ、唯笑にもあるもん！」

「ほう、言ってみろ」

「……智ちゃんの奇行を治すために看護師にならないと」

「釈明終了。じゃ、すぐに済ますから待っててくれ」

「はい」

「なんでだよぉくくくく!?!」

売られて行く子牛を見るように、遣る瀬無い視線を向けながら陵が部屋を出て行く。中々に策士だな。良い性格をした女性になるだろう。どうかその強かな性格を失くさないで成長して欲しいものだ。

「智ちゃん、お願いだよお。助けて」

涙目の上目遣い。これが唯笑以外にやられていたら、俺は踏み止まるのかもしれないが、残念だったな。ガキの頃からずっと一緒なんだ、もうお前のその攻撃にはとつくに免疫がついているのさ。

「安心しろ、唯笑」

「智ちゃん」

「俺も一緒に死んでやるから」

「智ちゃんみたいにゲテモノに免疫なんてないよ〜〜〜!!」

その後、俺の部屋からは悲鳴にならない悲鳴がしばらく響き渡ったのだった。ていうか、お前もきゅーちゃんとかわけわからんもん作って食わせた事があるだろうが。その時の仕返しと考えると考えれば罪悪感なんてあるわけもなかった。

憔悴しきった唯笑をベッドに寝かせながら、陵と素知らぬ振りで今日の勉強を終えて、この間と同じように俺は陵を家まで送っていた。

家を出る時、唯笑が何かを言いたげに俺を見ていたが、帰ってから話すとも目で告げて出てきた。ま、この小娘を見れば当然そうなるわな。元から知っていた信はともかくとして。どうして、母さんも唯笑もそんなに気にするかね。俺よりも、二人の心のが心配だったの。

「本当に仲良いんですね」

特に喋ることもなく無言だった陵が、思いついたかのように話し出す。

「そりゃあ、ほぼ生まれた時から一緒だからな。あいつはもう俺の家族なんだよ」

「でも、血は繋がってませんよね」

「繋がってたら、あいつは俺に似てもっと利口になってただろうなあ」

「……どうして付き合わないんですか？」

俺の軽口を聞き流して、突っ込んだことを聞いてくる。

なるほどね、こういうところは子供だな。自分が気になった事を、距離感などをすっ飛ばして聞いてくる。あまり重いことじゃないと思っっているんだろうが……まあ、その通りだ。胃にこっつり重い話でもなんでもない。

「今坂さんを見ていて思ったんです。気を悪くさせてしまったならすみません」

「いや、別にいいさ。隠しているわけじゃないしな、俺もあいつも」

俺と唯笑の関係は、俺の周りにいる奴等なら全員が知っていることだ。何も問題ない。

「正直な、あいつに告白されたこともあるんだ。でも俺はそれを断った」

「どうしてですか？あんなに素敵な人なのに」

そりやそうだろう。なんてったって、俺と彩花の自慢の妹なんだ。世界一可愛いに決まってる。俺にとつて、最も幸せになって欲しいやつだ。

「だからだよ」

「え？」

彩花と俺と唯笑。三人でいた日々が今でも瞼の裏に焼き付いて離れない。

彩花と付き合い始めて少ししてからだったか、彩花がふと漏らしたことがある。自分の背中を押してくれたのは唯笑だった。彩花は涙を零さないように、上を向いて微笑みながら、唯笑の純粋な気持ちにありがとうと感謝していた。

そう、唯笑は俺と彩花が一緒にいることを心から望んでくれた。自分の気持ちを押し殺しても後悔しないほどに。俺達三人の中で一番強いのは間違いなく唯笑で、そんなあいつを俺と彩花は誇りに思うと同時に、何よりも大事な家族だと感じていた。その想いは今も、これからも変わらない。世界で一番大切な家族は唯笑だと、俺は笑顔で宣言出来る。

まあ、だからこそあいつに陵の事をどう説明しようか悩んでいるんだけどな。

陵が胸に秘めていることを話すわけにもいかないが、隠し事をするのも気が引ける。かといって、話したとしてあいつがどんな気持ちになるか、手に取るようにわかってしまふ。

誰よりも優しいからな。怒るでもなく、ただ静かに泣いてしまふだろう。リナちゃんだけじゃない、陵の奥にある気持ちまでをも慮つて。

「まあ、陵にはわからないさ。まだまだ子供だからな」

からかうように笑つて言うと、俺の態度がお気に召さなかったのか、少しだけ膨れた

ようにしてそっぽを向いた。

「自分ではそこまで子供じやないと思ってます」

「いやいや、めっちゃ子供だろ」

「例えばどこがですか？」

「まさに今。自分で子供じやないって言うのは子供の証だ」

「……意外にまともな事を言うんですね」

「失敬な」

「じゃあ、三上さんはもつと子供ですね。人の嫌がる事を嬉々としてするんですから」

仕返しとばかりに言い返してくる。愚かな小娘め。

「まあな。俺はいつまでも少年のような瞳をした純粋な男でありたいからな」

「あれが少年の行いなら、三上さんの少年像は腐ってます」

俺が腐ってるなら信も腐ってるな。陵が俺がどんな高校時代を過ごしていたか知ったら、一体どんな反応をするだろう？ 想像すると、自然と笑いが込み上げてくる。

「俺が腐ってようが陵が子供ってのは変わらないな」

「どうしてですか？」

それはな、お前もお前の彼氏も、自分がした事の重さをわからないまま、受け止めることも出来ていないからだ……なんて、言えるわけもなく。

「さあ、なんでだろうな？」

と、適当に返事をするこゝしか出来なかつた。

これ以上考えると、まだ子供だった時の自分を思い出しそうに嫌だつた。

もう、あの頃の俺じゃない。今ならば、彩花のおじさんとおばさんと笑つて話せる自信がある。誰よりも深い絶望の中にいる二人に、もう二度とどうしようもなく辛い顔なんてさせやしない。……あの時のように、大人な気の使い方なんてさせやしない。

子供だった自分を少しでも思い出してしまい、ハンドルを握る手に少し力が入つてしまった。

「三上さん？」

「ん？ どうかしたか？」

表情には出していないなかつたつもりだったが、陵がどこか気遣わしげに俺を見てきた。

それに、俺はなんでもない風に応える。

「……いえ、なんでもありません」

「そつか。それよりお前に要求したいことがあるんだが」

「あ、本ですね」

うわゝ、また悪漢ごっこしようと思つたのに、出鼻を躊躇なく挫かれたよ。

陵の家に着き、玄関前に停めて本を受け取る。

「陵よ、少しは俺の遊びに付き合おうとは思わんのか？ 社会に出たら縦社会だからな？ 上司の我侷に少しは付き合わないといけないのが暗黙の」

「そうですね、気をつけます。三上さん以外には」

マジで良い度胸してんなこの小娘。ここは一つ、大人らしい注意でもしておこうかね。もしくは未来予知とも言う。

「ふっふっふっ、あんまり俺を舐めてるとその内痛い目を見るぞ。そうだな……二週間以内つてとこかな」

「はい？」

可愛らしく首を傾げる陵に満足し、俺は車を走らせる。

「じゃ、未来にご注意を〜」

窓から手をひらひらさせて走り去りながら、後ろから聞こえた声にはくそ笑んだ。

「な、何で二週間なんですか〜!？」

ふはははは、精々陰陽師の星詠みもびつくりな天才未来予知に怯えるがいいわ！はてさて、この未来予知を現実にするため少しは働きますかね。

とりあえず唯笑に少し遅くなるから、寝たければベッドで寝ていろと連絡し、もう一人にも連絡をする。

「よお、この間振り〜。あのさあ〜、例の動画の元を消して欲しければ今から指定する場

所に来いよ。ん〜? そんな口を利いていいのかなあ? おお、ぶつくさ言っていないで十分に出来るようになる。ほれほれ、早く焼きそばパン買って来いよお〜!

電話の向こうで、携帯をミシミシ言わせている音を聞きながら俺は上機嫌に目的の場所へと向かった。

陵が婦女暴行されそうになった公園に行くと、街灯の下のベンチに血走った眼を向けてくる野獣が一匹。

「やふ〜、お待ちせ〜」

「この下衆野郎ッ」

和やかに挨拶をすると、トビーが手に持っているコンビニの袋を投げつけてくる。……マジで焼きそばパン買って来ちゃったよ。食いたかったから丁度良いけど、ほんと見た目とは裏腹に素直で良い子だなあ。もう、大好きだよトビー。

「んぐんぐ……ん〜? おいおいトビー」

「あ?」

「紅しようが少ないぜ? 買い直してきてくれよ」

あ、ゴムが勢い良く切れた時のような音が聞こえた。

「死・に・て・え・か・?」

やたらドスが利いた声に一瞬声が出なくなっちゃったよ。べ、別にトビーにびびってあげたんじやないんだからね！勘違いしないでよね！

「まあまあ、俺だつて好きでこんなことをしたわけじやないんだ。ただな、信がトビーと話してやつてくれつて言うからだな、仕方なく嫌々弄つてあげているわけで」

「その割には目をキラキラさせてるじやねえか」

「夜空の星が目映つてそう見えるだけだ」

「今日は曇りだろうが」

「おっと、ケアレスミスだ。てへ♪」

自分で自分の頭をげんこすると、さらにトビーの機嫌が悪くなつた。どこまで機嫌の悪さが進化するのか試してみたい気がするが、部屋に唯笑を待たせてるからな、早く用事を済ませてしまおう。あいつを待たせているだけならいいが、なんだか嫌な虫の知らせが……

「とりあえずだ、約束通りトビーは来たわけだし、動画を消すことを前向きに検討しようじやないか」

「てめえ、消さない奴の言葉だろうがッ」

いや、当たり前じゃん。こんなレアなトビーはプレミアですもん。家宝にするんだ。

「そこは信じてくれとしか言えないな」

「信じられる要素がねえな」

「ありやりや。俺と過ごした時間はそんなもんだったのかね。泣けるぜ」
「物理的に泣かせんぞ?」

まあ、最近の若者はすぐに暴力に訴えるんですね。物騒だわ。

「まあまあ、それなりに俺を味方にしておくと特典も付いてくるんだが」

「ストレスが特典じゃねえか、テメエは」

「そうか?俺を味方に付けるとな……あの二人の泣き顔が見れるぜ?しかも、お前の大
事な子も満足するほどに、な」

俺の言葉に少しは興味を惹かれたらしい。うざそうにしつつも、俺に言葉の先を促
す。

「俺は信程優しくないからな。悪い子にはお仕置きしないと気が済まないわけだ。それ
に、このままにするのはあの二人にも良くないだけじゃない」

トビーの鋭い眼光と真つ直ぐに向かい合い、俺はいつものようににへらと笑ってト
ビーの胸に指を突きつける。

「トビーとリナちゃん、二人だつて救われぬ。俺はさ、それが我慢ならぬんだ」

純粹過ぎるからこそ、トビーは許せないんだ。大事な友達に忘れられたままでいる彼
女はきつと泣いている。それがトビーにはどうしても許せない。当然だ、俺だつて許せ

ない。だから、彩花を悲しませたままだった自分を俺は自分で殴りつけたんだ。そんなのさ、誰だつて許せるわけがないんだよ。

「……うぜえな。別にテメエの手なんか借りなくたって、俺は一人でやる」

ああ、そうだな信。今のトビーは高校時代の俺そのものだ。違うのは、責める相手が内か外かの違いだけ。今のトビーはリナちゃんを想うばかりで、自分を想つてはいない。だから、自分を傷つけてでも、どれだけの後悔をしようとも厭わない。

まったく、不器用だな。俺も、トビーもさ。

「間違つても、もう二度と二人でいようだなんて思いたくなくなる程に、俺がこの手であいつ等をめちやくちやにしてやる。そうすれば、リナだツ!」

厨二気味なトビーの頭に、問答無用で手刀を喰らわせると、舌を噛んだのか俯いて肩を震わせていた。……顔を見せてくれないだろうか？涙目のトビーとか萌えるじゃん。

「三上、て、め」

「ごちやごちやうるせえ!この舌つたらずが!」

「ああ!?!テメエの所為だボケツ!」

胸元を捕まれるが、んなもんでびびる俺じゃない。ていうか、こんな子供なんか怖くもなんともない。

「お前ほんとアホなツンデレだな!お前がしたい事はなんだ!?!リナちゃんがどうやった

ら笑ってくれるかじゃねえのか!？」

「ああ!？リナはもういいねえ!笑った顔なんかもう二度と見れねえんだよ!部外者が知った顔で語ってんじゃねえぞ!」

「ああ、そうだよ。部外者だよ俺はな!けどな、知った顔なのは当然だクソ餓鬼ツ!テメエまで自分の中からリナちゃん消そうとしてんじゃねえぞツ!あの二人の中にリナちゃんがいなくても、トビー!お前の中にはいんだろ!そこにずっといるんじゃねえのかよ!」

俺を掴んでいる手が震えた。ほらな、本当はこいつだつてわかっているんだ。ただ、認めることが怖いだけなんだ。自分の憎しみで潰されていく綺麗な過去が……

だから、こんな馬鹿を俺達は放っておかない。例え、自分の馬鹿な過去を曝け出そうともだ。

「俺はな、トビー。二人だけじゃない。お前までがリナちゃんのを笑顔を曇らせようとしてんのが気に喰わねえんだよ!大切なんじゃねえのかよ!自分見失うくらい大切なんだろうが!」

膝抱えて、真つ暗な中に一人で閉じ籠もって……そんなの、もう見たくねえ。そんなの、俺一人で十分なんだ。

「三上、お前……」

「だったら、リナちゃんが笑顔でいられるように頑張れよ！せめてお前の中でだけでも笑顔でいさせてやれよッ！それが……それが、さあ！俺達に出来る最高の生き方じゃねえのか！大切な人を想うって事じゃねえのかよッ！」

嘘ついて笑って、いつだって泣き続けて……雨は冷たいままで、俺をどんな気持ちで彩花が見守っているかなんて考えもしなくて……そうして、どんどん俺の中の彩花の顔から笑顔が消えていった。

「答えろ、飛田扉ッ！お前はどうかあつて欲しいんだよ！いなくなってしまうた彼女に、どんな顔でいて欲しいッ！」

俺の愚かさに気付かせてくれたのは、唯笑と信だ。二人が俺を優しく導いてくれた。もし、二人がいなければ俺は永遠に彩花を悲しませたままだった。

大切な存在を失った時、自分の心の傷の深さなんて、自分じゃ気づけないんだ。自分を想ってくれる誰かがいて、初めて気付く事が出来る。だから、トビーにとつてのそれが、俺と信であれたならと思う。唯笑も一緒だったならもつと良かったんだが……もう、そこまであいつに甘えられない。今度は俺が守ってやりたいから。今度こそ、あいつの家族として間違えたりなんかしない。

「お、れは……」

「言えよ、トビー。それで、俺達に任せとけ。なんてつたつて俺も信も——」

『お前と同じ傷から立ち直った先輩だからな』

もう、それ以上言葉はいらなかった。

トビーの肩に手を置くと、俺の胸倉をきつく握り締めていた手から力が抜けた。自分じゃどうしようもなかったら、もう一つしかないんだよ。邪魔なプライドなんて捨ててしまえ。

「なんだよ、それ」

「なんだ、知らなかったのか？」

「知るかよ、まさかただの馬鹿だと思ってたテメエが、俺と同じだなんてよ」

「おい、誰が馬鹿だ？超絶才色兼備だろうが」

俺のいつもの正直な言葉を鼻で笑い、俺の胸を拳で軽く一回叩いてくる。

「……じゃあよ、テメエの馬鹿で教えてくれよ。どうすりゃあ、リナは笑う？俺はどうすりゃあ」

「あ、それはもうちよい待ってくれ。俺等もそこまで計画詰めてねえんだ」

「……………あ？」

「こうね、良い感じに青春をしていたところ悪いんだが、嘘はいかんよな。」

「テメエ、あれだけ偉そうにしてたじゃねえか」

「いや、俺は元から偉いから、偉そうにっつてのは間違いだ。そもそもだな、臣下のなんちやっつてポニーが計画書を出さないのが悪い。仕事の遅い部下で大変申し訳なくはッ」

鳩尾に良いのを一発もらって、トビーの胸へと倒れこむ。BL女子諸君！今だ激写してくれ！死なば諸共、写真をネタにして末代まで笑ってやる！

「お前を頼ろうとした俺がば「オエエエエエツ!!」……おい、ゲロクソ。何してくれんだ」

「あく……すつきりした。何って？いや、俺さゲテモノ食ったばかりで気持ち悪くてな。そんな俺の腹は時限爆弾だったわけだな。つまり殴ったトビーが悪い。むしろ俺様の口から出たものは聖水として受け入れろ」

「ふ、はは……ははははははは！ほんと、テメエって奴は……あく、ほんと」

「神様そのものだろ？」

「前歯叩き折ってやんよ」

「ノーモアバイオレンス！」

全身全霊のトビーの攻撃を俺は体力の限界まで避け続けたのだった。いやあく、ベンチって投げてあんなに飛ぶんだな。二次元の世界だけかと思っただけ、ははは……マジで涅槃覚悟した夜だった。

トビーとの死闘でへとへとになって帰ると、玄関には見知った靴が一組増えていた。この靴は信？

母さんに聞こうと思ったが、母さんは風呂呂に入っているらしく、まあいいかと部屋へと向かうと、やたら騒がしい二人の声が中から漏れてきた。

こんな夜中にうるさいなんて、まだまだ子供だなとほくそ笑んでドアを開けると――「ね？言ったでしょ？あいつつてこういうのが好きなんだよ」

「え〜〜〜!!?ででで、でもこれ外人さんだよ!」

俺のデンジャラスゾーン（本棚の後ろ）が開門されて、一人は心底馬鹿にしたように、もう一人は初心に顔を真っ赤にしてはしゃいでいた。

「はっ!?!でも智ちゃんって昔よく詩音ちゃんを見てた!」

「あく、双海さんはエロ也のドストライクだもんなあ。それと、何気にDVD。年上も好きなんだよなあいつつてば。硬派気取ってるけど、実はかなりエロ」くたばりやああああ

ああああツ!!!「ぶべらツ!!」

にやけ面目掛けて低空ドロップキック。もう容赦しねえ!嫌な予感がすると思ったらやはりか!

「お前等はオチを着けないと満足出来んのか!?!てか、人のトワイライトゾーンに何して

んだ殺すぞ！」

「……も、もう死にそうなんだが」

「死ね！言っておくが今からここは死地だ馬鹿野郎！」

「……髪の毛、染めようかな」

俺と信のバトルロワイヤルの脇で、唯笑は一生懸命髪や小さな胸を気にしていた。いや、お前はそのままでもいい。マスコットのまままで。

そんな中、階下では……

「あらあら、ほんといつまで経っても子供なんだから、あの子達は」

はい、子供です。てか子供でいいわ！こいつを殺れるならな！

「喰らえや！蒼龍天○！」

「なんの！天破活○！」

「うー、智ちやくん！唯笑どうしたらいいの〜！」

まあ、つまりは……今日も三上家は平和でしたとき！もういいぜ！

彼の馬鹿、彼女の愚か

「ねえ、一蹴？」

「ん〜？」

夕食後、一蹴の肩に頭を乗せ、私の髪を一蹴が優しく撫でてくれる。私の心が最も落ち着く時間。

何をするわけでもないのだけれど、テレビを観ながらぼんやりとするこの時間は私達にとつてどこか大切に思える。そんな時に、ふと私はあることを思い出して一蹴について尋ねてしまった。

「一蹴は誰にも……私にも言いたくない事ってある？」

「ない」

私の目を真つ直ぐに見つめながら、迷わずにそう断言する。

「本当に？」

「当たり前だろ。いのりに隠し事をする意味がないじゃんか。むしろ、なんでも話してしまえば、例えば、今後就職して、その会社の機密とかもな」

「ふふ、それじゃあただの口の軽い人だよお」

「はは、そうだな。で、なんで急にそんなことを聞くんだ？」

それはね、私が一蹴に何年もずっと嘘をつき続けているから……だけじゃ、ない。この前、三上さんと車内で話していたとき、あの人らしくない顔を見てしまったのが原因。らしくないと言えるほど知らないけれど、でも想像すら出来なかつたんだもの……あんなにも切なさや優しさや温もりと、これでもかという位の愛おしさと幸福をない交ぜにした、複雑な顔をするだなんて。

あんなにも不思議な表情をする人なんて初めて見た。

どんな人生を生きて、どんな想いを抱いたなら、見ている私まで心が締め付けられてしまうような顔と瞳が出来るのだろうか？ 気になって、気になって仕方なくて。三上さんが何を思い出して、何を見ているのか尋ねようとしたのだけれど、それを察したのかやんわりといつもの三上さんに遮られてしまった。

まるで小さな子供が内緒で集めていた宝物が親に見つかり、それを隠し誤魔化すかのよう。

あの時、私はわかってしまった。ああ、この人が私を自分のパーソナルスペースに入れる事はないって。人のパーソナルスペースには土足で無遠慮に、でも相手が不快に思わないよう入ってくる……そんな卑怯な人の癖に。

「ん〜ん。なんとなく」

「そっか。いのりも俺に何でも言えよな」

「うん。私も、一蹴に隠し事なんてしないよ」

どの口が言っているのか……一蹴は知らない。私がどんなに卑怯で卑屈で陰湿な人間か。絶対に知られたくない。一蹴の傍にいられなくなるくらいなら、私はこの嘘を永遠にしてみせる。自分で自分を世界一嫌いになっても……絶対に。

「却下だ」

「おい智也、何でもするって言ったよな？」

「うるせえ！こんなもんは却下だ棄却だ破棄だ！」

ビリビリと信が作ってきた、リア充苦汁舐めろ作戦を散り散りに破く。

「あ、おま！それ作るのにどれだけ俺が苦労したと思ってるんだよ！」

「俺の大学受験より苦労してないだろうが！」

トビーと青春して次の日、俺と信はいつもの居酒屋で軽く飲みながら、今後の作戦会議をしていた。

「というわけで、もう一度会議を再開しようではないかね」

「ゲンド○スタイルで何言ってるんだ！お前それがやりたいだけだろ！」

「否定はしない。これより、非リア充補完計画を遂行する」

「日本終わるだろうなその計画」

「私は一向に構わん」

「それ中国の人だよな？ 詰め込むなよ面倒臭い」

二人でビールを飲んでクールダウン。

「おい」

「いやあ、信さ、あの計画は駄目だって。あれじゃあ、俺が正義のヒーロー的に出れないじゃん。主役扱いがいいんだよ俺は」

「どう考えたってお前も俺も脇役ポジなんだって。だから、それじゃあつまらないからせめて黒幕みたいなノリで楽しもうぜって事なんだよ」

「おい、テメエ等……」

「あ？ わかってねえ、わかってねえよマジで。今の時代、黒幕が主人公やれる時代なんだよ。悪が正義つつかささ。わかるだろ？」

「そりやあ否定はしないが、でもなあ。それが出来る立ち位置でもないわけで、つまり大人になれよ。あとちよつとで社会人になるんだぞ、お前だって」

「出た、出たよこれ。自分がちよつと早く社会に出たからって先輩風吹かせて、やだねえ。こうはなりたくないな。いいか？ 大人になろうとも俺達はいつまでも夢を」

「いい加減にしねえと帰るぞ？」

あまり喋らないくせに、構われなければ構われないで寂しいらしい。ヒートアップする俺達に苛立ちを隠しもしない声をぶつけてくるトビー。はい、実はいたんだなこいつも。てか、トビーいないと話にならないし。

「まあまあ、怒るなつてトビー。智也と話すところなるつてわかつてたことじゃんか」
「待てや。俺を我侭で人の意見を聞かない問題児みたいに言うとは、貴様どういう見だ？」

「そういう見だよ。さすが相棒、わかつてるねえ」

「つまり、テメエ等のおふざけに付き合わされた俺が馬鹿だったつて事だな？……じゃあな」

いつまでも真面目に話し合わない俺達に痺れを切らしたトビーが、上着を手にとつて本気で帰ろうと立ち上がる。

「待て待て待て！悪かったから拗ねるなよトビー」

「今度バイトの可愛い子紹介するから不貞腐れんなよトビー」

二人で必死に食い止める。こめかみの辺りがピクついているが、問題はないだろう。むしろ、この不機嫌なのがデフォだもんなトビーは。それにだな、トビーに帰られると困ったことになる。

(これだけ俺と信で飲み食いして、トビーが抜けたら割り勘で払えない)

(同意)

二人でアイコンタクトを取りつつ、まあまあとトビーを宥めながら席に連れ戻す。ちや、ちゃんと真剣にトビーの悩みを解決しようとしているぞ？嘘じゃないからな？

「とにもかくにも、だ。今から俺が考えてきた計画を忠実に遂行してもらおうからな。特に智也」

「誰に物言ってるんだ？」

「不確定要素のお前にだよ！」

「……チツ、ミスったな俺としたことが」

早くも後悔しているヤンキー崩れはスピちゃんを密かに混ぜたハイボールで黙らせ、俺と信はそれはもう真剣に話し合いを再開したのだった。

「あ、もちろん割り勘な」

「当然だな」

「割りに合ってねえだろうが双壁」

酒が入っている所為か、やけにふわふわとした気分で家に帰ると、俺のベッドの上で何かを広げて見ている唯笑がいた。

「よお、ただいま。何見てんだ？」

「アルバムだよ。彩ちゃんと、智ちゃんと、唯笑。いつも一緒だった頃の」
「そっか」

なぜ今そのアルバムを取り出し、俺の部屋で見ているのか。そんなこと、聞かなくてもわかってる。

アルバムを俺の部屋で見ている理由は、この部屋が一番彩花の影が色濃く残っている、尚且つ俺がいるから。一人で見てしまつたら、きつと泣かずにはいられないだろう。彩花との事を思い出しては笑って、懐かしくて、きらきら輝いていて……そうして笑いながら泣いてしまうんだろう。俺も似たようなもんだしな。

でだ、なぜアルバムを見ようだなんて思ったのかだが……

「唯笑」

「ねえ、見て智ちゃん！この写真！唯笑が初めて二人の事を撮つた」

「唯笑、もうそんな気持ちで見るな」

俺に見破つて欲しかったから。俺に……否定して欲しかったから、だろうな。

「そんな気持ち、つて？唯笑はただもうすぐ彩ちゃんの命日だから……」

唯笑の隣に腰掛け、今にも決壊してしまいそうなほどに揺れている唯笑の頭をゆつくりと何度も撫でてやる。

「……ど、うして？どうしてかなあ。わかんないよ、どうして智ちゃんが平気なのか」

全部吐き出せば良い。今の俺はちょっとやそつとじゃ倒れないとこいつはもう知っている。だから、こんな時くらい遠慮なく俺に倒れこんでくれるなら、どんなにそれが重くても俺は受け止めてやる。

「だって……だって！あ、あんなに、あんなに彩ちゃんに似てるんだよ!? どうしたって思いうしちやうよ！重なつちやうよ！」

陵に会えば、彩花と深く繋がっていた人間なら皆唯笑のように感じるはずだ。母さんでさえ、わざとふざけなければ自分を保てないのだから。

「見た目だけじゃない。髪を耳に掛ける仕草も、食べる時の順番も、ちよつとした話し方も、字の形も……些細な事が、沢山重なつちやうんだよ？」

さすが家族。食べる順番までは俺は自信なかつたなあ。だ、だからって俺より唯笑のが彩花と愛し合ってたわけじゃ……ないよな？

「おばさんだって、どうしていいかわかってないのに……なのはどうして？なんで智ちゃんはずいぶん平気なの？どうして普通でいられるの？」

「それは……」

彩花は絶対にあいつのような嘘はつかないからだ！……なんて言える訳がない。

俺にとつて、どんなに姿が似ていようが、所作が同じだろうが関係ない。彩花とは芯の部分がるで違う。それは魂と言い換えてもいいかもしれない。それだけの事。でも、

俺にとっては何よりも重要で、それだけで俺が愛し、慈しんでいる彩花と陵が重なることはないんだ。

「智ちゃん？」

言葉を途中で放り投げ、その先を紡げずにいる俺を涙で濡れた双眸で覗いてくる。

「こりや、誤魔化せないな。」

そもそも唯笑を誤魔化すなんて不可能なんだ。なんてったって、俺が自分自身を騙し続けてきた嘘を最初から見破ってた、そんな稀有なやつなのだから。

「悪い、唯笑」

「なんで謝るの？」

「いや、陵を彩花と重ねて見ることは絶対じゃない。それは断言出来るんだが……その理由が、な？ちよつと言えないんだ」

それならさ、今の俺の心境を有りのままに伝えるしかない。

「陵のプライベートな事情をひよんな事から俺と信は知ったわけなんだが、それつてのがあまり人には言えないデリケートな事だな」

「それは、表面的なこと？」

「心の問題だ。だから、簡単には話せない」

ほんの少し今の俺の心情と陵の現状を話しただけ。でも、たったそれだけでも唯笑に

は伝わってくれる。

「そっか、そうなんだ。だから、智ちゃんは平気なんだね。一番大切な部分が違うから……そう、だよな？」

「正解だ。だから、お前も母さんも馬鹿みたいに彩花をあいつに重ねるなよな」
知らず、俺はギュッとシートを掌に爪が食込むほどに握り込んでいた。

唯笑とこんな話をしている所為で、つい本音が出そうになってしまい、それを寸での所で無理矢理に抑える。

重ねてなんか堪えるものか……自分勝手な純粹で周りも、自分をも騙すあいつとなんて……

口汚い言葉が頭を埋め尽くす。

今だけだ。今、唯笑と彩花を想っている今だけは本音で心を埋め尽くしたい。今後、今以上に陵を遠ざけてしまわない為に。今だけ、溜まりに溜まっている自分の中の膿をゆつくりと俺は消化していった。

耳元で大音量を撒き散らしながら震える携帯。それを条件反射で通話ボタンを押して耳に当てる。

「……………くたばれ」

『へえ、智也君が起こしてくれて頼んできたから電話したのに、その恩人にいきなりくたばれとか、智也君がそのままくたばってよ。留年しても良いならね』

電話の向こうから伊波の声がして、更にテンションが下がる。なぜに朝一で自称イケメンの声を聞かねばならぬのか。

『一時限目から講義なんでしょ？早く起きないと、電車にも間に合わないんじゃないかな？』

時計を見ると、確かに今すぐに出ないと電車に間に合わない時間だった。

「馬鹿野郎！なんでもっと早く起こさないんだ！ほんとに使えないなお前は！お前の取り柄はなんだ？その甘いフェイスだけか？」

『ふふ、慌てるといいよ。わざとギリギリに掛けたんだからさ。目が覚めたでしょ？ちなみに僕は怒りに目覚めてるけどね。ホームから落ちればいいのに』

「クツソ、覚えておけよ！」

ベッドから抜け出すと、すでに唯笑も学校に行つたらしく、部屋にその姿はなかった。まずいんだよマジで！ギャグで遅れでもしたら本気で留年の危機だ。あの教授、融通

が利かんから遅れたら絶対単位くれないんだよ。

薄手のシャツを羽織って階下に降りると、母さんが声を掛けてきた。

「智也、飯はいいのお〜？」

「ウイダーあつたる？ 投げてくれ」

「はいはい」

一昔前のイケメンアイドルのCMのように、口に唾えて駆け出す。後ろからは暢気な母さんの声。

「さうて、ニッコ生の配信のためにお化粧しないと」

何やってんだよあの人!?

どんな放送か気になって後ろ髪を引かれるが、それは帰ってから確かめよう。我が母ながらとてもアグレッシブな人だ。

高校時代と変わらない風景を疾走し、なんとか時間に間に合い、電車に駆け込む。

はあはあと息を整えていると、横からハンカチが差し出された。ふむ、やたら気の利く他人様がいたもんだと感心しながら横を見ると、呆れ顔のかおるが出入り口付近のつり革を握って立っていた。

「おはよ。大学生になってもまだ遅刻してるの?」

「サンキュ。遅刻じゃない、遅刻寸前だ。そっちこそ、この時間に会うなんて珍しいな。社会人にもなつて遅刻か?」

「今日は撮った画の編集で、現場に行かなくてもいいのよ」

ふくと適当に相槌。どうせ聞いたって俺にはわからんからな。ジャッ〇ーが出る

のであれば、なんとしても俺も同行するがな。

「ところで、その格好はまずくないか？」

「……なにが？」

俺がおかしいのかもしれないが、妙にかおるのスーツ姿は扇情的で、男の視線を釘付けにする。下手な女優よりも映えるもんなこいつ。それに、そろそろ……「げっ、混んできたね」

次の駅に到着すると、雪崩のように人が流入してくる。ぎゅうぎゅうに体を押されるだけなら良いが、男の汗や女性の香水の匂いが混然一体となり、起き抜けの体にはとてもありがたくない。ぶっっちゃけ匂いで吐きそうだ。

仕方ないと、かおるを手で出口の隅に押しやり、背後に俺が立つ形にしてやる。

「ちよ、智也？」

「なに赤くなってるんだよ。痴漢対策だったの」

俺が近くにいるのに、そんなことをされでもしたら、後でどんな恨み言を言われるかわかったもんじやない。金銭的に余裕のない俺は、謝罪の意として物を請求されても買ってやれない。あつても難癖つけて一文も出す気はないけどな！

いつもよりも人が多くて、かおるの後ろ髪に少しだけ鼻が埋まってしまふ。

……めちやくちや良い匂いだな。やっぱり自分で稼ぐようになると、使うシャンプー

のランクも上がるのかね。

周りの汚染された空気を吸うのを避けるため、俺はあえてかおるの髪の毛の匂いを嗅ぐようにしていた。

「あのさ、智也。息が耳にかかってくすぐったいんだけど」

「俺の精神安定のためだ。我慢しろ」

「何よそれ？」

ぶつくさと文句を言いながらも、決して嫌がらない。さすが俺の高校時代からの親友だな。男女の仲を気にするような俺達じゃない……にも関わらず、車内の室温が人々の体温で上がっているためか、やたらかおるの顔が上気している。風邪じゃないよな？

「ん……今耳に智也の唇が……」

「ああ、悪い」

電車が止まると、どうしても慣性の法則で体が揺れてしまう。にしても、ほんとに良いい匂いだな。ん、マンドム。

「ねえ？」

「嫌がっても離れないぞ。民衆の匂いが酷くて敵わんからな」

「それは、いいんだけどさ」

なにやらもじもじと言ひ難そうにしている。

「その、ね？こんなところじゃ、ちよつと……」

「……は？」

意味不明な一言に、首を傾げてみる。こんなところじゃって、何一つ伝わらないんだが。

「べ、別に嫌じゃないよ。嫌じゃないんだけど……その、こういうことはもつと段階を……んあ」

やべえ、俺の読解力ないしコミュニケーション能力が不足しているのか、かおるの言っていることがこれっぽっちも理解出来ない。妙に艶っぽい声を出すし、心なしか息も乱れているような……心不全か？

「すまん、何を言いたいのか簡潔に頼む」

以心伝心出来ない不甲斐ない親友ですまない。

「だから、ね？当たってる」

「何が？」

「硬いのがあたしのお尻に、ずっと当たってるの」

「それは携帯だ！」

心の中で謝った俺が馬鹿だった。とんでもない勘違いに顔を真っ赤にして俯いたかと思つたら、足に痛烈な衝撃を受けた。

「か、かおる、貴様……」

ヒールで思いつきり足を踏まれ、さすがの俺様も涙目でかおるを批難する。

「ふんッ」

そうして、かおるは顔の熱が引かないまま、俺が降りるまでずっと不機嫌を顔にしていたのだった。

途中、とんでもない事を言っていた気がするが、聞かなかつた事にしておこうと胸の中に仕舞い込み、大学までの道を走る。

（あ、そっぴや今日からか……）

俺の遅刻の危機と比べるとどうしても優先順位が下がってしまったって忘れていた。

俺が今日の講義を終えて帰る頃だな。はてさて、どうなることでしょうね。一体どのようなビフォアフターとなるか……CMの後、驚愕の結果にスタジオは騒然!?

「で、こうなるわけか」

すっかり土砂降りのトーンが顔に掛かってしまっているアホ一匹が、参考書を見ているようで見えていない状態が、かれこれ一時間も続いている。おお、それと皆さんご安心を。見事俺は遅刻を回避しました！廊下をダッシュし、先に行く教授がドアを開けた瞬間、俺は教授の脇を飛び込み前転ですり抜けて、華麗にホームした。ちよつと、教授が

笑顔で「三上君、君はとてもユニークだね」なんて褒めてくれもした。てれりこ。い、嫌味じゃないよな？

そうして残りの講義も終えて帰ってきて、陵を待っていると、抑揚のない声でお邪魔しますとやってきた。ん、なんとも予想通りの登場でつまらん。この小娘はもう少し俺のようなユニークさを持っていいのか？教授が認めてくれた俺の明るい人間性を少しは見習うべきだ。そうだな、勉強するならまずは俺の内面から人間力を学ぶべきじゃないか？そうすりゃ……

「……どうしよう」

トビーに脅迫デモを起こされても、その場でラジオ体操を始めるくらいの余裕を持てるだろうに。

いえね、俺は反対したんですよ？追い詰めるにしても、もつと方法はあるのではないかと。だが、あの性格がひん曲がっている稲穂さん家のなんだかさんは「これがスムーズな手段なんだよ」なんて強行するもんだから。まったく、困ったものだ。素直に俺の『リナちゃんの親族語って、当時の事を涙を流しながら何があつたのか問い詰めよう作戦』を実行すれば良かったのに。俺の知り合いの演技派筆頭、西野とととに頼み込めば喜んで協力してくれただろうに。

何も覚えていない彼氏と、全部知っている陵の前で、必死な親族を装えばどんなに簡

単だったことか……脚本はかおるに頼むつもりだったし。完璧だろう。だってプロだし？俺ら苦勞する必要もないわけで……謝礼は信に払わせればノープロブレム。

だのに、トビーを使つて別れなければ真実を彼氏に話す作戦とか、野蠻で最低だと俺は思うね。何よりさ！

「……っ!？」

数分置きに泣きそうになられる俺の身にもなれよ！陰気臭いつたらないんだよ！一リツトルじゃ足りない涙で溺れんぞコラ！

あく、本気でどうすんのこれ？信からはトビーと会つた後のこいつをフォローしろつて指示されているが、俺に何を期待しているんだよ。自慢じゃないが、俺は唯笑を泣かせるのが得意な男だぞ？慰めるなんてのは専門外。こういうのは信のが得意だろうが。なんだつたら、あいつが彼氏から奪つちまえば良いんだ。……無理だな。変なとこ一途だしな、あの雑学王は。

どうしようかと辺りを見回すと、背中からやけに変な視線を感じ、なんだと振り返る。
「……息子、年下、泣かす」

ちよいと開いたドアからこちらを覗き、なにやらメモっている変質者がいた。というか母親。

俺が気付いた事に気付いたのか、グツと親指を立ててきやがった。折りたい、あの親

指。

ネタをありがとうでも言うように、少量の微笑を残して消えていく。壊したい、あの笑顔。

「あ〜！クソツ！」

頭をガシガシと掻きながら立ち上がり、陵の上着をぶっさいくな顔に思い切り投げつける。

「きやつ！な、何するんですか！」

「うぜえんだよいつまでもめそめそと！お前の所為で俺の株価が邸内で暴落してんだよ！」

「ちよ、いつも通りで何を言っているのかわからないんですけど」

「うっせえ！とりあえず上着を着ろ！」

「はい？」

要領を得ていない陵を手を引いて無理矢理立たせる。

このまま家にいたんじや、俺がどんなことになるかわかったもんじやない。階下から……

「ニッコ生のネタゲツト〜♪」

社会的によりしくない鼻歌を歌っている鬼母（きぼ）。俺が母だったら、小型カメラを

持つて部屋の中をリアルタイムで配信する。その程度、どうってことなくやってしまうのが三上家だ。

「今日は課外授業だ。俺の社会的地位を守る為にな」

「ほんとに何言ってるか……あ、無理矢理引つ張らないで下さい〜!」

無駄に粘られるが知ったことか。俺の沽券が秒単位で危ういんだからな!

母さんが機材を用意しながら、俺が陵を連れて出て行くのを横目に確かめると、俺に聞こえるほど大きな舌打ちをした。あの人、紛れもなく俺の親だわ。自分の肉を切つても笑いを取りにいくなんて……だから俺のようなタフで素敵な男の子が育つわけですね。もう、本気で親父のところに戻ってくれ。

車を走らせて着いたのは、银杏（いちよう）の歩道が近くにある海岸沿い。ちよつとした防波堤があり、そこから見る夕焼けは絶景で、言葉を失うほどの幻想的な景色なのだ。車を防波堤傍に止めて、車を降りる。どんよりだんまりの陵にも、顎で降りるように示すと、大人しく車を降りた。

良かった。また俺が自分を襲うんじゃないかと怯えられるかとも思ったが、そういう心配はない。こちら辺は人気がないしなあ。一人以外は。

別に俺はこいつに美しい景色を見せて気を紛らわせようだなんて思っていない。む

しろ、俺のささくれた精神を安定させて欲しいがためにここに来た。

たまに伊波とか出没するから危険だが、奴は今日はバイトで夜遅いから出くわす事はないだろう。

「あの、ここにきて何を？」

頭に疑問符を浮かべる馬鹿には、黙って途中で買ったあつたかい缶コーヒーを渡して、質問をあえて無視して俺は防波堤に腰掛ける例外へと近づく。

この時期は風が多少強くて、普通はあまり人は寄り付かないが、この子だけは例外だ。この時期は毎日のようにここに絵を描きに来ている。いつか見た金色の海をもう一度その目と、キャンバスに残す為に。

小さなその子の背中に、自分が来ていた上着を肩から掛けてやる。

「へ？」

きよとんとしてこちらを見る、可愛らしい瞳。未だに幼さが残っているなんて、ほんとに俺の妹だったら良かったのに。

「や、今日も描いてんだな。でも、もうちよつと厚着しないと風邪を引いちやうよ、みんなもちゃん」

「智也さん！」

二つに結んだ彩花と同じようにサラサラとした長い髪を揺らし、みんなもちゃんは花が

咲いたかのような笑顔を見せてくれる。

伊吹みなも、俺の一つ下の後輩で彩花の従姉妹。難しい病気を患っていたが、三年前に海外で手術を受けられる事になり、術後二年の時を経て帰国。今は来年から美大に通う為に修行中。

「久しぶりだね。ごめんな？ほんとともうちよつと会いに来たいんだけど」

「そんな……こうして会いに来てくれるだけでも嬉しいです。智也さんに会えるだけで、それだけで元気になっちゃいますから」

「そっか。なら、来れる時はなるべく来るようにするかな。最近は単位がやばくて、レポートやら講義やらで全然時間が取れなくてさ」

「もう。無理しなくて良いんですよ？」

「なんの！俺もみなもちゃんに会えて元気を貰っているんだから。俺の清涼剤だよみなもちゃんは」

「え、なんですかそれ〜！」

「あはは、それだけ癒されるって事だよ」

「じゃあ、私と一緒にですね」

「これぞウインウインってね。あ、そうだ。姫に買って来た物があつて、じゃ〜ん」

ホツカイ口とほつとレモンを取り出して、冷えた頬に当ててあげる。

「わあく！ あったかあつい。ありがとうございます、智也さん」

「なんの。姫の御体をお守りするのが騎士の務めゆえ」

「あはは！ またそういう冗談ばかり」

「冗談なんかじゃないんだなあ。俺にとつてみなもちゃんは大事な妹だからねえ」

「えへへ、嬉しいです。智也お兄ちゃん」

え〜つと、なんですかこれは？

「お兄ちゃんつて……良い響きだなあ！ もう一回言つてよ！」

「え〜！ 恥ずかしいですよ〜！」

「お願い！」

「もう……智也お兄ちゃん……」

「——最ツ高」

何を見せられているんだろう？ どうやら彼女は三上さんと親しい知り合いのようだけれど、ようするに私が落ち込んでいるからとか関係なく、ただ自分が彼女に会いたかったから来ただけですか、そうですね。

ていうか、私にはコーヒーだけで彼女にはホツカイロまで用意していたんですね。私とはランクが違うんですね。体どころか心も冷え切っている私の心を凍らせにきまし

たか、そうですね。

「ところで智也さん？」

「ん？どうしたの？」

「あちらの悟りを開いたかのような目をしている子は？」

「ああ、今わけあつて預かっている子供。親父からベビーシッターのバイトを頼まれて仕方なくね」

今決めた。すぐにでも免許を取ろう。この人をこのまま置き去りにして帰るために。盗んだ車で走り出したい。

「あ、ちよつと凍った笑顔になりましたけど」

「そういう仕様だから気にしなくても良いよ」

ついにはアンドロイド扱いですか。別に良いんですけど、なんでかな？こう、沸々と熱いものが込み上げてくる。端的に言えば、これが激昂つてやつですね。初めて経験しました、貴重な体験をどうもありがとうございます。あまり、私は汚い言葉を使うことはないけれど、今だけは許して欲しいな。くたばつてくれないかなあ、目の前の海に飛び込めばいいのに。

「あのー！あなたもこつちに来ませんか〜！」

そう声を掛けてきてくれた彼女の顔を初めて目にすると、そのあまりに儂い愛らしさ

に一瞬言葉をなくした。

背後には海に溶ける太陽。その光景にこれほど違和感なく溶け込める彼女の澄んだ存在感に、私は一瞬息を飲んだ……のだけれど、隣のガキ大将のような人が、素直な嫌そうな顔が目に入り、幻想的な気分が台無しになった。

へえ、嫌なんですね？二人の時間を邪魔されるのは嫌ですか。

「はい、今行きます」

それじゃあ、遠慮なく嫌がらせをしよう。罪悪感なんてこれっぽっちもない。

彼女の傍まで行くと、どうぞと手を差し出される。差し出された手を取ろうとして、だけれど躊躇してしまった。

「どうかしましたか？」

「あ、いえ……」

差し出された指も、袖から覗いた腕も私よりもずっと痩せ細っていて、その手を取っていいものか迷ってしまいました。

正直に言えば、その細さは病的にも思えた。触れたら壊れてしまいそうなほどに。

「おい、姫がせっかく手を差し出してくれたんだ、早くしろ」

「智也さん、あまり女の子に乱暴なことを言っちゃ駄目ですよ」

「親愛の裏返しで意地悪を言ってしまうのが俺なんだ」

「そんな智也さん嫌いです」

「参つたな、みなもちゃんに嫌われたら生きていけないよ俺」

「じゃあ、彼女にももうちよつと紳士で接して下さいね?」

年上だろう三上さんを嗜め、再度私に手を差し出してくれる。その手に、今度は躊躇なく手を添えて防波堤に登って腰を掛けた。

違うんだろうなあ。多分、三上さんは私が戸惑つた理由に気付いて、わざと乱暴な言い方をして背中を押してくれたんだ。彼女が気に掛けないよう、配慮した言葉だった。

腰を掛けて眼前の海を眺めると、角度も高さも違い、さつきとはまったく別な美しさを見せてくれる。その風景に言葉も忘れ、ただただ呑み込まれていく。

「初めまして、智也さんとは……兄妹?親戚?になる予定だった伊吹みなもです。智也さんの一つ下です」

「あ、私は陵いのりと言います。浜咲学園の三年生で、わけあって三上さんのお宅で時々勉強を見てもら……つて?います?」

「ちゃんと監視してんだろうが」

言い方最悪ですね。間違いじゃないのが残念ですけど。

「あ〜!やつぱり!そのスカートはそうじゃないかなって思ってたんです。えっと、いのりちゃん?って呼んでも良いですか?」

「あ、はい。敬語じゃなくても全然。伊吹さんのほうが年上ですし」

「ふふ、じゃあお言葉に甘えちゃおうかな」

なんて清廉とした笑顔なのだろう。その清らかさを前にすると、自分が惨めに思えてしまう。だって、私には無理だもん……そんなに透き通った笑顔なんて。

それに、気になったこともある。

彼女が私に向けた笑顔の中に、どこか親しみと寂しさが混ざっていたような気がした。それがなんなのか、私には知る由もないのだけれど。

「どうだ？めちゃくちや可愛いだろう？」

「はい。智也さんの親戚とは思え……あれ？」

「とんだ無礼者だな貴様は。俺の親戚なればこそ「ちよつと静かにして貰えますか？」……泣きてえ」

何かを聞き逃しているような気がして、さっきの自己紹介を思い出すと、少しでも引掛かる言葉を思い出した。

「親戚になる予定？それって」

その先を紡ごうとすると、伊吹さんが三上さんに目配せをして何かを確認しようとした。でも、それよりも早く三上さんの声が私の言葉を掻き消した。

「実は俺の親父がみなもちゃんを気に入ってさあ！養子にしようかつつてな！でもみ

なもちちゃんにも両親がいるし、なんとか家に引き入れられないかと家族全員で綿密に会議をしたことがあるんだよ！な？」

おどけた三上さんと、戸惑いながらも笑おうとする伊吹さん。

ああ、また……これと同じ顔を私は前にも見ている。触れられたくない何かに触れようとすると、三上さんはそう設定されているかのように、自動でおどけて誤魔化そうとする。

その証拠に、伊吹さんに不自然な目配せをしていた。

「そう、でしたね。あの時は私のお母さんもお父さんも驚いていて大変だったんですよ！」

「ごめんごめん、俺の家族は突拍子もないので有名だからささ」

二人で紡ぐ言葉の中に、どうしたって隠せない郷愁のような想いが見てとれた。

なぜ、隠せてもいない隠し事をするのかはわからないけれど、三上さんは頑なにその心の内を見せようとはしない。それが他人全てになのか、それとも私個人になのか……別に、三上さんが何を隠そうとどうでもいいはずなのに、モヤモヤしたものが胸に溜まっていくのを自覚していた。

「へえ、そうなんですか」

でも、そのモヤモヤを解放する時はこないと思う。これ以上、私も三上さんも距離を

縮めることはないもの。だから、私は適当に返事をして、伊吹さんが描く絵に興味を移した。

「あの、絵を描かれるんですね」

「うん。下手の横好きって言うのかな？絵を描いていると、本当にそこに行ける気がしたり、不思議と気持ちが高揚やかになったりするんだ」

「見せて頂いても良いですか？」

「……どうぞ」

伊吹さんに今までよりも近づき、横からキャンバスを覗く。

「——え？」

そこに描かれていた風景に私は言葉を失った。

「どうだ、凄いだろ？」

自分の事のように誇らしげに言う三上さん。

キャンバスには海原に絨毯のように銀杏が敷き詰められ、黄金色の海原を朝日が照らし出していて、こんなにも心奪われる風景があるのかと目を疑ってしまった。

「私、この黄金色の海を見たことがあるんだ」

伊吹さんはその光景を思い出すように瞳を閉じ、三上さんも懐かしげに目を細めている。

「こんなに綺麗な風景が、本当に？」

信じられなくて問い返すと、二人共が顔を見合わせて微笑みながら頷いた。

「夢、だったのかもしれないけれど、私はほんとうにあつたんだって信じてるよ」

もしかして、三上さんもその場に？

「どうしようもなく先が見えなくて、これが最後だつて無茶したことがあるの。その時にね、智也さんが私を背負つてここまで連れてきてくれたの。凄く寒くて、眠つたらもう起きれないかもつて覚悟して……そんな私を智也さんが後ろから温めてくれて……そうして何時間も二人で海を見ていたらね、私と智也さんの願いをあ……神様が叶えてくれたのかな？ 数え切れないくらい銀杏の葉が海を覆い尽くして、朝日がきらきらつて照らしたの」

きつと、二人はその日のことを鮮明に思い出して共有しているのだろう。そこには誰も踏み入ることの出来ない絆があつた。

「まあ、あれから一度も見れていないけどな。そんなことがあつて、この時期はみなもちゃんはここで絵を描いているってわけだ」

「まだ時期は早いですけどね」

「いいじゃんか。いつ見れるかもわからない景色だしね。それで俺もこの時期は良くここに来たりしてる。俺ももう一度見たいからな」

なぜだろう？今坂さんという時と似たような空気を感じる。彼女もまた自分の家族だとも言うかのような。

ううん、そうじゃない。三上さんにとつて、伊吹さんは家族なんだ。どんな関係があるのかは想像も出来ないけれど、間違ひなく三上さんにとつては妹同然な存在なんだ。

二人の空気に当てられ、車に戻ろうとも思つたけれど、少し腑に落ちないこともある。「そんなことがあつたんですね。三上さんには似合わない素敵な思ひ出しじゃないですか」

「そんなに突き落とされたいかあ？」

「それはこつちの台詞です。なんですかこの扱ひの差は!?私も年下じゃないですか!」

「貴様と天使のようなみなもちゃんを一緒にするな!あまり生意気な事を言うとな当に落とすぞ!」

「やれるものならやって、いやああああ!!どこ触つてるんですかあああツ!!」

背後から両脇に手を差し入れられて持ち上げられる。セクハラですよねこれ!!

「変態です!セクハラですツ!」

「貴様に色気なぞ早いわ小娘!ほくれほれ!謝らないと時期はずれの海水浴を楽しむことになるぞ!」

「そんなこと出来るわけって、左手の力緩めないで下さいよ!」

「ギャグは本気でやるから面白いんだらうがあ！」

「智也さん！駄目ですよー！」

「伊吹さん助けてください！本気です！この人本気で落とすつもりです！」

「ふはははは、後三十秒の猶予をやろう。早く謝ることだなあ！」

「いゝやあああああッ!!」

最低セクハラ行為は本当に私が泣きそうになって謝るまで止まることはなかった。断言します。絶対この人はこの先一生独身です！間違いありません！

人がまばらな公園。夕日で見えない表情。見えなくてもわかる顔。侮蔑と蔑みと憎しみ、それら負の感情全てが縋(な)い交ぜになった顔。

『お前、凄いやな？どんな神経してりやあ、あいつと恋人になれるんだ？』

声だけでわかってしまうソレを直視する勇氣を持たず、ただ俯いて時が過ぎるのを待つ。

受け止めなければいけない義務があるはずなのに、私は純粋な悪意に怯え、受け止める覚悟を持たずにいた。

『教えろよ？どんな気分だ？あいつの代わりに得た幸せってやつはよ？』

や、めて……そんなこと、自分が良くわかつている。今更あなたに言われなくなつて

わかりきっている。

『どうだよ？何もかも忘れたあのクソと、それ以上の厚顔を曝すお前……そいつはどんな幸せなんだ？……笑えるな』

嘲（あざけ）り笑い、はつきりと見下される。私の想いを下らないと容赦なく殴りつけられる。

『あいつの存在を踏み躪って手に入れた幸せはちゃんと美味いか？なあ、おい？』

喉がカラカラに渴いて言葉が出ない。私だけが空気が吸えなくなってしまうように息苦しい。

『……チツ、さつきから黙ってんじゃ……ねえぞツ!!あツ!!』

悪く、ない。この人の言っている事は何一つ間違っていない。生きる事を諦め掛けた一蹴を助けない……そんな綺麗事で、自分の犯した罪を覆い隠して、その罪を今もずっと犯し続けているんだから。

でも……それでも私は……

『そうか、テメエはあくまで俺の言葉を聞くだけのつまらねえ人形になるつもりか。俺の気が済むまでは……随分舐められたもんだなあ』

しょうがないじゃない。だって、私にはあなたに責められる以外に何も出来る事なんて……

『馬鹿か？こんなもんで俺の気が済むわけねえだろうが。……二週間だ』
『……え？』

彼の目を見ないように顔を上げると、その口が酷く恐ろしく歪んでいた。

その悍（おぞま）しい気配に、背筋が凍りついた。

『お前に与える期間、執行猶予。お前から別れるか、それともあいつに俺が真実を告げるか……ああ、それともお前があいつに罪を告白するでもいいな。あのクソがどんな表情（かお）をするのか……そうだな、それでいい。二週間以内にお前があいつに罪を告白しろ』

『な、にを……』

『はっ、優しいだろ？別れろってのは撤回してやるんだからな』

『そ、そんなこと出来ないッ!!』

先ほどまで恐怖で動かなかった口が、目の前の存在以上の恐怖に突き動かされて動き出す。

それだけは絶対に許容出来ない。どんなに恨まれ、罵まれたとしても耐えられる。だけれど、一蹴に真実を知られるだなんて……想像もしたくない。

『お願い、私はどれだけ責められても構わない！でも一蹴には何も言わないで！悪いのは私で、一蹴は何も……何も悪くないの!』

『……なるほど、な。真実を知られたらどうなるか怖いか?……反吐が出る、が良い表情をするじゃねえか。決めたぜ。お前が自分から告白するか、それとも期間が過ぎて俺が真実を言うか?……この二択だ』

世界が真つ暗で何も見えなくなり、足元さえも脆く崩れ去りそうで、私は力なく膝をついた。

どうしたら、良いの?

『そこまでショックを受ける事かよ?お前がやった事に比べたら、大分優しいはずだろ』
一蹴がもしも思い出してしまったら、一蹴は私をどんな目で見るの?

考えただけで、震えが止まらなくなる。

だ、め……そんなの絶対無理だよ……そんなの、私……耐えられない……けど、それならどうしたらいいの?どうすれば彼は満足する?

『わ、別れます……から……』

『あ?』

そうだ。私がもう二度と一蹴に近づかなければ、一蹴に知られる心配なんてない。

もう、髪を弄ってくれなくても良い。もう、寝ぼすけな私を起こしてくれなくても良い。もう、ご飯を作ってあげられなくても良い。もう、私のなぞなぞに付き合ってくれなくたって良い。もう……もうツ!好きだなんて甘えさせてくれなくても良いツ!

『だか、ら……もう二度と一蹴には近づかない。約束、します、から』

血の滲む言葉を吐き、目の前が霞んで見えなくなりそうな私の肩に、飛田さんの手が置かれ……

『残念だなあ、陵。俺は、お前が心底嫌いだ。そんな俺がお前の絶望が何かしっているつてのに、そいつを実行しないわけねえだろ？』

死神の最終宣告が告げられた。

今度こそ、世界が崩れ去った。私が守りたかった一つの想いは、この瞬間に音を立てて粉々に砕けてしまった。

もう、何も見えなくて、自分の体までもが壊れてしまいそうなほどに、心が引き千切られる。

どう、してこうなっちゃうんだろ？

『うん、やっぱマイホームはこれぐらいは欲しいな』

私がああの時、りなちゃん……あなたに成り代わってしまったから？

『城下町があつて、やっぱ家はハイデルベルグ城がいいか』

その報いが今になって私を……

『おお、カメ吉の家も用意しないと。そうだな、首里城でいいかカメだけに』

わ、私を……うん、ちよつと待つてね私。

さつきから飛田さんの後ろに見える砂場で、見知った人が年甲斐もない事をしてるのは何？

『そうだ、信と唯笑の小屋も用意してやろう。俺様は慈悲深いなあ』

いやいや、突つ込みどころがありすぎですよ？なんで和風な城下町に洋風のお城なんでしょうか？というかあなたはいつから皇帝のような地位になったんですか？しかもカメ吉つてわけがわかりません。なんでカメに首里城なんですか。何も掛かってないですし、普通は竜宮城ですからね。今坂さんと稲穂さんの家は小屋つて、ヒエラルキー狂ってますから。

あれあれ？昨日の出来事に関係ないのに、しれつと出てくるの止めてくださいよ。意味わからないです。

『ん〜、あとは〜……小娘の住む竪穴式住居もだな』

「せめて長屋にして下さいッ!!」

はあはあと息を荒げながら私は目を覚ました。

ゆ、め？いや、夢なんだろうけど、夢にしたってどう考えても登場人物にミスがある。一蹴ならともかく、なんで三上さんが通常運行で出演するの？おかげで……

「馬鹿、みたいじゃないですか」

あれだけ怯えて不安に苛まれていた心が、めちやくちやに掻き乱されてわけがわからなくなっていて、自然と私は笑っていた。

窓から射し込む陽光に手を翳して、昨日までの自分を笑う。

「どうにもなんない問題なら開き直れ……か」

まったく、人の夢にまで出てきてなんて迷惑な人なんだろう。

それでも、少しだけ気持ちが悪になってしまうのだから、変な人だよな。

今なら、一蹴の前でいつも通りの私でいられるような、そんな気がした。

今日は家庭教師の日じゃないから、一蹴にご飯を作って上げられる日なんだけど、昨日のことがあって一人になりたくなくて、一蹴にお願いして『ならずや』でお仕事が終わるまで待たせてもらった。

「いらつしやいませ」

ドアが開く度に聞こえる一蹴の挨拶、注文を受け付けている時の営業スマイル、なによりそのウェイター姿がもうもうもう！カッコイイ！

今度一蹴に一日あの姿で一緒にいてくれないか頼んでみよう。それがクリスマスプレゼントでも全然構わない。むしろ希望します！

きやくツ！なんて妄想していると、一蹴が近寄ってきて、アイステイーを注いでくれ

る。

「待たせてごめんな。つまらなくないか？」

「ううん、全然平気だよ」

働いている好きな人の背中……萌えるよお。

顔を赤くする私に首を傾げる一蹴。すると、ドアが開いて二人のお客さんが入ってきた。

そのお客さんを見て、一蹴が小さく「げっ」なんて言っていたけれど、私はそんなに蹴に気付かずに幸せに浸っていた……浸るよりも隠れるべきだったのに。

「あら、智也君と健君。いらっしやい」

「只今帰還致しました、静流様」

「普通に入りなよ智也君。大学生がみんな馬鹿に見られちゃうから」

「それは何か？俺は馬鹿だと言いたいのか？」

「紙十重位のね」

「静流さん、マスタードとケチャップお願い。こいつの目をホットドッグにするから。」

「さあ、一刻も早く！」

「はいはい、あとでいくらでも。静流さん、僕にはコチュジャンとXOジャン下さい」

「二人とも仲が良いのはわかったから、大人しく座ってね。お客様の邪魔だから」

聞き覚えのある声と名前にそちらを見ると、憧れのほたる先輩の恋人の伊波先輩と、そんな優等生で大人な伊波先輩と同年代とは思えない子供、三上さんが静流さんと仲良さげに盛り上がっていた。

「最悪だ」

私の隣に立つ一蹴ががつくり肩を落としている。

「ど、どうしたの一蹴？」

「いやさ、あの人もいるじゃん。先輩の隣の。あの人、すんげえ面倒臭いんだよ。無茶な注文したり、適当なクレームつけたり……何度キレかけたかわかんねえくらいだ」

「そ、そうなんだあゝ」

「ごめんね一蹴。私は何も悪くないけど、その人一応私の面倒を見てくれていた変な人なんだあ。ていうか外でも通常運行なんですネ三上さん!?少しは自重しましょうよ！」

「言えない。絶対に一蹴には三上さんの家で勉強をしているなんて口が裂けても言えないよおゝ。」

「こ、ここは私がいることをバレないようにしないと。」

メニュー表立てを私の顔が見えないような位置に移動させる。あとはさりげなく退店すればセーフだよな。

「いのり、なにしてんの？」

「一蹴、今だけは私を気にしないで」

「めちやくちや気になるんだけど」

「えつと……いい、いのりちゃんのなぞなぞた〜い……」

「今まで以上に唐突過ぎる！」

自分でも挙動不審なのはわかっているけれど、しょうがないの一蹴。だって、何をするかわからない人で制御不能なんだもんあの人。せめて知り合いだって事だけでも知られないようにしないと。

「お〜い、そのイケメン。オーダー」

「……少々お待ちください」

どうやら一蹴の癪に触るらしく、営業スマイルに罅が入っていた。

何を言っているの三上さん。一蹴がイケメンなのは当たり前なんだから、一々言わなくても良いんですよ。えへへ。

「ごめんね鷺沢君。迷惑だったら店から蹴り出すから」

「何を言っているんだ。内心イケメンって言われて喜んでいるに決まっているじゃないか。なあ？」

「……はあ」

「ほらな、こんなに喜んでる」

「智也君の目は賞味期限が切れているみたいだね。新しいの買ったほうがいいよ」

「は、はは……（先輩、今すぐに蹴り潰して下さい！おねがいしやすッ！）それで、ご注文は？」

「伊波の所持金目一杯で買える物全部」

「智也君の生命保険でこの店を買おうかな」

「す、凄いですね三上さん。あの温厚な伊波先輩が三上さんにだけ容赦がないですよ。先輩の背中そこはかたなく阿修羅が見えますし。」

「どうやら、三上さんと接していると容赦なくなるのは私だけじゃなかったみたい。」

「智也君、健君。いい加減にしないと……ね？」

「二人がいつまでも注文をしない事に業を煮やした心優しい店長代理が、私が今まで見たことのない鬼も泣き止む笑顔をしていた。」

「あ、謝るので、あの拷問は伊波だけをお願いします」

「主犯は智也君でしょ」

「……注文いいつすか？」

「あ、本格的に一蹴が苛立ってる。怒ってる顔もカッコイイなあ。」

「なんて惚けている私に那須与一も驚くような矢が放たれた。」

「そうだなあ。じゃあ、アメリカンを一つ。そこで隠れているように隠れていない小

娘の奢りでな」

しまった。カウンター席とテーブル席の高さの違いを計算に入れてなかった。

つまり、テーブルにいる私は先輩と三上さんの身長だとぼつちり見えていたわけで

……えっと、こういう時はなんて言うんだっけ？……ああ、そうだ。

「……オワタ」

だっけ。

「は？え？」

事情が呑み込めずに目を白黒させるイケメン。挙動不審な店員だな。情緒不安定かな？

「おい、なに隠れてるんだよ小娘。尻が隠れてないんだよアホが」

「い、いのり？」

「……ん？」

店員が陵の名前を呼び捨てにするだど？おいおい、どんな教育をしているんですかねこの店は。店長を呼びたまえ！美しく気立ての良い店長を！

「……から、年上を無視するとはとんだ小娘だな。早く出て来い。故郷のお母さんが韓流ドラマを観て泣いてるぞ」

「それ私を思つて泣いてないじゃないですか!……あ」

「ふっ、餌に引つ掛かつたな」

「……陵さん、知らない振りしていればいいのに。良い子すぎる」

思わず突つ込んで口を抑える陵と、何がなにやらわかつていない美人とイケメン。ちなみに、俺もわかつてないんだけどな!人間関係面倒臭いなこの空間!

「ど、どういうことだよいのり?」

「てか、なんでこのイケメンは陵を呼び捨てにしている?不敬罪で打ち首になるぞ」

「あく、智也君知らなかつたんだ」

「なにがだ、イケメンじゃないイナケン」

「あはは、片方潰すよ」

な、ナニをですか?

「あのね智也君。彼なんだよ」

「お前の?」

「脳を日干ししなよ、腐ってるから。そうじゃなくて、陵さんの彼氏が彼なんだよ」

……ふむ、つまりだ。

「俺の下僕が一人増えたつて事で良いんだな?」

「あ、もう手遅れだったみたいだね、生まれ変わるしかないよ」

お前の毒のが手遅れだよ。ボケる度に俺の心が腐っていきそうだからな。

なるほどねえ、これが彼氏、ね。小娘のくせに生意気な。こんなイケメンが彼氏だと？ぼかあ、こんな不条理な世界にいく、異議を唱える所存であります！

「一蹴……その、ね？とても、と~~~~~つても遺憾なんだけどね、実は私がお世話になっている人なの」

どれだけ感情を溜めたんですかね。格ゲーのメーターだつて振り切れちまうだろうよ。

「お世話につて、前に言つてた勉強を見てくれるつてやつか？」

「……不本意ながら」

どれだけ年上の俺を虚仮にしちやうのあの子。

「この……ちよつとアレな男が！勉強を！」

それは、こんな聡明そうな俺が陵を相手にしているなんて信じられないつて意味かな？うん、違うな。こいつ、本気で俺の学力を疑つてんだ、間違ひねえ。

「静流さん、俺泣いていいかな？」

「いいけど、その前に智也君」

「なんでせうか？」

「私も聞いてなかつただけけれど、いのりちゃんとお勉強をしているつてどういふこと

かしら?」

え、なんで静流さんまで面倒な事になってんの?」

「これ、もう收拾つかないよねえ」

ただ、知り合いを見かけたから俺流の挨拶をしただけなのだが……

「いのり! 本当に何もされてないか!?!」

「……されてない、かな」

「何で間が開くんだよ!」

「そうだ! はつきり勉強をしつかり見てもらっていると事実を言え!」

虚ろな目が俺を捕らえてくる。この前の料理のことをまだ根に持っているらしいな。

「智也君! いのりちゃんに何をしたの! 何をしているの!」

「いのり! 正直に話せ! お前が傷つけられたなら俺が、俺があつた男を駆逐してやるから

!」

「智也君!」

「いのり!」

「もしもし、ほたる? 今ね、凄く面白いネタが目の前にあるんだけど……うん、ちゃんと

撮ってるから。後で送るね」

「最後の待てや! 国境飛び越えてなにしくさってやがる!」

俺は静流さんに、陵は彼氏に問い詰められ、俺も陵も相手から目を逸らし……
(えく、なにこの茶ばくん)

奇しくも同じ思いを共有したのだった。

彼の孤独、彼女の慟哭

時はもう寝る準備を始める人が多いだろう夜の十時。残業が終わった会社人も多いことだろう。そんな時間、いつもなら部屋で明日の世界平和を祈りながら踊りだす俺だが、なんの因果か二人のレスラーに居酒屋へと連行されてしまっている。

「久しぶりね、智也君」

「そ、そうだったけ？」

「そうよ。あたしが就職してからどれだけ会ったのか数えてみなさい」

「月に二回は会ってる気がするの、は気のせいかな？」

「月に二回で満足だとしても？ 静流とは週に何度も会ってるのに！」

「そらそうでしょうよ。キンキンに冷えたジョッキを乱暴に叩きつけながら、焼き鳥に囁り付く姿は、男子達が憧れた美人の購買店員の面影をぶち壊していた。」

「そんな小夜美さんの隣で、静流さんはなぜか勝ち誇ったかのような微笑をしている。」

「静流……あんた、何を余裕そうにしているのよ？」

「別にそんなつもりはないわよ。私に突っかかるよりも、智也君に聞くべきことがあるんじゃないの？」

煽らないで下さいよ。

夕方に起きた『ならずや事変』がここまで尾を引くとは思わなかった。俺、何もしてないんだけどな。ていうか、面倒臭い人に連絡しないで欲しい。明日も仕事じゃねえのかよ。

「むう、そうね。静流はあとで締めるとして」

物理的に締め落とすんですね、わかります。

「智也君さあ〜」

「な、なんすか？」

「あなた、これだけ……これだけ！天然美少女幼馴染、転校してきた同級生、紅茶の同級生、小動物後輩、なにより！このビューリホーOLにまで手を出しておいて、まだ飽き足らないで、彼氏持ちの清楚系年下にまで手を出そうとするなんて、贅沢にも程があるでしょ！」

「人間きの悪いことを！誰にも手なんか出してないわい！」

「そうね、出していたら今頃智也君はここにはいないものね」

頬をうつすら赤らめておっとり色っぽい静流さん？それなら僕はどこにいますのでしょかね!!

「小夜美も少し間違っているわよ」

「なんにも間違っていないでしょ？」

おっと、おっとり美人お姉さまの称号をお持ちの最強様が、どうやら俺の擁護をしてくれるらしいぞ。こいつは心強い。

「なんで、喫茶店の美人店長代理がそこに入っていないのかしら？」

「ここぞとばかりに参戦してきちゃったよ……」

「あのね静流？智也君と出会ったのは私がお先なのよ？高校生の智也君と過ごした思い出の量が違うの、わかる？」

思い出の量と食べさせられたパンの量が見事に比例しているけどな。

「それを言うなら、大学生になってから一緒に過ごした時間は私のほうが多いわね」

主に『ならずや』での思い出しがありませんか？張り合う意味がわかりません。てか、なんの話だよこれ。

余計な口を出すと、間違いなく朝までコースになることは明白。ここは黙って座しておこう。

「へえ、静流……あたしとやろうっての？」

「すぐに野蛮な方向に持っていくこうとしないでよ。ただ事実を言っただけじゃない」「事実？ぽつと出のくせに」

「それでもないわよ。大体、面白い男の子がいるのよって紹介したのは小夜美じゃない

の

「こうなるってわかってたら紹介しなかったわよ。あの時は健君があくとか言つてたのにや」

「それはそれ、これはこれよ。人の心なんて移り変わるものなの」

「ま、妹の彼氏に惚れているよりは健全だけど、だからって親友の気になる男の子にまでつて……そういう属性なんじゃないの静流？」

「何を言つてるのよ！智也君は誰のものでもないでしょ！」

い、居た堪れねえ〜！

テーブルを見ると、空のジョッキが眩暈を起こしてしまいそうなほどに溜まつている。店員が持つていくスピードを凌駕している!?

この二人、自分が何を言つてるのかわかっていないんだろうな。それとも、年を取るところこまで明け透けな会話が出来るのだろうか？どうせなら記憶を失くすほどに飲んで欲しい。俺は何も聞かなかつた事にするから！

そもそも、静流さんに気に入られるようなことをした覚えがない。伊波が好きだつたつていうのも初耳だし。あの不貞の輩め、彼女の姉までもその毒牙にかけようとしていやがつたのか……これだからイケメンは困る。

「あ〜！そういうこと言っちゃうんだ！」

「無駄に小夜美が私を智也君から遠ざけようとするからでしょ」

もうこの二人、俺がいることを忘れてないか？それならそれで構いませんけどね。どうぞ、お二人で好きなだけクリークして下さい。俺は適当にマイペースで吞ませてもらいますから、あとは好きにしてくださいな。

「そこまで言うなら、いつそのこと聞いてあげようか？ねえ、智也君？智也君はあたしと静流とどっちと結婚したい!!」

「ぶはっ?!?!」

すっかり俺がいることを覚えていたらしい。とんだフレンドリーファイアに貴重なアルコールを拭いてしまったじゃないか!

「智也君ならわかるわよね？あたしのが料理も美味しいし、一緒にぶざけ合えるし、お互い気を使わないで楽しい関係が築けるって」

小夜美さん、あなたのおぶざけは大方俺の人体に多大な影響を与えているんだぞ。自覚してくれよ。

「智也君、私のほうが……その……」

「あ、今ので決まったかも。静流さんに一票」

「なんでよお!」

だって、面と向かって言うのが恥ずかしくて照れて何も言えなくなるなんて、こんな

美人がそれをやったら卑怯じゃん。俺じゃなくても、ちよつと胸きゅんしちゃうでしようよ。なあ？ 全国の男子諸君。

「小夜美さん、今の自分と静流さんを見てみなよ。照れずにアピールする自分と、顔を赤くして何も言えなくなる静流さん。どっちのが可愛い？」

「あたしだって顔が赤いじゃない！」

「それアルコールじゃんか！」

「静流だつて酔ってるだけよ！ むしろ自分にも酔ってるから性質が悪いんだから！」

「自分に酔ってるって……ってどうか、二択ならつてだけで、ぶつちやけ俺は別に好きとかそういうんじゃないか……」

ちびちびと呑みつつ、なんとか宥めようと試みる。この人は何をヒートアップしてるんだか……まだ学生の俺に結婚なんか早いだろ。小夜美さんはなあ、もうちよつと落ちてけば引く手数多なんだけどなあ。

「智也君……」

少しの間静かだった静流さんが、とろんとした目で聞いてきた。

「ハネムーンはどこに行こうかしら？」

手を頬に添えて嬉しそうに言うものだから、俺も小夜美さんも絶句してしまふ。いやいやいやいや！ よ、酔ってるだけですよね？ そうですよ！

「わ、私ヨーロッパだったらず少しは案内も出来るし、凄く楽しめると思うの」
真剣と書いてマジだ。酔っ払いのマジだよこれ！

「小夜美さん？」

「なに？」

「あなたの親友を止めてください」

「こうなったのは智也君の責任でしょ」

「原因を作ったのはあなたでしょうが！このままじゃ俺の人生決まっちゃうんですけどー」

「まさかあ、静流だって良い大人よ？お酒の席での冗談でしょう？」

「な、なるほど。さすが親友ですね。静流さんの高度な冗談に気付けないとは、俺もまだ……」

「あ、明後日ならお父さんもお母さんもいるから、まずは挨拶よね」

「智也君、ごめん。これ本気だわ」

「だから言ったじゃないかよ！」

「多分、静流の中では子供を抱いて微笑んでいる家族計画が描かれているわ」

「冷静に考察していいので止めて下さいよ！」

「ん〜……いいけど、止めたら智也君、今度あたしの買い物に付き合ってくれる？」

「買い物程度いつでも……」

「やったあ！どんなの買おうかなあ、智也君との婚約指輪♪」

「店員カモーン！スピちゃん二つ大至急！」

どっちを選んでも結果は変わらんらしい。なので、二人には大人しくおねんねしてもらうこととする。

兵二人夢のあと……今後、この二人を相手にするときには言動に気をつけよう。不用意な一言でルートが確定してしまう。ていうか陵の話じゃなかったのかよ、この人達……

今日はシチューにしよう、コトコトお鍋で野菜を煮ていると、私の髪を弄りながら背後から一蹴が話しかけてくる。

「なあ、本当になんにもないんだよな？」

「もく、一蹴が心配することなんてなんにもないよ」

ちなみに、なんにもないの？というのは、三上さんと私の間に男女の関係があるので、は？という事で、更にこの質問の回数は七回を越えたところ。

嫉妬してくれるのは嬉しいのだけれど、なぜここまで一蹴が三上さんを意識しているのかはわからなかった。

「神に誓って？」

「静流さんに誓って」

「……静流さんを出すのは卑怯だなあ」

静流さんに弱い一蹴。それもどうかと彼女としては思うんだけどなあ。

「あんまりしつこいと、今日のご飯は日の丸だけにしちゃうんだからね」

「それは勘弁」

何を心配することがあるの？私が三上さんとどうにかなるわけなんてないのに……一定の距離から近づけてくれないのに、どうにもなるわけない。

「そんなに気にすることないんだからね？三上さんだって、私をそういう対象に見てないんだから」

「ああ、それは見てればわかったけど」

あれ？あつさり納得するんだ。あれだけしつこく聞いてきたのに。それはそれで寂しいというかなんというか。

「それなら……」

「でも、いのり屈託なく悪態をついてたろ？」

何も気にすることないって言葉を紡げず、カウンターを打たれてしまった。

悪態って、それこそ気にすることないじゃない。つまり、それだけ苦手だって事だもん。

「それがどうかしたの?」

そう考える私とは裏腹に……

「いや、最近いのりき、元気なかつたりしたじゃん?」

「そんなこと……」

「元気なかつたつて。否定しても、嘘だつて俺にもわかるくらい」

誤魔化し切れていなかった。それだけ一蹴が私を気に掛けてくれている証拠だけだ。今だけは気付いて欲しくなかつたな。

「でもさ、あの人の前だとそんなことなくて……俺が見たことない顔を見せたりしてさ、そんな自分のこと気付いてないだろ?」

そんな的外れでなければいけない指摘。なのに、心の奥が一蹴の言葉で疼いたのを自覚した。

自分でもわからない疼きに戸惑いながらも、私はいつもの笑顔を貼り付ける。

「それこそ気にしなくても良い事だよお。三上さんってほんとに子供みたいな人だから、はつきり言わないとわかってくれないの。だから……」

「だから、落ち込んでいても忘れられる?」

ああ、今日の一蹴は私を逃がしてくれない。自分でも知らない私を曝け出そうとしてくる。

自分でも知らないなら……知らないままで良い。

「いのり、俺不安なんだよ。落ち込んでいても笑顔で誤魔化そうとするから、深く聞けねえ。聞いても答えてくれなかったらって思うと、怖くて聞けなくて……」

良いんだよ、一蹴は知らなくて。ううん、知っては駄目なの。だって、真実を知ったら一蹴は私を嫌いになるでしょ？自分を許せなくなつて苦しむでしょ？わかつてるの。わかつてるから……だから、言えないよ。

「一蹴……ごめんね、ごめんなさい」

私の返答に、一蹴は辛そうに顔を歪ませた。そんな顔、させたいわけじゃないのに。「どう、してだよ。俺じゃあ頼りになんない？いのりが悩んでるって知って、なんとかしたいって俺は思ってるのに、俺には話せない？」

話せない、よ。好きだから、大好きだから、話せないの。

胸の内には罪悪感という名の雨が降り続け、晴れ間を見せてもくれない。

私は良いの。でも、せめて一蹴だけでも笑っていて欲しい。この罪は私だけのもの。一蹴が背負う必要なんて、一つもないんだから。

静かに頷くと、そうか……と呟いて一蹴が私から離れる。

今の一蹴を見るのが怖くて、私は背中を向けたまま、偽ることの出来ない言葉をそつと口にした。

「ごめんね一蹴。それでも、一蹴が大好きなのは嘘じゃない。嘘じゃ、ないよ……大好
き、一蹴」

私の言葉が届いて数秒、俺も同じだよと力ない言葉が届いた。

なんとかしないと。飛田さんと二人でもう一度話して、こんなことは終わらせよう。

密かな覚悟、でも夢描いた二人の未来を確かなものにはしてくれなかった。

『トビー1、こちらトビー2。どうぞ』

「間違い電話か、着信拒否しとくか」

『ノリが悪いなあ。まあ、いいや。狙撃対象が公園内に入った。なんか、今にもお前を刺しそうな覚悟の決まった顔をしている。腹にジャップ入れておいたほうが良いかもしれない』

「ねえよ」

『今からコンビニに走れ！俺は智也の家で待機してるから、何かあったらいつでも救急車を呼べ。智也の部屋から見える場所で良かった。遊びながら鑑賞出来るもんな』

「お前は何もしねえんだな。映画じゃねえんだぞ」

『いのりちゃんに恨まれているのはトビーだろ？恨み恨まれ仲良いな。付き合っちゃえよ』

「殺伐とした付き合いになるだろうぜ。じゃあな」

『上手くよろしく。あつ！智也お前、ピカチ〇ウは卑怯だろ！』

「お前らスマブラってんだろ？そうだろ、ああ？」

信の話から察するに、小娘は何かしらの決意をしてトビーに向かつていったらしいが

……

「邪魔、します」

決意決壊してんじゃねえか。

人の部屋に入るなりまたも面倒臭い雰囲気漂わせてやがる。信がいることにも気付いていない。

信と顔を見合わせて、グツと親指を立てる。小娘が強面ツンデレに勝てるわけないんだよ。俺等のマスコットだぞ？万夫不当だこの野郎。

「よお、お前はめパターン禁止だと言ってんだろ！」

「はめられるお前が下手なんだって」

「ああ、そういう事を言うのか？そうかそうか。お前は武器使用禁止な！ホームランバッドなんか以ての外だからな！」

「あ、ちようどスターゲット」

「やゝめろろよお〜！」

「お前、良い年して本気で泣きそうになるの止めろよ、恥ずかしいな」

死んで腐って腐臭のする魚の目が、俺達二人を捉えて……

「……ふっ」

鼻で笑いやがった。

「おい小娘？今のはどういう意味だ？三秒で答えろ、答えなければジェノサイドだ。はい、3. 2」

「今日の天気と同じように、悩みがなさそうので何よりですね、と」

「おい、まだ1を言ってるねえだろうが！」

「お前、年下にここまで馬鹿にされるとか……」

「みなもちゃんはこの舐めた態度を取らんわ！」

みなもちゃんとは同じ生き物とは思えんわ！

「今日は稲穂さんもいらっしやっただんですね、こんにちわ」

「こんにちわ、いのりちゃん」

お〜い、俺への態度と違うね？親密度が違うからだよな？ほら、小学生の男子が好きな女子につんけんする現象と同じだよ。

「二人で何をしていたんですか？」

「ん、智也が暇だつて騒ぐから仕方なく相手していたんだ」

「あく、なるほど」

「なるほどじゃねえよ！ 普段俺がガキみてえなことばつか言つてるみたいじゃねえか
！」

「そうですよね？」

「そうだな」

え、なんなのこいつ？

信と以心伝心を図ってみる。

（信、トビーがきつちり凹ませたんじゃなかったか？）

（部屋に入ってきた表情を見る限りは間違いない。ただ誤算があるとすればだ）

「三上さん、そんなに稲穂さんを見つめて、好きなんですか？」

（お前の馬鹿効果が絶大だったことだな）

（俺の魅力の成せる業だったか……）

「てか小娘、ほんと最近舐めすぎだからな？ 大人な俺でも怒るぞ」

「大人な俺さんが見当たりませんか？」

きよろきよろと部屋中を見渡しながら、薄ら笑いを浮かべやがる。よし、本気で怒つた。これ俺のぶっちゃんがぶっちんでプーチンだよ。

「智也……なんか知らないが、今のお前泣けてくる」

「信……俺はキレたよ。ここまでキレさせるなんて、お前はすげえよ陵」

「私じゃなくて、三上さんの沸点の低さが凄いですよ?」

天使の笑顔だな。墮天してるけどな!

「今日は真面目に勉強しようと思っただが、止めだくらあッ!!」

「いつもはしてないのかよ」

「私はしていますよ」

「信、あれやるぞ!」

俺と信が考案した真剣勝負。俺の伝家の宝刀を抜かせるとは……泣かせてやる。

「あれって? 本気か智也!?!」

「ああ、もうこれしかないんだ」

「だが、あれをやればお前……お前はッ!?!」

「信……悪い。でも、これをやらなければ俺はもうッ!」

「そこまで追い込まれてたなんて……クソッ!」

「……なんの茶番ですかこれ」

まあ、お約束の茶番だけだな。そそくさとゲームをセットし、専用コントローラーも
といマイクを取り付ける。

「お前は俺を舐め腐っているようだが、もう我慢の限界だ！ここで上下関係をはつきりさせてやろうではないか！」

「……はあ」

展開について来れていない小娘だが、無理にでも参加させてやろう。

「いいか、今からやることはこれから説明するが……参加しなければ、君の両親に虚偽の報告をし、毎日我が家で俺の相手をしてもらう」

「相手してもらおうのはお前かよ」

「しかも姑息ですし」

「ごちやごちやうるさいな」

「それで、いったい何をするんですか？」

「一発芸」

「………はい？」

一瞬フリーズしたな。事態が飲み込めていないようなのでもう一度。

「一発芸を披露して優劣を決める」

「そんなことで優劣が決まるんですね。その提案をする時点で、私のほうが大人かと思えますけど、稲穂さんどうでしょうか？」

「そこは突っ込まないでやってよ。本人は至って本気なんだからさ。ただ、提案が幼稚

なだけで」

あの親友の計画ぶち壊してやろうか？せめてお前は俺の味方でいろよ片割れ。

「それにですね、やったとしても私にメリットがありません」

小生意気な、つまりは特典を付けろと？

「よかろう、ならばお前のが上ならば特別に報酬をやろう。そうだな、メリットだけにシャンプーのメリ「週四日を三日でお願いします」だから喰うなよ！お前楽しんでるだろ!？」

「若干、三上さんを虐めると気が晴れるのでつい」

本音を隠さなくなったか……ふふ、俺の中にあつたわずかな良心が今ので完璧に払拭されたぜ！

「信、お前も本気でやれよ！」

「俺も参加するのによ！」

「親友なんですよね？なら、参加という事で」

「い、いのりちゃん？」

バチバチと俺と陵の間で火花が散る。ふん、小娘の顔にありありと書いておるわ、俺を屈服させればイケメンとイチャパラだとな。誰がお前を楽園になぞいかせるものか！俺に跪き頭を垂れさせてやる！

「なら、お前に順番を決めさせてやろう。何番目が良い？」

「最後で」

「俺はトリがいいんだがな」

「断然最後でお願いします」

「お前の俺への嫌がらせの執着凄いな!？」

「じゃあ、俺は二番目で」

あれあれ？本命の俺様が最初とか、誰も期待してねえよ。視聴者の皆さん肩を落として唾然だよ。

「ほ、ほ、そんなに自分の芸に自身があるど？」

「えっと、それなりには」

な、んだと？このなんの芸もない小娘に隠された才能があるとでも？いや、白河のピアノの後輩でもあるはずだったな。だがしかし、ピアノなぞこの部屋にはないぞ？となると他に何が……

「悩んでる振りはいいから早くしろよ」

「お前も茶番に付き合えよ」

もうそろそろ面倒臭くなってきたらしい片割れが急かしてくるため、俺はミュージックをスタートさせた。

「え、僕の為にわざわざ遠路遙々足を運んで下さって、ありがとうございます。思えば二十年前の春ですか」

「前置きはいから歌えよ！」

「おっと催促の声だ。それではご静聴してろや小娘、マジ潰す！」

「何をするんですか？」

「聞いていればわかるよ。まあ、下らないとだけは言っておくけど」

「はあ」

「いどうぞゴラア！『Lady!!』」

are You Lady Im ニューハーフ！

始めよう やれば出来る きつと 絶対

あちきナンバワ~~~~ン！

「あの、ノリノリで踊り始めましたけど」

「完璧に覚えたよ、俺もね」

「えッ」

チエツク メイクパンツパッド

イツツ ホウ キョウ シュジュツだー

スターダム描き描くおくとめ

敵しい世間 乗り越え ゴーアへッソド

ナニがあつたつて ナニがなくなつて

自分は自分だからふあゝいと♪

are you lady im ニューハーフ

胸を張ろう

一人 一人 笑顔と涙で 女超えろおくとめ!

are you lady im ニューハーフ

始めよう やれば出来る きつと 絶対

あちきナンバワ~~~~ン!

「……なんですか、これ?」

「ここら、どこかの吹奏楽部顧問みたいなこと言わない。あれな、ニューハーフの方々のドキュメンタリーを観て、本気で応援歌を考えた結果なんだよ」

「歌の割には真面目な理由なんですわ。ああ、だから泣きながら歌ってるんですね」

「ドキュメンタリーを思い出して泣いているんだ。純粹すぎてわら……本当に良い奴なんだ」

「今、滑稽なつて言おうともしませんでしたか?」

「そこまで悪意に満ちた言い方はしてないけどね」

最後まで歌いきった俺は、やりきった充実感で胸が一杯だった。

歌い終わった俺を、二人が拍手で迎えてくれている……のだが、若干苦笑気味なのはなぜだろうか？

「ふう、俺の渾身の芸はどうだった？」

感想を求めると、聞かれちゃったどうしようとしても言うように、微妙な返事が返ってきた。

「え、あく……よ、良かったですよ？オリジナルティ豊かで、ほんと感動？しました」

「おい、俺の目を見て言え」

「真面目な理由で作られたって知って、馬鹿には出来なかったってとこかな」

うらむ、どうにもオーディエンスの返しが悪い。今迄で一番のパフォーマンスだったと自負しているのだが。

「あ、じゃあ次は稲穂さんですね！」

「待てや！もうちよつと俺への賞賛はないのか!？」

「良かったって褒めたじゃないですか！この空気を早くどうにかして欲しいんです！このやつちやつたなあゝ的な空気を！」

上から目線の小娘の必死さにぐつと言いたいことを堪えた。あく、なるほどなるほど。そうですね、ようやくわかりましたよ。つまりあれですね？俺、失敗みたいなの？

下手な気の使われ方に悔し涙だよ！

「智也、お前はよく頑張ったさ」

「信？」

肩を叩かれて見上げると、信が親指を立てて二カつと爽やかに笑って見せた。

「あとは俺に任せろ」

なんと頼りになる背中だろうか。俺はその背中を敬礼で見送るのであった。

「じゃ、不肖ながらこの俺が親友の尻拭いのため、このうわあくな空気を変えてみせようじゃないか」

「陵、ポテチ食うか？」

「あ、私ポツチーあるんでよければ」

「お前等実は仲良いだろ!？」

無視された信から突っ込まれ、俺と陵は軽く拳を合わせた。ナイスコンビネーション

♪

ぶつくさと良いながら、曲を選択。その曲を確認し、俺は目を見張った。

「陵」

「なんですか？」

「とりあえずポッチーから口を離せ。伝説を見れるぞ」

「はい？何を言ってる……」

イントロが流れた瞬間、陵はポッチーを一気に食べて、食い入るように信へと視線を向けた。

「ですね。食べてる場合じゃありませんでした」

事態を把握したようだ。もはやこれは事件と言えるだろう。なぜならこいつが歌うのは……

「いくぜ？『マスターピ〇ス』」

事情により割愛させていただきます。理由は各自でお考え下さい。

曲が終わっても俺と陵は未だに放心状態だった。それどころか、陵に至っては涙すら流して拍手している。

「ふう、どうよう……」

漢の顔だ。そうとしか表現できないほど、今の信は世界の誰よりも輝いて見える。

そんな信に俺と陵は惜しめない賞賛を送る。

「さすがピーだな」

「素晴らしいです。本物はやっぱり違いますねピーさん」

「愛してるぜピー」

「大好きですピーさん。感動しました」

「ピーピーうるさいな！放送禁止用語に聞こえるから止めるよ！」

「だってピーだろ？（ですよね）」

「お前等わざとだろ！そうだけでも言い方！やっぱ仲良いな！」

「陵と仲が良いだと？お前を弄る時限定だい！」

「ふう、堪能したし、さて次は小娘だが……俺達のクオリティを超えられるか甚だ疑問だな」

「稲穂さんを超えるのは無理です」

「俺は軽く超えられるとでも言いたげだな」

「ええ、幼稚園児のお遊戯会のほうがとても素晴らしいですし」

「……ほお、貴様さてはロリだな？」

「そういう観点じゃないですよ！?嫌味ですからね！」

「あく、はいはい。そうですね。この幼稚園の前ではあはあ言っただけど」

「業が深いなあ、いのりちゃん。さすが一蹴の彼女」

「……もう、なんでも良いです」

肩を落としてとぼとぼと前に出る。はてきて、二十四時間俺専用反抗期はどんな一発芸を見せてくれるのか……

腕を組みこれから行われることを瞬きもせずに見てやろう。そう意気込んでいたのだが、なにやら気の抜けるような言葉が耳に届く。

「じゃ、じゃあ……いい、いのりちゃんのなぞなぞた〜い……」

「言い切れないなら言うなよ!」

「恥ずかしいならやらなきゃいいのに」

顔を真っ赤にしながらかうくと頭を抱える。こ、こんなレベルで俺を超えろと言っていたのか? 自信満々だったこいつを少し哀れに思った。

「智也、まだわかんねえぞ」

「は? タイトルすら恥ずかしくて言えない様なアホだぞ?」

「馬鹿、もしかしたら問題が前衛的かもしれないだろう?」

「なるほど」

確かにその可能性は十分にある。舐めて掛かつては相手に失礼だしな。ここは気を引き締めて……

「し、下は大火事、上は洪水。これなあ〜んだ」

マジかこいつ。

あまりにお粗末な問題だ。もう使い古されて古代文明となりはてたソレを、人差し指を立てながら堂々と言うなんて……

「は?!まさかこれは、使い古されていると見せ掛けて近代的なぞなぞだな?」

「……ふつ、よく気付いたな智也。あの子がなんの捻りもないつまらない事を言うわけがないだろう」

「え、あ……ええ〜?」

俺達の察しの良さに陵は困惑を見せる。馬鹿め、俺と信がそんな事にも気付かないとでも思ったか!底が浅いんだよ!

となるとだ、下は大火事、上は洪水……考える。考えるんだ!真実はいつも一つとか言いながら、不可能トリックを自慢げに披露するメガネ小僧みたいに閃くんだ!

「はっ!そうか、そういうことか!」

「わかったのか!?!」

「ああ、こいつはとんでもないなぞなぞだな。普通に考えたんじやまず答えには辿り着かないだろう」

「辿り着くどころか追い越してませんか?」

「わかったぞ陵!」

「ほんとに人の話を聞かないですよね！」

頭の中に浮かんだ光景、下は大火事で上が洪水。これはそのままの意味なんだ。つまり答えは一つ。

「答えは新しい拷問だな！」

「それだ！」

「違います！どんな拷問ですか！」

な、んだと？

両手を絨毯につけ、俺は全力を振り絞って負けた投手のように項垂れた。

上は水攻め、下は火刑……そうじゃ、なかったと？

「馬鹿な……俺の答えが違う？なら犯人はどんなトリックを使ったと言うんだ！」

「三上さんはどんな思考回路をしているんですか！あと、犯人とか推理は必要ないですからね？」

「智也、お前の仇は俺が討ってやる」

「信、お前わかったのか？」

「ああ、どうやら俺達は複雑に考えすぎていたようだ」

「そうです、それです！」

確かに。俺には推理しなければという固定概念があった。それがまさか答えから遠

ざけていたなんて……とんだ笑い話だ。

晴れやかな顔で、信は陵に答えた。

「答えは……未曾有の大災害だろ？」

「それだ！」

「どれも違います！ある意味天才的な発想でびつくりします！」

「そ、んな……俺が、俺が負けた、だと？」

俺と同じ状態になり、二人で陵を見上げて答えを求める。

「じゃ、じゃあ答えはなんだ？俺達は何を間違えた？」

「智也は人生をまちがいたたたたたッ!!四の字はガチな間接技だろ!!」

不穏な発言を三上智也は断じて許さん！神に唾をかけようとも、俺に逆らうことは許

さんわ！

「答えはですね、お風呂です」

「……………はあ？」

四の字を解き、信も俺もぼかんと口を開けた。

お・ふ・ろ？お風呂っていうとアレか？国民的ヒロインが毎回覗かれる場所のことだ

ろうか？

あまりにあんなりな答えに、俺と信はごろんと床に寝転がった。

「ないわあゝ、お前ほんとないわあゝ」

「いのりちゃんつまんねえゝ」

「ていうか問題が間違えてんだろそれ」

「だよなあゝ。だって今時火を使う風呂なんて、少数民族だもんなあ」

「そうだろう？普通に考えて俺達の答え合ってるじゃねえか」

「もうちよつと捻った問題だそうよいのりちゃん。一発芸だからさあ、これ。それなのに普通のなぞぞととか……」

『ないわあゝ』

声を合わせて空高らかに言うと、それまで俺達の抗議を黙って聞いていた陵だったが、俯いて肩を振るわせ始めた。

あ、あれあれ？どうしたのかなあゝ？あまりに面白くて笑いを堪えている……

「そ、そんなに言わなくても良いじゃないですかあゝ」

わけじゃなかった。

隣の馬鹿と顔を見合わせると、俺と同じ顔をしていた。

(どうしよう泣いちやっただよ〜〜！)

「わ、私だって、い、いっしょう、懸命、頑張つて」

「そ、そうだよな！頑張つた！うん、お前は頑張つた！いやあゝ、良く考えたら面白かつ

たよなあ?」

「あ、ああ!面白かったよ!こう、意表を突かれたって感じで!」

「だよなあ!まさか今時なんの面白みもないなぞなたたたたたたッ!キーロツクは二年前に禁止しただろうが!」

「馬鹿かお前!いのりちゃんは一生涯俺達を楽しませてくれようと頑張ったんだろが!口滑らせるなよ!」

「い、良いんです。い、一蹴、も、これ、やると、困った顔、するしツ」

そら困るだろう。あのイケメンこんな子供騙しに毎回付き合ってるのか……:すげえな。素直に尊敬するわ。

「ごめんねいのりちゃん。悪ふざけが過ぎたよ、俺達が全面的に悪い。ごめん」

「え、謝るのか?俺も?」

「お前が発端だろうが!」

無理矢理信に頭を押さえつけられた。

今この瞬間わかった世界の常識が。この世の最強武器はエクスカリバーやグングニルじゃねえ。女の涙だよ、間違いねえ。

その後、なんとかかんとか小娘をあやして泣き止ませ、しょうがねえと俺は信を連れて渋谷ママさんの車を借りて外に遊びに連れ出した。

納得いかねえ〜！

「で、なんでこうなる？」

エアホッケー台を挟んでやる気のない俺と、少し楽しげな陵が対峙し、真ん中には信が審判気取りで立っている。

「私これ好きなんです。一蹴と前に何度もやってたんですよ」

あゝ、そうですか。帰って良い？ もしくは近くの吉〇家で飯を食ってるから、二人で好きなだけやってろ。

「そうなんだ、それなら良かった。で、その不貞腐れている大人」

「なんだよ？」

俺に顔を近づけ、やたら真剣な顔で囁いてくる。

「今度は泣かすなよ？ これは泣かせたお詫びなんだからな」

「どんな接待だよ」

だがまあ、泣かせたという呵責は小さじ一杯はあるかもしれない。仕方ない、ここは俺が大人になるしかないか。

パックが陵の方へ滑っていき、それをマレットで押さえて不敵な笑みを浮かべてくる。なんでそんなにやる気なんだよこいつ。さつきまで泣いてたんじゃねえのかよ。

「ふふ、ついに三上さんをぎやふんと言わせられる機会がきました」

「いつもお前の舐めた態度にぎやふんしてるけどな」

「私、本気でやりますよ?」

「軽く捻ってやるよ」

軽くジャブを打ち合い、審判の開始の声。

「じゃあ、スタート!」

かったるくため息をついて、守備の構えをすると、なにやら陵は打ちもせず視線を逸らしている。しかも、ちよつと狼狽しているようだが、わけがわからん。

いつまでも打ってこないから、何事かと陵に問いかける。

「おい、早くしろ。どうした?」

「いえ、あの……とても言いにくいというか、打てませんと言うか……」

何を言うとするんだこいつは?俺から目を背けて慌てているようだが……

「だって、三上さん、開いてるんですもん」

「は?開いてるって何が」

「……あそこのチャックがです」

「それを早く言え馬鹿!」

まさかこゝまでずっと開いてたんじゃないよな!?

慌ててチャックを確認しようと下を見た……

——カコン

瞬間、目の前から何かが落ちた音がして得点を見ると、陵に一点が入っていた。

ちなみに、チャックは堅牢だったけどな！

「て、てめえ……」

「悲しいです、三上さん。まさかこんな子供騙しに引つ掛かるだなんて……悲しみを通り越して笑ってしまいそうです」

とんだ女優だな。まさかこの俺様が騙されるとは。今からでも女優を目指せよ。サスペンスの犯人役限定でな！

「はっ、そうかそうか。ここままでえげつない手を使うとはな……甘く見てたよ、小娘」

「これで本気になりますか？」

「本気？はは、冗談じゃねえ」

パックをマレットではなく手で押さえ……

「憤怒だ馬鹿野郎」

パックをそのまま手で思い切り滑らせると、超スピードでゴールの端に吸い込まれていった。

「……智也、大人の対応はどうした？」

「知るか！この小娘は徹底的に叩き潰さねえと性根は直らん！もう一度声が枯れるまで泣かせてやるからな！」

「ふふ、それでこそ三上さんです。私も楽しみです……年上を泣かせてしまうなんて、初めての経験ですから」

俺の人生でここまで全身全霊でエアホッケーをしたことはないだろう。

おふぎけなしでプレイすると、中々点が入らなくてゲームが長引き、そのうちギョラリーが出来始めた。

「お前の彼氏でくべそッ！」

「三上さんの親友でくべそッ！」

「俺の親友行き倒れ野郎！」

「三上さんの親友ホモ説！」

「お前等いい加減にしないと本気で泣くぞ！」

一打毎に悪口を言い合い、勝負は結局ノーゲーム。なぜなら……

「もう、止めてくれ……」

信の心が折れたからな！

勝負が終わり、俺と陵は蟠（わだかま）りの消えた顔で握手をする。

「やるじゃないか」

「三上さんも」

「お前等が殺つたのは俺の心だけどな！」

あの程度の悪口百個だけで折れるなんて、メンタル弱すぎだろ。何年俺の親友やってんだよ。

「まったく、でもまあこれで気が……」

「今度はクレーンで勝負しようぜ！」

「良いですね！受けて立ちます！」

「済まないんだな。もう勝手にしてくれ」

今日はもう燃料切れの信は休憩所の椅子へと向かい、俺と陵はクレーンゲームへとうきうきしながら向かった。

クレーンゲームの種類は多く、簡単なお菓子系から難しいフィギュアや大きなクッション等様々だ。

どれが良いだろうと迷っていると、陵が立ち止まってじっとケースを凝視していた。

何を見ているのかと覗くと、『キュロツシー』というラリっている人参のご当地ゆるきやらのクツションだった。

「それ、欲しいのか？」

「いえ、ただ可愛いなあって思つて」

か、可愛いか？なんか涎垂らして笑ってるんだけど。こんなの見かけたら普通に通報ものだろう。それを可愛いって、頭大丈夫か？

「うっわ、キュロツシーじゃん、チョー可愛くね？」

「マジやばなんですけどお〜」

俺達の後ろから頭の悪い声が聞こえたが、マジか。こんなのが流行ってるのかよ。この国終わってるだろ。

「これにしましょう」

「無理」

「なんでですか！可愛いじゃないですか！可愛いですよね!？」

「気持ち悪いの一言しか思い浮かばねえよ!」

正視するのも堪え難く、俺は目を逸らしてその物体を視界に入れないようにする。車に酔ったみたいに気持ち悪い。

「これにします」

「決定かよ」

どれどれ、ワンプレイは二百円か。ちよいと高めなのが腹立つな。こいつにそんな価値ねえだろ。むしろ生産者の方々はこんなキャラを許していいのか？良いはずがない

!

「じゃあ、私からやりますね」

こいつはこのキャラのどこに魅力を感じてんだよ！俺が時代に追いつけていないってレベルじゃねえぞ！

ふんすと意気揚々と小銭を入れて、位置を定め……られずに一番端までクレーンが移動して止まった。

「おい」

「あ、あれ？これこつちを押せば止まるんじや、あれ？」

「陵、念のために聞くが、クレーンゲームの経験はあるのか？」

「舐めないで下さい！」

お、おう。そうか、俺の勘違いか。たどたどしい操作だったからつい素人だと決め付けてしまった。

「一蹴がやっているところを何度も目に焼き付けています！」

「だろうな」

どうせそんなとこだらうと思っていた。だってどう見ても初体験なのがわかる手つきなんだもんよ！これで取れたら奇跡だ。空間が歪められでもしない限り確実に無理だろう。

「門前の小僧なんとやらです」

「門前払いされていることにも気付かないのか」

クレーンはクツションの端に辛うじて当たっただけで、空気を掴んで戻ってきた。何も掴めなかったクレーンを呆然と見守る門前払い。

「……店員さんに抗議しましょう。この台は壊れています」

「とんだクレーマーだな。ていうか下手過ぎだろ」

「違います！ポタンが、このポタンが壊れていただけなんです！」

「現実見ろゆとり」

現実から目を逸らす小娘の体を横にずらし、俺は五百円を投入。

「三上さん、五百円も使うんですか？」

「五百円で三回出来るんだよ」

「なっ!?そんなこと聞いてません！卑怯です！」

「そういう仕様なんだよ！」

「納得いかないので、一回私にやらせ「金の無駄はしない主義だ」勝負ですよねこれ!?」
こいつにやらせたら取れるものも取れなくなる。

えっと、クツションが微妙に斜めになっているから、前傾に調整しなきゃならないのか。

一回目、俺は陵が最初に止めた位置の少し前に設定した。

「三上さん何しているんですか？それじゃあ取れないのは素人の私でもわかりますけど」

馬鹿にしたように含み笑いをしながら言われ、正直引つ叩いてやろうかとも思ったが、なんとか怒りを納める。好きに言ってる素人が。

アームが開き、クッションをちよつとだけずらした。

「だから言つたじゃないですか。空気を持ち帰つてきましたよ」

「これで良いんだよ！良いか？これは掴んで取るんじゃないやなくてだな、三回を有効利用するんだよ」

「何を言ってるんですか？」

これだから素人は困る。良いからその俺を苛立たせるためだけの口は、自分の指を啜えていればいいさ。

二回目はさつきよりも少し手前に設定し、さらにクッションを前進させる。

「いいか？こういうタイプはアームで上手く位置を調整して……」

三回目、良い位置に調整したクッションを、頭から倒すように動かしてやると、あつけなく穴に転がり落ちた。まあ、元からの位置が良かったんだけどな。前にやった学生とかが何度もずらしていった結果だろう。

「……嘘」

「で、この通り取ったわけだが、さつきまで馬鹿にしていた小娘。俺に何か言うことはないか？」

ぐむむと悔しそうな顔をしながら、ふんと顔を背けやがる。

「に、人間一つは取り得があるんですね。将来の役に立ちそうにないですけど」

よし、今度こいつが泣き出したら、追い討ちをかけて更に泣かせてやる。ガキの頃、彩花の背中にバツタを入れた時、あいつはあまりのショックに近所を走り回って泣いた。それ以上に泣かせてやろうと彩花に誓った。

で、クツションを手にしたはいいが……

キヤロツシーを目に入れる。眩暈を起こした。

こ、こんな呪われたアイテムが部屋にあることを想像すると、寝不足でフラフラな未来が見え、ちよつとだけ震えてしまう。

この呪われたアイテムをどうしようか考えていると、羨望の眼差しを向けてくる小娘一人。ま、こうするのが一番だな。

「ほら、やるよ」

「え？でも、三上さんが取ったんじゃ……それに、今坂さんにあげたらきつと喜びますよ」

俺にあいつを呪えと？

「唯笑を犠牲に出来るかよ。いらぬなら捨てるしかないが」

「なんてことを?! こんなに可愛いのに捨てるなんて神への冒瀆です!」

このキャラは生産者を冒瀆しているけどな。

「うるせえなあ。いるならやる、いらぬなら捨てる。どっちだよ」

「捨てるなら貫きます! この子が可哀想じゃないですか!」

「この子なんて可愛い表現出来る生物じゃねえだろ」

まあ良い。こいつに呪われて悪夢に魘(うな)され続けるがいい。お祓いしてから持つ事を国民の皆様にはお勧めする。

そんな呪われたクツシオンを、陵は本当に嬉しそうに抱きしめながら……

「三上さん」

「ん、なん——」

「ありがとうございます。大事にしますね」

初めてだった。こいつの心からの笑顔なんて、初めて俺は目にしたんだ。

言葉を紡げずに、ただただその笑顔を俺は見ているしか出来なかった。

ああ、こいつはこんな顔で笑うんだな……

見ないようにしていた、こいつの顔をずっと。見なくても良いと決めていた、こいつの顔なんて。見たくないと思っていた、こいつの素顔なんて。

初めて出会った時、俺は何を見た？こいつに彩花と同じ匂いを感じていたんだ。

嘘で塗り固められているならそれで良かった。俺に素顔なんて見せてくれなくても良い。心の奥底にある笑顔なんて……

「三上さん？」

そうだ、俺はこいつを遠ざけたかった。理由なんて自分でも知りたくない。あの夕暮れの公園、あの時の素顔、俺はそれが怖くて仕方なかった。

もう、二度と出会いたくなくて、でも出会ってしまって、だから線を引いたんだ。陵にじゃない、自分に引いて近づかないようにした。その心に入り込まないように。

胸が、痛い。

「三上さん聞いてますか？」

「ん、ああ」

会いたい。彩花、俺お前に会いたいよ。確かめたい事があるんだ、どうしようもなく今すぐに確かめたいんだ。彩花、頼む。頼むから……

「よし、それじゃあ十分遊んだし、時間も時間だからな。帰るぞ」

「時間って、まだそんな時間じゃ……あ、三上さん待って下さいよ！」

——お前を今すぐ抱き締めさせてくれ——

「……………いまで、か」

横から見えた智也の表情と、いのりちゃんの笑顔。

まさか、とは思っていた。そう思えてしまうほどに智也の彼女に対する態度は異常だった。近づこうとして、遠ざける。あべこべな態度。これまでの智也にはない行動が不思議で、もしかしたらとは思っていた。

確かにいのりちゃんは彩花ちゃんに驚くくらい似ている。でも、それでどうこうなる智也じゃない。そんな軽い気持ちは何年も胸に抱いているはずがない。

でもな、智也……もういいんじゃないか？隣にいたいと思える人と出会ってしまう。そこに理由なんてない。ふとした事でどうしようもない事なんだ。

知っているはずだ。ちよつとでも何か違う選択をしたなら、今の自分はなかった。今の自分の隣には別な誰かがいたかもしれない。例え、お前がそれを望んでいなくても、どれだけ彩花ちゃんを愛していても。それはしようがない事なんだ。誰も責めやしない。

もしも責める人間がいるなら、それは恋愛で傷ついた事のない者だけだろう。人は出会った瞬間から別れが用意されている。どんな形にせよ、それはどうにも出来ない事だ。でなければ、今頃初恋だけで恋人達は終わる。セカンドラブなんてしない。

二人を見ながら、俺は彩花ちゃんに心の中で謝る。

ごめん、彩花ちゃん。俺、自分勝手だけどき、誓ったことがるんだ。あいつの心に降る雨をどうにかしたい。救えなかった俺が、今度こそあいつを救うんだ。これは誓約と言つても良い。その為にずっとあいつの隣にいた。誰よりも優しい嘘をつくあいつに、もう嘘をつかせたくなんてない。

だって、初めて見たんだ。あいつの自分の気持ちに戸惑う姿なんて。見ていればわかる、あいつがなんで動揺したのかなんて。あいつに傘を差し続けてきたけど、俺も唯笑ちゃんでも涙まで拭えなかった。いいや、むしろそのままが良いんだと、今はまだ……そうして見守ってきた。見守り続けて、そしてようやくだ。やっとで智也が共に傘を差せるかもしれない女の子が現れた。今の俺の気持ちなんて、唯笑ちゃんだけしかわからないだろう。

二人が共にあれなくても良い。一蹴と幸せになるのならそれでも構わない。だけど、ただ一つだけ俺は願う。

———どうか、あいつにもう嘘はつかせないでくれ———

それだけが俺の望みだ。笑えなくても、泣いても、苦しくても、悔しくても、辛くて

も、痛くても……それでも嘘を止める。俺が、あいつの背中を押してやる。

「その為に、まずはいのりちゃん自身の問題を解決しないとだな」

と言つても、案外俺は大丈夫なのではないかと少しだけ期待していた。

なぜなら……

「だから歩くの速いですから！トイレでも我慢していたんですか!？」

「実は競歩の強化選手でな、来月から世界選手権に向けての合同合宿があるんだ」

「競歩の歩き方じゃないのに?」

「歩き方は人それぞれだろうが！人生つてのは歩き方がみんな違うから良いのであつてだな……」

「すぐにバレる下らない嘘をついた自分が悪いのに……」

「なんか言つたか?」

「何か聞こえましたか?」

あんなに楽しそうな彼女の姿は、これまでただの一度も見ることがないからな。

さすが智也、人に心を開かせる特效薬だ。俺の予想以上でちよつとびつくりしている。まあ、だからこそ心苦しいわけだけど、これなら十分だな。

トビーとの事を忘れて悪態をつきながらも笑っている彼女に、心の中で土下座をしながら俺は二人に手を振って出迎えた。

部屋に戻り、俺は上着を床に捨て置き、ベッドに顔を埋めた。

「~~~~~ッ!!」

決して誰にも聞かれないうように叫ぶ。いや、雄叫びに近かったかもしれない。そうしなればいけないほどに俺は精神的に参っている。

この感覚を俺は何度も知っている。知らないわけがない。でも、それはこれまでと比べようのない感覚。まるで彩花を想う気持ちのような……

叫んで、叫んで叫んで、後ろを振り返り、そちらへふらふらと近寄る。

昔から変わらず鍵も掛けず、カーテンすら閉じることのない窓。その向こうには愛しさばかりが溢れている部屋が見える。

「彩花、俺……お前ともう一度会いてえよ」

幻でも良い、触れられなくなつて構わない。ただお前に会いたい。そうすれば何も問題はないんだ。

彩花への想いは確かにここにある。永遠不変の想いが、この胸に在り続ける。雨の中、俺はその想いが濡れないようにずっと守ってきた。

「朝、俺を起こしてくれよ」

この想いだけは失うものかと、碎けてしまわないように、壊れやすいソレを両手で

そつと抱いているんだ。

「馬鹿な俺の面倒を、またみてくれよ」

窓を開け、向こう側へと手を伸ばす。

もう二度と届かないほどに遠いそこに、触れられたらと願いながら手を伸ばす。届くはずもない距離を……

「彩花、俺、もつと強くなるから、だから」

この想いをどうか守らせてくれ。それくらい神様だつて許してくれるだろう？俺から彩花を奪つたんだ、ならこの想いを生涯を賭けて守ることくらい……許してくれ。

それだけが、俺の願いだから……

おかしいと、思わない事もなかった。

「で、調子は上々か？」

公園を避けて三上さんの家へと向かう道中だった。最近の私は正直開き直っていた。やってしまったことは仕方ない。それよりもこの先、一蹴といえるにはどうしたらいいかを考えよう。そう、ポジティブに考えていられた。

飛田さんに何を言われても、苦しくても、痛くても私は耐えられた。だつて、その後には私の気持ちが増えるってわかつていたから。

だから、飛田さんにどれだけ罵倒されても、そこへ向かう私の足取りは軽かった。むしろ、早くあの部屋に行きたくて小走りになっていたかもしれない。だって、あの部屋は温かかったんだもん。三上さんが馬鹿なことをして、今坂さんや稲穂さんがそこに巻き込まれて、私がそれを嗜める。そんな日常が楽しくて、この瞬間を切り取って永遠にして欲しいとさえ願ってしまうくらい。

最初は、変な人。二度目は、私と距離を取る変な人。なのに、今は私の心を軽やかにしてくれる人で、正直に言えば信頼すらしていた。

だって、慰めてくれてるって気付いていたの。落ち込んでいる私を慰めるために、わざと馬鹿なことをしてくれているんだって。稲穂さんや今坂さんも、それを知っているって協力してくれていた。そんなことも気付かないくらい鈍感じゃない。そんな気を使わない優しさをくれて、その事に心から感謝して、信じて……

「ああ、お前等が勝手に情報を流してくれるからな」
信じて、いたの、に——

公園から少し外れた路上で、バイクに座る飛田さんと……

「情報は正確に流すさ。俺を誰だと思ってるんだ？」

「ネジが四本抜けてるクソ野郎」

三上さんをこの目で見るとまでは。

「ほお、そんなにバイクに三上帝国の国旗を描いて欲しいのか。よし任せろ」
「どこからスプレー取り出してんだ、殺すぞ」

鈍感じゃ、ないもん。おかしいじゃない。だって、飛田さんが私の目の前に現れるのはいつも三上さんの家に行く時だったもん！そんなの、偶然だなんて思えるわけない！
思える、わけないのに……それなのに、私は自分に目隠しをした。三上さんが、いくら友達だからって、飛田さんとどうこうしているはずないって。

「馬鹿、だなあ、私……」

嘘が得意なのに、人の隠し事に気付こうともしないなんて、馬鹿だよ。
アスファルトに一つ、また一つと染みが出来ていく。

何、泣いてるんだろう。なんでこんなに悔しいんだろう。なんで、こんな、に……こんな、なにッ！苦しいの！胸が、いた、い。

「でだ、悪いトビ……」

「あん？」

「どうやらそこに隠れている小娘にバレちゃったらしい」

泣いている微かな音に気付かれ、住宅の陰に隠れていた私を三上さんが呼ぶ。

「おっ、出てこいよ。尻隠れてねえぞ」

足どころか、全身が震えて中々動こうとしてくれない。すぐそこにある現実を目にし

たくない。それでも、逃げることも向かうことも出来なくて、せめてこんな顔だけは見せたくない、涙を拭つて上を向いた。

いつまでも出てこない私に、ため息をつきながら誰かが……ううん、足音でわかる。三上さんが近づいてきて……

「よお、いるなら出て来いよ。年上への挨拶は常識だからな、覚えておいたほうがいいぞ」

いつもと変わらない顔で目の前に立った。

「な、んで、ですか？」

声が震えて上手く言葉に出来ない。聞きたい事は沢山あるのに、それなのに頭の中で渦巻くばかりで言葉になつてはくれない。

怖い。三上さんが私は怖くて仕方ない。どうしてこの人はこんなに……

「挨拶しないで質問つて、ほんと舐めてるな小娘」

こんなに平然と何事も無いようにしてられるの？

わからない。三上さんが何を考えているのかわからないよ。目の前で笑顔を浮かべているこの人は誰？私の知っている三上さんはほんとに三上さんだったの？

「どうしてつて、なんのことだ？」

「ひ、ださん、と？」

「ああ、それな。実は俺トビーからお前の事聞いてさあ。あ、勘違いさせるとあれだから言っておくが、知ったのは家庭教師の後だからな」

「しつ、て?」

知られていた?知っていた?知っていて、なのに私に普通に接していたの?でも、知っているからって、だからってどうして飛田さんと今もこうして会っているの?

決まってる。この人は私を、私と一蹴を苦しめる為に飛田さんと会っていたんだ。そうじゃなきゃ、私の歩く道や時間を教えていたような事をはなしていたりしないもの! 「なん、で、こ、こんなこ、と、するんですか?」

「ん〜?」

「み、三上さん、には、関係、ないの、に」

「まあ、そうだな。でもなあ、そうもいかないんだ」

その言葉に少しだけ私は期待した。もしかしたら私の知らない事情で仕方なく協力しているのかもしれない。そうよ、三上さんは誰かを好き好んで苦しめるような、そんな人じゃない。

子供が親に縋るような、そんな期待と不安を抱いて私は三上さんを見上げ……

「だって、俺お前の事、心から軽蔑してるからな」

縋る手を振り払われ、奈落の底に突き落とされた。

いつもの調子で話している三上さんの声が、遠い。近くににいるのに、ずっと遠くにいるかのよう、遠い。違う、元から近くになんていなかった。最初からこの人は遠くにいて、私の過去を知り、ずっと胸の内に怒りを燻らせていたんだ。

信じていたって、誰を？ 慰めてくれてたって、私を？ じゃあ、じゃあどうして……なんで！

「あの笑顔、も……嘘、だったんですか……？」

私と馬鹿なことをして、言い合って、笑って、そんな何もかもが嘘だったなんて、それこそ嘘ですよね？

「違うって、言って、下さい」

あの時間の何もかもが嘘だったなんて否定して！

「嘘でも、良いです。嘘だって、言って、下さい。信じます、から……三上さんの嘘を信じますからあツ!!」

救われていたんです！ 自分の嘘で一蹴を苦しめたくなくて、でもそれは自業自得で！ 誰に言われなくなつて自分で自覚していて！ 毎晩、一人で後悔に胸が押し潰されそうな毎日だった。そんな私を三上さんの温もりが救ってくれていたんです！ 手放したくない。例え何があろうと、私はこの人の優しさを失いたくない！

ずっと今坂さんや稲穂さん、伊吹さんが羨ましかった！ この人の家族になれている三

人が羨ましくて仕方なくて、いつか私もその中に入れてらつて。一蹴もそこにいて、みんなで笑うんです。三上さんが一蹴をからかつて、稲穂さんがそれに便乗して、今坂さんと伊吹さんは笑いながらそれを止めて、そんな三上さんを私は悪態をつきながら笑つて、そんな幸せな光景を夢に見ていて……そんな眩いばかりの幸福を夢、見させて。

三上さんの胸にしがみ付いて懇願する。全身が震えて、自分じや立つていられなくなりそうになるけれど、まだ立つていられる。この人の支えがあるから、だからまだ立つていられる。

私の精一杯の勇氣の懇願。そんな私の手を取り、三上さんは朗らかに笑つて口を開いた。

「これが現実だ、陵いのり」

幸福な光景を粉々に壊す残酷な一言を――

彼の忘却、彼女の贖罪

「ひどい、ですよ……こんなの、あんまりですッ」

悲痛に響くその声には微かな悔しさが滲んでいる。陵は俯き、肩を震わせて俺を睨み付けてくる。

そんな陵の肩を軽く叩き、一言ごめんなどと呟いて俺は正面を見据えた。

「俺だっけ好きでこんなことしたわけじゃない」

「そんなの、嘘です」

「嘘じゃないさ……だつてよ……」

「おーい、智也今どこにいる〜？すぐに会いたいんだけどさ」

「赤コーラ持ちながら近づくんじゃねえー！！」

正面の画面の中は戦場なんだからな！

キノコと配管工と恐竜とお姫様の熾烈な争いが繰り広げられ、すでに陵は俺の放った雷で海にぼちやんし、周回遅れとなっている。ちなみに、キノコは俺で配管工が信。恐竜はCPだ。

「私経験少ないのに容赦無さ過ぎじゃないですか!？」

「貴様は戦場でそんな命乞いで助かるとでも思ってたのか!？」

「お前もそんな装備で俺から逃れられると思ってたのか?」

後ろから嫌な音が聞こえ、確認する間もなくコーラが俺を吹き飛ばして海へと落とす。

「だあ!ぎげん!お前無双じゃねえかよ!」

このレースで丁度十戦目。だのに一度も俺は信に勝てず、陵はCPにすら勝てていない。

「はっはあく!見ろこの華麗なドリフトオオオツ!?智也!お前なにテレビの線抜いてんだよ!」

「うっさいわ!誰か一人だけが楽しむようなゲームなんてこつちから願下げじゃ!」

「正論ですけど、三上さんは私にそれを言う資格ないですよ?全力で排除しに掛かってましたよね?」

ジト目で横から見られ、俺は目を逸らして口笛を吹く。雑兵から片付けるのは戦場において基本だろ。

「そうだぞ智也。初心者に大人気ない」

「中級者の俺に容赦ないお前はなんなんだろうな!」

それにだ、なぜか陵はスタートだけは上手くて、良い感じに俺の進路妨害をしやがる

もんだから仕方なく排除してただけだ。他意はない。リア充爆発しろなんて器の小さい事は全然思ってたんでないなかった。途中ボムの出現するコースを選んだのも、そこを走りなさいと風が囁いたんだよ、うん。

「あく、クツソ！信、お前なに食べるんだよ！」

もちろん、俺と信がやる事にタダなものではなく、軽い罰ゲームを用意していたりする。今回の罰ゲームは、コンビ二で本日の晩飯を奢るというものだ。

「そうだなあ、俺はサイコロステーキ弁当とだんべえ特盛りにミルクティーで」

「オーケー。ゼロチキにだんべえミニに小さい牛乳な」

「露骨にグレードダウンさせてんじゃねえよ！」

「お前こそこれでもかど俺の財布を殺しにくるんじゃねえよッ！」

まったく、これだから俺のお財布事情を知っている片割れは困る。知っているなら少量の優しさを与えてくれ。

小さなため息を吐きながら、俺は財布を取り出して……

「じゃ、五分以内に買ってこいや雑魚」

何も言わずに上着を着て準備万端の最下位のパシリに放り投げた。

「俺はドリアンパンとバナ納豆パンなあゝ」

「どこにも売ってない商品は承れません」

いやあ、小夜美食堂にはあるんじゃないかなあ。俺と信は顔を見合わせて苦笑した。懐かしく苦々しい思い出だ。

そんな俺達を不思議そうに見る陵に、適当で良いと伝える。

「じゃあ行つてきますけど、私のも本当に良いんですね？」

「哀れな子羊に餌ぐらいなら与えてやろう」

「……ええ、それでは遠慮なく」

「おい、常識の範囲内でない？」

その晴れ晴れとした笑みに寒気を覚え、一応忠告しておく。

「常識の範疇にいない人に言われても」

「これだけ良くしてやつてるのに仇で返す気か!？」

「もう夜なのに女の子一人で買い物に行かせる人の何が恩ですか!?!痴漢が出たらどするんですか!?!」

「んなもん、俺への毒舌を披露してやれば撃退出来るだろうが!ぐだぐだ言つてないでとつと行け」

足を伸ばして陵の尻を押すと、なんともまあ女の子みたいな悲鳴を上げた。

「せせせせ、セクハラですよ!?!」

「あゝ、はいはい。どうでもいいから早く行けよ。面倒臭い」

「うわあ、この人本当にどうでも良さそうに……少しは女の子扱いしてくれても……」
釈然としない様子そのまま、ぶつぶつと文句を垂れつつ陵が出て行く。

完全に家を出たのを確認すると、信はそそくさと本棚を漁って一冊のアルバムを取り出してきた。それを別に咎めるでもなく、俺は適当な漫画を手に取りぱらぱらと流し読む。

「はあ、やつば何度見ても可愛いよなあ、彩花ちゃん」

「そうか？どこにでもいるだろ」

「そりゃ、お前は彼女を見慣れているからそう思うだけだつて。実際、音羽さんとかめちゃくちゃ可愛いのに、最初からお前は普通に接してたもんな」

「そうか？」

「そうだったよ。男子が盛り上がってるのに、一人だけ普通に話してただろ」

あまり覚えていないが、特別可愛いと思わなかったのも確かだ。

「双海さんにしたつて、彩花ちゃんに少し似ているつてだけで動揺しただけだし。でもまあ、この写真を見ればそれも納得だな」

「お前ね、彩花を美化し過ぎなだけだつて」

「美化しない方がおかしい。実際、彩花ちゃんモテただろ？」

「……見る目のない奴は多かつたな」

「見る目があるのは自分だけで良いってか？」

「うん、はい」

クツションを信の顔に投げつけるが、それでもにへらくつと笑うだけだった。

彩花が告白される度、俺は焦ったりした事はなかったように思う。多分、安心していいのだろう。彩花が俺の隣からいなくなるなんてあり得ないと……そんな、なんの根拠もない愚かな確信を抱いていた。あの頃の自分に戻れるなら、そんな自分を殴りつけるだろうな。

しばらく黙ったまま信はアルバムを感慨深げに眺め続け、最後のページまで目に焼き付けてから……

「そろそろ始めるぞ」

本題を切り出してきた。

彩花を見ていたのは、もしかしたらあいつに謝りたかったかもしれない。馬鹿だな、謝らなきゃいけないのは俺だつてのに。これから俺は彩花を悲しませてしまうのだから。

迷いはある。本当にこれでいいのかと。もつと良い解決方法があるんじゃないか？ そう何度も頭を悩ませました。それでも、俺は自分が甘いだけだと、頑なに否定し続けた。なぜここまで意固地になっているのか、自分でもわからないままに。

「まさかさ、ここまでは思わなかった。期待以上だ。あんなに自分を曝け出すのりちゃんを見たのは初めてだからな」

人は経験しなければその痛みを知ることとは出来ない。そんなどうしようもない生き物なのだから。

「あれが素だつてなら、とんだ小娘だな。毒にしかならん」

「そう言うなよ、可愛いじゃないか。ただ、お前には期待以上に厄介な子かもしれないけどな」

「……どういう意味だよ？」

「さてな、自分で自分に聞いてみるよ」

挑発的な笑みに俺は舌打ちをして漫画を閉じる。

俺にとっては今のお前も、これからの陵もどっちも厄介だつてのに。

「ま、それよりも今はお前がどうするか俺は楽しみで仕方ないけどな」

「言ってる」

俺はただ、取れない責任の取り方を教えるだけだ。他に何をするつもりもない。トビーと鷺沢と陵。三人が後はどうするか決めればいい。

「とりあえずは手はず通りに、な」

「お前は俺の家で隠れて見ているだけだろ。気楽なもんだ」

なんて密談をしていると、陵が帰ってきたらしい。玄関が開き、階段を上る足音が聞こえる。

正直、陵には悪いとは思う。だが、陵がしてしまった取り返しのつかない罪を俺は教えてやらなければいけない。そうじゃないと俺は……

「ただいま帰りました」

「おかえり〜。もうお腹空いちやつてさあ〜」

「ふふ、これは稲穂さんのお弁当です」

「おい」

「はい?」

「そ・れ・は・な・ん・だ・?」

俺は見境なくキレ倒しちやいそうだもんなあ!

陵の手には三人分の夕飯がある。それは良い。だが、もう一つの大きな袋には卵やらネギやらが詰められている。そんなものを要求した覚えはない。

「あ、これですか?これはですねえ〜」

えへへと頬を人差し指で撫でながら、悪びれもせずと言う。

「明日の一蹴の晩御飯の材料です♪」

「だらつしやあああアツ!!」

あまりにあんなりな仕打ちに、俺の思考回路は完全にショートした。返して！俺の貴重なシリラス成分返してよお！

怒りのあまり、俺は買ひ物袋を奪って二段飛ばしで階段を下りていく。

「あ~~~~~！私の食材が~~~~~！」

台所に駆け込むと、ゲーム実況中の母親が鬼の形相で振り向いてきた。曰く、静かにしてろやと。リビングで生放送してんじゃねえよ。

ボウルに卵を両手で高速割り。箸でミキサーよりも速く掻き混ぜる。この間十秒。遅れてやってきた陵の悲鳴が聞こえ、それに即座に母が反応。母さんが陵の口にガムテを貼り、両手両足を縛って隣の部屋へポイ。馬鹿が。母さんの本気を邪魔すると容赦なく監禁されることを知らないとはな。

ドアの外で信がスマホを使って俺に『鬼畜だな、お前等家族』と打って見せてきたが、なんのその。鬼畜なのはあいつだろうと叫びたい気持ちを抑え、俺は延々とスクランブルエッグと、袋の中にあつた味噌を使い切るのであつた。

「いいの？」

走り去つた陵を見送ると、トビーがどこか気遣わしげに聞いてくる。

信頼させておいて裏切る。いや、裏切つたわけじゃないが、本当にこれで陵を追い詰

められるのか疑問ではあった。

俺と接する陵の態度を見て、信が提案したことだが、陵がそこまで俺に気を許しているなんてどうしても思えなかった。

だってさ、俺をそこまで信頼しているなんて己惚れていなかったから。むしろ嫌われているときえ思っていた。いつもふぎけてばかりいて、あいつを労わった事なんてない。それなのに、あいつが果たして傷つくだろうかって。

そう、思っていたんだけどなあ。

今まで見たどんな悲しげな顔よりもずっと悲痛な表情で走り去るなんて、そんなこと想像出来るわけないだろ？

「えっ？」

想像なんて、出来ていなかったから……だから、陵よりももしかしたら俺のほうが衝撃を受けていたのかもしれない。

「いや、あいつよりもお前のがショックを受けてそうだったからな」

「そう、か？」

「ああ」

なんて情けない。俺よりもずっと信のほうが陵をわかっていたなんて。いや、そうじゃないな。信の方が陵を見ていたんだ。目を逸らし続ける俺とは違って。

「悪い、シヨックとかそんなんじゃない。ただ、ちよつと思つた以上の反応に処理が追いついてないだけだ」

「ならいいけどよ」

「で、この後はどうするんだっけ？」

「しばらく放つておいて、俺があいつら二人の目の前で全てをバラすつて手筈だったか？」

「ああ、そういうやそうだったな」

うん、そうだ。俺はここでお役ごめん、最後に陵に土下座して謝つて、信が上手く取り持つてくれて……それで……

「三上？」

それで、あの小娘は本当に救われる？ 鷺沢もトビーもリナちゃんも？ ああ、そうだ。そうかもしれない。裏切られる痛みを知つて、陵は初めてリナちゃんの心の痛みの一端を知ることが出来るだろう。そう、まずはその痛みを知ることから始めないと……ああ、わかつてる。わかつてんだよ。

「なあ、トビー」

なのに、どうしてだよ。なんで俺……

「やっぱ、俺向いてないわ」

こんなに陵の泣いた顔を見ただけで動揺してんだよ!!

甘い考えを否定し続けてきたのは誰だ!?俺自身だろうがッ!

あいつの素顔なんか垣間見なければ良かった。そうすれば、あいつの未来が少しでも幸いであれば良いなんて、馬鹿なことを考えたりしなかった。

あいつの想いなんて無視していれば良かった。あの小僧を純粋に想う気持ちだけは、嘘なんかじゃないなんて、昔の俺達と同じ瞳をしてれば馬鹿でも気付く。

あいつと関わらなければ良かった。そうすればこんなダサい自分になんてならなくて良かったんだ。

「悪い……なんつうかさ、黒幕になれるほど厳しくなれない甘ちゃんだわ」

「……はっ、んなことは知ってたよ」

「あく、やつぱり?俺黒幕とか駄目だわ。むしろ俺って特撮のレッドみたいなポジションだし」

「いや、うっかり○兵衛だろ」

「トビー後でじっくり話し合おうぜ。二時間掛けてこつこつとクリークだこの野郎」

そう、だよな。こんなの俺らしくねえや。裏でこそこそするなんざ、さ。信だつて似合つてねえよこんなの。こんなことしてる俺と信を唯笑に見られたらと思うとぞつとしない。彩ちゃん、智ちゃんが闇ブローカーになつちやつたあゝつて泣くに決まつて

る。さすがにそれは御免被りたいわけ……

意を決してスマホを取り出し、黒幕その二に連絡すると、ワンコールで即座に対応。

『はいはい、こちら智也の部屋改造班』

「……おい、何してやがる？」

『いや、ちよつと殺風景な気がして、ここは俺の出番だろうとピンクとブラックに染めてやろうと』

「闇夜の晩に気をつけろ。それ以上やらかすとお前のポニーがあられない姿にメタモルフオーゼするからな」

『じよ、冗談だって。それでどうした？ 見てる限りじゃ首尾良く進んでるみたいだが』

ちゃんと見てるじゃねえか。ベランダから双眼鏡で覗く信の姿が見える。110番してみようかなあ。

「ああ、まあお前のが当たってたみたいだな。案外俺ってあいつに信頼されていたらしい」

『そりやそうだろ。俺の親友は女の子一人救えないようなヘタレじゃないしな』

こつ恥ずかしい事をよくもまあ言えるもんだ。これが意中の相手になると全く言えなくなるんだからどうしようもない。

「そんな気はないんだけどな。それよりも、実はお前に謝らないといけないことがある」

せつかく信が綿密に計画してくれた事を俺は台無しにしようとしている。俺の身勝手なこのどうしようもない感情のせいだ。その感情が何なのかわかっていなくてもいい。俺の身勝手だ。

「悪いな信。俺、今からお前の計画ぶち壊すぞ」

きつと信は怒るだろう。あれだけバイトのシフトを調整してトビーに協力しているのに……俺はそれを壊そうとしているんだ。なんて言われたって仕方ない。どんな罵詈雑言も甘んじて受け入れる覚悟だ。

「やっぱ俺には向いてないらしいな、こういう役回り。撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだなんて言えねえ。そんなに格好良くなれねえよ」

どこまでも俺は強がるだけしか出来ない馬鹿だって、自分で良く知っていたくせに……なにやってるんだろ。たははと、情けない微笑が零れたと同時に……

『ん、ああ。だから首尾良く進んでるじゃん』

「……あん？」

そんな悲壮な覚悟をあつけらかんと信は水に流しやがる。これが首尾良くだあ？

「お、お前まさか……」

『そのまさかだよ双壁。俺がお前の性格を見誤るわけないだろ。ついでに、これからお前がやろうとしてる事も、な？』

何てことだ。俺は信を見縊（みくび）っていた。まさかここまで俺を見透かすなんて、唯笑レベルじゃねえか……気色悪い。

『てなわけで、俺は別ルートに行けば良いんだよな？』

俺が口にしなくても信は俺がどうして欲しいかわかっている。そうだよな、俺達はそう出来てるんだもん。

「はは、あははははははは！ そうだよ、やっぱ俺達はこうだよな！ 上等だ、片割れ」

『だろ？ それよりもあともう少し近づけ。届かないだろ』

「わかってる。少し待ってろ」

俺達のやり取りをどうにもわかっていないトビーは、どういうことだと詰問してきそうな勢いだ。

ふう、トビーもまだまだだなあ。つまりは……

「トビーこっからだ」

通話を切り、かきコオロギを販売した時のような高揚感に包まれる。これなら何もかも上手くいく……オチは俺等への説教だけだな。

「俺達の計画はこっからが本番なんだよ」

きつと、信も俺と同じように笑っているに違いない。俺達二人がいれば出来ない事なんて何も無い。他人のハッピーエンドを彩ってやる事くらい御茶の子さいさいってな

もんだ。

じゃあ、やるかと呟き、これからやる事をトビーに伝えて俺は駆け出した。他人の為のハッピーエンドを特等席で観るために。

ならずやのドアを開けると、のんちゃんは既に上がったらしく、一蹴と静流さんが忙しなく労働に勤しんでいた。カウンターの席に目をやると、そこには幸運なことに丁度良い生贄が優雅にコーヒーなんぞを飲んでいて、ラッキーストーンと心の中で指を鳴らした。

「いらつしやいま……なんだ信か」

俺の顔を見るなり、粗雑な挨拶になる一蹴。こいつ……本気で泣かせてやる。だが、それよりも先に筋を通さなければならぬため、一蹴への教育を後回しにしてカウンターへと歩み寄る。

「あら、いらつしやい信君」

「こんばんわ静流さん、今日も変わらず美人ですね」

「ふふ、ありがとう。それで、今日はどうしたのかしら？」

注文を聞くよりもまず、俺の用を確かめてくる。参ったね、どうして客として来たわけじゃないってバレたんだろな。

「なんでわかつたんですか？客として来たわけじゃないって」

「だって、いつもみたいに穏やかな目をしていないもの。私じゃなくてもわかるわ」
さすが僕らの静流お姉さん。年の功とは言わないでおこう。

「そっか。でも、それなら話は早いかな。静流さん、悪いんだけどあなたの可愛い従業員を連行しても良い？代わりにそこで優雅にコーヒーを飲んでいるイナケンサクリファイスするからさ」

思いもよらない流れ弾にコーヒーを噴出すイケ面イナケン。久しぶりに会ったのになんて仕打ちなの!?!なんて講義をしているが、取り合っている暇はない。

後ろでテーブルを拭いている一蹴の手が止まり、不可解だという視線を向けてくる。
「何を企んでるんだよ?絶対行かねえからな」

不可解どころかファイアオールを展開していた。ふ、その程度で稲穂ウイルスを駆逐出来ると思うなよ。

「悪い、イナケン。でも俺等を助けると思っつて、ちよつとだけ手を貸してくれ。代わりに、智也の奢りでネスミールランドの一日フリーパスを二人分やるから」

「絶対履行されないよねそれ!?!」

「俺が責任を持って約束する」

智也名義でネットで支払ってイネケンのアパートにチケットを送れば余裕だ。親友間の借金は成り立たないから問題ない。

「俺等……ね。それって、智也君も関係しているのよね？」

「あれ？わかりますか？」

「わかるわよ。信君の俺等に彼が入っていない事なんてないもの」

『俺の（僕の）意見を聞けよ！（聞いてよ！）』

君達の意見を聞くようなアプリはないのです。

「もう、今日だけよ？」

「ありがとう静流さん！」

最高決定権を持つ彼女が許可したのなら、なんの遠慮もいらぬ。

「静流さん！俺は絶対にいぐえっ」

愚かにもこの店の神に挑もうとする配下の襟を引っ張る。そのまま引っ張って入り口に向かう間、苦しうにジタバタしていたが、無駄だと悟ったのか大人しくなる。才チたのかもしれないが。

「信君、約束守ってくれるよね？」

「ああ、帰ってきたら結婚しよう」

「僕と死亡フラグを立てないでよ。この国は同性の婚姻は認められてないし」

認められていても御免だけだな。

「さて、一蹴」

「なんだよ」

不貞腐れた応えが返ってきて一安心。良かった、オチてたら洒落にならないからな。
「今からお前をいのりちゃんのところに入れて行く」

「いのりの？ていうか、別に今じゃなくてもいのりとは今夜会うつつうの」

「まあ、いつもなら、な。だがそうは俺が卸さないんだなあ」

「……どういふことだよ？」

「まあ、どういふことも何も無いんだけどさ」

明らかに警戒している一蹴に、俺は自分でも不自然に思えるほどの厳しい声で……
「ちよつと二人に懺悔をしてもらうだけだ」

散り散りに破かれる心、目の前が歪んで見えなくて、ぐちゃぐちゃの心と思考。今自分
分がどこにいるのかもわからない。

もう、何も聞きたくない、何も見たくない。

あの人の不器用で自然な優しさは全て嘘だった。私への怒りと嫌悪を隠すための隠
れ蓑というだけの優しい嘘。そうだと、言外に言っていた。

大してあの人との時間を積み重ねたわけじゃない。あの人を何を知っているわけ
もない。それなのに、あの人を温かさと、時折見せる何気ない寂しそうな瞳に、私

は心を許してしまった。……違う、それこそ嘘。しまったじゃない、今でも許してしま
いそうなんだ。さつきまでの事が全て嘘で、すぐに冗談だつて笑つてくれる。明日にで
も、いつものように私を、困らせて……

「馬鹿、みたい。馬鹿だね、私」

こんなになつてもまだ信じたいだなんて……乾いた笑いは夕日に溶けて消えていく。
近くの電柱に手を付いて息を整えようとするけれど、流れているものが汗なのか涙な
のか、もうわからなくなっていた。

こんなになつて気付くなんて、馬鹿だなあ……私。こんなにあの人に救われていたな
んて。

「嘘でも、良いのに」

嘘を吐き続けてくれれば、私は快く騙され続けられたのに。

「お願い、神様」

時間を戻してください。あの人と出会う前に。そうすれば、私は――

「頑張つて下さい！区間新まであと少しですよ！はい、お水です！」

「……………」

「どうしました？給水所で立ち止まるなんて余裕ですね、さすが陵選手」

どうして、かなあ。

コンビニで買ってきたらしい水を片手に、運転席の窓から腕を伸ばし、水を差し出してくる馬鹿な人。

「……いい、ですよ」

「は？ 聞こえねえよ、なんだって？」

もしかしたらつて、期待していなかったわけじゃない。少しだけ待っていたら、この人ならつて夢を見ていた。あんなに冷めた眼で蔑視されたのに、それでも私……馬鹿だから。三上さんよりもずっと、ずうっと馬鹿だから！

「来るのが遅いですよ！」

文句を言う私は、言葉とは正反対の顔をしているだろうな。

三上さんの手から水を受け取りながら、私は安堵する心を隠せない自分を自覚する。

「なに泣きながら笑ってなんだよ。不細工になる……はもともとだったか。格別な変顔だな」

「ふふ、本当に失礼な人ですね」

「……お前、馬鹿だろ。普通は俺の事なんか無視するだろ。俺はお前を傷つけたんだぞ？」

思っていた態度と違うことに、三上さんが首を傾げている。ほんと、人の話を聞かない人だなあ。

「言ったじゃないですか」

「あん？」

「嘘でも、良いですって。三上さんの嘘なら信じますって」

虚を衝かれ、三上さんがそつぽを向く。回りこんでその顔を見たいけれど、きつと見せてはくれないだろう。

そつぽを向いたまま、三上さんがぶつきら棒に一言。

「まあ、とりあえず乗れ。もう陰湿なこととはしないつてのは約束する」

「そうですか。陰湿ってわかってやってたんですね」

「うっ、そう、だが。それについては謝るが、今はとにかく乗れ。お前を連れて行くところがある」

「……どこに、ですか？」

「お前を正面から打ちのめす場所だ」

助手席に乗ったのを確認して車を走らせる。

「あの、いろいろ聞きたいことが……」

「ん、ああ。少し時間もあるからある程度は答えてやる」

追い詰めた罪悪感がないでもないから、しょうがないな。

俺の何がおかしいのか、さつきから陵は穏やかに微笑んでいる。気持ち悪いな。ま、いつか。どうせこの余裕なんてすぐになくなるわけだし。ていうかその笑顔止めて、マジで。毒舌クソ小娘がお前だろうが。ほんと鳥肌立ちそうだからさあ。気持ち悪い。大事なので二回な！

「じゃあ、ですね……どうしてこんな事を？」

まあ、そりゃあ気になるよな。弁解なんてするつもりもないし、話せる範囲でなら良いか。大分厳選して話をしなければならんが、困ったら信にぶん投げよう。

「ギャグは何回までありだ？」

「私は三上さんが時と場所を選べる人だって信じています」

まったく、とんでもない嘘吐きだな。微塵も思っただけに。

「思った以上に信頼されていて涙が出そうだ」

「是非お目に掛かりたいものです、三上さんが泣いているところを」

「もう一回泣かすぞ小娘。つっても、俺の正直な気持ちを話すか……お前、受け止められるか？」

先程のように心を引き裂くような真似はしないが、それでも陵にとっては気持ちの良いい話ではないだろう。俺がこいつに嫌悪感に近いものを抱いていたのは事実なのだから。

数瞬、目の中に惑いの色が見えたが、それでも俺から逃げるつもりはないらしい。一つ静かに頷いた。

参ったな。退いてくれればこいつに年上らしい、俺らしくない事を言わなくても良かったのに。俺の言葉から逃げることは絶対にならないのだろう。

一つ溜め息をつき、小さな子供に語りかけるように穏やかに語りだす。

「最初にお前の昔の事を知った時、正直俺はお前のした事を心底許せなくてな。これが白河や伊波なら親身に話を聞いて一緒に悩んだりもしてくれただはずだ。でもな、俺にはそれが出来なかった。いや、しちゃいけないと言いつけさせていたのかもしれない」

「どうしてか、聞いても良いですか？」

「悪い、それに関してはちよつと俺の口からは話し難いんだ。だから、そうだな。信に聞いてほしい。信には俺から言っておくから、あいつが話してくれるはずだ。でだ、お前の話は俺達にとっては痛い話だったんだ」

「俺達？」

「信と俺だよ。だから、唯笑とみなもちゃん、それと母さんにはとてもじゃないが話せなかった。……聞かせたくなかったんだ。お前の話をしたら、さ、絶対唯笑達はどうにかしようって悩むんだ。心臓を掻き筆りたくなるほどの辛さを抱えながら、泣き出してしまいいろんな自分を殺して、そうまでしてお前を助けようとする。そんな優しすぎる馬鹿

なピエロにさ、誰がしたいよ？だから、俺がなんとかしようって動いた。優しくない俺が、お前を許さないでやろうって。それで思いついたのがこれだ」

いくら穏やかに話しているとしても、陵にとつては逃げ出したくなるような言葉ばかりだ。その証拠に、俯いて時折肩を震わせていた。だが、それでも陵は逃げない。唇を噛んで、小さな拳をぎゅつと握って耳を塞がないようにして。

そっか、お前は言ったんだもん。俺の嘘を信じると。嘘さえ信じるのなら、真実を受け止める強さもあるに決まっている。自分の想いを曲げない強さを持っているんだ、お前が強い女の子だって事は知っている。それが例え間違っていたとしても。

「お前が家に来る日は、ほとんどトビーを差し向けた。精神的に追い詰めるためだ。その後俺がお前を適当に馬鹿に付き合わせて気を晴れさせれば、お前は俺を信用するようになる。そういう下衆な計略をあえて立てた。自分でも吐き気がしたが、それでもしようがないと呑み込んだ。どうしてかわかるか？」

「……私が、最低な嘘を吐き続けて一蹴と付き合っていたから？」

やつぱり、な。こいつは何もわかつちやいない。信はどちらでも良かったのだろう。正攻法でも邪道でも。要は、こいつが取り返しのつかない事をしたのだと自覚させればいいのだから。

「違う。鷲沢だったか？別にあいつと付き合おうがどうしようがどうでもいいんだ。ト

ビーも、本当はそんな事で怒っちゃいない。根本的などころでお前は考え違いをしている。それがわかっていけば、今頃俺に説教されてなんていない」

ゆっくりと上がる顔は、まだギリギリで正気を保っていた。ひどく危うげに揺れる瞳。その正気を壊さなければいけない。

想像する。俺がそれをこいつに自覚させたとして、こいつは今のままでいられるか？ ハンドルを握る手に知らず知らず力が入る。

『ありがとうございます。大事にしますね』

不細工なぬいぐるみを抱えながら見せた、あの透明な笑顔を失うんじゃないか？ 失ったとして、俺はその責を負いきれるか？ せめて、もう一度だけでもこの眼に焼き付けておけば……

「三上、さん……？」

覚悟出来ていないのは俺のほうだ。一度はこいつをズタズタに引き裂いておいて、それでも最後のラインを超える覚悟が持てないなんて……これじゃあ、三流ドラマにもなれやしない。

悪党なら悪党らしく、正義の味方なら正義の味方らしく、俺は俺らしく。最後まで馬

鹿でいてやる。こいつが笑えなくなってしまうたなら、俺の馬鹿でもう一度取り戻させてやる。それぐらいなんてことないさ。過ちを犯してしまったガキだった頃の俺じゃないのだから。

「陵……」

車を路肩に止め、陵と正面から真つ直ぐに眼を合わせる。

唇がかさつく、喉が渴いて舌が張り付いているかのようだ。それでも俺は、縋るように見てくる陵に、心を殺しかねない凶器をその胸に突き立てた。

「お前がしたこととはな——この世で最も卑劣な殺人だ」

「——ッ!？」

見開かれる眼、何かを言おうとして失敗する言葉、否定したくてもしてはいけない残酷な事実。

心の奥では気付いていたはずだ。ただ自分の心を守る為に眼を逸らし続けてきただけで。人の心にそこまで鈍感な女ではない。認められないよな？認めてしまつたら、鷺沢の隣にすることが出来なくなる。いや、まともに生きてさえいられなかつたかもしれない。

その嘘は鷺沢と陵を救つたのだろう。だが、お前はそれと引き換えに無垢な少女の記憶（いのち）を殺してしまつたんだ。

「人はもう目を覚まさなくても生きていけるんだよ、誰かが忘れない限りそこに確かに生きているんだ。もう、一緒に未来を過ごせなくても、時折過去に生きていられるんだ。だから俺達は死んでしまった愛しい人を忘れてはいけないんだ、例え何があろうと。その人と紡いだ時間を、少しでもこの世から消してしまわないように、痛くても苦しくても、忘れちゃいけない」

時間は残酷だ。彩花の些細な仕草を俺は今は覚えている。だが、いつまで覚えていられるかわからない。ちよつとしたことが徐々に記憶の奥深くに閉じ込められて、もう二度と出てこなくなってしまう。それは仕方のない事だとは理解していても、とても受け入れられない。みつともないかもしれないが、俺にとつての一番の恐怖がソレだ。あまりの怖さに、一人ベッドで震える日も稀にある。

それでも、だ。俺はあいつが見ることが出来なくなってしまった未来を生きる。あいつの目の代わりになれるように。俺が生き抜いた後、あいつに笑顔で話せるように。

だけど、さ。いつかは風化していく記憶を、他人が無理矢理奪つてはいけない。心からその誰かを殺す事だけは許されちゃいけない。戦争で人を殺すこともあるだろう、どうしようもない憎しみを抱いて殺してしまうこともあるだろう。それでも記憶を殺すという事は、その人の全てを殺すと同義だ。

「人が本当に死ぬって言うのはな、誰の心の中からも消えてしまった時なんだ。それを

お前はやってしまったんだ。善意からか、羨望からか、恋心からか……どんな理由かはわからないが、お前はやつちまったんだよ。鷺沢の心からリナちゃんを殺したんだ」

「ちがつ、そんなつもりじゃッ」

「どんなつもりでも！お前のしたことはそういう事なんだ！」

事実から自己防衛で眼を背けようとする陵を、無理にでも引き戻す。逃げさせては駄目だ。そうじゃないと、こいつは……

「お前がリナちゃんだったらどうだ！お前なら耐えられるのか？大切な人の心から自分がいなくなつて、思い出にさえなれなかつたなんて……そんなの、耐えられるのかよ？」

「あ、嗚呼……」

「陵、お前が鷺沢の記憶から自分がいないものとして扱われたらどうなんだ！言つてみる陵ッ！」

「あ、そんな、わた……ちが、そうじゃ……」

時間が経つにつれて自分をどんどん嫌いになって、世界で一番自分を最低な屑だと思つてしまう。そんな愚かな惨めさを味合わせて堪るか！そんなのは俺一人で満足なんだよッ！

「あ、ああ……—ッ!!!」

声にならない痛さに、陵は嗚咽を漏らして頭を抱える。

「それを、俺はお前に教えたかったんだ。リナちゃんの十分の一の痛さでも、その心に教えてやりたかった。痛みを経験しないと、人はどんどん鈍くなるんだ」

耳を塞ぎたくなるような悲痛な悲鳴に近い嗚咽。だが、眼を背けるな、耳を塞ぐな。俺は逃げたいいけない。こいつの心を無遠慮に壊し尽くして、俺が逃げて良いわけがない。それに、俺にはまだまだやるべき事がある。

「今は泣け。泣けるだけ泣いてしまえ。自分がしたことを噛み締めながらな」
慰めるように髪を撫でようとしたが、俺はその手を引つ込めて堪える。

誰がこんな目に合わせたんだという思いが半分。もう半分は、自分の無意識の行動が何をしてしまいそうか、予想が出来て怖くなったから。それは、考えたくもない最低悪な自分の姿だった。

「少しの間ここにいてやる。でもな、これで終わりじゃない」
そう、今日はまだ終わらない。その為に信が動いてくれて、俺がこいつを壊したのだから。

「今日、これから教えてやる。やり直せない間違いを、どう償えば良いかを」
そうして、陵の眼が何も映していないかのような状態のまま、涙を流さなくなるまで待ち続けたのだった。

住宅街から少し離れたところに建つお寺。門の脇にある駐車場に車を停めると、門の前にはお寺の住職のような人が待っていた。その方がこちらに気付いて頭を下げると、三上さんも頭を下げた。

「事前に連絡してたとはいえ、待つてなくても良かったのに。悪いことしたな」
「どうやら三上さんと知らない仲ではないらしい。」

「少し挨拶してくるけど、ここで待つてるか？」

なぜここに連れてこられたのかはわからないけれど、それ以上に自分の卑劣な行為を自覚し、私はただ一つのこと以外は考えられなくなっていた。だから、かな。

「お邪魔でなければご一緒しても良いですか？」

一人だと自分が何をするか想像出来ないの。

「邪魔じゃねえよ。どうせ中に連れて行く予定だったし」

「そう、ですか」

外に出て空を見上げる。もう日は落ちていて、あたりは私達以外の音が何一つしない。星も厚い雲に覆われているのか、一つも出ていかなかった。

「どうも、お久しぶりです」

「そうでしたかな？先月も会ったと記憶していますよ」

「一月も開けばお久しぶりじゃないですか。すみません、こんな遅くに」

「いえいえ、良いのですよ。それよりも、今日はどうしたのです?」

「ああ、今日は俺じゃなくて、この子の用事の付き添いでして」

「そうですか。そちらのお嬢さんは?」

「俺の後輩みたいな子です。それで、あいつ等はもう?」

「ええ、先程。案内しますか?」

「そこまでお手を煩わせはしませんよ。広いとはいえ勝手知つたる場所ですので。それじゃあ」

「はい。お参りが終わりましたら声をお掛け下さい」

「わかりました。本当にご迷惑をお掛けします」

二人の会話から、三上さんが何度もこのお寺に来ていることが窺い知れた。

「行くぞ陵」

「……はい」

三上さんの背中を追うように歩く。辺りに明かりがないため、少しでも離れると背中が見えなくなってしまうため、なるべく寄り添うようについて行く。

「にしても、聞いた時は驚いたけどな。なんて偶然だよ」

迷いのない足取りで、すいすいと暗闇を進んでいくから、追うのに苦勞するけれど、周りの景色に私はどこに連れてこられたのかようやく察した。

「ここ、お墓ばかり。」

お寺には墓地を管理している場所も多いらしいけれど、このお寺がそうなんだ。それに、三上さんがここに連れてきたという事は、多分ここには……

「——着いたぞ、そこだ」

立ち止まった三上さんが指で示す墓石と、そして二つの人影。

「そこがリナちゃんのお墓で、お前が償うべき場所だ」

「な、んで——」

一方後ろに下がるけれど、三上さんに無理矢理腕を取られて前に押し出される。何も知らないまま、私が現れたことに驚いている一蹴の前に。

「いのり? どうしてここにいのりが?」

「これで、終わりにしてこい陵。今終わらせなければ、俺はお前を一生軽蔑する」

なんで、いのりがあの男と一緒にいる? 信を振り向くが、信は何も答えずにただ黙っているだけ。

なんだよ、何がどうなってんだよ!

信に連れられてこんな辺鄙なところに来た。着いて思ったのは肝試しでもするつもりか? と思いきや、信は首を横に振るだけで答えてはくれず、代わりにもうすぐ

にわかるとだけ。

そうして待つていたら、三上とかいう男といのりが二人で現れて、俺の頭は混乱してまともに考えがまとまらない。まとまったとしてもわからないままだらうけれど。

「なあ、一体どういうことなんだよ？ どうしていのりがここにいてそいつといるんだ？」
そう声をかけると、なぜかいのりが怯えたような表情を見せて俯く。

「一蹴……私、あの……」

何かを伝えようとしてくれているのはわかるが、声が小さくて聞こえないのと、今にも泣き出してしまいそうな声で、さらにどうしたらいいかわからなくなる。

なんだよこれ？ 何がどうなってるんだよ!?

「昔、施設に二人のガキがいた」

どうしたらいいか迷っていると、墓石の後ろから粗野な声が低く、そして不気味に夜の中響く。

「ッ!? 誰だよ!」

苛立っていた。何も教えてくれない信に。ずっと何かを隠しているいのりに。そしてそれを俺はわかってやれないのに、いのりの苦しみをわかっているかのようなあの男に。だから、自分でも驚くくらいの怒鳴り声になってしまった。

「黙って聞いていろ一蹴。今から、何もわからないお前に、相応しい奴が教えてくれるん

だ。だから、黙って聞いていろ」

俺の苛立ちを、年上の余裕を感じさせる声で信が嗜める。

訳知り顔で言われ反論しようとしたが、今まで見たことのない信の厳しい目に、俺は反論の言葉を呑み込んだ。

「そのガキの内の一人が、近くの病院に入院している少女と遊ぶようになった。話を聞くと重い病氣らしいのだが、ガキは自分の境遇を笑顔で語る少女に心惹かれ、ガキはその後事あるごとに少女の下へと足繁く通った」

低く粗野なのに、優しさに溢れている声。彼にとって、とても大切な思い出なんだろう。

「そうしていると、もう一人のガキが後を付いてきて、いつの間にか二人が三人へと変わっていた。正直、邪魔だと思ったが、ガキは我慢した。なぜなら、そいつは口下手で、少女を上手く笑わせられなかったから。だから、もう一人が馬鹿な話をして少女を笑わせてくれるなら、二人じゃなくても構わないと、自分の心を殺した」

悔しさの滲む声。幼いながらに少女を想う心は真剣だったんだ。だからこそ、彼は自分の無力さと、もう一人の少年の明るさに嫉妬したのかもしれない。

その声に集中していたのだけれど、一つだけ気になることがあった。

男の話が進むたびに、いのりの顔から血の気が失せていつているような……それに、

俺に相応しい奴だつて？この話を俺は知らないのに、相応しいも何も……

「そうして幾日も過ぎたが、遂にその時がきた。少女が発作を起こして倒れてしまった。少女が倒れたことを知り、ガキ二人は途方に暮れた。そりやそうだ、しばらくは面会謝絶だったんだからな。だが、面会謝絶が解かれた日、事件が起きた」

病院、少女、二人の少年……な、んだ？知らないはずの話なのに、在りもしない風景が頭に浮かんでくる。

ベッドに座る少女と、少女を囲む少年二人。少年達は何を話している？いや、少年達か？ぶつきら棒で無口な少年と、大げさな身振り手振りで話をする少年。そう、少年と俺、と？

「当時、調子の良いガキは少女が読んでくれた御伽噺を心から信じていた。都合の良い天使の話を」

そうだ、天使の話を何度も聞かせてくれた。天使の御伽噺が好きで、その話をしていて時の少女の顔が好きで……

「その日の夜、調子の良いガキは少女を連れ出した。教会に連れて行けば天使が少女の病を治してくれるはずだと信じて。だが、連れ出す途中で職員に見送られてしまい、ガキは少女の手を引いてその職員達から逃げようと走った。ガキは頑なに信じていたからな、天使の存在を。職員の手から逃れ、病院から抜け出した瞬間だった——」

天使、教会、病気……聞いたこともない話なのに、なぜこんなにも胸が痛い？どうして俺、は……

「つばさ、ちゃん」

「少女と少年は道路に不用意に飛び出し、車に轢かれた」

苦しみに満ちた声が俺の心の奥底に突き刺さる。

その声に記憶が呼び起こされたかのように、俺は徐々に思い出していた。施設にいた頃、よく遊んだ二人の少年と少女の姿を。

その少年の面影が僅かにある姿が、墓石の後ろから現れる。

「お前、もしかして？」

随分と変わっていて気付き難いが、間違いない。

「飛田扉か？」

「よお、クソ野郎。二度と会いたくなかったぜ」

なんで、俺は忘れていたんだ……あんなにも大好きな少女のことを。そうだ、俺は少女をつばさちゃんと呼んでいたんだ。あの御伽噺を話してくれていたから、俺はそう呼んでいた。

あの日、車に轢かれて……そのあとどうなったのかも、すこしずつ思い出していく。息も絶え絶えだった俺の前に天使が、つばさちゃんがいた。俺と車に轢かれて、彼女も

危ない状態だったはずなのに、それでも彼女は俺の手を取って、俺に生きる気力をくれたんだ。自分だって辛いはずなのに。それでも、彼女が無事だとわかって、俺は嬉しくて嬉しくて……

目の前で色を失くした目をしているいのり。そのいのりの顔が、当時の少女の姿と重なる。いや、重なるどころか……間違いない。なんで忘れていたんだ、こんな大事で大切な存在を。俺はとつくに少女と再会していたのに。

「いのり？」

「……………」

「いのり、お前がそうなんだろ？」

「……………」

「お前が、つばさちゃんだったんだな」

俺の問い掛けに何も反応をしてくれないが、間違いない。いのりはつばさちゃんだ。あの時、俺の手を取って俺の名前を呼んでくれた。俺の大切なつばさちゃん。

ゆつくりといのりの傍まで歩み寄り、両肩に手を添えると、いのりの肩が微かに震える。

「ごめん。俺、今まで気付かなくて……でも、今更だけと思いい出したよ。つばさちゃん……いや、いのり。あの時はありがとう」

その震える身体を抱きしめようとしたが、低い嘲笑が耳に届く。

まるで俺を見て、滑稽だとも言うように飛田が笑っている。

「何がおかしい?」

「いや、久しぶりに会ってもお前の御目出度さは変わらねえなと思うと、笑わずにはいられなくてな。なあ、陵いのり」

飛田の声に怯えたように一歩下がり、俺の手からいのりが離れていく。

なんだよ? 何も間違っていないはずだ。いのりがつばさちゃんだつて、今度こそ俺は思い出した。俺を救ってくれた彼女の顔を俺が忘れるはずがないだろ。

助けを求めるように三上を振り向くが、三上はいのりを睨み付けるだけ。まるで逃げるなどでも言うように。

「陵いのり。そののどうしようもねえ馬鹿に話してやれ。それがテメエの役目だろ? わかつてるよなあ、この場所で嘘をついたら……殺すぞ?」

脅しじゃない、飛田の声には鋭利な刃物にも似た狂気が混じっている。

「お前、何言つてんだよ! いのりが嘘をついてる? つばさちゃんそんな事してなんになるんだよ!?! そうだろいのり?」

頷いて欲しくて応えを期待するが、身動き一つしてくれない。

「嘘なんて何も無いよなあ? 俺に自分のことを黙っていたのは、ただ俺が忘れていたから

だろ？ だったらそれは嘘なんじゃない。いのりが責められる意味がわかんねえよ！ 変な言い掛かりをしてんなよ！ いのりは病気に苦しんで、俺の所為で事故にまで遭わせてしまつて……それでも、それでもなあ！ 俺の為にいてくれたんだ！」

そうだ。あれから何年も経つて、それでも俺を忘れずにいてくれたんだ。こうして元気にしているってことは病気も完治したんだろう。そんないのりがどうして責められるような言葉を浴びせられているのか。いのりを庇うように立つて、正面から飛田を見据える。

「——んね」

背中から、今にも消えそうなか細い声が、俺へと何かを呟いた。

ぼつぼつと、頬に落ちてきた雨と同時だった。

「ごめんね、リナちゃん」

「……り、ナ？」

そうだ陵。ここに連れてきたのはその為だ。途中で俺の意図には気付いていたはずだ。そして、飛田と鷺沢がいる事よつて確信した。だから、全身が震えるほどに怯えて逃げ出したかつたんだろ？ それでも、ここでは逃げられない。彼女の前ではもう嘘はつけない。俺が陵に枷を付けたのだから。贖罪という名の枷を。

雨が全てを濡らす。そこにいる人間だけじゃない、幼い頃の記憶までもを濡らしている。

「どうした、早く話セツ！ 陵いのりッ！」

齒が上手く噛み合っていない。当たり前だ。トビーの劍幕の所為じゃない。これからの鷺沢の自分を見る目を想像しているからだ。だから、真実を明かすことを躊躇してしまう。

それでも、俺が付けた枷が逃げることを許さない。だから、拙い声で陵は語る。自分が犯してしまった罪を。

「ごめんね一蹴。私、もう嘘つけない。自分が何をしてしまったのか、その重さを知っちゃったから、もう嘘をつけないんだ」

「う、そ？ 嘘つてなんだよ？ だつていのりはつばさちゃんです……」

大丈夫だ。どんな結果になろうとも、お前が踏み出すのなら俺が手を引いてやる。俺だけじゃ足りないなら、信も一緒だ。だから――

「ううん。そうじゃ、ないの」

お前を痛めつけるだけの雨はもう止めようじゃないか。

「私は陵いのり。貴方達三人を同じ病室のベッドから羨ましく見ていただけの、物語に登場しないただの脇役」

「は？何言ってるんだよ？」

「つばさちゃんとは、とても明るくて笑顔の可愛い隣のベッドにいた『リナちゃん』って女の子の事なんだ。一蹴、よく思い出してみて。病室には、もう一人女の子がいなかった？いつも喋らずに、ただ貴方達を見ていた女の子」

思い当たる節があるのだろう。鷺沢が信じられないとでも言うように頭を振る。

「それが私。私はつばさちゃんじゃない……リナちゃんとは、比べようもないほどに最低な女なんだ、私」

「そ、え？ちがッ！そんなはずないだろう！確かに事故に遭った俺を救ってくれたのはいのりだ！今まで忘れていたけど、ちゃんと思い出した！覚えてんだよ！間違えるわけねえだろう！」

自分の記憶に間違いはないと懸命に食い下がる。そうだ、鷺沢の記憶は間違っていない。ただ、塗り替えられてしまっただけで。

「そう、だね。事故に遭った一蹴の手を握ったのも、名前を呼んだのも私だよ」

「そうだろう？なら何も間違ってるんか！」

「そう、私。リナちゃんの振りをした私が、一蹴の傍にいたんだ」

「——え？」

陵が何を言っているのか理解出来ず、全身から力が抜けたように立ち尽くす鷺沢。そ

んな鷺沢に陵は小さく微笑んだ。

「だって、羨ましかったんだもんリナちゃんが。いつも二人と一緒に楽しそうで……正直妬ましかった。どうして自分じゃないんだろうって。二人と楽しそうに話しているのが自分だったらって」

「いのり、お前何言ってるんだよ」

「だから、ね？私最低な嘘をついちゃった」

「止めろ、止めろよいのり……」

「私がつばさちゃんだって」

震えて崩れ落ちそうだが、血反吐を吐こうが、逃げるな。ここから始めるんだ陵。

「一蹴の記憶から、ね」

「嘘だろ？そんな嘘言うなよ。じゃないと俺……」

「リナちゃんを殺したの！」「止めろおおおおお——ツ!!!」

二つの悲鳴が重なり、雨に溶けていく。

せめて弱さを見せないよう、痛々しい笑顔を張り付ける陵を、鷺沢が得体の知れないものを見るかのような目で見ていた。

「そして、そのお墓がそうなんですよね？飛田さん」

「ああ、リナが眠る墓だ」

「な、んで……そんな、だって、俺……」

これまでだな。

受け止めきれない真実を持って余し、鷺沢が一步一步後ずさる。

そんな愛しい恋人を、陵は何もかも諦めたかのような穏やかな瞳で見つめ……

「ごめんなさい」

なんて愚かで悲しい謝罪だ。このごめんなさいは誰に向けられたものか、きつと陵の小さな勇気を慮る余裕は鷺沢にはないだろう。仕方のない事だ、俺だって昔は自分の気持ちだけしか見えていなかった。

「んだよ、それ？ わかんねえ……もう、わかんねえよいのり」

弱々しい言葉を残し、鷺沢が墓地から離れようと背を向けて歩き出す。この場にいることがもう限界なのかもしれない。

その背中に手を伸ばそうとするが、なんて声を掛ければいいのか、その資格が自分にあるのか……葛藤しながらも、陵は手を宙に投げ出したままだった。

横にいる信を見やる。とりあえず、これで一つ。

「信、陵の事頼む。あと、陵に俺の話をしてやってくれ」

「わかった。一蹴を任せた。あと、一蹴がもしも突つかかってきたら、智也も話して良いからな、俺のこと」

同時に頷いて信は住職の下へ、俺は鷺沢を追う為に歩き出す。

動く気力すら失くした陵の横をすれ違う寸前で少し立ち止まり、俺は陵の頭に手を置く。すると、堪えきれなくなったのだろう。雨と涙で歪んだ目が上を向いた。

「三上、さん。私、頑張り、ました」

「わかつてる。よく、耐えたな」

「はい、頑張っ、たんで、すッ」

こいつの嘘を止めた責任は俺にある。これまでの想いを踏み躪って、そうして無理矢理俺が追い込んだ。そんな俺にこいつをこれ以上慰める権利なんてない。

耳に痛い声が俺を打ちのめすが、この程度いくらだつて耐えてやる。

「わかつてる。だが、お前にはもう一つやることがあるな。言われなくても、もうわかるだろ?」

わからないはずがない。これだけの痛みを知ってわからないなんてあるはずがないんだ。一つ頷き、目元を拭う。

もう大丈夫だと確認した俺は、キャパシティオーバーしてしまった小僧を追うためお寺を後にした。

住職の下から戻ると、トビーはりナちゃんの墓を見ながら想いを巡らせていた。そし

て、いのりちゃんは——

「ごめんなさいッ!!リナちゃ、ごめんなさいッ!!」

服が汚れる事など気にも留めず、その綺麗な髪と額を地面に擦り付け、重い……とてつもなく重い謝罪の言葉は何度もリナちゃんへと向けていた。

そうだよな。本来ならもつと早くに君は彼女に謝らなければならなかった。一蹴と付き合うよりも前にするべきだったんだ。そうして、一蹴が全て思い出してから、自分が塗り変えてしまった記憶を正すべきだった。そうしなければいけなかったんだ。

トビーの隣に立ち、住職から借りた傘を挿してやる。

「今、リナちゃんはどんな顔してると思う?」

「……さあな。リナが許したかどうか知らねえが、今の顔なら多分」

いのりちゃんの姿を目に映し、何を思ったのか苦笑する。

「困り顔で慌てるかもしれないねえな」

「だな」

これほどの痛みを知つたいのりちゃんなら、もう二度と想いの遂げ方を間違えたりはしない。それだけは断言出来る。なぜなら彼女は一度も言い訳をしなかった。一蹴を救う為になんて、そんな無様を晒さなかったんだ。そんな彼女を俺はもう責められない。自分から罰を受け入れる覚悟を決めた彼女を誰が責められようか?

「べ、なぎいッ……ぐえんなきい……」

リナちゃんの前で謝罪を続ける彼女は、幼き日の陵いのりだ。小さな彼女がようやく病室から抜け出したんだ。

いのりちゃんの気が済むまで俺達は二人を待ち続ける。醜態を晒すことも厭わず謝り続ける少女と、そんな少女をしようがないなあと見ているかもしれない、心優しい少女の二人の邂逅を。

「なんか用でもあるのかよ」

生気のない声でもそれでも悪態をつく声で応える。

前に行く小僧の横に車を停めながら、本当は乗せたくないが、仕方がない。

「聞きたいことあるだろ？答えてやるから乗れ。ついでに送って行ってやる」

「……別に送って貰いたくねえ。話ならここでいいだろ」

可愛げのねえやつだな。俺が高校生の頃はもつとチャージングだったぞ。信が高校を辞めてからは西野と二人で馬鹿をやったものだ。その所為で西野が彼女と別れた事件もあつたが、それはまた別のお話。

近くに住宅もないし、こいつが良いなら良いか。座席を濡らすとやたら怒られるしなあ。しかもそれが野郎の所為だった日には、ともとも大噴火だよ。

「あつそ、お前が良いなら良いけどな。つうか言葉遣いに気を付けろよ」
「はっ」

なんでこんなに年下に舐められるのだろうか？みなもちゃんがガチ天使に見えるよマジで。ん？マグローは皆の舎弟だから勘定に入つてないよ、うん。

「でだ、聞きたいことがあるだろ？名前の通り彼女に一蹴された一蹴くん」

「……年上だからつて調子乗んなよ。気が立つてるから何するかわかんねえから」

「はん、おしめも取れていないガキが偉そうに」

「あのさ、本気であんた殴るぞ」

「やれるもんならやれよ。精一杯の告白をした彼女を一人にしても平気なテメエの拳なんて痛くもねえだろうからな」

違う。本当はこんな挑発をしに来たわけじゃない。もつと大人の対応でこいつに優しく教えなければいけないのに。

その言葉が引き金になってしまったのか、鷲沢の瞳の中にありありと怒りの炎が灯つたのが見て取れた。

「……………だろ」

「聞こえねえよ、はつきり喋れガキ」

どつちがガキだか。俺はなんでこんなに苛立っている？

「お前等の所為でこうなつたんだらうがッ！」

決壊した感情が真つ直ぐに俺へと注がれる。その怒りを俺は真正面から迎え撃つ。

「お前等が何してたのかなんて知りたくもねえし、どうでもいい！けどなあッ！お前等がいなけりゃこんな事にならなかつた！いのりが今も昔も嘘をついていたなんて、そんな事知らなくて良かったんだ！そうすりゃあ、俺達は今も二人笑つてられたんだよッ！」

なるほど、確かにそうだ。トビーが陵にちよつかいを掛けなければ何事もなく、二人は幸せな恋人でいられたかもしれない。俺が陵の罪を白日の下に晒さなければ、二人が擦れ違うこともなかつた。このガキが、陵を一人にすることもなかつた。

「あいつに何をしたんだよ！いのりがこんな……こうなる事をわかつていてこんなことをするわけがねえッ！俺を傷つける事を言うはずねえんだよッ!!」

そうだな。俺があいつを追い詰めるければ、お前達は今も笑つていただろう。でも、いつかその笑顔はお前だけになって、陵は笑顔の仮面の下でどこまでも自分を嫌つていく。

目を逸らし続けてなんていられないのだから。こいつと付き合うのなら自分の過去からは逃げられない。いつか過去の重圧であいつは自分を見失うことになる。

「で、お前の不満はそれだけか？」

「それだけ？ んだよ、それだけってッ!!」

「そっかそっかあゝ……」

あいつは今頃、リナちゃんのお墓の前でみつともなく泣き喚きながら謝っているに違いない。自分で自分を罰しながら、冷たい雨に打たれ続けている。そんな陵の姿が脳裏に過ぎる。

ただそれっぽっちの事だけで、俺は車を降り――

「そんなんで恋人気取ってんのかクソガキッ――!!!」

鷺沢の胸倉を力の限り掴み上げ、地面に叩きつける。

「つッ!! 何すんだよッ!!」

「何してんだはこっちのセリフなんだよッ! お前、陵を本当に見てたか? それだけ近くにおいてなんで気付かねえッ! もうとっくにあいつの心は限界だったろうがッ!」

なんで気付いてやらない。どうしてその傷に触れようとしらない。どうして、なんでこいつは一緒に雨に濡れてやろうとしないッ!

「確かにあいつは最低な事をした! ああ、そうだ。許せねえよな普通は。どう考えたってあいつが悪い。でも、そんなこと陵だつて本当はわかってた。ただ、あまりに重い事実から目を背けていただけでな。過去から逃げ切れていないままお前の傍にいたんだ。そんなの、精神を磨り減らして当然だ。磨耗していく心はいつしか壊れてしまうんだ」

一人でそんなことを隠して、直向にこいつに嫌われないようにして、そんな馬鹿な健気があつてたまるかッ！

「あいつはお前の分まで背負つてんだぞ！一人で二人分の罪を背負つてんだ！あいつの中に降る雨はずつと冷たいままだッ！」

忘れさせた罪はあいつが背負うべきものだ。だが、こいつが忘れた罪をあいつはいつまで背負わなければならぬ？それも、恋人のこいつの荷物をいつまで……俺はそれが我慢ならない。

「なんだよ……んであんたにそんなこと言われなきゃなんねえんだッ！忘れた俺がわりいのかよッ！そりゃあ、あの子の事を忘れたのは俺だつて悪いさ！けど、忘れさせたのはいのりだろッ!?つばさちゃんのことを俺だつて忘れたくなんてなかつたんだッ！」

こいつにとつてもリナちゃんが大切だったのは本当だろう。そんなことを疑つてはいない。だが、こいつは自分の過ちを全て陵の所為にするつもりか？そんなことで陵を一人にしたと言うのか？

「大体あんたに何がわかんだよ！つばさちゃんに俺は救われていたんだ！施設にはなかつた温かさをくれて……それが、なんでこんな……」

もしも今、事故が原因で悪化してしまつて亡くなつたなんて言つたとしたらどうなるだろうか？今でさえこんなに取り乱しているのに、それを受け入れられる強さを持つて

いるとは思えない。

それだけは決して言えるわけが……

「俺の気持ちなんてわからねえくせに、信もグルになつてんだよな！最低だよ teme —— ツ!？」

その先を口にしそうになつた瞬間、勝手に身体が動いていた。鷺沢の頬を強かに張つて黙らせていた。

「なにをツ」

再度胸倉を掴み引つ張り上げ、顔を鼻先まで突きつけて喰い千切らんばかりに睨み付ける。

「俺の事はなんて言おうが構わない。けどな、信の事を最低だなんて口にしてみる。今度は拳で口を利けなくしてやる」

自分の気持ちを何も知らないだど？ふざけるなツ！あいつの気持ちの一端も知らないくせに、あいつがどんな気持ちで生きているかも知らないくせにツ！

あいつは……あいつは陵よりもずっと……

鷺沢を乱暴に放してやる。

「今、お前は自分の気持ちをわからねえくせにつて言つたな？そうだな、俺はお前の気持ちなんて知りたくもねえ。だが、そんなお前にとある馬鹿な男の話をしてやる」

「はあ？んなもん聞きたくなんて」

「黙って聞け」

低く唸る様な声で黙らせる。聞く気がなくても聞かせてやる。

「お前が最低呼ばわりした男は、お前なんか足元にも及ばない馬鹿なんだよ」

「もういいか？」

一瞬も目を離さずにいのりちゃんの謝罪を見続けているトビーに問う。

「さすがに限界だろ。あんなに雨に打たれて、身体壊してしまうぞ」

「……俺に聞いても仕方ねえだろ。お前の目で判断しろ。リナが許したかどうか」

納得はしていないが、いつまでも痍癩を起こすほどトビーは子供じゃない。不貞腐れながら顔を背ける。

「そっか」

そんなトビーに苦笑しつつ、俺はいのりちゃんの頭上に住職から借りた傘を翳（かざ）す。俺の気配に気付いたいのりちゃんが振り返った。その顔はすでに憔悴しきつていて、とてももう責める気にはとてもなれなかった。

「稲穂、さん？」

振り返ったのは一瞬で、また頭を下げようとするいのりちゃんの腕を取り、無理矢理

引き起こす。抵抗する弱々しい力を力づくで。

こんなに、か。智也は気付いていたのだらう。この子の心はもう軋んで折れてしまふ手前だという事に。一度自分の罪に目を向けてしまったら、自分を壊してしまうことも厭わない。そんな、純粹な少女だったんだ。

「離して、下さい。わたし、まだ……」

「駄目だ、これ以上は見ていられない」

「でも、まだ許されてません。許されるような事じゃ、ないんです」

弱々しい声なのに、折ることの出来ない意思を感じた。そんな彼女に、俺の片割れの影が重なる。あいつなら、なんて言うだろう。どうやって彼女の心を軽くするのだろう。俺には……

「いい加減にしろ」

戸惑いの中、少し離れた場所から意外な助け舟。トビーが心底気に喰わないとでも言うように声を上げた。

「テメエの自己満足にリナを巻き込みやがって」

いや、巻き込んだのは俺達だけだな。

「でもッ！」

「うるせえ、今になって自分を許せないなら無理じゃねえのか？ 一日じゃ意味ねえよ

なあ?」

そっか、そういうことか。トビーは許しちゃしない。許すには時間が足りないのだ。本当はもうどうでも良くせに、そういう事にしたらしい。

「それとも、テメエはこんな短い時間で許されるとも?」

「……思つて、ません」

「ならもう止めろ、見苦しいんだよボケが。この程度じゃテメエは許されねえ。だから、テメエはリナが苦しんだ時間と同じ時間、リナに謝り続けろ」

「え?」

「それがテメエに出来る最低限のことだ」

「それつて?」

言つていて恥ずかしくなったのか、トビーは俺達に背を向けて歩いていく。はは、ほんとに萌えるよ、トビーのツンデレ。トビーが女だったら絶対に惚れている。

「今のつてどういう?」

「つまり、これから絶対に墓参りを忘れるなつてさ。そして、謝り続ければ良いんじゃない? トビーの言う通りだよ。リナちゃんが苦しんだ時間だけ、君も費やさないとね。だから、今日は終わり。智也だつて君が身体を壊すのを望んでないだろうし」

今度こそいのりちゃんは抵抗しなかった。もう涙の出ない顔を歪めて、小さく「はい」

と返事をして、もう一度リナちゃんに向かつて頭を下げる。

「ごめんなさい。また、来るから」

気が済むことはないだろう。彼女は生きている限りもう二度とリナちゃんを忘れたりしない。俺の最高の親友と同じように。

「さて、行こうか。俺お腹空いちやったよ」

おどけて空気を軽くしようとして、智也はどうしているかなと考えていると、俺の袖を引つ張つていのりちゃんが尋ねてきた。

「あの、一つ聞きたいことがあります」

「何かな？」

聞きたいことはある程度予想はしていた。こうなる事をよそうしていたんだろうな、あいつは。じゃなきゃ、智也が自分の事を話してやってくれなんて、俺に言うわけがないんだから。

「三上さんに言われたんです。どうして三上さんが自分の事のように私を許せなかったのか、稲穂さんに聞いて欲しいって」

「そっか」

あいつがそう言ったのか。でも、良いのか？それはつまりさ……

「いのりちゃんは知りたいの？智也の過去に何があったのかを。それを知ること

は、君は智也とは他人じゃいられなくなるって事だ」

そういう事になる。あいつの過去を知っているのは限られた人間だけだから。音羽さんも、双海さんも、小夜美さんも知らない。その覚悟があるのかを問うと、いのりちゃんも、憔悴した顔だけれど、どこか憑き物が落ちたような顔で迷わずに頷いた。

「わかった。少し長い話になるから、そうだな。智也の部屋に行こう」

「三上さんの？」

「さすがに寒い中濡れたままっていうのは自殺行為だからね。タクシーを呼ぶから待ってて」

でもお金が！なんて慌てていたけれど気にしない気にしない。俺は立て替えるだけだから。智也に出して貰うに決まっている。

俺にとつては嬉しいいのりちゃんの変化に、頬が緩んでしまいそうだ。迷わずに頷くなんて……きっと彼女なら智也を……いや、俺を救ってくれるかもしれない。自分勝手な期待を胸の中に仕舞い込む。

ごめんな智也。俺はこの娘にお前を壊して欲しい。それでお前が苦しもうとも、俺はお前を——

「それは良くある交通事故だった。聞いたことないか？澄空中学校近くの路地で、女子

中学生が交通事故で亡くなった事故のこと」

「それって、確か五年前位にあった？ ニュースにもなつてたけど、それがなんだよ」

「それがあの馬鹿の贖罪の始まりだった」

「……それって、信の事かよ？」

その問い掛けに取り合わず、俺は無視して話を進める。

「その女子中学生は急いでいたんだろうな。ただでさえ見通しの悪い道路だったが雨まで降っていた。その道路を傘をなぜか二本持つて横断する際、規定速度よりも少し早く走ってきた車に気付かなかつた。運転手が慌ててハンドルを切るが間に合わず、彼女と衝突してしまった。運転手は無事だったが、跳ね飛ばされた少女は数メートル飛ばされ、て……」

無感情に話せば、なんとかなると思っていた。あの日の光景を思い出さずにいられると……そんなわけ、ねえのにな。

胸が手で鷲掴みされたかのように苦しい。湧き上がる苦痛に顔が歪んでしましう。焼かれた喉はひりついて、目は涙なんかじゃなく血が滴り落ちても不思議じゃない。

せめて鷲沢に気付かせないようにと、背を向けて曇天を見上げる。

「彼女は見るからに重傷で、一刻も早く処置しなければ間に合わない状態だったらしい。だが、運が悪いことに人通りの少ない道で、しかも運転手は気が動転して助けを呼べる

状況じゃなかったんだ。だが、そこに運悪く居合わせた少年がいた」

「まさか、それが信？」

「そうだ。この時の信を誰も責めることなんて出来ないだろう。なにせ、まだ子供だったんだ。冷静に動けなくて当たり前だ。悲惨な交通事故を目の当たりにして、少年は震えて動けなかった。何が起きたのかも理解出来なくて、どうにも出来なかったんだ。あまりの衝撃に怯えてしまい、助けを呼べなかったんだ。数分後、たまたま通りがかつた住人の人が救急車と警察を呼んでくれたらしいが、少年は彼女が運ばれる様を呆然と見ているしかなかった。腰を抜かしていたのかもしれない。そうして彼女が運ばれてすぐ後、警察よりも早く駆けつけた者がいた。少女と近い少年だった。そいつ、はさ？ 駆けつけてすぐに落ちている傘を見つけたんだ。真っ白な傘と道路に流れる紅。それが少女の傘だつて知っていたから……いた、からッ！」

駄目、だ。我慢しようにも、あの日を鮮明に思い出してしまふ。頭からじゃない、心から離れないあの日の最悪。

「あんた、泣いて……」

「傘を抱き寄せ、少年は何かを叫んだ。神にありつただけの憎しみを込めた悲鳴をぶつけた。八つ当たりだった。大切な少女の名前と、意味のわからない悲鳴。そんな少年を、あいつはずっと見ていた。見てしまったんだ。その後、傘を抱きながら少年は走り去つ

た。きつと近くの大きな病院へと向かったのだろう。その一部始終をずっと見ていることしか出来なかつた……罪でもなんでもない罪を心に刻んでしまった少年がいることも知らずに」

彩花がその命を賭して繋いでくれた絆だと、今なら思える。もう俺の隣にいられない自分の代わりに信と出会わせてくれたのだと。

「その事故から少しして、少年達は高校に上がり、再会することになる。もちろん、少女を失つた少年は、もう一人の少年が誰なのか気付かなかつた。あや、少女を失つて普通を装つて生きているだけの少年に、あいつは朗らかな笑顔で近づいた。馬鹿、だよな。その理由があの日、何も出来なかつた自分を許せなくて、少女にとつての大切な存在である少年を救いたい。少女が幸せにするはずだった少年の未来を、自分が幸せに導く。それが贖罪だと信じて少年の親友になつちまうんだから。その想いは今もあいつの中にある。本当に可哀想なのはどっちだよってな」

俺はあいつにこそ幸せになつてほしいのに。彩花だつて、信がこれ以上自分を責め続ける姿なんて見たくないだろう。度し難い馬鹿だ。

「……わかるか、お前に？わかるか、お前がどれだけ小さいかつてこと。あいつは一時も忘れないツ！忘れて欲しくても、忘れないように耐えているツ！泣き叫びたくなる胸の痛みを抱えて、それでも忘れてはいけないと生きてる！そんなあいつをお前は最低だと

言つたな？」

鷺沢が何を思っているのかは窺い知れない。それでも、信の過去から何かを感じ取つてくれたなら、それで良い。

「忘れ続けたあげく、自分の傍にいてくれた少女を置き去りにしたお前とどつちが最低だ？ あいつはお前も陵も、決して見捨てる為にこんなことをしたんじゃねえぞツ!!」

唇を噛み締め、拳をきつく握り締め、それでも反論する言葉を呑み込む。

「そうだ、お前に信を糾弾する資格なんてない。そんな暇があるなら、他にすべき事があるはずだ。」

「あいつの気持ちが変わるか？ お前等を見て、あいつがどんなに悲しかったかわかるか？ どうにかしてやりたいって動いたあいつのお人好しを、お前は否定するのかツ！」

「んなこと言われたって、じゃあどうすりや良いんだよツ！ 俺にどうしろって言うんだよー！」

「認めた。ようやく自覚したんだ、自分が愚かだったという事を。まずは一步前進だ。信の話をして、まだ自分は悪くないと言うのなら、今度は本気で殴つてやろうと思つていた。」

「いのりだけが悪いわけじゃねえってわかっているさ！ でも、どうすれば忘れてしまった時間を取り戻したら良いのかわかんねえ……わかんねえよ！」

わからないんじゃない、わからないと言いつつ誰かだけだ。そうじゃないと、リナちゃんを忘れてしまった自分を壊してしまいたいから。人は、そんなに強くはいられない。

「わからないなら、聞けば良い」

「誰に？」

「何年も涙を流し続けた誰かにだ。もう、お前は忘れてたりしないだろうからな」

俯く鷺沢に背を向けて車に乗り込む。エンジンを掛けたとき、送つていこうかもう一度声を掛けようと思ったが止めた。今は一人で過去を想い、現在（いま）どうしなければいけないかを考えたいだろうからな。

「じゃあ、風邪引くなよ。もしも熱が出たら、信に看病させるからな」

「いらねえよ、馬鹿じゃねえの」

こんな憎まれ口を叩けるなら大丈夫だろう。車を走らせ、今日は疲れたなと溜め息を一つ。何気なしに俺は窓の外を見ようとしたのだが、窓の外を見るまでに映ってしまった現実が俺を打ちのめしてくる。

「嘘、だろ？」

目を背けられない現実が、あの二人だけじゃなく俺にまで襲い掛かるなんてッ！

「ガソリンがねえー！ー！ーッ!!」

今日の一歩の災難。俺の財布の中の最後の千円が旅立ってしまった事だった。

智也の家に帰つてくると、俺達の姿を見たおばさんが急いでタオルを持ってきて、風呂に案内してくれた。もちろん、レディーファーストでいのりちゃんを先に風呂に入れて、俺はその次。いのりちゃんが入った後のお湯を見て、これを智也の大学で写真つきで売れないだろうかと考えたのは内緒だ。

俺は智也の、いのりちゃんはおばさんの服を借り、ようやく智也の部屋で一息つけた。おばさんが用意してくれたコーヒーから湯気が立ち上り、湯気の向こうには寝巻き姿の美少女。これが夜じゃなくて朝だったなら完璧なのに。

「あの、稲穂さん?」

「ツ!? 違う! 考えてない、考えてないよ! 一蹴の彼女でそんな事!」

「……はい?」

俺の心の中を見透かされたと思ったが、どうやら違うらしい。ふう、紛らわしいなあ。「そろそろ教えてくれませんか、三上さんに何があつたのか」

「あゝ、そつちね」

そうだった。智也の話をする為に落ち着ける場所に来たのだった。俺の部屋だと一蹴が帰つてきて気まずくなるかもだし、ここが一番話しやすいからな。なにより、彩花

ちゃんの話だもんな。

「まあ、もったいぶる話でもないし、話そうか。あいつの中の雨が降り出した、その始まりの話を」

智也がそうするよに、俺も窓辺へと背を預ける。そうすると、目を閉じて俺の話を彼女が聞いているような、そんな気配を感じられた。

「智也には産まれた時からずっと一緒に育った幼馴染の二人、唯笑ちゃん……そして、彩花ちゃんがいたんだ。三人はいつも一緒に、家族以上にお互いの事を大切に想っていた。ただ、成長していくにつれ、この三人の関係が変わっていくことになる。智也はどうだったか知らないが、唯笑ちゃんと彩花ちゃんはあの馬鹿にずっと恋心を抱いていたんだ。妹のような唯笑ちゃんに、姉のような彩花ちゃん。二人はお互いの気持ちを知っていたんだ。だからかな、二人は智也へと告白することはしなかった。三人の関係を壊したくなかったんだらうね」

俺の話を、いのりちゃんは目を閉じて聞いていた。きっと、三人の優しくも温かい光景を思い浮かべているのだらう。

「智也の話では中学三年の時だったかな。彩花ちゃんとデートをしたんだって。そのデートは唯笑ちゃんが彩花ちゃんに勧めたらしい。彩花ちゃんと一緒にいる智也が好きで、智也を想う彩花ちゃんが好きだから……その二つの好きが一緒にいてくれるな

らつて。多分、それだけじゃない。智也が誰を想っているのか、智也以上にわかっていたからかもしれない。そうして二人は遊園地でデートして、その帰り、夕暮れの公園で想いを確かめ合つて結ばれたんだ。唯笑ちゃんは、さ。心の底から嬉しかつたんだつて。二人が愛し合つて、その中に自分もいさせてくれる。そんな稀有な関係が嬉しくて、三人が変わることは永遠にないとさえ思つていたんだ。あの修学旅行を前にした、雨の休日が来るまでは」

俺が三人を救えなかつた日が来るまでは……

「その日、智也は遅刻が多かつたりして、罰として休日に教師と一緒にプリント作りを手伝わされていた。こういう所は高校でも相変わらずだつたけどね」

「でしようね」

二人で苦笑しつつ、話を続ける。

「プリント作りが終わつて、窓の外を見ると、ぽつぽつと弱く雨が降り始めていた。その日傘を持ってきていなかった智也は電話をしたんだ。彩花ちゃんに傘を持ってきて欲しいつて……本当は、ただ彩花ちゃんに会いたかつただけだろうけど。傘を持ってきた彩花ちゃんが、もうしようがないなあつて智也に少し怒つて、そんな彩花ちゃんに笑いながら謝つて、一緒にいつものように二人で帰る。そんな些細な幸せを、智也は思い描いていた。彩花ちゃんに連絡して、智也は昇降口で彼女を待つていた。でも、いくら

待っても彼女の姿が現れない。智也の家から学校まではそこまで時間が掛からない。それなのに、走ってくるであろう彼女の気配が一向にない。この時の事を、智也は今でも色褪せずに覚えている。一分、一秒、刻々と過ぎる時間が、智也の頭に嫌な映像を横切らせた。心臓の音が嫌に耳に響いて、不安で押し潰されそうなか、智也は一心に願ひ続けた。早く迎えに来てくれと。自分の馬鹿な考えが思い過ごして、それを笑い飛ばしてくれつて。でも、そうはならなかつた。なつて、くれなかつたんだ」

稲穂さんの話を聞きながら、私は思い出ししていた。三上さんの様子がおかしくなつた、あの場所のことを。

私を初めて家まで送つてくれた時、三上さんはあの道の近くに近づくとつれて、ハンドルを持つ手が震えて、何かに怯えているようだつた。私の目には見えない光景が三上さんの目には映つていて、それに三上さんは必死に耐えていたんだ。

「智也の耳に、空耳かもしれない救急車の音が聞こえ、ついに堪えきれなくなつた智也は駆け出した。違う、そんなはずはない、嘘だ、杞憂だ。そう言い聞かせているのに、足は止まらず、遂にその場所に辿り着いた」

それが、国道に出るあの見通しの悪い道路。私が三上さんを傷つけてしまった……
「辿り着いた智也の目に最初に映つたのは真っ白な傘。彩花ちゃんの買ったばかりのお

気に入りの傘で、早く雨が降ってその傘を使いたがって覚えていたんだ。その真つ白な傘にこびり付いた赤。アスファルトには、雨に流される鮮血。智也は茫然自失の状態で、彼女の傘を抱き締めたよ。抱き締めて、言葉にならない声を曇天に向かつて吼えた。その声は親を失った獣のようで、聞いているお……人間の心までをも震わせるようだった。どれくらいそうしていただろう、パトカーのサイレンが聞こえ、その瞬間智也は走り出した。傘を決して離さない様にきつく抱いて、近くの大きな病院へと向かって一心不乱に」

雨に打たれ、愛しい人の名前を呼ぶ三上さん。その姿が鮮明に瞼の裏に映し出されて、知らず涙が落ちていた。

そう、なんです。三上さんは、だから私を……私、最低だ。私の存在がどんなに三上さんを傷つけ続けたの？それなのに、あの人は私に厳しくも優しく教えてくれたんだ。嫌われてもおかしくない私を、支えてくれた。

「その後の事はあまり話せないけれど、智也は今でも自分を許していない。自分の浅はかさが彩花ちゃんを死に追いやったと、そう悲しいほどにどうしようもない罪を背負って生きている。彩花ちゃんを想いながら、今も生き続けている」

三上さんの笑顔とふざけた行動の裏に隠された、悲しいくも純粋な想い。彼の想いに比べて、自分のなんと小さな事か。改めて、自分の愚かさに気付くと同時に、三上さん

の彼女への想いを知り、私は涙が止まらなかつた。

「ごめんな、いのりちゃん。俺もあいつも君を故意に傷つける事が良いことだなんて思っていない。だけど、どうしても伝えなかつたんだ」

「は、い……わか、り、ます」

「誰かを失うということが、どんなに痛みを伴うのか、その痛みを忘れることがどれだけ罪深いことなのか」

「……すみ、ませ、ん……ごめ、なき……みか、みさん……すみませ」

「だから、智也を責めないで欲しい。あいつは君に——」

「あ、うあッ……ああ……」

「傷を抱えながらも、笑える未来を歩いて欲しくて、君にどう償っていけば良いか教えてなかつたんだ。それはさ、世界で一番の愛しい人を失くしてしまつても、変わらぬ想いを抱いて生きてるあいつにしか出来ない事だから」

声に、ならなかつた。三上さんの気持ちを想うと、涙を抑えられない。

彩花さんをいつまでも想い続けて生きて、彼女を失つた瞬間を一時も忘れずにいるなんて……そんな尊くも悲しい強さ。私なんかよりもずっと冷たい雨に打たれて、それでもなお微笑んで私に手を差し伸べてくれた。

リナ、ちゃん。ごめんなさい。今になって気付いたよ、自分がどんなに馬鹿で子供

だったのか。あなたの想いを、私は踏み躪ったんだ。それどころか、千々に破ってしまった。本当なら、私も一蹴も大切にしなければいけないかったあなたの記憶。いくら謝ったって許されはしない。

「わたし、も……忘れません」

「そうだね」

「生きている限り、リナちゃんに謝り続けます」

「うん、それが出来ればトビーも君と一蹴の邪魔はしないさ」

「はい。でも、もう一蹴は……」

汚い私を知っても一蹴は一緒にいてくれる？ううん、都合の良い望みは止めよう。私是最初から、一蹴の傍にいる資格なんてなかったんだもん。一蹴が私と別れたいと言うのなら、止めるなんて情けないことはしない。一蹴が決めたことなら、私は黙って受け入れないと駄目なんだ。

「ま、それは一蹴次第で。それより、ちよつとお願いがあるんだけどいいかな？」

「はい？」

「一刻も速くその涙と鼻水を拭いて「激写！変態ポニー、泣き叫ぶ美少女を前に厭らしい笑顔！」くれないからこうなっちゃったよ！」

いつの間に戻ってきたのか、三上さんがスマホを片手に活き活きとフラッシュを焚いていた。

「え、おま、え？まさか俺の部屋でナニやろうとしてんだよ？」

「お前がナニを捏造しようとしてるんだよ！俺はただお前の事を話しただけだ！」

「ああ、なるほど。俺の異世界譚を聞かせて、あまりに壮大で感動的なフィナーレに涙したと。それなら仕方ない」

「いやいや、俺が話したのはお前の高校時代の事だよ。いのりちゃん、実はこいつ高校の時に西野ってやつと」

「ふざけんな！俺の黒歴史を小娘に話すんじゃ……つて？」

どうして、だろう。勝手に身体が動いていた。

今日の出来事が全て嘘だったかのような三上さんのふざけた態度。そのいつもを、私の為にしてくれているのだと、今の私はわかってるから……その優しさをもう無視出来なくて……

「ごめ、なさい。ごめんなさいッ！」

私を支え続けてくれた、大きくて広い背中に自然と手を回して抱きついていった。

恋愛感情なんていう甘いものではなく、子供が悪戯をして母親に怒られ、泣きながら母親に抱きつくのと同じだった。

「はッ!? いや、ちょッ!? 陵離れる!」

「激写! 三上智也、教え子に恋の方程式を教えた結果!」

「お前には憎しみの三角締めを教えてやろうか!?! つうか、陵さん? 何やったんだよお前!」

「俺は何も。ただ、その様子を見る限りじゃ……」

「三上さんッ、三上、さん、ごめん、なさいいッ」

「どうやらいのりちゃんにとって、お前はお兄ちゃんみたいな位置になったんじゃねえの?」

「クーリングオフ希望じゃ! お前も謝り過ぎだから!」

「だって、私、わたしいッ!」

「あく、たくッ!」

面倒臭そうに、それでも私を労わる様に三上さんの大きな手が、私の頭をゆっくり撫でてくれる。

「もう良いんだ。もう大丈夫だから泣くなよ」

その手の温かさに、また涙が止まらなくなり、困ったように二人が笑う。

「お前は出来ることをしたんだ。後は俺と信に任せとけ」

何をどう任せるのかは知らないけれど、その言葉に自分でも驚くほどに安心して、そ

それでもまだ涙が零れてしまって、結局私が泣き止むまで三上さんは私の髪を撫で続けてくれたのだった。

彼の導き、彼の帳

臉の裏に陽射しの眩しさを感じ、重い臉を気怠げに上げると、いつもの風景とは違っている事に、ぼくつとする頭でぼんやりと不思議に思った。

毛布を被りながら、ゆっくりと起き上がって息を吸うと、どこか落ち着く匂い。

何度かその匂いを嗅ぎながら、少しずつ昨夜の事を思い出していく。

えっと、昨日は確か、私……

「三上さんと稲穂さんと一緒の部屋にいて、それで三上さんに……みかみ、さんに？」

ボンツ！なんて音と共に頭から煙を噴出してしまいそうになる。カアツと頬が熱くなつて、毛布を被つて顔を覆う。部屋の中には私しかないけれど、あまりの恥ずかしさに顔を隠さずにはいられなかった。

「~~~~~ツ!？」

三上さんのベッドの中でジタバタ足をバタつかせ、ごろんごろんと七転八倒。

なななな、なんて事を私はやらかしてしまったのおくくくツ!!

一晩中三上さんに抱きついて泣いて、泣き疲れるまでずつと髪を撫でられてツ！別に三上さんは私の兄でもなんでもないのでないのにツ！

それに、いつの間にかベッドで寝ていたってことは、きつと三上さんが寝かせてくれたんだ……どうしよう、記憶がない。

「ほんとに小娘だよお、わたしい〜」

三上さんも稲穂さんも呆れたよね？こんな醜態を晒すなんて……

「穴があつたら冬眠したい」

そうして二人の記憶から昨夜の事が消えるまで起きないでいたい。

そういうえば、二人の姿が見えないけれど何をしているんだろう？

『智也！余計な手出しするなよ！あ、止めろって！俺のコーンスープが真っ赤にいゝゝゝッ!!』

『じょうねゝつの、まっかなぺゝツペアゝ♪』

『ふぎけんな！お前が飲めよツ！俺はまた新しくって、全部にレッドペッパー投入するなよツ！』

『果て無き荒野を逝こうぜ？』

『お前だけ逝けよツ！』

見なくてもわかった。多分朝食？を用意しているんだ。今日は休日で、三上さんも私も学校がないし、稲穂さんも午後から仕事なのかも。

机の上の時計を見ると、正午近く。朝ですらなかつた……

私の日常にはなかつた騒がしい声。だけど、煩わしさなんか感じなくて、むしろずつと聞いていたい気持ちになる。

どうしてかな。多分、一人だったら私は見るも無残に沈んでいた。一言も喋らずに、無為な時間だけが過ぎていったはず。でも、今はなぜか気持ちがすつきりとしている。「もう、嘘なんてつかなくても良くなつたからかな」

それとも、私の中の真つ黒な膿を、三上さんが全部洗い流してくれたから？多分、その両方だ。

「……ほんと、変な人」

何も考えていないように振舞つて、その実誰よりも人の心を優しくしてくれる。こんなにも一蹴以外の誰かを信じる事が出来るなんて……悔しさよりも、心地よさが勝つてしまう。

不意に込み上げる、小さな笑み。

そう、だね。まずはちゃんとと言わないと。私が自分で嵌まつて抜け出すことを諦めてしまった、深く暗い底なし沼から救ってくれたことを。

よしと気合を入れて、私はあの幸福色の喧騒の中へと一步を踏み出すのだった。

「おはようございます」

「こんにちわだろ。どんだけ寝てんだよ」

「おはよういのりちゃん」

少し寝癖のついた髪をそのままに、すこしだけ恥ずかしそうに起きだした陵を、俺と信で適当に迎え入れる。

ていうかさ、寝坊スキルは俺の特権じゃなかったのかよ？ 軽く俺を凌駕しやがって。嫉妬するわ。

少し焦げたトーストを齧りつつ、俺特製コーンポタージュに舌鼓を打つ。意外に旨いな。少しピリつとした刺激が良い感じだ。

「あの、三上さん？」

入り口に突っ立ったままの陵がいきなり俺に頭を下げてきた。

「昨日はとんだご迷惑をお掛けしてすみませんでした！」

昨日？ ああ、俺様のベッドを占領したことか。

「まったくだお前の所為で俺は身体が痛くてかなわん」

「嘘つけよ。お前めちやくちや熟睡してたじゃんかよ」

俺と信は床で寝たわけだが、毛布が一つしかなくて二人で取り合った結果、俺が勝ち取り、信はクローゼットからコートを取り出して、それを毛布代わりにして寝ていた。固い床で寝るとかマジで地獄な。

「えっと、それもですけど、その……そうじゃなくてですね」

それ以外となると、俺のシャツをぐしゃぐしゃに濡らしやがった事か。シャツはついさつき、信がアイロンを掛けてくれたから平気だ。最初は俺がチャレンジしたのだが、どうにも変なところに折り目がついたりして、見かねた信が俺からアイロンを奪って、今は窓辺に干してある。

「んなことは良いから、お前はとりあえず顔を洗ってこいよ」

「そうだな。目、腫れて赤くなってるからさ」

あれだけ泣き続ければ当然だな。今日一日出かけるのは控えたほうが良い。

「あ、それじゃあお言葉に甘えて。それとですね、一応董さんにも挨拶をしたいのですけど」

「ああ、母さんなら夜中からいねえよ」

「そうなんですか？」

「多分、おばさん……唯笑の母親と雀壮に行ったから、唯笑の家で今頃爆睡してるはずだ」

「だからいなかったのか。ていうか麻雀かよ」

「馬鹿にすんなよ。あの人、一応プロだからな」

「おばさん何者だよッ!？」

それは俺も知りたい。色々な資格を持っていて、絶対に役に立たないだろうっていうものをいくつも持っている。我が親ながらバイタリティに富んだ人だ。

「そうなんですか」

「だからあの人の事は気にしなくて良いから、とつととその不細工な面をなんとかしてこい。見苦しい」

シツシツ、と手で追い払うようにすると、信が女の子に対して最低だな。なんて文句を垂れてくる。本当のことを言ったただけだろうに、何がいかんのじゃ。

俺のいつもの雑言に、何か言い返してくるかと陵を横目で見ると、言い返すどころか穏やかに微笑んでいた。

「ふふ、ありがとうございます。すぐにいつもの私に戻りますから、待っていてください
ね」

「お、おう」

洗面所へと消える背中を見送りながら俺は……

「気持ちわりいッ!!」

鳥肌が起立なされた腕を擦った。

「あいつに何があつたんだよ！キアラ変わりすぎだろ！もはや別人だぞ！」

「まあ、俺も驚いたけれどさ、彼女の気持ちもわからなくはないかな」

入ってきて、ヤンキーのような形相で俺の胸倉を掴み上げてくる。

「三上さん？」

「お前、今度は逆ベクトルなキャラ崩壊したな」

聖母から地獄の門番にメタモルフオーゼしちゃったか。これも俺の成せる技か。

「何か言う事はありませんか？」

「ブラ付けてないのか。襟元から覗けるから注意しろよ」

「ふふ、ふふふふ……死にます？」

やべえ、こいつと出会ってから今が一番キレていらつしやる。

「まあまあ、いのりちゃん落ち着いて。俺達は悪気があつたわけじゃ」

「稲穂さんも同罪です。連座制って知ってますか？」

「はい、すみません」

信雑魚いなおい！もう少し粘れよッ！

「ええ、悪気はなかったのかもですね。ギャグならなんでも許されるわけじゃないんで

すよっ。」

「身体張るのは芸人として当然だろうが」

「私は芸人を目指したことなくって一度もありません。どうしてくれるんですかコレッ

!？」

端から見たらキスをしていると誤解されかねない距離まで顔を近づけてきやがる。

おい止めろ、それ以上顔を近づけるんじゃない！吹き出しちゃうだろうがッ！

は〜い、まずはこの三上画伯が説明しますよ。まず、小娘の額に描かれているのは、キャンプファイヤーをする人々。学生の頃の思い出を描こうと、信のリクエストで俺が描きました。次に両頬に注目して下さ〜い。左には制服姿の女子学生、名前はしおりん。右側にはどこにでもいる普通の男子。そして、真ん中の鼻には伝説の樹。ここまで言えばわかりますね。学生といえば恋愛。恋愛といえばどきめも。ええ、俺は陵の顔で学生の淡い思い出を描いたのです。ちなみに、ちゃんと気遣いもしています。目が腫れぼったかったので、油性ルージユでコーデインイトしてみました。うん、カオスな感じがとても芸術性を感じさせますね。以上、三上画伯のアート講座でした。

「ん〜、もう少しピカソに近づけたほうが良かったな。すまん」

「もつと根本的な事を謝って下さいッ!!というか、よく平然と会話していられましたね!?!」

がくがくと強烈に前後に揺すぶられ、軽く吐き気を催す。

こいつめ、これだけの大作の何が不満だと言うんだ？

「謝るだあ？謝るのはお前じゃボケッ！いくら起こしても起きないで、アホ面でグ〜グ〜寝やがって！鼻提灯なんて初めて見たわ！」

「うう、嘘を言わないで下さいッ!」

「言つてません! お前、何回あと五分つて言つて俺と信を跳ね除けたと思つてんの? ていうかそんだけ描かれて起きないほうがおかしいだろうがッ!」

「そうかもしれないですけど、だからといって女の子の顔に、こんな意味不明な落書きをするほうが重罪ですからね! しかも筆ペン使いましたね!」

「うむ、筆には拘るタイプだな」

「あ、駄目です。もう駄目ですコレ。私の堪忍袋キャパシティオーバーしました」

「お、おい、何を持つて……馬鹿それ以上近づけたら洒落にならんッ! や、やめッ! タバスコ~~~~~ッ!!!」

熱い熱い熱い~~~~~! 目にタバスコが~~~~~! 真つ赤な涙が止まらねえよ!

「次はコレで良いですかね?」

「次ッ!? 次とかもうねえからッ! これで気は済んだだろうがッ!」

涙で滲む視界の所為で、陵が何をしようとしているのか皆目見当がつかず、じたばたと手を暴れさせる。だが、その隙間を縫うように陵が俺の鼻に何かを差し込んできて、その物体を力強く握り締める。

「つて、こえわはびいいいいッ!!!」

堪らず俺は椅子から転げ落ちて、苦悶に七転八倒。うつすら見えた信の足がめちやく

ちや震えていた。

「い、いのりちゃん、その位で許して」

「稲穂さん、もう少し待っていて下さいね。次は稲穂さんですから……ね？」

「もう二度としませんすみませんでした」

信の土下座を見下ろしながら陵が冷笑。

こうして、深窓の令嬢のような陵は露へと消えたのだった……

目があ、目があゝツ！とでもついやりたくなってしまう事件の後、陵を涙目になりながら家まで送り届けた。よく事故を起こさなかったと自分を最大限褒め称えたい。そんな目の痛みが引く頃に、俺は大学のある委員会の集まりが行われる教室へ来ていた。

中では活気に満ち溢れた声がいくつも飛び交い、中だけではなく外も走り回る奴が多い。

大学がなぜこれほどに活気に溢れているのか、その理由はどこの大学も同じだと思いが、千羽谷大学祭、略して千羽祭が一週間後に差し迫っている所為だ。

この時期になると、二年と一年が主導で動くため、やたら若い顔が疲労により老け込んでいて、逆に三年と四年はあんな時期も私達にはあつたよねと、年金暮らしの年寄り

のように穏やかとなる。

特に、千羽祭実行委員は三徹なんて当たり前の、締め切りに追われた作家のような形相で仕事をしているものだ。そんな彼らを労おうと俺は手土産を持ってきた……なんて殊勝な事をするつもりは毛頭ない。むしろ、この時期はここをキープアウトして人外魔境に誰も近づけないようにしたい。安倍清明でも呼んじやう？

とまあそんな禁忌の場所になぜこの俺様がわざわざ足をお運びなされたかと言えば、なんとこの委員会の今年度委員長様は、この俺の忠実なる配下である西野なのだ。ええ、実はわりとリーダーシップがある子なんですよ。やれば出来る子があいつの座右の銘だからな。

さてさて、それじゃあちよつくら軽く用事を済ませちやいませようかね。

コンコンココンコ~~~~~~~~と軽快にノックをすると、中から誰だゴラアツ!! 修羅に入る覚悟あんだろうなテメエツ!! 等といった、素晴らしい歓迎の声。やべえ、帰りてえ。

少し待つと、チツとドア越しでもわかる舌打ちを打つ西野とご対面。うん、修羅の顔だこれ。圓明流の後継者と見紛うばかりですな。

「よお、忙しいところ悪いな西野。実は折り入って相談が「ノートも金もない。消えろクソ野郎」……荒廃しすぎだろ」

いつもはもうちよつと紳士な西野が、モノホンにジョブチェンジしていた。確実に何人か殺っている眼だなおい。

「いや、俺も帰りたいのは山々なんだが、そうもいかない事情があつてな」

「知るか。帰つて今坂さんとリア充ライフしてろ。くたばれハーレム野郎。魂ごこの世から失せろ」

「何があつたらそんなキャラ崩壊が起きるんだよ」

「ほお、知りたいか？ 知りたいのか貴様、ああん？」

「い、いや、聞きたくはないが、ていうかお前怒つてる？」

「ははは……言わなくても分かれよ」

あつれえく？ 何か西野を怒らせるような事をしたっけ？ 西野の元彼女に間違つて西野と俺が裸踊りをしている動画を送つたり、西野が後輩の女の子に抱きつかれている画像を見せてしまつたりしたただけなんだが。

「それは高校時代の黒歴史で今は関係ないよな？ ていうか、委員会の後輩達がいる前になに言つてくれちやつてるのお前！」

「あいたたたた、つい眩いちゃつてたか。すまん」

「めちやくちや大声だつたけどな！」

「あの後彼女にコーラを頭からぶつ掛けられたのは良い思い出だよな」

あの時の蜘蛛を見るかのような冷めたあの子の眼は今でも忘れられない。

「わかった、相談には乗ってやる。だからそれ以上俺の黒歴史を暴露するな！ていうかそもそも俺が怒ってる理由はそれじゃない！まあ、怨んではいるが」

「漢字が怖いやつじゃねえかよ」

「あのな、一ヶ月前に俺が頼んだ事覚えてるか？」

はて、一ヶ月前に頼まれていた事？西野に頼まれていた事ねえ……ああ、そういえば。

「唯笑のブラを貸して欲しいって話だったよな！」

「とんでもねえ捏造話は止めてくれねえかなあッ！」

教室内の後輩達がざわついて、ひそひそ話をしながら西野を見ていた。愉快愉快。

「違うだろ！お前と伊波にステージでのMCを頼んでただろうが！」

「あ、そっちなか」

「それしかねえんですけどね！何もう片方もあったみたいな言い方してんの!？」

確かに頼まれていたような記憶がないでもない。スター性に富んだ俺様を抜擢するあたり、さすが俺の配下だと思ひ、たまには配下の進言を聞いてやろうと快諾したはず。俺って器がでかいなあ。

「次の日にはすっかり忘れていた。悪いな」

「全然悪いなんて思ってたねえだろ！打ち合わせにも来ないで進行どうすんだよッ！」

「何が!？」

そんなポジションに俺がいたなんてまさに天啓……いや、過去の俺はこうなる事を既に予見していたに違いない。さすがだ。惚れる。

「いやな、実はすこしくし千羽祭のプログラムの事で相談があつてな」

「……待て、それは今の俺を更に酷使しないと誓える内容か？」

「……………当たり前だ」

「俺の目を見て言え」

だって、聞いたら絶対こいつ反対するもん。まあ、反対を賛成に変える切り札がこっちにはあるわけだが。

「まあまあ、とりあえず俺の話聞いてからどうするか決めてくれ」

心底嫌そうな顔をする西野の肩を引き寄せ、後輩達になるべく聞こえないように俺達の計画を耳打ちした。

「……マジか？」

「マジだ。信がそつちで動いて既に快諾されている」

「いや、それが本当なら願っても無いが、その条件が正直かなり際どいぞ」

「何がだよ」

「そりゃあ、こつちだってゲストは既に用意しているしな、それを今更キャンセルになんて出来るわけないだろ」

「別に断らなくても良いだろ。そつちはメインでやって、こつちは後夜祭をプロムにしてやつちまえば問題ない」

「いやいや、そもそもプロムを今から準備するのだって、時間と人手と経費が……」

「それも解決出来る。必要に見せて不必要に金をせしめてる部活とサークルがあるからな。そこからすこし協力してもらえばいい。なるべく穏便に、向こうから協力するよにな」

「お前、いつのまにそんな証拠を？」

「俺と信の顔はワールドワイドなんだよ。知らなかったのか？」

「知りたくもねえ」

「あとは、プロム前に競技場を使つてのイベントだが……」

「その時間ならまあ、出来なくはないな」

「さあ、どうする？こんな破格なイベント、早々出来るもんじゃないぜ」

「……なにより、向こうのギャラが格安なのが良いな。普通は三倍はギャラ払わないといけないしな」

「だろ？」

「くくくッ！わかった、これで行こう！ただし、こっちは裏方で手一杯だから、進行は全部お前等でなんとかしろ！あと、タイムスケジュールも今日中だ。いいな？」

「いや、今日中はちよつと。今週中にはなんとか……」

「使えない社員かよ。言い訳無用、俺達に無茶を強いるならお前も無茶をしろ」

「お前、いいブラツクの取締役になれるよ」

「なんでお前の無茶を聞いて俺が貶されるんだろうね!？」

今日中、ね。実は昨日のうちにある程度のタイムスケジュールは組んであったりする。信は無駄に裏で動く事に喜びを感じる変態だからなあ。あとは信がどこまで値切れるかだ。向こうだってプロだ、そう易々と呼べるものじゃない。西野には軽い見積もりだけを話したが、正直厳しいかもしれない。友人だからと本人達は了承しても、その前段階には会社というものがある。現実、会社と交渉しないといけないのだが……

「駄目だったら駄目だったで別の手を考えるさ」

陵に任せとけなんて格好つけてしまったんだ。ならば、仮にも先生である俺がダサイ姿を見せていいわけがない。小娘一人のハッピーエンドくらい、俺が導いてやるさ。不恰好な笑顔なんて、俺がちゃんと責任を持って焼却しようじゃないか。

「というわけで、これから会議を始める」

敵かに言い放つと、当事者となる二人は俺を親の敵のように睨んできやがった。

「滅茶苦茶な無理を強いておきながら、凄く偉そうだね。どういう神経しているのかな？かな？」

「イナケン、怒りのあまり危ないネタ使うなよ。こいつはこういう奴なんだって知ってただろ？」

「それはそうだけど、智也君とMCをやるって決まった時から破滅しか見えてなかったしね」

あれあれ？部屋の温度が急速に冷えていくぞ。冬が近いからだよな？うん。

だって仕方ないじゃん。MCの片割れにも計画を話さないと、進行出来ないしさ。とはいえ、陵の事情については深くは話せなかったが。

「えっと、つまり、僕の後輩二人が喧嘩しちやっつて、その仲直りをさせたいからこんな無茶をするってことでもいいのかな？」

「可愛い後輩の為だ、身を粉にして働くのは当たり前だろ？」

「リアルに身を粉にしてやりたい気分だよ」

「どうして智也が絡むとイナケンはじょう○ばりに黒くなるんだろうな」

「ヤンデレなんだろ。それより、お前等何飲む？ビール以外にもカクテルとワインもあ

るぞい」

キツチンに入り、グラスと氷を用意する。つまみはつと、チーズと鮭の燻製があるな。上等だ。

「ちよつと待て」

「俺は明日朝一からだから、カクテルで」

「僕はワインを貰おうかな」

「喜んでー!」

「だから待てって言ってるだろ!」

居酒屋気分で用意していると、俺達三人を咎める声。空気をぶち壊すような人間にはなりたくないものだ。仕方ないと、不満ありありの顔をしている加賀へと視線をやる。

「なんだよ」

「なんだよじゃない!」

「わかつてる、お前はビールだよな」

「何をわかつてるんですかね!?!そうじゃなくて、なんでさも自分の家のように勝手に物色してんだよ!」

はい、実はそうなんです。今回の会議に加賀の部屋を使わせてもらっているのです。

俺の部屋に四人はちよつと狭いし、他二名の部屋は俺の家よりも狭苦しい。だが、俺達

には頼りになるパトロンである加賀正午がいる。こいつ、親が金を持っているらしく、やたら広い高級マンションに住んでいる。そんな頼りになる友達を使わないで、他にどう使えというんだ。ついでに、酒も良いものが揃っているだろうという期待もあつたけどな。

「良いだろ別に。あん、なんだこのワイン。馬鹿みたいに古いな、賞味期限過ぎてんじゃねえか？」

「そうだね、心配だし僕等で飲んであげようよ」

「いや、馬鹿ツ！それはマジでやめ」おお、コルク抜く時の音が良い感じだなこれ」ぎげんなあ————ツツ!!」

ははは！加賀の慌てる顔は本当に美味しいなあ。

「おま、それ俺のじゃないんだぞ！」

「わかつてるって。親父さんのだろ？」

「シヨーゴの親父さんくらい大物なら、おう、呑め呑めって許してくれるって」

などと気楽に笑っていると、次の加賀の一言に俺等三人は凍りついた。

「たはくく、違うって。あのな、それ……カナタのだぞ」

瞬時に俺達三人はお互いへと目線を行き交わせる。今までふざけてなんとかかと思っていたが、とてつもない地雷を踏んでしまった。

奴の名前が出た途端、俺達三人の顔から血の気が失せた。

「嘘、だろ？」

「どこか特別な日に開けようって、あいつにしては珍しく大事に抱えてたっけ……」

やばいやばいやばいやばいッ！死刑執行五秒前だろうがッ！

「馬鹿野郎ッ！なんでもっと早く言わなかったんだッ！」

「言う前に嬉々として開けたじゃないかよ！」

いやいやいやいや、本当にまずいですよお。これが唯笑やかおるならどうとでもなるが、黒須だけは洒落にならない。あの女に常識や冗談など通じる気がしないし、笑顔で俺を社会的に殺そうとするのが眼に見えている。

「はっ、そうだ！最初にワインを飲みたいとか調子乗ったのは伊波じゃねえか。というわけで、この責任は伊波の所為」

「ちよつと！僕は関係ないでしょ！ていうか、賞味期限過ぎてんじゃねえかとか、ちよつとアホな発言してたの自分でしょ！僕はまさかそんなヴィンテージに手を出すなんて思ってたよ！」

「あー！そういう責任逃れすんのか！そうだねとか同意して笑ってたくせに！」

「その場のノリでしょ！普通人の家のヴィンテージワインに手なんかつけないよ！常識を疑っちゃうね！」

ぎゃーすかと俺と伊波は、どうにかして相手に責任をなすりつけようと、自分の中の汚い大人の部分を総動員して言い争う。

「お前等なあ、イナケンも智也も落ち着けよ」

「これが落ち着いていられるか！」

「そうだよ！あの黒須さんだよ!？」

「お前等の中でカナタはどんだけ理不尽な存在になつてんだよ」

信の呆れ顔に、俺と伊波も冷静さを取り戻す。そう、だよな。ちよつとびびり過ぎだったかもな。黒須だつて良い大人なんだ、ちよつとした手違いで空けてしまったと素直に謝ればきつと許してくれるはずだ。

「とにかく、黒須さんに素直に謝ろうよ。そうすれば怒つたりなんてしないよ」

「ああ、そうだな。そうと決まれば膳は急げだ。加賀、今すぐ黒須に連絡を……加賀？」
さつきから大人しい加賀の肩に手を置くと、俺達の話を聞いていなかっただけらしく、彫刻のように立ち尽くしている……汗を床にだらだら落としながら。

そんな加賀の様子に嫌な予感を覚え、どうしたのか聞いてみると、黙って俺達に見えるように携帯の画面を見せてきた。そこには……

『ショーゴお！あたしに映画の主演の話がキターーーーッ！今からショーゴのとこ行くから、あたしのワインを用意して待ってて♪』

「神の悪戯どころのタイミングじゃねえ」

「ワールドカップ決勝でオウンゴールを決めた気分だね」

「イナケン、もうそれ歴史的事件だから」

という事はここにもうすぐ死神が降臨するという事だ。あまりの絶望に眩暈がしつつも、どうにかして現状を打破する策を考える。何か……そう、何かないか？

「あくあ、あいつこれ開けるの楽しみにしてたのに、俺もただじゃ済まないんだろうなあ」

なんて、俺達よりも軽度の罪に溜息をしながらワインを手にする加賀。そんな加賀の姿に俺と伊波は顔を見合わせて頷きあい、即座に行動に移す。そんな俺達を信は眼を瞑って見逃してくれた。

あとは……

「しやうがないね、僕と智也君で土下座するよ」

「だな。悪かったな加賀。後は俺達で何とかするからさ」

「お前等……ま、まあ俺は止めた側だから、別に悪くはないんだけどさ、いいのか？」

「仕方ないよ。悪いのは僕達だもん」

「まあな。ガキみたいにふざけ過ぎたよな」

俺と伊波の殊勝な態度に、加賀がどこか感心したようであった。そんな加賀に俺達は

最後の仕掛けをする。

「それでさ、今から黒須さんが来るんだよね？」

「あ、ああ。多分一時間で来るとは思うけど」

「じゃあ、悪いんだが、ちよつと黒須の機嫌を取るためにあいつの好きな物買ってきてくれないか？」

と言いながら、俺は加賀に気取られないようにとある物を隠す。

「そうだな。カナタもそれなら……あ、金は」

「僕と智也君で出すよ！ね？」

「あ、ああ！当たり前だろ！」

財布から二人で五千円を出して加賀に手渡す。正直、かなり痛い出費だが、遺体になるより遥かにマシだ。

「じゃあ、お前が買い出しに行ってる間、俺達でここを片付けとくから」

「ああ、わかった。それじゃあ、急いで……あれ？」

「どうかしたか？」

「いや……まあいいか。じゃあちよつと行ってくるから、片付けは頼むな」

「うん。気をつけてねえ……詐欺に（小声）」

加賀が部屋を出て、俺達は安堵のため息を付く。

「お前等、下衆な事でもつもないコンビネーション発揮するなよ」

さすがに信にはバレているらしい。

「命あつての物種だ」

「綺麗事だけじゃ会社は成り立たないのと一緒だね」

「ブラツク企業つて知ってるか？」

「ごちやごちやとうるさい信は置いておいて、俺はさつき自然に隠したとある物を取り出す。加賀の携帯だ。」

「伊波、すぐにさつきのを送ってくれ」

「もうやってるよ」

先程、加賀がワインを手にした際、その姿を伊波がシャッター音を切つて即座に撮影。その写真を加賀の携帯へと転送し、その画像を使って……

『ごめん、カナタ。実は……開けちやった、テヘペロペロ』とライン。

携帯をソファアに放り投げて、ミッションコンプリートと俺と伊波はハイタッチ。

「さすが智也君。責任逃れの天才だね」

「そういうお前も、高性能下衆思考だったぜ」

「……シヨーゴをスケープゴートにしておいて、よくそんな爽やかに笑えるなお前等」

さて、もうここに用はない。上着を手に取り、一仕事終えた会社員のように、俺と伊

波は歩き出す。

「このあと俺の家で飲み直すか」

「そうだね。なんだか疲れちゃったしね」

二人で笑い合い、加賀の家を出た。最初の目的？俺達ならアドリブでなんとかなるだろ。世界の終わりを回避した俺達なら、もう何も怖くない。こうして、この日の夜は一人の青年の断末魔と共に更けていった。

ならずやでのバイトが終わり、家に帰るとポストに封筒が入っていた。封筒には招待状と下手糞な文字。差出人の名前は、三上智也。

その名前を目にすると、俺は封筒をゴミ箱に投げ捨て、布団に横たわる。

あの日以来、いのりには会っていかない。会おうと思えば会えるけど、今顔を合わせてもお互い気まずいだけだし、なにより口汚く罵ってしまいそうな自分が怖かった。

真つ暗な部屋の中、飯も食う気が起きず、今までの事が頭の中を堂々巡りしている。

いのりは、最初から俺の事を知っていて近付いて、そして……

「いのり、わかんねえよ」

どうして俺と付き合おうって思ったんだ？どんな気持ちで俺といたんだよ？そりゃ、告白された時は嬉しかったさ。こんなに可愛くて優しい女の子が俺を好きだって言っ

てくれて……最初は、そんな軽い理由で付き合った。でも、一緒にいるうちにいのりの駄目なところも見えて、でもそんないのりも愛おしくて、俺はいのりとじゃないと駄目なんだって、そう思えるまでに好きになったんだ。

一緒に花火を見に行つて、秋には紅葉を見て、冬には寒さに比例するように寄り添つて……二人で季節を感じていたはずなのに。同じように感じていたと、そう思い違いをしていた。だからなのか？ だからいのりは追い詰められていった？

いのりの過去を知ろうともせず、その傷に触れようともしないでいたから、だからいのりは追い詰められたんじゃないのか？ 傷に気付かない俺に安堵して、安堵と同じくらい不安も抱えて。ああ、そうさ。いのりが悪いわけじゃない。大切な記憶を、心の奥深くに閉じ込めて忘れ去った俺が悪い。そんなこと、あの男に言われなくなつて知つていくさ。知つているのに……

「馬鹿だろ、俺……」

心のどこかでいのりを罵倒する自分がある。どうしてもつと早くに打ち明けてくれなかつた？ 俺の事を見縊つていたんだろ？ ふざけるな！ 俺はそんなに弱くない！ 事実から目を背けるほど俺はガキじゃない！

そう、自分の事を棚に上げていのりの所為にしている自分がある。

こんなどうしようもない俺の傍に、ずっといてくれた愛おしい存在を俺は……

どうせなら殴ってくれば良かった。それどころか俺の目の前でいのりをあの男が奪ってくれたなら良かった。そうすれば、俺は自分の弱さを恨まずに、あの男を気兼ねなく憎むだけでいられた。

「クソツ」

結局、どうすることも決められずにいると、玄関を叩く音が聞こえ身体を起こす。

まさかいのり？

「一蹴、ちよつといいか？」

なんて幸せな奴だよ。いのりなわけがないのに、まだ俺はいのりに背負わせようとしているのかよ。

外から聞こえた声は信だった。

「出てこないならそれでも良い。少し伝えておきたい事があつて」

もしかしたら俺を咎めに来たのかも知れないと思つたが、信の声には棘がなく、俺を労わっているようにさえ聞こえた。

「招待状は見たか？」

招待状？ああ、あのゴミか。見たくもない。

「もし、お前がいのりちゃんの事が許せないのなら、その招待状は見なくてもいい」

許すも何も、いのりはもう……

「でも、もしお前がまだ彼女を必要とするなら、その招待状を見てくれ。彼女とこのまま別れて後悔をしたくないなら」

必要？馬鹿な事を言うなよ。必要じゃない時間なんてなかった。今だつてこんな俺の傍にいてくれるならいて欲しい。だけど、俺の弱さを全部受け入れられるほどのりは強くなつてない。でももう、俺は……

「安心しろ。お前がどうしようかと、あの子は俺達が支えてみせる。けどな……」

俺はあいつに甘えてばかりの惨めな自分を見たくないッ！

「この先二人がどうなろうと、過去を清算しない限りどこまでも過去はお前達を苦しめる事になる。それを忘れるなよ」

「というわけで、ほらよ」

対面に座る陵に、俺は小僧にも送った同じ封筒を投げて渡す。

「あの、参考書を解いている時に、邪魔するように渡すの止めてください」

言葉に軽い毒が混ざっている。まだ怒っているのか、小さい女だな。

「なんですかこれ？」

「うちの大学祭でやる、とあるイベントの招待状だ」

「そうですか、お返しします」

「せめて中を読んでから返答しろよ！」

「三上さんの企みが一度でも私を喜ばせた事がありましたか？」

「泣いて喜んでた記憶ならある」

「前から思ってたましたけれど、ずっと言わないままであつたことがあるんですけど、言つても良いですか？」

「いや、言わな「頭大丈夫ですか？」ストレート過ぎじゃねえかなあ!」

辛辣を通り越して残酷にすら思えるわ。未恐ろしい女子（おなご）じゃあ。

「いいからとにかく受け取れ！せっかく俺と信が未を粉にしてイベントを開催出来るようにしたんだからな！まったたく、誰の為にこんな……」

「へえ、誰の為、なんですか？」

からかう様に俺を見てくる陵に、俺は舌打ちをしてそっぽを向く。ちくししようめ、もつとどん底まで落ち込ませたままにしておけばよかった。心無しか、以前よりも距離が近付いたような気がする。俺からじゃなく、勝手に入ってくるのがもう腹が立つ。人のパーソナルスペースに無断で入りやがって。アメリカなら射殺もんだぞ。

「ふふ、まああり難く受け取っておきますね」

「家の額縁に飾つても良いぞ」

「身の程を弁えましょうね」

「お前は口を弁えようか」

さて、渡すものも渡し、陵が問題を解くまで暇だな。西野に悪戯電話でもして遊ぶとするか。

「あ、そうだ。聞きたい事があつたんですけど」

なんて携帯を手にとると、電話をする前に小娘からの声。参考書へと顔は向けたまま、まるでなんでもない事のように、陵は口を開いた。

「彩花さんって、どんな人だったんですか？」

こつちを見ずに問い掛ける声には、誤魔化しを許さない真剣さが含まれているように、俺は思わず今はいない隣の部屋へと視線を向けてしまった。

なぜもなにも、信が俺の事を話したのだから聞かれても不思議じゃない。だが、どうしてそこまで真剣に質問してきたのか……それが腑に落ちない。腑に落ちてはいけな何かがある気がして、すぐには答えられなかった。代わりに俺はどうしてだ？と問い返していた。

「どうしてって気になるじゃないですか」

な、にを？

乾いた唇からその言葉が出る事もなく、そうして……

「どの位素晴らしい聖母のような女性だったら、三上さんのようなちよつとアレな人と

付き合えるのかなって」

「お前と正反対の可憐なやつだったのは間違いねえよッ!!」

俺の怒りが爆発したのだった。

憤慨する俺と、俺を馬鹿にして笑う陵。

馬鹿な俺達を嬉しそうに、でも物悲しげな表情をして見ているような……窓際にそんなあいつがいるような気がして、少しだけ胸が苦しくなる。

もう少し、だから。もう少しで終わるから、待っていてくれ。

心の中でそう呟くが、俺の声にあいつがどんな顔をしているのか、もう真っ直ぐに見れなかった。

彼の思惑、彼の覚悟

秋も本格的に深まろうかという時期、街に吹く風は湿り気など感じさせず、ほんの少しの冷たさを含み始めている。そんな時期だというのに、その場所は異様な熱気が籠っていた。

お世辞にも大きいとは言えない大学内での野外ステージの前。そこには二百人以上の人々がひしめき合っていて、今か今かと何かを待ちわびているようだ。

この日は千羽谷大学での大学祭初日。通称千羽祭と呼ばれる大学祭は、県内でも有数の大学祭で、県外からも来客があるほどの人気を誇り、二日に渡って開催される。ただ、初日は一般には解放されておらず、在学生及び卒業生、もしくは在学生からの招待状がなければ参加出来ない。その招待状の希少価値は、ネットで高値で取引されるほどだ。

なぜここまでの人気を得たのか……一つは全国でも稀に見る美女、もしくは美少女の在学率が高い事だろう。その証拠に、芸能事務所のスカウトマンが当時在学中であった白河静流と、霧島小夜美をストーカー一步手前の熱意で口説いていたという恐ろしい事実がある。

二つ目は、全国でも稀に見る個性的……悪い言い方をすれば馬鹿が集まる大学だから

だ。毎年何をしでかすかわからないエンターテイメント性が、毎度の如くネットを中心に話題になる。三上智也が在学していることが良い証拠だろう。

と、出店の質なども高いこともあるが、主にこの二つが人気の理由となっている。

そんな美女と馬鹿による狂演を今か今かと、馬鹿達がその類稀なる馬鹿を発揮する時間を待っているのだ。

千羽祭初日、開催まであと五分を切ろうかという時、スピーカーから野外ステージ担当MCである二人の声が観客の耳に届いた。

『うわ、凄いね智也君。こんな沢山のお客さんが来てくれてるよ』

『ほんとにな、どんだけ暇なんだよお前等。ていうか野郎率高くないか?』

姿は見えないが、ステージ裏から覗いているようだ。観客の数に驚きの声を上げる健とは対照的に、智也は早速観客へと喧嘩を売り始める。

『まったく、そんなんだからお前等は彼女が『少し黙ってようか智也君。ていうか打ち合わせにない発言は止めて、馬鹿なんだから台本だけを忠実に読んでね』……解散してえ』

二人の声に、会場はおお〜!と歓声を上げる。野外ステージのMCは当日まで伏せられていて、今初めて観客は誰なのかを理解した。一人はどんな女性も、その甘いマスクと微笑みで奈落に突き落とす、通称墮としの伊波。男子学生全ての敵。もう一人は通称

馬鹿に見えてただの馬鹿。三上智也である。ちなみに男子学生全ての敵であるのは健と同様だ。違いがあるとすれば、彼女がいるか否かだけで、基本的に数々の女性をなぜか墮としていることには変わりはない。

大学内どころか、あらゆる場所でも有名な二人がMCという事に、観客の期待感がさらに膨らむ。この二人ならば、今までにない何かをやらかしてくるのではないかと。

『ほら、いいからここを読んでよ』

『チツ、仕方ないな。えつと……美佐子はその熱く滾った道夫のソレを目にすると、知らずぐくりと唾を飲み込『スピリタス飲み込ますよ?』はん、やれるもんなら……おい! マジで持ってんじゃねえか!』

ああ、いつものだなと健に同情的になる観客一同。その一連のやり取りになぜ健がMCなのかを皆が納得する。詰まるところ、三上智也を制御出来るのは学内では伊波健だけなのだ。

『やめッ! マジでやるから! えつと、まずは開催前に注意事項をいくつか。なにになに? 一つ目は……三上智也が暴走したら、物を投げて気絶させてでも止めること?』

『最重要項目だね』

『おま、この台本がふざけてんじゃねえかよッ!』

『いやいや、それが本気なんだよ。この項目が正解と思う人、拍手!』

健の求めに大喝采。中にはうっしやー！殺るぞおッ！などと気合の入った叫びまでもが混ざっていた。

『ふざけんな！俺をなんだと思ってるんだよ！』

『稀代の馬鹿』

馬鹿以外に才能がない男。可愛い幼馴染を持つ負け組。見ていると、真面目に生きようと思える男。その他数十の声が上がり、今度こそ智也はキレそうになる。

『お前等全員表出ろや！』

『もう表にいるけどね』

すかさずの突っ込みに爆笑。ある意味では掴みに成功したと言えるだろう。

爆笑の渦の中、ただ一人だけは笑わずに冷めた視線をステージに向けていた。女子大生に見えなくもないが、まだ少女にも見える彼女、陵いのりだ。

(千羽大で一番有名な馬鹿な人が私の先生なんだ)

彼女の隣にいる信は笑わずに、神妙に頷いている。高校から変わっていない事に納得しているらしい。

漫才とも本気の喧嘩とも取れる二人の注意事項？が爆笑の中終わり、ついにその時が訪れる。

『あ、あと少しで十時ですね。じゃあ。みんなで十秒前からカウントしましょう！』

『いやあ、長かった。今日まで本当に長かったね智也君』

『めちやくちや長かったよな』

千羽祭が開幕するまでの事を俺は思い返していた。本当に大変だったんだ。急遽野外ステージを改造したり、人手が足りなくて俺と健、それに加賀で徹夜して……そんな俺達に謎のピエロ君も力を貸してくれて。おっと、俺としたことが涙が出てしまいそうだぜ。

ステージ上から下を見渡すと、すぐ目の前に信と陵の姿が見て取れた。ふむ、小娘の目が淀んでいるように見えるのはどういうことだ？ はっはくん、なるほどな。小娘にとつてこの時間は早朝に違いない。ということはまだ頭が覚醒していないんだな。困ったやつだ。

『といわけで、始まったわけですけど……一つ聞いていいかな？』

『ん？ お前の部屋の裏物全般なら、ちゃんと全部玄関に並べておいたぞ』

『あつそ』

『突つ込みすら放棄しやがった』

『あのさ、多分僕だけじゃないと思うんだけど、みんな絶対不思議に思ってる事なんだ』

『なんだよ？』

『……そのピエロ誰？』

『ああ、俺の親友』

知っているくせに役者だなあ。俺は横にいるピエロの肩に手を……置こうとして扱われた。しかも小さく潰すぞと眩き、不運にもマイクがその言葉を拾ってしまふ。最近のマイク集音能力高過ぎじゃね？

『物凄い険悪でしょ！親友感が微塵も感じられないからさー！』

『はは、違うんだって。こいつちよつと緊張しててさ……おい、嘘でもいいから仲良くしろよ』

引き攣りながら小声で願うと、ギターがシャウトしやがった。

『おい、どういう意味だ？』

話すのが嫌になったらしく、仕方なくギターで返事をしたらしい。だが、それがどういった意味なのかは俺には……

『えっと、もしかして否定してる？』

ジャーンと綺麗な和音が今度は響いた。まあ、知ってたけどな！

『智也君、親友どころか親の仇のように嫌われてるじゃない』

『人選に問題があったわ』

俺の無様を笑う観客達。後で名簿と顔を照合しなければなるまい。

ちくしょう、プロと遜色無い腕を見込んで無理矢理引っ張ってきたのが失敗だった。

トビーの人でなしめ。

ええ、実はピエロなんてスカしたマスクを付けて格好つけているこいつ、中身はトビーなんだなあ。そもそも元凶はこいつなんだし、ちよっと手伝わせても罰は当たらないだろう。

『まあ、いいです。ピエロ君の正体は不明という事で。ただですね、実は後で触れる事もあるのですが、実はこのピエロ君はですね、前日まで僕達の準備を寡黙に一生懸命手伝ってくれたんです。どこかの誰かと違って』

『おいおい、自分をそんなに卑下するなよ』

『その事は後で追々ね。本当に誰よりも一生懸命に準備してくれて、彼がいなければこのステージは絶対作れませんでした。なので、どうか皆さん正体不明のピエロ君に感謝の拍手をお願いします!』

拍手がトビーに向けられ、ギターが照れくささを表したかのように短く鳴る。ギターで会話とかキャラ付け完璧じゃねえかよ。

『はい、ありがとうございます。このピエロ君ですが、メインステージの講堂では決して見れず、こちらの第二ステージだけの特別演者となっております。今から少し休んで頂きますが、この後も様々なゲストとギターで共演して頂くので、彼の応援をよろしくお願いします!』

ピエロが下がっていくと、えく！と会場から引き留めるような声上がる。人生初だろ、トビーがこんな扱い受けるなんて。嫉妬すんぞ。

『それですね、今回の学祭のテーマは何かわかりますか？』

『某番組と、某名セリフのパクリ』

『……否定はしません。が、このテーマは今までとはちよつと違ったシステムを表しているんですよ』

『お前の不貞指数？』

『自分の知能指数でも指折り数えてて。あのね、今回の学祭はまたぶつ飛んだテーマがあるんですよ』

『お前の俺への暴言のがぶつ飛んでるけどな』

『それはなんと！この学祭で恋人を量産していこうという、現代社会の草食撲滅推進派閥による強行案が採用されています！』

『いや、ちよつと何言ってるかわかんない』

『サンドはもういいぜ。じゃなくて、女子も男子も、この機会に気になる人に告白して頂いて、僕達はその応援をするという企画です』

百戦錬磨の伊波の応援という言葉に、男子が一気に色めき立つ。ま、ある意味狙い通りで何よりだ。うちの大学が勉強は出来る思春期馬鹿ばかりで良かったと思える瞬間

だ。

『これはどのタイミングでも、申し込みがあつた場合はこのステージを利用して告白して頂いて構わないことになっていまして、その際にはこの』

どこからともなくピアノの切なくて甘い音色が響き、その音だけで会場の誰もが聞き惚れている。すげえな、マジもんやつたんやあいつ。

『この音楽が流れますので、ライブ以外のイベントは一旦ストップして頂いて、気なる人と告白する人にステージ上に上がってもらい、勇気を出して告白をして頂きます。ちなみに、その際に告白する側のアピールポイントなどを僕達が行いますので、若干智也君という不確定要素はありますが、僕が全力で成功に導く努力をしますので安心してください』

『つまり自分はどんな女でも落せる手練手管を持つていると?』

『智也君よりはマシってだけだからさ、その悪意を殺してくれるかな?』

マジかよ、伊波がセツティングしてくれるって?有りじゃね?成功率は確かに上がるな。なんて声がそこかしこから聞こえてくる。自分の偏差値と相談してほしいものだ。

『なので、まあ事前に簡単な説明は受けていたとは思いますが、プログラムの最後のページにある用紙に自分の名前と相手の名前を書いて、受付、もしくは僕達に直接渡して下さい。その時点で僕達がセツティングに動きますので。今の説明でわかった方は、その

場でジャンプ!』

あざ〜〜〜〜〜ツす!!!!!!

ライブのウェーブなんて目じやない光景が目の前に広がる。別名、馬鹿の海。

『オーケー。わかったのはわかったが、一旦落ち着けお前等。はい、そこパンツを振り回さないように』

『それパンツよりヤバい別な物も振り回してるよね!警備の人!あの人本部に監禁して下さーい!』

ちよつとしたアクシデントはちよつとしたお茶目という事で目を瞑り、大概のこの学祭のシステムを説明し終えて、ようやく最初のイベントへと向かうことが出来る。俺より馬鹿が多くて困るぜまったく。

『ではまずはこの野外ステージ初日のプログラムを紹介していきたいと思いま……は?』

淀みなく進んでいた伊波のトークが急ブレーキ。視線で俺に語り掛けてくる。曰く、聞いてないよこんなの!だ。

聞いてないも何も、昨日打ち合わせした通りだろうが。何も問題は……と、視線を台本に落として俺もフリーズしてしまう。

『えっと……皆に聞きたいんですけど、お手元のプログラムには開幕式の後に何が書かれていますか?』

観客へと救いを求める伊波に、観客は厭らしい笑顔を一齐に浮かべている。

『おい、嘘だろ? だって、昨日の台本にはこんなこと書いてなかったじゃねえか! おい伊波とりあえず逃げ『られると思わない事だなあ!』どっから湧いて出たテメエツ!』

いつの間に現れたのか、学祭実行委員が十人ほど現れ、状況を把握できない俺と伊波を手際良く取り押さえてきやがった。

部下に俺達を抑えさせ、メインステージで忙しくしているはずの実行委員長、西野が黒幕のようなマントを肩に掛けて俺達のポジションを奪った。

部下が椅子を持ってきて、俺と伊波は椅子へと座らせられ、後ろ手に手錠を掛けられてしまった。統率力半端ないな!

『おい西野! なんだよこれ!』

『そうだよ! 汚れに汚れた智也君ならまだしも僕は関係ないでしょ!』

『お前の暴言を汚れてるとは思わんのか!』

『あく、はいはい。お前等の言葉はとりあえずスルーだから。これはお前等には隠していたイベントでな、とにかく時間も押ししてるし、じゃあ早速皆でイベント名を叫ぼうか! せくのツ!』

——千羽谷大学クズ裁判！略して千羽裁ツッ!!!

『はい、ありがとう。綺麗に揃ったなあ。もう、この瞬間の一致団結感ヤバイな』

さ、裁判だあ!?!身に覚えのない事とあまりの理不尽に、俺と伊波は怒りで全身が総毛立つ。

『ちよつと、西野君！智也君はともかく僕は無実でしょ！むしろ被害者だからね！』

『テメエ、俺にとっては加害者だよ間違いない』

『はい、醜い争いはするな二人共。まずは伊波君、君の罪状だが……リア充スピード違反罪だ』

『意味が分からないんだけど!?!』

『えく、いくつか寄せられた証言があるのだがね、まあそれは後で話そう。委員長としてはだね、ぶっちゃけ白河ほたる様と恋人だという時点で死刑だ』

あゝ、それなあゝ。と観客が一斉に頷く。

『僕の命紙屑同然じゃん』

く、狂ってやがる……

『ちよつと待てよ！じゃあ俺はなんだよ!?!』

『言わなければわからないかね?』

『清廉潔白な俺様の人生に汚点なんてものは『社会の窓開いてるぞ』あつたわ』

ていうか手錠掛けられてるから、社会の窓全開放なんだけどな!?

『さて、この裁判はまず弁護士はいない。一方的に罪を晒して最後に裁くだけのシンプリな裁判となっている』

『裁判ってなんだっけ?』

『魔女裁判も裁判って言うだろ。それだよ、こいつらがやろうとしてんのは』

チラツと陵のほうに目を向けると、俺と知り合いなのをなかつたことにしようと、無表情であらぬ方向を見ていて、信は西野へと親指を立てていた。間違いない、あの行き倒れもこの冤罪裁判に絡んでやがる。

『つうか、お前メインステージはどうした!?!』

『副委員長が恙なく進行してくれている』

『……委員長いなくてもいいとか、完全に要らない子だね』

『黙りたまえクソ面』

『クソ面ってなにさ!?!』

『では、とりあえず時間もないことだしサクサク行こう。まずは君達二人の行動をここ一週間リサーチしたのだがね』

『ストーリー被害出すぞ』

『三ヶ月は警察は動かないようだが、好きにしたまえ無脳(むのう)』

『造語ってんじやねえぞゴラツ!!』

『よくわかったね今の』

『罪人の叫び声ほど気持ち良いものはないな。さて、まずはそうだな……三上なんとかくん、君の罪から暴こうか』

『おい、伊波。あいつ潰そうぜ。ここまで生かしておいたのが間違いだった』

『うん。ついでに、僕等を嘲笑っている観客、主に男子の顔は全部覚えたからね』

俺と伊波を怒らせてただで済むと思つてたら間違いだ……あ、伊波の笑顔、人に見せちゃいけないやつだわ。

『では三上ながし君。君の罪、まずはこれだ!』

ステージ上のでかいモニターに映し出されたのは、千羽祭の準備のために必要な買い出しをしに行つた時の画像だった。俺が買い物袋を車のトランクに詰め込んでいる場面。特におかしな点は一つもない。

『あん?これのどこが罪なんだよ』

『ほう、どこかと申すか?』

『お前せめて何キャラか定めろよ』

俺の突っ込みを無視して、なぜか西野は肩を振るわせてやがる。な、泣いてるのん? 大の男が衆目で?もう、わけがわからない。

ピアノの不吉な音が鳴り響く。運命と奇妙な何かが混ざって、不穏な空気が二乗されていく気がする。

『とうわけで、今のピアノで貴様はーギルティ獲得だ』

血、血、血、血が欲しい〜♪

『殺伐とした合唱してんじやねえ！パロってんじやねえぞー！』

『くそ、あのビッチめ、こんな馬鹿のどこがいいんだ？』

『ビッチとか言わないとこだろうね、多分』

『それな』

『随分と調子に乗っているようだがね、伊波下衆乙女』

『何かな、西野……名前なんだっけ？』

『よし、貴様はこの画像で地獄に落ちろ。次はこれだあツ!!』

俺の画像が消えて、次は繁華街の画像。その画像が出た瞬間、俺は見逃さなかった、伊波の冷静な顔が更に冷静になったのを。まあ、そりゃそうだろうな。これは俺にもまざいとすぐにわかった。

なぜなら、画像にはソフトクリームを片手に歩く伊波と、少し気合の入った格好の寿々奈鷹乃が同じように片手にソフトクリームを手に持って微笑み合っているのだから。

『ふう、ちよつと待つてこれは』

ジャジャジャ、ジャー————ン♪

『早いよ！お願い僕の弁明を聞いて！』

『弁明？弁明なんていらねえだろこれ。めちやくちやお似合いのカップルじゃねえか。おめでとう伊波、祝福するわ』

『智也君君つて人は……』

ジャジャジャ、ジャー————ン♪

『あ、今のは三上の分ね』

『なんでだあ!!』

『おそらくですが、お似合いつて言葉がピアニストの心を傷つけたようですね』

『策士策に溺れる、ざまあないね』

『破局の危機に直面しているお前に言われたくねえよ』

こんなの百年以上の恋でも無理だろ。即離婚慰謝料つて話だろうが。

だが、伊波の目は死んでいない。まるで、待つていましたとばかりに光り輝いていた。おいおい、ここから逆転する手立てがあるつていうのかよ？

『少し、少しでいいから聞いてくれないかな、僕のピアニストさん』

あ、あざとい！さりげなく僕のとこ言うところはどうかしてる！

『この日ね、僕は確かに彼女と出掛けたよ。でもね、それには理由があったんだ。僕の何よりも大切な人が久しぶりに僕のもとに帰ってきてくれる……そんな、なんでもない日だけど、僕にとっては幸せな日が近づいていたんだ。だから、さ。僕、女性の好みとか詳しくないから、だから……』

嘘、だろ？あいつ、まさかやるつもりか？伝家の宝刀を抜くつもりかよ！

『愛しい人へのプレゼントは何がいいか、彼女に相談していたんだ！』

抜いた……！伝家の宝刀「実は君の為だったんだよ」を抜いた……！

この技の凄いところは、相手が信じようが信じまいが、甘い言葉で怒りが少しでも和らぐ点にある。下衆の極みが使う常套手段だ。

ポロロン♪（ほんとう？）

『本当だよ。その証拠に、僕のズボンの右を探って欲しい』

『では、失礼して』

西野が伊波のズボンを探ると『いや、どこ触ってるのさ』『顔に似合わずビッグビツグツ！』『蹴り殺すよ！』『マジでいい加減にしろ西野。』

『おや、これは？』

西野が取り出したそれは、猫の形を模したピアスだった。そういや最近人気らしく、かおるも欲しいって言ってた気がする。

『僕の愛しいピアニストさん、少しでも君に僕の存在を感じて欲しくて、これを君に……不安にさせて、ごめんね』

ポロン♪ (健ちゃん)

『どこにいても、僕は君を愛してる。もう、君を傷つけたりなんてしないからね』

ポロン♪ (う、ん)

おいおい、何しんみりしちやっぺんだよ。まさか、これでこいつは……

『まあ、関係なくギルティですけどね』

ジャジャジャ、ジャー————♪

『なんで!?!』

『いや、そりやそうでしょ。彼女がいるのに他の美女とデートしてたんでしょ?』

『いや、だからデートじゃ……』

『この後、二人でディナーしてた画像もありますけど?あと単純に、イケメンが腹立つ』

『そりやお礼くらいは……いや、最後の私怨じゃん』

たらららん♪たらららん♪ (後で話そうね、健ちゃん)

『はい、ギルティでいいです』

いやっはあ————!!!

世紀末のような合唱に、俺と伊波はもう抵抗する気も失せた。だって、どうしたって

無罪勝ち取れねえもんよ。こうして、この後も数々の冤罪を上げられ、もうどうにでもしてくれ状態の俺達だったのだが、それだけでは終わらせてくれなかった。

最後の罪とも言えない罪を告発され、もうこれで解放かと思っただが……

『というわけで、彼等には罰を用意しております』

『今までので十分じゃね（でしよ）!?!』

こいつ、本気で俺達の心を全殺しにきてんじやねえかよ！

『は？刑を執行していないのに終わるわけないですよね？ここ、大丈夫ですかあ？』

頭を人差し指でツンツンしながら笑う西野。誰がこんな悪魔を生み出したんですかねえ!?

『え、それではですね、お二人は覚えていますか？三日前に撮ったある映像を』

三日前？三日前っていうと、徹夜が続いてハイになつてゐる極めて危険な状態のピークだったはずだ。その時に何を……

『あツ!?!』

『伊波、覚えてんのか？』

『智也君こそ忘れたの？あつたじゃん、ほら徹夜してハイな状態でふざけて撮った例のあれだよ!』

『……アレか』

言われて思い出す。そういうこと、か……。おかしいとは思ったんだよ。いきなりちよつとやってみようぜなんて言つて、実行委員が俺達二人を撮つたりするし。全てはこの日の為の布石だったとは……

『では、早速刑を執行しましょう！』

『待て待て待て待てツ!!俺にしては珍しく下手に出るから待つて下さい西野さん!!』

『西野君、今後無条件でノートを貸し出すから許してお願ひ!!』

俺達二人の必死さが奇しくも会場のボルテージを上げてしまったのと、西野の嗜虐心を煽つてしまったのは言うまでもない。

そうして、無情にもその映像は流れてしまったのだ。

俺達の黒歴史エセロックスター物語がな!

——自分に足りない物等を感じたことはありませんか？

『ない、ですかね。いえ、足りないかと自覚するとそこで僕は止まってしまふ。そんな気がしていますね。なので、常に高いところを意識しています』

——なるほど、それが一流である秘訣だと

『はは、僕が一流かどうかはわかりませんが、そうあろうと努力はしているつもりです』
——では、伊波さんの盟友である三上さんにお聞きしますが、今後自分はどのような

道を辿ると想定していますか？

『さあ、どうだろうな。あまりそういうった事は考えないでここまで走って来たから……
そうだな、強いて言うならいけるとここまで走っていきますよ。俺達の力の限り、ね』

——かつこいいですね、フアンの方々もきつと今の言葉に胸を熱くしたと思います

『こんなことで？ 違うでしょ、これからの俺達の姿を見て、熱くさせてみせますよ』

——痺れますね。そういうえば、伊波さんも三上さんも女性におもてになりますよね。
恋人はいないんですか？

『うわ、結構ぶっこんできますね』

——すみません（笑）

『そうですね、正直恋をしたくなって思わないこともないんですが、むしろ紹介してほしくらいですよ。誰かいませんか？』

——またまた御冗談を。出会いはありますよね？

『出会いなんてありませんよ。今は忙しいですし。ですが、いつか僕等のガソリンが尽きた時、誰か僕を抱き締めてくれたなら……僕はそれだけで幸せだなんて思えます』

——あゝ、もうもてる男の余裕が見えてますね（笑）三上さんは？

『俺はいつでも恋をしていますよ』

——それって、フアンの方々にとって常套句ですか？

『いえ、その時その時に俺は恋をしています。作曲するにあたってやはり大事なのはインスピレーションなんだよね。だから、一瞬一瞬を大切に思っていないと、皆の心に届く曲は降りてこないんだ。わかるかな?』

——もう、お二人は天井知らずに格好良いっすね(笑)

『そうですか? 光栄ですな』

『こんなんで良ければな(笑)』

映像が流れる中、会場は爆裂。俺等爆死。椅子に座らされて項垂れる俺達は廃人以外の何者でもなかった。

メイキング映像がたっぷり十分流され、俺達は血の涙を流す。

違うんだよ、ほらあるだろ? 疲れがピークを越えたと何でもやってやるって感覚。その感覚で、何にも疑わずにおふざけだろうってやってやっちゃったんだよ。

客席に目を向けると、陵が俺の視線に気付いて視線をあからさまに逸らし、信はスタンディングオベーション。感涙の涙を隠そうともしない。うん、お前は確実に俺と伊波を敵に回した。後悔を抱いて死なす。

全てが終わり、俺と伊波は解放され力なくその場に手をついた。

『いやあ、皆さん見て下さい! 私達の仇敵は見事に打ち滅ぼされました! 見て下さい、こ

のおもし、悲壮な姿を！』

カメラが近づいてきて、俺と伊波をアップで映す。

そうかい、そんなに俺を怒らせたのか西野……いいぜおい。その喧嘩買ってやるよ。

『ふはは、ではこれを本当の開幕として千羽祭を開催』『ちよつと待つて西野君』『まあまあ、もうちよつとゆつくりしていこうぜ西野』

抱腹絶倒の渦の中、俺と伊波はゆらりと立ち上がり西野を両脇から抑える。

『は？いやもう時間が押してるし』

『いいでしょ、もう』

『ああ、だよな』

『いいでしょって、いいわけないだろ』

『ははは、いいでしょってそういう意味じゃないよ』

『まったくだ、ははは』

『もうどうでもいいって意味だ（だよ）』

この数年で一番の笑顔を俺達は浮かべたに違いない。西野の肩がかたかたと、ポルターガイストのように震え始めた。

『実行委員の後輩達、西野君を縛り付けて』

伊波の突然の言葉に、こんなリハはなかったとしても言うかのように戸惑うが、その戸惑いを俺は打ち消してやる。

『大丈夫だ。こいつの罪、知りたくないか？お前等後輩に重荷を背負わせた罪があるんだよ、こいつには』

『はっはっはっ！そんなもの私には、え？ちよ、お前等何してんの!』

思い当たる節があるらしいな。後輩たちは迅速に西野を椅子に座らせて手錠を掛ける。

『ようし、良い後輩達だ。お前等の無礼は忘れないが、罪は軽くしてやろう。ところで？なあ伊波？こいつが毎日のように何してたか知ってるか？』

『えっと、確か毎日三時間消えてたのは確認出来てるんだよねえ。それも、夜の七時丁度に……ねえ、なに、してたのかなあ？』

伊波が顔を近づけて問い詰めると、西野は顔を背けて『い、家に着替えを、だね……』と弱々しく呟く。冷や汗ダラダラで何言ってるんだ。責められるのに弱いなこいつ。

『なるほどなるほど。ところで、さ？俺お前に誘われた事あったよなあ、一昨日の夜七時に』

その言葉に背中までぐっしよりにして『いや、おま！』なんて慌てる姿が、小動物の様で良い気分だ。

ませんっしたあああああツ!!!
』

俺と伊波の復讐心が満たされ、前日祭は今度こそ本当に幕を開けたのだった。

「いいの？この後たるたるが出るけど」

「いえ、なんだか疲れてしまつて」

まあ、自分が兄のように慕つた人間の痴態を惜しげもなく見てしまつたら嫌にもなる。何を考えているんだか、あの馬鹿は……最高だつたけどな。

いのりちゃんと二人、野外ステージを離れてキャンパスを歩いていると、どこもかしこも笑顔で溢れている。活気に満ちていて、それだけでこの大学が悪くはないのではと思わせてくれるようだ。

そんなキャンパスの一角、やたら人が溢れかえっている出店があつて、俺は足を止めてしまう。

「……違う。こんなん違う」

「ははは、盛況盛況！」

なにやら普通のかき氷とは一風変わったかき氷を売っているようで、出店の名前が『クリかき』と名乗っていた。

味が、ベリークリーム、ティラミス、グリーンティー等々。購入した客の手には、や

たらお洒落なかき氷。とろりとしたクリームと、それに合わせたフルーツが盛られている。

店をやっているのはどうやら二人らしいのだが、一人は俺と同年代位の青年と、もう一人はいのりちゃんと同じくらい黒髪の少女。関西弁が特徴的な子だ。

「おい、早く氷の準備しろよ」

「話が違うやんか！こんなんするため呼んだん!？」

「……いや、給料はちゃんと出すが、他に何だと？」

「そら……その……」

「木瀬」

「なに？」

「お前が何を期待していたのかは知らないが、一つ金言を授けよう。この世の幸せの九割は金で買える。だから死ぬ気で稼げ！」

「この人最低や！」

どこかで見たような光景だが、本人達はなんだかんだ言いながらも楽しそうだ。そうだな、まだ時間もあるしいのりちゃんに御馳走を……

「あれ？」

さつきまでそばにいたいいのりちゃんがなくて、俺は慌てて辺りを見回す。さすがに

愛想が尽きて帰ったなんてことは……あるな。

内心焦りながら探すと、いのりちゃんは案内が貼つてある掲示板の前で足を止めていた。

「いのりちゃん？」

「あ、すみません！」

「いや、いいんだけど何を……ああ、それか」

いのりちゃんが見ていた案内に得心がいつてしまった。なるほどね、そりゃ案内ぐらいするよな。

「それって？」

「ん、ほらそこを書いてあるやつ。16時からのイベント告知だよ」

「あ……ああ！そうですね！」

あれ？なんか間違えただろうか？彼女の反応に少しばかり違和感を覚えて、俺は掲示板を再度覗こうとしたのだが……

「そ、それよりもそろそろはたる先輩の出演ですよ！戻りましょう！」

「え？でもさつきは」

「いいから早くいきましよう！」

いのりちゃんに無理矢理背を押されて歩き出す。結局、彼女が何に気を取られていた

のかはわからずじまいだった。

『はい、第二現代の若者研究会の皆さんでしたあゝ！いやあ、凄かったですね！』

『ああ、言われてみれば、おお！つてなつたわ。特に、現代二次元へのアンチテーゼな』
『ちよつと僕には良くわからない部分もありましたが、でもそうなんだあつて感心しましたね』

『異世界ジャンルの多様化は言わずもがな、ヒロインが傷つき戦う姿を見て面白いと感じる若者の感性の歪み……』

『確実に敵を増やしてどうするんでしようね』

『内容を各方面の方々に聞かれたら、存在を消されかねない内容だったな』

『そんな彼等の蛮勇を称えて拍手をお願いします』

ステージ裏に消えた彼等に惜し気もない拍手が送られる。蛮勇と無謀を履き違えてはいけない事だけは伝えておきたいがな。

『と、ここでですねメインステージではなんと、某有名なアーティストの方がゲストでいらつしやつているようですね！』

『らしいな。つうか、朝少しだけ話したけどな』

越権行為だろ！ざけんなツ！という非難の声。優越感気持ちいいわあゝ。

(出来たらこの何年間できつくにやってるよ)

(ばっか!アレが出たら完全にこの雰囲気は白けるだろうが!)

(じゃあ智也君がなんとかしてよ!)

あいつ彼氏のくせになんの役にも立たないよな!ちくしょう、あの暴走あほたるを俺が止めるしかない!?しかしどうやって……

あらゆる手を一瞬のうちに探るが、回答が出ない。まずい、このままだと!

『じゃあ、皆いつものあれいくよー!』

どれだよ。こいつまさかウィーンでもやってるんじゃないだろうな!日本の恥もいところだろうが!

『せくの!』ば、やめッ!』ほわちゃんペッ!!』

時間がやけに遅く感じた。伊波は目を伏せ、俺は止めようと手を伸ばし、そして……

——ペッ!!!

『嘘でしょ(だろ)!!?』

ノリノリでネタを拾う客の練度に俺と伊波は真剣に驚いた。

あり得ない。こんな光景を白河と出会ってから一度だって遭遇した覚えはねえぞ。そう、あり得ないんだよ。

『おい、白河ちよつと裏来いよ』

『ほえ?どうしたの智ちん?』

『お前やったる?打ち合わせしたろ?』

『え、してないよお。ねえ?』

——ねえ?〜?〜?〜?

『完璧にやってんじゃねえか!俺の目は誤魔化せねえぞ!』

そうでもなければいきなり合わせられるわけがない。初対面だった頃の俺が合わせられなかつた伝説の技だぞ?素人が合わせられるなんて、そんなこと……

『いや、智也君。もしかしてこれが普通なのかもしれないよ』

『……お前まで頭をやられたのか?』

『そうじゃないよ。今日のこの特別な雰囲気なら、もしかしたらあり得るかなって。それに、この大学はちよつとアレな人多いし』

『多分に漏れずお前もその一味だが、なるほど。熱に浮かされて、か』

『その可能性はあるよ』

『もう、失礼だなあ智ちんは!そうだ!智ちんもやってみなよ!』

『無理』

『レスポンス異常に速いね』

『そんなこと言わないでやろうよお!すつごい気持ちいいんだよ、皆揃うと、わあ〜つて

気持ちになるんだから!』

そりゃあ、確かに気持ちよさそうだなあとか思ったよ? あんなに揃うとか、自分がカリスマになった気分だろうし? やつてみたいかどうかで言えばやつてもいいかなあとか、思ってみたりもするし。いや、でもなあ。

『皆も聞きたいよねえ?』

——聞きた~~~~い!!!!

『ほらあ!』

『そ、そうか?』

『智也君、こういうの得意でしょ。ここはやる場面だよ』

——み・か・み!み・か・み!

突然の三上コールにさしもの俺もやぶさかではなく……

『じゃ、じゃあちよつとだけ』

いやあ、実は昔からやりたかったんだよね、某サングラス司会者の手拍子とか、ああいうの誰でもやりたいって夢見たことくらいあるじゃん? それが叶うつてなると……あ、ちよつと緊張してきたわ。

『早く早く、智ちゃん』

『お、おう、じゃあ……』

深く深呼吸をして緊張を和らげ、俺の今出来る最高の笑顔と共に――

『智ちゃんペツ!』

――か~~~~~~~~ペツ!!!

……………あ、なるほどなるほど、そういう事でしたか。いやあ、僕も舐められたもんですわ。喋り方が変わるくらい俺ショックだもんよ。夢、打ち碎かれたんだぜ？

『お前等、便所来い』

『ちよつと、ど、どうしたのと、智也君……ふふ』

『笑い隠せてねえだろうが!』

白河なんか、息も出来ずに笑い転げている。そのままパンチラつてるクソがッ!

『いつだ? お前等いつ打ち合わせした?』

『もう、疑心暗鬼になりすぎふはッ、だつてばあ〜』

『あくまでしらばつくれる気か? お前等! いつ打ち合わせしたあッ!』

――グッジョブ!!!

『夢碎かれてバッドなんだよゴラアッ!!』

タン、タラランランラン♪

『このタイミングでメモリーズオフ!?』

『あつと、ここで告白タイムですね』

『こんなタイムミングでか!?このタイムミングで俺が成功させると思ってたんのかよ!』
『自分の失敗、もとい大成功を人の不幸に使わないようにしてね』

『無理だろ!こんなやさぐれた心で応援とか、イエスが悪魔崇拜するくらい無理だよ!』
『では、ステージに来てもらいましょう』

俺の心馬鹿知らずとは良く言ったもので、彼の人生で最高に硬くなった表情でステージに現れた。

『あ、どうぞどうぞ』

『あ、どうも』

ひよろつとした長身の冴えないメガネ男子。明らかに理系だとわかってしまう。

『じゃあ、まずはお名前をどうぞ』

『た、田中け、ケンシロウです』

『名前負けだな、ダメだこいつ。指先一つで折れちやいそうだもん、自分の指が』

『あ、その、良く言われます』

『ほたる、その不貞腐れた人がマイナスなこと言ったらいつものハリセンで黙らせてくれるかな?』

『りよ〜か〜い!』

今日なんか俺に厳しくない?ああ、そうでもないか。これ日常だったわ。

『智也君の事は気にしなくていいからね。えっと、ああ僕達より一つ下なのかな?』

『あ、はい』

『それで、お相手の方との出会いとか教えていただけますか?』

『あれはケバブが煙たいアウトロ『えい!』いつてえッ!材質拘つてんじやねえか!』

『ナイスほたる。その調子で壊してね』

『えへへ、任せて健ちゃん』

『帰りてえ』

『あ、その、彼女との出会いは、その受験の時に僕がですね、消しゴムを落としてしまつて、手、手を挙げればよかつたんだけど、こ、こんな性格だから、手、挙げるかどうか迷つてしまつて』

『あく、結構引つ込み思案なのかな?』

『はい。そう、なんですけど。それで、ですね。そんな時、彼女が僕が困っていることに気付いて、それで、そつとですね、自分の消しゴムを半分千切つて、く、くれたんです』
『なんかドラマチックな出会いですね。ちよつと僕も胸に来てしまうような素敵な話です。それで、その後は?』

『こ、講義とか一緒だつたり、して、あ、挨拶は出来ているんです。で、でも、僕はこんな性格で……だ、だから、彼女が当時付き合つてた人の話、とか聞こえて、それで、馬

鹿……なんですけど、意味もないんですけど……彼女が言っていた人のように、ぴ、ピ
アスしたりなんかして……は、はは……』

『智ちゃん、邪魔止めようよ』

『……ああ』

なんだよこいつ。ひよろっこいのに、心は俺なんかよりずっと男してるじゃんか。正直格好良い。会場にも彼の想いが伝わったのか、頑張れ！大丈夫だよ！と声援が送られる。

『当時という事は、彼女は今は？』

『わ、別れてしまったみたいで。あ、でも傷に付け込もうとか、そうじゃ……なくて。いや、でもそれもないわけじゃ、ないのかも。ひ、卑怯ですけど、それもあるかもですけど……でも、い、言ってたんです！わ、私じゃ駄目だったって、泣きそうな笑顔で！だ、だから伝えたくて！ぜ、全然！全然駄目なんかじゃないって！あ、貴方は優しく、こんな僕に優しくしてくれて、す、素敵な人なんだって！少なくとも、こ、こんな僕に言われてもどうしようもないかもですけど、ああ、貴方を一生好きだって、胸を張って言える人間もいるって！つ、付き合えなくても、どうしても伝えたかったんです』

ステージ裏で私は彼の拙くて格好悪い一生懸命な言葉を聞きながら、下を向いて俯く

事しか出来なかつた。いきなり委員会の人に連れて来られて、ここで待機していて欲しいと待たされて、その結果がこれだった。

「何よ、それ……」

受験の時に消しゴムを渡した事は覚えている。講義で会ったら挨拶をしてくる男子がいた事も。でもさ、だけどさあッ！

「思い出せないっての」

あんたに優しくした？そんなの、その場の気紛れ。もしくは好感度稼いだだけじゃん。だって、優しくすれば皆私を褒めてくれるからさ、はつきり言つて打算以外の何物でもない。彼氏と別れて、確かにちよつと落ちたけど、ぶつちやけちよつとただけだし。あんたみたいな底辺に心配されるような覚えなんてないのよ。

私は、そういう女なの。見栄とプライドで生きている、そんな下らない女なんだよ。

「ほんと、馬鹿じゃないの」

マジで止めてよね。ダサいんだつての。一生懸命になつて自分が馬鹿みたいと思わないわけ？自分に酔つてるだけじゃん。キモいよ。

「それじゃあ、ステージへお願いします」

「はい」

だから、さ。こんな女にそんなに一生懸命になんないですよ。私なんか惚れるような

時間の無駄、私が終わらせてやる。

せめて、顔も覚えていないそいつの顔だけは忘れないようにしなければと、私は顔を上げた。

『わざわざお呼び立てしてすみませんでした。来て頂いてありがとうございます。それでは、お名前を教えてくださいませんか?』

『春日美穂です』

『春日さん、多分ステージ裏で聞こえていたとは思いますが、彼の精一杯の気持ちを聞いてどうでした?』

『そう、ですね。凄く嬉しいです。私なんかの為にこんなに真剣に……真剣、に……』
彼女の口から言葉が止まり、その代わりに小さな吐息と、躊躇うように動いた唇。そうして少しの時間迷い、彼女は一つ頷いて拳を握った。何かを決意したかのように。

『あく、やっぱ無理。やめやめ。てかマジウケただけだ』

さつきまでとは違う彼女の雰囲気には騒然となる。当たり前だ。今の彼女はまるで観客を意識していない。彼の両眼を、いやその気持ちを真つ直ぐに見据えている。だからこそ、気付けない。おそらく、俺以外は彼女の言葉の真意には気付けないはずだ。

『何を、春日さん?』

伊波は豹変した彼女に掛ける言葉が見つからない。

『必死過ぎつしよ？自分今イケてんじやね？みたいなこと思つて酔い過ぎい。そういうのマジうざいし』

『……え、えつと、ちよつと酷くない、かな？彼は一生懸命』

『はあ？あんたに何わかんのか？イケメンの彼氏いて、実は優越感浸つちやつてる系つしよ？ちよ、イラつくから黙つててくれない？』

なんて、なんて馬鹿だ。一発目からとんだ二人を引いちまった。このくじ運は誰の所為だよ。

『春日さん！ほたるはそんな『伊波！黙つてろ！』智也君？』

抗議の声を上げようとした伊波を俺は無理矢理に止める。事態の理解に追いつかない観客、正義感？多数決？協調性？そんなもので彼女を非難する声。

その声を俺は止めない。止めるような無粋をしてはいけない。だつてさ、ムカつくんだもんよ。春日のあの目、俺は知つているから。それが何を意味しているのかも。

『そいつの好きにさせる。これは、そういう企画だろ』

『でも智ちゃん！』

『白河、伊波……頼む、黙つてろ』

俺の制止の声に一番驚いていたのは春日で、春日は俺にだけしかわからないような、

小さな目礼をした。

……そうか、それが彼女の意思か。なら見届けるしかねえだろ。

『えつと、名前なんだっけ？ 田中だっけ？ ふは、私顔も覚えてないんですけど、え？ え？ それで告られんの？ 超絶キモいからさあ、もう良くない？ てか聞く気ねえし』

辛辣な言葉の数々。その言葉が傷つけているのは誰だろうか？ 願わくばそれに気付ける馬鹿がいてくれるなら、それは……それはもう……

『ありがとう、ごさいます』

何一つ嘘のない、わずかな人間性に宿る愛ってやつだろう？

『は？ ありがとうって、何あんた？ こんだけ言われて喜んでんの？ 変態でDMかよ』

怯まない臆さない震えない。もう彼は臆病な彼じゃない。一生分好きだと胸を張って言える女の前で、格好つけられないなら男じゃない。そうだろう？

『僕は、昔から自分に自信がなくて、誇れるものなんて一つもなくて……でも、でもそんな僕のようにやく誇れるものが出来たんです』

もう二度と自分なんかを好きになるなと、真意を嘘で塗り潰したはずだったんだろう？ それが自分出来る彼への誠意だと。嘘をつく目を俺が見逃すわけがない。俺は嘘を吐き続ける先輩だからな。

『意味、わかんないんだけど』

『わからなくても、良いんです。あの冬の日、僕はあなたに恋をした。恋をして、僕は変わろうって、自分を変えたいと思った！貴方に相応しくなりたいうって、身分不相応な努力が出来ました！この気持ちは僕の誇りです！例え貴方がどう思っても、僕はあなたが……あの日の何気ないあなたの優しさが大好きです！あの日の貴方は嘘なんかじゃないって、僕は信じているから』

もう逃げたくない、彼女を少しでも救いたい。混じり気のない瞳と気持ちが真つ直ぐ彼女を射抜き、彼女はついに堪えきれなくなつて、顔だけじゃなく体ごと背を向ける。

『あゝ、はいはい。そうですか。あんさあ、私正直？あんたのことタイプじゃないのよ。だから無理無駄無茶。はい残念でしたゝ、なわけ』

きつと、彼女は知らずに生きてきたのだろう。他人から向けられる真心つてどういふものかを。だから対処に困り、誠意から突き放すしかないと考えた。でもな、どうだよ？

『じゃ、そういう事で。もう二度と話しかけてこないで『好きです！』……聞きなさいよ』
悪くないだろ、他人の真心の温もりはさ。

『貴方になんて否定されても、僕のこの気持ちは変わりません！貴方に恋人が出来て、それで幸せな笑顔をしてくれるなら、僕は泣きそうになりながらも笑えます！悔しいけれど貴方の笑顔が僕は好きだから！だから、せめて貴方を幸せにしてくれるような、そん

な恋人が現れるまでどうか、どうか誇れる僕でいさせて下さい！」

そこは付き合ってくださいじゃないのかよ、なんて少しだけ笑う観客がいた。せめて返事しろと文句を言う観客がいた。数々の罵詈雑言と同情の声。その声に顔を顰める伊波と白河。まったく、気の良い奴らだよな。平気だよ。もう二人にはきつと……

『馬鹿じゃ、ないの……』

僕が幸せにして見せますくらい言えないのかよ……そう本当に囁くような声は観客の声に掻き消される。それでも、届くものだ。大切な気持ちだけは神様は隠してはくれないのだから。

彼女の背中を彼は消えるまで見つめ続け、消えた後に深く礼をして彼もまたステージから降りる。

『え、今のは……どう、かな？』

『どうかなもなにも……最高の告白だろ！』

誰一人拍手をしない中、俺だけは二人に盛大な拍手をと力の限り手を叩く……いや、もう二人手を叩く馬鹿が観客の中にいた。俺と同じ、嘘を見抜けてしまう同類二人が。

どうかこれからの二人に幸多かれと、俺達は彼等に祝福の拍手を送り続けた。

ステージでは、ピエロと白河がライブをしている。ピアノは世界レベルで、ヴォーカ
ルはプロ並みとか、化け物だろ。

少し前に流行った『それでもきみを想い出すから』を聴きながら、俺達は小休憩を取っ
ていた。

「ちよつと智也君、その水取って」

「無理、動きたくねえ」

「じゃあ、投げて」

「おう」

目の前のペットボトルを投げて渡す。俺も伊波もアンデッド状態だ。

「あのさ、これきつくはない？アドリブばかりで、一つも台本通りに進まないんだけど」

「西野に文句言えよ。あいつの所為で大幅に遅れてる。なんとか修正しないと、まずい
ぞ」

「ほんと、彼を生かしていたのは致命的なミスだったね。忘れてたよ、智也君の悪友だっ
て事」

「今日からお前の悪友でもあるなあ」

「段ボールに入れて川に流すよ」

「賛成」

フルマラソンを終えたかのような疲労感に、眩暈を覚えて身体を横たえる。白河とトビーが繋いでくれている今だけがオアシスタイムだ。

「それで、目標は？」

「標的つてのが正しいな。加賀からはまだ、だとさ」

加賀には正門の受付をしてもらっている。招待客は名簿にサインをする決まりだから、招待状とサインなしじゃ入れない。だから、標的が現れたらすぐに連絡を超越す手筈となっている。

「まあ、まだ早いしね。あと三時間、か」

「よつぼど馬鹿じゃない限り来るだろうさ」

「まあ、ね。僕の後輩だし大丈夫だよ」

「じゃあ、無理だな。ヘタレの遺伝子が混ざってんじゃね？」

「馬鹿の遺伝子よりマシでしょ」

いつもならここから更に発展して止められるって展開だが、残念なことに俺と伊波にそんな元気は残っていないかった。

「なあ？」

「なに？」

「お前だったら、史上最高の喧嘩をした相手と寄りを戻せるか？」

「最高つてなにさ。最低、でしょ」

「似たようなもんだろ」

「場合によるけど……もしも相手がほたるなら僕は……どんなに格好悪くても縋るかもね」

「知ってた」

「だろうね」

二人苦笑しながら俺は鷺沢を思う。今頃あいつは覚悟を決めただろうか……と。

想いを貫く人間に俺はなりたいたい、そう思っていた。自分はそんな人間になれると……そんなこと、あり得なかったのに。

あいつは嘘を吐いた。自ら雨に濡れながら、それでも嘘を吐いた。それは何を守る為か……考えなくたって頭では理解している。馬鹿なガキのままの男の為にだ。

男はあいつに何をした？好意をぶつけて甘えて縋って泣き喚いて……それだけだ。その結果あいつが得たものはなんだ？嘘に塗り潰されていく自分だけだ。

俺に会う度に満たされて塗り潰していく、不毛な素顔。俺が、あいつから奪った素顔。

最初から知っていた。あいつの嘘は、あいつの為の嘘だけじゃないと。最初からわかっていた。あいつに嘘を吐かせたのは自分だと。最初から全部全部全部……知って

いたのに……それなのに、俺はあいつを置き去りにしてしまった。救いの手を伸ばしてくれたあいつの、本当は弱くて小さな手を無情にも手放したんだ。

「救えねえ、救えねえだろ俺？ そんな俺がやれることなんて、もう一つしかねえじゃんかよ。」

時間を見ると、もう出なければいけない時間だ。

俺は決意を胸に秘め、ゴミ箱から汚い文字が書かれた紙を取り出して玄関を出る。

「これが、俺の答えだよ、いのり、つばさちゃん」

そうして、俺は千羽谷大学へと向かう道から背を向けて歩き出した。

雨に濡れる道を、顔を上げ、前を見据えて……

二人の重ね、一人の咎人

出会ってからいつだって、私はこの手に掬い上げられ続けている。

「ちよつ、そこ避ける！通してくれ！」

人波を掻き分けながら、歩む力を失ってしまった私を、問答無用で引つ張っていく。

私を連れ出す背中はとても大きくて、幼い日に感じた父の背中のように、その背中に駄々を捏ねながらもついていく。その背中は何だか懐かしくて、不意に泣きそうになつてしまう。

どうして？

「違うんだ、あいつは答えを出したはずなんだよ！」

あなたは どうして、こんな私の為にいつも一生懸命になつてくれるの？

「もし、もしもだ！あいつが逃げるのだとしても、俺はそんなもん認めねえ！」

私はあなたの心の傷を抉るような、そんなどうしようもない小娘ですよ？

「別にお前等がどうなろうがどうでもいい！」

あなたにとつて、私はただの教え子……それだけの関係じゃないですか。あなたの過去を知ったからつて、私を家族とは思つてはくれないくせに。それなのに、なんです

か？

「でもなあッ！傷つこうがなんだろうが、お前等は答えを出さなきゃいけないだろうがッ！それがあの子への——」

どうしていつだって、この手は優しい温かさで私を離してくれないんですかッ!!

「リナちゃんへのお前等の最低限の弔いだろッ！」

雑踏の中、私は三上さんの手の温もりに抗うどころか、もう少し……あと少しだけと、彼の手に縋りついていたいとさえ思っていた。

誤算、なんて言い訳にもならない。俺と智也は見誤っていたし、情報収集を怠っていた。少しまるるんに聞けばわかったことなのに。

誤算の一つ、いのりちゃんは俺等が思っている以上に美少女として有名だったこと。智也は絶対認めないだろうが、考えなくてもわかることだった。ただ、それを見誤ってしまった原因としては、俺達の周りには奇跡的な美女や美少女が多くいて、普通の感覚が麻痺していたことだ。

どうやらいのりちゃんは、この辺りじやかなり有名で、純粹で可憐なとてつもなく可愛い浜咲の至宝として名前が知られていたらしい。こちら辺は西野の証言で、隙あらばと西野も狙っていたと告白。欲望に正直過ぎだろ。

誤算その二、これは本当に思いも寄らなかったことなのだが、どうやらいのりちゃん
と一蹴が別れたらしいと、各方面に噂が流れてしまっていた事だ。

普段一緒にいる二人が、ここ最近一緒にいないのを不審に思った誰かが、もしかして
と流した噂らしいが、この噂が飛んで火にいるアホを大量に呼び込んでしまった。虫よ
けスプレーは品切れ中。

ステージ上の智也と目が合い、ジエスチャーで会話。

(一蹴はまだか!?)

(すっぽん鍋がフライングヒューマン!?)

通じなかった。なんだよ、すっぽん鍋がフライングヒューマンって。お前がフライン
グして一蹴を連れてきてくれよ。

混雑する場内で俺も、そして智也も思う事は一緒だっただろう。

「……あく、これ、もしかしてやっちまったかな?」

そもそもどこから間違えてしまったのか、押し寄せるむさい連中に押されながら、そ
の原因へと遡ってみる。

いや、遡らなくてもわかるな。全て智也の責任だ。あいつがこんな無茶なイベントを
思いついて、尚且つ一蹴を見誤ったのが悪い。だからこんな……

「い、稲穂さん!稲穂さんどこですかあ〜!」

トップアイドルさながら、いのりちゃんが狼の群れに囲まれることになってしまったのだから。

——千羽祭二週間前

「ほら、よくあるだろ？バラエティーとかで、一斉に付き合って下さいコールして、好きなやつに手を差し出すやつ。あれをやろうぜ」

良い考えが浮かんだんだとでも言いたげな顔に、俺はしかめっ面で返す。

智也は自分のベッドに腰かけて、いやあ、生でアレ見たかったんだよなあ。とかなんとか、夢見る少年のような瞳で呟いている。

「千羽大生以外は招待状持つてる奴だけ限定で、もちろんイベントとして学内の参加者も募る」

「で？」

「それでな、イベント会場にはフリーの男女だけがいるわけだ！その会場に小娘を呼ぶ！するとどうなる？」

「……聞きたくないけど、一応聞いておこう。お前の中ではどんなドラマが出来ているんだ？」

「んだよ、もうちよつと乗ってこいよ。あのな、あいつは多少なりとも見た目は悪くない
い」

「間違いなく国内じゃトップクラスだろうな」

「二次予選止まりだ。じゃなくてな、多少なりとも見た目は悪くないわけだろ？」

「その言い回しは絶対なのかよ」

「するとだな、少しはあいつに交際を申し込む既知外が二人はいるだろう？」

「お前の目が心配になってきた。確実に二人は越えるだろうな」

「交際を申し込まれ困惑する小娘！」

「あ、俺の反論はスルーの方向なわけね」

「そんな小娘の下に」

立ち上がり、バツと両手を広げる智也を、俺は頭が痛くなる思いを押し殺してどうにかこうにか見上げる。

「颯爽と登場する小僧！かぼちやパンツを履かせても問題はない！二人の男を押しつけて、小娘を奪い走り出す二人！」

「昭和か？卒業式で答辞をする好きな女子を連れ去るみたいな三門芝居、上手くいくわけないだろ。ていうか古いんだよ発想が」

「古くない！この前、ドラマの最終話でやってたんだから、むしろ人気トレンドだ！」

よし、そのテレビ局に抗議の電話をしよう。なんて物を単純な馬鹿にみせてくれたんだってな。どこのK○Dさんですかねえ。

すでにフィナーレを思い描いているのか、きつと智也の中の二人は桜舞う校門を走り去る二人が見えている。俺には頭の痛い現実しか見えない。あと目の前の陶醉しきっている馬鹿の姿。

「あのなあ、それはドラマの中だけであつて、現実で上手くいくと思つてるのか？」

「挑戦しなければ、成功もないんだぞ」

「しなければ失敗もないんだよ」

俺の抗議の声に、不満を隠すどころか前面に押し出しながらベッドに座りなおす。ああ、こんな時唯笑ちゃんがいたなら……駄目だ、一緒に夢見るのが目に見えている。彩花ちゃん、今ほど君にいて欲しいと思つたことはない。

どうか教えて欲しい。こいつのエンジンを爆破するには何が必要だ？ プルトニウム爆弾でも不可能だ。

「……なあ、智也。本当にあの二人がまた一緒にいるのを願うと思うのか？」

そもその問題として、いのりちゃんは良いとしても、一蹴が彼女と共にいる事を望むとは限らない。その事を見落としているんじゃないかと問うと、智也はそんな事かと笑つた。

「さあ、それは俺の入り込む問題じゃない」

あまりにも可哀想じゃないかと続けようとした言葉を、智也の真っ直ぐな視線に押し留められてしまう。

「いいじゃねえか。恋愛に限らず、人間関係なんて大なり小なり傷つくもんだ。あとは当人同士がハッピーにでもグッドにでもすればいい」

そう、なんでもない事のように言う言葉に、俺もつられて笑ってしまった。

確かに智也の言うとおりだ。ハッピーだろうがグッドだろうが、そこまで俺達が介入すべきじゃない。人の気持ちをコントロールすることなんて、神にさえ許されない領域だ。

それに、智也はこう言った。ハッピーにでもグッドにでも、と。そこにバッドはない。つまり、裏を返せばバッドにならないようには面倒を見てやる。そう宣言したんだ。

「……はは、素直じゃねえなあ」

「素直じゃないのは俺じゃなくて、あの困った二人だ」

こうして智也主導の下、恋人量産計画は進められたのだが、俺はふとある不安が過る。バッドにはしないと言うが、ただ一つだけバッドを辿るかもしれない可能性。智也だって気付いていないわけじゃないはずだ。

「なあ、そのイベント……一蹴は来るか？」

そもそも主役が現れなければ舞台の幕は上がらない。チケットの払い戻しという最悪な未来の可能性だつてある。そうなつたらいのりちゃんは……

「来るや」

「え？」

迷いのない返答。何かを確信しているような目が、俺には見えていない一蹴の心が智也には理解出来ているようだった。

「あの小僧は間違いなく来る。あれは逃げるなんて器用なことが出来ない馬鹿だろうか
らな」

なるほど、そういう事か。

「根拠は？」

「俺様の直感。これ以上ない根拠だろ」

その言葉に俺は笑った。一蹴が自分と同じ馬鹿なのだと思つていくせに、認めたくないらしい。本当に素直じゃない。

そうか、それなら来るな。智也なら逃げることはしない。逃げる自分を許せるほど器用な人間じゃないからな。

こうして、俺は智也の計画に乗つたわけだ……智也の甘言に惑わされて、チケットを払い戻す未来に目を瞑つてしまうという、痛恨のミスを犯してしまったと、露にも思わ

ずに。

——二人の重ね、一人の咎人——

加賀正午は焦っていた。これまでの人生でここまでの焦燥感を感じた瞬間などあっただろうか？ いや、割とあるなど冷静に思い返す。主に恋人である黒須カナタ関連の事だ。

先日起きた、ヴェンテージ事件だって自分は何も悪くなかったはず。なのに、カナタの好物を買って家に帰れば、元凶の二人と世話役の一人は消えていて、なぜか冷房を最低温度で稼働させているかのような冷たい空気と、リビングの中央には三人をサクリフアイスして召喚された薄ら寒い妖気を纏う恋人。恋人じゃない、あれは魔王だった。

その後の事はあまり記憶にないが、ベッドに縛り付けられ、息が出来るか出来ないかの絶妙なタイミングで、水を掛けられ続けた事だけは覚えてる。不幸だが口癖の主人公に抗議したい。本当の不幸は何かとその身に刻み付けてやろうかと。

そう、いつだって彼は悪くないのだ。ただ、友人関係が絶望的というだけのこと。今だってそうだ。16時から始まる大規模なイベントの一時間前、絶対に席から立たないで、鷺沢一蹴が受付に来たら即座に連絡しろと厳命されている。律儀に守る必要もない

のだが、この言いつけを破ると何をされるか分かったものじゃない。特に三上智也は危険人物として、広域指名手配されている。それを思うと動くに動けないのだが……彼は今まさに窮地に立たされていた。

(まずい、本気で漏らしそう)

急激な尿意に襲われ、なんとか耐えようと内腿に力を込めつつ耐えるも、それも既に限界。尿意と接点の薄い後輩の一大事……どちらを優先するか。人としての尊厳を守るか、人としての尊厳を三上智也に碎かれるか……究極の選択である。

脂汗が浮き出てきて、選択出来ない時間を暫し過ごす。

極限状態の人間とは不思議なもので、そこに存在しない不確かな物に救いを求めてしまふ。誰でもいい、神だろうが悪魔だろうがカナタだろうが、とにかく何でも構わない。今の子羊のように頼らない自分を救ってくれと。

脂汗どころか涙が滲んできた彼の視界に、その祈りが通じたのか、よく見知った姿が目の前を通り過ぎようとしたのが辛うじて見えた。もう、ここを逃したら二度と救いは現れないと、彼は震える足を無理矢理動かして、決死の形相でその人物を捕まえた。

「な、中森……」

いきなり腕を掴まれて怪訝な顔で振り返る中森翔太。健に誘われて数人の友人とやってきた千羽祭だが、そこで懐かしい友人にいきなり青い顔で腕を掴まれるとは想定

していなかった。

「誰かと思つて驚いたよ、久しぶりだな加賀」

「あ、ああ久し振り……で悪いんだけどさ、ちよ、このインカム持つて受付に座つてくれ！」

「……は？ いや、何を言つて、加賀!?!」

挨拶も碌にせずに走り去る加賀と、手には渡されたインカム。どうにも面倒事の予感が出て、彼は溜息を吐きながら仕方ないと受付にあるパイプ椅子へと座りつつ、友人達に気にしないで楽しんできてくれと伝えたのだった。

「こちら第二ステージ、イベント開始二十分前により会場を一時封鎖。そちらにホシは現れましたか? どうぞ」

「全く状況が理解出来ない親友到着。どうぞ」

「翔太!?!」

受付で見張りをしているはずの僕等の便利屋の声ではなく、友人達と千羽祭を楽しんでいるはずの僕の親友の声が聞こえて驚いてしまう。

「な、何してるの翔太?」

「俺が聞きたいんだけどな。いきなり加賀が顔面蒼白でインカム渡してきてさ。何して

るんだよお前達」

「何って……真面目に仕事をしているんだけど」

少なくとも僕は真面目にMCをしながら、後輩の行く末を心配している。某メーカーから発売される限定シューズの注文時間が迫り、MCや後輩二人の問題を記憶の彼方に追いやって、今か今かと心待ちにしているダメな大学生とは違って。

「正午君はどうしたの？」

「わからない。必死に走ってどこかに消えたつきりだ」

人の親友を抜き使うなんて、彼は僕に禁じ手を使って欲しいのだろうか？

「そんなことより、ホシって何のことだ？」

「あ、そうだ！正午君の事なんかどうでも良いんだよ今は」

「……加賀が逃げ出した理由がわかった気がするな」

「あのね、翔太も知ってるよね？一蹴君の事」

「ああ、あのやたら可愛いって騒がれてた、陵って女子と付き合ってた後輩だよな？何回か話したことがあるけど」

「それなら話は早いね。一蹴君が受付に来たらすぐに報告して欲しいんだ」

「なるほどね、ホシって鷺沢の「うあああああアツ!!」なんだ今の悲鳴は!!」

「……気にしなくて良いよ。天罰が下った罪人の叫びだから」

この世の終わりでも迎えたかのように、頭を抱えて崩れ落ちる智也君。どうやらあまりの人気で、注文が一瞬で終了したらしい。回線の遅い携帯じゃ間に合うわけがない。ていうか、真面目に仕事しろ。

「なぜだ。なぜ世界はこんなにも俺に無慈悲なんだ」

「慈悲の心が智也君にないからだよ。あ、ごめん翔太。そろそろステージに戻らないといけないから、何かあつたらすぐに報告してね」

「……俺、ここに何しに来たんだっけ？」

「僕のパートナーになる為だよ」

「俺の知ってる健は、親友を大事にする奴だったのにな」

「後で埋め合わせするからさ。じゃ、よろしくね」

インカムを切って、世界で一番切ない背中を見せている、耐え難い馬鹿な相棒に声を掛ける。

「いつまで落ち込んでるのさ。出番だから行くよ」

「……もう、無理だ。後はお前に任せた。俺は今から日雇いのバイトに行く」

虚ろな目に狂気が見えた。駄目だ、オークションで落とすお金を稼ぎに行く気だ！

「行かせるわけじゃないでしょ！自分がいのりちゃん達の為に一肌脱げって誘ったんじゃないー！責任は果たしてよねー！」

「お前、小娘と限定スニーカー……どっちが俺の人生で大事だと？」

「ここでスニーカーを選んだらクズでしょ」

「罵られても構わない。俺はこの日の為に夏にバイトを頑張つて金を作ったんだぞ!!」
「知らないよ」

少しでも目を離すと、ステージとは逆方向に走り出すであろう智也君を、真実力ずくでステージへと連行する。

来年、もう一度彼とMCを頼まれるような事があつても、就活で忙しいとか、研究でそれどころじゃないと嘯（うそぶ）いて断ろうと決意した瞬間だった。

『うえーい、招待状ないしは参加証を持つてる奴等、これで全員？あつそ、全員なの』

会場の異様な熱気と、俺の冷気が見事に反比例。なんでだよ。何でこんな気持ちで俺はここに立たなければいけない？俺がこの日をどんなに楽しみにしていたと思つてるんだ。小娘の恋愛事情なんて二の次も良いとこだったんだぞ。

『はい、皆さん凄いな数の人だからですね！あ、この突然豹変したアレな人は放置して下さいね』

お前なんぞに何がわかる。俺のこの張り裂けそうな胸の痛みの何が……

『では、軽く概要を説明しますね。イベントまであと十分を切ったところですが、まずこ

の場が集まって頂いた方は全員フリーの方々です。本当にフリーかどうかの確認もしております。二股以上の不貞は、僕等は断固として許しませんので。それですね、集まって頂いた女性の方々は皆さんは全員、ここに集う男子の誰かの意中の方です。これは事前に説明してましたよね?』

はーい!という威勢の良い声と、伊波君は参加しないの?!?といった黄色い声。

『残念ながら僕は参加出来ません。素敵な女性ばかりで本当なら参加したい気持ちもありませんが』

ジャジャジャ、ジャー—ーン♪

『リップサービスもアウトなんだ!?!』

『うっわ、彼女の前で最低だな伊波』

『うるさいよ。黙って落ち込んで』

散々俺を痛めつけるからだ。伊波が不利になる発言はどんどん積極的にしていこう。

『それですね、16時になりましたら合図と共に一斉に皆さんに告白して頂きます。

これは、告白イベントだけでは間に合わない数でしたので、このようにまとめてやってしまおうという、企画サイドの杜撰(ずさん)さが見れるイベントですね』

『そんだけ、独身候補が多い証拠だろうな』

『自分もその一人だという事を忘れずにね』

つ、作ろうと思えば彼女の一人や二人作れるもん！まだ本気じゃないだけ、俺はやれば出来る子！

『なお、今日の告白イベントと、この恋人量産イベントで見事カップルが成立しますと、そのカップルには特典が御座います』

特典という言葉にざわつく場内。現金なものだなと苦笑してしまう。

『なんと！明日行われる二つのプロムがあるのですが、このプロムはある種のシークレットイベントとなっております。一つは野外でのアルコール抜き未成年者でも楽しめるもの。もう一つは二十以上限定の屋内での、ちよつとアダルトなプロムが行われます。この二つのプロムは、ちよつとしたサプライズもありお金も掛かっているのです。料となっておりますが、イベントで成立したカップルに限り無料で招待いたします！』

伊波の爆弾発言に沸く観客。千羽谷祭の後夜祭は例年異常な盛り上がりを見せるが、今回のように二種類のプロムを用意することは初めての試み。しかもそれなりに金が掛かっており、入場料を貰わなければ採算が合わない代物。入場料はそこまで高くないが、それでも一步引いてしまう学生がいるのは否めない。

だが、それが無料で参加出来るとなれば話は別だ。否が応にも盛り上がるのは必然。『更に！屋内でのアダルトなプロムでは、とある方から寄付して頂きました貸し出し用の為のドレスを、イベント後に進呈致します！』

おっと、女性陣の目が猛禽類の眼にジョブチェンジ。これ、好きでもない奴とでも付き合う可能性が出るから俺は反対だったんだが、恋愛の切っ掛けはそれぞれで良いんじゃない？という、とあるクリニックを開設しているお嬢様からのお達しにより渋々了承することに。

逆らえるわけない。ドレスのパトロン様だもんよ！ちなみに、藍ヶ丘第二中学校の同級生。クラスが一緒だったかどうかは覚えがない。

『というのが、この恋人量産イベント『人類補完計画』の概要と特典となっております。今の説明でご理解頂けたでしょうか？理解頂けたなら、その場で土下座して下さい』

ざけんな！調子乗るなクソ面！お前の彼女跨越せ！伊波君、私の背中に乗って！等の危ない発言に、さすがの伊波の笑顔も若干引いていた。

進行を伊波に丸投げしながら、俺は受付へと連絡する。

『こちら第二ステージ。受付、どうぞ』

『こちら受付、どうぞ』

『……間違えました』

知らない男の声が聞こえ、俺は間違い電話をしてしまった時のように通信を切る。

あつれ、どこ間違えたんだ俺？微妙に知っている声だった気もするが……あ、そうか。うちの近所の、藍ヶ丘駅の中華屋の出前の兄ちゃんの声に似ていたな。あいたたたた、

俺としたことがあそこの店に掛けて……馬鹿か。んなわけない。

じゃあ誰だと首を捻りつつ、もう一度連絡すると、さっきと同じ声が聞こえてきた。
『どういふことだ？もしかしてこれは……』

『おい犯人』

『犯人つて』

『貴様加賀をどこにやった!?!』

『それは俺も知りたいな。どこに行つたんだらうな、加賀』

『惚けるなよお前……ボンボン以外に取り柄のない加賀を誘拐して身代金を奪おうとしているんだろー!』

『加賀が逃げ出した原因その二だな』

『ふざけるなよ!俺も混ぜろ!』

『しかも金に目が眩んでるし』

『ふへへ、これでスニーカーの金の心配はなくなつたぜ』

『俺はそつちの将来が心配だ』

ふむ、俺の心配をするとはな。なかなか出来た誘拐犯じゃないか。

『で、中森よ』

『今までの時間の無駄はなんだつたんだ……』

スニーカーが買えなくて、この鬱憤を誰かで発散したかっただけだ。丁度良いやつがいて結構結構。

『伊波から事情は聴いてる。それでな、鷺沢はまだか?』

『ただだけど、一体どういう事なのか教えてくれないか?なんで鷺沢をマークしているのかをさ。』

最もな疑問だな。伊波の奴、俺の秘書のくせに説明ぐらいちちゃんとしておけよ。

『あまりでかい声じや言えんが、実は鷺沢のやつが浜咲で秘密裏に行われている麻雀トーナメントで負けてな、とてつもない額の借金をだな……』

『その話はどの程度で終わる?』

『会社に残っている社員の残業の明かりが消える位には終わる』

『鷺沢はまだだ、来たら連絡するから。じゃあな』

一方的に切られてしまった。中森なら、うんうんと頷きながら優しく話を聞いてくれると信じていたのに……人間不信って、良い奴に裏切られたらなるよな?

『……わけです、あつと?もうこんな時間ですね。皆さん、お待ちかねの『人類補完計画』開始まであと三分を切りました!男性の皆さんは心の準備をして下さい!』

しまった、中森の所為で余計な時間を喰ってしまった。

んむ、鷺沢が来ないのは計算外だが、たまたま遅れているだけかもしれん。電車や

歩行者が渋滞しているのだろう。コミケなるもののようなもので……そうだよな？俺は信じて待つぞ小僧。

そ、それに陵の傍には頼りになる俺の相棒が……

先程まで陵と信がいた方へと視線を移すと、そこにはいつの間にか愚民の壁が出来ていた。

お、俺の相棒、が？どこだよ!?

ふいに携帯が鳴り、ステージ裏へと急いで降りて電話に出る。

『智也大変だ!』

「大変だも何も、お前等どこにいるんだ?」

『どこも何も、見えなかったか?』

「見えないから聞いてるんだよ。まさか、茶あでもしばきに行ってるんじゃないやねえだろうな?」

『クソ!そりゃあ見えないよな!一か所だけやたら人が集まってる場所があったろ?そ

うだよ!』

……いやいや、何をおっしゃってるんですか?

「そこって……あのマリアウオールか?」

『残念、その壁なら崩れて人間は俺といのりちゃんの二人だけだ』

嘘、だろ？だってあの小娘だぞ？顔を合わせれば毒を吐いて、二つのビルの上にかかった鉄骨を渡って下さいが挨拶の、あの陵だぞ？あり得ない。一人二人のドMの豚ならわかるが、いつのまに日本はこんなになら終わっちゃったんだ？

『あの子が毒舌を吐くのはお前だけだからな』

「自然と俺の思考を読むな」

『とにかく、俺も押し出されて近づけないんだ！』

嘘だろ？イベント開始まで時間は……二分切つてんじゃねえか!?

どうする？今すぐに驚沢を探しに行くか？いや、その間陵をあの子の群衆の中に置き去りに出来ない。それはまずい気がする。だが他にどうする？MCを降りるとしても俺の代役で、しかもぶつつけ本番でもどうにかなる奴なんて……

「いや、待てよ……それなら、なんとか」

そうだ、あいつならなんとかしてくれるはずだ。となると、あとはどうするかだが……

『皆さん、イベント開始まであと一分です！意中の人の目の前で待機して下さい！女性の方々は、心を決めて下さいね〜！』

舞台上からの伊波の声に焦りが募る。時間が無い……クソッ！

インカムを長机に投げて、俺は迷う暇はないとある場所へと電話する。

頼む、早く……早く出てくれ！

『はい、ありがとうございます。こちら喫茶ならずや、店長代理の白河静流でございます』

ここで待つていれば、私の王子様がやってくる……三上さんの気の抜けた笑顔とセツトになった言葉。その言葉を鵜呑みにしたわけでも、ましてや期待していたわけでもない。ただ、私の為に脇目も振らずに頑張ってくれている事を知っていたから、その気持ちを無下にしたくないなって……そう、思っていただけ。私の王子様が来てくれるなんて、そんな淡い期待を抱いたりなんて、都合の良い夢を見たり、なんて……

彼氏と別れたってマジだったんだ？ラツキー、ダメ元で書いたんだけどさあ。俺も俺も、てか別れるとか彼氏馬鹿っしょ。よっしや、絶対俺選ばせて見せるわ。君には無理だよ、僕こそが彼女に相応しい。黙れよチエリー。

雑音が酷い。稲穂さんはどこだろう？もう、ここにいても仕方ないのに。早く稲穂さんとここから出ないと。

一刻も早く抜け出したいのに、いつの間にか稲穂さんは隣にいないくて、まるで入れ替わったかのように知らない人がそこにいた。よくよく見回すと、私を囲むように沢山の男性がいて、中には浜咲学園の先輩だった人の顔も窺える。

『皆さん、イベント開始まであと一分です！意中の人の目の前で待機して下さい！女性の方々は、心を決めて下さいね〜！』

伊波先輩の声に、ああ、そいえばと思い出す。三上さんから貰った招待状は、大規模な告白イベントへの参加に必要なものだった。一蹴にも同じ物を渡したと聞いて、それで……それ、で？

ああ、自分のおめでたさに笑みが零れそうになる。三上さんが言うならと期待していたんだ私。自分だけだったなら、そんな楽観的な考えを持つことはなかった。だって、惨めになりたくないもん。わかってるもん。一蹴が私の話を聞いて、忘れてしまった過去を思い出してしまつたら、私から離れてしまうつて事くらい。

だって、一蹴は誰よりも優しいもん。心が私なんかよりもずっと綺麗、なんだもん。

うん、ちゃんとわかってるから、大丈夫。一蹴の姿が、愛しい影が少しでも見えなかなかって、何度も何度も見回したりなんかしてない。一目会えるだけでも、どんな答えでも、その声さえ聴けるならそれだけで……なんて、そんな幸せを願つたりなんてしてない。

「ふっ、うう……」

正解だよ、一蹴。一蹴は何も間違えてない。間違えたのは私。間違いを正解にしようとした私が最低なの。

ここに一蹴がない、それが答えだもんね？

「あ、いた、い………よ？」

なのにとしてかな？三上さんの楽天家が移っちゃったのかな？

「一言、でもいい………」

どんな言葉で罵られても、どんなに私を責め立てる目を向けられても構わない。

「どっ？どっ？にいるの、一蹴」

いい加減諦めてよ私！

『16時になりました！それでは、シンデレラを舞踏会へ招待して下さい！』

私を囲む人達全員が頭を下げ、片手を差し出し、一斉に同じ言葉が場内に響いた。

『俺と（僕と）お城へ行こう！！シンデレラ！』

馬鹿、です。このセリフを考えた変な人も、私なんかをお城に誘う奇特な人達も。

あなた達に求められるような価値のある女性じゃないんですよ？だって、私はこの世界で最も卑劣で卑怯な……そんなどうしようもない小娘なんですから。

沢山の想いが入り混じる手の数々。きつと、なけなしの勇気を出して告白してくれている人もいます。最初の告白イベントを飾った男性のように。

いくつも差し出される手の中には、緊張で震えている手もあって………それを見たら、

ああ………もう、いいかなって。

一蹴は来てはくれなかった。返事をしない事が一蹴の答え。それなら、こんな醜い私でも、この時だけは誰かを喜ばせてあげられるなら……付き合う事は出来ないけれど、それでも……

同情にも似た気持ちが私の手を動かす。一際緊張している手に触れるまで……

「——ッ!?!」

数センチの距離で、私の手は止まった。視界の隅に辛うじて映った手……その手が私を金縛りにさせた。

「な、にを……?」

その手は率直に言えばこの場にはそぐわないものだった。だって、一人だけ隙間から伸ばして中指を立てた手を出しているから。

「何をしているんですか?」

MCは参加出来ないんじゃないですか?というか、後出しですよね?その手は何ですか、喧嘩を売っているんですか?

言いたい事は山ほどあるのに、その手よりも素敵な手は沢山あるのに……

「馬鹿じゃないですか!三上さん!」

その手を見つけてしまった私は、目元を拭って自分でも気付かずに笑いながら、ふざけた手を力の限り両手で掴まえた。

「いつてえー！折れる！俺の中指折れるから離せ陵！」

「絶対離しません！」

陵が気付くかどうかは賭けだった。俺の手が陵の目に映る場所に出せるかどうか、俺からは確認することが出来なかったから。だが、確認出来たなら陵なら俺だとわかると確信してもいた。つうか、中指立てるのなんて俺以外にいるわけがないしな。

陵が誰の手を取ったのか、騒然とする男共。陵の取った手を辿ると、見える俺様のご尊顔。

困んでいた一同の視線が俺に集まり……

「ヤッホー、僕トミーだよお！」

裏声を使ったネズミの物真似で応える。渾身の出来だと自負している。

「……てへ♪」

『三上てめえええええええええええッ!!!』

ですよねえ。

富士山が噴火したような怒号。俺の鼓膜が破れたらどうしてくれるんだ。日本の至宝と学者の間で噂の鼓膜だぞ。

「悪いな、こいつじゃお前等に相応しくないんだ」

「……こんなイベントに連れ出しておいて、良く言えましたね?」

「うるせえ!とにもかくにも!」

掴まれている手を思いきり引つ張り、陵を一本釣り。途中躓いたらしく、転ばないよ
うに抱き留めてやる。

「きゃッ!み、三上さん!?!」

おやおや、一丁前に赤くなってまあ。いつもこれくらい可愛げがあればなあ。

「走れ陵!」

陵の手を今度は俺が掴む。人込みではぐれないように、ぎゅつと強く。

『待てやぞ r y あ p l m ん d 2 m、!!!』

怒りが限界突破した民衆の怒号は言葉になつてすらいない。怖いよ。これ、戻つてき
た後に俺の命やばくない? ヒットマン雇つていてもおかしくない狂気だろ。

と、そういえば……

「三上さん!三上さんちよつと!」

「あく、ちよつと待つてろ!えつと……」

携帯を取り出し、俺と伊波を修羅にさせた馬鹿に電話する。今の時間は出れるだろ?

『おう、どうした三上?』

「よお、学内での株価が暴落した委員長」

『お前等の所為だけどな!』

「いや、自業自得だろ。俺と伊波を敵に回したのはお前だろ?」

『それにしたつてもうちよつと手加減つてものをだな「そんな些細な事よりも」些細じゃないよ!』

今後の西野の大学生活の心配なんかしていられる状況じゃない。もとより心配なんてしたことはないが。

「買い出しで使つてたミニバンを使いたい。キーを持つて駐車場で待つてろ!」

『はあ?あの車は事務で申請しないと出せないんだが』

「キーはあるんだからいいだろ!」

『何に使うんだよ?』

「後輩を助けるためだ」

『後輩?お前が助けたい後輩つて事は伊吹さんか?』

そうか、西野は俺の交友関係のある程度理解していたな。だからこそ勘違いしているんだろう。

「いや、みなもちゃんだったらリムジンを頼む」

『まあ、だよな。じゃあ、誰だよ?』

「陵つて小娘を乗せるためだ」

『じゃあ駄目だ』

「ああそう……なんでだあああああああ!!?!?」

西野の即答に絶叫。どういう思考回路でその答えが出てきたのか……駄目だ、灰色の脳細胞でも導き出せん。

『陵って、浜咲の子だろ? お前、彼女がどれだけ天使かわかっていらつしやるのでせうか?』

「言葉遣いが崩壊しているほうが気になるわ!」

『あのなあ、非公式に彼女のファンクラブがあつて、特設サイトもあるほどに彼女は人気なんだぞ?』

「目が腐つてやがる」

『ちなみに、管理者は俺』

「お前発信じゃねえかよ!」

これは碌な社畜にならんわ。営業から直帰するタイプ間違いなし。

『というわけで、彼女と美味しい思いをさせるわけにはいかないな』

「苦い思いしかしてねえ……」

こんな下らない事をしている時間なんかないつてのに、どうしたら西野を……

ふと陵を振り返ると、俺の視線とぶつかった瞬間視線を逸らされた。泣いていたのを

見られたくないらしい。

まったく、この程度で泣くなんてな。少しは凶太い浜咲の先輩……浜咲？

一瞬のひらめき。むしろこれしかないと思えるような名案が浮かんだ。

「西野」

『なんだ？俺はこれでもいそが「車貸してくれたら、陵が浜咲の女子と合コン組んでくれるってよ！」任せとけよブラザー』

即座に電話が切れた。よし、これで目の前の問題はクリアされた。

「いえ、あの……組みませんよ？」

「あいつの目の前に人參をぶら下げただけだ。食わせるとは言っていない」

馬車馬が滞りなく走ってくれるなら問題はない。ここからは俺の感を信じるしかない。

駐車場に向かって急ぐ。鷺沢の答えはわからない。だが、これまであいつの傍に続け、手を繋いできたこいつに卑怯な真似をする事を俺は許さない。許してはならない。背を背けて受ける罰に意味なんてないんだ。

「三上さん」

「なんだ？」

気持ちが悪く落ち着いたのか、いつもの陵の声だ。

「あの、どこに?」

ああ、そういえばどこに向かうのか言ってなかったか。

「鷺沢に会わせてやる」

ただ一言。その一言に陵は瞳に怯えの色を湛えて足を止めた。

「……おい、行くぞで」

無理矢理歩かせようと、少しだけ力を加えるも、弱い力で踏ん張って動こうとしない。手から伝わる震え。その震えが陵の感情の答え。

「いい、やです」

「知るか。行くぞで」

更に力を加えると、今度は俺の手をあらん限りの力で振り払った。

振り払った自分の手を抱え、俺を怯えを隠すように厳しく見据えてくる。

「どうして、ですか?」

どうして、だと?それは俺のセリフだ。なんでお前は立ち止まる?

「もういいじゃないですか。一蹴は答えを出したんです。ここにいないのがその証拠じゃないですか」

「……お前、本気で言っているのか?」

「三上さんこそ、どうしてそんなことをするんですか?」

なるほどな。つまりこいつは鷺沢の答えがこれなのだと言明してしまっただけだから、もう動けない。これ以上、あいつから答えを聞く勇氣は自分にはないと……そんなうしろめたい恐怖で足が竦んでしまったわけだ。

動こうにも動けない。心がそれを望まない。

一つ息をついて、俺は空を仰ぐ。

俺だっただけだろうか？ もしも俺が——にもう一度会う事が出来たとしたら……

想像しただけで俺は足が竦んでしまった。自分を罵り、蔑み、糾弾する声。その声に俺は耐えられるのか？ 無理だ。俺自身が自分の過ちを認めてしまっているのだから。ちっぽけな俺の心は、その声に粉々に砕かれるだろう。容易に想像できる。

「どうして、か」

でも……それでも俺はツ!!

「俺なら、例えばどんな声でも良い。俺を傷つける言葉を百並べられても構わない……それでも俺は、会いたいって願っているから」

どんな言葉で責め立てられ、世界全てに否定されても、会える嬉しさに比べたら些末なことだ。

「それって、彩花さん……ですか？」

「俺、馬鹿だからさ、逃げたくないんだよ。全部受け止めた。それがどんなことだって

良い。それが大切な奴なら尚更だ……その声ですら大切だと思えちまうから、だから真っ直ぐ向き合いたい」

何一つ飾らない言葉。不格好で、格好良きなんて微塵もなく……こんな言葉が陵に届くかはわからない。それでも、大切から目を背けることは、今後のこいつの傷になる気がするから。

「……三上さんは卑怯です」

「知らなかったのか？」

「……知ってました」

「それに、お前は向き合ったじゃないか、リナちゃんに真っ直ぐに謝れただろ？」

「はい」

「なら、鷲沢とも向き合わないとな。リナちゃんに恥じない生き方をしようぜ？」

「でも、一蹴の目を真っ直ぐに見れる自信がありません」

「お前なら大丈夫だ。それに、もしも崩れそうなら俺がいる。信がいる、唯笑がいる。こんだだけの馬鹿がお前といえるんだ、怖いものなんて何も無い。そうだろ？」

「……なんですかそれ」

「最強だろ？」

「ふふ、負ける気がしなくなりました」

「当然だ」

お前一人くらい何度だって怯えから抜け出させてやる、この程度で良いならいくらでも引つ張り上げてやる。だからいくらでも傷つけ、どれだけでも泣き喚け。一晩中だろうが、一日中だろうが、一年中だろうが俺達がお前を笑わせるために馬鹿をしてやる。歩けるようになるまで背中を蹴飛ばしてやる。

「よし、大丈夫だな。じゃ、思う存分泣きじやくりに行こうぜ？」

俺の差し出した手を、今度は陵が握ってくる。俺の背中を見失わないように、ぎゅつと強く。

『はい、ではカップル成立した方はあちらの……あれ？』

『は、はは。久しぶり、健』

『なんで翔太がそこにいるの？』

『なんでだろうなあ？』

窓の外を流れていく街並みを眺めると、そこにはそれぞれの日常がある。

子供と手を繋いで歩く親子、じゃれ合いながら歩く友人、仕事中のスーツ姿の大人、待ち合わせをしている恋人。沢山の日常があつて、今の私も他人から見ればなんてことの

ない日常の一部なんだ。そう考えると、先程まで抱えていた不安が、ふっと軽くなっただけ気がした。

車内に流れる軽快な音楽。三上さんは指でリズムを取りながら運転する。何も気負わずに……？ほんの少しの引掛かり。それが気になって、私は三上さんに問いかけた。

「あの、三上さん？」

「甘くて苦くて目が回りそうです♪」

「三上さん！」

「な～んだよ～♪」

陽気な返事に力が抜けそうになる。私の人生に関わる問題を前に、どうしてこれ程までに気楽でいられるのか、神経の凶太さに脱帽してしまいそう。

「一蹴がどこにいるのか知っていますか？」

迷いなくハンドルを切っているけれど、そもそも一蹴がどこにいるのかわかっているのかな？

「あく、それなら「静流さんが、一蹴は今日休みを取ってるって言うってたんだよな？大事な用があるとかで」そうそう、てなわけで……あ？」

「へ？」

三上さんの言葉を遮った言葉。その発生源は後部座席からで、そちらに目を向けると、悪戯つ子のような笑顔で手を振る稲穂さんがそこにいた。

「いい、稲穂さん!?!いつからいたんですか!?!」

「最初から潜んでたんだよ」

それにしたって、気配が全然なかつたんですけれど。忍びの生まれか何かですか？

「で、なんで鷺沢が休みを取ってる事をお前も知ってるんだよ?」

「俺も連絡したからだよ親友。智也のが少し早かったみたいだけだな」

本当に兄弟のように気の合う二人だなあって感心するよりも!

「それより、なんで稲穂さんが一緒にいるんですかあ!?!」

三上さんだけならまだしも、稲穂さんにまで情けない姿を見られてしまう可能性が……いえ、その、ついこの前見られているけれどね?それでも一回と何回もとは意味が違うわけで。

「まあ、いてもいいんじゃないか?お前が泣き喚いても信なら慰めるだろうし」

「泣くこと前提なんですね!?!」

「ちなみに俺は爆笑で迎えてやる」

平手で迎え撃とう。

「いいじゃんか、俺がいてもさ。何せ、最低でもグッドにしないとイケないし」

「ノーマルで充分だろ？」

「……何の話ですか？」

私の知らないところで何かを共有しているらしく、二人は素知らぬ顔で歌い始める。

『南南西を目指してパーティを続けよう♪』

お二人は二十四時間お祭りじゃないですか。お似合いの曲過ぎて笑ってしまう。

「じゃなくて、稲穂さんの登場の所為で忘れてました」

「俺の所為って……」

「一蹴がどこにいるのか知っていますか？」

そんな私の最初の疑問に、三上さんも稲穂さんも不敵に笑う。

「察しの悪い女だな。だから小僧に愛想を尽かされるんだ。ざま!?!おい!脇をつつくな

!死ぬぞ馬鹿!?!」

そのままトラックに運転席だけ突っ込めばいいんです。私の心の傷を嬉々として突いてくるようなんで。

「智也、お前もう少しデリカシーを持ってよな。だから彼女が出来ないんだよ」

「あと見た目ですね」

「お前等今すぐ車から飛び降りてしまえ!」

ぶつぶつと文句を言いながら、三上さんはそっぽを向いて口を開いた。

「あいつの居場所なんて、一つしかねえだろ」

そんな三上さんに、稲穂さんもそうだなと同意する。

結局私は一蹴がどこにいるのか、二人が何を見据えているのかもわからないままそこへと連れていかれた。

私と一蹴、二人が心を誤魔化す事の出来ない唯一の場所へと……

目を閉じて思い出す過去は、いつだって綺麗な事ばかり。

飛田扉の不貞腐れた仏頂面と、飛田扉を揶揄う俺、そんな俺達を見て屈託なく笑うつばさちゃん。幼い日々の思い出はいつだって三人の美しくて……そんなことしか思い出せない自分はなんて弱いのだろう。

もつとあつたはずなんだ。つばさちゃんの涙も、飛田の打ちひしがれる姿も、俺の無力な悔しさも、あつたはずなのに……何一つ思い出せない。いや、思い出したくないだけだ。

正面から向き合うことが出来る強さを持ち合わせない俺は、弱虫以外の何者でもなくて、だからだよな。いのりをずっと傷つけてしまったのは。

「俺がさ、もう少し強ければいのりは話してくれたと思うんだ」

手を合わせながら、俺は上を向けないまま彼女へと語り掛ける。そんな資格はもうな

いけど、上を向けなければ、それでも言わずにはいられない。

「つばさちゃんのを受け入れていけば、あいつが自分を追い込む事なんてなくて、君を傷つけることだってなかった」

ずっと、あの日から考え続けた。それ以外に何も出来ることがなかったから。

if に意味があるとは思えないけれど、もしもあの時俺がつて。そうやって考えていくと、結論は一つしかなくて……全ての責任は俺の弱さだ。

「二人共参るよな？飛田がキレて当然だ。俺は何一つ成長しちやいなかった。辛い現実を目を瞑って、怖い怖いって震えて蹲って……だせえよ。今だってそうだ、俺は君と目を合わせることも出来ない」

今になって自分の愚かさ、惨めさ、罪の重さを知って、ようやく自分がどんなに矮小な人間かを自覚出来たんだ。どうしようもない、おめでたい馬鹿だった。

こんな俺が何をどうしたらいいか、悩んで悩んで悩み抜いて、それで出た答え。ただ一つ空っぽになったと思つた心に残つた答え。

膝をついて、両手を地面につき、額を地に伏せて俺は彼女と向き合う。顔を向けられない俺に出来る誠意は、こんな事くらいだった。

「ご、めん……俺、ほんと、どうしようもねえよ……」

許されないと、君の前で俺に涙を流すなんて……そんな無様は許されないと知って

ても、弱い俺の心は耐えきれない。地面を濡らす雫が次から次へと溢れて仕方ない。雨なんか降ってもいけないのに、そこは水溜りが出来そうなくらいに濡れていた。

「つばさちゃんを泣かせて！いのりから笑顔を奪って！飛田に憎ませてしまつて！」
大事なつばさちゃんの絆を、俺がぐちゃぐちゃに壊してしまつたんだ。

子供が積み木を崩すかのような、悪気のない悪意で。

「君の大切を壊して！ごめん、なさ……いッーごめ、ごめ……んッー！」

頭の中が真っ白で、もうごめんの言葉以外が出てこなくて、ぐちゃぐちゃの感情のまま俺はつばさちゃんに縋る。

許してくれなんて言えない。許さないままでいい。馬鹿俺は、一度許されてしまえば君の想いを忘れてしまふかもしれない。だから、どうか許さないで。

身勝手な願いを、どうか彼女が受け入れてくれたらと、長い時間俺はつばさちゃんへと頭を下げ続ける。

そうして、どれほど時間が過ぎたのか……ようやくくだ。ようやく聞こえ始めた。いのりの何にも、信や皆の中にも降っている音。雨音が俺の耳の奥に聞こえ始めてくれる。

この音が聞こえなければ始まらない。始める事なんて出来ない。

こんな弱虫の俺でもさ、ようやく出来たんだ。もう二度と揺らがせない、揺るがしてはいけない覚悟つてやつが。

その覚悟を、ここから始めよう。

その為には、虚勢を張れ。強がつて見せろ。俺は曲がりなりにも男なんだ。なら、大切な人の前でこれ以上格好つけられないような、そんな男で良いわけがない。

歯を食い縛り、意を決して上を向く。つばさちゃんから目を背けるのは昔の弱虫の俺。現在の俺は違うだろう！

腕で涙を拭い、情けない顔をマシな顔へ。

「……つばさちゃん、もう一つ謝らないといけない事があるんだ」

空っぽの心に残った答え。それが真実なのだと思ふから。

「ううん、そうじゃねえな。謝るのは卑怯だ。だから、宣言……かな？」

この真実はもう二度と違えない誓いへと繋がる、俺の嘘偽りない気持ち。

目を瞑り、逃げ続けた俺が逃げてはいけない存在。

それに気付いてしまったから、もう無視なんか出来ないんだ。

「俺、あいつを抱き締めに行くよ」

誰に咎められても止まれない、止めようものなら這つてもそこへと辿り着く。その覚悟が俺の唯一だ。

「雨に濡れ続けたあいつに傘を渡しに行く！代わりに俺が濡れ続けてみせる！今度は俺があいつの隣にいるんだ！」

一緒の場所に立てた今だから出来る。もう一人で俯かせたりなんかしない。あいつが泣いている時に一人にしてなんてやらない。

「泣いてるあいつの隣で、雨の中俺は笑ってやるんだ！笑ってその手を離さない！大丈夫だって言い続けてやる！」

だって、それが俺の――

「こんな馬鹿の為に仮面をつけ続けたあいつを俺……壊れちゃうほど好きになっちゃまったからさ」

最後に残った真実なんだ。

――馬鹿、馬鹿だね、一蹴は……

肩に掛かる懐かしい重さ。背後から俺の肩へと両腕が回されて抱き締められる。

「なんだよ……俺、今つばさちゃんに言つたばつかなんだけど？抱き締めに行くつて。なのに、抱き締められるとか格好悪いじゃん」

「馬鹿、一蹴のばかあ……」

頬にかかる俺の好きな髪の毛の感触がくすぐったい。くすぐったくて、涙と共に笑いが込み上げてくる。

そうだ、この存在を俺は求めていた。

愛しい繊細な手を握って目を瞑る。

「馬鹿はどっちだつつかうの。お前、覚悟しとけよな？ 今度は俺がしつこくお前につき纏ってやるから」

「うん」

「嫌だつて言つたつて、離さないからな？」

「うんッ」

「お前の髪の毛で遊んでいいのは俺だけだ」

「うんッ！」

俺達二人だけしか祝福しない二人だとしても、もう二度と俺は迷う事はないだろう。俺の為に犠牲にしてきたいのりの時間。その時間を俺は埋めていこう。どんな犠牲を払ったとしても、いのりの笑顔がその先にあるのなら、それだけで良いと思えるぐらいには強がれるようになったのだから。

「智也、お前の見たかったハッピーエンドだな」

遠目で二人を眺めながら、智也の肩に手を回す。

俺も智也もこうなるように動いていた今回の一件だけど、ハプニングばかりで思い通

りに動いた事のほうが少ない。特に、一蹴が大学祭に現れなかったのが最大の誤算だ。そこで一つわからないことがある。なぜ一蹴はいのりちゃんと寄りを戻す事を望んでいたのに、学園祭に来なかつたのかだ。いのりちゃんの事を選んだのなら遅れるなんてあり得ない。そこだけが謎のままだった。

もしかしたら智也は答えを知っているのかもしれないと、智也へと顔を向けたのだが、それを聞くことは出来なかつた。それどころか、その事がどうでもよくなるような衝撃が身体を駆け巡る。

「……車に戻るぞ。もう少ししたらあいつらも戻ってくるだろう」

「あ、ああ」

背を向けて歩き出す智也に、俺は何も声を掛けられなかつた。

二人を見る智也の顔。その目。それは今までに俺が見たことのない表情だった。

羨望、祝福、悲愴、哀愁……ありとあらゆる感情を押し留めようとして失敗したかのような、そんな不細工な微笑み。

その表情に俺は――

「……やつと、だな」

喜びに打ち震えて叫び出したくて仕方なかつた。

俺以外にもう一人、智也のそんなこちらまで締め付けられてしまうかのような表情を

見ていた事にも気付かずに。

「いのり？」

どこか心ここにあらざるの様子を見せたいのり。どこかへ視線を投げたまま固まっている。どうしたんだ？

「いのり！」

「は、え？」

大きな声で呼んで、ようやくいのりは俺へと向き直った。

「どうしたんだよ？」

「う、ううん。なんでも……あ、それよりも一蹴？」

さっきの放心した様子を隠すように、いのりは頬を膨らませて俺の鼻をつまんでくる。

「なんで大学祭に来なかったの？」

「……は？来なかったのって？」

いのりが何を言っているのか理解できない。何か約束をしていたっけ？いやいや、していた覚えはない。それどころか俺は行くつもりだったんだ……今から。

その事を話すと、いのりはん？と首を捻り、俺も首を捻る。どうにも会話が噛み合

われない。そこで、一旦整理することに。

「えっと、いのりは大学祭で、あの男に招待されて行っていたのか？」

「うん。イベントがあつて、そのイベントに一蹴が来るからって」

だよな。俺もそのイベントに招待されたわけで。なのに来なかつたってどういうことだ？

「だから待ってたんだよ。なのに四時になつても来ないから」

「……四時？」

「うん」

「四時、ね」

「一蹴？」

いのりの答えでようやく合点がいった。俺は黙って懐に仕舞っていた招待状をいのりに渡す。

「あれ、これって招待状？」

「それ、読んでみるよ。汚い字だけど、なんとか読めるだろ？」

「手書きで送つたんだね。えっと……イベント開催時間が……」

俺の言いたいことが伝わったらしく、いのりの招待状を持つ手が震える。おそらく怒りで。

「開催時間が6時?・16時じゃなくて、ろ・く・じい・ろ・ろ!?!」

そうなのだ。その招待状には6時と記載されていて、いのりは16時だと言う。つまりあの野郎は、16時の1を書き忘れていたらしい。だから、俺は元からこの時間に間に合うように、つばさちゃんのところを出るつもりだった。

さすがにつばさちゃんに何も言わないでいのりを迎えに行くのは、不義理が過ぎるっ
てもんだ。

「ということは取り越し苦労だったどころか、全部三上さんの所為じゃない!」

「そうなるな」

三上とどんなやりとりがあつてここまで来たのかは知らないが、いのりの茹でた蛸のような真つ赤な顔で大体の想像がついた。いらぬ心配を俺の為にしてくれてたに違いない。

むんずと俺の手を取り、いのりがずんずん勇ましく歩き始める。

「い、いのりさん?」

「一蹴、年上の人を虐めてみたくない?」

軽くあそこが縮み上がった。とんでもねえ笑顔を人の彼女に植え付けてくれやがる。

もう二度といのりを怒らせない。俺の脳内プログラムを書き換えた瞬間だった。

これで全部終わりだよ彩花。

運転席に座り、ハンドルへと体重を預ける。心に押し掛かる重さを預けるように。

俺があいつの為に一生懸命になった？違う。あいつの為なんて崇高な理由じゃない。俺の為だ。

視界の端にちよろちよろする何かが目障りで、それを振り払っただけ。それだけの事で、決してあいつの為なんかじゃない。

俺が優しい？馬鹿を言え。優しくなんてあるものか。もうずっと前から俺は世界の底辺で生きている人間なんだ。そんな人間が優しいわけがあるか。

唯笑も信も知らない。知られてはいけない俺の闇。雨なんて生易しいものじゃない。凍てつく雪がずっと降り続けている俺を、決して知られてはいけない。

唯笑達は俺が彩花を愛したままでいると、だから恋を忌避していると、そう勘違いしてくれている。勘違いではないが、それだけじゃない。唯笑は理由にまでは思い至ってはいないだろうが、もしかしたらそれだけじゃないと感づいている節がある。それでいい。深く追求してきてものらりくらりと躲してみせる。

まだ、なんだよ。俺に誰かを愛する権利なんてまだ与えられていない。もう少しだけ恋に踏み込めない。

そろそろいいかもしれない。逃げないで向き合おうと、そう思い始めた頃に陵は俺の

前に現れた。

危なかった。正直、もう少し遅ければ俺は陵を……いや、臆病な俺は結局動けないままだっただろう。だが、それでいい。彩花と唯笑と信と俺。四人で俺の世界を閉じてしまおう。そこに入り込む異物は排除する。

お前は、こんな事望んじやいないのはわかってる。でもな、お前だけは知ってるだろう？ どれだけ俺が汚れきったガキかを。こんな俺の傍に誰かを置いていいはずがない。俺の一番近いところにいるのは、彩花……お前だけだよ。

悪いな、俺だけで背負うべき事なものな。けどさ、それをお前は許してくれないだろう？ だったら、ちよいと俺の迷惑を一緒に背負ってくれ。俺がたつた一人遠慮なく迷惑を掛けられるのはお前だけだしな。唯笑と信には……俺以外の世界がある。二人にはどうしても幸せになってもらわないと困る。俺から離れるのに時間は掛かるだろうが、なんとかしてみせる。

だからさ、彩花。少しだけ待っててくれな？ 俺が死ぬまでもう少しだけ、さ。きつと俺は地獄行きだけど、顔を合わすくらいは許してくれるだろ？ だから、それまでは……

——他の誰にも、この罪を背負わせてなんかやるものか——

二人の仮面、二人の月

一筋の光が映し出すのは、マントを羽織り一振りの大剣を携えた流麗な騎士と、その腕の中で弱く息をするお世辞にも綺麗とは言えない格好の男。二人の傍にあるのは静寂と月明かりだけ。

騎士の腕が小刻みに震える。どんなに強大な敵が目の前に立ち塞がろうと臆する事のない騎士が、今だけは恐怖で震えている。彼が今まで立ち向かってきた難敵など足元にも及ばない絶望が目の前に現れてしまったのだ。

悲劇としか言いようがあるまい。彼は国を信じ、国を守り、国の為にその身を捧げる為だけに生きてきた。その不幸が他の誰にわかるであろう？誰にもわからない。強気彼の意思を砕く、現実の強さ……それを知らずにいてしまった不幸など。

彼と同じ年を過ごしてきた皆が経験する出来事、それを今初めて彼は体験しようとしている。これまでの彼の人生に親友、恋人、家族ですら持ったことがなかった。常に一人で生きて、あらゆる困難を一人で乗り越えてきた。どのような難題も己一人で、だ。そんな彼に初めての存在が出来た。それが彼の腕に抱かれ、朦朧とする意識をなんとか繋ぎ止めている男だ。

彼との出会いが騎士の頭の中に蘇る。

盗賊団を追う道中、一瞬の隙を突かれて傷を負ってしまった騎士を、平民の彼は当たり前のように手当てをした……そんな、なんでもない出会い。だが、騎士にとっては驚天動地と言つてもいい出会い。

騎士の身分を持つ者に、平民の、それも平民の中でも更に下のスラムに生きる者が声を掛けるなどあつてはならない事だ。下手をしたら切り捨てられても文句は言えない。身分の違いとは、命の重さの順位だ。それを理解している者なら普通は騎士に近付こうなんて馬鹿な事はしない。

だのに、彼は怯える様子も見せず、それどころか騎士の身を心の底から案じて、少しの間家に運んで介抱をしてくれた。あの時程、騎士は優しさというものを骨身に感じたことはなかった。

それからというもの、騎士は足繁く彼の下へと通つては、他愛ない話をしたり、街に強引に連れ立って歩いたり……そんな何でもない、それでも至福を感じる時を過ごした。

このまま時が過ぎていけばといつしか願い、騎士の役目が国を守ることから、彼との平穩を守ることに変わろうとした……そんな時だった、クーデターが起きたのは。

王族、貴族への不満、不信、憎悪、マイナスの感情を蓄え続けた民衆がクーデターを

起こしたのだ。

よくある話だと、騎士は思う。隣国でも遠くない過去に似たような事件が勃発した。だが結局はクーデターは失敗し、首謀者一族を火炙りにし、幹部を公開拷問にかけることにより、民衆の心に恐怖で蓋をした。胸糞の悪い話だ。

だが、それも致し方ない。国の運営のノウハウ等理解する平民などいないのだ。ならば、恐怖でもなんでも民を押さえつけるしかない。国を守る為というお題目で。

騎士は知っている。国とは不条理で、理不尽で、傲慢でなければ機能しないのだと。しかし、騎士は知らなかった……理不尽が隣り合わせでそこにあるということに。

鎮圧に赴きながら、騎士団長の目を盗んで彼の無事を確かめる為に騎士は走った。無事であると信じて。無事であるのなら、沈静化するまで自分の下で匿う為に。

ああ、そんな騎士の想いを現実には嘲笑う。

彼の家を訪ねると、すぐに気づく嗅ぎなれた臭い。その馴染みの臭いに騎士の足が竦む。進まなければいけないのに、進むことが出来ない。目にしたくない現実がそこにあると心が確信しているかのようだった。

それでも、と彼は一歩ずつゆっくり歩み、臭いの下へと辿り着いた。

月明かりが窓から差し込み、照らすは微笑みながら壁に背を預ける彼の姿。その身体に至る所から血が流れている。何度も何度も刺されたかのような、そんな傷だった。

騎士の頭は真っ白になり、無意識に彼の身体を自分の腕へと迎え入れた。

なぜなら、騎士にはわかつていたのだ。この臭いは血の臭いではない。死の臭いだ
と。

「……なぜ、騎士、さま？」

息も、声にも、全身のどこにも力が入っていない。絶望が黒く視界を染めてしまいうになる。

「なぜ、ではないよ。僕は騎士だ。君を救いに走ってきたんだよ」

「そう、ですか……かはっ！」

「あまり喋らないほうが！」

これ以上喋ると僅かに助かる可能性もなくなってしまう。そんなものはないと知っていたのに、騎士はありもしない希望に縋ろうとしている。そんな騎士の頬に優しきで出来た彼の手が添えられた。

「なにが、あつたんだい？ どうして君が、こんなッ！」

「お、れね？ 皆に、言つたんだ……なん、ども、なんど、も……やめ、ようよつて。けど、さ、皆聞いてくれ、なくて……」

「なぜそのような事を！」

「だって、騎士様が、傷つくじゃ、ないか……守りたい人達を、傷つけないといけない、

なんて……そんなの、俺は嫌だなあって。そう、思っちゃったんだ」

僕の為、だど？そんなことで彼は……

彼のあまりの愚かしさに、自然と涙が零れ出てくる。それは、騎士が生まれて初めて流す涙でもあった。

「そ、れに、俺、馬鹿だか、ら」

よく聞き取れなくて、最後まで彼の声を聴いていたくて、騎士は彼の口元に耳を寄せ、その最後の言葉を、愛しい者の声を忘れないために。

「俺、お、れ……きし、さまを……あい、し、て……」

最後まで言えなかった言葉、言わずとも伝わる気持ち。

目を閉じて、安らかに眠る彼を騎士は壊れてしまわないように、包み込むように抱き締める。

「馬鹿だな、君は……」

目を閉じて、消えていく彼の温もりを感じながら彼との日々が脳裏を駆け巡る。そのどれもが鮮明に輝いて、何一つ忘れてはいけない記憶。

「本当に馬鹿だよ……僕、だって……」

——君を愛している、この誓いは永遠だ——

『てことで終わった、『純潔の誓い』なんだが……伊波？』

『少しだけ話し掛けないで……うえッ』

演目が終わって数分後俺と伊波はステージに戻ってきた……衣装を着たまま。

ああそうだよ！主役二人は俺達だよッ！

千羽祭本祭当日、俺と伊波を主役とした舞台を披露したわけだが、観客は笑い目当ての馬鹿共と、腐臭を漂わせる女子の方々。奥様方もちらほら。この国終わってるだろ！『もう大丈夫。とりあえず言いたい事はいくつかあるのですが、まずは……スタンディングオベーションおかしいでしょ!?!』

伊波の絶叫も何のその。拍手喝采の観客に俺は唾を吐き掛けたい気分ではなかった。

『つうか、準備で一番時間取られたのこれだからな！どこかのメガホン持って満足げに頷いている馬鹿、テメエ後で覚えてろよ!』

裏で感涙の涙を流している監督の、音羽なんとかさんよお！なんてものをやらせやがるんだ。

抗議の目を向けると、何を勘違いしてやがるのか、親指をグツと立ててスタッフと抱

き合つて泣き始める。ブルーチーズの群れだな。

『わざわざ、とと……飛世巴さんが所属する劇団の演技指導の方を呼んで、朝から夜まで完璧になるまで練習させられたよね』

『素人なのに何度怒鳴られた事か……殺意が沸いたよな』

地獄の日々を思い出し、俺と伊波は鳥肌が立つて震えが走った。もう二度と、あのピラミッド建造のための奴隷のような日々はごめんだ。

それによお、こんな惨めな姿をあの小娘の前で晒すなんて、俺の枯券枯渴寸前だろ。小僧と共にいるであろうそいつを探すと、探すまでもなく最前列に見つける。

わかっているわかつてる。この流れはアレだろ？風呂場の排水溝を裏まで見た時のような目をしているんだろ？もう慣れてんだよこっちは。よっしゃ！ばっちこい！気合十分で小娘の顔へと視線を移し……

「……………ふへへ」

涎を垂らしそうな緩みきつた顔に戦慄した。

な、なんだ？あいつが俺に熱い視線を送っているなんて、もはや事件だろ！

隣にいる鷺沢は額に手を当てながら……

「俺、あんな腐った奴に貸しを作っちまったのかよ」

何かしら不敬な眩きをしている気配を醸し出している。俺だけじゃなくて、伊波にも

同じような評価を与えてくれねえかなあ!?

『伊波、とつと次に行こう』

『そうだね。嫌な事件だったねってことにしておこう。では次ですが、皆さんお待ちかねのおくくく!』

——千羽裁!!!

『これ以上僕達を処刑しようとしなくてくれないかな!? 違うからね!』

『俺、もう一度受験をやり直してえ』

『奇遇だね、僕も同じことを思ってたよ』

——さすが恋人!!!

『ははは、お前等なんとか痕跡を残さないように最大限の努力をして半殺しにするぞ?』
『僕も全力を尽くすよ。大学祭が終わったら一人たりとも笑って日々を過ごせると思わない事だね』

シリアルキラーに匹敵する笑顔で応える。一人も逃がすものか。

『メインステージでは今頃ミスコンが行われている頃ですが、僕達のセカンドステージも負けてはいられません!なので、僕達のステージではくくく!』

『女子力最強決定戦!を開催すんぞ野郎共!!』

俺の号令と共にアレなテンションの雄叫びが上がり、女子達は少しでも技を盗もうと

目を光らせる。ネタ枠は抜きの本気イベントだからな。男を虜にする手練手管を目に焼き付けたいのだろう。

『まずは審査員ですが、僕は彼女がいるので除外されますので、まずは難攻不落の馬鹿、三上智也！』

『……俺、お前と友達でいる自信がなくなってきたわ』

『僕は最初から友達でいる自信がないけど。二人目は、実は年下に弱いと噂のピエロ君！』

『……帰っていいか？』

『帰らせません。最後に、あなた良い人ねが鉄板の稲穂信！』

『そうなんだよなあ……この間もバイトの後輩の子にさあ』

『あ、その話は今度聞くから。とまあ、この三名にそれぞれ十点満点で得点を付けてもらい、勝負して頂きます。では厳正な審査の結果選ばれた女性の方々を紹介しましょう』

エントリーされた面々を知らない観客は、誰がステージ上に現れるのか期待に胸を膨らませながら登場を待つ。安心しろ、今回は期待を絶対に裏切らないようにしたからな。料理審査もあるんだ、下手な人選は俺達の寿命に影響を及ぼす。

『エントリーナンバー！活発でスポーティーな見た目とは裏腹に、心は乙女な新進気鋭の舞台女優！飛世巴さん！』

『心は乙女つてどういふ事よイナ！こんにちわ〜！今日は劇団の宣伝にもなるので参加しました！よろしくね〜！』

ととの参加に会場がどよめく。最近、演技力の高さが評価されて、芸能事務所からも声を掛けられていると話題の女優だもんな。それにしても、伊波の奴凄いな。過去にいろいろあつたとを呼ぶなんてな。さすがだぜ。

『エントリーナンバー2！守りたい、その純白！絶賛彼氏募集中の薄幸の美少女！伊吹みなもさん！』

俺の天使爆誕！守りたい、その笑顔！楽園はここにあつた！馬鹿な声がそこかしこから聞こえる。

『え〜つと、私なんか女子力と呼べるような事なんてなにも……ですよね、智也さん？』
『みなもちゃん……優勝決定！』

『ええー！……！？』
『独断と偏見は受け付けません』

ふん。みなもちゃんだったら、全部に満点を出してやる。くっそ、野獸共の目でみなもちゃんが汚されなないかが心配だ。無菌室の用意はまだか！

『エントリーナンバー3！最後は彼女の腕の中で眠りたい！元千羽大の聖母マリア！白河静流さん！』

『なんだかこの賑やかな雰囲気懐かしくて、参加出来て嬉しいです。精一杯頑張るか
ら、みんなよろしくね?』

静流さんのファンらしき団体が後ろでオタ芸をしているのが見える。静流教とでも
名付けよう。

『エントリーナンバー4! 思わず後ろから抱き締めて愛を囁きたい! 恥ずかしがる姿は
禁断の果实! 元千羽大のゴッデス! 霧島小夜美さん!』

『いやあ、そんな紹介お姉さん照れちゃうなあ。よろしくー!』

姉御! 指輪を受け取って下さい! パン、パンをくれえ! やらなにやら。若干数
名、パンに頭をやられた奴等がいるらしい。ご愁傷様だな。

『確かに禁断だわこの人々。禁断過ぎて特殊免許ないと取り扱い不可能だし。ていうか
ネタ枠なしじゃなかったのかよ?』

『誰がネタ枠ですって?』

『言葉が過ぎました、ごめんなさい。謝るのでヘッドロックは今だけは封印して下さい
!』

ここでやられたらいろんな意味で俺が死ぬ。主に男子学生の嫉妬の炎で火刑に処さ
れるわ。

『そして最後! エントリーナンバー5! 彼女のおかえりなさいの声があれば、どんなブ

ラック企業でも耐えていける！浜咲に咲く一凜の奇跡！陵いのりさん！』

『大袈裟ですよ先輩。今日はよろしくお願いします』

会場のボルテージが上がり、ボルケーノへと変わる。噴火しちゃうのかよお前等。こんな小娘に一喜一憂とか時間の無駄以外の何物でもないわ。

『はい最下位決定。おめでとう、帰れ』

しっしっしと手を払うと、陵はまたも俺の予想を裏切る涼やかな顔で……

『もう、冗談ばかり言うんですね、あそこの三上鴨也さんでしたっけ？』

『隠しきれてねえぞ小娘』

鴨にされるとかそういう意味か？いや違うな。上等な肉質の鴨のように素敵な人って意味だな。可愛いところがあるじゃないか。全身全霊で落としてやろうじゃないか。

『以上の五名で女子力を争って頂こうと思います。では、時間もないので早速開始したいのですが、皆さんよろしいでしょうか？』

五人の返事と会場のイヤツハアーーーーッ!!!の声を合図にイベントが開催されたのだが、この時の俺は予測することが出来なかった。俺の胃が殺される寸前まで追い込まれる事になるだなんて……夢にも思わなかったんだ。

『まず最初の審査は定番！お料理対決です！ただし、時間がないのであらかじめ調理室

で作って頂いた料理を、審査員の三人に食べて頂きます』

あく、だから一時陵が小僧の隣にいない時間があつたのか。この企画の内容を決めるのに俺は参加していないから、どのように進行するのかがまるでわからない。

羨ましい、死ぬ、人のいない場所に埋めるぞ……なんて物騒な声が聞こえるが、是非言い返したい。若干一名ネタ枠がいるんだよ！

ネタ枠に目をやると、にんまりと悪戯な笑顔を浮かべて手を振ってくる。今すぐ摘み出せえー！！

『ではトツプバッターの方どうぞ！』

『じゃあ、私から……』

おいおい、マジかよ。まさかまさかの俺の天使、みなもちゃんからはな。今がプロローグだって？馬鹿が。フィナーレ直前だ！

みなもちゃんが順々に皿を置きながら、最後に俺の前に皿を持ってくると……
「智也さんに美味しいって言ってもらえるように、少しでも頑張っちゃいました」

そう囁いていった。

みなもちゃん、君って子はなんていい子なんだ……あ？なんだこれ？頬が濡れて……？俺、泣いてるのか？クソ、涙で味がわからなくなっちゃまうじゃないかよ！せつかくのみなもちゃんの愛情が込められた手料理なんだ！俺は一口口にする毎に心の中であり

がとうつて呟いて食べるからな。

『伊吹さん、料理の名前はなんですか?』

『笑顔のハンバーグです。少しでも美味しいって思つて笑顔になつて欲しいなつて、食べてくれる人の笑顔を思い浮かべて作りました』

照れて笑う彼女に馬鹿多数ノックダウン。

俺だつて毎日君の笑顔を思つているよみなもちゃん。俺、君と家族になれて毎日幸せだぞ。まだ嫁にはやらねえよ絶対!

早速料理に手をつけようとする不信心共。その手を一喝して止める。

『馬鹿野郎! みなもちゃんに祈りを捧げてから食べやがれッ!』

『じゃあテメエは神社に行つて食えよ』

『ていうか、なんか智也のだけ俺達のよりでかくないか?』

心の距離の差だろ。

胸の前で十字をきつて両手を組んで、心の中で祈りを捧げる。

神よ、この世に彼女という天使を降臨させてくれたことを『普通にうめえな』『家庭的であつたかいよな』こと、を?』

『お前等俺より先に食つて良いとどこの神が許したごらあッ!』

神罰を恐れぬ所業に戦慄する。まさかこの俺様よりも早く食べるとは、命が惜しくな

いと見える。

祈りを捧げ終えて、ようやく俺は神々しい輝きを放つハンバーグへと箸を伸ばす。

すんなりと箸が沈む。程よい捏ね方と焼き方。その一つ一つの丁寧な工程を思い、自然と涙が滲む。そうだな、料理は愛情だよな。みなもちやんの愛でもう胸が一杯だよ。

ハンバーグを一切れ、わずかな味も逃さぬよう丁寧に咀嚼する。

一噛み一噛みゆつくりと噛んでいくと、肉汁が口の中をこれでもかと旨味で一杯にする。口の中で濃いめのデミグラスソースと混ざり合って、鮮やかな美味しさが俺の心を蕩けさせる。

……頑張ったね、みなもちちゃん。君はいつの間にかこんなに成長したんだ。俺の手から離れていってしまおうようで、少しばかりの寂しさが胸に落ちてくる。

『……うめえ……うんめえよ、みなもちちゃん』

『鼻水と涙と気持ち悪さが出てるぞ智也』

うるさい。兄の心が貴様等にわかってたまるか！クララがバク宙してみせたかのように俺は感動しているんだ！

『よかったあ。智也さん、疲れているみたいだから美味しい料理を食べさせてあげたかったんです』

『おい、計測不能の札はないのか？』

『そんな斬新な札はないから。もう怖いを通り越して怖くて気持ち悪いよ』
あの子を嫁に出す日が来てしまうのかと思うと辛い。

『それでは審査員の皆さん……じゃないや、一人は結果がわかってるから、お二人どうぞ
！』

ピ9。信6。智10。

『おい、どういうつもりだ信？今を最後の晚餐にするかおい？』

『お前がそんなだから公平を期すためにこの点数にしたんだよ！』

『ありがとう信君、空気読んでくれたね』

みなもちゃんを前に公平だと？小さな奴らめ。みなもちゃんを前に跪かない人間が
いるだろうか？いや、断じてはならない！

『9点って……やっぱり、ピエロ君って年下に甘いよね』

『あ？』

『なんでもありません。合計25点ですね。一人目から高得点が出ました！これは他の
方達にプレッシャーを与えた事でしょう。それではお次はこの方です！』

『あたしが頑張つて作ったんだから、味わつて食べてよね。特にトミー』

『あく、はいはい。消化試合消化試合』

みなもちゃんの後に出したのが運の尽きだな。

『イナ〜！あの審査員あとで劇団に貸してよ。大道具の運び方を一人でやってもらうから』

『了承』

『オレンジのジャムの返事はやめろ！ちゃんと食うから！』

コンマ数秒で返事をするなよ。下手に契約書とか書かれたら冗談じゃすまないんだぞ。

仕方ない、気は進まないが食べてやろうじゃないか。この辛口の俺様がな！

目の前に皿……じゃねえな。丼より少し小さな器が置かれ、湯気が立ち上る。湯気から香るのは野菜の柔らかかな匂い。食欲を誘う香気に悔しくも喉が鳴る。

『飛世さん、料理の名前をお願いします』

『癒してポトフ！かな？皆メインを作るだろうなって思っ、胃に優しいものを作りました』

なんだ、そのあざとい心遣いは？俺がそんなもので絆される甘ちゃんだとも？考えが甘いんだよと。

『じゃ、食うか』

『おいボケ、祈りはどうしたよ？』

『食事の前にお祈りなんかしたことないぞ俺は？』

『うぜえ』

ピエロ君はおかしな事を言うなあ。頭大丈夫か？

スプーンを手に取って、野菜の旨味がたつぷりと染みたスープを口の中に含む。

ふむ、なるほど。パンチはないが、それ故に心が安らぐ味だ。だがしかし、この程度で俺が……

『ふおおおお〜』

『惚けてるぞお前』

はッ!?俺としたことが!?

信に突っ込まれて俺は我に返る。

『惚けてるだど?この俺が簡単にそんなこと……』

もう一口喉の奥へと流し込む。

『クソが!んめえじゃねえかよッ!』

『なんで怒ってんだよ』

悔しい!けど心がほわほわしちゃう!

疲れきった体と心で温泉に入った瞬間を想起させる優しい味に、俺は歯噛みをしながらも完食してしまった。ちくしょう、相変わらずあざといなあ!

『じゃあ、点数をどうぞ』

ピ7。信9。智7。

『飛世さんのポトフの合計点数は23点！惜しくも伊吹さんに届かず！』

『あっちゃあ、良い所まで行くと思っただけだなあ』

悔しそうに片目を瞑って舌を出す。みなもちゃんがいなければ俺の得点はもう少し上がっていたはずだ。惜しかったな。

『でもまあ良いか。ねえ、トミー？』

『なんだ？文句なら……』

何かしらの文句を言われるのは覚悟していたのだが、ととは別段気にしている様なそぶりも見せずに真っ直ぐに俺を見て、美味しかった？とだけ聞いてきた。

『まあまあだな』

『そっか、まあまあ、ね。それなら成功だから、あたしも満足かな』

そんなとこの言葉に信はくっくつ、と笑いを漏らす。

『トミーのまあまあは、凄く美味しいって意味だしね』

なんて悪戯にウインクして下がっていった。

……人をツンデレみたいに言ってんじゃねえよ。美味かったのは否定しないけどな。

『飛世さんは満足した結果だったようですね。では、三番手の方どうぞ！』

『はい、稲穂さんとピエロさんの為に作りました』

おくと、気持ちは審査委員長の俺に対して毒を盛りにきた小娘がいるぞお。

『マイナス十点だ、残念だったなあ!』

『残念なのは智也君だつてば。同じレベルで争つてどうするのさ』

売られた喧嘩は破産してでも買え!が家訓なんだよ三上家は。

皿が目の前に置かれていく中、俺の時だけは陵は顔を背けながら置いていつたらしい。俺も背けていたけどな。

『それでは、料理の名前をお願いします』

『健康肉巻きです。大切な人には健康でいて欲しいですから、いろんな野菜をお肉で巻いてみました』

『あつはつはつはつ!』

毒婦が健康とか口に行っているのが滑稽で思わず手を叩いて笑ってしまった。

『先輩、あそこにシンバルを叩く猿の玩具がありますけれど、いいんですか?』

『何をどうなつたら、二人は宿敵のような関係になつたの?』

出会つて五秒で宿敵だったんだよ。伊波にはわからんだろうな、この自分でも制御出来ない気持ち……こいつが俺の生涯の敵だと、拳を交えた瞬間に感じたぜ。

皿に目を移すと、彩鮮やかな野菜に肉が巻いてあり、それぞれにソースが違う。中には何もついていない物も。

どうせ野菜に肉を巻いて焼いただけだろ？工夫が足りないんだよお子ちゃまが。酸いも甘いも噛み締めた俺を唸らせる味は早々出せないぜ？

『いや、さつきからちよろいぞお前』

『黙れ良い人止まり』

気はこれっぽっちも進まないが仕方ない。武士の情けだ。食べてやろうじやないか。

人參の肉巻きをどうでもよく口に入れたのだが、口に入れて一噛みすると、人參は予想よりも固くなく、それでいて溶けてしまうほど柔らかくもない。肉との食感が絶妙にマッチするように手が加えられている。

こ、こいつ！

陵が不敵な笑みを浮かべて俺を見下すように見てくる。まるで、これでも平伏しませんか？とでも言いたげだ。

『……それぞれに調理法が違うのか』

いつも無口なピエロ君が、俺と同じように悔しさを滲ませながら呟く。

そういうこと、か。ソースのついていないアスパラガスは、肉の塩コショウだけの調理ではなく、アスパラガスをバター醤油で炒めてやがる。

『へえ、いのりちゃんこれ手間がかかったんじゃない？』

『それでもありませんよ。今は電子レンジが多機能になりましたし。野菜の調理の幅が

おかげで随分増えたんですよね』

うんうんと、自分も調理場で働いているからか、やたら感心していた。

『ほ、ほお？だがこんなお弁当のおかずのような品で俺が納得するとても？』

『完食したお皿を前にして何を言っているんですか？』

『チツ、これで勝つたと思うなよ！お腹が空いてただけなんだからな！』

『ふふ、いつもの憎まれ口にキレがありませんよ』

あの勝ち誇った顔、泥をぶつけない。

『はいはい、そこまでにして下さい。点数のほうをお願いします』

ヒ8（嫌々出した）。信9。信7。

『いやいや！なんで信君が二つ出してるの!?!』

『本人が出したくないんだと』

『れっきとした子供じゃん!』

信に得点を任せた俺は、肩肘をつけて早く次に行けと手を払う。

『え、合計は24点ですね。残念ながら伊吹さんに一歩及びませんでした、十分な得点です!』

『……7点ですか』

そっぽを向いているため、陵がどんな表情をしているか細かくは知らんが、声のト

ンで落ち込んでいる事だけはわかる。

『ああ、気にしなくていいよいのりちゃん。7点って、智也にとっては満点にちかッ、いったッ!? 何すんだよ智也!』

小娘に対して余計な気遣いで嘘を言う馬鹿の足を踏みつける。

『悪い、ただ踏み潰したかっただけだ』

『言い訳くらいしろよ!』

今のは信のお得意の社交辞令だと伝えようとした……が、俺はやっぱり口を噤んでそっぽを向く。

あいつ、本物のアホだろ。何やってんだよ、お前は。

俺が視線を向けた先にいたのは、両手を胸の前で重ねて、目を瞑って何かを嘯み締めながら微笑む陵の姿。その姿が俺の口を金縛りさせた。

見てはいけない何かを見てしまった気がして、もう一度陵と目を合わせる自信がなかった。

「いのりの料理が満点じゃないっておかしいだろ審査員! 舌おかしいんじゃないか!」

指弾喰らわずぞ外野の小僧。

『え、ここまでの結果は伊吹さんが25点でトップという事なのですが、まだまだわかりません。四番手の方どうぞ!』

『はい、お願いします』

遂にきちまった……俺達が誰も文句を言えない天上のお人がよお。さすがの俺もこの人を前にふざける事なんて出来ない。俺達の聖母だからな。

皿が置かれていく際、静流さんが俺の前で少しだけ立ち止まり、顔を覗くように見ってくる。

そうそう下から抉りこむように……じゃねえッ！

あまりに顔が近づき過ぎて、思わず後ろに倒れてしまいそうになる。

「……うん、大丈夫みたいね」

な、何がでせうか？ いや、それよりもまずい問題が。今のつて遠目から見たらもしかして……

「三上テメエ、女神の口付けを誰が許したあッ!!」「墮天使のキス教えてやろうか！ ああん!!」「尻から抉んぞダボがあッ!!」「うちの店長代理に何してくれてんだあんた？ 死ぬぞ?。」

こうなるよなあ。最後の奴犯人特定余裕だわ。あと何回泣かされたいんだ小僧よお?

『落ち着けよみんな、今のはキスじゃなくて『智也の裏切り者おッ!!』お前隣で見てただろうがよッ!』

信の遊び心の所為でオーディエンスからだけじゃなく、ステージ上の女性陣からもなげか非難の聲が上がり始める。

『へえ、トミーってそうだったんだあ。ま、別に良いんだけどさあ』

『静流、あんたあたしに決闘を挑んだわね？』

『智也さん……嘘、ですよ？』

全員の視線が鋭利な刃物の様だ。なんだってこんな……ん？全員？

よく見ると、一人だけは目を細めて微笑んで……るよな？アレ。鶴○師匠のような顔なんだけど、何してんのあいつ？陵師匠かよ。こんな時に笑わせにきやがって、空気を読めよな。

おっと、そんな事よりも！

『違うんだみなもちゃん！今のは勘違いで、キスなんてしてないから！』

『……ほんとですか？』

『あたし達はトミーの中じゃ優先順位が低いつてわけ？』

『智也君、君って子は……あんなに高校時代に可愛がってあげたのに』

何が可愛がってただ。あんなものを可愛がってたなんて言うなんて、正気を疑うぞ。

まあ、今は放っておいて構わん。最優先事項はみなもちゃんだ！

『本当だつて！俺はみなもちゃんが彼氏を連れてきて、みなもちゃんは貴様にはやらん

！つてやるまでは誰とも付き合うつもりなんて全然！』

『……そう、なんですか？』

窺うような視線に何度も頷いて返すと、みなもちゃんがはにかんでくれる。

『じゃあ、信じますね。でも、困っちゃいました』

『……困ったって？』

『だって、それだと智也さん、ずっと恋人出来ないんだもん』

頬を染めて言うみなもちゃんに俺は首を捻る。みなもちゃんの言わんとしていることがいまいち……家族なのにかつてやれないなんて兄失格じゃないかよ！

「三上専用アンチマテリアルライフルの準備はまだか!?」「神の槍の発動を合衆国に要請するか」「毎朝あいつの部屋にぬめぬめしたタオルとティッシュを投げ込もうぜ?」「任せろ、量なら自信がある」「あんなに純粹無垢な幼馴染がいるくせに、か……血を見なければいけない時が来たようだ」「これは聖戦だ、三上」

殺意に会場が満たされる。○殺教室かなここは？

『信、お前の所為だからな』

『ここまでの破壊力があるなんて、さすが静流さんだよな』

反省の色が見えねえなあ。そういう事なら俺にも考えがある。後で謝っても許してやらないんだからな！

『……ていうかき、時間が押してるから早く食べてね？それとも今すぐ食べれない体になる？』

お、おう。別な意味で司会者がキレまくってらつしやつた。あの笑顔は限界突破一手前だ。逆らうのは止めようと、俺と信は言われるがまま目の前の料理を見る。

『ごたごたしてすみません。それで、白河さんのお料理の名前をよろしいですか？』
『ちよつとだけ特別なおにぎり、です』

人差し指を唇に当ててウインクする静流さんに、全員が卒倒しそうになると同時に俺様に視線をドスに変えて刺してくる。隣の長髪燃くやそ♪

時間がないから食べるやという、伊波のドS視線に促されておにぎりを手に取る。

『あれ？智也のおにぎり、少し小さくないか？』

『……みたいだな。なんでだ？』

ま、胃がきつくなってきたから正直ありがたいけど……と、思ったところでさっきの静流さんを思い返して、ようやく彼女の意図するところがわかった。

そつか、俺の体調を心配してくれていたんだな。正に女神の気遣い。同い年の親友とはえらい違いだな。

静流さんの優しさで握られたおにぎりを頬張ると、固め過ぎず緩過ぎず、塩を後からさつと振りかけたおにぎりは、どこか懐かしさを感じさせてくれる。

天辺から真ん中まで行くと……

『——え?』

そこに辿り着いて俺の口は驚きで震える。

話した事、なかったよな? 静流さんと何度も他愛ない話をしてきたが、これだけは覚えてる。俺は一度も話していない。話せるわけがないんだ。だって、俺にとつてそれは二人だけの宝物として閉まっておきたい……他人にとつては、なんてことのない愛しい日の記憶。

だから、これは偶然に過ぎない。わかつている。意図したことでも、ましてや思い出に土足で踏み込もうとしたわけでもないって。

わかつているから……

『智也?』

皆に背を向けて、口一杯におにぎりを頬張る。唐揚げの入った、油っぽいおにぎりを。『あく、塩の塊があつたわ。きついなあ、ちくしょう……』

しょっぱいなあ。こんなの、美味しいに決まつてる。まだ色褪せない、あの日の光景が目の前に広がって……愉しくて、嬉しくて、愛おしくて……いてえ。

信が俺の様子に気付いたらしく、それからは俺に話し掛けずに、トビーとトークを広げてなんとか場を盛り下げないようにしてくれた。

全部食べ終えて、落ち着きを取り戻せた頃、丁度いいタイミングで得点を伊波から催促された。

……参ったな。これは俺の完敗だ。

『得点がピエロ君5点、信君6点』

誰が認めなくても俺の心が認めてしまっている。このおにぎりは十点？

『智也君10点!!』

こんな点数に意味なんてねえよ。点数なんか付けられるほど、安くねえ。

俺の出した得点に一同が驚く。一番驚いていたのは静流さんだけだな。

『智也君、どうして？多分、美味しくないかもって思ってたんだけど』

静流さんの問いに、ああ、やっぱり知らなかったんだと安堵する。

おそらく、美味しいかもしれないという感覚で唐揚げを中に入れたんだ。ただ入れた

だけじゃ美味しくなんてならないのにさ。パティシエの腕は確かなんだけどな。

苦笑しながら、俺は静流さんに頭を下げる。

『ありがとうございました、静流さん』

きつと伝わらないであろう感謝の言葉。でも、言わずにはいられなかった。

あんなにも色鮮やかに、彩花とのデートを思い出させてくれた。俺の中にまだ生きていた。それを確認出来たことが何よりの御馳走だったから。本当にありがとうござい

ます、静流さん。あなたの偶然で、俺はいつだって隣にある幸せに浸れました。

突然の俺のお礼に戸惑った静流さんが、頭を上げさせようと慌て、理由に見当がつかない信は、あとで教えろよと訴えてくる。

そんな俺を泣きそうなのを堪えて、眉をハの字にして笑おうとしている誰かに気付くことも出来ずに。

女子力最強決定戦は結局みなもちゃんがトップのまま幕を閉じた。最後の種目まで競う事もなく。その理由は至極単純で、史上最低なものだけだな。

嫌な予感はしてたんだよ。ネタ枠を最後に持つてくるあたり悪意しかないし。あの自称ビューリホーキリングマシンめ、ロシアンパンなんて物を出しやがって。

ドリアンパン、バナ納豆パンはまだ許せる。気絶する代物じゃないからな。だがしかし、今回ののはあかん。密封された生地の中に、スピリタスで和えたシユールストレミングと猿の脳みそとエスカルゴのミンチが入っていて、ご丁寧に生クリームまで混ぜてやがった。あの味を思い出そうとすると、鋭い頭痛に襲われて記憶が蓋をする。超えてはいけない味の境界線を越えて一周半したかのようだ。

「現実をギャグマンガか何かと勘違いしているんじゃないのか、あの人は」

ロシアンパンで見事当選した俺は、口にした瞬間白目を剥き倒れ、泡を吹いて痙攣を

起こすという大惨事に陥った。念のために医療班を用意しておいて正解だった。じゃなければ今頃、とんでもない異臭を身に纏って彩花と対面し、鼻を摘まんで一キ口は距離を取られてしまふところだった。そんなことになつたら俺はシヨックで二回死んでしまふぞ、冗談抜きでな！

パイプ椅子を並べて寝転がりながら、ブレスケアを大量に摂取。1ケースでもまだ足りないんだけどな！

その元凶となつた人は何をしているかと言えば……

「ん……ふへへ、智也君、ダメよお……」

だらしない顔で、椅子に座つて長机の上で腕枕をして気持ちよさそうに寝ている。もつと罪悪感持つて看病してくれ。

どうしようもない人だなと、呆れて苦笑しながら呑気な顔を眺める。

こうしていると、少しだけ懐かしい気持ちになる。購買の仕事を手伝わされたあの頃、小夜美さんはよくこうして寝ていたっけ。二度と手伝いをしたいとは思わないけどな。

「……それで、いつまで狸でいるつもり？」

「あれ、バレてた？」

「高校の時も何度も狸になつてたからね、わかるよそりやあ」

ぺろつと舌を出して笑う加害者。年上でも殴つていい場面つてあるよな？

「いやあ、若い衝動に身を任せてそのままお姉さんの唇を奪うかなあつて思つて」

「俺の命を奪いかけた人間にそんなことしない。むしろ復讐される心配をするべきだ」

こうね、貞操観念とかしつかりして欲しいわけですよ。これが俺じゃなかったらどうなつていたことか……襲う側の命が。

「で、いいんですか？」

「なにが？」

「静流さんと一緒にいなくて。二人で遊ぶ予定だったんじゃないの？」

「あー、いいのいいの。じゃんけんで勝った私の特権だから」

何を言っているのかわからず首を捻ると、小夜美さんは馬鹿な弟を見るかのように微笑む。

「だから、この機会にもうそろそろ聞いてもいいかな？」

どくん、と心臓が一つ大きく鳴る。

甘くもなく、酸っぱくもなく、苦み走つた痛み。エスプレッソを一気に煽つたような苦みが、全身に広がるような感覚。

なにを？と、俺はいつものふざけた表情で聞き返せばはずだ。それに、小夜美さんは俺から意図的に顔を逸らしたように見えた。

「智也君は本当にずるいなあ」

心外だな。卑怯とは無縁な俺に対してなんてことを言うんだ。正直に生き過ぎて、馬鹿を見るような男ですよ俺は。

「わかっつて、あえて見ないようにしてるんだもん。それも、皆に分け隔てなく」

「差別しない良い男と受け取っておきましょう」

「差別と区別は違うけどね」

……なんだよ。これじゃあ本当に昔に戻ったみたいだ。子供扱いされていた高校の頃のように、少しだけ居心地が悪い。

「せっかく特権を貰ったからね、少しだけ意地悪してもいいかなって」

「充分虐められた後だけど？」

「あの程度じゃ智也君は参らないでしょ」

「さっきの惨状を目の当たりにして何を宣うか！」

「てへ♪」

頭をこつんと自分で叩いてウインク一つ。小夜美さんじゃなかったら、抽腸の刑に処しているところだ。まあ、小夜美さん以外にこんな事を起こさないけどな。

「まあ、そんな事はどうでもいいじゃない」

「誠心誠意の土下座くらいはしてくれ」

謝罪の気持ちちつて大事だからな。クレームだつて、形だけでも謝っておけば八割は解決するんだぞ。

「ほらね、やつぱりずるい」

「どこが？」

「そうやって、自然と話題を逸らそうとしているところ。あまりに自然だから、みんな流されちやうのね。でも残念、今日は流されてあげないよ」

いつもと違う小夜美さんの態度。彼女の目が、今日は逃げ道を用意してあげない、と雄弁に語っている。

内心で舌打ちをする。元から小夜美さんはこういう人だった。亡くなった弟さんともこうだったのか、彼女は年下の男の扱いがとにかく上手い。追い込むのも、和らげるのも。それが彼女の魅力でもあるし、同時に脅威でもある。

「君が高校生の頃から、気付いていたよ？でもそこに踏み込めなかった。踏み込んじやいけない気がしていたの。智也君と信君と唯笑ちゃん。三人の間には割って入ることが出来ないって、他人が簡単に入りこんじやいけない繋がりがあるって……そう諦めていたのね。私以外のヒロインになりたい女の子達も、ね」

そんな事はないと否定すれば、小夜美さんはなんと切り返して俺の逃げ道を塞ぐのだろうか？いや、そもそも小夜美さんは逃げなんて許してくれていない。

小夜美さんは確かに笑っているのに、その眼は俺の些細な動揺も見逃すまいとしている。

「多分、あたしだけじゃなくて、みんな気付いてるのよね、智也君が友達以上のラインから道を塞いでいるって。気付いていて、そのラインを超えないようにしているのね。自分から近づくと、あなたは逃げてしまうつてわかつているから」

優しい笑みと慈しむような目を向けられ、俺は彼女から目を逸らす以外に抵抗できる術を持ちえない。

ここで反論してしまえば、彼女の言葉を肯定していることになるし、その逆もまた然り。なぜなら、彼女の言葉は間違つてなどいないのだから。

「だからみんな待つているの。智也君から自分に歩み寄つてくれることを。もちろん、私もそうよ」

悪戯つ子のような憎めない表情。小夜美さんだつて十分ずるいだろ。

人間、誰しもが自分だけの秘密を心に抱えて生きている。それを隠すことが悪なら、この世の中に生きる全ての人間が糾弾されるべきだ。

だが、彼女の言いたい事はそうじゃない。本質はそんな屁理屈では説明してはいけない、俺の直視出来ない純粋な感情……：それを見透かしているんだ。見透かして、それでも俺の答えを待つ。ほら、小夜美さんだつてずるいじゃんか。

ずるくて何が悪い？踏み込めない場所を持っていて当たり前だ。人の暗黙のルールだろ、どこまで踏み込めばいいかを探って、踏み越えてはいけないラインを引いて、それ以上は進んではいけないんだと折り合いをつけて、諦めて……それが相手を尊重するってことじゃないか。最低限のルールだ。

相手を傷つけたくない、傷つきたくない……そう思いやるからこそ人間関係は成り立つんだ。それが現実で、現実には青春ドラマのように真っ直ぐではない。大人になればなるほど身に染みていく常識だろ？小夜美さんだつて知ってるでしょ、俺より早く大人になったんだから。

それを上辺だけの関係だなんて言わせない。そんなことを言うのは物を知らない時分の子供だけだ。そう、俺は何も間違えてなんて——

なんて見苦しい言い訳だと、自分に嫌気が差す。真っ直ぐに俺を見てきてくれた人に対して、俺は詭弁で自己弁護をしている。未だに俺は演じようとしているのだと、愕然としてしまう。

何も言えずに、心の中だけで反論する俺に、小夜美さんはそつと手を伸ばして頭をゆつくりと撫でてくる。

少しこそばゆくて恥ずかしいそれを、俺は振り払えずにされるがまま。

ああ、そういうえばと思ひ出す。高校の頃から俺は、この人の前で大人になれた事が一

度もなかったな、と。

「でもね智也君。もうそろそろ、みんなの優しさに甘えるのは駄目よ。いつまでも向き合つてあげないなんて、生殺しも良い所。智也君の優しきは、まるでお風呂みたい。いつまでも浸かっていたいけれど……でも、ずっと浸かっていたら逆上させて倒れてしまふ。だからね、倒れてしまう前にちゃんとあなたは皆を覚ましてあげなきゃ駄目なんだよ」

「……そんなの、俺だって」

「うん、そうね。智也君はちゃんとわかつてるよね。なら、お姉さんは君の今後を安心して見てあげられるし、君の大切を話してくれるのを待つていられるなあ」

俺の頭から手を離して立ち上がり、ゆっくりと伸びをする。どうやらお説教タイムは終わったらしい。

「あくあ、特権を無駄に使っちゃったかな」

「小夜美さんは無駄ばかりじゃん」

「おつ、生意気だなあ少年」

「もう少年じゃないけどね」

俺の憎まれ口に、少しだけ寂しそうに笑う。

「そうだね、智也君はもう少年じゃないんだよね」

もう用事は済んだらしく、小夜美さんは出ていこうとして、その直前で足を止めた。
「ねえ、智也君」

肩越しに魅惑的な瞳を向けられ、俺の鼓動が少しだけ止まりそうになる。

「私はもう少しだけ待つてあげるから。そうだな……30まで、かな。それまでに君が隠している本当を話してくれるのを待つてあげる。それ以上は、待つてあげないんだからね？ 特別サービスだよ」

そんな小夜美さんの言葉に、ああ、確かにこれは逃げられない。なんて俺は苦笑してしまう。きっと俺が小夜美さんに全てを話す時が、そう遠くない未来に訪れるだろう。

——偽物の俺の幕を引いた暁には、必ず。

虫の知らせというものを体験したことがある人間は多いはずだ。ふとした拍子に感じる、最悪の予感。だが、虫の知らせよりも確実な物が俺と伊波の目に映った。

もうそろそろプロムの準備をしなければと言う時のことだ。俺は中学の頃に何度か見た高級車が、テントの裏の駐車場に停まるのが見えた。ワインとか常備してそうなその車から、無駄のない所作で燕尾服の男性が運転席から降りる。

そこまで確認して、俺と伊波は顔を見合わせて頷き合い、即座にこの場から離脱しよ

うと回れ右をしたのだが……

「ハ〜イ、久しぶりじゃない？みかみん、いなみん」

俺達二人の肩に回される両腕。死神の鎌のほうが救いがある。というか、そんな呼ばれ方したことないよな!?

「智也君、今のおかしいよね？まだ車から出てきてなかったのに、どうして僕達捕まってるの？」

「死神だからだろうよ」

おそるおそる振り返ると、満面の笑顔の黒須がそこにはおわした。お、おう、御機嫌が良くてなによりだ。

「ひ、久しぶりだなあ、黒須。中学の卒業式以来か？」

「ひ、久しぶりだね黒須さん。げ、元気だった？」

とにもかくにも挨拶だけでもしておかなければと、無難な挨拶をしたわけだが、満面の笑みでただ俺と伊波を離そうとしない。おいおい、俺達二人と浮気しちゃうつもりか？とんだ子猫ちゃんだぜ。なんて吐こうものなら、阿鼻叫喚待ったなしとなるだろう。

死神の鎌に捕まって身動きの出来ない俺達は、ただ黒須の次の言葉を待っただけだ。死の宣告だとしても、それしか俺達に出来ることはなかった。

「……ワイン」

ぼそりと呟かれた声は、死の吐息と共に耳に届く。

「わ、ワインなら酒屋に行けばあるぞ。な、なあ伊波？大学の近くにワイン専門店とかあったか？」

「た、確か駅前にあつたよ。えっと、あれはどこだつたかなあ？」

知らぬ、存ぜぬ、省みぬ！と、どこかの聖帝様のような精神を貫こう。なあに、まだ慌てるような時間じゃない。ほんの少し死期が背後にあるだけだ。

その死期が、さらに機嫌良く歌うように喋り出す。

「そうねえ、ワインがとくつても飲みたい気分かしら」

「それなら俺達が「水を君達二人を材料にワインにしてもダイジョウブ？」主犯は伊波です。すので、お許しを」

「手首が捻じれて千切れそうな手のひら返しだね!？」

無理無理無理無理！こんな威圧だけで人の命を潰せそんな奴の追求なんて振り切れるわけないって！ベテラン刑事の取り調べなんておままごとにしか思えないもんよ！

「す、少し落ち着こうよ黒須さん。君は誤解をしているんだ。まずは僕の話をご飯を食べながら聞けば、僕が無実な事はすぐにわかるよ」

「清々しい裏切りだなテメエ!？」

「おまいうだからね！他に生き残る方法がないんだからしょうがないでしょー！」

ぎゃーすかと黒須の腕の中で言い合う俺達を、黒須はサド以外の成分を取り払った顔で、醜いプランクトンの喧嘩と嗤う。狂気半端ねえわ。

くつそ、一応この状況から抜け出す手段は一つだけある。中学が一緒の奴なら全員が知っている黒須の特性。だがしかし、惜しい事にその特性を発揮するために必要なあいつがない。

死神の鎌を突き付けられているこの状況じゃ、あいつを呼び出そうにも呼び出せない。千羽祭に来ているはずだが……クソッ！

ああでもない、こうでもないと思案していると、死神黒須が抑揚のない声で呟いた。

「トイレは済ませた？ 神様にお祈りは？ テントの隅でガタガタ震えて命乞いをする心の準備はOK？」

とんでもねえシスターが生まれてやがる。お前はあの神父の娘かよ。サーチ&デストロイされちまうよ！

この殺戮シスターを抑える手立てが今の俺には……

諦めて全身から力が抜けたその時、日照り続きで不作が続いた村に雨が降るかな、そんな恵が俺と伊波に降り注いだ。

「あ〜！ 智ちゃん！ どうして電話したのに出ないんだ……よ、う？」

十メートル程離れた位置から、唯笑と信の姿。

黒須に捕まっている俺を一目見て状況を把握したであろう信は苦笑していたが、俺へと頬を膨らませて手を挙げる唯笑は、処理能力が落ちてフリーズしたデスクトップのようにならまっている。

「ねえ、智也君？」

「なんだ？」

「なんか、今坂さんの様子がおかしいんだけど。グリ〇のシンボルみたいな恰好のまま固まっているよ？」

「まあ、だろうな。それよりも伊波、吉報だ」

「なに？」

黒須の両腕、死神の鎌から殺気が消え去り、俺達の肩と首は無事に解放された。

「俺達の救いの生贄がきた」

「はい？」

唯笑がなんでエラーを起こしたかだって？そんなもん、藍ヶ丘第二中学校の俺と同じ世代なら誰もが知っている、当時の藍ヶ丘第二中学校の常識だ。百聞は一見に如かずとも言うし、これから起こる異常事態を目の当たりにすれば納得するさ。

唯笑の存在を認識した死神は、もう俺達の事なんてその眼中に映すこともなく、静かに身を沈めてクラウチングスタートの姿勢を取る。

そんな黒須とは裏腹に、唯笑は黒須の体勢を確認する余裕もなく、あいつにしては珍しい真顔で脇目も振らずに来た道を全速力で引き返す。

「は？ちよ、どうしたんだよ唯笑ちゃん！」

唯笑にとつてどれほどの緊急事態か理解出来ない信は戸惑い、その脇を漆黒の弾丸が奔る。まさに雌豹と称するに相応しい。久しぶりに唯笑に会って野生が蘇ったようだな。

「ゆえゆえ〜!!」

その様はまさにシマウマを捕食する豹のそれだ。憐れなシマウマはあえなくその爪牙と牙を突き立てられ、呼吸もままならなくなっている。ぶっちゃけ、黒須に認識する間もなく抱き締められ、その肢体をいのように弄ばれている。

「ちよ、黒ちゃん、やめ……」

「はあく、ゆえゆえだあく。あたしのゆえゆえだあく」

頬を擦り合わせ、手を太ももに這わせるなんてのは序章だ。耳を甘噛みして首筋を舐めて、更にはアレをアレして……うむ、今なら国家権力を使って奴を檻に閉じ込められそうだな。

「智也君、あれってどういうこと？」

黒須のあらゆる豹変に伊波が戸惑う。そりやそうだ。あんなに蕩け切った顔をした黒

須をこいつは見たことがないだろうからな。

「どういう事も何も、見たままだ。黒須はな、中学の頃から唯笑が好物なんだよ。萌え萌えをもじってゆえゆえって呼んでいるぐらいだしな」

「好物って、捕食しちゃってるじゃん」

「間違つてないだろ。まあ、唯笑のおかげで俺達は解放されたんだ、せめて心を込めて弔つてやろう。黙祷」

「智ちゃんのバカア~~~~! 黒ちゃんがいるなら千羽祭に来なかつたのにい~~~~! ！って、そこはダメだよお!!」

「おいおい、普通ならそこまでは俺も許さん……ところだが、今だけは許してやろう。感動の再会に水を差すのも悪いしな。」

中学の頃は彩花という保護者が、適度なところで黒須から唯笑を守っていたが、残念なことに頼れる身内は今も不在だ。俺に黒須を止めることはほぼ不可能だし、もうどうすることも出来ない。

そもそも、黒須が唯笑に絡むようになったのはいつ頃だったか？ 確か、俺と彩花が付き合い始めてからだったような？

「ふふ、とても嬉しいのでしょうね」

いつの間にテント内にいたのか、執事の淹れた紅茶を足を組んで優雅に飲んでいるお

嬢様の声。

「よお、そつちも久しぶりだな、花祭」

「ええ、お久しぶりですね、三上君」

面倒な生き物がもう一匹増えたよ。ジイヤさんという執事の前や、公の場では完璧なお嬢様の花祭果凜。だが、級友などの前ではごく普通の女子となるといふ、心理学、哲学、倫理学の観点から見ても、とてもよろしくないペルソナ（仮面）を被る馬鹿だ。

なぜよろしくないかと言えば、話が長くなってしまうので割愛する。あまりに被る仮面の性質が違い過ぎると、精神的にバランスを崩し、崩壊しても不思議じゃないらしい。まあ、本人が覚悟を持って演じているのだから何も言えんが。

国内のショーモデルの中でもトップクラスに位置する花祭果凜と、タレントモデルとして活躍するカナタの二人を呼んだのは他でもない、野外でのプロムのゲストとしてだ。

ちなみに、ショーモデルというのは雑誌に掲載されるような仕事もするが、主にファッションショーで活躍するモデルの事らしい。黒須は身長的にショーモデルは難しいのだそうだ。

「智也君、花祭さんと知り合いだったんだ」

俺と花祭が同じ中学なのは知っていただろうが、面識があるとまでは思っていないかつ

たらしい。

「……まあ、ちよつとな」

ちよつとなんてもんじやない。俺は間接的な付き合いしかないが、花祭は黒須とは違つて彩花と仲が良かった。親友、とまではいれないがそれに近い間柄だったはずだ。

「それよりも、お前が黒須を止められないか?」

駄目元で聞いてみたが、俺の問いに花祭は惚れ惚れするような完璧な偽装を施した笑みで応える。

「それは難しいですね。なにせ、彼女にとつて今坂さんは理想なのですから」

うん?ちよつと耳を疑う単語が出てきたぞ。理想?あの嫁の貰い手を選んでやるのに苦労するアホが?

「そう不思議な事でもないはずですよ。つまり、彼女は私の逆であると言うだけです。意味はお解りでしょう?」

人を喰つたかのような言葉に俺は舌打ちで返す。

この馬鹿は未だにそんなのかと、頭を引つ叩きたくなつてしまふ。

花祭果凜の言わんとしてゐることは単純明快で、だからこそ胸糞の悪い言葉でしかない。黒須が唯笑のどこに理想を見出しているのかは知らないが、花祭もつまりそんなのだ。

花祭果凜、こいつも中学から一つたりとも成長しちやいない。こいつは今もそうだと暗に言ったのだ。今もまだ、自分は松月彩花が理想だと――

中学の頃、彩花が困ったように笑って話したことがあるから知っている。自分に憧れてるなんておかしいよねって。

「随分と邪険そうな顔をなさいますね」

「元からこんな顔だよ」

花祭から顔を逸らして彩花を思い出す。花祭が彩花の中に何を見て憧れたのかはわからないが、自分を理想にして欲しいだなんて微塵も思っていなかったはずだ。

彩花を理想だと言うのなら、彩花の顔を曇らせるような事だけはして欲しくないものだ。

「唯笑も困ってるよお〜!」

「黙って贅になつてろ」

お見せ出来ないよ状態の唯笑。お前の犠牲で俺と伊波は明日を生きられる。

「ねえ〜!?!ゆえゆえくれたら恩赦で釈放してあげてもいいわよん?」

「ははは、一年だけだぞ」

「だけって時間じゃないよ智ちゃん!?!」

さあ、それじゃあ唯笑のあられもない姿を見て元氣も出たことだし、気張ってプロム

の準備をするか！

閉会式が恙なく終わって、私達は野外の特設ステージへと稲穂さんに案内された。

特設ステージは、後ろ半分に立食と歓談出来るスペースがあり、中央に大勢の人が自由に踊れるスペースがある。

講堂でのプロムも基本的には同じ配置らしいのだけれど、野外と違うのはお酒がある事と、ドレスコードがあるという事。

つまり、野外は未成年専用、屋内は成人以上専用のプロムとなっているわけですね。

千羽祭の興奮が収まっていないのか、私も含めて一様に活気が冷めやらない。

一蹴と二人で回った今日の千羽祭を思い出すと、こんなに楽しかったデートは初めてだったように感じる。

心霊研究会が催していたお化け屋敷は、ポイント毎に心霊映像を見せられ、映像の終了間際の上から髪の毛の長い女性が覗いている事に気付かせられ、ほとんどの人が悲鳴を上げていて、中には気絶する人も。一蹴は大丈夫大丈夫と震えた声と手で気丈にしていたのだけれど、なんだかその様子が可愛くて恐怖心を感じる余裕なんてなかったけれど。

野外にあつたお洒落なかき氷屋さんでは、私と一蹴の同級生の木瀬歩さんが忙しそうに働いていて、木瀬さんの弟妹？と一緒にお店を切り盛りしていて驚いちゃった。木瀬

さんは、店主は急用でご主人様に呼ばれているとかなんとか言っていたけれど、正直何を言っているのかわからなかった。どういうことだろう？

あ、そういうえば道行く男の人達がなぜか一蹴を睨んでいたりと、唾を吐いたりして妙に殺伐としていたけれど、あれはどういうことなんだろう？三上さんの手先？

一蹴と一緒に一つのわたあめを食べあたり、たこ焼きをあくんしたり、カップル限定リンクチェックというイベントに参加したり、私も一蹴も笑顔が絶えない一日だったように思う。叶うのなら、今日が何度も繰り返して欲しいと真剣に願ってしまうほどに。

楽しくて嬉しくて幸せで……幸福ばかりの眩い一日だったから、だからかな？だから、私はただ一つの違和感が気になって仕方がない。真っ白なお皿に、一滴のソースがこびり付いていて、その一点が気になって仕方がなくなってしまう感覚にそれは似ていた。

あれは、一蹴がお世話になったからと、渋々三上さんに挨拶をしようと、三上さんの休憩に合わせて野外ステージの控室を訪れた時の事だった。

「あ、あの……その節は、その……」

スタッフに配られるお弁当を食べながら、三上さんはさも興味なさげに耳だけを一蹴

へと向けていた。

私達が来たことを伊波先輩は喜び迎えてくれて、今は空気を読んで少し離れたところでほたる先輩と一緒に、仲睦まじくお昼を取っていた。

三上さんへとお礼を言う。それだけの事なのに、どうしてか一蹴は中々言い出せないまま、何度も言葉を詰まらせては黙ってしまい、また最初からやり直すという事をさつきから繰り返している。

多分だけど、一蹴って三上さんにどこか苦手意識とは違うけれど、認めたくない部分を持つているのかもしれない。それが邪魔をして素直になれないんじゃないかな？三上さんの名前を出すと、せんぶり茶を飲んだように苦々しい顔をするし。

そんな一蹴の様子に辟易したのか、三上さんはため息を吐きながら立ち上がって、私達の横を通り過ぎていく。

「あ、ちよつとー！」

さすがに怒らせてしまったかと焦り、一蹴が追い継ろうとすると、三上さんは一蹴を真っ直ぐ見据えて、いつもとは違う穏やかな口調で声を掛ける……一度も私と目を合わせようともせずに。

「鷺沢、別に無理して言葉にするなよ。お前に無理させる為にした事じゃない」
年上らしい、後輩を可愛がっている先輩のような顔。まるで似合っていないその顔

が、私には少しだけ悲しく映った。

いつもの三上さんなら憎まれ口の十数個は叩くはずなのに……あのどうしようもなく腹が立つ言葉がない事が寂しい。そう感じてしまう私はおかしいのかな？

三上さんの言葉を素直に受け入れられなかった一蹴が何かを口にしようとする、その言葉を無理に聞かないようにしているかのように、背を向けて控室を出ようとしたその間際。背を向けたままで三上さんの言葉が届いた。私の知らない大人の声で。

「悪い、これから用事があるから行かないといけないんだ。それと、鷺沢？お前に一つだけ頼みがあるんだ」

「……なんすか」

上手く言えない自分に腹を立てて不貞腐れた顔をする一蹴。そんな一蹴が可愛くて、少しだけ笑ってしまった。

「お前、今度から陵を家まで迎えに来い。バイトの時は、終わった後でもいい」

微笑んだまま、私は固まっていた。三上さんからの一蹴への頼み事……おかしい事なんて何も無い、それどころか嬉しいことのはずのその言葉。

「いいのかよっ？」

「俺が頼んでいるんだ、良いも悪いもないだろ。彼氏として当然の仕事をしろってだけの話だ」

そっかあ、これからは毎日一蹴と一緒にいられるんだ。家庭教師の日でも、一緒に……一緒に帰って、手を繋いで、その日あった事を話して、どちらかの家に泊まつたりも出来る。

良い事じゃない。最近はずっと一蹴と二人で恋人らしいこと何一つ出来てなかったんだもん。想像するだけで心がスキップしてしまふ。

そうだ、今度教わった唐揚げを作ってみよう。コツは教わったし上手く出来るはず。デートも一杯しよう。少しすれば冬休みだし、クリスマスやお正月っていう恋人が温かくなるイベントが待ってるんだもん。毎日会えるなら沢山……たく、さん……

考えれば考えるほど、私の頭に見たくもない映像が過つてしまふ。ノイズのように邪魔される光景。三上さんと下らない言い合いをしながら帰る車内……たったそれだけの、どうでもいい光景が。

そう、どうでもいい光景なんだ。私にとっても、そして三上さんにとっても……
「返事はどうした、鷺沢」

「あ、ああ。わかった、必ず迎えに行く」

「なら良い。じゃあ、久しぶりのデート楽しんで行けよ」

今までの事がなかったかのように、素っ気なく三上さんは控室から立ち去って行った。最後まで私と目を合わせることもないままで。

『みんな千羽祭お疲れっしたあ—————!!!』

お疲れ—————!!!

考え事をしていていつの間にかステージ上に加賀先輩がいて、両脇には目と口の部分に穴が開いている紙袋を被った、怪しげな二人が経っている。

『閉会式も終わって、お客の為の千羽祭は終わったけど、俺達の千羽祭はこれからつてこ
とで、早速ゲストを呼ぶぞ teme 等!!!』

ゲストという言葉に熱狂するプロムに参加している方々。

ゲストは誰なんだろうとわくわくしてしまふ……はずなのに、私だけがどこか取り残されているかのような感覚に陥っている。

不意に左手に感じる温もり。一蹴が子供の様な無邪気さで、誰なんだろうな？ っ
笑っている。それに、楽しみだねって私は笑顔で返す。プログラムされた機械の様に感
じて、自分で自分が気持ち悪い。

最高の一日、そのはずなのに。

『今日のゲスト、それは——ッ!!!』

両脇の二人が紙袋を投げ捨て、片手を挙げて観客へと応える。

『私、カリンと!』

『カナタちゃん登場！』

二人の声と姿に、否が応にも会場が歓喜の渦に包まれる。

一蹴も同じで、ロックバンドのライブの様な盛り上がり方をしている。浜咲の先輩だから何度か面識はあるけれど、遠い存在過ぎて関りはあまりなかった。

最近ではテレビでよくピックアップされているお二人。確か、今度カナタさんは映画で主演をやるはずで、カリンさんはパリの四大コレクションの内の一つに出るとニュースで報じられていた。

人氣急上昇中の二人がまさかゲストで来るだなんて誰も予想していなかったらしく、熱気が収まるどころかグングン増すばかり。

そんな熱狂の中、私はどこか客観的にしかステージを見ることが出来なかった。

講堂から離れた、キャンパス内のベンチでビール片手に一人で座っている。

今頃は白河ともう一人のゲスト、信の知り合いの彼女だという日本が誇る若き天才ピアニストが、ジャズやクラシックを奏で、その音色に酔いしれながら皆が踊っているのだろう。

ピアニストの名前は忘れたが、信の知り合いの名前は確か春……なんだっけ？ピアニストにもそういうえば、夏だか冬だかって漢字があった気がする。ピアニストはやたら不

愛想で高飛車な印象だったけど、そんな彼女を窘める恋人兼マネージャーの男は、物腰の柔らかい仕事が出来るとする男の雰囲気醸し出していた。

野外ステージの方は上手くやっているだろうか？なんて、心配は野暮だな。黒須と花祭がいるんだ、俺以上に盛り上げ方くらい心得ているだろう。心配するだけ損だ。

あつちはDJを用意しているし、クラシッくな講堂とは違って、さぞパリピっていることだろう。まじ卍だわ。意味は知らんが。

ビールを煽つて一息。仕事の後の一杯に取りつかれる社会人の気持ち少しだけわかる。こりや、麻薬だわ。疲れた体に、アルコールが染みていくのがこんなに気持ち良いだなんて知らなかった。就職したら、冷蔵庫にビールは必須だな。

キャンパスまで聞こえる歓声が熱を帯びていて心地良い。寒い季節には丁度いいな。あの二人はちゃんと楽しめているだろうか？久しぶりの二人きりの時間、俺が邪魔をしてはいけないと、空いた時間に二人が来てもあえてあまり取り合わないようにした。

もう、俺が支えてやる必要はない。兄のように慕われるのは昨日まで、あとは鷺沢に全部背負わせればいい。俺は鷺沢の代用品でしかないのだし、元よりそのつもりだった。

「これでいい、あとはいつもの日常に戻るだけだ」

今になって考えると、良い事なんて何もなかったしな。

少女漫画を集めていることがばれるわ、毒舌ばかり吐きやがるわ、複雑なように単純な問題で馬鹿みたいに悩むわ……すぐに泣いて、なのに折れなくて、強くあろうとする嘘の笑顔を張り付けて……

ほらな、良い事なんてなにもない。あいつと過ごした時間は苦痛ばかりで、楽しかったことなんて何も無い。

あいつを送る時間は無駄だったし、嘘の笑顔を剥がすのは時間を浪費したし、挫けなように支えるのは徒労だったし、泣き崩れるあいつを抱き留めるのは苦痛でしかなかった。

ここ最近の出来事を思い出しながら月を見上げる。

雲一つない空に真っ白な月。綺麗な丸い月がキャンパスを照らす。

「ただまあ、起爆剤にはなったよな」

陵は弱いくせに精一杯強がってみせたんだ。なら、強がりの先輩である俺が立ち上がれなくてどうする。このままじゃ情けないって、彩花をがっかりさせちまう。

元々、今年こそはって密かに心に決めていたんだ。逃げる言い訳はいくらでも思いつくが、立ち向かう理由は少しだけ。その少しで充分だ。年下に貰った理由つてのが情けないが、それも俺らしいってもんだ。

あの日から俺は偽物のままだ。唯笑も信も知らない、偽物の俺が歩んできた数年。偽

物の俺が俺を演じ続けてきた。

この数年の俺は偽善を行い、偽悪で嗤い、偽り言を喋り、自分を偽称し、罪を偽装し、ありとあらゆる物を偽で埋め尽くして、臆病な子供のままの本物を匿ってきた。

奥深くに引き籠り、時折彩花への想いに寄り掛かつては泣いてばかり。情けない男だ。愛する価値もない。

価値のないそいつを、どうしても誰にも見せるわけにはいかなかった。だから俺は誰にも破られない骨格を身に纏う。

馬鹿で何も考えていないように、誰かに優しい振りをする、彩花が愛してくれた俺を侮辱するような過去の自分をトレースして騙し続けてきた。

だが、いい加減それも終わりだ。偽物は所詮偽物、永遠に存在することなど出来やしない。偽物の人生に幕を引き、臆病で弱虫で泣き虫な本物を舞台に引つ張り出す。鍵をぶち壊し、泣いているそいつを殴りつけて引き摺っていく。

弱虫で良い、臆病で良い、泣き虫で良い。ありのままの馬鹿を立ち向かわせて、偽物はお役御免ってわけだ。

そうして、何事もなかったかのように、誰にも知られずに本物とバトンタッチしてしまえば世は事もなし。

小娘と小僧が根性を見せたんだ、俺だって格好悪くても、情けなくても、小さな根性

を見せるべきだろ。そうじゃなければ、二度と本物は立ち上がれない。俺は、俺でいられない。

「だよな、彩花」

お前への想いだけは嘘にしたくないから、惚れた女の前で位格好つけて見せるさ。

一気にビールを煽って月に缶を掲げる。

真つ白な月に、俺の決意を捧げるように。

「お一人ですか？」

そんな俺の様子がおかしかったのか、声が笑っている。俺の目の前へと歩いてくるその影は、俺を見つけたことが嬉しいのか、はたまた別な理由なのか、上機嫌に揺れている。

「いつからいたんだよ？」

「一気飲みしたところからです。それよりも、お一人で寂しそうですね」

「ああ、ダンスをする相手に振られてな。だからやけ酒してるんだ」

「まあ、お気の毒ですね。では、そんなお気の毒な貴方を慰める為、私がお誘いしてもよろしいでしょうか？」

月のように穢れない綺麗な手が差し出される。普通、男が誘うもんだけどなど笑いながら……

「仕方ない、慰められてやるか」

ほんの少しだけ懐かしいその手を、アルコールに身を委ねながら取る。

「言っておくが、俺はダンスなんて知らないぞ?」

「ええ、知らないという事を私は知っていますから大丈夫です」

胸に手を当てて誇らしげに言う彼女がおかしくて、二人で笑顔を向け合う。

「おかえり、詩音」

「ただいま戻りました、智也さん」

夜空の月と見紛うばかりの綺麗な髪を風に靡かせながら、この日俺の愛すべき級友が帰ってきた。

正直、クラブダンスは苦手だったけれど、一蹴と音楽に合わせてめちやくちやに体を動かすのは気持ちよかった。単純に楽しかったのもあるけれど、心にあるしこりを身体を動かすことで振り払えるような気がしていた。

最初は周りと同じように、見よう見真似で踊って、慣れてきたらいつの間にかどう動かせば良いのかわかってきて、そこからは私も一蹴も向かい合って好きに踊っていた。

そうしてどれ位踊っていたのか、体力のない私は一蹴よりも最初に疲れ切ってしまった。ちよつとだけ飲み物を飲んでくるねとその場を離れた。

一蹴も一緒に行くと言ってくれたけれど、あまりの混雑で二人が移動する隙間はなかったし、心から楽しんでる一蹴を連れ出すのは心が引けて、すぐ戻るからと一人でその場を離れた。

歓談スペースからダンススペースを見ると、皆が日常を忘れて、今だけの特別に浸っている。歓談スペースには人がまばらで、飲み物を少し飲んでではなくダンスへと戻る人が多い。

カナタさんとカリンさんのライブパフォーマンスも、さすがプロと言うべきか、やたら堂にいついていて、別世界の人達なんだなあって再認識させられると同時に、同じ浜咲学園にいたんだって誇らしくもなる。

体の熱が飲み物を飲んでも引かなくて、少しだけいいよねと野外ステージの外へと出る。一蹴にはすぐに戻ると言っていたけれど、もうちよつとだけ熱を冷ましたい。

ゆっくりと歩きながら、キャンパスの風景を眺める。

昼間とは違う静かなそこは、少しだけ夜の公園のような寂しさがある。

夜空を見上げると、真ん丸の真つ白な月が浮かんでいて、一蹴と一緒に眺めながら散歩したいなって思った。うん、今度一緒にお月見するのもいいかもしれない。大人になつたら、星空が綺麗な高原に二人で旅行に行きたいな。

その時の私達はきつと今よりもお互いを近くに感じられる二人になっている……そ

んな幸福に頬が緩む。目が眩むような未来の幸福に恍惚しそう。

熱に浮かされた私は、すっかり忘れていた。しこりは決して熱に溶かされたわけではなかったことに。忘れたままなら、それで私は幸せでいられたのに。

誰もいないはずのキャンパスの隅。そこは木々で覆われていて、人があまり寄り付かないような場所。そんな場所から、楽し気な笑い声が二つ。

誰かいるのかなと、木の幹に隠れるようにしてそこを覗く。覗いてしまう。

月明かりに照らされた、二人だけの為に誂えられたかのような、お伽噺の中のステージを……

「——ッ!?!」

月明かりが映し出す二人。女性の方は、まるで物語から出てきたお姫様のように綺麗で、同性の私が一瞬あまりの美しさに目を奪われてしまう。青いドレスが彼女の髪に良く映えている。あの美しい髪は染めて出来るものじゃない、天然の宝石のよう。

その女性とは対照的に、男性の方はめちやくちやな動きでお姫様を振り回す。

品性の感じられない、騎士とは程遠い村人。相容れない二人のはずなのに……

くるくる、くるくると踊る二人。時に男性が変顔をしたり、お姫様をその名の通りお姫様抱っこして回ったり跳ねたり。

正反対の二人が、同じ笑顔を向け合って今この時の逢瀬を大切にしている。

相容れない身分だからこそ、正反対の雰囲気だからこそ、その調和が何よりも美しい。そう、この二人は神が初めから決めていた番（つがい）だと誰かが嘯いても疑う事すら出来ない。月明かりの下、緑の上で自由に踊る二人は、美しい一枚の絵画からそのまま現実に抜け出したかのように……

「なあ、そのドレスって自前か？」

「当然です。似合っているでしょうか？」

「似合っていないって言えなくて残念だ」

「つまり？」

「……わざと濁したんだ、追求するなよ」

「つ、ま、り？」

「ああもう！似合ってるって言っているんだ！」

「……あ、ありがとう」

「言わせておいて照れるなよ！」

「いえ、直接言われると思っていたよりも、その、嬉しくて……」

「そ、そうか。で、招待状はどうしたんだよ？招待状がないと入れないんだが」

「稲穂さんが用意してくれました」

「ま、あいつ以外いねえか。それよりも折角だ、アレやろうぜ!？」

「アレとはなんですか？」

「ほら、フィギュアスケートのペアでよく見る、片手で相手を持ち上げるやつ！」「リフトのことですね」

「お、この位軽ければいけるかも。よし、チャレンジするか！」「ちよつと智也さん無理ですから！素人が簡単に出来るわけ！」

嫌がるお姫様を持ち上げようとして失敗し、二人は緑の上に倒れ込む。お姫様が怪我をしないように抱き留めながら。

「もう！だから無理って言ったじゃない！」

「いやあ、いけると思ってたんだけどな。ほら、かめは○波が今なら打てるかもって、一年に一回は一人で部屋でやってみたりするじゃん」

「またそうやって意味のわからないことばかり！昔から智也さんはそう！」

「ははは、詩音口調が素になってるぞ」「誰の所為だと思ってるの!?!」

そうして、お姫様は怒りながら、村人は屈託なく一緒に声を上げて笑い合う。

(な、んで?)

一連のやり取りを目に焼き付けながら、私は音を立てないように気を付けながらその場から離れ、十分に離れてから脇目も振らずに走る。

あれだけ冷まそうとしていた熱が、色を変えて私の体中を熱くする。

真つ白になりそうな頭の中に、一つの光景が映る。その光景を私は必死に消し去ろうと一蹴を想う。

私、何を考えたの？三上さんと、詩音と呼ばれた女性の逢瀬を目にして何を考えているの!?

あり得ない、あつてはならない。一蹴だけじゃない、リナちゃんだけじゃない、これまでの全てに対する裏切りの幻想。

——詩音さんというお姫様と入れ替わって、私が三上さんと……——

最低で最悪で醜悪な幻想。現実にはならない、してはいけない幻視。

うるさい呼吸、鳴り止まない鼓動、崩れ行く足元。

違う、こんな感情なんて知らないし、この感情の名前を聞いたこともない。

——ほんとうに？

わからないわからないわからない！一蹴……そう、一蹴と会えば、抱き合えればきつとどうでもよくなるような、そんな些細な事なの！

——嘘、ほんとうは思ってしまったのでしょうか？

そ、そう！多分お兄さんのような三上さんが、誰かに取られちゃうように寂しかっただけ！まだ小娘だもん、そうだよ。

——どうして……

今日は一蹴と一緒に朝までいよう。一蹴が傍にいてくれればすぐに忘れられる。忘れさせてくれる。

——どうして私がそこ（お姫様）にいないの？つて。

違う違う違う違う違う違う違う違う違う違うチガウチガウチガウチガウツ!!!

「あ、あぁッ——」

外灯に力なく背を預け、綺麗だったはずの月を見上げる。あれだけ綺麗だった月が今は臆気で、酷く頼りなく見えた。

いつから、とか……どうして、とか……そんな事を考える権利なんて、私にはない。この感情を追求する権利を私は最初から放棄していた。それでいいの。今のまま、これまでも同じように見ない振りをするればいい。

自分への嘘は慣れている。誰かへの隠し事はお手の物。雲が月を隠すように、この自分でもわかりたくない感情を隠してしまおう。

「ううん、それじゃあ足りない」

隠すだけじゃ駄目だ。その程度じゃ、雲が風に流されただけで出てきてしまう。だか

ら、どうすればいいかなんて、答えは一つしかない。

「そう、だね」

このまま、知らないまま殺そう。私は自分を何度も殺してきた、自分勝手な想いで殺し続けてきたんだもの。やれないわけがない、いつものように震えながら臆病に殺してしまおう。こんな感情、誰も幸せにしない……出来やしない。

「三上さんが、あんな顔しなければ……」

見たくなんてなかった、一蹴と抱き合った肩越しに見えた、大切に心の奥底に仕舞っていたはずなのに、不意に滲み出てしまったかのような、あんな寂しさで一杯の愛おしい気な微笑みなんて。

「気付かなきゃ、良かった……」

あの人の不器用で、でも誰よりも人を想う馬鹿な優しさなんて。ずっと尊敬出来ない駄目な年上の人のままでいてくれれば。

「覚えてくなくて、なかったのにいッ」

砕けてしまいそうな私の心を、壊れないように、傷つけないように、気付かれないように……そう、柔らかく包んでくれる手の温度なんて。

「知りたく、なかった、のに……」

自分を騙さずに受け入れてくれる、そんな居場所を与えてくれる変な人が世界にはい

るんだって。なんでもない事のように、笑って迎え入れてくれる居場所。私に偽りじゃない笑顔を、笑顔を忘れる寸前の本当に辛い時に与えてくれた。こんなに心許してもいい場所があるんだって、知りたくなんてなかったのに。

「聞かなければ、他人でいられたのにッ」

あなたの雨を知らなければ、あなたの悲しみに触れてしまわなければ、あなたの涙に気付かなければ……そうしたら、私は……

「そうじゃ、ない……そうじゃない、ね？」

あの日、三上さんと公園で出会わなければ良かった。あのドアを開かないで帰ればこんなどうしようもない感情を抱えなくて良かったんだ。あの人の心の奥にいつの間にか住み着くかのような、そんな悪意も打算も偽善もない馬鹿な笑顔に、私は初めから狂わされてしまっていたなんて……今更気付くことはなかったのに。

こんなに、胸が磨り潰されそうな苦痛に、悶え苦しむことはなかったのに……
「馬鹿だなあ、私。ほんとに、馬鹿だよね？」

今までで一番この感情は殺し難くて、どんな拷問よりも酷い苦痛を伴うのだろう。それでも、殺し尽くさないといけない。塵となつて、私の心から跡形もなくなるまで徹底的に。二度と蘇ることがないように。

どれだけ時間が掛かったとしても……

「殺し、ますから……だから、せめて今だけは許してくれませんか？」

こんな最低な願いを。

「二度で、いいんです……一度で、いいですから、私と……」

——お伽噺のように、月明かりの下で私と二人だけで踊って下さい——

叶わない、叶えてはいけない願いを口にして、私は歩き出す。三上さんが剥がしてくれたはずの仮面を、あの二人のいる場所を振り返らないように、心の奥底に押し殺す感情に目を向けないよう、一蹴だけをこの目に映すよう、もう一度無様なその仮面を被りながら、頼りない月明かりの下を歩く。

幕間

彼に陽射しを、彼女に愛しき日々を、彼に立ち向かう勇気を

三人でこの道を歩くのは何度目だろうか？

砂利道をゆつくりと俺、信、唯笑の三人は歩く。それぞれに土産を抱えて。

唯笑はカランコエ、スターチス、ニリンソウ等の花束。それぞれに意味があり、たくさん小さな思い出、あなたを守る、永久不変、友情、ずっと離れない等、どれもが唯笑らしい想いの強さと健気さを表した花達。

信の手には一年分の撮り溜めたアルバム。俺達三人と、自分が旅した国の写真。アルバムにはいないはずの彩花の姿が、そこには写っているような気がしてしまう愛しい日々の記録。俺の成長記録も兼ねているらしいが、マシな物が一つもないのはどういうことだよ。全部ネタばっかじゃねえか。

そして俺の手にはいつもと変わらない花束……何を持っているかは恥ずかしいから秘密だ。それともう一つ。

「なあ、智也？」

へえ、蛇子（じやこ）って名字もあるんだな。珍しい。

墓石を眺めるのって案外楽しいものだ。長い年月の経った物等は、なんて書いてあるかわからない漢字の羅列があつたりして、ちよつとした勉強にもなる。歴史を感じる瞬間だな。

「わざと無視するなつて」

仕方ないと信の方へと顔を向ける。くそ、日差しが眩しくて信の目の辺りに、よく二次元で仕事をする光が横切つてやがる。どんなサービスシーンだよ。

「花束はわかるが、その重そうな袋は何だよ？」

花束の他にもう一つの手荷物。大きな紙袋を指差して尋ねられ、俺はにんまりとし、唯笑は微妙に口の端を引き攣らせる。

まあ、唯笑にとっては苦い記憶でもあるだろうしな、こいつは。小学生の頃、一日起きていても怒られない、子供にとっては一年で一日だけの特別な大晦日の日。その日は必ず彩花の家に呼ばれ、お互いの両親は麻雀をしながら酒盛りをして盛り上がり、そんな両親とは対照的に俺と唯笑は盛り上がるはずの特別な日なのに、憂鬱な気分ですんり。三人の中で一番はしゃぐのは彩花だけだった。なぜなら、その日は朝までずっと……

「漫才とコントを観せられてたんだよね」

抑揚のない唯笑の声はトラウマ色である。

唯笑は遊ぼうよと彩花を呼ぶのだが、すると彩花は冗談抜きの真剣な眼をして、我侭は駄目だよと唯笑を叱り、唯笑が逃げないように腕を掴んで隣に座らせ、ずっとテレビの前で正座をさせられる。足を崩すことも許されなかった。

彩花が厳選して選んだ当時はお笑いVHSを強制的に観せられる拷問。どうやら、彩花にとってお笑いとは神聖な儀式のような物らしく、不遜な態度をとることは許されなかった。お笑いを見ているはずが、笑えない涙が出たのは最低な思い出だ。

一年に一度の彩花の我侭だし、聞いてやろうか……なんて殊勝な心を俺が持っているわけがなく、ぼろくそに文句を言った事がある。酷いなと思う輩がいるなら、十二時間近く正座を試してみればいい。苦行なんて半端なものじゃないんだぞ。

ただまあ、文句を言ったら普段は絶対に泣き叫ばない彩花が、わんわん泣いて俺の親父に泣きついたんだ。よりにもよって親父に。

泣いた彩花を親父は親父らしくないデレた顔で慰め、俺に鬼のような形相で拳を叩きつけ、お年玉を人質にして苦行を強制しやがった。唯笑に聞しては、途中で眠くなつたら寝て良いルールが設けられ、唯笑は開始一時間で俺を裏切り寝たふりをしやがり、大晦日を脱出。大晦日は楽しめないが、唯笑は大晦日を犠牲に平穏を手に入れるという、

狡猾な手段を選んでいったんだ。

「てなわけで、これはノートPCとお笑いDVDだ。最近のお笑いを彩花に観せてやろうと思つてな」

「智ちゃん、大晦日みたいに長くないよね？」

「虐めを通り越した所業だろあれは」

「彩花ちゃんのお淑やかなイメージが崩れちゃった」

お笑いへの情熱で心が焦土になりそうなあの癖がなければなあ。それと案外ケチで、俺の小遣いの使い方ですえ半分管理されていた。

彩花のプライベートを知らない連中は、顔良し、中学生にしてはスタイル良し、気立て良しと絶賛していたが、俺と唯笑からしたらなんのこっちゃという話だ。

ゆつたりと歩き、彩花の下へと到着。

雑草等を抜く為の軍手や、墓石を拭く為の水とタオル、その他の荷物を置いてまずは彩花へとそれぞれが声を掛ける。

「よお、元気に寝てたか？遊びに来てやったぞ」

「彩ちゃん！今年も智ちゃんが結婚してくれなかったよお〜！」

「彼岸以来だよね、久しぶり彩花ちゃん」

馬鹿な事を言う唯笑の頭を軽く叩いて、枯葉が落ちる寒い日、家族四人の時間を俺達

は始めた。

——彼に陽射しを、彼女に愛しき日々を、彼に立ち向かう勇気を——

「智ちゃん、痛いよお」

「唯笑ちゃんはまだマシだから！俺なんて砂利の上だからさー！」

「鬼教官の前で無駄口を叩くな！折檻されるぞ！」

雑草を抜き、ゴミを拾って墓石を拭き、水を換えてお茶菓子を備えて花束を活けてよ
うやく本番。

線香を上げて、それぞれ彩花と思い思いに手を合わせて話してから数分後、俺達の苦
行が始まった。

唯笑はワンピースだから、渋々砂利を除けた場所にシートを敷いて正座をさせ、俺と
信はラフな格好なので砂利の上に正座。上座にはもちろん彩花が今か今かとワクドキ
で座っていることだろう。除霊すんぞこの野郎。

PCを立ち上げてDVDをセット。場所は全員が鑑賞出来るように横へと置く。

「ね、ねえ智ちゃん。本気でやるの？」

「お前は彩花の喜ぶ顔が見たくないのか？」

「で、でもお……」

耳まで真つ赤になって、つぶらな瞳に涙を溜めている。

「あ、彩花ちゃんの為とは言ってもさすがに……な、なあ智也？こ、今度でも良くないか？今日は日が悪いみたいだし」

「日なら良いだろうが。雨が降る気配なんざないぞ」

「俺と唯笑ちゃんが雨のように泣きそうなんだけどな！」

何が不満だというんだこいつ等は。まったくわからないぞ。

遠目でひそひそと常識がないだの、最近の若い人はこれだからだの、くすくすと笑い声が聞こえたりだのしているが、問題は何一つとしてない。ていうか今日は人が多いな！

なにやら様子がおかしいと誰かから言われでもしたのか、住職が遠目でこちらへと生温かな視線を向けていた。すみません、何か言われたら適当に言っておいてください。後でお茶菓子を持参して謝罪しに行きますから。

「お前等には見えないのか！あの彩花の澆瀨とした笑顔が！」

墓石の上を指差すと、唯笑は困ったように眉をハの字にさせ、信は見えちまうから不思議だと嘆く。俺だって嘆きたいわい！

「彩ちゃん許してえ！唯笑にはハードルが高いなだよお〜！」

「お、俺の恥で彩花ちゃんが喜んでくれるなら俺は……俺、は……やつぱきついなこれ！自分の気持ちに誤魔化せるレベルじゃないって！」

「ごちやごちや煩い。ぼちつとな」

「智ちゃんの馬鹿あ~~~~~！」

「お前の愛が重過ぎだ！」

俺の彩花への愛が二人を不幸にしてしまうとは……ふ、皮肉な物だ。

映像が流れ始め、どこからか拍手が聞こえた気がした。うむ、歓喜に震えている様がある。そこに見えるようだ。良かったなあ、こんなに優しい家族が二人もいて……ふたりも、な。ふはっ。

この世の終わりに遭遇してしまった二人を見て俺はほくそ笑みつつ、スマホで二人の絶望に打ちひしがれる瞬間を記録。

良い画が撮れたと満足して頷き、うあ~~~~と嘆き苦しむ二人に立ち上がって告げる。

「じゃ、俺は用事があるから少しはすすな」

俺の言葉に二人の死んだような色のない目が向けられる。

こいつ正気かと、その目は猛然と言葉にしないで語っていた。

「何、言ってるんだ智也？」

「嘘、だよな？」

発案者の俺がまさかいなくなるとは思っていなかったらしい。彩花の為なら裏切ることはない。とんだ先入観だな。

「嘘を俺が言うとしても？大晦日に狸寝入り決め込んで拷問から逃げてたアホ娘よ」

「智ちゃんを見捨てたわけじゃないんだよお！……智ちゃんなら忘れてると思つてたのに」

「小声で俺を馬鹿にするな。罪は償えアホめ」

「お、俺は何もしてないだろ!？」

「この間の千羽祭で、随分可愛がつてくれたじゃないか、西野と組んでたんだろ？もうネタは割れているんだぜ……なあ？」

「これ以外ならなんでもするから俺を見捨てないでくれ智也あー！」

藁に縫うとする二人が滑稽で憐れだ。その藁が燃え盛つているとも知らずに。

「墜ちてしまえ」

奈落へと突き落とす呪文を唱え、俺は膝についた土埃を払う。

「ていうか、最初から言っていたはずだろ。大切な二人を呼んだって。迎えに行かないや失礼だろ」

「そ、それなら唯笑が！」

「おくま〜え〜は〜の〜こ〜れえ〜!」

立ち上がるうとする唯笑の頭を押さえつける。こいつに付いてこられちゃ意味がないっての。

じたばたする唯笑を抑えながら信を見ると、信は顔を下に向けたままぼつりと恐る恐る口を開く。

「本当に、来てくれるのか?」

その言葉にどれほどの想いが込められているのか、俺には計り知れない。それでも、信の人生の中で間違いなく今日が一番大切な日となるはずなんだ。

それは俺にとっても、な。

「そういう約束なんだ。親父からそう伝えられている」

俺から連絡するまで、俺が過去を受け止められるようになるまでは会わないようにと……こんなに時間が掛かってしまったのが情けない。それでも、ようやくなんだ。今なら二人に顔を見せられると自信が持てたのは。

全部俺の所為なのに、俺の為に離れてしまった、俺達にとって掛け替えのない家族。今から俺は、大切な家族を迎えに行く。

「ま、それまではそのDVDを見て心を和ませておけよ。せめてもの心遣いだ」

「全然和まないんだが!」

「彩ちゃんは落ち着くどころか興奮してるよ!」

食い入るように画面を覗いている彩花が絶対そこに鎮座しておられる。

三人を尻目に、俺は歩き出す。

「はっはっはっ、精々楽しんでくれ。ああ、それと……」

一応言っておかなければと俺は振り返って注意をしておく。

「映像を止めるような暴挙は止めておけよ。彩花に呪われたくなければな」

「はは、まさかあ。そんなこと彩花ちゃんがするわけ……」

「彩ちゃんならやりそう。ていうか絶対怒るよ」

「お笑いに命懸け過ぎじゃないかな!」

あいつなら本気で一週間悪夢を見せに枕元に立つだろう。お笑いが絡むと人格崩壊を起こすからな。くわばらくわばら。

どうか二人が彩花を悪霊化させない事を願いながら、俺は少しだけ席を外した。ざまあみろ。

……せ、正当な理由があるから俺は無罪だよな?と、とりあえず謝っておこう。どうか今回だけは許してくれ彩花!と心の中で土下座をしたのだった。

智ちゃんの姿が見えなくなったのを確認した後、信君と唯笑は周りの人達の視線に晒

されながら、顔を俯かせてなるべく他の人達と視線が合わないようにしていた。

小さい頃の裏切りと言つても、智ちゃんはお覚えてないかもだけど、そもそも彩ちゃんがお笑いが大好きになつたのは智ちゃんの所為なのに。

まだ物心ついたばかりの頃、三人で遊んでいた時に急に智ちゃんが漫才をやるうなんて言い出した。唯笑は漫才というものがあまりわかつてなくて、仕方なく彩ちゃんが智ちゃんのごっこ遊びに付き合つただけけれど、幼い子供にお笑いのポケと突つ込みが上手く出来るわけもなく、智ちゃんはむうと唸っていた。

どうすればテレビの中の芸人さん達のように、息の合つた漫才が出来るのかと考え、名案とばかりに彩ちゃんに言つたの。俺の相棒たるもの突つ込みを勉強すべしって。彩ちゃんは彩ちゃん、智ちゃんに相棒つて言われたのが嬉しかったみたいで、その日以来お笑いの勉強をし始めた。元々生真面目な性格で、お料理も智ちゃんの為に熱心に毎日練習して覚えた彩ちゃんだから、お笑いにも本気で取り組むようになってしまい、それが原因で彩ちゃんはお笑いを愛するようになってしまったの。つまり智ちゃんが原因で、責任は全て智ちゃんにある。

それから唯笑は彩ちゃんのお勉強に日夜付き合わされるものだから、大晦日くらいは休ませて欲しいという希望と、智ちゃんへの嫌がらせで寝たふりをしただけ。

……ほら、唯笑なんにも悪くないもん。

デスクトップに映し出される映像に辟易し始め、どうしようかと思索する。

まだ智ちゃんが戻ってくるまで時間はあるはず。なぜなら智ちゃんの性格上、絶対に映像の途中で戻ってくるなんて情けは掛けないから。それならそれで好都合。この際、彩ちゃんにずっと聞きたかったこと、智ちゃんには怖くて聞けない事を尋ねてみよう。

「ねえ彩ちゃん、彩ちゃんは嫌？智ちゃんに好きな人が出来たら」

独り言のような問い掛け。それでも、唯笑の言葉に信君がどこか切なげな視線を向けてくる。

「最近ね、智ちゃん変わったんだよ。ううん、変わりそう……なのかな？いのりちゃんって女の子と一緒にいるようになってね、最初は勉強を適当に教えてただけみたいなんだけど、なんていうか懐かしいなって思える顔をする瞬間があるの」

ちゃんと彩ちゃんに届いているかな、唯笑の情けない告白は。届いていたとして、彩ちゃんはどんな気持ちでいるだろう？

「その顔はね、おんなじなの。彩ちゃんが傍にいる時とおんなじ、これ以上ない程にあつたかい顔なんだあ」

好きじゃないって言いながら、智ちゃんは見ないように見ないようにして、必死にいのりちゃんを見ないようにしている。でも、それって智ちゃんは本当は怖いんだ。自分には踏み込ませないようにしているのに、彼女の中に惹き込まれてしまいそうな自分

が。

唯笑には心が揺れてもどかしいと言っているようにしか見えない。

「唯笑はね、正直悔しいんだ。悔しくて悔しくて、智ちゃんの心の一番近くに寄り添えない自分が情けなくて……だけど、だけどね？」

自分には見せてくれない感情をいのりちゃんには見せまいと努力する。そんな智ちゃんの姿に泣きそうで、苦しくて、辛くて……それでも、どうしても苦しいを押しつけて溢れてしまう感情が一つだけある。それが一番悔しい。

「彩ちゃんが隣にいた頃の智ちゃんが帰ってきてくれるかもって、唯笑馬鹿だから期待しちゃうんだよ」

「唯笑ちゃん……」

隣から心配してくれる声。その声には笑顔を向ける。もう大丈夫って。唯笑はもうこんな事で泣いていられないから。だって唯笑の気持ちを、智ちゃんの悲しみを、隣にいる唯笑達の大切な家族が軽くしてくれたから。こんな事で泣いちゃったら、もう君に顔向け出来ないもん。家族だって胸を張れないもん。

「だからね、智ちゃんがいのりちゃんを好きになってくれても良いかなって、本当は泣いちゃいたいくらい嫌だけどね、そう思っちゃうの。彩ちゃんはどうかな？」

聞かなくてもわかってる。彩ちゃんならどう答えるかなんて。だって、彩ちゃんはい

つだって智ちゃんとか唯笑の手を引いてくれてたんだもんね。

だからきつと——

「唯笑ちゃん、あのさ、言い難いんだけど……」

「ううん、わかってるよ信君」

信君が何を言いたいのかわかっている。唯笑も同じことを考えてたもん。

「多分彩花ちゃん、今の話聞いてないんじゃないか？」

「うん、絶対聞いてないよ」

「ごめんね唯笑、あとで聞くからちよつと待つてつて、デスクトップから一寸たりとも目を離さないで言っているよね多分。」

「タイミング間違えちゃった」

「どう考えてもわざとだよだね!?この羞恥心をシリアスで誤魔化そうとしてたでしょ!？」

うう、だつてえ、そうでもしないとこの公開罰ゲームは乗り切れないもんく!」

信君の指摘は最もで、なんとなくこの耐え難い雰囲気や誤魔化せるかなあって。

こんなこと聞かなくても、彩ちゃんは困ったように少しだけ寂しそうに笑った後に、智ちゃんがそれで幸せになれるなら私も幸せだよつて言うに決まってるから。

「……無理、かも」

「え、何か言った？」

「ううん、なんでもない」

そんなこと、わかっていたから……だから、本当に聞きたかったことは違うの。さっきの問い掛けに関りがないわけじゃないけれど、関わっているかどうかも唯笑には確信が持てない。

ねえ、彩ちゃん？彩ちゃんは知っているんじゃないかな？ううん、唯笑達のお母さん達以外で彩ちゃんだけが知っているんだよね？

（彩ちゃん、教えて。どうしてあの時、智ちゃんはあんな事をしたのかな？）

彩ちゃんの事を世界中の誰よりも想っていて理解しているはずの智ちゃんが、どうしてあんな事をしてしまったのか、唯笑は今もわかってあげられないの。わかってあげられたら、今頃智ちゃんはもっと先へと進めていたんじゃないかな？誰かを自分の心へと誘う事が出来ていたんじゃないかな？

思い出したくないあの日の最悪。あの日は窓を叩くような冷たく激しい雨が降っていて、そんな雨の中智ちゃんは……

信君にも誰にも絶対に言えないあの日の最悪。智ちゃんに固く口留めされている過去。何があるうと、誰にも……特に信君には言わないでくれって、智ちゃんが震える手で唯笑の肩を抱いたんだもん。

多分、智ちゃんはその日の智ちゃんを忘れられないままなんだ。だからこそ、唯笑が

智ちゃんを救いたいつて、唯笑じやなきや駄目なんだつてわかつてるのに……なにもしてあげられないままで……

誰でもいいの。ほんの少しの取っ掛かりで充分なんだよ。だから誰か教えて。あの日、智ちゃんにあんな行動を取らせてしまった理由を。

何年もずっと唯笑は願ひ続ける。自分からは開けられない扉の鍵、それを下さいつて。

智ちゃんと彩ちゃん唯笑と信君と、四人がいるべき愛しき日々を生きる為に、その鍵がどうしても必要だから……

——お願い、彩ちゃん……智ちゃんを助けてツ——

門の前で十数分待つてしていると、駐車場のある方向から歩いてくる二人男女の姿。

男性の方は背が高く、しっかりとした体格でピンと背を伸ばして歩いてくる。その姿は昔のままの厳格さを思い起こさせるが、同時にこれまでの年月を思わせもする。昔よりも少し痩せてしまって、白髪も混じっている所為だろう。

女性の方は喪服に身を包み、ゆつたりと歩いてくる。昔と変わらないモデルのような体型と柔和な顔。目にしただけで身を委ねてしまいそうな穏やかさに、ほんの少しだけ

目頭が熱くなってしまふ。

二人が歩んできて、俺もまた二人へと歩み寄る。熱くなる目頭を無理矢理に抑え込みながら。この二人の前で、俺が泣いていいはずがないんだ。俺はこの二人から大切な場所を奪つてしまつたんだから。

二人が俺の姿を目にし、男性はほんの少しの瞠目。女性は口元を手で押さえ、少しだけ顔を上に向け……

「智くん！」

柔らかな声を目一杯張り上げながら、俺へと駆け寄り――

「結（ゆい）さん」

そのまま俺を抱き締めた。昔とは身長が全然違う俺を、昔と同じように。今も彩花と同じ、柑橘系の愛しい匂いをその身に纏つて。

松月結さんと松月宗吾（そうご）さん。彩花の両親で、俺と唯笑の大切な家族。

「大きく、大きくなつたのね……少し見ない間に、こんなに……」

「結さん、ちよ、恥ずかしいって」

「私は恥ずかしくなんかないわ。だって、ようやくなんですもの。ようやく私達の大事な息子と再会出来たのよ？」

ああ、本当に勘弁してくれ。今もまだ俺を息子と呼んでくれるなんて、そんなに嬉し

い事を言わないでくれ。俺ほどの親不孝者はいないんだから。

懐かしい母の温もりにもいつまでも浸ってしまいたくなってしまう。

「智也、本当に大きくなったな」

いつもしかめつ面をしていた宗吾さんが、柔らかな瞳で過ぎてしまった年月を嘯み締めるように言った。

「宗吾さん、お久しぶりです」

おじさんとおばさんと呼ぶのは唯笑の両親で、彩花の両親は名前で呼ぶように俺と唯笑はしていた。そうじゃないと一緒にいる時に区別がつかないからと、そう教育されたのだ。

「他人行儀はやめて欲しい。君は私の息子のままなのだから」

宗吾さんまで俺を息子と、こんな親不孝者を息子と呼んでくれるのか？

「結、抱き締める前に私達にはしななければいけないけじめがあるだろう？」

「ええ、わかっているわ。でも、智くんの元気な姿を見たらいてもたってもいられなくて。ごめんなさいね」

すつと離れる体温。もう少しだけ感じていたかった体温が離れ、二人は俺を真っ直ぐに見据える。

なんだ？けじめって宗吾さんは言った。けじめもなにも、それは俺がしなければいけ

ない事で、二人が何をする必要が？

ほんの少しの嫌な予感と焦燥を感じ、俺は二人に声を掛けようとしたが、それよりも早く二人は俺へと何振り構わずに頭を下げた。俺が下げさせてしまった。

「智也、今の今まで申し訳なかった。いくら私達から会う事は出来なかったとはいえ、何としても君を一人にするべきじゃなかった」

な、にを……何を言っているんだ！俺は何を言わせているんだ！

「宗吾さん止めて下さいッ！俺はそんなつもりで会いたいわけじゃないんです！」

こんな言葉を言わせてしまった自分が情けなくて、拳を爪が食い込むほどに握り締める。

いつもの俺でいられたなら、馬鹿な事を一つ二つ言っただけなら出来たはずなんだ。それなのに、馬鹿ではいらなかった。

彩花の面影が重なる二人の前でだけは、俺は俺を偽れない。偽ることを許せない。

「智くん、お願いよ。どうか私達に謝らせて。許してくれるじゃないの。こうしないと、私達は胸を張って貴方を息子だなんて呼べないから。だから、今だけはこんな最低な我俣を許して」

我俣なんて、そんなことはない。あなた達の息子だと胸を張れないのは俺だ。俺が全

部をぶち壊してしまつたんじゃないかよ。謝るべきは俺なんだ。俺がこの二人に許しを請うべきなんだ。

「いつも、あなたと鉢合わせにならないように、命日には来ていたの。智くんが会いたいつて言ってくれるまではつて。そしてね、私達は暫つたの。あなたがどんなに否定しても、再会出来る時には必ず私達はあなたに謝らないといけないつて」

「結さん、宗吾さん……やめてくれよッ！俺が悪いんじゃないか！俺が子供だつたから、何も知らない最低な子供だつたから二人は俺の為に……おれ、が……俺が二人から彩花と過ごしたあの場所を奪つたんじゃないかッ」

もつと人の弱さを知つていれば、自分の弱さに甘えなければこんなことにはならなかつた。あの頃の最低な俺は彩花への想いよりも、自分の弱さが勝つてしまつた。あつてはならない事なんだ。俺は、貴方達の愛娘よりも自分を選んだクズなんだぞ！

知つているはずだ、俺がなんであんな馬鹿な事をしてしまつたのか。

知つているはずだ、俺の穢れた瞬間を。

知つているはずだ、俺が彩花を裏切つた親不孝者だと。

「謝らなきゃ駄目なのは俺だッ！俺が——！！」

涙を流す権利のない俺を、結さんが今度は絶対に離さないと気持ちを含めて、背伸びをして俺の首を抱く。

俺が泣かないと知っているから、俺の代わりに大粒の涙で頬を濡らしながら。

「すまない。私達は君をこんなにも追い詰めてしまつていた。本来なら、私達が背負うべき罪を君に……まだ、子供の君に背負わせて……すまない。私は卑怯な大人だな。君が私達から居場所を奪つたんじゃない。私が君から素顔を奪つたんだ」

「ごめんね、智くん。こんなに一人にして、ごめんね。唯笑ちゃんにも誰にも打ち明けていないって、智一（ともかず）さんから聞いていたの。それなのに、智くんと会つてしまつたら、もっと追い詰めてしまふ気がして……弱虫な母親で、ごめんね？ 独りで闘わせてしまつて、ごめんね？」

違ふと、声を大にして結さんを引き離し、俺の精一杯の強がりて笑い掛けてあげた。だが、それは叶わない。

「——ツ!!」

今声を出してしまうと、流してはいけない物まで流れ落ちてしまふそうだったから。「でも、もう大丈夫。私達ももう逃げないわ。今度こそ智くんを独りにしない。ちゃんと母親らしく守つてあげるからね」

「仕事の都合で来年になつてしまふが、春にはあの家に戻る予定だ。彩花には遅いと怒られてしまふがな」

声にせず、ただ黙つて首を振る事しか出来ない。

そんなことはない。彩花が怒っているのは俺に対してだ。私達のお母さんとお父さんを泣かせて！って。

そんな俺達の両親に、どうしても掛ければいけない言葉がある。一番に俺が二人に言いたいその言葉――

「おかえりなさい、結さん、宗吾さんッ！それと、馬鹿な息子でごめんなさいッ」

俺のなけなしの強がりであろうやく言えた言葉。そんな俺に二人は静かにただいまと、少しだけ震えた声で応えてくれた。

そんな俺達の再会を青空から彩花も……見てるわけないわ。あいつが見てるのなんだがグランプリの総集編だもんよッ!!

あいつの間抜けな顔を思い浮かべてしまい、結さん達との再会がぶち壊される。もしかすると、俺よりも親不孝者なのは彩花かもしれなかった。

動画の再生が止まり、俺達の足の痺れが治まる頃、見計らったように智也は戻ってきた。気の抜けたような笑顔で手を挙げながら。

「悪い悪い、待たせてしまったようだね諸君」

なんで上から目線だよ、とか。絶対わざとだろ、とか。そう言った言葉を投げつけるべきなのに、俺の喉は極度の緊張で渇きに渇いて、上手く言葉を口に出来ない。

俺の緊張を和らげようと、わざと智也はふざけてくれているのに、親友を名乗る俺はそんな優しさに応えられない。わかっているのに、どうしようもなく俺は弱いままだ。

そんな俺の代わりに唯笑ちゃんが柔らかな目で俺を見た後、智也へと頬を膨らませているのだろう、いつものように拗ねてくれる。そんな唯笑ちゃんに心の中で感謝しながら、俺は先程からずっと足元から視線が動いてくれない。

「智ちゃん、それで結ママと宗吾。パパは？」

「ああ、それなら……」

二つの足音が聞こえ、足音が俺達の前で消える。

挨拶をしないと、初めましてって……顔、を上げて……

「久しぶりね、唯笑ちゃん」

「結ママ……」

家族に向ける気を許した声で唯笑ちゃんが結ママと呼んだ人へと歩み寄り、二つの影が一つとなる。

二人の影だけしか、俺には見えない。

「こんなに大きくなって……ごめんね唯笑ちゃん。いつも心配していたの。唯笑ちゃんは昔のように笑えているのかしらって。彩花の代わりになろうと頑張っているのかもしれないって」

「結ママ、そんなことないよ。唯笑、彩ちゃんの代わりにしろうとしてみたけど、それじゃ駄目だつてわかつたから……ちやんとわかつたの」

「……やつぱり、唯笑ちゃんは強い子ね。三人の中で一番強い子だったものね、唯笑ちゃん。そんな唯笑ちゃんを私が傍で支えてあげなきゃいけなかつたのに……ありがとう唯笑ちゃん。そして、ごめんね？あなたがいてくれたから、こうして智くんにも会えたわ」

唯笑ちゃんの足元が濡れ、徐々に雨のように広がっていく。

あるべき家族の輪がそこにはあるのだろう。やがて唯笑ちゃんだけではなく、もう一つの影からも雨が降り始める。

子供が母親に甘えるような嗚咽。女性へと遠慮なく抱きついて唯笑ちゃんは、誰に憚ることなく泣き始め、そんな愛しい子供を彼女もまた涙と抱擁で受け止める。

沢山の傷があつた。彩花ちゃんの代わりに智也の為に務めようとして、自分を殺そうとしてきた事。代わりにしろうと足掻く唯笑ちゃんによく気付き、その自傷を止めた事。お互いの気持ち曝け出し、家族へと戻つた日々の事。

決して短くはない時間が、その胸の中に蘇っているのだろう。

きつと二人の抱擁は、今この瞬間、世界で一番美しい光景に違いない。

だが、唯笑ちゃんとは対照的に、俺は口を動かすどころか視線すら凍り付いてしまつ

たかのように動かない。動けと一生懸命に叱咤しているのに、動いてはくれない。

だって、俺の目に映るのは足元なんかじゃない。あの日の凄惨がそこに映って仕方ないんだ。

曇天と小雨と紅。フロントガラスが罅割れて、紅がこびり付いた車。アスファルトに打ち付けられ、微動だにしない少女。

命が消える瞬間、命が消えていく恐怖に震える加害者、衝撃と混乱で狼狽え、何一つ救おうともしなかった屑野郎。

腰を抜かして動けない屑野郎の目の前に現れた、彼女の片割れ。そいつの叫びとも鳴き声とも泣き声とも言えない、悲痛に過ぎる声。

……俺に資格なんてない。俺が彼等から奪ってしまった幸福を思えば、会えるわけなんかなかったんだ。

足だけじゃない。全身が震え、心は凍えて、血管を走る血は冷水のよう。耳の奥に聞こえるのはそこにある家族の声じゃなく、あの日の雨の音だけ。

許されたいと願ったのか？ 智也に会うべきだと言われて、逃げるのは卑怯だって自分に言い聞かせて……その実、俺は許されただけじゃないのか？

あの日何も出来なかった自分を、しようがなかったんだと甘えさせたかったんだろ？ 二人に謝ることが出来たなら、救われるとでも夢を見たんだろ？

卑怯だ。矮小で狭量で醜悪。俺は自分の罪を軽くしたいが為に会おうとしている。そんな気がしてならない。

そうだ、俺なんかがこの家族の輪を乱してはいけない。誰が許そうと、俺だけはそれを許してはいけないだろ？ そうだ、俺はまだ――

「逃がすか馬鹿」

俺が立ち去ろうとする前に、何もかもを見通したように智也が俺の腕を捕まえる。

「高校の頃、お前は俺を逃がさなかつただろ。なら、今度は俺がお前を逃がさない」

意地の悪い言葉とは裏腹に、俺の腕を掴む手は優しかった。

その手に捉まれたらもう逃げられない。

「それで智也、私達に会わせたい子とは彼の事かな？」

「はい。こいつは俺達の自慢です。な？」

「うん！」

二人の手がいつの間にか俺の背に添えられ、そつと押し出される。

その手に少しばかりの勇気を灯しているかのように感じた。

前に押しやられた俺はそれでもまだ顔を上げられず、重苦しい沈黙だけが俺に押し掛かる。

何か言わなければ、とにかく謝罪しないと……

焦燥に駆られ、なんとか口を動かそうとするが動かない。

歯が上手く噛み合わなくて、情けない程に震えている。自分の無様な姿に涙が出そうだった。

そんな腐った俺を――

「信君、こつちを見て」

唯笑ちゃんの穏やかな声が救った。

振り返ると、唯笑ちゃんはピースして笑っていて、智也はだっせえと同じように笑う。その二人の間に違う気配……そこに俺は幻想を見る。俺の大切を見てしまったんだ。

「お、れは、稲穂信っていいいます」

不思議だった。それだけの事で自然と言葉が拙くも流れ出してくれた。

相変わらず視線は上げられないままで、たどたどしい言葉。震える声はそのままに、胸から湧き上がる罪悪を俺は口にしていたんだ。

「あの日、彩花ちゃん……む、娘さんが事故にあっただけ、現場に居合わせて、それで、それ……」

――娘さんを見殺しにしてしまった、最低な人間です――

あの日の事を俺は一生忘れる事なんて出来ない。自分の弱さを許せる日なんてこない。自分は貴方達から日常を奪った張本人で、こんなこと言えた義理ではないのですけれど、申し訳ありませんでした。

たったこれだけの言葉を、長い時間をかけてようやく言うことが出来た。言ってしまった。

言葉にすると、軽く聞こえてしまう事に吐き気を覚える。

もつと上手く、もつと真摯に、もつと悲痛に口にするべき言葉が、俺には軽く聞こえて仕方ない。

「俺、なんです……俺が彩花ちゃんを……」

こんな自分が嫌い、何よりも世界で一番憎んでいる。

「うば、った……貴方達からもツ！智也と唯笑ちゃんからも奪ってしまったんですツ!!」
許されたいんじゃない。責めて欲しい。お前の所為で娘は助からなかったんだと、俺を言葉の刃で斬りつけて欲しい。

この願いが甘えだとしても、そうじゃなければ俺はツ！

「あ、あやま、って、許される事じゃないってわかって、わかってます、けどツ……それで、あ、あや、謝らせて欲しくて……」

その場に膝をつき、頭を砂利に打ち付けるように頭を下げる。

こうする以外に俺に出来る事なんてないのだから。

「申し訳、ありませんでしたッ！申し訳ありません、ん——」

何度も、何度も俺は頭を下げ続ける。許されないとわかっていても、この行為に意味がないとしても。

「すみ、ません……ごめ、なさ……」

声にならない声。俺に涙なんか許されないのに、それでも流れ出すそれを留めることが出来ない。なんて、なんて弱いんだ俺はッ！

頭を上げることが出来ない俺に、きつと彩花ちゃんと似ているだろう穏やかで優しい声が掛けられた。

「そうだったの。困った子ね、彩花は。智也君と唯笑ちゃんだけじゃなくて、貴方まで苦しませてしまったのね」

違うッ！彩花ちゃんは悪くなんてなくて、俺が貴方達を苦しめてしまったんだッ！

そう言いたいのに、漏れ出るのは情けない嗚咽だけで、言葉になってくれない。「稲穂さん、でしたね？どうか顔を上げて。彩花も困っているわ」

俺を傷つけるどころか、傷を労わるような声に俺は横に首を振る事しか出来ない。

わかつているんだ。戸惑わせてしまうだけだ。それでも、俺は二人に顔を向けられるような、そんな男じゃ——

膝をついて雨に打たれ続ける馬鹿と、どうにかして傘を差し出さないといけないと、優しい二人は戸惑い続けている。

ずっと黙って見ていたが、もう限界だった。俺も唯笑も。

三年前、こんな光景を俺達は目にしてしている。初めて信を墓参りへと連れてきたあの日、信は同じように彩花へと何時間も謝り続けた。許されることを望んでいない謝罪に俺達は何もしてやれないまま。

三年前を思い出し、俺と唯笑は頷き合う。

今なんだ。あの日言えなかつた言葉、言いたかつた言葉を言うのはこの瞬間しかない。

彩花へと謝罪しただけでは信は救われないと、俺も唯笑も知っていた。だから、こいつを救えるのはあの日じゃなかつた。

長かつた。俺自身が覚悟をするまで、こんなにも長い時間、俺は信を雨の中に置き去りにしてしまっていたんだ。

謝るのは俺だ。お前をこんなにまで苦しませ続けてしまったんだからな。

けどな、ようやくだ。今、ようやくお前の心を救える。俺と唯笑がずっと救わなければと誓つたお前を！

「——ッ!?智也、唯笑ちゃん!」

俺の両方の腕を二人は掴み、無理矢理立たせられる。そして……

「ね、最ツ高でしょ!結さん、宗吾さん!」

な、にを?

「結ママ、唯笑ね?信君がいたから智ちゃんと今も家族でいられるんだよ!」

何を言っているんだよ?

「唯笑、彩ちゃんの代わりにならないとって思い込んでたんだ。でもね、信君が背中を押してくれて、智ちゃんを好きって気持ちは彩ちゃんの代わりじゃ届かないって気付かせてくれたの」

そうじゃない。俺は彩花ちゃんが大切にしている君を、自分の罪悪感を軽くする為だけに手助けしただけなんだ。純粋な気持ちなんかじゃないんだ。

「俺もこいつがいなければ、今も彩花を理由にして逃げていた。逃げて逃げて、彩花への想いを歪ませたまま生きて、こうして二人と会う事も出来なかった。こいつが俺をそつと叱ってくれたから今の俺がある」

そんな事はない。俺がいなくても智也はいつか二人と会っていたはずだ。彩花ちゃんから、過去から逃げずに受け止めていただろう。俺の親友は弱くなんてなくて、俺の

方がずつと……

「信胸を張れ」

「そうだよ、顔を上げよう」

「俺達はお前と出会ってからずつと」

「信君にずくずくずつと！」

——救われていたんだよ、ありがとう——

「ああ、あ……うああッ——」

雨が降り注ぐ。冷たかった雨が温もりを宿して。

見上げた空の向こうに、雲の切れ間から覗く日差し。

両隣には愛しい俺の大切な笑顔。

「俺、は……俺、俺えッ！」

救われていたのは俺だ。二人に甘えていたのは俺だ。二人を理由に贖罪をしようとしていたのは俺だ。

そのはずなのに、止まらない。二人の優しきで降り出した雨が止められない。

「何泣いてんだ馬鹿。こっちは笑えよな」

「信くうんツ！」

「お前まで泣くなよ面倒臭いな！」

まったくと、空を見上げ両手で顔を覆う俺を、智也と唯笑ちゃんが強く包み込んでくれる。

俺の涙と、唯笑ちゃんの涙と、智也の笑顔。

「あらあら、どうしましよあなた。今日は嬉しい事が沢山ね」

「ああ、そうだな。こんなに嬉しい事はない」

私達に家族が増えていたなんてね、と彩花ちゃんのお母さんが目を細めて言う。それに全く同じ表情で彩花ちゃんのお父さんは頷いた。

これで救われたなんて思っではいけない。それでも、俺は今日この日を胸の奥深くまで刻み付けよう。

この瞬間が人生で最上の幸福な時間なのだから。

久しぶりの結さんと宗吾さんとの再会に唯笑は喜び甘え、信は緊張したまま、それでも少しずつ表情が柔らかくなっていった。

久しぶりという事もあり、母さんも後に合流して皆で晩御飯を食べに出た。信は遠慮

していたが、結さんの強引さと唯笑の能天気さと俺の強制により、無理矢理引き連れて焼肉へ。

おばさん、唯笑の母親は残念ながら仕事が忙しいらしく不参加だった。まだ信と一度も会わせた事はないが、早く会わせてみたい。おばさんと会った信がどんな反応をするのか、想像すると少し笑えてくる。

これで信の心が本当に救われたわけではないだろう。だが、冷たかった雨ではなくなつたはずだ。俺と唯笑に出来ることは、情けないがこんな些細な事だけでしかない。それでも、今後信がもう俯く事はないだろう。自分の為の人生を踏み出していけるはずだ。その姿が見られたなら、俺も少しは救われる。

三年前に言えなかった言葉、俺と唯笑の心にずっとあつた気持ち。この気持ちはどうか心の心とずっと共にあつてくれたならと、心の片隅で願う。

——数日後

本格的な冬に向かつて、木々から葉が一枚もなくならうとする季節。

空は高く青く、空気は冷たく澄んでいて、寒さで悴む指先。

白い息が空気に溶けて、その様を目で追う。

静寂の中、砂利の鳴る音に目を向ける。

スーツ姿でヒールを履き慣れた出で立ちは、大人の女性そのもの。髪を染めてもおらず、綺麗に後ろで整えられた髪。

あの頃、俺は彼女をまともに見ることが出来なかった。なぜなら、彼女は俺の罪の象徴そのものだったのだから。

音の主が歩みを止め、俺へゆっくりと真っ直ぐに視線を向けてくる。

あの日とは違う、温度のある瞳で。

「お久しぶりです——さん」

「本当に久しぶりね、三上智也君」

さあ、始めよう。偽物を退場させる為の、誰の為でもない。俺の為だけの些末な物語を。

第二章

彼の十字架、彼女の美醜

不自然な静寂の中、かちや、かちやと小さく頼りない音だけが室内にある。

外は夏など面影も見えない寒さと風が支配しているのに、額や頬を汗が伝う。

視線を合わせぬよう、俺は三人を見回す。

鷺沢と信の二人は手元に視線を落とし、これまでの工程に見落としはないかと思考を繰り返しているようだ。視線が左から右へと泳いではまだ思案している。

なるほど、二人は俺と大差ない状況らしい。だが、異様な緊張感に手に汗握る俺達とは違い、唯一そいつだけは緊張どころか余裕の笑みを浮かべている。その笑みには勝者特有の匂いが漂っている。

いや、奴の笑みに惑わされるな。そう、このままなら。

これまでの戦いを振り返れば俺達の誰もが気付いている。奴は普通じゃない。セオリーなんて紙屑同然。ならば俺達も変則的にいかなければ喰われてしまう。

退けない、退いてはいけない。どれだけの圧力が肩に押し掛かろうと、気持ちだけは折れるわけにはいかない。折れた時、俺達は死んでしまう。

対面の信と視線で会話をし、お互いに頷く。仕掛けるならここしかない。一人で駄目なら二人。俺と信が組めばやってやれないことなんて一度もなかったんだ。そう、俺達是最強だ。

そんな俺と信のコンビが結成されようという時、馬鹿がとんでもないことをしやがった。

「くっそ、倍プッシュユだッ」

右手を天高くから振り下ろした鷺沢。そして高校野球のサイレンのような、終わったと感じさせる声が俺の隣から上がった。

「あ、それロンだよ。清一色、二盃口、純チャン、ドラドラ。やったよ智ちゃん！数え役満〜！一蹴くんトビだね〜！」

「馬鹿野郎〜〜〜〜〜ッ！！！！」

俺と信の渾身の馬鹿野郎の言葉。馬鹿じゃねえの馬鹿じゃねえの馬鹿じゃねえのッ！！！！

この世の終わりのように嘘だと呟く鷺沢。お前の頭の悪さは嘘じゃねえよッ！

目の前の場を眺める。鷺沢が出したのは三萬。唯笑の捨て牌は萬子中心で、一見萬子の待ちには見えないかもしれない。だが、九蓮宝燈（ちゅうれんほうとう）もそうだが、こういった捨て牌になることは珍しくない。だからこそ疑わなければならなかった。

現物で降りるのが最善だというのに。唯笑はおばさんと母さんから、天から降り立った天才と謳われる規格外の化け物だつてのに。

「これで四回連続ラスだね一蹴くん」

「い、いやいやいやいや！おかしいでしょこの人!?最初なんて、東一局で俺瞬殺されたんだけど!?なに、国士十三面待ちつて!?都市伝説の役満に刺さるつてどんな確立つすか!?」

「え?そんなに低い確率かなあ。でも、そつか。唯笑もまだ十回位しか上がった事ないし、珍しい役満だよね」

ほんと何言つてるのこの子。天文学的確率の役満なんだけど。看護師になる必要ねえだろ。

「ていうか鷺沢、お前振り込み過ぎなんだよ。こいつが普通じゃないって気付いたら、普通は現物で降りるべきだろ、脳みその代わりにサイコロ詰めた方がマシだな」

「だよな。しかも役なしでリーチとかマジで止めろつて。せつかく俺と智也で追い込もうとしてるのになんで邪魔するんだよ、場を読めよ馬鹿」

「年下に本気の言葉のリンチとか酷すぎだろ!」

この程度で涙目になるなんて、そんなに女に負けたのがショックか。安心しろ、俺達はいいつも黒須に負けているから。

「鷺沢、負け犬が人間の言葉をしゃべるのか？ワンだろ？ほら、鳴いてみるよ」

「容赦のなさがおかしい」

「それじゃ、張り切ってやってもらおうか。最下位の罰ゲーム、静流さんに電話してセクハラトク」

ワクドキなテンションの俺達と、無理無理と拒む負け犬。ははは、最初は嫌がつてもやっっているうちに楽しくなっていくはずだ。くくく、恥ずかしがる静流さんをもつと恥ずかしがらせることが徐々に快感となり、小僧はその甘美な背徳の味に酔いしれる事だろう。

「あんた等は冗談で済ませられるだろうけど、俺の場合は冗談じゃ済まねえから！年下なうえに上司なんだぞ！」「あ、ごめんね一蹴くん。もう掛けちゃった」せめて今坂さんだけは常識的でいてくれないっすかねえ!？」

「無理とか諦めるな鷺沢。お前ならおはようございませすつてノリで、おっぱい揉みたいですつて言える。自分を信じろ」

「信じてたまるか！」

「普段下ネタを逃げだつて否定して言わない智也が、自分のプライドを曲げてまで応援しているんだ。その気持ちに応えてやれよ」

「応えたら俺の人生曲がっちゃいけない曲がりかたしちまうんだつて！」

『セックハラッ！セックハラッ！』

「合唱うぜえッ!!」

うははははは！やっぱり弄れる年下がいるのは生活が潤うよなあ！

やいのやいのと素面の酔っぱらい状況の俺達と、逃げ場のない鷺沢……そしてもう一人。

「三上セクシヤルハラスメントさん。終わりました」

絶対零度の視線で俺達を凍らせるエリザベート陵。

「今坂さん？」

「うん、ごめんねいのりちゃん。本当は掛けてないから、ね？」

唯笑の声が心なしか震えていた。唯笑、年上の自覚あるか？小娘に気圧されてどうする。

「一蹴も三上さんのウィルスに侵されないように、マスクとアルコール消毒をしてから迎えに来てね？」

「あ、ああ。気を付ける」

「お前魂まで尻に敷かれる勢いだな」

「ここまでのりに言わせるあんたがおかしいんだ」

「誉め言葉と受け取っておこう」

鷺沢が陵を迎えに来るようになり一週間。これが今の俺達の日常だった。

「はあ？年始まで親父のところに戻るなあ？」

一時限目から講義がある日の朝、起き抜けの母さんの言葉に一気に目が覚めた。

「うん、いつまでもあの人を一人にしておくのも心配なのよお〜」

何が心配なのか。クソ親父なら南極でもペンギンを狩って生きていける埒外だろうに。

「んなこと急に言われたって、今は陵が家に来る日が多いんだぞ！男と二人にして心配じゃないのかよ!？」

年頃の男女が一つ屋根の下だなんて、陵の両親だつて許すはずが……

「全然」

「ですよねえ〜」

躊躇のない返答に思わず脱力してしまう。

「だって、これまで見てきたけど、あんたいのりちゃんに手を出すどころか、いつも友達の誰かを呼んでるじゃない。二人っきりの状況なんて最近見た事ないもん」

ええ、まあ。母さんの言う通り、唯笑や信はもちろんのこと、伊波や加賀達も呼ぶ事が多い。

「そりゃあ、彼氏と順調みたいだし、俺だつて気を遣うんだよ」

「……周りの女の子にはそんな気なんて遣わないじゃないの」

「なんだつて？」

「クソつまんない息子ねつて言ったの」

「聞こえてない振りをしたんだから更に酷く言うの止めろ！」

何が他の女の子にはくだ。俺の周りに彼氏持ちなんて白河や黒須だけしかいないだろ。白河に気を遣つた事など一度もないし、それこそ無駄な労力だけだな。あいつこそ俺に気を遣え。

「孫を見るチャンスもないようだし、私がいても意味がないでしょ」

「言い方が気になるが、まあ確かに。むしろいたら引つ掻き回されて腹が立ち、潰したいまである」

「あらあら、お母さんの百八ある技で消滅させちゃうぞ♪」

「煩惱しかなさそうな技だな」

「うるっさいわねえ。それじゃ、私は買い物に行くから、明後日から頑張るなさいよお。年始には面白い事になっているのを期待してるからねん」

「ちよ、待てや母親！」

呼び止める声も虚しく、母さんは能天気 hands を振りながら家を出ていった。

これが鷺沢が迎えに来るようになる少し前の事。ていうか、俺の晩飯は適当でもいいけど……

「あいつらの飯をどうしろと?」

「あ、いのりちゃん胡椒取ってくれない?」

「はい。こつちはもう出来ますけど、稲穂さんはもう少しかかりますか?」

「いや、こつちも上がるよ。唯笑ちゃん、お皿出してくれないか?」

「うん、大皿で良いかな?」

「オツケー」

キッチンでは三人の息の合った姿。ダイニングでは料理を待つだけの木偶の坊二人。

「おい、良いのか?小娘と信が新婚みたいになってんぞ」

「そういうあんたこそ、幼馴染が同棲している恋人同士みたいになってるけど」

「……そうなつてくれりやあなあ」

「はっ」

「なんでもねえよ」

信だったら唯笑を安心して任せられるんだが、お互いに恋人って雰囲気ではなさそうなんだよなあ。高校の頃はわりと本気で唯笑の事が好きだったようなんだがな。もっ

と自分に我侷になってもいいのに、あの馬鹿。

「いいからぼんやり座つてないで小娘を手伝つて来いよ。彼氏だろ」

「あんたに言われたくないっすけど、まあそうだな。いのりく、俺も何か手伝おうか？」

「ううん、一蹴はいつもみたいに待つてて。それが嬉しいんだから」

振り返つた陵が綻んだ笑顔で応える。その返答に鷺沢がドヤリやがる。

「戦力外通告されただけのくせにうぜえ」

「これが俺といのりの形なんすよ。そんなこと言うならあんたも言つてみたらどうっすか？」

馬鹿め。こいつは何もわかつていないな。俺が手伝うつて言つたらどうなると思つてるんだ。感涙の涙を流しながら助力を求めると決まつてるだろ。

「仕方ない、お前との格の差を見せてやるよ。おうい、俺様が手伝つてやろうか？」

「そのまま指を啜えて飢えていて下さい、お願いします」

この結果知つてたわ。

「……な？」

「何がな？だよ。格どころか次元が違うじゃねえっすか」

ばっつかお前、アレはアレだよ。照れ隠しが下手過ぎて、ちよつとばかり辛辣になつ

ちやう乙女心つてやつなんだって。……ねえな。

「うるせえな。お前の彼女、体の半分トリカブトで出来てんじやね？」

「あんた以外にあんな態度を取るいのりを知らないんすけどね」

「あんな態度以外を俺は知らんがな」

どんな波乱万丈な人生を送れば、あんなささくれ立った性格になるんでしょうね。

「お〜い、馬鹿二人。飯出来たぞ〜」

三人が両手に皿を持ってテーブルへとやってくる。母さんが親父の下へ旅立ってから、これが三上家の日常となっていた。

全員が席についていただきますと手を合わせ、各々大皿から料理を取り分ける。

ふむ、今日のメインは明太子パスタか。これは信が作ったものだな。あとは生ハムサラダにヒラメのカルパッチョとマルゲリータか。イタリアンにでも凝ってるのか？まあ、好物ばかりだから問題はないけどな。

「智ちゃん、そういうえばもう少しで冬休みだよね？」

「ああ、ようやくな」

「ようやくって、あんた真面目に大学行ってたのかよ？」

「黙れ小僧。お前は進学しねえんだから早く就職先探せよ。つうか食費払え」

「コックへの手数料もな。あ、唯笑ちゃんタバスコ取ってくれない？」

「はい。そんなことより、智ちゃん冬休みと言えば一大イベントがあるよね？」
「ちよ、唯笑ちゃんこれケチャップじゃんか」

「一大イベント？あ、天皇誕生日だな。今年はどこぞの国みたいに、国民全員で天皇を讃えんのか？そいつは確かに一大イベントだな。ほれ、タバスコ」

「ああ、サンキュって、お前はイタリアンをわさびで食べるのか!？」

「辛味って共通点があるから平気だろ」

「そうじゃないよ智ちゃん！冬の一大イベントと言えば!？」

「天皇誕生日じゃないとなると、ああ！世界で一番ご懐妊率が高い日だな！」

「うわ、この人最低だな」

「事実だろうが」

「ご懐妊？んく……ああ！誤解人だね！」

「お前、本当に看護学校に通ってる？」

「そういえばいのりはクリスマスって？」

「私はその日は反面教師の日じゃないから、ずっと一緒に一蹴といられるよ」

「一蹴、無言でガッツポーズするなって。ガチ過ぎて怖い」

「おい小娘、反面教師とは随分な言い分だなあ。お前のパスタにガムシロップぶち込むぞ」

「ふふふ、三上さんって冗談ばかり言うんですよね。あ、ホイップクリーム持ってこない」と」

「対抗心バリバリじゃねえかよ」

「もう！ご懐妊率とかそうじゃなくて、一大イベントといえはアレだよおッ！」

「なんだよさつきから。どれだよ。スペクタクルでセンサーシヨナルな一大イベントならんぞ他に知らねえよ」

カオスな会話が行き交い続ける家庭教師の日の夕食だが、この日ばかりはほんの少しだけ時間が止まった。

「だから、クリスマススイヴだよお！恋人の日は唯笑と一緒にいてくれるよね？」

あく、恋人の日ね。恋人ねえ。誰と誰が？

「え、あ？あく、そうだったんすか。今坂さんとあんたが恋人ですか。へえ……え、マジで？」

タイムラグは数秒だが、確かに時間が止まった。あまりにアホな発言に。

だが、本当に時間が止まったのは唯笑の発言にじゃなかった。時を操る魔術を使用したのは……

「いつもの妄言だ。こいつと俺は家族でそんな関係じゃない。大体その日は詩音と出掛ける用事があるんだよ」

どうやら俺だったらしい。

唯笑の瞳から光が失われ、信は手に持ったピザからチーズが垂れていて、小僧はそんな二人に詩音つて誰だよ？と尋ねている。だが、魔術耐性があるらしい陵だけは、我関せずと黙々とサラダを食べていた。

まさかとは昔から思っていたが、もしかして俺には本当には人とはい違う能力があったとは……聖杯戦争に参加したり、どこぞの街でナチスと戦うか。

「え？え？え？智ちゃん、どういふことかなそれ？唯笑聞いてないよ。ねえねえねえねえねえねえ？」

「お前急にキャラ崩壊して病んでんじゃねえよ！近い近い怖い！」

キスどころか目を抉られそうな恐怖を抱く。

「智也どういふことだよ！俺は何も聞いてないぞ！」

「恋人風に問い質すの止めろ！なんでただ友達と出掛けるだけでこんな大騒ぎになる!?!」

「そりやあイヴに女と出掛けるってなったら、普通はデートだからじゃないですか？」
「ちよつと黙っててくれないか小僧。さもなくば折るぞ」

そこまで騒ぐことかよ。詩音だつてそんな恋愛脳全開で一緒に出掛けるわけじゃないだろうし。

「あの、詩音さんってどなたなんですか？」

「詩音ちゃん？ 詩音ちゃんはねえ……詩音ちゃんは……唯笑にライバル宣言した強敵なんだよお~~~~ツツ!!!!」

なんじゃそら。初耳だぞ。あいつもこいつになにしてくれちゃってんだよ。詩音まてアホの子になるつもりか？

「いえ、それはどうでもいいんですけど」

「良くないよお！」

狂乱している唯笑の代わりに信が陵の質問に答える。

「双海さんっていうのは端的に言えば、智也への好感度マックスのシリーズ最強ヒロインなんだ」

「メタい説明はいかんだろ」

下ネタと並んで俺が嫌いな発言しやがって。

「お前等は少し黙ってろ。詩音は俺の友達で、帰国子女のクォーターでだな、しかも紅茶マニアで紅茶の話になると一日は語るとい病気を持つやつだ。キャラ強すぎだろ」

俺が珍しくまともに紹介すると、陵はクォーター……とぼつりと呟いて黙り込む。なんだってんだ。

「で、その人って美人なの？」

「正直、いのりちゃんを凌駕する」

「信、てめえは今俺の踏んじやいけない地雷を踏み抜いたぜ？」

「一蹴くん……残念だけど本当なの。唯一対抗できるとすれば唯笑だけだと思うな」

「凶々しいなお前」

臆面もなく堂々と言えるその神経の凶太さはどこで買えるんだろうな。

その後もギヤースカとうるさい夕食が続いた。もちろん陵も小僧優先でいつも通りに会話に参加していた。今の俺と同じように、な。

唯笑達が帰った後、信と俺の二人で夕食の片づけをしていると、信は少しだけ嬉しそうに口にした。

「それにしても驚いたなあ。まさか双海さんとだなんてな」

「あのなあ、何勘違いしてんだお前は。詩音にはちよつと俺の用事に付き合ってもらっただけなんだよ。美味しい紅茶の店に連れていくって条件でな」

「用事？デートがメインじゃないのか？」

わかつてるくせにこいつ、俺をわざとからかってやがるな。

「なわけあるか。ちよつとした下らない用事さ。詩音が用事に一番適したやつだったっただけだ」

「ほほくん。となると、やっぱり本命はいのりちゃんなわけか」

思わず拭いている皿で頭を勝ち割ってやろうかとしてしまう。危ない危ない、サスペンス劇場がここで繰り広げられるところだったじゃないか。

「どうしたらそうなるんだっての。あいつには鷺沢がいるし、俺はあいつらが一緒にいることを望んでいるんだぞ？ じゃなきゃ、あんな馬鹿みたいに動き回るかよ」

「そうか？ じゃあなんでいのりちゃんが来る時、毎回誰かしらを呼ぶんだ？」

「そりゃ、男女が二人つてのは向こうの両親にも、言うまでもなく鷺沢にも悪いからだろう」

「その気もないのに、随分気が回るんだな」

その気がおきそうで怖いからじゃないのか？ 暗に信はそう俺に問いかけているが、それに取り合わず俺は黙々と皿を拭いていく。

「ま、それはそれでいいさ。でもな、智也……そんなんじゃ俺は誤魔化せないぜ」

「しつこいぞ。人間不信もいい加減にしないと」

「お前もいのりちゃんも、最近ずつと目を合わせようとしていない」

信のその一言に、皿を拭く手を止めてしまう。こいつ、気付いていたのか？

「正確には、眼を合わせている振りをずつとしていているよな。まるで示し合わせたかのよう」

そう、信の観察眼は実に優秀で、まさにその通りだった。あいつがどういふつもりかは知らないが、陵も俺もずつと目を合わせているふりをし続けている。

「いのりちゃんだけだったなら俺は別にどうとも思わなかつたけどな。ああ、今回もダメだったか……てな。けどな、お前まで同じつてのはどういふことだ？」

まったく、この分じや唯笑にもバレているだろうな。ああ、そうだよ。俺は陵から全力で目を逸らし続けている。理由は……

「これ以上近づきたくないんだろ？ そうじゃないと、お前の気持ちちが、抱え続けてきた想いが壊れるんじゃないかって怖いんだろ？」

そう……考えてしまうのも無理はないだろうな。それでいい、唯笑も信も勘違いしてくれているのなら、それが俺の救いになる。

「でもな、そんな事で壊れてしまうような、そんな脆いもんじゃないだろ、お前の彩花ちゃんへの想いはさ」

ああ、そうだよ。俺の彩花への想いが壊れるなんてことは永遠にない。あつてはならない。だからこそ、俺は陵へと近づけない。俺の一番は彩花なんだ。だから、俺はまだ……

「でもな智也、俺は——ッ」

信がなおも続けようとする言葉を、俺は微笑みを向けて黙らせてしまった。

「悪い、信……もう少しだけ、さ……勘弁してくれよ」

俺の所為で信が苦しみ続けているのは誰よりも俺が思い知っている。俺が踏み出せなければ信が救われることはない。それでも、だ。俺には誰かを愛する資格なんてないんだ。最初から俺に誰かを愛する権利なんてない。誰が許そうと、俺だけは俺を許さない。極刑、なんだよ。自分で自分を罰することしか俺には出来ない。世間が俺を罰してくれないのだから、そうするしか道なんてなかったんだ。

「智也？」

「悪いな信。だが、いい加減はつきり言っておくな。俺は……」

——俺が誰かを愛する事は生涯をかけて有り得ない——

「だつせえな、俺……」

俺の言葉に信は力をなくしたかのように、そうかとだけ呟いて落胆して家を出ていった。

信を傷つけてしまう言葉だったのは知っていた。知っていてあえて俺は言葉にしたんだ。そうでもしないと、信は俺を見捨ててなんてくれない。諦め悪いからな、俺の最高の親友はさ。

「ごめんな、ごめん」

わかってくれなんて勝手な事は言えない。信がこれで俺から離れてくれるのなら安いもんだ。俺の身勝手な罪悪感なんてどうでもいい。

「けど、諦めてなんてくれねえよなあ」

この程度じゃあいつは諦めない。どうやら、あいつの幸せの最低条件は、俺が誰かと歩んでいくことらしいからな。まったく、難儀な事だ。不毛な願いを俺達は抱いて生きていかなくちやならないなんて。

俺は俺の幸福なんて望んじゃいない。いいや、むしろ幸福であつてはならないと堅く自分に言い聞かせ続けてきた。

これでいい。これまでのように、俺はどんどん独りになっていこう。彩花が最後の一人となるまで。

「仕方ねえだろ。俺はこんな最低な屑なんだ。お前だつて知ってるだろ。俺よりも俺の事を知っているんだから」

窓辺に感じる気配。鍵を閉めずに過ぐす日々の影をそこに見る。

「だから、そんな泣きそうな顔で俺を見るなよ彩花」

ほらな、俺は最低だ。最愛をこんなにも悲しませているのに、俺は自分の生き方を変えられないんだからな。

「……電話、しないとな」

電話帳に新たに加わった名前。その人へと連絡を取る。電話をした瞬間、背中に懐かしい重みと温もりを感じ取る。

そっか、お前も受け止めてくれるか……

彩花がいてくれるのなら、もう俺は逃げる必要はない。過去と決着をつけるんだ。

「もしもし、お疲れ様です」

窓の外、夜空を見上げる。夜空に星はなく、一面を厚い雲が覆っている……そんな寂しい夜空だった。

詩音さん……名前を聞いた瞬間、それが誰なのかは聞かなくても勝手に頭の中にあの日の幻想的な映像が浮かんだ。そう、なんだ。あの人と三上さんはクリスマスイヴを過ぎすんだ。

「でもさあ、信の料理も美味いけど、やっぱいのりの料理が一番俺にあってるんだよなあ」

「そりやそうだよ。だって、一蹴の好きな味を私が一番知ってるんだからね」
「だよな」

三上さんはデートじゃないって言うていたけれど、きつと詩音さんは三上さんの為に

一生懸命オシヤレしてくるんだらうな。

「あとさあとさ、驚いたよな！三上……さん。あいつに付き合ってる人がいるなんてな。世の中には物好きがいるもんだよなあ」

「そうだよね！私もびつくりしちゃったもん！」

イヴの前の日はどんな服を着ていくか悩んで眠れなくて、あそこに行こう、ここに行こうって想像するだけで楽しくて胸が高鳴って。

「しかもとんでもない美人って、一度会ってみてえ〜」

「あ〜！一蹴、その美人な人に会いたいだけでしょ〜！」

「な、馬鹿違うって！」

待ち合わせに早く着いちやって、三上さんが走ってくる姿を今か今かと待ちわびて、遅れてきたことを謝る三上さんに嬉しそうに怒って。

「俺にはいのりがいるし、もう全然他の女に目なんか向かないから！」

「ほんとかなあ？一蹴って女の子にすぐ優しくするから心配だなあ」

もうしようがない人ですって言って、彼の手を取って歩き出す。道行く恋人と同じように、凍えそうな手を温め合って……

「そんなことねえって！それにほら！」

一蹴の手が私の手を掴む。妬ましくて眩い夢から現実へと引き戻される。

「俺がこうして手を繋ぎたいって思うのはいいのりだけだから」

「うん、私も一蹴だけだよ」

嬉しそうに微笑む一蹴と、笑顔の仮面を張り付け続ける無様な女。

手の温度とは裏腹に、心の温度はどんどん下がっていく。凍り付いて痛みが走るけれど、私はそれを呑みこむ。

だって、私はこの手を離すことは出来ない。それを三上さんは望まないし、私が自分の気持ちに素直になつてしまうと、一蹴だけじゃない……三上さんを傷つけてしまう。だから、私は気持ちを嘘で塗り固めていく。虚飾がいつの日か本当に変わるように願いながら。

そうして、吐き気をする自分を私は否定しながらも受け入れる。

「そうだ、明後日ついでいのり暇だろ？」

「うん、そうだけど」

「俺も就職活動でならずやを辞めるし、忙しくなる前に二人で久しぶりに出掛けようぜ」
一蹴の願う私、三上さんが望む距離。それを忠実に実行する。そうすることが誰も傷つける事のない最善だから。

「へへ、じゃあその日は一蹴を独り占めだね」

「それは俺のセリフだつての」

そう微笑み合いながら、どちらからともなく唇を重ねる。

初めて……初めて一蹴とのキスが痛く感じられる。胸が疼いて叫び出したい。浅ましい自分が自分を糾弾する。お前ほど醜悪な女はこの世に存在しないと。

久しぶりの一蹴とのデートはやっぱり楽しくて、二人でいる空気が心地いい。

この日は冬晴れで、街行く人々も太陽の少しの温もりはどこか活気づいているよう。クリスマスが近い事も活気づく理由の一端なのだろう。

とある有名なアウトレットモール内はクリスマス一色で、中央には目玉の大きなツリーが眼下の人々を見守る。

「なんか、こうしてデートしてるとき、本当にいのりとまた恋人に戻れたんだなって実感しちゃうな」

「うん、私も」

あの頃と気持ちに差異はあるけれど、こういう時間を重ねていけばこんなこと気にならなくなる。一蹴の事が嫌いになったわけじゃないもの。あの頃と好きな気持ちは変わらない。変わらない……だから、こんなにも私は……

「そうだ、ここら辺に静流さんのお勧めの喫茶店があるんだよ。行ってみるか？」

「そうなんだ！楽しみだね」

悲劇のヒロインを気取る。舞台の袖から、主人公の傍に居られるお姫様を眺めるしか出来ないくせに。

一蹴に手を引かれ、こつちだったようなと歩いていく。

小さな看板の小さなお店がひしめき合っている。だからかな、一蹴は目的のお店を見つけるのに凄く苦勞している。

私の為に一生懸命になってくれるその気持ち嬉しくて、ぐちゃぐちゃ考えている自分に嫌気が差す。

こんなに一生懸命に楽しい日にしてくれようとしてくれる恋人がいる。それ以外に何が必要なのだろう。それだけでいい。一蹴が私をきつと……

「あつた、ここにだここにだ！」

「あ、ここに……」

前に女性誌のデートに行きたいスイーツ店でピックアップされていたお店で、私も一度は来てみたかったお店。そのお店の名前は……

「いらつしやいませ〜！」

『ファミリーユブリックモール店』だ。

店内に入ると、メイド服風のコスチュームの店員さんが笑顔で迎え入れてくれる……と思ったのだけれど違った。

「二名様でしょうか？かしこまりました、ではこちらの席へどうぞ」

仏頂面の愛想のない美人さんだった。

「あ、いらつしやいませー！おい里伽子、もうちよつと愛想をだな……」

「はいはい、いいからあんたは卵を愛してなさい。あ、いらつしやいませ」

「だ〜か〜ら〜！」

奥から出てきた男性の文句もなんのその、彼女はすぐに新たに来たお客様の対応へと向かった。

あ、アットホームなお店、かな？

「……綺麗な人だったなあ〜」

「一蹴？」

「ち、違うぞいのり！今のは客観的な意見で！」

ま、まあ一蹴が感嘆の息を吐くのも頷けるけれど、愛想はないけれど、間違いなく美人だったし、年上特有の艶っぽさもあつたもんね。

「それよりほら、ここのケーキがめちやくちや美味いつて静流さんが言つてたんだ！なんでも知り合いのパティシエが作っているらしくて」

「へえ、静流さんがケーキの事で絶賛するなんて珍しいね」

ケーキに関して静流さんは嘘を言わない。それどころか、いつもよりも厳しい評価を

する人だから、その静流さんが絶賛するケーキがそれほど美味しいのか期待してしま
う。

「え〜つと、どれにしよつかなあ」

メニユーを見ながら、クロカンブツシユやブツシユドノエルといったクリスマスらしいメニユーに目が行く。あ、クラシックシヨコラも美味しそうだけれど、チーズスフレもいいなあ。

味への期待と値段の安さについて目移りしてしまう。そうして二人でメニユーと睨めっこしていると、ふと奥の席に見覚えのある姿がある気がした。誰だろうとそちらに目をやると……

「ん? どうしたいのり?」

「い、一蹴隠れて」

「は?」

「いいから隠れて!」

椅子を一蹴の隣へと移動させて、一冊のメニユー表で二人で顔が隠れるようにする。

「おい何を……つて、あれは……」

一蹴も気づいたらしく、私と同じようにひそひそとした声になる。

だって、奥の席にはいつもとは違う落ち着いた服を着て大人の顔をした三上さんが

いて、それともう一人……

「三上？ていうか一緒にいるのって誰だ？」

詩音さん……じゃない。詩音さんや三上さんよりも年上で、ビシツとスーツを着こなした大人の女性が三上さんと話をしていた。

「へえ、そういうことか。三上って年上の人と付き合ってたんだな」

「……多分違うよ」

恋人という雰囲気じゃない。だって、三上さんのあんなに強張った顔初めて見るもの。緊張で周りが見えてなくて、心なしか震えているようにも見える。

「何話してるんだ？」

「良く聞こえないね」

周りの雑音に二人の声が掻き消されて、ところどころしか会話が拾えない。

三上さんの尋常じゃない雰囲気、私は我知らず一蹴の服の裾を掴んだ。

「いのり？」

何が、あつたんですか？いつもの人を喰った余裕な態度の三上さんはどこに行ったんですか。それにその人と三上さんはどんな関係ですか？恋人、じゃないですよ。別れ話よりもずっと重い空気ですもん。

私の緊張が伝わったのか、一蹴も黙り込む。せつかくのデートが台無しだけれど、そ

れでも一蹴も気になるんだ。三上さんのあの今にも逃げ出したくて仕方ないといった弱った姿、その理由が。

私達はこの日、稲穂さんも今坂さんも知らない心の奥底にいる三上さんを見てしまう。見てはいけない、誰にも知られてはいけないはずの彼の本当の姿、臆病で泣いてばかりいた小さな子供の三上智也を。

「……は、私も子供だったのね」

ところどころ聞こえ始める会話。口の動きでなんとなく理解してしまうけれど、彼女の言葉がどういった意味を持つのかまではわからなかった。

彼女の言葉に三上さんは違いますと首を振り、そして……

「申し訳ありませんでした。これまで俺はずっと、ずっとあなたに、貴方達に俺……取返しつかない事を俺はしたんです。こんなことで許されるわけではありませんが、この先もずっと俺は謝り続けます。絶対に忘れません。本当に、申し訳ありませんでした」
誠心誠意の謝罪。誰にも見られたくないはずの三上さんの懺悔の姿。突然の事に私も一蹴も顔を見合わせる。

「い、いのり今日はちよつとこの店はやめておこうか」

「そ、そうだね、今日は、ね？」

見てはいけない光景に気まぎれなくなり、すぐに店を出ようとそこそこ荷物を手にする

る。そうしながらも、耳だけは金縛りにあつたかのように二人の会話へと注意を向けたまま。それは一蹴も同じようだったらしくて、だからこそ私と一蹴は次の三上さんの言葉に、足元が崩れ去ってしまったかのような衝撃に声をなくしてしまったのだ。

「三上君そういうのはいいの。あの日悪かつたのはどちらでもない、運が悪かつただけなの。本当にそれだけで、それなのに私があなたに……」

「違います。確かにあの時は運が悪かつたかもしれませんが。でも、その後俺は……運なんかじゃない。俺、なんです。俺が——！」

外に出て私達は言葉もなくブリックモールを後にして、自分たちが暮らす街へと帰る。とても私も一蹴も何かを話せる心境ではなかったし、口にはいけない鎖が口を覆っているような感覚で、ただただ三上さんの背負う十字架の重みに震えてしまいそうになる。

「どういうこと？違う、三上さんがそんなこと……でも、あの言葉はとても嘘には思えなかった。じゃあ、どういうことなの？」

今坂さんや稲穂さんに尋ねようにも、もしも二人が知らなかったらと思うと、とてもそんなこと聞きだそうだなんで出来ない。

駅に降り立ち、曇り空の夕暮れを一蹴と帰り路を歩く。本当なら楽しい気持ちのまま

帰ってきて、一蹴の家で二人で一緒に食事をして、二人で……

「なんなんだよ」

「え？」

困惑に彩られた一蹴の声には苛立ちも垣間見えた。

「俺、あいつに信の事聞いたんだ。それで、さ。多分三上は愛している人を失ったんだって、今も愛し続けたままなんだって、そう思ってたんだ。だから、今もずっと二人は後悔しているって」

それなら私も後に稲穂さんから聞いた。稲穂さん自身の話も。交通事故から始まった悲しい絆。だけど今は優しさで紡がれた絆。そんな悲しくも美しい素敵な話で、自分の所為で失ってしまった幸福を三人は悔いて雨の中を生きている……そのはずだった。

「俺さ、正直あいつの、三上の強さ？みたいなのに嫉妬してんだ。だってさ、世界で一番愛していて、産まれてからずっと一緒だった掛け替えのない人を失ってさ、それでも今もずっと変わらせずに、その人を愛し続けられるってさ、他の人間からしたら馬鹿みたいな綺麗事じゃん？それでも、あいつは笑顔で辛そうにもしないですってさ……」

一蹴の言いたい事は私の気持ちそのもので、だからこそ悔しい。

「なのに、あいつ！あ、あいつ何して！」

俺達の事なんか気にしている場合じゃないだろうと、小さく呟く。

「何があつたかなんてわかんねえけど！でも、あんな……俺、あんなのに助けられたのかよッ！あ、あんなに……あんなに苦しんでいる奴に助けてもらったのかよッ!!」

苦しんでいる、その一言で済ませられるものじゃない。三上さんはこれまで何年もの間一人で孤独に戦い続けてきたんだ。せめて自分の周りの人達の笑顔が曇らないように……

「情けねえ、情けねえよな……何がどうなつてんのか、あいつが何を背負つてんのかわかんねえけど、俺達に出来る事ねえのかよ。貸し、返せるの今じゃねえのかよ」

「……どうしたらいいかな？」

「あんな話聞いて黙つていられねえよな。そうだ、信にッ！」

「それは駄目だよ。三上さんは多分誰にも話していないと思う。なんとなく、だけどそう思うな。そういう人だもん」

「じゃあ、どうしたら……このままじゃあいつ！」

一蹴は綺麗だね。自分の事を助けてもらったから、純粹に三上さんを今度は自分が助けてあげたいんだね。本当に、一蹴は優しい。私なんかと違って。

「独りじゃん。あいつ、こんなの独りで背負い続けるのかよ……」

だって、私……嬉しいって思っちゃったんだ。

「そんなのいくらあいつが強いつたって耐えられるわけねえじゃんか」

今坂さんも稲穂さんも、詩音さんも知らないはずの三上さんを私だけが知っている。それを私は……

「んだよ、何があつたんだよ、三上は何をしたんだ？ どうしてあんな……」

——俺が殺したんです。俺は最低な人殺しです——

臆病で泣き虫で弱虫な貴方を自分だけが知っている優越感がこんなにも嬉しいの。

彼の水底、彼女達の水面

これはどこにでもある小さな家族のなんでもない話。共働きの両親と、両親の代わりに妹の面倒を見る優しい兄と、自分を守ってくれる優しい兄が大好きな妹の、そんなどこにでもあるお話。

裕福とは言えないその家族は小さなアパートに四人で暮らしていました。両親は子供の為に夜遅くまで働き、兄は両親の代わりに高校に上がるまでは家事と妹の面倒を見ていました。

六つ下の妹はとてもお転婆で、同級生の男の子と混じって遊んでは服を破いてしまひ、それをいつも兄が繕って窘める。窘めているのに、妹は何が嬉しいのかいつも笑って兄に抱き着きます。そんな妹に仕方ないなあと苦笑して、妹が寝付くまで一緒に遊んであげます。

妹が寝付いた後、兄は宿題と予習の為、遅くまで机へと向かいます。せめて自分に苦勞を掛けさせないようにと、特別推薦枠を狙うために彼は部活や友達との遊びにも目もくれず、小さな妹の面倒と勉強を優先させたのです。

妹が中学生になる頃、兄は大学に行かずに税理士試験を受けて合格し、税理士として

働くことになりました。同級生のほとんどが大学に行く中、彼は就職を希望したので、自分はお兄ちゃんだから、妹に同じ苦勞を掛けたくない、生活の為に進學を諦めました。そんな兄に妹は言いました。余計なことしないで、大学に行けばいいじゃないと。兄は妹の言葉に目を丸くし、大声で笑い転げました。兄がどうして笑っているかわからない妹は、馬鹿にされていると思い憤慨します。しかし兄は妹の頭へと手を伸ばし、優しく労わるように言います。僕は君が幸せになれるようにしたいから、だから就職するのだと。それが自分のやりたい事なのだ。その言葉に妹は背を向けて応えま
す。溢れ出てしまいそうなものを見せたくなくて、下手くそな照れ隠しをしたのです。

妹が高校に上がると、兄は年頃なのだからと服を買ってくれるようになりました。自分
分は古い服ばかり着ているのに、そんなことも構わずに妹の服を買います。もう何を
言っても無駄なのだ、兄は自分をどうしたって優先してしまう馬鹿な人なのだ、妹
は諦めて苦笑してしまいました。

そうしていくつかの季節が過ぎた頃、家族にある事件が起きました。なんと心優し
い兄に恋人が出来たのです。兄が両親に紹介したい人がいると連れてきて、初めて妹も
兄に恋人がいる事に気が付きました。同僚だという女性はビシツと格好良くスーツを
着こなす綺麗な人で、不覚にも妹は溜息をしてみました。それと同時に悔しくもあ
りました。兄の特別は自分だと自負があったのに、兄にとってはそうじゃなかったのか

と悔しくて悔しくて、妹は女性を認められませんでした。結婚を考えているという兄の言葉に、両親よりも妹が反対の言葉を真つ先に口にするくらい妹はシヨックでした。喜んでくれると思っていた妹に反対され、兄は困ったように頬を掻いて苦笑します。絶対に認めるものかと、妹は頑なに反対し続けました。

そうして何か月かすると、女性の姿が見えなくなりました。妹はやつたと心の中で喜び、これまで以上に兄に甘えるようになりました。頑張つて手料理を振舞つたり、兄と休日映画を観に行つたり、兄を独り占め出来ることが嬉しくて仕方ありませんでした。このまま兄とずっと暮らしていきたいと妹は願いました。ですが、ある日の夜中に兄が携帯電話で小声で話している場面を覗いてしまいました。電話の相手は誰かなんて聞かなくてもわかります。きっとあの女性はまだ諦めていないんだ、しつこいなあと妹はほくそ笑みます……電話を切った後の兄の言葉を聞くまでは。愛おしさでいっぱいのごめんの言葉を聞くまでは。

妹は馬鹿でした。兄は妹の幸せな未来の為にあらゆるものを犠牲にしてきたのに、自分子供っぽい独占欲で兄の幸せを願えもしないのだと、その時になつて妹は気付いたのです。兄の笑顔が好きなのに、兄の笑顔を曇らせているのは自分だと。自分の愚かさに涙し、後悔ばかりが胸に押し寄せます。そうして一晩中泣き続けたあくる日の朝、出勤前の兄に妹は一言呟いたのです。あの人、また連れてきて……と。

そうして、兄と女性は婚約へと至ったのです。妹が大好きな兄が、兄が大好きな妹が、お互いの幸福を願い合えて得られた幸せ。妹は兄の恋人とも家族のように仲が良くなくなり、そんな二人を兄は何よりも嬉しそうに見守りました。

これはそんな有り触れた家族のお話。たったそれだけの、なんでもないお話。雨が降り始めるまでの、小さな小さな幸せのお話……

ここ最近、俺は妙な違和感に捕らわれている。それは小さな違和感だが、最近はその違和感が顕著に表れ始めている。

例えば陵が勉強をしている間暇で、なんととはなしにテレビを点けた時の事、東京で通り魔による殺人未遂事件があったというニュースが丁度やっていた。都会はいろんな奴がいて物騒だなあと感想を抱いていると、陵が瞬時に足を器用に使ってチャンネルを変えた。ていうか人の家のチャンネルを足で扱うなよ。

「お前な、人が世情を知ろうと真面目に観ている時に何してくれちゃってんの？」

「いえ、三上さんにはニュースなんて高尚な物よりも、俗物的な番組がお似合いです」

「喧嘩売ってんのかテメエは」

「そ、そうだよなあ！あんたにニュースなんて似合わない！うんうん！」

「ほお、ならこれなら似合うと?」

「ああそうさ! あんたはそういつた下らない番組を観ているのが「〇ロフェツシヨナル
なんだけどな」……いのり、こういう時の対処法の手本を見せてくれ」

「下品な三上さんはそういう真摯に何かに打ち込む人達を観て勉強した方が身の為なんです。いわば私達の思いやりなんです。どうぞ受け取って下さい」

「すげえ重い槍を刺しにきてんじやねえよ!」

「みたいなきがあつたり、今日に至つては唯笑が魚を触れないというので、仕方なく俺が捌くことになったわけだが、包丁を手を持った瞬間、俺の手の中にあつた包丁がいつの間にかにんねこにすり替わつていた。いやな、だから微妙にミスっているんだよなあ。キツチンに猫つてあかんやん。」

「ど、どうつすか? 俺最近イリユージュヨニストになろうかなあつて練習してるんすよ」
「……にんねこ、殺つてしまえ」

小僧ににんねこを投げると、落ちるまいと必死に小僧にしがみ付く。鋭く尖った爪を懸命に突き立てながら。

「ぎゃー……!! 包丁よりも凶器度たけえツ!!!」

というように、違和感が充満している。まったく意図がわからんところが苛立つ。ネ
タの振り方が雑過ぎだろ。

こいつ等のコントが発症したのも問題だが、もう一人頭が狂った人がいる。まあ、あの人は元から狂っているけどな。主に見各方面が。

俺がしこたま酒を呑んで酔い潰れ、記憶が飛んでしまった日がある。ちよいと自分身の脆弱さに嫌気が差し、アルコールに頼って忘れようとしたのだが、自分のキャパを超える量を呑んでしまった俺は、その後の記憶がないまま朝を迎えたのだが、なぜかは覚えていないが、酔い潰れた俺が目を覚ましたのは『ならずや』でだった。

ガンガン痛む頭に呻きながら起きると、コーヒーを黙って優しく置いてくれる人がいた。静流さんだ。静流さんは何を聞くでもなく、酔い潰れるほど呑むなんて珍しいねと、笑いながら語り掛けてくれた。正直、理由を聞かれても答えられなかつただろう俺には、その気遣いが嬉しく感じられたんだ。

でだ、問題は数日後の事だ。大学に行く直前の俺の携帯に自称ビュリーホーOLからラインが入っていたのだ。曰く、『シズル、キケン、キヲツケルヨロシ』と。誰だよあんな。

小夜美さんが何を言いたいのかは皆目見当がつかない俺は、小夜美さんに『あなたは脳内が危険だから気を付けたほうがいい』と返した。

というように、俺の周りの三人が突如としてポンコツになるという異常事態が起きてしまっている。キャトルミューティレーションでもされたか？

てなことを陵達が帰った後、唯笑と話していると、唯笑はそれは違うよ智ちゃんと、海外コメディを観ながら呟いた。

「おかしいのは三人じゃない、五人だよ」

「お前がおかしいのは元からだから勘定に入っていないんだよ」

「智ちゃん、信君が最近来ないよね？どうして？」

俺の軽口には取り合わず、テレビに視線を向けたまま唯笑は核心を突いてくる。

そう、だよな。唯笑が気付かないわけがない。信が一週間以上現れないのは異常なんだ。旅に出ているのならまだしも、帰ってきているのに俺の近くにいないなんて不自然なのに。

適当に誤魔化そうとも思ったが、さすがに不謹慎だなと思い直し、正直に唯笑に告白することにする。

「ちよつと喧嘩しちゃってな……しばらくは信は来ないかもしれない」

あえて俺は信を傷つける言葉で刺したんだ。信だって俺がわざと突き放した事には気付いているはずだ。だから、信は……

「喧嘩、なんだよね？」

「ああ、俺が一方的にあいつを傷つけたんだ」

俺の言葉に唯笑は更に迫及してくるのではと身構えた……が、唯笑はそっかあ〜と笑

うだけだった。

「なんだ、怒らないのか？」

「どうして？だって喧嘩なんだよね？」

喧嘩と言つても俺が一方的に悪いのだ。唯笑にもそれは伝わったはずなのに、それでも唯笑は笑うだけ。

「智ちゃんと言君は親友で家族だもん。だから喧嘩だつてして当たり前なんだよ。それに、信君は智ちゃんと喧嘩したくらいで来なくなるような、そんな軽い親友じゃないもん。きっと信君は智ちゃんの気持ちかわかっちゃったから会いづらいだけなんだよ」

なんてこつた、まさか唯笑の言葉に安心してしまうなんて。もしかしたら信とは年単位で会えなくなるかもしれないと、少しだけ不安だった。俺が言った言葉は、信の求める未来を完全に否定するものだったはずだから。

「怖いやつだなあ、そこまであいつの事見抜いてるのかよ」

「そりゃあ、智ちゃんが信君を知っているのと同じくらいはね。でもね……」

不意に唯笑はテレビを消し、俺の目の奥……心を見透かしそうな真つ直ぐな瞳を向けてくる。

「私はこう言つたんだよ？おかしいのは五人だつて」

唯笑が自分の事を私と言う。俺や彩花や信、家族に甘えてはいけないと自分を叱咤

し、一人の人間として誰かと向き合う時の唯笑がそこにいた。

知っていた、唯笑が俺達の前で以外は自分を私という事。家族としてではない、一人の人間として大人になる、現実立ち向かう決意の証がそれだという事に。

「確かに皆おかしいよね。でもね、一番おかしいのは智ちゃんだよ」

揺るがない意思を瞳に宿し、唯笑は俺が逃げる事を許そうとしない。

「おかしいって、お前失礼な——」

「彩ちゃんを失ってからじゃない、智ちゃんはあの時からずっと」

「唯笑ッ!!!」

その先を言わせてはいけないと脳よりも先に心が警鐘を鳴らした。

信には絶対に知られてはいけない過去、唯笑がなりふり構わず見ない振りをしてきた最悪。

言わせない探らせない……お前達には絶対背負わせない。俺の最優先事項。

俺の怒声はしかし、今の唯笑には抑止力にもならなかった。なぜなら、唯笑は今俺の家族として話していないのだから。

「時間が解決してくれるならって、私はずっと甘えてた……でも、それじゃあ駄目だったんだよね？」

「止めるよ、唯笑……それ以上は……」

「智ちゃんをあえて信君を突き放したんだよね？その理由は何？」

「頼むから、もう」

「もしかして智ちゃん、今度は私の事も自分から——」

「止めろって言うてんだろッ!!!」

ソファーから立ち上がり、話は終わりだと無理矢理に会話を終了させる。これ以上続けてしまえば唯笑は辿り着いてしまうと、嫌な汗が背筋を伝ってしまった。

「そんなわけねえだろッ!!お前は彩花と俺の家族だろうが！それなのに俺がお前を突き放すなんてあるわけねえだろッ!!」

「家族だから、じゃないのかな？」

俺の激情を唯笑は涼しい顔で受け止め、それでも真実を追求しようと手を緩めてはくれない。いつの間にこんなに強くなった？俺と彩花よりもずっと強くなるなんて、そんなこと考えてもいなかった。

「私は知ってるよ。智ちゃんが彩ちゃんの命日のあと、いつも……」

心臓が唯笑の柔らかな手のひらに掴まれる。気付いていないと、唯笑なら見逃してくれると期待していた。勝手に俺は唯笑の知らない振りをしてくれる優しさに甘えていたんだ。何年もずっと、唯笑は俺を甘えさせてくれていたのだと、初めて俺は知った。

「何があつたのかは詳しくは知らないよ？でも、智ちゃんは関係しているんじゃないの

かな？だからあの時智ちゃんは一——」

「唯笑、お願いだ。もう黙れ」

「智ちゃん……」

そっか、まさか唯笑が気付いていたなんてな。しかも、信を突き放した事がどういふことなのかまで見透かしていやがる。彩花、お前は知っていたか？俺達の自慢の家族はこんな……

「多分正解だよ、お前の想像していること」

こんなにも強くて最高の女になっちまった。

「寝るわ。おやすみ」

リビングを出ると、背中からは押し殺そうとして失敗してしまった嗚咽が追いかけてくるが、歯を食いしばりそれを振り払う。唯笑が気付いていようが構わない。お前が追いかけてくることがないよう、俺は心に鍵を掛けてやる。これはお前には関係がない、俺だけの大切な罪なのだから。

智ちゃんが去った部屋で、一人嗚咽する。

気付かない振りをずつとしてきた。そんなわけないって、智ちゃんが関係しているはずがないって。でも、信君を突き放そうとしている事を知って、それが何を意味してい

るのか嫌でも悟ってしまう。

何があの時あったのかはわからないし、確証もない。智ちゃんに問い質したところで絶対に話してくれない。

それでも、もし唯笑の想像が間違っていないとしたら……

「ダメ、だよお……このままじゃ智ちゃん、独り、だよ？」

一人じゃ抱えきれないソレを、智ちゃんはこれまでずっと一人で抱え続けて、それに気付かせないように隠して生きてたんだ。

窓を打ち付ける暴雨、智ちゃんの中に降るのは雨ではない。断罪の雨の中に智ちゃんはずつといたんだ。どうしようもなく繋がっちゃう、繋がってしまう三つの最悪。

「どうすればいいのかなあ？どうすれば唯笑も智ちゃんと抱えてあげられるのかなあ？」

きっと唯笑一人じゃそれは出来ない。智ちゃんはそれを許してくれない。でも、唯笑と信君の二人ならきつと……

「ううん、それは唯笑には出来ないよ」

智ちゃんが抱えさせたくない相手は信君と唯笑だもん。だから、どんなに追及しても智ちゃんは真実を語ってはくれない。信君と唯笑には……そう、私達二人には話してはくれない。なら、私達以外の誰かが語らざるを得ない状況に出来たら？例えば信君が

……なんて、それは希望的観測過ぎる。世界はそんなに自分達に優しく回ってくれないって知っているもん。

「そ、うだ……お母さんなら」

お母さん達なら知らないはずがない……けど、残念なことに唯笑達の両親は口を割らないと思う。これまで一度も口にしたことがないのがその証拠だよな。

「どうしよう、どうしよお……もう、わかんないよ彩ちゃん……」

今はいいない家族に救いを求めてしまう。唯一智ちゃん甘えられて、唯笑を叱つてくれる愛おしい家族に。

「唯笑じゃ、もうどうしようもないの……もう、彩ちゃんしか……」

結局唯笑は強くなつてなれない。一人称を変えて気張つてみても、二人の背中を追いかけていた頃の唯笑と何も変わらないまま……智ちゃん一人助けてあげられない子供のままなんだ。

仕事が終わって重い体を無理矢理引き摺って家路につく。いくら好きな仕事だとはいえ、仕事が終わったあとの倦怠感はみんな同じらしい。帰り道で見た会社帰りの人達の疲れ切った顔は、今の私と寸分も変わらないはず。

私が今暮らしているマンションに辿り着き、部屋の扉の横に備えつけられているス

キャナーにカードを通すと、鍵の開いた微かな音がした。

そうしてようやく息がつける。ブーツを脱いでシャツを洗濯機の中へ放り、ストッキングを脱いでソファに座る。ストッキングを脱いだ時の解放感は、働く大人にしかわからない気持ち良さがある。

そうだと、キツチンからワインとグラスを用意して、おつまみのチーズをリビングのテーブルに広げる。大人になってからの一番の至福の時が、このささやかな贅沢。

レンタルショップから借りていたDVDを流しながら、ワインとチーズをちびちび。

本当はこんなに立派なマンションじゃなくて、どこにでもあるアパートに住んでも良かったのだけれど、最近は物騒だからと両親に強く勧められて今の部屋に住んでいる。小夜美に言わせれば、物騒なのは静流よねえとのこと。まったく、失礼な親友よね。ほんのちよつと低空ドロップキックや延髄蹴りをするだけじゃないの。

そうしてぼくとしてから、お化粧を落としてシャワーを浴びないと、ゆっくり動き始める。

お化粧を落としてお風呂へ。スカートを脱いで下着を洗濯籠へと放り投げると、昨夜からそのままにしている、ぐしやぐしやになって変な折り目がついてしまったシャツが目についた。ついてしまった。

「……………ああああああああああ」

そのシャツの記憶に頭を抱えて蹲ってしまふ。

ここがベッドの上だったなら、七転八倒なんて可愛く思えるほどに転げまわっていただろう。それほどに、そのシャツの記憶は鮮烈に衝撃的で、背徳の記憶を呼び起こしてしまう代物だった。

「何をしたかわかつてるの静流？あんな、あんなこと……」

甘美な背徳が背筋を伝って全身を発火させているかのように、思い出すだけで熱くなる身体。

「なんてことをしてしまったのおくくくッ!!!」

小夜美の卑怯者と叫ぶ声が聞こえるようで、私は耳を塞ぎたい気持ちになる。

「そうよね、卑怯よね、うん」

でも、自分でもどうしようもなかったんだもの。抑えられなかったんだもの。あの衝動を抑えられるのなら、私は恋愛なんて一生しない自信がある。それほどにどうしようもない衝動が私を突き動かした。

「……健君にも感じた事なかったのに、こんな気持ち」

『逃げたのだうだのは知らないけど、静流さんは逃げた事を後悔しているし、自分を最低だっと思ってるんだよね?』

健君と二人でいられたあの公園で、帰ってきた私と智也君は二度目の再会をした。

『でもさ、逃げるのって最低な事じゃないでしょ。だって、逃げた先で静流さんはちゃんと手に入れてるじゃん』

最初は小夜美が可愛がっている生意気な男の子、そんな印象だった。

『パティシエって、この先も生きていく為の静流さんの武器じゃん。逃げただけじゃない、逃げた事を後悔するのもわかるよ、でもさ、それって誇れる事じゃん』

二度目は、吹っ切れないまま帰ってきた私を肯定してくれる、よくわからない男の子だった。

『まあ、何から逃げたのかは知らないけれど、こんな小僧が何言ってるんだって思うかもしれないけど……それでも、静流さんは胸を張るべきだよ』

よくわからない、素敵で最強の笑顔を持つ一人の男性だった。

『逃げて何が悪いって開き直ればいいのに。俺は、逃げて武器を手に入れた静流さんをかっけえって思うけどな』

卑怯、か……卑怯なのは智也君じゃないの。そりゃあ、小夜美のが先に智也君と出会ったわけだけれど、よくよく考えれば私は智也君の先輩だし、そういう意味では対等な気がしないでもない。うん、私悪くない。

「いやいや、悪いでしょ私。どう考えても悪いわよ」

でも、昨夜の智也君はとて放っておける状態じゃなかった。

お店を閉めて、これから帰ろうとすると、街灯の下に見知った影を見つけた。それは一目見ただけでわかるほどに、異常だった智也君だった。

顔が真っ赤でお酒に溺れて、まともに歩けない状態だっただけじゃない。智也君は覚えてさえないだろうけれどあの時智也君は……

「智也君？こんな時間に一人でどうしたの？」

「あ、静流さあ〜ん。はは、静流さんがいるう〜！おい信！静流さんだぞお〜！」

「ちよ、智也君、もう夜中だから静かにしないと」

誰もいない路地に呼びかけ、自分が今何をしているのかさえわかっていない。智也君とは小夜美と何度か飲みに行ったことがあるけれど、無茶苦茶な性格のわりにきちんと自分の限界を超えない飲み方をしていた。だから、初めてこんなにも泥酔した智也君を見て、どこか嫌な予感が胸を過った。

何か智也君をお酒に逃げさせる出来事が起きたんじゃないかって。

ふらふらと智也君は近づいてきて、途中何もない道で躓いて転びそうになり、慌てて私は智也君を支えに入る。

運動をしているわけでもないのに、逞しさを感じさせる体つきに少しだけ鼓動が騒がしくなってしまう。

「と、智也君?」

私に倒れ込んだまま、それっきり智也君は動こうとしない。それどころか、私のシャツをぎゅつと怯えるように掴んで離そうとしなかった。

「ねえ、どうしたの智也君?何があつたの?」

私の声が聞こえているのか定かじやないけれど、智也君は私の問いに答えずに黙したまま。

どうしたものかしらと、智也君の背に手を回しながら考えていると、微かにシャツか

ら震えが伝わってきて、それが徐々に強くなっていく。そうして、私はそれ以上考えることが出来なくなってしまうた。

だって、智也君が……いつも誰よりも笑っていて、弱さとは対極にいるはずの彼が……

「う、ああ……ああッ……俺、ちが……許されて、でも許して欲しくなんて……最低、な……俺、さい、ていで……」

感情を剥き出しにして、口から、眼から、自分を責め立てるあらゆるものを流していたから。

「ごめ、なさ……あや、か、俺……おれえ——ッ!!!」

私の身が引き裂かれそうな声。その声が私を制御不能にってしまった。

人通りの少ない真夜中の住宅街の路地で、私は智也君を言い訳が出来ないほどに強く抱き締めた。抱き締めてしまった。

逃げて何が悪い。彼の言葉が、あの日の景色が浮かんでくる。

そっか、智也君は逃げたいんだ。今だけは逃げていたいんだ。

「智也君、大丈夫、大丈夫よ」

このまま逃げなければ、智也君はきつと壊れてしまうに違いない。壊れるほどに追い詰められているのね。

唯笑ちゃんや信君のように、私は智也君の過去を知らないし、彼の過酷を覗けもしない。だからこれは偶然以外の何物でもない。偶然壊れてしまいそうな智也君がここにいる、壊れそうな智也君を偶然私が受け止めた。それだけのことで、それ以上の何物でもない。それでも、今なのね。今智也君を逃げさせてあげられるのは私だけなんだ。

嗚咽の止まらない智也君の頭を何度も何度も撫でる。せめて少しでも苦しむ心が救われてくれるようにと願いながら。

「あやかあ、なんで、なんでいなくなっちゃったんだよ……お前がいてくれたら、いてくれるだけで……」

どれくらいの間智也君を抱き締めていただろう、智也君は何度もあやか、あやかと繰り返して、嗚咽が止まる頃には意識を手放していた。

泣き疲れて眠ってしまった智也君をそのままにすることなんて出来るわけもなく、私は店内へと智也君を運んだ。

店内はすっかり冷え込んでいたため、急いで暖房をつけて智也君を椅子を並べてそこに横たわらせる。

「あやか……？」

繰り返された名前が頭の中に引っかかる。

「あやか、あやか……あや、か？」

どこかで聞いたことがある名前を思い出そうと、記憶を無理矢理掘り起こしてみる。私の知り合いにあやかという名前前の女性は思い当たらない。でも、確かにどこかで聞いたことがある名前。そう、確か母が昔……

『この近くじゃないの。可哀想ね、まだ若いのに交通事故だなんて』

「——ッ?!?!」

思い、出した……当時、朝の地元のニュースで騒がれた事故。その被害者の名前が確か彩花、松月彩花って女の子だった。

「それに智也君は確か彼女と同じ……」

藍ヶ丘第二中学校出身。事故にあった子とも同じ年のはず。

「偶然、じゃないわよね」

繋がる過去の記憶と、二人の関係性。頑なに女性を一定の距離から近づけない、その理由。唯笑ちゃんと信君だけが持つ、智也君との特別な繋がり。理由。

「そういう事、なの?」

切ない程に愛おし気に呼ぶ名前、その答えは……

「そっか、そうよね。智也君、あなたはだから私に言ってくれたのね」

逃げて何が悪いって、逃げない貴方の言葉の重さがようやく理解出来た。

「馬鹿ね、ほんと……馬鹿なんだから、智也君は……」

どうして彼を好きにならずにいられるのだろう。彼を深く知ってしまったらどうしようほかに、どんどん深みに嵌っていく。

優しくて温かくてお人好しで、自分の傷なんてなんでもないみたいになんでもないわけないじゃない。逃げなきゃいけないのは貴方じゃないの。それなのに私を肯定してくれたの？逃げない貴方が私を？

「強がり得意地つ張りにもほどがあるわ」

誰にも甘えようとしなくせに、自分は皆を甘えさせて、抱える荷物を軽くしてあげてばかり。何よそれ……じゃあ、誰が……

「誰が貴方を甘えさせてあげられるの？」

彼が心から求める彩花さんはもうこの世にはいないのよ？なら、貴方は今まで誰にも甘えようとしなくて、寄り掛かる事を許さなままずっと……ずっと……

静かな寝息を立て、腫れた目を閉じて泣き疲れて眠る彼は子供のよう。あどけないその寝顔に吸い寄せられるように私は……

重なる唇、アルコールの匂いと少しの背徳。

澄んだ冬の夜空に星が瞬く日、私は自覚してしまった。この気持ちから目を背けるな

んで、もう出来ないのだと。

昨夜の事を思い出し、私なんてことをくくくくくと、洗濯機に身体を預けて身悶える。そんな私は、昨夜智也君と過ごした事を小夜美に懺悔したのだった。

どうしたら良いのかわからないまま、家庭教師の日がやってきて、私は三上家へと足を運んだ。

最近是三上さんと二人きりという状況はなく、いつも稲穂さんや今坂さんが必ず一緒だった。まるで、私と二人になるのを避けているかのようにだったけれど、正直それは私にとつてとても都合の良い環境だった。

三上さんへの気持ちを焼き尽くそうとしているのに、今二人になってしまったら何を話して良いかわからないから。

誰かがいてくれれば、ふぎけた会話だけをしていれば良いんだもん。それが私には救いでもあった。でも、その日は違った。

三上さんの家には誰もいなくて、いつものように能天気な笑顔を張り付けた三上さんだけがそこにいた。

誰かがいると期待していた私は、少しだけその事実で動揺してしまっただけで、それ

を表に出してしまわないように、なるべく平静を装って参考書と睨めっこ。三上さんは久しぶりの二人きりとは思えないほどに普通で、人が勉強しているというのに大音量で映画を観ていた。

あまりに普通過ぎて、あの日見た三上さんが夢だったんじゃないかと疑ってしまう。

あの日から、私と一蹴はどうすればいいかを考え続けて、結局答えは出ないまま。

稲穂さんや今坂さんに伝えたとして、それが三上さんを傷つけてしまわないかという危惧があり、二人には絶対に話せない。でも、三上さん自身に何があつたのか尋ねるのも気が引けて、その所為で最近私と一蹴はちよつと神経が過敏になってしまっていた。横目で三上さんの能天気な顔を覗き見る。

本当であれば三上さんだったのかな？というかそもそもそこまでの問題なのかな？勝手に私達が重く捉えてしまっているだけで、実は大したことない話なんじゃ？あり得る。何をするか解析不能な三上さんなら、その可能性は十分にあり得る。

もやもやを抱えたままの、気持ちの悪さが嫌になる。

そうだよ、稲穂さん達に聞けないなら本人に聞いてしまえばいいじゃない。そうしたら、案外大したことのない話で、私も一蹴ももやもやを解消出来るもの。

いつものように聞けば三上さんだって……例え触れてはいけない事だったとしても、三上さんなら笑って誤魔化してくれる。試しに聞いてみる位は……

私は浅はかな自分を、後に殺してしまいたくなるような後悔に襲われることになるなんて考えもしていなかった。だって、三上さんはどんなことも許してくれたんだもの。リナちゃんとの事も、三上さんは私達の為に許してくれたんだもの。だから私は考えもしなかった。

「三上さん、そういうえばこの間……」

私達を支えてくれた大きな背中が消えてしまうなんて事になるなんて。

「フアミーユで一緒にいた人は誰なんですか？」

いつものように、なんでもない会話を装い問い掛けた言葉。その瞬間――

「お前、あそこにいたのか？」

三上さんの表情が、私の知らない何かへと変わった。

「あ、え……あの……」

三上さんは笑顔を浮かべる。感情を感じさせない、能面のような薄ら寒い笑顔を。

「そっかあ、お前あそこにいたのかあ。いやあ、参ったなあ。で、どこまで話を聞いていたんだ？」

ゆらりと、一つも動かない表情のまま私へと近づいてくる。知らず私は後ずさつていった。

「おいおい、逃げるなよ。別に俺はなにもしちやいないだろ？ただ聞いているだけだぞ。

どこまでお前は聞いていたんだ？」

柔らかい言葉と声。それなのに、どこにも逃げられない強制力のある言葉。

「そ、の……わ、私、偶然、で……それで、三上さんが……」

「俺が？」

だ、れ？今私は誰と話しているの？

知らない。こんな人、私知らないツ!!

「殺した、人、殺しだつて……」

絞り出しながらの言葉に、その人はうんうんと頷き、そつかそつかあと事も無げに言う。能面の笑顔のままに。

「で、そこには驚沢もいたわけだよなあ？」

咄嗟にいませんでしたと言おうとしたけれど、彼の視線に身体が竦んで言葉が出る事はなかった。

「だよなあ。あそこに一人つてのもおかしいもんなあ？仲が良いようで俺は嬉しいぞ陵」

上機嫌に歌うように紡がれていく言葉が、私の心臓をねつとりと撫でていく。

「けど、いけない。いけないなあ。陵。盗み聞きなんて品がないなあ」

大音量で流れる映画。暖房の効いた温かい部屋。そのはずなのに、音も温度も今は消

えてしまっている。得体の知れない寒さに体どころか心までもが凍えてしまう。

「参るよなあ。信は諦めてくれねえし、唯笑は何かしら気付いてそうだし、ほんと最近俺困つててさあ。そんな時にお前だろ？ いや、完璧に油断してたわ。お前がまさかあそこにいるだなんて、予想出来ねえもんなあ。いやあ、偶然つて怖いわ」

心底おかしそうにあははと笑う誰かは、髪を掻き上げながら笑い続ける。温度のない瞳を湛えながら。

「でさあ、ちよつとばかしお前にお願ひがあるんだわ。俺にしては珍しく頭下げてもいいって言えるお願ひなんだが、聞いてくれるか？」

「お、ねがい？」

「そう、お願ひだ。お前が見た事、聞いた事は絶対に信と唯笑はもちろん、誰にも口外しないで欲しいんだが……どうだ？」

感情が消えた能面と瞳に、どうしようもなく震えてしまう。喉が震えて上手く言葉にならない。

「い、言ったら、どう、しますか？」

私のせめてもの抵抗の言葉に、更に口角を釣り上げてその人は首を傾げた。

「どうもなにも、なんにもしないぞ」

「なに、もっ」

「そう、何もしない。今後一切、俺はお前に何もしない」
なんにももしない……その意味するところはつまり……

「当たり前だろう？ 誠心誠意の俺の願いを裏切るなら、それはもう赤の他人じゃないか」

「——た、にん？」

これまでの三上さんと積み上げてきた、決して軽くない時間。それをこの人は何でもない事のように捨てるだけだと、私を記憶から消すと言っている。

なんて傲慢。目の前の誰かは暗にこう言っている。

これまでの全ては簡単に捨てられるような時間だったと。

唇を噛み締め、悔しさばかりが溢れ出てくる。

必死に抑えようとして暴れているこの気持ちも、一蹴と私とリナちゃんを繋ぎ止めてくれた日々も、追い詰められた私に笑顔を与えてくれた温もりも、全部全部全部この人は蟻を潰すのと同じ感覚で、それらをなかった事に出来てしまうんだ。

その事実が悔しくて苛立たしくて憤って……

「うんうん、わかってくれて俺は嬉しいぞ陵」

なのに私は頷いてしまった。悔しさで歪む表情のまま頷く事しか出来なかった。

「じゃあこの話はここまで。俺は映画観賞、お前は勉強に戻ろうなあ」

知らない誰かはいなくなり、いつもの三上さんが映画を観ている。綺麗さっぱり何事もなかったかのように、自然な三上さんがそこにはいた。

何が嬉しいと思ったの？誰も知らない三上さんの姿を私だけが知っている？思いうがりも甚だしい。何も、何一つ私は三上さんを理解していなかったと痛感して項垂れる。

参考書に力なく視線を向ける。

私、馬鹿だ。自分で被る仮面は誰よりも知っているくせに、三上さんの仮面に気付くことが出来なかった。三上さんの暗くて底のない心の闇を垣間見て、初めて私は三上さんの仮面をはつきりと形として捉えられた。

私よりも長い間被ってきた仮面、その仮面を本物だと信じていた愚かさ。

無理、だよ。私じゃあ、三上さんの心に手を伸ばせない。

近づいたと思えた距離、でも本当は近づいてなんていなかった。今坂さんと稲穂さんと彩花さん以外、この人にとって大切にはなり得ない。

そんな、笑いたくなるような距離の遠さを、愚かな私は心に刻み込まれてしまった

……

彼の孤独の未来、彼女の受け継いだもの

「余裕、なさ過ぎだろ俺。大人気ねえな」

陵を迎えに来た鷺沢に、今日は用事があるからここまでだと、リスニングが苦手だというので、海外のホームドラマのDVDを陵に渡して早めに帰した後、先程の自分を振り返り反省。

普段通りの俺だったなら、あの場所に陵と鷺沢がいた事にすぐに気付いたはずなんだが、気負い過ぎて余裕なんて微塵もなかった俺は、どうやら視野が狭まっていたらしい。気負うなと言うのは無理があるかもしれないが、それでも自分のミスだったのに、これ以上探らせない為にあえて陵の心が最も抉られるような言葉と態度を選んだ。

「主演男優賞でも狙ってみるか？」

あいつが望むいつも通りで、笑って誤魔化せば良かったかもしれない。だが、それだと陵は更に踏み込んで来ようとしただろう。

「……気の迷いって気付いてくれればいいんだけどな」

伊達にあいつより人生経験を積んでいるわけじゃない。あいつの心の揺れ動きなんてとつとつに気が付いている。陵が八方塞で迷子になっている中、俺は愚かにもその手を

引いてしまった。だから、あいつは見失う。本当に大切にしなければいけない気持ちを。決して失ったわけじゃないソレを、自分で見えなくしてしまっているだけなんだ。

「お前はお前の一番の場所にいるべきなんだ」

鷺沢以外にお前を世界で一番幸せに出来る男なんていない。

俺はお前のふわふわと揺れて浮かぶ気持ち、自分の都合の良いように利用して引き裂ける屑だ。

知っていたよ、お前がわざと憎まれ口を聞く不器用な甘えを。

見えていた、仮面で隠そうとしても滲み出る嬉しそうな顔も。

聞こえていた、必死に揺れ動く心を引き留める苦しそうな声。

「屑、だよな……」

みなもちゃんも、詩音も、小夜美さんも、皆を俺は惑わせてきた。助けてなんて言われてもいけないのに、良い人ぶって手を貸して……なんてクソ野郎だ。自分さえも救えやしないくせに、偽善もここに極まりりつてな。

どうすればいいのかなんて、とづくに知っている。遠慮なく弱音を吐いて、唯笑に、信に寄り掛かってしまえばいい。それだけで俺は自分の幸福へと歩みだせる。それだけのことなんだ。

「……なんて、出来るかよ、んなこと」

足掻いきながら光へと手を伸ばそうとも、その手を俺は自分で引き千切る。助けを求めようものなら喉を潰す。眩い陽射しに惹かれてしまうなら、両目を抉る。

俺は弱い。世界中の誰よりも俺は弱い。誰にでも縋りつけるのに、そうすることが出来ないほどに俺は脆弱だ。

信、唯笑……ごめん。俺には許されない、許せねえんだ。俺だけがお前等が望む幸福の中に居られるなんて、そんなの俺は……

温度のない部屋の中、壁にもたれかかる。かつての最愛が見える場所に。

「せめてお前等だけはどうか」

陽の射す温もりに満ち溢れた道を歩んでくれ。それがせめてもの俺の救いなんだ。

本当なら今日は一蹴の部屋に泊まるはずだった。一蹴の為に食事の準備をして、今日あった他愛ない出来事を話して、穏やかな気持ちのまま一緒に眠る。そういう、恋人が過ごすなんでもない一日で終わるはずだった。

明かりも点けず、月明かりだけが射す自室で膝を抱える。

さすがに一蹴も変に思ったよね。だけど、とてもじゃないけれど一蹴と一緒に恋人の顔が出来る心境じゃなくて……

「他人、か……ふふ、私だったらなんで思い上がっちゃったんだろ」

三上さんと彩花さんの事を話してもらえて、教えてもらえた事が特別だとも勘違いしたの？今坂さんと稲穂さんしか知らない過去を知って、二人のように他人じゃなくなつたとしても？

「そんな事……あるはず……—ツ!!!」

胸の中で渦巻く荒れ狂う何かを撒き散らすように、私は枕を感情の赴くままに壁に投げつける。

「うッ、ああ……ああッ——!!!」

それだけでは抑えられない激情が決壊したかのように流れ出す。

近くにある物を手にとつては投げ、振り回し、打ち付ける。

「他人なら、なんでッ!!」

『自分の問題から目を逸らさないで、それでも笑うんだよ。雨はさ、冷たいだけじゃないんだって……そうすれば、時間が経てば気付くはずだから。そういうふうに出てくるもんだ。そんでな？今度俺が君と会ったらこう聞くよ……雨は上がったか？って。その時はさ、笑顔で君なりの答えを聞かせてくれるか？』

「放っておけば良かったじゃないですかッ!!」

『おい小娘？今のはどういう意味だ？三秒で答えろ、答えなければジエノサイドだ。はい、3. 2』

「何もわからないふりして、勝手に手を差し出してッ!!」

『今日、これから教えてやる。やり直せない間違いを、どう償えば良いかを』

「最初から他人でいて欲しいのならッ!!」

『お前は出来ることをしたんだ。後は俺と信に任せとけ』

「自分を隠したいのならッ!!」

『いつてえー！折れる！俺の中指折れるから離せ陵!』

「手放せるような軽い関係なら手なんか引かないで下さいよッ!!」

肩で息をしながら部屋を見回すと羽毛が舞っていて、整頓されていた部屋は本や小物があちこちに散らかっている。その惨状は、まるで今の私の胸の内そのものよう。

「離さないって、絶対離しませんって言ったのに……」

見た事もない知らない誰かの顔をした三上さんに、私は怯え恐怖し、他人と言う言葉に殴られて、私はあの人の手を離してしまった。

手放したのは三上さんじゃない、三上さんの仮面に怯えた私が三上さんから離れてしまったんだ。

「恋人じゃなくても良いんです」

言って欲しくなかった。か細くてもあなたと繋がっていられるのなら、それだけで私は生きていけたんです。あなたの笑顔があれば、誰についても私は笑顔でいられる……だから、あなたを悲しませないように、傷つけないように、そればかり考えて、不格好な仮面を被って……

「ただの教え子ってだけでも十分なんです」

時間が経てば、私じゃない誰かが三上さんの隣にいて、私は一蹴の隣にいる。時間も何もかもを解決してくれるはずと信じていて……

「それすらも許してくれないんですか？三上さんのこの先を見させてもくれないんですか？」

三上さんの過去に彩花さん以外の何かがあつたのは間違いがなくて、そこに踏み込むことを三上さんは誰にも許そうとしない。無理矢理抉じ開けられる鍵を持つていても、それを回すことを許さない。だって、私は三上さんにとつて他人以上でも以下でもないんだもの。

あの日、偶然手に入れてしまった鍵は私が持つていてもガラクタでしかない。そして、この鍵を回せる二人に預ける事を三上さんは許さない。預けてしまえば私は三上さんとの細かい細い糸が途切れてしまう。

「嫌です」

どこにも行けずに一人で泣くことも忘れてしまいそうな、途方もない暗闇にいた私を救つてくれた、折れてしまいそうな心を不器用な手で治してくれた、かけがえのない存在。

「嫌、ですよお」

失えない、失いたくない。他人でも何でもいい。三上さんを失つたら私はどこに向かえばいいのかもわからなくなってしまう。

ベッドにちよこんとある、キュロツシーのクッション。

『ほら、やるよ』

クッションを手繰り寄せ、ぎゅつと抱き締める。

本当は可愛いだなんて思っていないクッション。ただ三上さんと遊ぶのが楽し過ぎてもっと遊びたくて適当に選んだ不細工なキラクターのクッション。

欲しくなんて全然なくて、三上さんとふざけ合っていたかっただけ。それだけのはずのどうでも良いクッション。でも今は……

「どうしたらいいんですか？」

大切な人からの、唯一の贈り物。

「助けていのに、助けたくないの……」

——あのね、今日の夜にお父さんの荷物が届くんだって。だから帰らないといけなくなっちゃって、ごめんね一蹴。

寂しさなんて感じる事のない予定だった今日、俺は一人で帰ってきた。冷蔵庫には二人分のプリン。いのりが好きだから、いのりが来る日はいつも買っている。

何も食べる気力が起きなくて、布団も敷かずに寝転がる。

「荷物、ね」

知ってるかいのり？俺さ、いのりの嘘に気付いてやれなかった事をめちやくちや後悔してんだ。お前と恋人をもう一度始めようって決意したあの日から、俺はお前から目を逸らすことを止めたんだ。独り善がりの恋は卒業したんだ。だから、わかっちゃもうんだ、お前が気付かないお前の癖を俺は知っている。

「嘘、なんだろ？」

お前が嘘を吐くとき、決まって同じ笑顔で用意されたようにすらすら喋るんだ。荷物が届くなんて嘘なんだよな？

引き留めて、何があつたのかを聞くべきだったのかもしれない。そもそも、三上が事前に何も言わないで、俺が迎えに行くのに合わせたかのように、いのりを帰したのはなんでだ？

もしかしたら、という危惧はある。でもいのりはそれに答えないだろう。自分の胸の内を俺に悟らせないようにするに決まってる。

「三上に聞いたんじゃないのか？」

あの事を聞いて、どうなったのかは知る由はない。だけど、いのりが動揺して取り繕うような嘘を吐いた何かがあつたはずだ。

「……あ〜クソッ！」

自分の不甲斐なさに苛立つ。わかってるよ、いのりが誰を見ているのかくらい。そん

なの火を見るより明らかで、俺はそれに文句を言えない。いのりの涙を拭いたのは俺じゃない、恋人の俺が拭わなきゃならない涙を、三上が笑顔に変えたんだ。その事に文句を言うなんて、逆恨みでしかないし格好悪い。

今はいのりの心は三上に向けていても、そのうちまた俺へと向けさせてみせる。俺にはその自信がある。もちろん根拠もあるんだ。三上は、あいつは絶対にいのりを好きになる事はない。いいや、いのりだけじゃない。他の誰かを好きになる事なんてあり得ない。

同じ男として、唯一人を愛し抜くその姿には嫉妬すら覚えてしまいそうだが、だからこそいのりの想いが叶う事はない。

なら、さ。今度は俺がいのりを支えてやるんだ。どんなに三上が好きでも、心許していても、いつかまた俺がいのりを好きにさせてやるって。

「だっせえな、俺」

初めから棄権している相手だから安心って……けどよ、しょうがねえじゃん。あいつは俺に出来ないやり方でいのりの心を、過去を救ってしまった。いのりだけじゃない、俺の事まで一緒に拗り上げやがった。そんな狂った馬鹿に勝つ自信なんてどう足掻いても湧いてこねえんだもんよ。

格好の悪い俺は、それでも相手が三上で良かったと胸を撫で下ろす。

三上の苦惱と苦痛を知らなかった俺は、そんな最低と自分でさえわかる自分を肯定していたんだ。

「ふう〜ん、酔い潰れて弱った智也君に〜、へえ〜、母性全開で甘やかしてえ〜？抱き締めてえ〜？それだけに飽き足らずう〜？」

ゲソ唐をぼりぼりと啜えながら、ビール片手に不貞腐れる小夜美を前に、私は肩を縮こまらせながら、ちびちびとビールを口にする。

「チツスをーチツスをしましたってえ〜!？」

「チツスって、もう完全なおじさん口調じゃないの」

とある居酒屋の片隅で、小夜美はぶすつとした顔でず〜と私をねちつく責め立ててくる。

「あによ？文句を言える立場じゃないでしょあんたは。あたしの好きな人にい〜、親友の好きな人にい〜、チィ〜ツス……をした重罪人」

「なんでチツスが色気のある発音になってるの」

「うるさいうるさいうるさ〜い！何よそれ何よそれ何よそれッ！あんたちよつと表に出なさい！張つ倒してあげるから！」

「もう精神的には倒されてるわよ」

小夜美の絡み酒が酷くて、他のお客さんの視線に晒されて恥ずかしくて倒れそうだもの。ていうかチツスチツスうるさいのよ。

「てかねえ！満塁ホームラン打った気になるんじゃないわよ静流。あんたが打ったのは自打球なの」

「なんで野球で例えるのよ……ヒットつてどこかしらね」

「智也君は意識なかったのよねえ？じゃあノーカン！無効試合く！ざまあみろおく！」

「大人気ないし」

「あんだとおく？んじゃあ、今から智也君呼ぼうか？」

「なんでそうなるのよ」

「んで酔い潰す。酔い潰してあたしもチツスするもんねえくだ！」

「させるわけないじゃない！ていうか、チツスがマイブームにでもなってるの？」

「何よお！だつて卑怯じゃない静流ばかりさあ！寝ている男しか奪えない卑怯者く」

「表に出なさい小夜美。タクシーで強制送還してあげるわ。あなたの財布でね」

「事実じゃないのよ。逆ギレとかだつさあく」

あまりにしつこい小夜美に、ついつい自分が悪いにも関わらず堪忍袋が限界に近くなる。しつこいお客を相手にしている水商売の方達を尊敬してしまふ。

「だから言ってるじゃないの。あの時は智也君がどうしてか弱つていて、だからこう

……ね？」

「ね？じやないわよ。上目遣いとか同性に止めときなさいよ。ぶん殴りたくなるだけなんだから」

はい、ごめんなさい。

「あたしだつて智也君を甘えさせたいわよ。膝枕してあげたり、耳掃除してあげたり、よくしよしてあげたりい」

「最後のは違うんじゃないかしら」

「っさいわね。まったく、大体智也君が弱つてつて、何があつたのかも教えてくれないしさあ」

当たり前でしょ。智也君が小夜美に話しているとは思えないし、私が知っている事も知りたくないだろうし。

あの時の智也君の謔言（うわごと）は私だけの……

「で、彩花ちゃんの事でどうしたつて？」

「そうなのよ、智也君が何度も桜月さんの……ちよつと待つて小夜美。今なんて言ったの？」

とんでもない一言に思考がフリーズしてしまう。今小夜美はなんて言ったのかしら？聞き間違いじゃなければ彩花ちゃんつて言ったような？

「あく、やっぱりそうなのね。ま、智也君が弱ってるつてのに関係するのは彩花ちゃんの事だろうしねえ」

間違いない、小夜美は智也君と松月さんのことをどうしてかわからないけれど知っているのね！

「ななな、なんで知ってるのよ！」

動揺する私をぽりぽりと砂肝を食べながら、つまらなそうな視線を投げかけてくる。

「なんでも何も、ちよつと智也君と中学が一緒だった子に聞けば一発よ。多分、あたし以外も知ってるわよ。知っていて、智也君から話してくれるのを待ってるだけなの」

そういうえば、小夜美は澄空学園の購買で働いていたのよね。智也君の中学時代の事を誰かに聞いていたとしても不自然じゃない。

「あつらく、もしかして自分だけが知ってるとか優越感に浸っちゃってたのかなあ？ざくんねんでしたあく！れろれろばあく」

両頬を今世紀最大の威力で張り倒したい。

「でも、知っているからつてどうしてあげる事も出来ないのよね。智也君が弱音を吐いてくれない限りは、あたしは支えても上げられないのよ」

ため息交じりの言葉と共に、ぐつと一気にビールを飲み干す。小夜美の瞳には智也君はどう映っているのかしら？私とは違う智也君がそこにはいるのよね？

「ほくんと、嫌になるわよねえ。男の子つていくつになつても意地つ張りでき。抱き締めたくて仕方ない女の気持ちなんて、いっつも置いてけぼりで……」

「それは智也君の事？それとも……」

「両方よ」

「そうだろうと思つた」

「あたしねえ、別に静流が智也君を支えられるのなら、別にそれでもいいのよ」

「小夜美……」

「絶交するけど」

「全然良くないじゃないの」

真つ赤な顔に虚ろな瞳。相当酔っているみたいね。

「時々怖くなるのよ。このままあの子みたいに、智也君がなんにもしてあげられないまま消えちやいそうな……：そういう儚さとは無縁なはずんだけど、それでも夢みたいに消えそうで怖くなる時があるの」

ほらね、酔い潰れる直前じゃないの。私を感じてしまった不安を、弱音を口にするなんて小夜美らしくもない。

「だからね、あんたが羨ましいのよ静流。酔っぱらっているとはいえ、一時的にでもあんたは智也君を抱き締めてあげられたんだから」

「……一時的にするつもりなんてもうないけれどね」

「コロッセウムで死闘でもしましょうか?」

まだしつかり意識があつたのね。

「なんでも智也君とは産まれた時から一緒に、唯笑ちゃんと智也君といつも三人でいたらしいのよ。でもつて恋人でもあつたわけよ」

「……そんなに長い時間一緒だつたのね」

彼女を失つた智也君の悲しみを私なんか軽々しく想像出来ない、してはいけない。それでも……

「まあそれはそれとしてよ、問題はそんな智也君を知り尽くしている化け物をあたし達は相手にしなきゃなんないわけよ。チートもいいところよ」

彼女と重ねた時間に比べたら、私達が重ねた時間のなんと軽い事か。でも過去ばかり見ていても智也君は振り向いてはくれないわよね。

「死んだ奴をライバルにしても一生勝てない」

「なによそれ?」

「私の言葉よ」

「テンチョーのでしょうが」

「しつかり覚えてるじゃないの」

「そんなの言われなくたってわかつてるわよ。それに、今の智也君の事はあたしのが彩花ちゃんよりも知ってる自信あるしさ」

「自信過剰じゃなければいいわね。同意するけれど」

二人ビールを呑み干して、店員さんにおかわりを注文し、新しいビールが来て第二ラウンド再開。

半分ほど一気に飲み干して、ギロツと睨まれる。

「あゝあゝもう！あんたが前後不覚になるくらい好きになるって知ってたら紹介なんかしなかったのにさあ！」

「良い人を紹介してくれてくれてありがとう。最高の親友ね」

「その度胸といい性格は○フオクで買えるの？」

私の感謝の言葉を舌打ちで受け止め、そうして私達は笑い合う。どんなことがあつても私達は同じ人を愛してしまった、世界で一番気の合う親友だものね。

「ふふ」

「はあ、まったくあんたって親友は」

ふたりで遠慮なく笑い合い、もう私達ってしょうがないわねえと穏やかに口にして残り半分のビールを同時に呑み干し――

『叩き潰すわよ？』

ジョッキをテーブルに叩きつけて不敵に宣誓の笑みを浮かべ合つた。

店内は紅茶やコーヒーを飲みながら友達と取り留めもない話をしていたり、仕事の間を潰す男性や、待ち合わせをしているらしい人、様々な人達で賑わっている。

落ち着いたジャズが流れている空間には、コーヒーと紅茶の心地よい香りが漂い、思わずほつとしてしまいそうな癒しがあつた……私は全然癒されませんけど。

テーブルに肘を付き、うゝあゝ……と頭を抱える。

学校の帰りにちよつと気分転換がしたくて、普段は来ない藤川まで一人で足を延ばしてしまった。これが第一の選択ミス。でも、まだ致命的なミスなんかじゃなかった。

クリスマスまで一月を切り、一蹴へのプレゼントの候補を探そうとぶらぶらしている、あ、このアウトターなんか一蹴に似合いそうと、窓ガラス越しに覗いてしまった。ここで小さなミス二つ目。外から窓ガラス越しに見ないで、店内に入るべきだった。

極めつけのミスはその後に起こつた。

窓ガラスに映つた忘れようにも忘れられない女性が、道の反対側を歩いているのを目

にしてしまい、私は逆らえない力が働いたかのように道の反対側へと振り向いてしまった。

すると、道の反対側にはあの日『ファミーユ』で三上さんと話をしていた女性が、あの日のようにビシッとスーツを着こなし、ピンと背筋を伸ばして歩いている姿があった。出先の帰りなのか足取りはゆっくりで、労働中の大人特有の雰囲気はなさそうだった。

不意に浮かぶ三上さんなのに、三上さんじゃない誰かの能面の笑顔。

関係、ない。関わるべきじゃない。

ただウインドウショッピングをしていて、偶然見た事のある人が通っただけ。それだけの事だもの。さあ、気を取り直して一蹴へのプレゼントをどうしようか考えよう。

そうだ、当日は一蹴に内緒でケーキを用意して、誰もいらないと思つて帰つてくる一蹴を待伏せしよう。帰ってきた一蹴の驚きと喜ぶ顔。それだけで私は満足なんでもん。そうだよ、ナイスアイデアだよ私。

ケーキに蠟燭を灯して、オレンジの光に魅入つて、二人で一緒に蠟燭の火を消して、いつもよりも手の込んだ料理を二人で美味しいねって笑い合いながら食べて……

想像すると自然と頬が緩みそう。嘘じゃない。だから顔は私はして……

「あれ？変なの……変、だね？」

「ただど現実には残酷で、窓ガラスに映る私の顔は、中途半端に笑おうとして引き攣った、とても不細工な顔だった。」

駄目だよ、もう少しだけここにいて。お願いだから、動いちゃ駄目なんだよ。

どんなに三上さんが救われていなくても、誰にも理解してあげられない深い、深い闇の中においても、三上さんはその場所に誰かが入り込むことを許さないんだもん。入り込もうとしてしまえば三上さんは私を記憶から排除しようとするんだよ？そんなの、私には耐えられない。これまでの何もかもが、初めからなかったかのように消えてしまっている……そんなの、私……

「うん、そうだね。帰ろう。帰って今日の事も、この前の事も忘れないとだよね」

あの時、三上さんが稲穂さんと一緒に私を裏切った演技をした夕暮れを思い出す。

嘘の裏切りでさえ、私は立っていられなくなりそうだった。あの時の恐怖が今もこの胸と瞳に焼き付いている。これ以上関われば、あれが現実となって襲ってくる。想像するだけで私は頭の中が真っ白になってしまう。

そうと決まれば駅に戻ろう。戻って明日会う三上さんといつもをしなないとね。何も変わらない、変わってはいけない私の大切な日常を続けるんだ。そう、するって決めたんだから。決めた、んだから……

『俺なら、例えどんな声でも良い。俺を傷つける言葉を百並べられても構わない……それでも俺は、会いたいつて願っているから。俺、馬鹿だからさ、逃げたくないんだよ。全部受け止めたい。それがどんなことだって良い。それが大切な奴なら尚更だ……その声ですら大切だと思えちまうから、だから真っ直ぐ向き合いたい』

「——ッ!!」

私は走り出す。私が望む日常とは正反対へと向かう、望まない道を震えて折れてしまいうような足で。

ふぎけないで下さいよッ！大切だから向き合いたいつて、どんなに怖くても受け止めたいつて、私にはなかつた強さを教えたのは三上さんじゃないですかッ！

「おわっ!!」

「すみませんッ!!」

道行く人にぶつかつてしまい、転びそうになつてしまう。それでも倒れてなんていられない。倒れないように力の限り踏ん張り、逃げたくて泣き出しような心を三上さんがくれた強さで押し潰す。

なにが他人ですか、いいですよ上等です。他人になれるならやつてみればいいんです。どんなに貴方が私を遠ざけようと、私は何度だつて距離を縮めてみせますから。

貴方の背中に触れられなくても構いません。貴方の背中を支える人を私は支えます。そんな距離が良い、その距離で充分です。

頑張つて、頑張つて、諦めきれなくて泣きじやくつて、それでも届かなかつたとして
も……

『何があつたかなんてわかんねえけど！でも、あんな……俺、あんなのに助けられたのかよッ！あ、あんなに……あんなに苦しんでいる奴に助けてもらつたつてのかよッ!!』

それならせめて、最後の悪足掻きで私は貴方が情けなく泣き叫びながら、形振り構わず私を傷つけてまで守ろうとしている、貴方を閉じ込めている檻を壊してみせますッ!!
一蹴だけじゃない、私の仮面を自分勝手に剥ぎ取つて、やり直せない私の過去を取り戻してくれて、どうしようもない泣き虫で弱虫で卑怯な私を……溺れて抜け出せなくなつてしまった私を、光の射す場所へと引つ張り上げてくれた貴方を今度は私が、光の届かない深い場所にいる貴方を私が引つ張り上げて見せますッ!!

どれだけでも私を傷つけて見せればいい、壊せばいい。そんな事じゃ私はもう止まりません。貴方のように、不躰に土足で貴方の奥深くに入り込んでみせます。

貴方がくれた強さで、私が弱い貴方を助けますから。だって、私は他人だとしても――

「待つて……」

——貴方のたつた一人の教え子なんですから。

「待つて下さいッ!!!」

十分前ほどのアドレナリンの分泌量が限界を超えた自分を思い出し、いゝやゝと熱くなる頬を抑える。

「えっと、百面相しているところ悪いのだけれど、ミルクティーで良かったかしら?」
「うう、気にしないで下さい。恥ずか死しそうなだけなので」

お盆に私の分の飲み物まで持つてきてくれて、理知的な顔立ちで眼鏡をかけ、私には到底なれないだろうなという出で立ちの女性が、苦笑しながら席に着く。

眼鏡の奥にある瞳は、なぜか少し嬉しそうに見えるのは気の所為かな?

「それで、三上君の事で話があるということだけれど、その前に一ついいかしら?」

せめて血が上って熱くなった顔と気持ちを落ち着かせようと、ミルクティーへと口をつけ……

「間違っていたらごめんなさいね。貴方もしかして三上君の恋人?」

変なところに入って咽てしまった。

「かは、ごほ……ちちち、違いますッ!!」

「あら可愛い反応。からかってごめんさい」

意地悪く笑う女性、これが彼女蒔田透子（まきたとおこ）さんとの、唯一三上さんの心の奥底を開く為、壊す為の鍵を持つ女性との出逢いだった。

閉店間近の『ならずや』はバツシング作業の水の音と、静かなピアノの旋律で満たされている。

閑散とした店内、フロアには俺以外の客の気配はなかった。

コーヒーに映る自分の顔に苦笑する。

俺は今まで何をしていたんだろうな。彩花ちゃんの代わりに唯笑ちゃんといつを支えてやろう、雨の中にいるあいつに陽射しを見上げさせてやろう。それが出来なければ、せめて傘を差して一緒にいてやろう……そうしてあいつと過ごしてきた。

最近はいのりちゃんのお陰で、あいつが誰かを求めるんじゃないかなんて、そんな淡い期待も抱いていた。いのりちゃんだけじゃない、智也がようやく誰かを意識してくれていたんだ。期待しない方がおかし。

だから俺は躲されると知っていてあいつの背中を押したんだ。もうそろそろいいだろうと……躲されるどころか、あいつの心底からの本音に杭を打ち込まれるなんて微塵

も考えもしないで。

家族だと俺を認めてくれたから、だから俺は勘違いをしていた。ああ、彩花ちゃんとよくやく肩を並べられたと。あいつの幸福と一緒に願えると。

だが、現実とは違った。俺は彩花ちゃんの代わりにもなれず、あいつは俺に寄り掛かってもくれないまま。こんなの、喜劇にもならない。

「一生、か……」

あいつは俺の果たすべき誓いを否定した。わかっていて、徹底的に、全面的に否定した。その意味するところは単純で、これ以上自分に関わるなという、俺にとって苦痛を強いる意味を含んだ言葉。

自分のおめでたさに微かに嘲笑が漏れる。

俺はやり直したいわけじゃない。例え何も出来ない子供だった自分に戻ってやり直せたとしても、綺麗に取り繕うなんて不可能だ。神にだって許されない冒瀆。だからこそ俺は、俺だけは雨に濡れてなんかやらないと、弱い自分のままでいてはいけないと、傘を差して歩く覚悟を決めて智也と……

そう、俺は彩花ちゃんに誓った事を反故にはしない。智也がどれだけ否定しても俺は俺を貫くだけだ。

「なんてな」

それでもまあ、正直参つてはいるんだけどさ。これからどうすればいいのか手詰まりだからか、それとも心を正面から打ちのめされたからか、どこに向かえばいいのか迷子になつてしまひそうだ。

どうする？今智也と会つても何を言つてやればいいのか、普段通りでいられるのか、何もかもがぐちゃぐちゃでわからなくなつてゐる。

「しばらく旅に出るかな」

金も貯まつてきたことだし、長期休暇を取つて世界を見て来よう。そうすればまた何かが変わる気がする。違つた展開が見えてくる。

とりあえず、ゆつくり自分の視野でも広げに行こうか。

「あら、また海外に行くの？」

俺の呟きが聞こえたのか、バツシング作業が終わつたららしい静流さんが、自分の分のコーヒーを用意して目の前に立つていた。

「そうしてもいいかなつてだけでですけど、どこかいとこありますか？」

気軽に、落ち込んでゐると悟らせないように問い掛ける。

すると静流さんは、何かを思い出したようにくすりと笑つた。

「何かおかしい事言つたっけ？」

「ああ、違ふの。ごめんさい。ただ、やっぱり親友だなあつて」

「どういふことだ？ 智也と俺の何がおかしいって言うんだらう？」

「海外に行くなんて、どうしたの？ 最近ずっと智也君のところに行き活きて行つていたのに」

「……しつかり見抜かれていたとは。智也のところに行く前にここに寄つたりしたのは失敗だつたかな。」

「あゝ、ちよつと気分転換したくてさ」

「そう」

「ところで、やっぱり親友だなあつてどういふこと？」

「今の俺と智也の何が共通しているところなのか。」

「この前ね、酔つ払つた智也君と会つたのよ。珍しい事に」

「……なんだ、そういう事」

「もうべろんべろんに酔つてて、歩けないくらい酷かつたから一晩だけここに泊めてあげたの」

「はは、そいつは災難だつたね」

「ええ、ほんとうに」

その時の事を思い出したのか、頬を赤く染めて困つたように言う。

「……いや、頬を染めてつておかしいだろ。こりやあ静流さんにも何か——？」

「静流さん、智也がなんだって？」

「信君？」

智也からの強烈な一言に自分でも気付かないくらい凹んでいたらしい。静流さんから漏れた、普通だったらなんでもない言葉。その言葉の異常性にすぐに気が付かないくらいに。

「智也が酔っ払ってたって、いつの話？」

あの智也が歩けないくらいに酔っていた？あいつに限って言えばそんなことはあり得ない話なんだ。あいつが一番恐れているのは事故だ。事故を起こさないよう、起きさせないよう、あいつはどんなに周りに勧められても自分の限界を超える量を飲んだりしない。

それが酔っ払っていた？べろんべろんで歩けない？

俺の知る智也とはあまりにも現実離れしている事実。静流さんの言葉にそこで俺は初めて自覚する。

「確か——」

『ならずや』を出て俺は駆けだす。

なんてこった。俺としたことが、智也の言葉なんかで騙されるなんて。

そうだ、そもそもあいつが理由もなく、底抜けに自分以外に優しいあいつが傷つける
と、俺がしばらくあいつから離れるとわかっていてあんな事を言うはずがない。俺の誓
いを真つ向から否定するはずがない。

「あの馬鹿ツ!!俺の知らないところで何してんだよッ!」

起きないはずの事が起こったってことは、あいつにはそうしなければいけない理由が
あつたって事だ。

「あーッ!クソツ!!ふざけんよあいつ!」

あえて遠ざけたのはなんでだ?あいつの性格上、答えは一つしかない。俺には知らせ
てはいけない何かを隠すためだ。言いたくはないが、あの言葉は俺が言わせてしまった
ようなものってことだ。

静流さんの記憶が確かならあいつが自分を見失うほどに酒に溺れたのは、俺を突き放
した二日後。つまりその日、あいつは自分の禁を侵してでも、酒に逃げなければやつて
られないような出来事があつたんだ。でだ、その出来事の前にどうしても俺を遠ざけて
おきたかった。

「察しの良い、この稲穂信様が良い知恵授けてやるぜの俺が聞いて呆れる!」

このままあいつに問い詰めたところで口を割る事はないだろう。自分の中だけで完
結させようと俺を遠ざけたんだろうからな。だからって、指咥えて親友が苦しんでいる

のを眺めていられる俺じゃないんだよ！そんなに器用に生きていたら、お前の親友なんて、家族なんてやってられないからなッ！！

閑散とした夜道を走りながら、頭の中でどうにかしてあいつの口を割る為の何かを模索していると、リストの愛の夢がポケットから流れ出す。

走りながら取り出そうとすると、スマホを取り落としそうになる。買い換えたばかりの最新機種なのに画面が割れるのは勘弁してくれ！

画面には一蹴とラブラブタイムしているはずのいのりちゃんの名前。

今は取り合っている余裕はないんだけど、このタイピングでの着信というのが感覚的に引っかかって電話に出る。

「もしもしいのりちゃん？悪いんだけど今は」

なるべく柔らかく断るように言葉を選んで喋ろうとしたのだけれど、その先を紡ぐことが出来ない。

『稲穂さん、今どこですか？』

なぜなら、俺と同じようにいのりちゃんも息が上がっている状態で、どこか焦っている様子だったから。

「今？今はならずやを出たところだけだ」

『良かった。なら、三上さんの家の近くの公園で会えますか？三上さんの事で話さなけ

ればいけない事があります。一蹴と今坂さんにも連絡して、皆そこに向かっています』

一蹴も？唯笑ちゃんはわかるけど、一蹴もつてのはどうしてだ？智也の事に一蹴も関係しているのか？

「智也の事？まあ、今からあいつのところに行くつもりだったけど、智也に何かあったの？」

あまりに様子のおかしいのりちゃん。焦燥と動揺が混じった声に、俺はどこか嫌な予感が胸に過る。

走って流れる汗と、明らかに違う汗が背筋を伝う。

『騙されてたんです、私も稲穂さんも今坂さんも皆三上さんに騙されていたんですツ!!』
渴く喉と唇。

騙す？自分以外の事しか考えていないあいつが俺達を？彩花ちゃんを世界で一番愛していて、その気持ちや失う事は許せないと憤るあの馬鹿が？

何を言っているんだ、そんなわけないじゃないかと笑い飛ばせる言葉は、しかし笑い飛ばす勇気を俺は持っていなかった。

俺をあえて突き放した理由は何か？酔い潰れるほどに酒に溺れた原因は？わからな
い事が多すぎて、笑い飛ばす事なんて出来ずに、ただ黙っているのりちゃんの続く言葉に
全神経を耳に傾ける。

聞きたくない言葉を聞くとともに知らずに。

『三上さんは一人になるつもりなんですツ!!稲穂さんも今坂さんも、誰も彼も自分から遠ざけるつもりなんですツ!!誰の為でもない自分の為に——蒔田淳(まきたじゆん)さんへの罪滅ぼしの為にツ!!』

いのりちゃんの口から出た名前に、俺は立ち止まり呆然と立ち尽くす。

蒔田淳、だつて？

ポツポツと顔に何かが落ちてきて、呆然自失の状態で見上げる。空に星はなく、月を遮る厚い雨雲が覆っていた。

「な、んでいのりちゃんが知って……」

『会ったんです。会って話をしたんです……蒔田透子さん、蒔田淳さんの妹さんと』
弱かった雨足は徐々に強さを増していき、俺の身体だけじゃない、心を直接叩きつけるように降り始める。

いつの間にか通話の切れたスマホを、震える手で壊れてしまふんじゃないかという力で握っていた。

髪から滴る雨が頬を伝い、地面へと吸い込まれていく。

下を見ると、俺の足元にはあるはずのない光景……鮮烈な紅が雨と共に流れている。

なんで、今更その名前が……あの人の名前がいのりちゃんの口から……

罪滅ぼし？知らない。俺は智也が何をしているのか、何を見ているのか知らない。いや、違うな。そうじゃない。知らないんじゃない、知る事を怖れて踏み出せない。

『稲穂さんと今坂さんだけなんです、三上さんを助けられるのはこの世界に二人しかないんですッ！お願いします稲穂さんッ！私の反面教師の三上さんを助けて下さいッ！！』

蒔田淳……それは、あの日の交通事故の加害者の名前で……

——罪の重さに耐えきれず、自殺してしまった心優しき男の名前だった——

彼女達の雨宿り

陽が落ちるのが早くなり、きゅつと引き締まるような寒さに身震いしてしまうような夜。クリスマスが今月ということもあり、街中は色とりどりの電飾で彩られ、光の中を人々が忙しなく行き交う。

そんな光景を特に感慨もなく車中から眺めていると、フロントガラスにぼつぼつと水滴が打ち付けてくる。

こんなに寒いのに、雪ではなく雨が降るなんてな……と、助手席へと目を向けて苦笑する。

混雑している国道で、適当に音楽を聴き流す。

講義が長引いた所為で買い物へと向かうのが遅くなってしまった。あの教授、本筋から逸れて無駄知識を披露するからなあ。俺が風邪を引いたら嚴重に抗議してやる。

ゆつたりと動いていく車の中、視界の隅に見知った姿が映った気がしてそちらへと視線を向けると、交差点で両手に大きな袋と小さな袋をそれぞれ持ち、白い息を吐いて寒そうにしている紅茶姫がいた。

傘も持たずに何をやっているのやら。まあ、あれじゃあ傘を持つのも一苦労だろうが

な。ちなみに、袋の中身は十中八九大量の小説と、厳選した茶葉だろうな。少しでも詩音を知っていれば誰もが目を瞑っても答えられる。

丁度車の流れが止まり、窓を少し開けて本が濡れてしまわないかと渋い顔をしている詩音へと声を掛ける。

「その紅茶姫、私めの馬車で雨宿りなどいかがですか？」

まさか俺がいるとは思わなかったのか、詩音は驚いたように目をぱちくりさせ、ほんの少し嬉しそうに微笑んだ。

俺に会えたことが嬉しいのではなく、これで本が守れると安心したんだろうな。わかりやすいなあ。

「智也さん……すみません、お願いします」

助手席にある袋を後部座席へと移動し、詩音を迎え入れる。

乗り込んできた詩音は髪が少し濡れていて、悴んだ手が少しだけ赤くなっていたが、自分の事より本が大事とでも言うように、すぐに袋の中を覗いてほつと息を吐いた。

まったく、仕方のない奴だと苦笑しながら、常備してあるタオルを詩音の頭にかぶせ、わしやわしやと適当に撫でてやる。

「と、智也さん!? 髪が、髪が乱れてしまいます!」

「うるせえ、嫌なら自分で拭け。お前の所為で俺が風邪を引いたらどうしてくれるんだ!」

この時期に風邪を引くのは勘弁したい。こいつから移ったら二十四時間体制で看病してもらおうぞ。

「別に嫌だなんて……もう少し優しく拭いて下さればそれで……」

「なんだって？」

「相変わらず朴念仁ですな智也さんは」

「謂れない文句だな！嫌なら歩かせるぞ！」

まったく、大学祭以来だつてのにちよいちよい図々しいやつだなあ。昔からだけど。

「いえ、助かりました。ありがとうございます」

「最初からそう言えばいいんだよ」

「そういうえば、智也さんは今帰りだったんですか？」

「ん？……まあ、そんなとこだな」

「そうですね。偶然とはいえ智也さんが近くにいたなんて幸運でした」

「本の命が助かったもんな」

「それは、そうですねが……運命の神様に感謝ですね」

「あん？」

「……本当に朴念仁ですねと言ったのです」

「さつきからなんで d i s られてんの俺!？」

詩音はどこか不貞腐れたように窓の外へと目を向け、もう少し私と会えた事を喜んでくれても……なんて呟いていた。窓にいつもよりもちよいと膨らんだ頬がぼつちり映つてすることに気付けよ。

「智也さん、荷物後ろに良いですか？」

「ん？ ああ、好きに置けよ」

「では、お言葉に甘えて」

助手席から後部座席へと荷物を移そうとして、詩音の動きが数秒止まった。そんな詩音の様子に気付きながらも俺は見ない振りをする。どうかしたか？なんて俺から聞いてしまったら、答え辛い質問が投げかけられると予測出来ていたから。だから、窓に映った詩音の自嘲のような笑みも俺は知らないし、見てはいけない。

荷物を置き終わった詩音は、ありがとうございますいつもの表情を見せる。そんな詩音に俺は、崇め奉れよといつもを返す。

何も見ていなかった事にくれようとしている事に胸が疼いてしまいが、詩音の優しさに甘えることにする。

そうして詩音と他愛ない会話をしていると、ようやく車の列が捌け始めた。

「あ、そういえば二十四日なんだが、実は午前中は大学に行かないといけなくてさ、午後から付き合ってもらおう事になるけど良いか？」

「ええ、その日は私はいつでも平気です。心配なのは、智也さんが連れて行ってくれるという喫茶店の紅茶の味だけですから」

「文句なら静流さんに言ってくれ。静流さんが美味しいって紹介してくれた店だからな」

「じゃあ安心ですね」

「俺だと不安なのかよッ!？」

「不安要素以外が見当たりません。今でもあの自動販売機のレモンティーの恨みは忘れていませんから」

「奢って貰っておいて文句を言うとか、お前理不尽だと思わないのか?」

「あれを紅茶だと言う方が理不尽です」

「だくかくらく!後日ちゃんとした喫茶店で奢っただろうが!」

「及第点の、ですけどね」

「辛口過ぎだろ。全身ジヨロキアで出来てんのかよ」

懐かしい思い出話に花を咲かせ、詩音は笑顔で逆に俺は不貞腐れる。そうこうしていると、詩音が住むアパートへと到着した。

後部座席から荷物を取ろうとする詩音を横目に、俺はなんとはなしに口にする。正直、目のやり場に困ったというどうしようもない理由からだっただけだな。それが選

扱ミスだという事に気付くべきだったのに。

「お前さ、親父さんのところで暮らそうとか思わないのか？」

荷物を取ろうとしている詩音の動きが不意に止まり、何とも言えない沈黙が車内に満ちる。

まづつたと思つた時にはすでに時遅く、詩音はゆつくりと眉をハの字にして困つたように微笑んだ。

「どうして？」

どうして、それは俺が聞きたい事なのに、それなのに俺はその言葉に何も返せずに押し黙るしか出来ない。

長い休みの度に親父さんのところに行くのは大変じゃないか？もうそろそろ卒業だろ？とか、言える言葉はいくつもあるのに、どれも言つてはいけない言葉なのだと自覚してしまっているから。

「悪い、忘れてくれ」

「……智也さんは、迷惑なのでしょうか？」

「そんなこと、あるわけねえだろ」

ただ、家族と離れて暮らすのは辛くないのだろうかと心配なだけだった。それだけなのに、その心配は詩音を傷つけてしまったように思えてならない。

「そう、ですか」

「ああ」

和やかな雰囲気か俺の不用意な一言の所為で壊れてしまう。壊すつもりなんてこれっぽっちもなかったんだけどな。

荷物を手に持ち、濡れないようにと俺は折り畳み傘を差しだす。

「本、濡らしたくないだろ？貸してやるよ」

「いえ、もう目の前なので……」

「いいから持っていけ。どうせまたクリスマスイヴに会うだろ？その時返してくれればいい。その時じゃなくても、ずっと後でも……いつでもいい。いつだって会えるんだろ？」

罪滅ぼしと照れ臭さとくすぐったさの混じった言葉に、つついぶつきら棒な言い方となつてしまった。

「……智也さん」

まったく、これは謝罪の言葉なんだ。だから、さ。

「はいっ。ではこの傘は、返したい時に返しますね。いつでも会えるのですから」

そんなに嬉しそうに傘を抱かないでくれよ。罪滅ぼしの言葉でさえ間違つてしまつたんじゃないかって、そう思つちまう。

助手席から降り、傘を挿して歩き出した詩音だが、何を思ったのか立ち止まったかと思つと、もう一度戻ってくる。

こんこんと運転席の窓をノックされ、忘れものかと窓を開けると……

「私が日本に留まる理由ですが、後部座席のクリスマスプレゼントを贈る誰かから貴方を奪うため……と言つたら信じますか？」

耳に唇を寄せ、囁くような詩音の言葉に心臓が嫌な音を立てる。

「……それが本当だとしたら、俺以上の馬鹿だと認定してやる」

「ふふ、知らなかったのですか？ 私、智也さん以上の馬鹿なんですよ？」

照れ隠しの微笑みを直視出来ず、俺は風邪引く前に帰れと手を払う。そんな俺の様子がおかしかったのか、詩音はまた笑つて……

「はい、送つて下さりありがとうございました。おやすみなさい、智也さん」

わずかに頬に感じた柔らかな感触と温もり。頬に手を当てて数秒硬直した後、詩音へと振り向くと、すでに詩音はそこにいなくてアパートの階段を上つていく後ろ姿。

不意に詩音は振り返り、寒さの所為か、それ以外の要因があるのか、赤く染まった頬を綻ばせて小さく手を振つた。

そんな詩音へと、放心したまま俺も手を振り返す。

「……卑怯だろうよ、今の」

詩音が部屋へと消えていくまで俺は見送り続ける。詩音の姿が部屋に消えてもなお数分そこに留まり続けた。

あまりに突然の出来事に心が追い付かなくて、まだ微かな温もりと感触が残る頬へと手を移す……なんて少女漫画でお腹いっぱいな展開が理由じゃない。

後部座席に忘れ去られた紅茶の入った買物袋、それにテンパったあいつがいつ気付くのかと待ちに待っているだけだけどな！

その後、詩音は決まり悪そうに部屋から出てきて、さつきよりもずっと真っ赤に染まった顔をしながら戻ってきた。

小さく、智也さんの意地悪……と呟きながら今度こそ帰ったのだった。

恥ずかしいならやらなきゃいいだろうに。

腹が振れそうなネタを提供してくれた紅茶姫の顔を思い出し、愉快愉快と笑いながら車を走らせる。

そういや、詩音のやつクリスマスプレゼントとか言ってたな。

後部座席へと目を向け、俺は密かに含み笑う。

「そりゃ、そう思うよな〜」

時期的に勘違いしてしまうのも無理はないかもしれないが、詩音は一つ勘違いをした。後部座席に鎮座しているソレはクリスマスプレゼントなんかじゃない。

「実は誕生日プレゼントだったりしてな」

毎年欠かさずに送り続ける、俺達からの主賓のいないハッピーバースデーなのだから。

小雨が土砂降りに代わり、髪と服を濡らした大学生達が、マジないわあ〜と雨に文句を垂れながら店内へと水滴を落としながら入ってくる。

智也の家の近くのファミレスには、雨宿りを目的とした客がちらほら見える。その客の内の一組が俺達でもあるんだけどな。

雨脚が激しくなり、急遽ファミレスへと目的地を変更し、雨にどっぷりと濡れた俺と、しっかりと傘を差してきたであろうあまり濡れていない三人。

隣に座る唯笑ちゃんはどこか青ざめた顔をしていて、震えそうな両手をぎゅつと胸の前で組んで俯いている。この雨と寒さの所為じゃないと誰でも気付いてしまうような震えと、何を映しているのか想像も出来ない虚ろな瞳で。

対面に座るいのりちゃんは唯笑ちゃんとは対照的で、どこか吹っ切れた顔でコーヒーストームを口に運び、一蹴は今にも寝そうだ。

テーブルを挟んで、俺達とは違う温度差にどこか心が軽くなった気がしてしまう。

俺の知らない何かを握っているいのりちゃんと、何に怯えて震えているのかわからな

い唯笑ちゃん。そして、何一つ頭が働かない俺。

とにかく情報を整理しないといけないのに、いのりちゃんから話を聞きだすための言葉が出てこない。蒔田淳の名前が俺にうるさいくらいに警鐘を鳴らす。俺の見逃してきた過去、それを見てはいけないと叫んでいるようだった。

「それでいのり？三上の事でなにかわかったんだろ？教えてくれよ」

臆する俺の代わりに口火を切ったのは一蹴だった。

こういう時、あいつと関わりの薄い客観視出来る奴がいるのは心強い。一蹴の存在は俺達にとって、少なからず心強い味方でいてくれる。

「はい。その前に、蒔田さんの事はお二人共ご存知ですか？」

「まあ、ね」

いのりちゃんの質問に、なんとか虚勢を張って応える俺と、蒔田の姓に肩をピクリと動かす唯笑ちゃん。やつぱり、唯笑ちゃんにとってもその名前は禁句なんだろう。

「いのりちゃんは どうして蒔田さんと？」

繋がりがあるとは思えない二人。最初に疑問に感じたのは、蒔田兄妹をなぜいのりちゃんが知る経緯に至ったのかということだ。

「そうですね。お二人にはそこからお話ししないとわからないでしょうし」

いのりちゃんはコーヒを一口飲み、いのりちゃんの代わりに言葉を継いだのは相変

わらず疲れて眠そうな一蹴だった。

「それは俺から話してやるよ。俺は名前までは知らなかったけどな」

続きを語る一蹴。その語りを神経を研ぎ澄ませて聞く。もう何一つ見落とすことがないように。

蒔田透子さんを知る切っ掛けとなったのは、偶然智也と蒔田透子が一緒に喫茶店にいるところを見かけ、二人の会話をとどころ聞いてしまったからだと言う。

彼女と話している時の智也は、いつもの能天気さは鳴りを潜め、藁にでも縋りたそうな心細さと、青ざめた顔で追い詰められた様子だったらしい。

智也の様子には納得がいく。交通事故を引き起こしてしまった人の妹というだけではなく、その後自殺してしまった人のたった一人の妹なのだから。あいつなら罪悪感を抱いてもおかしくない。俺だって、智也の立場だったら逃げ出したい気分だろう。だからこそ一つ疑問が浮かぶ。

そもそもなぜ智也は彼女と会っていた？偶然か？道端でたまたま会って、少し喫茶店で話を……なんてあるはずがない。どちらも向き合うには重すぎる関係だからな。

そこまで考えて、ふともしかしたらという答えが浮かんだ。

「一蹴、それっていつの話だ？」

「あん？えっと……」

一蹴の答えは、俺の想像を肯定した。

「やっぱり、だ。あいつが蒔田透子と会ったのは酔い潰れた日と同じ。つまり、俺を遠ざけてから、あいつは自分から蒔田透子と話をしに行つたんだ。俺の知らない目的を持つて。そうじゃないと、あいつと蒔田透子が一緒にいた理由へと繋がらない気がする。」

だが、今更蒔田透子に会つてあいつは何がしたかつたんだ？今になってあの事故を蒸し返すようなことをあいつがするか？思い出したくもない過去を、自分も相手も思い出してしまふような事を……いや、そうしなければいけない理由があつたんだ。

「なんだ？俺は智也の何を見落として……」

智也とのこれまでを思い返そうとすると、一蹴の口からもたらされた言葉に俺は思考が停止してしまった。俺の想像の遥か彼方の言葉を、一蹴が言葉にしてしまった。

「な、に？」

聞き間違えじゃないかと、俺はもう一度一蹴に問いかける。あまりにもあり得ない言葉が、俺を斬りつける。

「自分を人殺しだつて、そう言つてたんだよ三上は」

「人、殺し？あの智也が？」

錯乱する思考と狼狽する心。目の前が暗くなり、額に手を置く。

あいつが、智也が人殺しだって？あり得ないだろ、あの馬鹿にそんなこと出来やしない。だってあの智也だぞ？皆が予想もしない事ばかりを実行して、周りを笑わせながら困らせて……誰かを、人が傷つくことを極端に嫌っているあいつがそんなこと……

狼狽したまま、せめて何かに掴まらなければと、俺は泳ぐ視線を唯笑ちゃんへと向ける。

だが、そこにいたのは……

「やっぱり、そう、だったんだ……」

俺なんかよりもずっと頼りなく震え、今にも消えてしまいそうな唯笑ちゃんだった。

「唯笑ちゃん？」

「おかしいって、どうしてって、ずっと考えて考えて……智ちゃん、答えてくれないんだもん。聞くと、いつも誤魔化して逃げちゃうんだもん。だから、唯笑……ずっと……」

その先に紡がれた言葉。ぼつりと、儚く消えてしまいそうな声。でも、確かに聞こえてしまった俺の知りえない事実には、空気があまりの寒さに凍った気さえしてしまった。

唯笑ちゃんから漏れ出した言葉に、俺は呆然自失となり、いのりちゃんと一蹴でさえも目を見張る。

——そっか、だから智ちゃんはあの時……死のうとしたんだ……——

「な、なんだって？唯笑ちゃん、今なんて？」

あまりに現実感のない、智也とは無縁に思えていた言葉。

信じられない、信じたくない、信じてたまるか。

胸の内で唯笑ちゃんのその言葉を否定し、耳を塞ぎたくなる。

「ごめんね信君。信君には話すなって、智ちゃんにずっと口止めされて、今まで言えなかったの。だけど、一蹴君の聞いた話が本当なら、もしかしたら関係があるかもしれないって」

「俺に話すなって?」

「でも、もう良いよね? 蒔田さんが関わってるってわかっちゃったんだもん、隠す意味、もうないよね?」

ここにいない誰かへの問い掛け。答えなんて返ってこない、意味のない問い掛け。それでも聞かずにはいられないのだろう。

「……唯笑ちゃん、頼む。聞かせてくれない? 俺は何を知ったつもりでいたのか、何を知らなくて何を知らなければいけなかったのか……教えて欲しい」

今もまだ戸惑う唯笑ちゃんの瞳を逃がさないよう、俺は正面から射竦めるようにその瞳を捕まえる。

「唯笑ちゃん」

「……そう、だね。もういい、よね?」

何度かの逡巡の後、重く塞がれそうな唇が無理矢理開いたかのように動き出した。「うん。あれは彩ちゃんの葬儀が終わった次の日——」

彩ちゃん、毎日ってこんなに簡単だったわけ？

昨日の彩ちゃんの葬儀の時、唯笑ね？泣けなかつたんだ。果凛ちゃんも、葉夜ちゃんも……学校から葬儀に参加してくれた人達が皆泣いていたのに、唯笑も智ちゃんも泣けなかつたんだよ。

だって、泣く必要なんかどこにもないもん。全部全部、何もかもが嘘なんですよ？嘘じゃないなら夢なんだよ。唯笑も智ちゃんも夢を見ていて、明日になればいつもが始まるんだよ？

寝坊助な智ちゃんを彩ちゃんが起こして、二人が唯笑のこと迎えに来てくれる。文句をぶつくさ言う智ちゃんと、智ちゃんとふざける唯笑を彩ちゃんが『もう、何を言ってるの智也も唯笑も』って呆れたように言うの。それで、三人一緒の高校に行けるようにって、彩ちゃんが馬鹿な唯笑達の勉強を見てくれて……

「おかしいね？こんなのおかしいんだよ」

あの日から一日が簡単なんだ。起きて、ご飯を食べて、彩ちゃんの家に行って、夜になつて寝る。それだけの一日。

ぼくつとテレビを眺める。よくある青春ドラマが画面の中で繰り広げられている。彩ちゃんと智ちゃんと唯笑、三人が過ごしてきた日常のような映像。明日から始まる唯笑達の一日も同じように続くはずなんだよ。

『ゆえゆえ……』

葬儀が始まる前、黒ちゃんは唯笑を静かに抱き締めた。悲しそうに、悔しそうに顔を歪ませながら。

どうしてあんな顔をしていたのかな？唯笑、なにか黒ちゃんに心配されるような事したかな？

「そうだ、予習しないと」

明日やるはずの場所を勉強して、彩ちゃんを驚かせるんだ。教えようとしていた範囲を唯笑が解けたら、彩ちゃんはどんな顔をするかな？驚いて、凄いねって、偉いねって笑ってくれるかな？

想像するとわくわくして、そうと決まれば今日は解けるまで頑張ろうと意気込み、リビングを出て部屋に向かおうとした。

「智がいらない？」

お母さんの怪訝な声が聞こえ、足を止めて扉に身を隠すようにしてお母さんへと視線を向ける。お母さんは電話をしていた。多分相手はおばさん、智ちゃんのお母さんなんだろう。

「あゝ、あんたちよつと落ち着きなよ。智がいなくなつたつて?」

「智ちゃんがない? どこかに出掛けただけじゃないのかな? それとも、彩ちゃんと二人で逢瀬……とか? んゝ、複雑だけどそれはそれで嬉しいよお。」

「親のあんたが泣いてちやあ話にならん! 泣き止め馬鹿ツ!!」

おばさんが泣いてる? そんなのいつもの事だよね。何かある度、お母さんにべそかいて愚痴を零してるもん。

「うん、うん……で? うん……うん……」

電話をしながら、お母さんの眉間の皺がどんどん深くなっていき、冷静になりたいのか煙草を取り出して啜える。

もう、臭いから煙草は家の中では吸わないでつて言ってるのに。

「ごめんなさい? 書置きにそう書いてあつたつて?」

灰皿どこにあつたかな? 持って行ってあげないと。

「書置きの意味に心当たりは……いや、いい。智が謝るつてことは、コレしかないだろうな」

気持ちのままに走る。

間に合わないなんてもう嫌なんだ……何が？

独りでなんて生きていけるわけがないんだ……何で？

三人で一つなんだって信じていたんだよおッ……何を？

支離滅裂な感情と思考の渦に飲み込まれ、このままだと窒息してしまいそう。目の前には確かに三人一緒の未来が、きらきらと陽に照らされて見えているのに……そのはずなのに……

「いい加減に止まれ暴走娘ッ!!」

手を目一杯の力で掴まれ、走らなければ壊れてしまいそうな足が止められてしまう。

振り返ると、そこにはお母さんが肩で息をしながら白い息を吐いていて、唯笑の顔を見た途端、今度は眉をハの字にして今まで見せた事のないような、いくつものネガティブな感情が絢交（ないま）ぜになった表情へと変わった。

「お、かあさん……」

「唯笑、あんた……なんて顔してんのよ？」

愛娘に対してなんて失礼な事を言うのだろう。これでも容姿にはちよこつとだけ自信があるのに。

「なんてって？別にいつもの唯笑だよ？」

にへらと笑いながら、いつもと変わらない声で返す。そんな唯笑を数秒呆然と見つめた後、自分の頭を乱暴に掻き毟って、お母さんはいつになく厳しい目つきで肩へと両手を添えてきた。

「そう、いつものあんた……ね。そんじゃあ、いつものあんたに言うけどさ……今すぐ帰れ馬鹿娘」

有無を言わせない鬼気迫る声に息が詰まる。

「まあ、あたしが迂闊だったのは認めるわ。あんたに聞かせないように配慮すべきだった、あんたの母親だったのに、あたしはあんたを守る努力を怠ったわけだし、責められなくても仕方ない」

お母さんは何を言っているんだろう？ 唯笑を守る？

「何を言ってるのお母さん？ 唯笑はただ智ちちゃんと彩ちゃんに会いに行くだけだよ？」
「……唯笑？」

肩に添えられている手が密かに震えた。信じられないものでも見るかのような視線に首を傾げる。

「最近ね、智ちゃんも彩ちゃんも酷いんだよ。唯笑のこと置いて二人で遊んでばっかりで。そりゃあ、二人が幸せなら唯笑も嬉しいんだけど、でもね？ ちよつとは二人だけじゃなくて三人でまた遊んで欲しいなって、我仮も言いたくなっちゃうんだよ」

「唯笑、あんた……あんたも、だったの？」

「だからね、今も唯笑を置いて遊んでる二人のどこにいきなり行つてびっくりさせるんだあ。こうなつたら少しくらい意地悪しないとだもんね。いっつも智ちゃんを独占させて上げないよお！つて」

「はっ、ほんとどうしようもないね、あたしつてやつは……自分の娘の事にも気付いてやれないなんて」

「もう、彩ちゃんと智ちゃんほんとにどこに行つたんだろ？早く見つけ……んッ」

お母さんの手を振り切ろうとしたけれど、両手を背中に回され、無理矢理お母さんの胸に顔を埋めさせられる。びしょびしょに濡れた服からは、とても、とても嫌な雨の匂いが染みついていた。

「もう良い、もう喋るな馬鹿娘。そんでもつて、あたしはとんだ馬鹿親だ。正真正銘の馬鹿親さ……」

雨に打たれ冷え切つた身体は、唯笑を力の限り抱き締めながら震えていた。

「智だけじゃない。智と同じにあんたも壊れていたつてのに、あんたの心は悲鳴を上げていたつてのに……母親のあたしが真つ先に気付かなきゃならないあんたの声に、あたしは今の今まで気付いてやれなかつた」

壊れてる？唯笑が？確かに、彩ちゃんに智ちゃんを取られたみたいで寂しかったりは

したけれど、でもそれは唯笑が三人の為に望んだことだもん。傷つくような事なんて一つも……

「悪かったね、こんな母親で。けど、まだ間に合うなら少しだけ母親らしいことさせて欲しいんだけど、良いかい？」

どうして謝るの？お母さんは何も悪い事なんてしてないのに。

「あなたにとつて彩がどれだけ掛け替えのない存在だったか、これでもわかってるつもりさ。だからあんたが今、少し突つただけで壊れてしまうのも仕方ない。だからこそ、今は……いや、今度こそはあたし達大人に任せな」

だから、お母さんは何を言ってるの？存在だったかつて、それじゃあまるで彩ちゃんかもうどこにも……

「あの時、あたし等は親として何一つ守れなかった。彩も、彩とあんたが世界で一番笑顔でいて欲しい智の事も……何もかも手遅れにしてしまった。けど、今度こそ親としてあなたと彩に約束してやる。あたし等親が絶対に智をあなた等に繋ぎ止めて見せる。手遅れなんかにしてやらない。だからあんたは智の帰りをいつものあんたで待つてな。智を、彩が愛している智を支えられるように……酷な事を言うようだけど、それが出来るのは唯笑？世界最強のあたしの娘であるあんただけなんだ。いつまでも泣いたままじゃ、繋ぎ止めはしても救えないんだからさ」

一つも理解出来ない、理解してはいけない言葉のはずなのに、強張って固まっていた全身から力が抜けて、お母さんに身を任せるように倒れ込む。

そんな唯笑の背中を、小さな子供をあやす様に優しくぽん、ぽんと叩いてくれる。それは、唯笑達が悪戯して怒られて、謝りながら泣き出してしまい、そんな唯笑達を、最後にはお母さんはこうしていつも微笑んで許してくれた……もう、思い出すこともなかった遠い日の温かな記憶を呼び起こす。

「お、かあ、さん……」

「……ん〜？」

お母さんもあの頃を思い出しているのか、心なしか声も穏やかで……だから今この時だけ、唯笑は幼い頃へと戻ってしまったかのように……

「おね、がい……お願い、だよお……」

—— 智ちゃんを助けてえッ ——

「はいはい、任されたよ。なんてったって、あんた達の母親は世界最強だかんね」

泣きじゃくる子供の我俣を、満面の笑みで受け止めてくれた、唯笑達三人の世界で一番の自慢のお母さんが。

「その後の事は詳しくはわからないんだけど、お母さんが言ってきたのは、川からおじさんと二人で寒中水泳してた、いつまでもやんちゃな坊主を釣ってきたって」

唯笑ちゃんの話を聞きながら、俺は言葉もなく俯くばかり。

唇に違和感を覚え、舌で舐めると鉄の味がした。

寒中水泳？釣り上げた？なんだよそれ……なんなんだよツ!!

俺の知らないところであいつは、あの馬鹿は激しい雨が降って、とてつもなく死ぬかもしれない可能性がある川で呑気に水泳してたって？笑えねえんだよツ!!

智也の心の傷を知ったつもりになって、一緒に苦しんで、一緒に笑って、一緒にて今の今まで……

「んだよ、それ……」

俺、親友でもなんでもないじゃんか。何を良い気になって、智也に得意気に心ない言葉を浴びせてきたんだよ。何が雨はいつ上がる？だよ。思えば上がりも甚だしい。俺は何一つとしてあいつの痛みを共有出来てなんていなかったのに。

「信君……」

あいつは、どんな気持ちで俺の言葉を受け入れてきたんだ？どんな痛みを抱えて笑ってきたんだ？どんなに虚しい想いで俺と一緒にいたんだ？

自分で自分が嫌になり、空々しい笑みが浮かんでしまう。

「やっぱり、智ちゃんと言君は親友で家族なんだね」

自暴自棄になりそうな俺に、柔らかな声が降り注ぐ。

「智ちゃん知ってたんだよ。言君が自分を責めてどこにも行けなくなるって、知ってたから唯笑に口止めしてたんだと思うよ」

それはいつものあいつの優しさで、俺を叩きのめすのに十分な威力を伴う凶器だ。そんな優しさ、俺は求めてなんかいない。親友だつて言うのなら、俺を認めてくれるのなら、どんなに深く凶悪な真実でも、嘘偽りのない言葉が欲しかった。

自殺行為な寒中水泳をするまでに追い詰められた、その理由をなんで一つも話してくれなかった？ どうして関係のないのりちゃんから、あの人の、蒔田淳の名前を聞かなくやいけなかったんだ？ 何がどうなって……いや、そうじゃない。何をどうしてたんだよお前はッ!!

「そんな優しさなんて俺はッ」

ぴんぽん♪

「……おっ」

俺のやり場のない感情とはそぐわない音色が鳴る。それが他の客ならいざ知らず、目の前の馬鹿が伸ばした手による物となると話は別だ。

「どういうつもりだ一蹴？ 場合によつては一週間部屋から出られないように社会的制裁を実行するぞ」

「あく、悪い信。俺何も食べてなくつてさあ。あ、いのりはチーズケーキでどう？ ここのチーズケーキ好きだつて言つてたもんなあ」

「い、一蹴？」

らしくない一蹴の行動に、いのりちゃんも戸惑いの色を見せる。

いつもなら軽く冗談を交えて流せることも、今の俺には容易じゃなくて、つい厳しい顔つきになってしまう。

「一蹴、お前今がどんな時か「あ、すいません。チーズケーキ一つとミックスバーグのBセット、ライス大盛りで。あと食後にジャンボパフェ、これは俺一人じゃ無理だから全員協力でよろしくつてことで」

何食わぬ顔で俺の言葉を遮り、何事もないように笑顔で注文する。まるでどこかの空気を読んで空気を読まない、良く知っている馬鹿のように。

「あのさあ、これ誰の通夜の帰りなわけ？ 今坂さんも信もいのりもさあ。その誰かの通夜はずつと昔に終わったんだろ？」

ずつと昔に終わった？ こいつ、今何を言つた？

瞬間、血液が沸点を軽く超え――

「信君駄目ツ!!」

「稲穂さんツ!!」

「——おい、一蹴?今、お前、なんて、言った?」

対面にいる一蹴の胸倉を引つ張り上げ、無理矢理立たせるといふ、普段の俺なら有り得ない失態を演じてしまう。演じざるを得ない。

こいつは暗にこう言ったんだ。彩花ちゃんの事は、もうとつくに終わった事なのだと。

許せるわけがない。許していい言葉じゃない。許してしまったら、俺達の今までを否定してしまうのだから。

初めて見せた俺の失態を、一蹴はにへらと気の抜けた笑顔で受け止める。なんだよ、何がしたいんだよ。今の一蹴は俺を無性に逆撫でする。なぜなら、そんな一蹴に誰かの影を重ねてしまいそうになるから。あつてはならないその影を、俺は認めてしまいそうになるから。

「自分こそ、何をしているのかよく考えろよな。今、俺達は何の為に集まっているんだっけか?こんな浸みつたれた話をする為だったっけ?」

「……何が言いたい?」

「察しの悪い事で、らしくないって言ってんだよ。俺達は三上を、底抜けに馬鹿なあの人

に戻したいって、そういうポジティブな理由で集まっているんじゃないのか？あいつの過去を知って、隠している事を暴いて、それでそれを解決しようぜって話しているんじゃないかったのか？」

俺の剣幕もどく吹く風で、相も変わらず気の抜けるような笑みを張り付けたまま。だが、その言葉に胸倉を引き千切らんばかりの力で握っていた手から力が抜ける。

「なのになんだよ、あいつの過去を少し知っただけで落ち込んで？それでどうするって？この先の事を知って、ますますドツボに嵌って抜け出せなくなってる？それで、よし三上をなんとかしてやろうって？はん、そんな奴に三上が頼るかよ冗談じゃない」

「い、一蹴、そんな……言い過ぎだよ」

「言い過ぎ？そんなわけないだろ。今のでこれだぞ？どうしようもないっていうか、信を過大評価してたよ俺。誰だって話さない、話せない事の一つや二つあるってだけだろ。ただ、三上の場合それはがちよつとばっかし大きいってだけでさ。そんなこともわからないでうじうじと……止めだ止め。いのりが何を知ったのかは知らないけど、もういいや。いのり、あとは俺達だけでやろうぜ。あ、今坂さんも俺達サイドって事で。どうにも俺達だけじゃ厳しそうだし、三上の核心に近い人がいないとって気もするから。てなわけで、信御足労ありがとさん。とつと帰って詰碁でもやっていけばいいさ」

捲し立てられた言葉の数々が俺の心臓を無数に突き刺す。一蹴の言葉に俺は歯噛み

する事しか出来ず、唯笑ちゃんは目を逸らし、いのりちゃんは驚きに呆然としている。そりや、いのりちゃんが呆然とするのも仕方ない。こんな一蹴を誰も知らないのだから。こんなにも傍若無人で熱い言葉を口にするなんて……空腹で壊れたのじゃないかと疑うほどに不自然だ。

「俺は三上を何とかしてやりたい。あの人が抱えている何かを軽くしてやりたい。それがあいつに救われた俺の借りの返し方だからな」

なんてぶつきら棒な言葉に、自然と笑みが零れた。

……無駄じゃなかった。俺と智也が築いてきた時間が無駄じゃなかった証明が目の前にある。いのりちゃんと一蹴をなんとかしてやりたいって足掻いて、手を伸ばして、その結果が今の一蹴の言葉と態度だ。

ああ、一蹴の言う通りだ。そうだ、何度絶望しようと、何度過去に心挫かれようと、俺は智也を陽の射す場所へと連れ出したい。それが無理なら、傘を挿してやりたい。そう彩花ちゃんに誓ったはずなのに、たった一つの過去にそれを見失いそうになっていた。「はあく……まったく、生意気と言うか素直じゃないと言うか……まあ、悔しいけど一蹴の言う通り、だよな。少し冷静になれたわ」

「うん、そうだね。ごめんね一蹴君。それと、ありがとね」

俺達の言葉に、わかれば良いんだよと、頬を掻いてそっぽを向く可愛い俺達の年下く

ん。

そっか、それなら一蹴の覚悟に俺も俺らしく応えないといけないよな。というわけで

……

ぴんぽん♪

「ふわふわオムライスにスーパードライブ付けて、あとフライドポテト大盛りで」

「あ、唯笑はね、ロイヤルスイートセットの松で」

「今坂さん、稲穂さん……」

「はは、わかってくれたか二人共……ていうか松とかあんのかよ?」

俺と唯笑ちゃんの復活に目の前のバカップルが微笑む。良い笑顔だよ、俺達が手助けして繋ぐことが出来た二人の笑顔は本当に最高だから……

『一蹴(くん)の奢りで』

滑稽な青ざめた笑顔へと変えてみよう。

「はあああああ!!?!」

「いやあ、さすがに年上に向かって失礼の度を越してたからな今のは。執行猶予とか生易しいだろ」

「そだね。さすがに唯笑も彩ちゃんの事はむうってなったもん」

「いや、それはあれじゃん?二人を叱咤激励するための方便で、そのおかげでこう……ね

「?なあいのりって、いのりは!」

「ついさつき澄まし顔でトイレへゴーだよ。嫌な予感を敏感に察知する能力は智也に鍛えられたらしい。素晴らしい優等生じゃないか。」

「一蹴君?」

「……は、はい?」

「お会計、よろしくね?」

「……ふあい」

「反論を許さない無敵に素敵な笑顔に、さしもの一蹴も体育会系の返事でお茶を濁すしもなく、俺達の会議は愉快な休憩時間を挟んだのだった。」

「信のは良いとしてもなんだよこのロイヤルなたらつて……一万近いんだけど……これがあれで、貯金……てことはもやし生活?クリスマス考えともやししか……でも、ええ?」

「ただでさえ寂しい財布が閑古鳥になるらしく、一蹴は携帯の電卓を駆使して数字と睨めっこ中。さつきまでの俺達よりも酷い顔色で少しばかり同情してしまう。」

「あ、店員さん。彼に胃に優しい冷奴をお願いします」

「余計な重りを俺の胃に仕込むの止めてくれねえかな!」

その重りは一蹴の財布から仕込まれるんだけどな。これも一種のマッチポンプじゃなからうか？

「それでいのりちゃん、君が蒔田透子さんと会ったって話なんだけど」

「会話の緩急付けすぎじゃね!？」

黙れ閑古鳥。一蹴も鳴かずば撃たれまいて。

「素敵なクリスマスプレゼントありがと一蹴君♪」

「素敵な彼女へのプレゼントが予定されていたんですけどね!？」

あははと、その素敵な彼女は苦笑している。泣かない雉は撃たれない事を、身に染みて学習している彼女は優秀だな。

「一蹴、真面目な話をしようとしている時にうるさいぞ」

「もう二度とあんた等を励まして野郎だなんて愚策はしない」

クリスマスプレゼント、もう予約してあるのにさあと、いつまでも男らしくない事がグチグチ言っている彼氏は視界の隅に追いやって、しっかり身の委ね方を弁えている彼女と向き合う。

「じゃあいのりちゃん、蒔田透子さんとの事聞かせてくれるかな?」

「こんなに切り出し辛い会話の流れって……」

「それは智ちゃんの恋人兼幼馴染と」

「親友つて事で諦めて欲しい」

「なんて説得力のある言葉なんでしょう……ていうか、今坂さんちやつかり設定盛ってましたね」

さすが智也に骨の髄まで教育された生徒。それがどういった方向にねじ曲がった教育かはさておき。

いのりちゃんは紅茶を一口含み、一息ついてから口を開く。あの馬鹿が頑として引き籠る秘密の部屋の扉を、完膚なきまでに徹底的に破壊するための爆薬を持つ彼女、蒔田透子さんの話を……

「なるほど、ね」

最近の智也さんの事、ファミーユで見掛けた事、智也さんにファミーユでの事を尋ねた時の、二度と思いついたくもない拒絶を見せた事……最後のは少しだけ堪えないと何かが溢れてしまいそうで、少しだけ目に力を入れていたけれど。

「それで、その原因と思われる私に声を掛けて、彼の事情を知りたいとそういう事？」

「ええ、失礼なのは重々わかってはいるのですけれど、どうしても知りたいんです」

「ふ〜ん……ふ〜ん……へえ〜」

にやにやとカップの中をスプーンで掻き混ぜながら、蒔田さんは興味深そうな視線を

向けてくる。

「やっぱり彼女じゃ「ありません」……その反応の速さが怪しいんだけど」

なんというか、どこか飄々としていて掴みどころのない人で、こちらが弄ばれている気がしてくる。やっぱり声を掛けたのは失敗だったかもと後悔してしまえそう。

「ま、どっちでもいいんだけどね」

「じゃあー」

「どうせ話さないし」

私の期待を無情にも一刀に伏す彼女は、やっぱりどこか嬉しそうにしている。なにがそんなに嬉しいのかな？

「とういかね、話せるわけじゃないじゃない。うん、話しちや駄目なのよ私は」

「それはどういう？」

「私には彼の事を話す資格がないのよ。その事を、あの日……貴方達が見たって言う日に痛感したの」

その声は表情とは裏腹に後悔だけが滲んでいて、とても不躰に入り込もうだなんて思えなくなってしまう。

「彼、誰にも話していいなんて言ってたわ。何でもない事のように、ね。それを聞いたら私、自分がした事の重さをその時になってようやく実感したのよ。私は彼のように強く

いられなかった。寄り掛かって、甘えて、一人でなんていられなかったのよ」

それが何を意味している事なのか、前者は想像も出来ない。でも、後者は容易に想像出来る。彼女の左手の薬指に光るソレを見れば。

「最悪よね。彼に時間を止める呪いを掛けた魔女が、掛けた呪いへの罪悪感と、それまでの寂寥感に耐えきれなくて、三上君を置き去りにして時間を進めてしまったの」

「呪い、ですか？」

「それも、あの事故から今まで一度も解ける事のない、もしかしたらこの先も解けないかもしれない、最低な呪い」

多分、その呪いについて問い質しても答えてはくれないのだろう。それでも、直接的な答えじゃなくてもいい。取っ掛かりにさえなってくれる何かさえ手に入れられたなら……

「それじゃあ、その呪いが解ければ、蒔田さんは最低じゃなくなれる……そう、ですよね？」

「何が言いたいの？」

尋ねた事の意図がわからないのか、怪訝そうに問い返される。その二つの瞳を逃げないよう、逃がさないよう、真っ直ぐに絡ませる。

大丈夫、心の向かう方向は定めたもの。三上さんが、私の天才的な反面教師がどれだ

け遠くに行こうとしても、私が離れなければ問題は無い。挫ける心はもう自分で手折った。過去の、リナちゃんを傷つけるだけの弱い私はどこにもいない。惚（とぼ）けた顔をした誰かがどこかに誘拐してしまったから。

さあ踏み出そう。脆弱なあの人へと会いに行くための鍵を手に入れるために。

「お願いします蒔田さん」

人目なんて私の眼中になくて、プライドなんて持ち合わせる余裕なんてない。今この時だけはただ一人の為だけに生きたいもん。

「ちよ、陵さん!?!何してるのよ!?!」

だから、公衆の面前で形振り構わず頭を下げるくらい、恥ずかしくもなんともない。恥ずかしいのは、三上さんから背を向けて逃げ出す自分だけだから。

「お願いします、何があったのか……教えてください」

彼女が根負けするまでの、ワンサイドゲームの根競べ。私の根勝ちか、悪くて引き分けしか結果が出ない勝負。

そんな子供の我侷の方がずっと可愛げがある勝負を挑む私に、彼女はしばらくどうしようか困惑し、不機嫌に沈黙し……

「言っておくけれど、どんな事されても教えないわよ。三上君が話していないって事は知られたくないって事だもの」

「全部分かったうえでお願いしています」

「あく、もう！いい加減に頭上げてよ！これじゃあ私が彼の浮気相手と呼ばびつけて、ちくちく責めて裁判沙汰にしようとしてるみたいじゃない」

「お願いします、もうあなたしかいないんです」

指でテーブルを叩き、貧乏揺すりをして、溜息をついてカップに口を付け、それを何周か繰り返し、たつぷり十分は立つ頃、ようやく蒔田さんから諦めのような言葉が零れた。

「……一っただけ聞かせて。それ次第で判断するわ。貴方、彼の恋人ってわけじゃない、聞けばただの家庭教師と教え子の関係ってだけなのよね？」

「はい」

「それじゃあ……そんな家庭教師と教え子つてだけの関係のあなたがそこまでする、嘘偽りのない本音を話さない。その答えに私が納得すれば、貴方の欲しい言葉を上げるわ」

痛烈なカウンターという諦めの言葉。

その問いに少し前の私なら逡巡して、当たり障りない言葉で逃げていた。でも、今の私は……この場でだけは三上さんの為に生きられる。そう、心に決めた背徳の悦びに身を震わせている。そんな今の私に、逡巡なんてあるはずもない。

迷いなく、心晴れやかに、仮面を曇天の向こうへと投げ捨てる。

——ます。

頭を下げたままで蒔田さんの表情は見えなかつたけれど、私の答えにそう、と口にした声は、どこか安堵していたように聞こえた。

「いいわ、貴方の答えが気に入ったから答えてあげる」

根勝ちした嬉しさに顔を上げ、期待に満ちた満面の笑みで蒔田さんと向き合うと、ただしと釘を刺された。

「三上君との事は私からは話せない」

「さっきの無駄に恥ずかしい事を言った自分を殺して、蒔田さんを道連れにしますよ?」
「とんでもない子ね貴方!」

とんでもないのは蒔田さんですよね!? 羞恥プレイを強要しておいてなんて無慈悲なの!? 無慈悲の代名詞、三上智也に匹敵しますよ!

「勘違いしないの。大体、誰にも三上君が話してもいないのに、私から話せるわけがないでしょ?」

「……どうしようもないじゃないですか」

「どうしようもあるじゃない。つまり、私からは話せないけれど、彼に話させれば問題はないわけ」

「はあ、まあそうですね」

つまり何が言いたいのかさっぱりなんですけど。

「これは私の憶測なんだけれど、三上君は多分準（なぞら）えるつもりなのよ。蒔田淳、私の兄が辿った道をね」

「お兄さんの、ですか？」

「そう、あの日松月彩花さんを事故に遭わせてしまった私の兄の、ね」

「——ッ」

蒔田さんの言葉に声を失う。それじゃあ、蒔田さんと三上さんの関係って……

「三上君と私は被害者関係者と、加害者家族……そういう関係なのよ」

そ、んな……三上さんは加害者家族の方と会っていて、加害者家族である蒔田透子さんが……

整理の付かない思考と感情。一つずつ整理しようにも、どこから手を付けて良いのかもわからない。

「え、あ……でも、え？だって三上さんはあの日蒔田さんに謝って……」

わからない、だって常識的に考えて三上さんと蒔田さんの立場はあの日、ファミリーユ

での出来事の時、逆じゃないとおかしいもの。

噛み合わない立場と会話。その意味するところに考えが及ばない。

ボタンを掛け違えたなんて、生易しいものじゃない。加害者が被害者で、被害者が加害者で……何が、どうして……

「その理由を、三上君の口から聞いて欲しいの。本当は私が彼を、止まってしまった彼の時間を進めてあげないといけないの。でも、今更私は何を言っても烏滸がましくなってしまう。だから、本当は嬉しかったのよ……貴方が私に食い下がってくれて。貴方ならって、そう勝手に期待出来ちゃったから」

「あの、すみません、少し混乱して……お兄さんが交通事故を、それで三上さんがお兄さんの辿った道をとって……」

それじゃあ話が繋がらない。ちぐはぐに糸は絡まったまま、絡まりの原点はどこにも見当たらない。そんなの、解きようがない。

「この前話していてピンときたのよ。今まで誰にも話していないって事は、誰にも頼るつもりがないって捉えることが出来るって。それに、恋人も作ろうともしていないんじゃないかしら？」

そう、推測出来てしまうのも頷ける。誰にも事情を話していないという事は、恋人と呼べる人を作ろうとしないという事。自分の心の中に、意図的に誰も立ち入らせな

いようにしているって、そう考えることが出来てしまう。

「それがどうして、その……蒔田さんのお兄さんと繋がるんですか？」

私の当然の問い掛けに、蒔田さんは曖昧に笑うだけで明確な答えを出してはくれなかった……けれど……

「私の兄ね、あの事故の後すぐに……その、言い難いんだけど、亡くなったのよ」

「亡くなった？あの、失礼ですが病気が何かで？」

静かに首を横に振り、今にも泣きだしてしまいそうな震えた声で静かに、呟くように……

「自殺、よ」

なんて声を掛ければいいのか、なんて事を訪ねてしまったのか……蒔田さんの言いよりのない苦悶の表情に罪悪感で一杯になる。

なぜ？なんて聞かなくても容易に想像が出来てしまう。理由なんて一つしかないのだから。

「すみません」

謝罪の言葉一つだけしか口に出来ない自分の浅はかさが恨めしい。蒔田さんの心は私は踏み躪っているという自覚があるのに、それでも……

「いいの。どのみち知られる事だもの。それに、兄がそうしてしまったのは、誰の所為で

もないって今はわかるから。兄は弱かったのよ。弱さを優しさだなんて勘違いしていたの……」

「そんなこと……そんな、な？」

あまりに重い事実という鈍器で頭を殴られ、思考がどうしようもなく鈍っていたらしい。気付くべき事にフィルターが掛かり、この時になってそこに結びついたのだから。冗談でも聞きたくない、近い未来の想像に。

「待って、下さい……お兄さんが、なんて？三上さんが同じ道をつて、そんな……」

どこに向かつてても最悪にしか行き着かない未来。

声も、身体も、心も、何もかもが震えて言葉に出来ないその先……

あり得ない、あつてはならない未来。そんなはずはない、あの人がそんなこと……目の前が真っ白になり、徐々に暗くなっていく。

あり得ないはずの想像は、だけどこどこか現実感を伴っていて、信じたくない気持ちと、信じてしまいそうな気持が闘（せめ）ぎ合う。

虚ろな瞳をどうにか蒔田さんへと向けると、彼女は困ったように微笑むだけ。

「蒔田、さん？」

「陵さん……貴方の想像、多分間違っているわ」

そう、ですかと胸を撫で下ろしたいのに、でも蒔田さんの声は私を安心させるには至

らない声で、安堵どころか不安ばかりが募っていく。

最悪ではないと肯定されたはずなのに、蒔田さんはそれでも和らいだ表情を見せてはくれない。

どういう事？それじゃあ、まるで……

「そして、間違っていないほうが良かったかもしれない間違い、よ」

死が最悪なのではないと言っているみたいなんだから。

「自殺、ならとづくに三上君はそうしていたでしょう。でも、私が幸いと言って良いのかはわからないけれど、今もそうしていないのは、それをする気がないという事。三上君は兄とは違う強い子だった……悲しい程に、強い子だから……だから、もしかしてって嫌な想像をしてしまうの。しかも、あながち間違いとは言い切れない……いいえ、そうするって言いきれてしまう想像」

「何を、何を言って……」

「私が彼に呪いを掛けてしまったから、かしらね。きっと彼は兄と同じように……」

——兄が得るはずだった物、その全部を失った道を辿るつもりよ。大切な全てを遠ざけて、たった独りだけの人生を生きる為に、ね——

「……馬鹿、じゃないですか、そんなの。どうしてそんな」

ああ、確かにそれは死よりも酷い拷問ですね。数分の苦しみよりも死ぬまでの苦痛を享受するだなんて。

想像してみる。自分の傍に居てくれる大事な人達が全て消えて、誰とも繋がらないように社会の中で生きていく……その想像も出来ない途方もない寒々しい恐怖を。

「どうしてかは三上君から聞くのね」

蒔田さんが腕時計を確認し、バッグを手に立ち上がる。

「さてと、私用事があるからこれで」

「唐突過ぎません!?!」

「いや、大分時間がヤバイのよ。どれだけ話してたと思ってるの?」

それはそうですね。ゆうに一時間は軽く超えているし。

「大人はね、学生ほど時間が無限にあるわけじゃないの」

「時間の概念がおかしくありませんか?」

「ふふ、大人になればわかるわ。時間が有限だって、嫌って程突きつけられるんだから」

「あ、あのちよつと待って下さい!三上さんから話を聞くってどうやって!」

「あ、そうね。忘れてたわ」

ちよろつと舌を出して失敗失敗と可愛い子ぶる。最後の最後にイラつとしてしまっ

たのは内緒です。

「私に会ってこう言っていたって伝えて。『もうこれ以上加害者にしないで』って。あとはまあ、貴方の鎌掛け次第かしらね」

今度こそじゃあねと、軽やかに手を振って蒔田さんはお店を出ていった。

残された私はミルクティーを呑みながら、繋がらない話をどうにかして繋げてみよう
と頭を悩ませ、結局答えには行き着かないままお店を後にしようとした。

「……あ、れ?」

したのだけれど、見慣れないというか、見たくない何かを目にしまって目を擦る。
そんな……まさか……

「蒔田さん、貴方年上ですよね? 社会人ですよね?」

なのはどうして……

「伝票が置きっぱなしなんですかあッ!!」

私にとって貴方は立派な加害者ですから!!

今度街で見かけたら容赦なく取り立てようと、心に固く硬く堅く決意し、私は泣く泣く二人分を支払って店を出たのです。

「というわけでして」

「うん、所々ぼかさされてて、気になったんだけど」

「自主規制です個人情報保護法ですプライバシーの侵害拒否です」

頑なに話してくれない腹の内。探ったら何が出てくるか楽しみではない。もう智也の事よりのりちゃんの自主規制を何とかしたいんだけど。解析ソフトでもないだろうか？

「まあいいや、それで唯笑ちゃんは今の話で気付いた事はあるかな？」

ずつと黙ったままの唯笑ちゃんに聞いてみる。俺にはわからない事が、唯笑ちゃんならもしかしたらと期待を込めて。

「……ある、といえばあるけれど……ごめん信君。詳しい事は何も。確証がね、ないんだ」

今の唯笑ちゃんの反応……多分知っているかもしれない事があるんだ。だけど、どういった理由か話せない事情がある。らしくない言葉の濁し方でそれが伝わってしまう。それなら、無理に聞き出すのは野暮と言うものだろう。

それがどんなに核心に迫る推測か、はたまた真実だとしても。

「となると、やっぱ智也を問い質すしかないかあ〜」

「そうですね。今三上さんは？」

「智ちゃんなら何もなければ家にいると思うよ。最近ずっと積んでたゲームをやるん

だつて張り切つてたもん」

「その様子を聞く限りじゃ、あいつがとんでもない事態になつてゐるだなんて誰も信じないだらうなあ」

ただまあ、蒔田さんが言つていた推測は、心当たりありまくりなわけで、それを放置しておくとその通りの未来に辿り着いてしまう。

あいつは今すぐにじゃなくても、徐々に俺達を遠ざけるつもりなんだ。たった一つ、彩花ちゃんへの想いだけを縁にして。

「ほんつと！手の掛かる親友だよ！」

「まったく、迷惑千万な反面教師です」

「こうなつたら唯笑が結婚してあげるしかないね！」

三者三様に爽快に、不敵に、快活に笑みを浮かべ席を立つ。どこに向かうかなんて言わなくてもわかっている。俺達をこれだけ振り回した帳尻を合わさせてやりに行こうじゃないか！

「といわけで会計よろしく」

「一蹴君、素敵で美味しいお食事をありがと。唯笑は今日の事一生忘れないよお」

「あんた等立派な三上一派だよ！」

「い、一蹴？私も少し出すよ？」

「それは彼氏としてのプライドが許さないから！」

「きやあく、一蹴惚れる〜！」

「やったね一蹴君！智ちゃんの次に格好いい男の子になれるよ！」

「恩知らずの日本代表共が！」

泣きそうな一蹴を困ったように慰めるいのりちゃん。一蹴の機嫌の上方修正は君に任せた。代わりに下方修正はいつでも俺達に任せて。

店を出ると、先程まで降っていた雨は上がり、雲間から星が覗いている。

大丈夫。俺の足元にはもうあの日の凄惨は映らない。

水溜りへと一歩踏み出し、今度こそと歩き出す。

自分よがりなまま、間違えた事にも気付かず、目を逸らしてばかりいた過去は、どうあつても取り戻すことは無理だ。だけど、今ならまだ間に合う。あいつに手が届く。

俺は彩花ちゃんにずっと背負わせたままだった。今日の今日まで。だがそれも終わりが。今度こそあいつの抱えるとてつもない危険物を、四人全員で分け合おう。それがどんな終わりになるうと、四人でなら耐えられる。いや、耐えるどころか失敗したあつ！と、腹を抱えて笑い転げられるはずだ。

そんな俺達で良い。それが、良い。

俺の隣には四人のうちの一人、あいつの傍にもきつともう一人がいてくれる。

そして、俺達の後ろには背中を支えてくれる人達が沢山いる。

何一つとしてあいつに捨てさせやしない。なにがあつたとしても、俺は諦めてなんかやらないからな、覚悟してまってる……親友め。

そうして、俺達はあいつの鍵を抉じ開けに向かう。

いつか辿り着くと誓った未来へと向かって。

そこにどんなに残酷な挫折が待ち構えているかなんて、考えもせずに……

彼の凶器、彼女の背中

この世界に生きる全ての人間に共通して言えることがある。

どんなに裕福な人々でも、どんなに苦汁を舐めるような人生を生きてきた人でも、それぞれに胸に抱いている失えない何かを、誰もが壊さぬよう、包み込むよう、優しくその両手で大事に守りながら生きている。

それは想いの込められた思い出の物かもしれないし、それかちよつとやそつとでは手の届かない高価な物かもしれない。形あるものだけじゃなく、形のないものかもしれない。名声、矜持、愛情……目には見えない何かかもしれない。

他人から見れば価値のないものでも、人は誰しもが自分だけの譲れない何かを失わないよう、懸命に生きている。

少し誰かと触れ合えば子供でも理解する当然を、愚かな私は何一つ理解出来ていなかった。理解出来ていたのなら、あんなにも残酷な言葉を、自分よりも年下の彼に故意に突き刺すだなんて、出来やしない。

松月彩花さん、彼女の通夜が行われた葬儀場まで足を運び、彼が出てくるのを待つて、ナイフよりも凶悪な言葉を私は全身全霊の憎しみを込めて突き刺した。

あの瞬間の彼の顔を私は一生忘れない。忘れてはいけない。

彼の全てとも言える存在を失い、呆然自失の彼は底知れない悲しみを堪えたかのような表情……そして、私とその悲しみを何もかも殺したのだ。彼の感情を真っ白にしてしまった。

私の言葉に彼の唇が震え、言葉を失い、瞳は色を失った……そんな彼の表情を私はさまざまと愉悅に頬が緩んでいた。ああ、なんて醜いのか。自分の醜さ、醜悪さに気が付くのはそれから三年後の事だった。

まさか、彼が一生私が突き刺したナイフを大事に抱え、誰にも触れさせないように生きていくつもりだなんて、想像だにせずに……

何から話せばいいのか、どうやって智也の傷に触れるべきか、わからないまま俺達は不自然な沈黙の中、智也の家のリビングでコーヒーを口にする。

四人で智也を訪ねると、智也は何も言わず笑って中へと招き入れてくれた。しかも、雨に濡れたんじゃないかと、シャワーまで貸してくれるという、智也らしくない素直な紳士的な行為付きで。

そうして、女性陣がシャワーを終えて十分、俺達は取っ掛かりを口にしようとしては失敗し、コーヒーを飲むという非生産的な行為を繰り返して今に至る。

「そういや、飯は食ったのか？」

「あ、ああ。ファミレスで少しな」

「そうか。そんじや、俺だけだな」

カップ麺にお湯を注いで智也もリビングに戻ってくる。智也の手にするカップ麺の名前に目が引かれるが、今は突っ込まない。『激辛まろ甘酸辣湯』ってどんなカオスな味だよ。辛い甘い酸っぱいの？口の中で全部が混ざってなんの味もしないって落ちになるだろうが！

「……唐辛子の辛味しか感じねえ〜」

「だろうな！商品開発部試食してねえだろこれ！」

「なあなあ信、お前も食ってみろよ」

「自分で責任もって食えよな」

「むう、なら唯笑は？」

「智ちゃんの間接キス……はいつでも出来るから知らない」

「あつそ……ん？いつでももってなんだ？おま、俺の知らないところで何してやがる!？」

「ふへへ」

「気持ち悪い笑いしてんじやねえ！くそ、じゃあ小僧食え」

「食って、あんたの顔面に嘔き出していいなら食うっすけど」

「誰も得しない絵面になるだろうが！そんなじゃ、駄目元で陵」

「え？何か言いました？」

「聞こえない振りで逃れようとすんな！俺教師、お前生徒。だから食え」

「権力に屈するなど先祖から言い伝えられていますので、お断りします」

「すげえ言い訳だな!?あゝ、安かったから大量に買い込んだが、どうすりゃいいんだよこれ。こいつ製作者の悪意しか感じねえ」

吐き出しそうにしながらも食べ続ける智也の姿に、先程までの不自然な緊張が解けていく。まったく、智也には敵わないな。俺達の緊張を緩める為にわざと笑わせようとしてくれている。智也なりの気遣いなんだと、一蹴以外の全員が気付いていた。まあ、本当に食いたくないから処理して欲しいってのも本音だろうが。

そうして、智也のおかげで和やかな雰囲気になろうとしていたのだが、智也が食べ終わるのを待っていたかのように……

「三上さん……蒔田透子さんに会いました」

いのりちゃんが、意を決したかのように口を開いた。彼女の瞳と言葉が真っ直ぐに智也へと向けられ、そんな彼女へ智也は一瞬目を細めたかのように見えた。

「ふう〜ん、なるほどなるほど。で、それがどうした？」

「それがどうしたって、三上さん……」

水を一口飲んで、智也は何事もなかったかのようにゴミを片す為台所へ向かう。

「あの人に会った……ねえ。陵、お前が何をしたいのか、お前等がなんで俺に会いに来たのか、なんとなくわかったよ。なるほど、通りでお前等がやたら変な顔をして家の前にいたわけだ」

ゴミを片して戻ってきた智也は、本当にどうでもいいといった顔をしていた。

「まるで魔王城に向かう勇者御一行みたいだった理由がそれか」

「例えば壊滅的にシリアス壊してんだよなあ」

間違いないが、もうちよつと他に例えがあるだろう。こういうところが残念なんだよなこいつ。いや、わざとか。どうにかしてこの話をどうでも良いものとして切り捨てたいんだ。だからこいつは自分に嘘を吐く。これ以上俺達をそこに踏み込まないようにする為に。ならば、そうする理由はなんだ？探られたくない腹の内なのは理解出来る。ただ、自分を守る為だけに智也が虚勢とも言える仮面を付ける理由、それがわからない。一体智也は何のために、誰の為にその仮面を付けなければいけないのか……

「うるせえなあ。そもそもシリアスなんかになる話でもないんだつての」

ぐでえつとソファーに背を預け、足をだらしなく伸ばして智也が語る。

「あの人が何を言ったのか知らないが、そりゃアレだ。あの人のお兄さんが彩花の事で責任感じちまって、あんな事になってしまったわけなんだが……そこら辺の事は知って

るんだろ？」

智也の問い掛けに、俺達は曖昧に頷いた。蒔田淳さん、彼が辿った結末を俺達は確かに知っているのだから。

「でだ、そこでちよつと俺も責任を感じていてな。もう少し蒔田淳さんの事を気に掛けていたら、死ぬことはなかったかもしれないってな」

「だから、人殺しだつて自分の事を？」

「お前がファミーユで聞いた話だな。ま、そういうことだ」

何でもない事のように智也は語る。いや、嘯くとも言うべきか。

「そう、ですか。でも、一つだけ気になる事があります。私、蒔田透子さんと会ったんですよ」

「ああ、さつき言つてたな。それで？」

「その時、彼女が言つていたんです。自分が三上さんの時間止めてしまったと、呪いを掛けてしまったって」

いのりちゃんの問いに、智也は考える仕草すらすることがなく、すらすらとその問いに答える。

「なんだ、そんな風に思つてたのかあの。なんか悪いなあ。それこそ大したことじゃないんだよ、なんつうか大事な人がいきなり目の前からいなくなるとき、やり場のない

怒りつてあるだろ？そんでまあ、昔彼女からどうして蒔田淳さんが死ななきやならなかったんだって、詰め寄られたことがあつてな。きつとその事を言っているんだろな。まったく、俺は気にしてなんかないってのに」

はははと笑いながら話す智也を見ていると、ああそつかと、俺達がただ気にし過ぎだっただけなんだと思わせられる。勝手に想像して、話をややこしくして、智也が何かを隠していると勘繰って……なんて馬鹿だったんだって笑つてこの話をどこかに押し流して、また下らないけど愛おしい日常が始まる。そう、してしまいたくなる。

だけど、そんな優しい日常を俺はもう許せないんだ。お前一人を置き去りにした日常なんて、俺は欲しくない。何年も俺は目の前の馬鹿を置き去りにした日常を生きてきてしまった。そんなの、もう耐えられねえよ……

ありがとう、智也。今の今までありがとう。でもさ、それはもう終わりにするから。これから、俺がお前を置き去りにされた場所から連れ出すよ。ありがとうな、そして今までごめんな。だから、俺のすることは一つだけ。

「そつか、じゃあさ智也？」

「ん〜？」

「じゃあ何でお前……死のうとした？」

「——ツ!？」

今まで誰も剥がそうとしなかったその優しい仮面を、力づくで剥がしてやる。どんな痛みが伴うとしても構わない。それが、何年も一人にしてしまった俺の責任なんだからな。

「おかしいよな？ 彩花ちゃんの事を愛しているお前は、愛しているからこそ自殺なんて馬鹿な真似……そんなこと出来るわけない。そんなことをするような奴じゃないって俺は知ってる。彩花ちゃんを泣かせるような事を自分からするような男じゃないよ、お前は。じゃあ、どうしてだよ？ なんでお前は死のうとした？ どうしてもお前が自殺しようとした事と、彩花ちゃんが亡くなった事だけじゃ繋がらないんだよ。これはどういうことだよ？」

俺の言葉に智也は俺じゃなく、唯笑ちゃんへと視線を向けた。先程までの余裕をどこかに消し去り、責めるような視線を唯笑ちゃんへと注いでいた。

「唯笑、お前話したのか？ 話すなって俺言ったよな？」

「うん、話したよ」

「なんでだよ？ どうして話した？」

今まで聞いた事のないような、低く厳しい声色に唯笑ちゃんは怯えたように肩を竦ませたが、それに負けてはいけなないと自分を奮い立たせて、怯えながらも真つ直ぐに智也を見つめながら答える。

「智ちゃんを一人になんかさせたくなかったから。そう言えばわかるかな？」

唯笑ちゃんの答えに智也は目を伏せ、ほんの少し何かを思案したかと思うと、ソファから立ち上がって……

「わかった、ならもう良い。悪い、唯笑以外は全員帰れ」

有無を言わせない声、それだけ今の智也は追い詰められているという事を如実に語っていた。

「智也、お前が何と言おうと俺は「帰れつつつてんだよッ!!」——ッ!!」

荒げられた言葉に、さすがに俺も目を剥いてしまう。

いつもの気楽さも余裕も何も無い、形振り構わず俺達を遠ざけようとする三上智也がそこにはいた。これ、なのか？これが俺が見ようともしなかった本当の智也なのか？

自分でも自分の怒声に驚いたのか、気まずそうに俺達から視線を逸らす。

「悪い、怒鳴るつもりはなかったんだが……とにかく、今は帰ってくれ。唯笑、お前は俺と……」

——もうこれ以上加害者にしないで——

部屋を出ていこうとした智也の足が、全身が凍ってしまったかのようにその場で硬直

した。

「三上さん、今の言葉が誰の言葉か、わかりますよね？」

いのりちゃんの問い掛けに、智也は黙ったまま動かない。まるで、何かが閲（せめ）ぎ合っているかのようで、言葉も発せないようだ。

「蒔田透子さんは、詳しい事は自分からは話せないと言っていました。でも、どうにか三上さんを救って欲しいと……自分を罰しているかのようでした。三上さん、何があつたのかはわかりません。ですけど、黙ったままで貴方は彼女を救えるんですか？一人であの人の心を救えますか？」

「……だ、まれよ」

震えている声には何が込められているのか、俺にはもうわからなかった。

「独り善がりでいつまであの人を苦しめ続けるんですか！いつまで蒔田さん達を加害者にしておく気ですかッ!!」

「うるせえッ!!少し黙ってる陵ッ!!」

ようやくだ。ようやく、智也へと手が届いた。俺達が知ろうともしなかった三上智也が今日の前に立っている。

「……加害者にしないで？何言ってるんだよ、加害者は貴方達じゃない、俺だろぅがよ」

蒔田透子さんの言葉に智也は戸惑っているのが目に見えてわかる。何をどうすれば

いいのか迷っているんだ。自分に何が出来るのか、自分の望みは何か、そして蒔田透子さんが智也に求めるものは何か……色んなことを秤に掛けて、そうして智也が選ぶ答えは何か……

「陵、あの人は確かに言ったんだな？加害者にするなって、自分からは話せないって」
「はい。三上さんから聞けど」

臆することなく答えるいのりちゃんに俺は少なからず驚いていた。今の智也を前に毅然としていられるほど、彼女は強い女の子だっただろうかと。

「……これがあの人の望みか？いや、それとも罰なのかもしれないな」

秤に掛け、出た結果は予想通りのものだった。智也は決して自分を選びはしないと。

「陵、悪いがコーヒーを淹れてくれないか？お前なら俺よりも上手く淹れられるだろう？」
「……はい！」

智也の答えにいのりちゃんは弾んだ声で応えた。そんな彼女に苦笑しながら、智也は溜息を吐きながらソファアへと座り直す。

リビングには沈黙の中にお湯を沸かす音だけが残り、演者が揃うのを怖れながら待っているようだった。その沈黙を、唯笑ちゃんが壊しにかかった。

「智ちゃん？」

「どうした？」

「あのね、こんな事今いう事じゃないんだけどね？」

「なんだよ」

「なんで……なんでコーヒーをいのりちゃんじゃなくて唯笑に頼まないの!？」

「ほんと今言う事じゃねえな! 空気読めよ! この中で一番腕に信用あるからだよ馬鹿」

さつきまでの沈黙粉々。さらに追い打ちをかけるように一蹴が呟く。

「俺、何も喋れてないんだけど」

どんまい。

コーヒーを全員に行き渡り、口に含むとほんの少し安堵する。

時計の音がちくたくと耳に届きながら、俺の言葉を全員が焦らずに待っていた。

何から話せばいいのか迷っていた。何度か唯笑、信へと視線を向けては下を向く。あいつ等の頭の中には何が過っているのだろうか？

そうしてどれくらい待たせただろう、俺の口から小さな呟きが漏れた。

「まず最初に誤解を解こうか。あの事故はな偶然だったんだ」

「偶然って、それはどちらにも過失がなかったってことか？」

俺の問いに黙って頷く。

「信、お前に思い出させるようで悪いが、お前は勘違いしている事がある。そもそも彩花が事故に遭ったのは交差点じゃない。その少し前で車に跳ねられたんだ」

事故当時、信も蒔田さんも混乱していて正確な状況は理解していなかったはずだ。だから警察も最初は正確な状況がわからず、俺も致命的な勘違いをしてしまったんだ。あの事故の原因、その最たる人物は誰か……

「あの事故で責められる人間がいるとしたら、それはな——俺、なんだよ」

まったく予測してなかったのだろう。俺の言葉にそれぞれが驚愕を露わにした。

「何、言ってるんだよ？お前は彩花ちゃんを呼び出しただけで、他には何も」

「ああ、そうだ。俺が呼び出したんだ。そして、どう考えても原因がそこに行き着いてしまふ。信、あの事故はな、誰かの所為と責任を問うのであれば、どうしようもなく原因は呼び出した俺へと帰結してしまうんだ」

暴論とも言える俺の論理に待ったを掛けたのは意外にも驚沢だった。

「あのさ、信も今坂さんも当事者だから客観的にはなれないだろうから、俺が口を挟むんだけど、どうしてそんな馬鹿みたいな結論になるんすか？」

正直、俺は驚沢がいてくれて助かっていた。こうして第三者が冷静でいてくれると、自分も冷静に話せる。

「まず、あの道路は30km制限の道路なんだが、蒔田さんの証言では少し急いでいて3

5 kmで走っていたらしい」

「おい智也、それならどう考えても過失が彼にはある。それなのに自分が原因だったなんて……おかしいだろ」

信の疑問は最もだ。俺だって自分が免許を取るまでわからなかったんだからな。何とはなしに言った、教官の言葉を耳にするまではな。

「いいや、何もおかしい事はないんだ。まず、なぜ交差点の前で跳ねられたのだろうと推測出来るのは、本来交差点には一時停止の白線が引かれている。だから、その前ではスピードを落とすし、もしくは最悪徐行する。警察はタイヤの跡でわかったみたいだが、いいか？ そんなスピードで打つかつても人は死なない。打ち所が相当に悪くなければな。ということ、その前の道で跳ねられたことになるんだが、信が目撃したのは交差点に差し掛かる前の道で起きた事故って事だ」

あまりに衝撃的な事故で本人は正確に記憶していなかったんだろうな。無理もない。中学生の子供がそんな場面に直面したら冷静でなんていられないからな。

「い、いやそれでも蒔田さんは35 kmで走っていたって！ なら5 kmは違反しているじゃないか！」

そう、蒔田さん自身もそう証言している。5 km違反していたと……メーター上は、な。

「これはな、俺が免許を取る時にたまたま教官が話してくれた豆知識なんだが、日本の車って優秀なんだよ。メーターが5km早くても、実はスピードガンで測ると30kmと測定されるんだとき。そういう風に安全性を高めているんだってよ」

「……嘘、だろ?」

「嘘じゃない。俺もそれまでは知らなかった事実だ」

「じゃあ、蒔田さんは?」

「ああ、蒔田さんは違反なんかしていない」

蒔田さん自身も知らなかったのだろう。あんなに狼狽えていたんだ、知っていたならもしかしたらもう少し落ち着いていられたかもしれないのに。

「いいか?あの日、蒔田さんは確かに少し急いでいたのかもしれない。でも、道交法に違反なんかしていない速度で走っていた。ただ、その日は雨が降っていて視界が良好ではなく、更に人二人が通れるかのような脇道から何か飛び出してきた……そんなの、避けようがない。彼じゃなくても事故は起きていただろう」

「脇道?」

「ああ。遅刻しそうな時、よく使った近道があるんだ。あの道路に出る脇道を何度も俺達は利用したことがある。だよな、唯笑?」

「……そう、だったね」

俺が寝坊して、彩花が作った朝飯を啜えながら二人を連れて走った道。微笑ましいあの脇道が、笑えなくなってしまう道に変わってしまったうなんてな。

「おそらく、彩花は急いで俺のもとまで向かったんだろうな。だから、あの脇道を走ってきた。抜けた先は車通りも少ない道路だ、雨の音で車の音があまり聞こえなくても不思議じゃない。つまり、あの事故はどんなに突き詰めても起きるべくして起こった事故で……それを防ぐには俺が呼び出さなければ良かったなんて、子供染みた暴論になっちゃうんだよ」

そう、あの事故は彩花にも蒔田さんにも過失なんてない。責任を問われるのであれば俺だけなんだ。

「あ、いや……OK、わかった。あの事故に関してはわかったけど、それがどうしてお前が自殺しようとした事になる？」

自殺未遂について、信にその事を問われると思わず顔を背けたくなってしまった。この事に関してだけは俺は嘲笑を責めたい。どうして信に話してしまったのか……こいつにだけはどうしても聞かせたくなかったのに。

だが、蒔田透子……彼女が俺に求める贖罪が懺悔だと、全てを曝け出すことだと言うのなら仕方ない。俺は、あの人達の望みを無下になんて出来ないのだから。

「それは、な……それ、は……」

歯を食い縛り、なんとか口にしようとすると、全身を襲う寒さにどうにかなくなってしま
いそうだ。そういう罪を俺は犯してしまったんだ。この罪は俺一人の物で、誰にも分け
与えてはいけないもの。

彩花の家の方へと視線を向けると、彩花が大丈夫と言って背中を押してくれた気がし
た。

ふうくと息を吐いて、今度こそと口を開く。あいつの前で格好悪い姿を晒したまま
じゃ笑われてしまうから。

「この事で俺は唯笑、俺はお前のお母さん、おばさんに一番感謝している」

「お母さんに？」

「ああ、そうだ。この事は俺達の両親しか知らないし、口外しないようにしていたんだ。
いや、お前達に話すべきじゃないって考えたんだらう。俺が自分から話すまではな。そ
れがいつの事か、唯笑？お前はわかっているんじゃないか？」

俺の問い掛けに、唯笑は曖昧に笑おうとしながら頷く。馬鹿だなあ、無理に強がらな
くつてもいいのに。いや、そうさせたのは俺だな。ごめん、唯笑。

「多分、病院だよね？」

やっぱりな。唯笑が気付かないわけがない。唯笑が俺から離れた瞬間なんて、あの時
だけだもんな。

「その通りだ。その前に聞いておこうか。なあ、お前等は知ってるか？この世で最も人を殺してきた凶器がなんなのか。陵、お前ならわかるんじゃないか？」

向けられた言葉に陵は影を落とし、俯きながら答えた。

「嫌な、先生ですよ。その答えを教えてくださいましたのは三上さんじゃないですか」

「知らなかったのか？俺は意地悪なんだよ」

「そう、でした。ええ、そういう人です。世界で一番人を殺す凶器……それは私がリナちゃんに使ってしまった物で、誰もが持っているもの……言葉、ですね？」

「正解だ」

嫌な事を思い出させてしまったが、陵が一番理解していると確信していたから問い掛けたんだ。良かった、あいつはしっかりと自分の犯した罪と向き合っている。それならば、俺が向き合えないわけにはいかない。

コーヒーを一口飲んで、少しづつあの日の事を思い出す。俺が世界で一番凶悪な凶器を突き立て、三上智也と言う罪人が産まれた日の事を――

霊安室へと案内された彩花の両親と俺の両親、そして俺は彩花の変わり果てた姿に声を漏らすことも出来なかった。現実味のない現実を受け入れる事も出来ずに、そんな時だった、唯笑達が病院へと着いたのは。

「智ちゃん？彩ちゃんは？」

直接霊安室へと来た唯笑は、すぐに俺の肩を掴んで問い掛けてきた。そんな唯笑に俺は力なく彩花が眠るそこを指差す事しか出来なかった。

俺の指の先へと、ゆつくりと向かう唯笑だったが、俺は唯笑に寄り添ってやる事が出来なかった。ただ――

「あ、ああッ……う、そ……彩、ちゃん？ねえ、彩ちゃん？あや、ぢや、ん……」

唯笑の悲痛な声にならない声を聴いているだけだった。

「ああああああああああ——ッ!!!」

彩花の亡骸に縋りつき、喉から血が出るかのように泣き叫び続ける唯笑をおじさんとおばさんが両側から包んでやる。

「お、かあさんッ、おど、う、さんッ!!あや、あやぢや、んがッ!!彩ちゃん起きないッ!!な、んでえ!なんでえッ!!」

「唯笑、そんなに泣いてたら彩が困っちゃうだろ」

「そうだよ、唯笑。そつとしてあげないと、ね?」

「困らせてるんだもんッ!!お、おかしいんだよ!唯笑が泣いてると、彩ちゃん、彩ちゃん、お、起きて、だから、だからあッ!!」

「唯笑……」

「あ、あと少し、なんだよおツ!!ほらあ、あと少しで、彩ちゃん、楽しみで、大晦日、でえッ……あ、う、あ……ああッ……」

崩れ落ちる唯笑を支えるようにおじさんが肩を抱いていた。

「あんた、悪いんだけど唯笑を連れて行つてくれるかい?これじゃあ、病院の人達に悪いからね」

「うん。ほら、唯笑」

「い、やだあッ、智ちゃんツ!彩ちゃん、彩ちゃんがあッ!!智ちゃん、彩ちゃん、彩ちゃんがあ——ツ!!」

俺達とずつと一緒にいたかつたのだろう。だが、唯笑の取り乱しようは尋常じゃない、とてもじゃないが、このままこの場にいさせる事が出来なかつた。だから、唯笑が最後に見たのは、俺がみつともなく結さんと宗吾さんに土下座する姿だけだつたはずだ。

唯笑の痛ましい泣き声に弾かれたかのように、俺は自分でもわからずに二人に頭を下げ続けた。

「ごめ、なさい。俺、俺の所為で彩花が、こんな、こんな事、に……」

「智くん止めて。頭を上げて、ね?」

「智也、頭を上げなさい。君に頭を下げさせるなんて、彩花に私達が怒られてしまうじゃ

ないか。ほら、頭を上げなさい」

二人の制止も聞かずに俺は頭を下げ続けた。俺以上に悲しいはずの二人が泣かずに堪えている。その姿を目にすると余計に自分を許せなかった。

「俺が呼び出さなきゃ、こんな、こんな事に、はあッ!!」

そんな俺の腕を掴んで無理矢理立たせる奴がいた。

「いい加減にしろ馬鹿息子」

それが俺の親父だった。

「お前の自己満足で二人を困らせてんじゃねえぞ。なんで娘の事を想って悲しんでいた二人が、こんな時にまでお前に気を遣わなきゃなんねえんだ。テメエの独り善がりなんざ甚だ迷惑なんだつうの」

「智一さん、智くんはそんなこと」

「結さんもこんな馬鹿に気を遣わなくて良いから。今は彩花ちゃんの事だけ考えていたら良いんだ」

いつもはうざいだけの親父が、この時だけは格好よく見えたのを覚えている。一番冷静に毅然としていたのは親父だった。

「おい、俺達も行くぞ。家族水入らずの邪魔だかな」

親父に無理矢理立たされ、力づくで歩かされようと言う時、その人が目の前に現れた。

現れてしまった。

「お取込み中のところ申し訳ありません」

そう挨拶をしたのは警察の方で、どうしても謝罪をしたいのだという彼の要望を聞き入れて連れてきたのだという。

警察の方に挟まれて立つ蒔田淳さんは、自分のしてしまった事に押し潰されそうなのに震えていて、とてもじゃないがまともに話せるようには見えなかった。

それでも、罪に押し潰されそうな自分を無理矢理立たせて、精一杯の勇気を振り絞って歩いてきたのだろう。血の気を感じさせないような真っ白な顔で、目に沢山の涙を堪えながら、彼は宗吾さんと結さんに頭を下げる。

「す、すみません、でした。こんな、取り返しのつかない事を、僕がもつと、もつと気を付けて運転していればこんな事には……」

この時、彼は二人への罪悪感と共に、自分自身を罰していたのだろう。何度も何度も謝罪の言葉を口にし、だけど自分に涙を流す資格はないと、涙を堪えていた。

今だからこそそれがどんなに勇気がいり、どれほどの優しさと強さが必要なことかわかる。だが、この時の俺は彼のそんな人間性を慮ることが出来なかった。なんて愚かなのだろう。彼のような強さが俺にもあつたのならと、悔やんでも悔やみきれない。

そんな最低なクソガキは――

「……け、んな」

彼とは対極にある弱さを抑える事が出来なかったんだ。

「ふざけんなよツ!!」

親父の手を振りほどき、俺は罪に震える彼へと掴み掛らんばかりの勢いで詰め寄ったのだった。

「何がすみませんでしただツ!!んなことで彩花が生き返るのかよツ!!あんたのそんな謝罪で彩花が生き返るのかよツ!!」

掴み掛ろうとする俺を警察と親父が止めに入るが、彼等の制止の言葉は俺の耳には届かなかった。

今でも何度も何度も夢に見る。この時の俺は狂気に侵されていた。この場に罪人がいるとしたら、それは間違いなく俺一人だ。

「あんたは謝って気が済むんだろうけどな、ふざけんなよ。彩花が死んで、何であんたが生きてんだよ?」

止める、それ以上は言っではいけない。そんな理性なんてとつくに粉々に壊れて跡形もない。あるのはただ醜い憎悪だけだ。

自分じゃ止められないその憎悪……

「彩花が死んですまないってんならなあッ!あんたが死——!!」

その先を俺は口にすることが出来なかった。その先を力づくで止められたんだ。

俺の憎悪を真っ直ぐに受け止めたのは蒔田さんでも親父でも、ましてや警察でもなかった。

これ以上ない程の力で頬を張られ呆然とする俺を、窘めるなんて生易しい、突き刺す視線で射竦める。それが、おばさんだった。

「智也、黙んな」

「おば、さん？」

「今あんたが口にした言葉、そいつはこの世で最も卑劣な凶器なんだよ。見な、彼の顔を」

おばさんの言葉に素直に従う事が出来ず、気まづく視線を逸らす。

「見ろって言うてんだッ!!」

おばさんに一喝され、身が竦み言葉に従う。

言われた通り顔を上げると、目の前には後ろで眠る彩花と変わらない、顔面蒼白な蒔田さんがいた。その顔はとでも生きているとは思えないほどで……

「あ……」

そうしてようやく憎悪を抑えることが出来た。おばさんに一喝されるまで、俺は何一つ見ちゃいなかった。自分の悲しみだけを見つめて周りを見ずに喚き散らしていただ

けの、ただの子供だったんだ。

「智一、あんたが止めないでどうすんのさ」

「わりのい。おら、お前も行くぞ馬鹿」

自分のしてしまった事を振り返るよりも早く、親父が俺の腕を掴んで無理矢理連れていく。

蒔田さんの横を顔を合わせずに通り過ぎるとき、小さな、本当に小さな呟きが耳に届いた気がした。

酷く虚ろな声で——『そう、ですね』と呟いた気がしたんだ。

霊安室を出ると、廊下には見知らぬ人達が痛ましそうに目を伏せていた。蒔田さんの家族が……

彩花の通夜は二日後に行われ、同じ中学の友人が参列した。中でも印象的だったのが、花祭が人目も憚らずに泣いていたことだ。あいつ、本気で彩花の事が好きだったんだなあとはくつと考えていた。

涙が枯れるほどに泣くと、今度は心が麻痺するようで、俺も唯笑もどこか夢の中の出来事のように感じていた。

「先輩、大丈夫っすか？」

そう声を掛けてきたのは、俺達三人にやたら懐いてきた一年後輩の女子だった。

長谷川くるみ、頭が残念なのが取り柄な後輩。

「お前も来てくれたのか」

「当たり前です。自分にお笑いを仕込んだのは先輩達ですからね。師匠の最後に会いに来るのは当然じゃないですか」

とか言いながら手に持っているハリセンに目が行ってしまう。そういや焼香の時も手放さずには持っていたな。参列者全員が苦笑していたんだが。

「まさかとは思うが、お前それ……」

「ああこれっすか？はい、棺桶に入れるつもりっす」

「仏がボケてくれるような気さくな奴だったら役立つだろうな」

「大丈夫っすよ。だってあいつ神様なのにパンチなんすよ？アレは完璧ネタじゃないっすかね？」

「お前は間違いなく地獄行きだな」

「智先輩、死ぬときは一緒っすよ？」

「なんでだよ」

「二人で漫才して、彩先輩に審査してもらおうんですよ」

八重歯を覗かせて、笑いながらくるみは涙を零す。

「ああ、それもいいかもな」

「彩先輩の審査は厳しいっすから、入念に打ち合わせしないとっすね」

「ネタなら俺に任せておけよ」

「はいっす。じゃ、また」

「おう、今日はありがとうな」

そこでくるみと別れ、唯笑はどこかと探すと、黒須に唯笑が抱き締められていた。あの二人もよくわからん関係だよな。

唯笑の事はしばらく黒須に任せるか。どうすっかな、結さん達の手伝いでもしてくるか……なんて、考える余裕がある自分に笑ってしまう。きつとこれが現実だなんて受け入れられていないんだろう。

明日の朝には彩花が俺を起こしに来て、彩花を困らせながらゆっくりと準備して三人で一緒に学校に行つて、俺と彩花に気を利かせた唯笑が放課後は離れて、二人でゆつくり寄り道しながら帰る。修学旅行はどこに行くか相談しながら、下らない話をして帰るんだ。そういうどうでもいい、愛おしい日常を送る。そんな光景が夢ではなくて現実なんだ。そう、今が夢で明日から現実で……

頭を振り、余計な思考を追い出す。今は今を見なければいけない。

少し外の空気を吸おうと、俺は葬儀場を出て少しだけ夜道を散歩しようとした。

「……こんばんわ」

葬儀場を出てすぐの電柱の影から声が掛けられ、そちらを向くとどこかの高校の制服を着た女性が、どこか不安定な笑顔を張り付けて立っていた。

背筋に得も言われぬ寒気が走りながらも、俺はこんばんわと挨拶を返す。

彩花の知り合いだろうか？ 通夜に来たのなら中に入ればいいのに。

幽鬼のようなふらふらとした足取りで女性は近づいてきて、俺の前でピタッと足を止めた。

「あ、あの？ 何か？」

俺の反応が面白かったのか、彼女はふふふと寒気のある笑い声で応える。

そうして、彼女は俺の耳に顔を寄せてきて、その事に驚いた俺は身を引こうとしたが、腕をがっしりと掴まれて身動きを取れなかった。

「あなたに朗報よ。あのね、死んだの。兄が死んだわ。あなたの望み通り、ね」

ぞわっと身の毛が弥（よ）立つ声と言葉。し、んだ？ 誰が？

いきなりの事に頭が混乱し、上手く言葉を返せずにいると、俺の様子が不満なのか舌打ちをしながら彼女は俺から一步離れた。

「薄情ね、覚えていないかしら？ 私達初めましてじゃないのよ？ ほら、思い出してよ……」

ヒントは、病院」

病院？何を言っているんだ彼女は。俺は病院で彼女と会った事なんて……会った？いや、なんだ……この違和感は。会った事がないはずなのに……何か引つかかって……

「——あ、え？」

病院、霊安室……そう、そこだ。俺は彼女に会った事はない。だが、目にした事ならある。俺が霊安室から連れ出された時、蒔田さんの後ろにいた、彼の家族かもしれない人達の中に俺は確かに彼女を目にした。

「もしかして貴方は蒔田さんの？」

「せいかりい。そう、私は蒔田透子。兄さんの妹で、あの時あの場にいたのよ」

妹だって？いや、それは問題じゃない。そこじゃなくて、さっき彼女はなんて言った？確か……

『あなたに朗報よ。あのね、死んだの。兄が死んだわ。あなたの望み通り、ね』

「死んだ？」

真つ白になる頭の中で、死と言う言葉だけが埋め尽くしていく。

愕然と立ち尽くす俺に彼女はにんまりと笑って言葉を紡ぐ。

「あはは、やっと理解した？そう、兄さんがね死んだの。おめでとなく、良かったわねえ。貴方のお望み通り兄さんは死んだわ。首を括って、ごめんなきいつて遺書を残してね」
ね？ね？今の気持ちはどう？なんて無邪気な声で彼女は俺に聞いてくる。

今の気持ち？なんだ、今の気持ちって？ていうか死んだってどうということだ。ごめんなきいつて何に？

まとまらない思考は徐々に徐々に俺の罪を浮き彫りにしていく。形作られてはいけないその形は……

「うんうん、良い表情ねえ。そんなあなたにね、是非送りたい言葉があるの。受け取ってくれる？」

これ以上何を彼女は言うつもりなのか、耳を塞ぎたい衝動に駆られ、一刻も早くこの場から逃げ出そうとしたが、それを彼女は許してくれない。俺の両手を掴んで離さないようにしつかり握り、満面の笑みでそれを口にした。

「ねえ、どうして兄さんが死んで、あなたが生きてるの？」

俺が彼に突き刺した凶器、その凶器が俺の心臓へと帰ってきた。

ああ、そうか……そうなんだ。

「はい、解放。どうしてもあなたにこれが言いたかったの。あなたのとつておきの凶器はね、兄さんを見事に殺してくれたわ。自分ばかり損をして、周りの得ばかりを考える

お人好しの、誰よりも何よりも大切な私の兄さん。そんな兄さんの心臓にね、いらぬ凶器が刺さってたの。だ・か・ら、君に返すわ」

殺したんだ。俺が俺の凶器で彼を殺した。俺の憎悪でこんな、こ、んな……

「あ、そうだ。帰る前にもう一つ。あのね、私ずっと、ずくずくとね、君の事忘れな
いからね。私の兄を殺した殺人鬼の顔だもの、忘れてやるもんですか。どこでもいい、
早く野垂れ死ぬ、殺人犯」

違うと、そんなつもりじゃなかったんだと言いたかったのに、言葉が口から出てくる
ことはなく、彼女が去った後、膝から崩れ落ちて頭を抱える。

「俺が、殺した？人殺し？」

取り返しをつかぬ事態になって、俺はようやく自分の罪を自覚した。

この世で最も卑劣な凶器とおばさんは言った。その通りだ。俺はその卑劣な凶器を
自覚もなく振り回して突き刺し、彼を死に追いやったんだ。

「ああ、ああ……」

誰かが恨まなくても、憎んでくれなくても、俺は俺を許せない。許してはいけない。
この時、俺は自分が生きるのを許せなかった。

彩花を理由に弱さを肯定し、日常の何もかもを砕いて、一人の青年を殺した殺人犯、そ
れが卑劣な人間……三上智也なのだから。

「だから、俺は死のうとした。けど、それも逃げだと親父とおばさんに叱られてな、自分が犯した罪は生きて逃げずに贖えって。確かに二人の言う通りだ」

智也の告白に、全員が言葉を発せられずにいる。何を口にしても烏滸がましい気がして……何より、想像していたよりもずっと重い挫折に何を言えいいのかわからなかった。

「考えて考えて、でも答えなんて見つからなくてな。それでも、そんな中で一つだけ覚悟したことがある。蒔田さんを死に追いやった俺は、何があろうと幸せを望むべきじゃないってな」

「だからですか？だから三上さんは皆を遠ざけようかと？」

あまりの衝撃に声を出せない俺達の代わりに、いのりちゃんが智也へと疑問を投げかける。

「まあ、今すぐにつてわけじゃないんだが、徐々にそうしていこうかとは考えていた」諦めたかのように力なく笑い、智也は肩を竦ませて答えた。

「んだよ、それ……そんなこと俺がさせると思ってたのかよ？」

強がつてなんとか口にしたそれを、智也はわかつていたかのように一蹴する。

「ああ、だろうな。だから大学を卒業したら県外に出て、お前達と自分から離れようかな

とは考えてる。てか、それしかないだろ」

何もかももう決定しているような口振りに俺は悔しさで唇を噛んだ。

悔しい、悔しい悔しいッ!!俺はこんなにも何一つ知らずにいた。それが何よりも悔しくて仕方ないッ!

「いい、じゃないか。何があるうと、どんなに自分を嫌おうと、俺が、唯笑ちゃんが絶対にお前を……」

俺のその先の言葉を智也は首を横に振って止める。

「駄目なんだよ信。それじゃあ俺は駄目なんだ」

「なんでだよ!お前がした事も全部受け止める!俺はこんな、こんな事のお前と親友になったわけじゃないッ!」

ほんの少し、切なそうに笑ったあと、智也は澆刺とした笑顔で俺と唯笑ちゃんへと……

「それだよ。あのな信、俺はお前等といると最高に幸せなんだ。何もかもどうでも良くなるくらい楽しくて楽しくて、自分が何者か忘れてしまっような程に幸せになっちゃう。こんなに幸せな今はこの先ないってくらいだ」

智也の口から流れ出てくる、嬉しい本音。なのに、どうしてこんなにも悲しく聞こえてしまうのだろうか?

「幸せだと、彩花ちゃんを失つても尚、今が幸せなんだと胸を張って宣言してくれる。こんなにも嬉しい事はないはずなのに。」

「でもな、だからこそ俺はそれが許せない。幸せだなんて感じる度に俺の頭に蒔田さんの顔が過るんだ。こんなに幸せで良いはずがない。あの人の幸せを奪った俺が誰よりも幸せになつてはいけけない。そんな事、誰が許してくれても俺が俺を許せない。信、俺は最低なんだ」

その先を言わせてはいけけないと、焦燥に駆られなんとか止めようと、なんの打算もない言葉が口から出てくる。

「最低で何が悪い！お前が最低で、言葉で彼を死に追いやったのはわかった。けどだからってお前の幸せを俺が望んじゃいけけないなんて理由にはなんねえよ！」

「信君……」

「誓つたんだ！彩花ちゃんに俺は誓つたんだよ！お前がこの先、彩花ちゃんと一緒に幸せになるはずだった未来に俺が連れて行くって！そう約束したんだ！」

「稲穂さん」

「お前、今の今まで忘れなかつたんだろ？蒔田さんの事忘れずに生きてきたんだろ？いいじゃねえか、じゃあこれからも忘れずに幸せになろうとしろよ！償いながらでもいいじゃないかよッ!!」

こんな何もかも諦めた笑顔をさせる為に俺はこいつの親友をやっているんじゃない。彩花ちゃんにこんな智也の姿を晒す為に俺は生きてきたわけじゃない。

「そもそも何もかも間違つてんだよ！あの事故の時、俺が迅速に対応出来ていたら誰も不幸になんてならなかった！お前の責任なんかであつて堪るかよ！勝手に俺の責任を奪うんじゃないよッ！あの事故の責任を迫及するなら俺にしろよ！お前の抱えている贖罪も半分俺に渡せよッ！」

支離滅裂で、論理なんかどこにもなくて、暴れ狂う感情だけの言葉を八つ当たりのように喚き散らす。

智也が誰かを追いやったとか、その為の償いだとか、そんなの俺はどうでも良い。ただ一つ、俺は……

「まあ、お前の言いたい事もわかる。けどな信、一つだけ聞くぞ？お前ならこの先の幸福を望めるか？」

反論しようとして口を開くが、言葉が喉に絡まって出てこようとしない。反論なんて出来るわけがない。なぜなら俺はその気持ちを痛い程に理解しているから。

同じなんだ。智也も俺もあの時から同じような気持ちを抱えて生きてきた。違うのは、その気持ちに誰かが寄り添っていたか、誰もいないかの違い。

そんな智也に何を言えば届く？どんな言葉なら目の前のどうしようもない馬鹿を救え

る？

どうしたって止められない。俺がそうであるように、智也を救える言葉を俺は持ち合わせていない。だから……

「頼むよ智也……俺を一人にしないでくれ……」

何も飾る事のない、心にたった一つ残ったその言葉。

お前がいなくなったら俺はどこに向かって歩けばいいのかわからないんだよ。

「サンキュ、信。唯笑？」

「なに？」

「信の事頼むな」

「うん。でも、智ちゃんの事も唯笑は彩ちゃんに頼まれてるんだよ？」

「それはまあ、俺から彩花に謝っておくからさ」

そう口にして智也は立ち上がり、部屋を出ていこうとする。

「待てよ智也！俺はまだ納得なんてしてないぞ！」

「別に納得させようだなんて思ってもいねえよ。お前がどう思おうが俺は俺のやりたいようにやるだけだ。それと、唯笑は後で説教な。こいつがこうなるのを知っていたから口止めしたってのに」

「唯笑のが説教したいもん」

「それと陵」

「はい」

「……これがお前が知りたかった真実だ。これで満足か？」

「……………」

「唯笑、俺は出てくるから鍵はいつもの場所に入れとけよ」

そうして智也が部屋を出て行ったあと、残された四人は言葉もなく項垂れるしかなかった。

どんな真実が待っていてもあいつを独りから掬い上げてみせると息巻いていた。その覚悟と決意を胸に智也から過去を聞き出したはずだったのに……

「俺、あいつの何を分かった気でいたんだろうな？」

俺は三上智也の親友だなんて胸を張れるような人間じゃない。何一つ理解しようとならないままで、でもそんな俺の自己満足にあいつはずっと付き合い続けてくれていたんだ。

三上が去った後、信は自分の無力さに齒噛みし、今坂さんは曖昧に微笑みながら隣の隣で物思いに耽り、俺はあくあと溜息をする。

そんな中、俺の隣に座る祈りが拳を作って震わせながら呟いた。

「……あつたまきた」

「いのり？」

「一蹴、ちよつと私も出掛けてくるね」

「いや、出掛けるってこんな夜中に一人でつて……あ、いのり!？」

怒りを抑えきれずに出ていったかのように俺には見えた。原因は多分三上の言葉だ。

これで満足か？と三上はいのりに向かつて言ったんだ。

顔を真っ赤にして出ていきたいのりを追いかけようかとも思ったが……

「情けねえ、情けねえよ……あいつをずっと独りにしてたのは誰でもない、俺じゃないか」

なんて心底情けない姿を晒す信をそのままにしておく事が出来なかった。

「はあくあ、ほんつとにダッセエな信」

だから仕方ない。ここは恋人同士で作業分担だ。三上をなんとかするのはいのりに任せて、こつちはこつちで仕事をしようじゃないか。

「なんだよ信、この程度で情けねえ。よくもまあ今まで恥じらいもなく親友だなんだと

……お笑い草とはまさにこの事だよなあ」

「一蹴、悪いけど今はお前の挑発に乗ってやれるほど余裕がないんだ」

さすがに二度目は無理があつたか。それなら別に構わない。俺には俺の覚悟がある。

あんなへタレに貸しを作ったままだなんて、こっちは我慢出来ねえんだよ。

一つ息を吐き、立ち上がって信の目の前まで向かい……

「いい加減どいつもこいつも悲劇気取ってんじゃねえ！」

胸倉を掴んで無理矢理立たせ、啖呵を切る。

「……放せよ。お前に何がわかるんだよ？俺達の何がわかるって言うんだよ！」

おっけ、反抗する元気だけはまだ失っていないようだな。

「どれだけの時間あいつと一緒について、どれだけの時間気付けなかったと思ってるんだ！何年も俺はあいつを独りにしてたんだ、何が親友だ！ああそうだよな、お笑い草もいとこだらうな！」

俺の手を振り払い、信は自分自身を糾弾する言葉を吐き出し続ける。

「あいつは俺達の為にずつとこんなどうしようもなく重いものを独りで背負い続けてきたんだ！俺達が笑えるようになってずつとだ！あいつが甘えられたのは彩花ちゃんにだけ、他の誰にも弱音なんて言えなかった！そうしてしまったのは俺だ！俺があいつを独りにしたんだ！」

その言葉はあまりにも痛い。少し前までの俺を見ているようで恥ずかしくなる。

「ふう〜ん。それが今の信の気持ちか。じゃ、今坂さんはどうなんすか？」

信が取り乱している理由は理解出来る。ただ一つ、今坂さんが狼狽えていない理由が

俺にはわからない。もしかしたら、今坂さんは持っているのかもしれない。

「うん？唯笑？唯笑は……どうしよつか？」

三上が引き籠っている部屋のドアを開ける為の鍵。それを今坂さんは持つていて、今ようやく開けられる条件が揃ったんじゃないのか？

「信君、信君はどうしたいかな？」

「どうしたいって、唯笑ちゃんは どうする気なんだ？」

「唯笑は決まってるよ、どうしたいかなんて。でもね、唯笑だけじゃちよつと寂しいんだ。だって、信君も智ちゃんの大事な家族だもん。だからね、信君に一応聞きたいんだけど……」

そう前置きして今坂さんは信の左手に手を添える。

「信君はこの先の人生、何があっても智ちゃんと一緒にいてくれる？彩ちゃんと唯笑と智ちゃんと……一生を誓える？」

お、おう。まさかの二夫二妻制のプロポーズに俺は目が点になってしまふ。

まさかの今坂さんのプロポーズに信は逡巡なんてあるはずもなく、彼女の目から一時も逸らさないままに応える。

「今更な質問だよ」

信の答えに満面の笑みで今坂さんは頷き、即座に携帯で誰かへと電話をする。

何をしているのかと俺と信は首を捻る中、今坂さんは電話の向こうへと遠慮のない声で……

「やったよお母さ〜ん！ 智ちゃんからあの時の事聞いちゃった〜！」

「……はい？」

理解が追いつかない俺と信は同時に疑問を口にしたのだった。

「三上さんッ!!」

きつと公園に向かったのだらうと思い、公園へと向かって走った。すると予想通り公園内を歩く三上さんを発見し、夜中にも関わらず大声で呼び止めてしまった。

ここじゃないけれど、公園で三上さんと出逢った事が印象に残っていたから。

振り向いた三上さんはうへえ〜と面倒な顔をしながら……

「えつと、どこがで会いましたっけ？」

「……本気で実行するんですね」

稲穂さん達に話したら他人になるとかなんとか。もうどうでもいいですけど。

「初めまして陵いのです。反面教師のお尻を拭く為に奔走したのに、仇で返されてい
る最中のもとても可哀想な女の子です」

「はあ、それは大変ですね。もう夜中なのに女の子の一人歩きは危険ですし、早くお帰り

になった方がよろしいですよ」

え、他人行儀が過ぎてもはや別人じゃないですか。演技下手ですかこの人は。

「ええ、そうですね。私も速く用事を済ませて帰りますよ。帰って不細工なぬいぐるみをサンドバックにします」

「……まだ持つてたのかよ」

本気で引いてますよね？ 貰ったものを無慈悲に捨てるほど恩知らずじゃありません。別に誰から貰っても同じですけどね！

「それで、何か？」

「なにが何か？ ですか！ なんですとかこれで満足かって！ 随分な物言いじゃないですか！ さすがに私も怒ります！」

「……お前いつも俺に怒ってるじゃん」

「なんですか？」

「なんでもないです」

本当にこの人はいつもいつも！ どうしてこの人はこんなに自分を大切にしないのだろう。わざとふざけて周りの気持ちとを和らげて、そうして自分を遠ざけて……

「受けとめたいって、どんな言葉を投げかけられても逃げたくないって、そう言ったのは三上さんじゃないですか！ そう言って私の手を引いてくれたのは三上さんじゃないで

すか!」

足が震えて、何もかもがどうでも良くて、一蹴から逃げようとしていた私を、その手で強く繋ぎ止めてくれたのは三上さんなのに。

「私にそう言ったくせに自分はなんですか? 親友だつて言つてくれる稲穂さん、産まれてからずっといろんな悲しみや辛さ、喜びを分かち合った今坂さん。そんな二人を置き去りにして、そうやって二人を遠ざけて逃げているのは誰ですか!」

どんな事でも笑つて受け入れて前に進む……そんな憧れてしまうような背中を見せてくれたのに、こんなにもその背中が小さかったなんて……

「それともあれですか? 実は二人は三上さんにとつては、どこにでもいる大多数の内の一人で、だから別に二人がどうなろうと、何を思おうとどうでも良いんですか? だとしたら心から軽蔑します。三上さんは世界で私よりもずっと最低な人間です!」

格好良い背中を見せ続けて欲しい。その背中が大きいのだと信じさせて欲しい。私の身勝手な我侷にどうか応えて下さい。

私の挑発に三上さんなら乗ってくると、私は淡い期待を抱く。まだ憧れさせ続けてくれるって。

「……ああ、そうだな。お前の言う通りで間違つていない。俺はな、そういう最低な人間なんだ」

それなのに、三上さんは自嘲気味に笑って私の言葉を全面的に肯定してしまう。

雲の切れ目から見える星を見上げ、力ない声で三上さんが話し始める。

「自分の大切な人を傷つけたくなかったから遠ざけようとした……違うそうじゃない。俺は煩わしかったんだ、あいつ等の優しさがいつも鬱陶しかった。俺が幸せになろうとしていない？ 違うな。それ自体を求めない事が俺にとっては救いで、それ以外どうでも良いんだ。なのにあいつ等はいつとも俺の事で世話を焼いて……正直疲れちまうんだよ」

その言葉の数々が本当に三上智也という人から流れ出ているのか疑いたくなるような、そんな言葉の羅列に耳を疑う。

「どうしたって俺はあいつ等の期待には応えられない。ほら、一流のスポーツ選手が勝つことばかりを求められるのと一緒でさ、きつついんだ。期待に応えられなきやあいつ等はどうか？ 考えてもみろよ。俺の事を優先してあいつ等はいつだつて自分の事は後回しだ。そんなの……俺が耐えられるわけねえだろ」

ああ、そうなんだ。今日の前にいるこの人がそうなんだ。この人こそが、仮面の下に隠れていた三上智也その人なんだ。

「参っちまうよな。突きつけられた二択を選べだなんて、あいつ等と生きていくか、独りで生きるか。そんなの、考えるだけで疲れちまう。俺にとっては、あいつ等も蒔田さん

も同じように大切だ。比べられるようなもんじゃない。俺だつてずっと考えて考えて、でも馬鹿だから、奪った命に見合う贖いがこれしか思い浮かばなくて……」

どれだけこの人は臆病で泣き虫な自分を、蒔田さんへ懺悔し続ける自分を守り続けてきたのだろう。誰かに寄り掛かってしまいたい衝動を殺して、自分には甘えは許されないと叱咤し、何年も何年も……

悔しい。きつとこの人の心に寄り添えているのは誰でもない、今ここにいない彩花さんだけ。触れられない存在を縁（よすが）に歩いてきたんだ。

どうして、なんでもつと早くこの人と出逢えなかつたんだろう。せめてもう少し長い時間一緒にいられたのなら、そのぼろぼろの心に手が触れられたかもしれないのに。

傷だらけで、今にも消えてしまいそうな自分を無理矢理立たせて、それでも皆が心配しないように強がって……

「だから、あいつ等を傷つけてでも俺は——ッ!？」

意識なんて、していないかった。ただ気付いたらそうしていた。

「お前、なにしてんだよ」

三上さんに近付いて、背伸びをしてその背中を包んでいた。

「……何、してるんでしょうね」

ほんとに何をしているのか。それでも何をすればいいのかはわかった。ううん、わ

かったんじゃない、決めたんだ。

「三上さんが臆病で誰も傷つけたくないって、だからいつも皆が笑うように言葉を慎重に選んで……」

彩花さんと蒔田さんが亡くなって、二つの存在が彼の心に消えない爪痕を残していた。その爪痕は日常の中にしつかり現れていたんだ。自分の言葉で、行動で二人を失った三上さんは、誰かを傷つける言葉に敏感なんだ。だから私を傷つけるような言葉も言っても、そのままには出来なくてフオローしてしまう。それを私は三上さんの優しさなのだと勘違いしていた。それこそが、三上さんの深い深い傷の形だったのに。

言葉が凶器になる。もう二度と凶器を振るわないよう、いつだって怯えながら三上さんは過ごしてきたのに。それを私は……

「三上さん、私は三上さんの生徒以上にはなれないかもしれませんが、私だけでも、私は……私だけは三上さんの背中を勝手に支えます。どんなに三上さんが振り払っても、関係ありません。少しずつでいいんです。少しずつ私が三上さんの一部になれるよう頑張ります。貴方が扱いに怯えないような、そんな存在になれるよう……」

もう怯えた優しさなんていらぬ。無理矢理浮かべる笑顔の裏を私は無遠慮に抱き締めてみせる。恋とか愛とか、そんなものどうだっていい。神様に感謝しよう。

三上智也、彼と出会ったのは私が彼の傷を抱き締める為だったんだと。私よりもずつ

と悲しい仮面を被り続けてきたこの人に、自分勝手な仮面を被り続けてきた私が寄り添う為なのだ。

耳の奥に雨音が聞こえる。その雨音が私の中からののか、三上さんの中から聞こえる雨音なのか……それとも……

混じり合った二つの雨音の中、私は三上さんの背中をぎゅつと強く抱き締め続ける。どうか、彼の心の傷跡が私の心と重なって塞がるようにと、愚かな願いを込めながら……ぎゅつと、強く、強く……

彼の帰宅、彼等の始まり

パンドラの箱を開けると、災いが溢れ出し、希望が一つ残っていたという言い伝えがあるよね？私はね、パンドラさんが羨ましくて仕方ないんだ。だって、どんなに不幸でも希望が一つだけでも残っていたんだもん。

「唯笑ちゃん、なんか少し顔色が悪いみたいだけど大丈夫？」

いつでも智ちゃんと私の隣にいてくれる掛け替えのない存在に、大丈夫だよと微笑んで返す。

信君に心配を掛けるなんて、まだまだだなあ〜と反省する。

一つゆっくり呼吸をして、さつきから不気味に鼓動する心臓を落ち着かせようとしてみるけれど、全然効果はなくて足取りは重くなるばかり。

「今坂さん、本当に大丈夫ですか？汗掻いてますけど？」

「もお、二人共心配性だなあ〜。唯笑はなんともないってばあ」

智ちゃん仕込みの強がりで誤魔化してはみるけれど、腕の震えは止まってくれない。肌は泡立ち、嫌な汗が額から頬へと伝う。

「そういえば、信は今坂さんちに行った事あんの？」

「いや、実は初めてでちよつとばかり緊張してんだよな。どんな部屋なのか楽しみでさあ〜」

呑気な会話に更に冷や汗がだらだらと流れてきてしまいそうになる。

いのりちゃんの帰りを待たずに、信君達と一緒に私の家へと向かっている。いのりちゃんには一応ラインしているから、気付いたら返信が来ると思うけど……

「ふうくん。今坂さんと長い付き合いなんだろう？なのに今回が初めてつてのも意外だな」

一蹴君、お願いだから余計な事は聞かないで！

「まあそうかもな。いつも集まるのは智也か俺の家だったり、他の奴等の部屋だったりだったけど……あれ？そういえば前に一度だけ唯笑ちゃんの家に行こうとか智也が言った事があつたような？」

ほらあ！信君も余計な事を思い出さなくていいよおー！

「確かあの時、唯笑ちゃんが親戚が来てるからって事で断られたんだよね？」

「そ、そうだったかなあ？」

若干震える声で誤魔化してみる。

「そうだよ。そうしたら智也が無理矢理行こうとして、智也の後頭部を英和辞典の角で強打して眠らせたんだよなあ。サスペンスの犯人みたいな形相でさ」

「だって智ちゃんが掃除もしてないのに来ようとするんだもん。さすがに恥ずかしいんだよお！」

「へえ、今坂さんって純情なんすねえ」

ナイス一蹴君。その誤解はとても心苦しいけど、乙女に思われているみたいでちょっと嬉しい。

信君がそんなもんかねえと眩きながら、じゅつと懐疑的な視線を送ってくるけれど、その視線を無視して重い足を無理矢理動かす。

私の家は彩ちゃんの家の斜め向かいだから、一分も掛からない距離なんだけど牛歩作戦でなんとか数分は稼いでいる。この間になんとか心の準備をしておかないと。

そもそも、私が家に友達を呼ぶ事自体があり得ない事なの。私の家に来たことがあるのは智ちゃんとか彩ちゃん一家、それに親戚を除くと後輩のくるみちゃんという女の子だけ。それ以外の人はあらゆる手を使ってシャットアウト。今の今まで私は自分の家を封印してきた。形振り構わずに全力で。だけど今回だけは智ちゃんの事でどうしても聞かなきゃいけない事があって、断腸の思いで仕方なく、ほんつと

~~~~~に仕方なく信君達を連れて行ってあげる事に。

家に友達を上げると、最恐心霊スポットに一人で行くのとどちらが良いと選択を迫

られても、私は元気良く幽霊さん達に会いに行くことを選択する。その位嫌なんだよお！

たいして歩くこともなく家の前まで到着してしまう。

「へえ、ここが今坂さんの家ですか」

広くもなく、小さくもない特別なものが何も無い一軒家で、一応小さな車庫には一台の車とバイクが停められている。

興味深そうに眺める一蹴君だけど、もう一人の目聡い親友くんが車庫へと目を輝かせて近づいていく。

「うおッ!?一蹴来いよ!すげえぞこれ!」

子供の様な好奇心旺盛な瞳を輝かせ、一蹴君を嬉々として手招きする。さて問題です。そんな信君を私はどんな目で見ていますでしょうか?

「本格的なカミナリ族仕様の単車じゃんか!」

「カミナリ族ってなんだよ?」

「お前知らないのかよ!カミナリ族ってのは暴走族とは違うんだけどな、スピードを追求した結果、雷のような音を出して走るからカミナリ族って言われるんだよ。それに憧れて暴走族つてのが現れたんだ。はあ、すげえ。ハンドルを絞ってないし、三段シートもない……ガチで速さだけを追い求めてるじゃん。K A W A S A K I Z E P

HYR400なんて、渋いなあ、かつけえなあ……ペイントも一流だよ。これは般若じゃなくて白夜叉かあ……」

正解は感情を捨てた目で見てるだね。

パンパンッと二拍して拝む信君に私も一蹴君も津波の前兆の波のように引いていた。目を覚まして信君！

「と、とりあえず行こうよ一蹴君」

「そうっすね。ほら、行くぞ変態」

信君の服の襟を掴んで、容赦なくずるずると一蹴君が引き摺ってくる。

「あー！もうちよつと、もうちよつとだけー！」

「はいはい、あとでいくらでも拜ませてやるから今は三上の為にあんやこらだろ」

「智也とあの単車……くつ、すまん智也！俺はこの欲望を抑えられそうにない！」

「そのあくなき欲望はなんなんだよッ！どこからその情熱の泉湧いてんの？塞ぐぞ馬鹿！」

「俺のカワサキ……！」

「お前のじゃないだろ………ていうかなんで今坂さんの家にあんな単車があるんすか？」

「さあ、なんでだろ？不思議だねえ？」

頬に人差し指をさして首を傾げてみた。

「あれ？俺馬鹿にされてます？」

「唯笑なんのことがわかんない」

「どつから甘えた声出してんすか!? そんな人じゃなかったつすよね!なんでここにきて二人が人格崩壊してんだよ!めんどくせえ!」

一蹴君の苦労は察するけれど仕方ないんだよ。今日本当に辛いのは智ちゃんじゃない、唯笑だよ絶対ッ!

信君を目一杯の力で引き摺る疲れた一蹴君と、今も車庫へと手を伸ばす信君と玄関の前まで来て、大きく深呼吸をする。その後、二人を振り返って……

「二人共、この先何があっても唯笑の責任じゃないからね?自己責任だからね?」

「なんか危ない契約書に書かれているような事言い出した!」

「カワサキ、オレ、カワサキ、オレガカワサキ」

「もう好きにトランザムつてろよ」

目を閉じて息を整え、ゆっくり、静かに家の中へと入る。

「ただいま」

「お邪魔します。なんだ、変なこと言うから身構えたのに、普通の玄関じゃないつすか」

「……玄関はね(ボソツ)」

「なんか不穏な眩きしました?」

「そんなことないよお。はい、いらつしやうい」

「怖い怖い! 急な満面の笑みが怖いんですけど!」

「ここが唯笑ちゃんの家か。あ、菓子折り忘れちゃった。悪い一蹴、菓子折り買ってくるのと、正装に着替えてくるからちよつと待っててくれないか?」

「復活したかと思えば面倒な復活しやがった! もうあんたら三上の事完璧に頭がないだろ!」

舞い上がる信君と、突っ込みに徹するしかない一蹴君。そんな一蹴君を見ていると自然と目が潤んでしまう。

「あれ? なんて憐れみの目で見てるんすかあ?」

「ううん、なんでもない。一蹴君、どうかまともな一蹴君のままでいてね?」

「俺どこに来たんだよ」

「正気のままの君でいてね?」

「本当にどこに連れてこられたんすかねえ!」

混乱している二人をリビングへと嫌々案内する。

「あの、今坂さん?」

「何かな?」

「なんで胸を十字に切ってるんすか？」

「エロイムエツサイムエロイムエツサイム助けて彩ちゃん」

「松月さんに祈るってなに!？」

「ま、まずは結納の日取りか? いや、挨拶は土下座で……」

「信も何言つてんだよ! なにこの入り辛い空気!？」

よし! これで彩ちゃんも見守ってくれてるはず! もう何も怖くない!

ふんすと両手を胸の前でぐつと握り、そうして私は……唯笑はその禁断の扉を開けた。

「ただいま」

いつものように私はリビングの中へと入るけれど……

「あ、すみませんお邪魔——」

「初めまして僕はいな——」

二人の言葉どころか息すらも止まっていた。

「ああ? おつせえんだよ馬鹿。前歯折んぞああん?」

目の前のもんでも目を前にすれば誰もが二人のようになると思う。

趣味の悪い派手なガウンを羽織って、煙草をガラスの悪い感じで吸い、ソファアの背に両手を広げて足を組み、なぜか家の中なのにサングラスをしていて、髪にピンクのメツ

シユが入っている首領（ドン）を目の前にすれば誰だつて。

今坂慧（いまさかけい）。不本意ながら唯笑のお母さんです、はい。

開いた口が塞がらない二人を前に、気にした様子もなくお母さんは顎で座れと示す。うん、そこはフローリングの上だけどね。

「なんだあ？唯笑、あんたの連れは随分舐めた態度すんじゃねえか？」

「どの口で言つてるのかな？」

「あやし様の崇高なお口様さ」

「タバコ臭いだけの汚い口だよ」

「はっ、囀るじゃねえの。んで、どっちが信だい？」

「えつとね「オーマイゴツデス」って言った方」

「はあくん。あれがねえく」

煙草を啜えながら信君に近付き、信君の顎を右手で上げながら観察する。

信君信君、それガンつけてるわけじゃないから大丈夫だよ。ライオンがじゃれてるだけだから撫でてあげてね。

「テメエが信ねえく？はくん、ほあくん……どれどれ」

「は？あの、なにを——ッ！！！！」

「あ、ああ、おか！お母さん！！！！」

大人しくじゃれついていると思ったら、信君の唇に噛みついた！ねつとりと濃厚に！

あまりの事態に眩暈がして言葉を失う唯笑と、大きいテレビっすねえくと現実逃避をする一蹴君。

「なな、何してるとよ!？」

動揺のあまり変な言葉になりながらライオンを引き剥がす。アホなのかなこの人！  
あ、人じゃないもんね！アホな獣、略してアホモノだよ！

「ふいふ、生き返ったわあ〜」

「酔ってるの!？」

「なわけねえだろ、素面だつっうの。節穴かよ」

「酔ってて欲しかったよ！素面でよく出来るね！」

「んだよ、智ともしてんだろ？こいつも家族だつてんならいいだろうが」

「ここ日本だもん！ていうか智ちゃんもいつも怯えてるからね！」

「はっはあ！あたし様の口付けは女神の口付けだぜ？なのにあいつ草食動物のように逃げやがって……ああ、そーいやあいつのファーストあたしじゃね？娘さまあつてなもんよ！彩のファーストも奪つてやったよなあ！」

「泣いてた！彩ちゃん全力で泣いてた！」

魂が抜けてしまった信君と、触らぬ母に呪いなしとでも言いたげな一蹴君。



「……俺、初めてだったのに……初めてが、初めてがあああああッ!!」

「だから嫌だったんだよおおおおおッ!!」

「いのり、俺駄目かもしくない」

「ははは!今夜は寝かせねえかなあッ!!」

唯笑と信君の絶叫と、絶望を覚悟した一蹴君と、それを悪魔の笑顔で迎えるライオン。

こうしてとんでもない夜が始まってしまった。

ちなみに、彩ちゃん是我先にと逃げたと思うな、うん。

私は天を仰いで額を抑え、強烈な眩暈をどうにかして誤魔化そうとした。

これまでの人生で、こんなことは今まで起こり得なかった。初めて訪れた友達の家や、他人の家で眩暈を起こして倒れそうになる経験をする事なんて、早々ない。

三上さんと別れてすぐに今坂家に呼ばれ、不規則に動く心臓をどうにかこうにか規則的に戻し、よしと気合を入れたのだけれど、こんな光景が広がっているだなんて誰が想像出来たでしょうか?

「おい鷺沢、もつと力入れて揉め。んなひよろつちい力であたしの肩が癒されると思ってたのか? ああん?」

「……はい」

「んだ？その不貞腐れた返事はよお。右手潰すぞメエ？」

「す、すんません、慧様」

とても常識を持つているとは到底思えない姿の女性の肩を、引き攣った笑顔で揉み続ける私の彼氏と……

「オレ、ヨゴサレチャツタ」

心ここにあらずの稲穂さん。魂が口から出ている。

「娘く、コーヒー」

「……………」

「娘よお、お前もしかして生理か？カリカリしやがつて」

「……………そうだね、プロテインだね」

ポットとカップ、それにインスタントコーヒーを無言で女性の目の前に置き、らしくない言葉を口にする今坂さん。激怒しそうなのを理性で抑えた結果、いつもの人格を保てなくなつてしまつたかのよう。

インターホンを押しても誰も出てこないから、失礼を承知で上がらせてもらつたけれど、常識の範疇にない光景がリビングに広がっているだなんて誰が想像出来ただろう。

「なんですかこれ？」

不自然な笑顔で発せられた声に、今坂さんがようやく私に気付いた。

「あ、いのりちゃん。いらっしやい。えっと、好きなどころに座って」

むしろ踏み込みたくないんですけど。帰っていいですか？

「いのり？ ああ、あんたが陵いのりな。話は董から聞いてっけど、はあくん、なるほどねえ〜」

街中にいるチンピラさんよりも質の悪い眼で、値踏みするような視線を向けられると、小馬鹿にするように笑いながら、似てないじゃねえかと小声で呟いた。

「あ、えっと、初めまして。陵いのりです、お邪魔します」

「オーライオーライ。んじゃ、あんたの事はイノキって呼ぶようにするわ」

「……いのりでお願いします」

語感だけでなんて渾名を授けようとするの!?

「ハツハツハツ。遠慮すんなよ、偉大な渾名で嬉しいだろ？」

「尊大な態度に驚きです。とうか今坂さん！今坂さんにお姉さんがいるなんて聞いてませんよー！」

てつきり今坂さんのお母さんがいるものとはばかり思っていたのに、どうしてお姉さんがいるのでしょうか？言動と態度と性格さえ目を瞑ればとてつもない美人で、今坂さんとは真逆の魅力を持っている。

「イノキちこっ寄れ。可愛がつてやろうじゃねえの」

「はい?」

言葉の節々に上機嫌を滲ませて手招きされる。

「いのりちゃん、この人に余計な餌を与えないでえ〜」

「餌ってなんですか。一蹴もなんで泣きながら肩を揉んでるの?」

「貞操を守る為なんだ」

「ほんとに意味がわからないよ!」

混沌とした空間と混乱する思考。

三上さんの事で大事な話を今坂さんのお母さんから聞ける、ということでも尋ねたのに肝心のお母さんの姿はどこにも見当たらないし、傍若無人を形にしたかのようなお姉さんにみんなが精神的に殺されているし。全く状況が理解できない。

「あ、あのねいのりちゃん。お母さんなの」

「…………え?」

「あの人、悲しいけど唯笑のお母さんなの」

人差し指が示す方向に目を向けて絶句。

「嘘、ですよね?」

「現実だよ。ちなみに、ここに智ちゃんがいたら更に酷い事になってたよ」

世の中の母親の方々に唾を吐きかけるかのようなこの人が母親!?! 暴○団の幹部とか

言われた方が信じられますよ!?

「んだごら? あたしが母親だと問題でもあんのかよああん?」

「問題以外が見つかりませんよね?」

「言うじゃねえか小娘。ビッチ!!」

「今坂さん?」

「唯笑を冷たい目で見ないでよお!」

「ああ、間違えた。シット!! だったわ。許せいノキ」

「今坂さん?」

「だから唯笑に笑顔で抗議しないでってばあ!」

それにしても、なんかどこかで彼女のような人を知っているような気がする。かなり身近な誰かと目の前の女性は似ている。ふぎけた性格や傍若無人な態度や、既知外な行動……そう、ついさっきまで一緒にいた誰かと。

「つうかよお唯笑、お前ヤバくね?」

「聞きたくないけど、何がかな?」

「ぶつちやけあんたよりイノキのがエロいじゃねえか。智のやつノックアウト寸前じゃね?」

彼女の発言に肩を揉んでいた一蹴の手が止まり、今坂さんの表情が凍り付き、稲穂さ

んは相変わらず死にかけていた。

「エロいってなんですか。表現がおじさん臭いんですけど」

「いのりちゃんが気になったのそこなんだ!？」

「いい、いのりは俺の彼女なんすけどね!？なんてことを言うんすか!？」

「ああん? いやさ、雰囲気完璧処○じゃねえし、アレだろ? 清楚系とかそんな感じの  
ビッチ臭がぶんぶんすんだよなあ。唯笑より胸あるしよお」

血反吐はかせたい。

「母親なのになんて事を言うんだ!？もつと娘を応援しようとか思わないかな!？」

「んなこと言ったって仕方ねえじゃん。あたしだったらとつくに抱いてんぞ。なあ彼氏  
?」

「同意するだけでも思ってるんですかねえ!？狂ってるにも程があるでしょうよ!……そ、  
そんなことないよないのり?」

「なんで不安そうなの一蹴。あり得ないからね?」

三上さんは軽い気持ちで簡単にそういう事をするような人じゃないもの。そんな人  
じゃないから私は……

「んだよ甲斐性ねえなあいつ」

「お母さんは品がなッ?!?!! いったいなアッ! グーで殴らないでよお!」

「気品がある母親になんて事言いやがる」

「結ママみたいなお母さんだったら尊敬したもん！」

「結がどんだけ腹黒いか知らねえから言えんだよ」

「全身から滲み出る黒さを持つ人は言う事が違うよね」

「んだごらあッ！反抗期長引き過ぎじゃねえか！」

「産まれた時から反抗期の人に言われたくないですう！」

ぎやいのぎやいのと話が一向に進まない。溜息を吐いてソファに腰かける。

「おいおい、誰が座っていいと許可しやりましたか？」

「あく、はいすみません。座りますね、ありがとうございます」

「こいつ態度がなつてねえぞ。結そつくりだ」

「……あなたは三上さんそつくりですな」

そう、この人の尊大で傍若無人で唯我独尊な態度はあの人を彷彿とさせる。

「あく、それはねいのりちゃん。実は智ちゃんはお母さん、唯笑は結ママ、彩ちゃんはおばさんに小さい頃懐いてたんだよ。だから智ちゃんの人格形成には残念なことにお母さんの影響が多分にあるんだ」

でしようね。説明されなくても、なんとなくは察しがついてました。

「そうですか。それよりも、三上さんの事で話を聞くんじゃなかったんですか？」

私の言葉にはっとして、今坂さんが顔を上げた。今の顔、完全に忘れていましたね。それ程に目の前の女性の慇懃さが過ぎていたのでしょう。心中お察しします。

「そうだよ！ほら、信君もいつまでも三途の川に旅行に行つてないで帰つてきて」

稲穂さんの肩を揺すり、呆然自失状態の稲穂さんを引き戻す。

「一蹴君もいつまでふざけてるの！座つて！」

「俺が悪いんすかねえ!?理不尽なところは遺伝されてんじやねえかな？」

ぶつぶつと文句を言いつつ一蹴が私の隣に座る。そんな一蹴の肩にお疲れさまと手を置くと、ほんとだよと返事があつた。

「で、三上はどうしたんだ？」

私が三上さんを追つて出た事を気にしてか、どことなく不安そうな声色で聞かれる。そんな一蹴に私はなんでもない事のように笑む。

「三上さんなら、少し頭冷やしてくるって言つてどこか行っちゃった。でも、心配はないと思うよ」

「……そっか」

嘘じゃ、ない。私と三上さんの間に一蹴が考えるような不安なんて何も無い。有り得てはいけないの。

私は三上さんを慕う生徒で、三上さんは私の家庭教師。それ以上にも、それ以下にも



あの人はしてはくれない。そういう意味、なんですよね？

ふざけた雰囲気か鳴りを潜め、今坂さんのお母さんは新しい煙草に火を点け、怠そうにソファに背を預ける。

「で、智に聞いたつてはしゃいでたみたいだけど、そこんとこをまずは話しな」

「うん、そうだね。あのね、お母さん……」

そうして今坂さんがこれまでの経緯を話していると、ちゃんと聞いているのかいないのか、彼女は天井を眺めながら煙を遊ばせていた。

サングラス越しに映る景色は天井なのか、それとも別な風景なのか……それを押し量れるほど、私は今坂さんのお母さんの事を理解出来ていない。

簡潔に要点を抑えて話を済ませると、彼女は三本目の煙草を乱暴に灰皿に押し付け、娘へと厳しい視線を向けて一言――

「おっせえんだよ馬鹿娘が」

呆れたような一言にさすがの今坂さんも呆然としてしまっている。もちろん私達もだ。

「おっせえ、おっせえ、おっせえ！あんた、あれから何年経つてると思ってた？五年だぞ、五年！」

「な、なな、だつてお母さん達が何も話してくれないから！」

「あたし等がチクったところでどうにもなんねえから、唯笑、あんたに期待してたつてのによお。しかも、パーティーにもう一人追加してんだろ？それなのに、情けないつたらありやあしない」

額に手を置き首を横に振る。欧米人のような反応に一同は若干苛立ちました。

「そんなこと言つたつてしようがないじゃん！」

「え〇りみたいない言ひ訳すんなよ」

「じゃあどうしたら良かったの!?!」

まったくだ。三上さんの口を割るのにどれだけの偶然が重なつて聞き出せたと思つているのだろうか。

それとも、彼女は知つているのだろうか？三上さんが素直に話すための手段を。

気の利いた答えが返つてくるのではと、少しの期待を持つて次の言葉を待つと……

「んなもん簡単じゃねえか。男の口が良く滑る場所はどこだ？答えはベッドの中だろ？ちよいとあいつと寝て、ピロートークすりゃあ一発じゃねえか」

期待が大気圏を突破して宇宙の彼方に消えた。稲穂さんまでもがドン引きしているのは珍しい。

「ベッドの中じゃ一発だけじゃねえかもなあ！ふはは！」

最低なオプシオンまでも追加してくる。三上さん以上に異常な人だった。

ゆらりと、今坂さんが立ち上がる。ガラスの灰皿を手に持つて。

「今坂さん落ち着いて下さい！」

「唯笑ちゃん目が据わってるから！」

私と稲穂さんが即座に止めに入るけれど、今坂さんは顔を真っ赤にして涙を堪えながら黙々と凶器を振り下ろそうとする。

「一蹴、灰皿を取って〜！」

「お、おう！」

「あたしの娘とは思えねえ初心さだねえ〜」

この状況でよくもまあ平然としていられますね!?!あなたの下で育って、よく今坂さんがこんな可愛らしく成長したなって感心します！

「お願いどいて、お母さん殺せない」

抑揚のない声に寒気が走った。

今坂さんをなんとか落ち着かせる為、三人で全力で廊下まで引つ張っていき、二十分掛けて説得。三上さんの人格形成の闇を垣間見た瞬間だった。

泣きじやくる今坂さんを宥めて戻ると、元凶がスコツチを呑みながらさきイカを食べていた。

「豆腐メンタルめ、泣けば優しくされるとか思ってたんじゃねえぞ」

「母親だからって何を言っても良いとでも思ってるの!？」

「うん」

躊躇いもなく頷いた。間違いなく三上さんの師匠だこの人。

「まあ、多少はしゃいじまったのは悪かったさ」

自分が悪い自覚はあったんですね。

「とりあえず座りな。事情はあんた等もわかっただろうし、ちよいとばかり話してやるよ。あたし等の事もな」

サングラスの向こうの瞳が寂しそうに見えたのは気のせいだろうか？

私達が座るのを待って、スコッチを口に含む。まるで、お酒の力を借りているように私の目には映った。

「なんだかんだ言ってもな、智の言葉があの子ちゃんを殺した事実は変わらねえし、その罪をあいづは忘れちゃなんねえんだよ」

「わかってるよ。わかってるけどこのままだと智ちゃんは」

今坂さんの言葉を片手で制し、だけどなど言葉を続ける。先程までの慇懃さはすでにどこにもない声で。

「あの言葉を言わせてしまったあたし等は、智以上にクズだったのさ」

ああ、本当に三上さんの師匠なんだと私は悲しくなってしまった。過去を語る彼女の

姿が悲しい程に三上さんと重なる。

「なあ？なんで宗吾と結があの家を出たか知ってるか？」

その問い掛けに応えられるのは、この場には今坂さんだけ。今坂さんは目を伏せてぼつぼつと答えた。

「今まではどうしてかわからなかったけど、智ちゃんの隠していた事を聞いてなんとなくはわかるよ。多分、自分達がいると智ちゃんがいままでも蒔田さんの事を思い出して、自分を追い込んでしまうから……だよな？」

今坂さんの答えに曖昧に彼女は笑い……

「それもある」

「それも？」

首を捻る今坂さんに、初めて見せる母親の顔で彼女は残酷な言葉を口にした。

「半分は正解さ。ただ、もう半分は違う。宗吾と結はな……」

その先の言葉の衝撃に今坂さんも、私達の心も揺れに揺れた。酷く現実味を持つてはいけない言葉。

——あの二人はな、智からも蒔田一家からも逃げたのさ——

耳の奥に残響のように残り続ける言葉に、何を言えば良いのか……信じたくないというかのように今坂さんは口を嚙み、稲穂さんも一蹴も拳をぎゅつと膝の上で固く握った。

「な、んで？」

震える言葉と声は、無理矢理お腹の底から捻り出したように痛々しさに満ちていた。

口の中を苦みで満たしたかったのか、新しい煙草に火を点けて私達から視線を外して語り始める。

「あの日、蒔田淳に言った言葉はな、智が言わなければ宗吾が口にしていた言葉だったのさ」

嘘、と虚ろに呟く今坂さんと、なんだよそれと稲穂さんが片手で前髪を握りつぶす。

それじゃあ、三上さんは――

「智はな、あいつは宗吾と結の罪も一緒に背負っちゃまったんだ。まだ15のガキにクソみてえに重いもんを背負わせやがった……」

手で煙草を握り潰し、灰皿に捨てる。吐き捨てるような言葉と一緒に投げたかのように。

「もちろん、あたしも親だ。あいつ等の気持ちがあわかんねえわけじゃあない。あたしだって唯笑？あんなが同じように事故に遭ったら、あいつ等よりもずっと汚い言葉で相

手を罵る自信がある」

私達は誰も母親、父親になったことがないから、彼女達の気持ちに正しいかどうかなんて判断は出来ない。それでも、それじゃあまりに救われたい。誰も救われたいじゃないですか。

「けどな、あたしは誰かにその言葉を任せたりはしない。あたしの家族だ、あたしが背負うのが筋だろうさ。だからあいつ等は智の言葉を止めて、親として智の言葉を、罪を自分達が背負うべきだった。そうするべきだった。なのに、あいつ等は智の背中に、あんな小せえ背中に任せやがって……あたしがすぐに止めなかつた言い訳になるが、あたしは宗吾が智を止めて、その先の罪を背負う事に少しは期待しちまつたんだ」

嘆きの言葉は弾効なのか、それとも自嘲なのか、それともその両方なのかかもしれない。「あの言葉を言わせたのはあいつ等とあたし等親なのさ。なのに、いくら言っても智は聞く耳を持たねえで、自分が自分がつてよお……情けねえ親だよなああたし等は。唯笑も彩も智も、みんなあたし等の子供なのに、なんにもしてやれねえで、ダサいつたらねえわ」

「じゃあ、宗吾パパと結ママが出ていったのって……」

「あたしと智一が追い出したのさ。あのままじゃあ、智だけじゃない、二人まで馬鹿な事しちまいそうだったからな。だから、智が自分から会いたいと願うまでは、二人には智

と会う事を禁じたんだ。あの家の維持にはあたしと智一が協力するって条件でね。あの家は唯笑と智に絶対に必要な場所だろうからね」

ぼたぼたと、今坂さんの膝に止めどなく雫が落ちていく。

「智、ちゃん、全部知って、るの？」

今坂さんの問いに、苦虫を噛み潰したかのような顔で頷く。

どこまで馬鹿なんですか、あなたってお人好しはと心の中で毒を吐く。

三上さんは誰にも打ち明けられなかつたんじゃない。打ち明けないように自分で覚悟して生きてきたんだ。自分以外の全ての人の為に、自分以外の誰もこれ以上悲しまないように。蒔田さんの憎悪も、松月さん達の悔恨も、自分の罪以外の全部をあの人はいった一人で抱えてきた。

あまりの愚かしさに涙が溢れそうでもあり、同時に恐怖も覚える。

そんなにも抱えきれない傷を、五年も独りで誰にも触れさせないで生きてきただなんて……あの人はいつ壊れてもおかしくない状態なんだ。こうしている今も。

「あたしも智一もあんなだけの罪じゃないって、何度も何度も言い聞かせても無駄でね。あんな優男に育てた覚えはないんだけどねえ。どっちにしたって彩が笑えないなら、せめて自分だけで良い。宗吾達は関係ない。他の誰でもない、自分の責任にしていたってな。そして唯笑、あいつはあんなの笑顔を曇らせたくもなかつたんだよ」



「……え？」

「唯笑、あんたは彩と智にとつて掛け替えのない家族なのさ。彩はあんたの笑顔が大好きでね、智もあんたの能天気さに何度も救われてた。だから、何が何でも智は守らないといけなかった。自分の所為であんたから笑顔を奪うわけにはいかないって、それまで奪ってしまったら今度こそ自分は生きていく価値もないってね」

そう、なんだ。だから三上さんは笑うんだ。笑って大丈夫だつて周りにじやない、自分に言い聞かせているんですね。どんなに追い詰められても、叫び出して逃げ出したくても、そんな本当の自分を何度も何度も殺し続けて、唯一人の為。二人の掛け替えのない人の笑顔を守る為に。

「——ッ!!」

言葉もなく、言葉になるはずもなく、今坂さんは口を両手で覆い隠し、肩を震わせて顔を隠すように下を向いて涙し続ける。止めようにも止められない。

三上さんの優しさが過去から現在に至るまでずっと、二人だけに向けられていたと知ってしまった。そんな嬉しい真実、心震えないわけがない。いつだって、二十四時間ずっと三上さんの心には二人がいて、あの底抜けに馬鹿な笑顔は二人の為だけに向けられていたんだもん。

「今坂さん」

今坂さんへとハンカチを差し出す。薄暗い心の奥で蠢いている物を押し殺して。

ああ、なんて綺麗な涙なんだろう。三上さんを純粹に想って流す涙のなんと綺麗な事か。私の心の奥底に潜む怪物とはあまりに対極な涙。

三上さんの心に一番近くにいるのは自分じゃない事は始めから知っていた。知っているつもりだった。近くどころか、一部となつている事実を目の前にするまで。

ありがとうと、薄汚れたハンカチが純粹を拭う。

だい、じょうぶ。私は別に三上さんの傍に立てなくてもいい。恋人になりたいとか、そんな高望みはとつくに捨てている。あの人の笑顔が二人だけに向けられるのなら、私はせめてあの人の笑顔を曇らせないように生きよう。大丈夫。一蹴を愛している気持ちに嘘偽りはないもの。三上さんの笑顔を曇らせないように、一蹴と一緒に私は彼の生徒としてこれからも……

「とまあ、これが情けねえ親達の下らねえ話なわけよ」

ううん、と何度も今坂さんは首を横に振る。誰も彼等を責められない。私達は親の気持ちで誰一人として理解出来るだなんて、そんな烏滸がましい事を言えない。

誰も彼もが出口のない暗い箱の中に閉じ込められ、抜け出せないまま。どうしようもないその暗闇から抜け出す方法は私には残念ながらわからない。けれども、きつとその出口を無理矢理壊して作れるのは多分――

「お母さん」

「落ち着いたかい、泣き虫」

泣き腫らした目で挑むように母親へと視線を投げつける。

ああ、やっぱり今坂さんは強いなあ。憧れてしまうほどに強い。三上さんの為なら、この人はどこまでも強がれるに違いない。三上さんのように。

「話してくれてありがとう。でもね、唯笑は昔の事を聞きに来たわけじゃないんだ」

挑発的な言葉に、彼女は嬉しそうに笑って娘と対峙した。

「お母さんは知ってるんじゃない？」

「さてね。あんたが何を言いたいのかさっぱりさ」

とぼけた様子に取り合う事もなく、意を決したように今坂さんが口を開く。

三上さんと彩花さんの家族として、毅然と胸を張り、最上級の強がりの笑顔を纏って

「智ちゃんと一緒に生きていく為の鍵を頂戴」

今坂家を出て一蹴と一緒に帰路につき、家の前で別れてようやく自室へと戻ってきた。灯りを付けるためスイッチへと手を伸ばしたけれど、どうしても良いかと真つ暗なまま

の自室に入り、手に持っていたバッグをベッドへと乱雑に投げ捨てて、壁を背に適当に座り込む。

結局私に出来るのはここまで。三上さんの過去を暴く切っ掛けだけを作って、その先に踏み込む資格を持つのはあの場に二人だけ。三上さんの特別な二人。

別に羨ましくなんか無い。どうでもいい。誰が傍にいたりとか、ほんとにどうでもいい。無償の愛だなんて笑ってしまふけれど、そうするしか出来ないのなら甘んじてそれを受け入れるだけ。三上さんは私を求めない。一蹴を裏切る私をあの人は許さない。

「疲れちゃったな」

公園で別れた三上さんは、私に明確に線を引いたんだ。

お前はこれ以上自分に入り込むなど、柔らかな言葉に拒絶を包んで。

『陵……せいッ!』

『いたッ!?なんで拳骨するんですか!』

『アホ垂れめ!勝手に俺様を慰めてんじやねえ!誰も落ち込んでないわ!』

『ほんとに痛いんですけど!?!婦女暴行ですよ!』

『うっさい!お前なんぞに慰められるとか屈辱なんだよ!』

『しょうもないプライドを……』

『たく、少しだけ頭冷やしに出ただけだつてのに大袈裟な事しやがつて……こんな事されても俺は嬉しくなんかねえんだよ』

『にやけてませんでした?』

『俺を変態にするな。陵、お前が予想以上に俺を慕ってくれるのは悪い気分じゃない』

『え? そんなに慕つてるように見えます?』

『自信がなくなってきた』

『冗談です』

『うぜえ。とにかくだ、悪い気分じゃないけどな、そうじゃねえんだよ』

『どういうことですか?』

『お前が抱き締めるべきは俺じゃないし、慰めるべきなのも俺じゃないってことだ。せつかく鷺沢とまた恋人になれたんだろうが。なら、お前が抱き締めて良いのは今はあいつだけなんだ。世界で一番お前を愛してくれるあいつだけをお前は想つてやれ。あんなに俺達が苦勞したんだ、お前達が二人でいてくれることが俺にとって何よりも嬉しいんだ』

『……なんだか年寄りみたいなこと言い出しましたね』

『黙れ小娘。お前の心配は素直に嬉しいけど、俺は大丈夫なんだから、お前は鷺沢の事だけを想つてやれ。そんなお前達を見させてくれよ。俺が見れなかった幸せつての?そ

れを見せてくれ。それぐらいの我侭聞いてくれよ』

『うわあ、人の幸せが自分の幸せとか言っちゃってます。末期じゃないですかね』

『プチ殺すぞてめえ』

『あーそうですか！はいはいわかりました！じゃあいんですね？心配しなくても良いんですね？』

『そんな粗末なもんはいらん』

『良いんですか？もう心配なんかしませんよ？良いんですかねえ、本当に？後悔しません？せつかく私が心から心配してあげますと言っているのに？』

『しつこい！保険のセールスよりもしつこい！とつとと彼氏といちやつきに帰れよ面倒臭い！鷺沢呼び出すぞ！』

『……意気地なし』

『あんだって？』

『三上さんなんか猫のうんち踏んじやえば良いんです！』

『そのネタわかる奴今の時代いないだろ』

わかつていたくせに、三上さんは私を優しく遠ざけた。私が望んだのはあなたの優しさなんかじゃなかった。私はあなたの弱さが欲しくてたまらなかつただけなのに。

追い詰められて壊れてしまいそうなら、その弱さを私にぶつけてくれれば良いのに。そうして欲しかったのに。

八つ当たりのように、壊れてしまいそうな心を私へと投げつけて、めちやくちやにしてくれたなら……そんな幸せな事はない。

私の身勝手な気持ちをも百も承知のくせに、目隠しをして突き放して……あなたの強さと優しさは残酷が過ぎる。

「ずるいなあ……」

私よりも長い時間一緒に育ったという理由で、今坂さんは三上さんの特別を手にしていく。そんなの私にはどうしようもない。対抗する手段を考えるのも馬鹿らしくて、諸手を上げて降参するだけ。

ベッドから枕の用途を成さない無残な形のソレを引き寄せる。

「ずるい、ずるいずるい」

もしもあなたを誘うように抱き締めたのが私じゃなくて今坂さんだったら、あなたは無下に引き離すことが出来ましたか？

左の腕の中にはぐちゃぐちゃの枕、右手には何を持っているのかなあ？

枕からざく、ざく、と音が立てられている。

この部屋の中でだけの八つ当たり。他の誰にも見せることが出来ない醜い私自身が

部屋の景色へと反映されている。

「今坂さんならつて、わかりきってるじゃない」

彼女は三上さんの心の一部で、大切なお姫様。私のような平民とは身分が違う。どんなに着飾っても偽物の身分ではあの人に手が届くことはない。

それでも良いと仮面を被り、仮面を剥ぎ取ればこんなにも醜悪な顔が浮かび上がる。

いいな、いいなあ〜と本心を呟きながら、枕を私の醜い心の形へと変えていく。

めちやくちやにされたかった。情けない顔をする三上さんを抱き留めて、もつと、

もつとと心を曝け出させてしまいたかった。

想像すると自然と頬が緩み、恍惚に目が眩んでしまう。

三上さんが望まない私は、絶対に表には出せない。唯一、この部屋の中でだけは惨めな自分でいさせて……

惨めな自分に酔い痴れてしまいそうな時、不意にチャイムが鳴った。

こんな夜中に私の家を訪ねてくれる人なんて、一人しか心当たりがない。

部屋の窓から覗くと、一蹴がどこか思い詰めたような表情で立っていた。

そんな一蹴を目にした私は……

「……………いふ」

自然と頬が緩み笑みが零れたのだった。



家の前でいのりとは一度別れたんだけど、なんか引つ掛かるものがあつた。いのりは氣付いていないかもしれないけれど、いのりが三上の話を語る時、いつもなにかしらの感情を表に出す。苛立ちだったり、呆れだったり、徒労感だったりなんだけど……あれ？一つもポジティブな感情がないな。でも、決まつてネガティブなはずの感情をいのりは楽しそうに話すんだ。俺が焦燥感に駆られてしまうような表情で。

なのに、三上の事を聞いた時、いのりは普段と変わらない表情で淡々と答えた。その時点でおかしいとは感じていたけれど、今坂家を出るとその異常は余計に顕著に表情に出た。

三上達の話題を振ると、思い悩むでもなく始めから用意されていたかのような笑顔で、当たり障りのない事しか口にしない。そんないのりの様子に後ろ髪を引かれ、何かあつたのではないか？また俺は大事な事を見過ごしているのでは？と不安になり戻ってきたのだが……ああ、そうだよ！三上と何かあつたんじゃねえかって気が気じゃなくて戻ってきたんだ！変な言い訳すんなだせえ！

インターホンを押してしばらくしてもいのりは出て来ない。家の中は真つ暗だし、出掛けるのか？こんな夜中に？

探しに行こうかどうしようかと迷っていると、ドアが開いて中からいのり――

「どうしたの一蹴、忘れ物？」

あまりの衝撃に俺は慌てて目を逸らす。

「お、おお、おまーいのり！なんて格好で出て来るんだよ！」

絹のような肌をバスタオル一枚だけで隠しただけの姿。その姿があまりに煽情的で、そんなつもりで戻ってきたわけじゃない俺は情けなく慌てふためいてしまう。

「あーごめんね、お風呂に入ろうとしてたから、つい」

可愛らしく舌を出して謝るいのりを見ると、思い過ぎだったかと安堵しそうになる。

「と、とにかく服をだな！」

「そうだね、それよりも早く中に入って一蹴。このままじゃ恥ずかしいから」

「あ、ああ、ごめん」

恥ずかしいのなら最初に服を着てくればいいのにと、頭の片隅で突っ込みながらも男の子の俺は逆らえずに中へ。正直嬉しかろうもん！……何言ってんだ俺わあ！

「それで、どうしたの一蹴？」

玄関で立ち尽くす俺になんとはなしに聞いてくるけど、頭が沸騰してしまいそうだ。

「……一蹴？」

俺の胸に手を置いて見上げてくる。視線を下に向けるとそこにはグラウンドキャニオ

ン様がおわしてごわしてですね！待て待て俺！想像しろ！目の前に見えるのは三上の裸三上の裸三上の裸……殺意が沸いてきた。よし、オツケー。

「もう、どこ見てるの一蹴？エッチ」

やっぱ無理！だって三上に胸無いもん！どうして母ちゃんの裸を想像しなかった俺！あ、母ちゃんいねえやてへべろ。

頭の中だけでもふざけてねえと冷静でいられねえ！

「ああ、いや大したことじゃないんだけどさ、なんかいのりの様子がおかしいっていうか、少し気になって。なんつうか、三上となんかあったんじやないかとか、無理してんじやねえかなあとか」

なるべくいのりの方を見ないように喋ると、俺の言葉にそつかと応える。

「うん、まあそれだけだから、ほんと大した話じゃなくて」

あははと誤魔化そうとしつつ、ちらっといのりの顔に目を向けると……

「ありがとう一蹴。心配してくれたんだね」

そこには暗がりの中、妖しく嗤う誰かが立っていた。

「い、のり？」

背筋に不可解な寒気が走り、知らず足が後ろへと下がる。

な、んだ？今日の前にいるのはいのりだよな？

「嬉しいなあ。私の事ちゃんど心配してくれて、優しくて……」

いのりの両腕が俺の首へと絡みつく。ああ、蛇に睨まれた蛙とは今の俺の事を言うの  
だろうなど、どうでもいい言葉が頭に浮かぶ。

魅惑的な上目遣いは蠱惑的ときえ言える。いのりの身体から脳が痺れてしまうかの  
ような甘い、甘い匂いが立ち昇る。この匂いは麻薬だ。いのりの手も、引き寄せられる  
唇も、骨の髄まで響く甘い声も、いのりの全ては麻薬で出来ている。

甘い痺れに酔う頭の中で、もう一つの思考が巡る。

クソ、やつぱり俺の感じた違和感は何違いじゃなかった……と。

形振り構わず俺に甘えなければいけない目の前の恋人の姿に確信を得てしまう。

いのりはこんなふうに、女を形振り構わず使うような人間じゃない。これまでの付き  
合いでそんな事はとっくに知っている。なら、俺に縋らなければならぬのはどうして  
だ？こんなになるまで気持ち追い詰められているって事じゃないのか？

「——んツ?!?!」

ごちゃごちゃと考えている間に、いのりの唇が俺の思考を掻き消そうとする。

いのりの舌が俺の唇をなぞり、唇を割って中へと滑り込もうとしてくる。

引き離さない！

咄嗟にいのりの肩に両手を置いて力を加えようとした……のだけど、結局はされるが

ままとなった。

「大好き、一蹴、大好きだよ」

俺が引き離そうとした瞬間、いのりの瞳が寂しそうに揺れたのを目に入れてしまった。

駄目、だ。このままじゃいのりが壊れちまう。

何があつたのか、いのりの心がどれだけ追い詰められているのか、俺にはなにもわからない。それでも、いのりが俺に縋らなければ立つてられないのではないか？なんて馬鹿な考えが頭から離れそうにない。

なあいのり？本当は三上と何かあつたんだろ？三上の事、本当は好きなんだろ？こんなに俺をがむしゃらに求めなきや三上との関係が壊れそうなんじゃないのか？そうでもしないと繋ぎ止められないから、俺を一生懸命求めるんだろ？

唇を通して伝わる感情は悲痛に過ぎる。俺の心も、いのりの心もぐちゃぐちゃに掻き乱す。

こんなに自分を失くすいのりは初めてだ。飛田とりナちゃんの時でさえ、こんなに取り乱した姿は見た事がない。

わかっている、わかっているだよいのりの気持ちなんて！俺を好きと言う言葉に嘘はない！以前と変わらない好きを向けてくれている事に疑いなんかないさ！けど、それでもッ

!!

「……い、のり、ちよ、いのり待って」

誰よりも好きと言える存在と出逢っちゃまったって事くらいわかってんだよッ!!

「一蹴?」

いのりを優しく引き離すと、見捨てられた子犬のような不安げに揺れる瞳。そんなのりに俺は微笑む。

馬鹿だな、いのり。俺がお前を見捨てるはずないじゃないか。わかってるんだろ?俺がお前を突き放せない事くらいさ。

「……じゃあ……部屋に行く」

俺の言葉に花が咲いたように微笑み、いのりは俺の手を引いてリビングへと連れていく。

いのりの微笑みに俺も笑う。

それならそれでいい。三上へと向かう気持ちに必死にブレーキを掛けてくれるのなら、俺は喜んでお前の弱さに付け込む。お前を繋ぎ止められるならいくらでも身体を差し出す。卑怯者で構わない。いくらでも長期戦に付き合ってやる。いのりの心がいつの日か三上から引き離されるよう、せめて身体で繋ぎ止めよう。

矮小な心を肯定し、俺はいのりを抱く。弱さを隠すこともなく曝け出し、いのりをが

むしやらに、めちやくちやに求めた。

なぜいのりの部屋じゃなく、リビングへと連れていかれたのか……些細で大きな見落としに気付くこともなく、初めて俺といのりは心を背中合わせにして夜を共にしたのだった。

講義が終わり、陽が落ちるのが早くなった昨今。家の前に来ると、おや？と首を傾げてしまう。誰もいないはずの家の中、ピンポイントで俺の部屋だけが光っている。俺の部屋に不法侵入する奴なんて二択でびろびろピンポイントなのだが、ついこの前の事もあり、人知れず溜息を吐いて玄関を潜る。足元を見て、二択が一択へと。

唯笑か……信がこんな女物を履いていたら絶縁するわ。

いつもならどう脅かしてやろうかと策略を練るところだが、生憎そんな元気はない。重い気持ちを引き摺り二階へと上がり、部屋のドアを開けると、彩花の部屋が見える窓枠に肘を付き、物憂い気に暗闇を見つめ続けている。

どんなに俺が突き放そうと、どんなに頭を下げて願おうと唯笑も信もいつまでも俺の傍から離れようとしなない。わかっていたことだ。

今、唯笑の目には懐かしく愛おしい日々の面影が映っているのだろう。俺が帰ってきた事にもびくりとも反応せず、じつと彩花の部屋を見つめ続けている。

ああ、まったく。そんなお前なんてこれっぽっちも見たくないのに……いや、そうさせてしまったのは、やはり俺自身の責任なのだろう。

恋焦がれる過去へと引き寄せられている唯笑を引き戻すため、その頼りなげな方へと手を伸ばそうとすると、ぽつりと唯笑が心ここにあらずの声で呟いた。

「そうだ、静岡に行こう」

スパーンツ!!!

「いったゝゝゝゝゝいッ?!!」

「人が心配してみりや、なに伝説のCMのモノマネしてんだッ！国民的大女優に謝れや！」

びつくりだ！そりゃ心ここにあらずだろうよ！だって心は静岡に旅行に行つてんだもんなアツ!!

「なにするんだよお、痛いじゃんか智ちゃんのカカアツ！」

「紛らわしいんだよお前は！物憂い気にしてると思いきや、ずっとタイミングを計つてやがったな!」

「うう、本当に痛いよ。ん？心配つてなんのこと智ちゃん？」

こいつ、わかってて聞いてやがるな。にまにま気持ち悪い笑顔を浮かべて、ね、ね、ね、と下から覗くように迫ってくる。そんな唯笑の鼻を俺は容赦なく摘まみ上げる。



「う・ぎ・い」

「い・ふあ・い」

何が悲しくてこんなコントをしなければならぬのか。俺のささやかな良心をどうしてくれやがる。

頭痛がしそうな頭を押さえつつ、カバンを机の上に置いて上着を脱ぐ。

「何しに来たんだよお前は。まさか、そのネタを披露するためだけじゃないだろうな？」  
まさかそこまで暇なわけじゃないだろう。こいつだって実地研修やらなにやらで忙しいはずだ。来年にはこいつだって就職するんだ。社会人手前の大人がそんなに暇なわけが……

「そうだよ？」

あるんだよなあ。あつちやうんだよこいつの場合。

「てわけで、智ちゃん！明日休みだよね？」

目をキラキラさせて尋ねてくる。これほど嫌な予感しかしないこいつは何度目だろうか？見え透いた嫌な予感を俺が察知できないとでも？

「確かに休みだが明日は「じゃあ唯笑と信君と一緒に静岡に旅行だね！」力押しで決定してんじゃねえッ！」

こいつは何をどち狂ってるんですかね？ああ、その為の前振りかあのネタは。

「いきなり何言つてんだお前は。あのな、旅行つて言つてもそんなにすぐに出来るもんじゃないだろ。金だつて掛かるし、宿はどうするつもりだ？」

電子レンジでチンで用意出来たら、旅行会社なんかいらねえんだよ。

「え、もう予約してあるよ？この時期は旅行者が少ないんだつて。それに、お母さんの知り合いの人が働いている宿らしくて、お値段もなんと——円なんだつて」

お湯で三分で用意出来ちゃったか。この国の物価が心配になる耳を疑う値段に、ほんの少し心がぐらつく。

「そ、そんなこと言つて。実はお高いんでしょ？」

「ふふふ、今なら三名様まで地元でも有名な老舗の高級うな重がなんと定価でお召し上がりいただけます！」

「帰れ」

お約束通りに世の中は運ばないものだ。茶番を強制終了し、唯笑の服の襟を猫を持ち上げるようにして部屋の外へと向かう。

「わあ！嘘だよ智ちゃん！ちよつとした悪戯心なんだよお！」

「ほお、じゃあうな重は？」

「もちろんタダだよ……信君ごめんね（ボソツ）」

そ、そうか。うな重が食べ放題とな？おいおい、豪華絢爛な旅行ではないかね！

「ははは、そこまで言うなら仕方ない」

「智ちゃん、じゃあ!」

「二人で行つてこい。土産にうなぎパイだけは止めるよ」

「断る流れじゃなかったのにいゝゝ!」

そりゃ断るだろう。お前と信がなんの裏もなしに俺を誘うなんて怪し過ぎる。俺の隠していた事実を知つて、この二人が何もしないわけがない。というか絶対何かを仕組んでいる。あと、ウサギのように潤んだ瞳で見つめてくるのがとてつもなく胡散臭い。「あのな、いきなり過ぎるんだつての。なんなんだよ? お前等、何をしようとしているんだ?」

じつと唯笑の両目と真つ向から向かい合う。そんな俺から唯笑も一切目を逸らさずに……うん、逸らしてはいないが目を瞑りやがった。ていうか前進してきたあ!

「そおーいッ!!」

良い音がしそうなデコに一撃。

「むう、もうちよつとで奪えたのになあ」

「油断も隙もねえな!」

いつの間にこんなな遅しなく育つたんでしょねこの子は! 彩花さん、あなたの教育の所為でしてよ!

てへへと笑う唯笑に、仕方のない奴めと俺も自然と笑む。

「で、本当にどうしたんだよいきなり」

「……いきなり、かな？ そんなにおかしいかな？」

「某探偵漫画の黒い人影並みに犯人臭がする」

俺の突っ込みに唯笑はそうだねと、目を伏せて寂しさを滲ませて答える。

「だって、今だけ……なんだよね？ 智ちゃんと一緒に楽しい思い出が作れるの」

諦めにも似た声に、そういうことかと納得してしまう。

唯笑も信も俺の事を俺以上に知っている。俺が宣言したのなら、それは事実で他の誰かに曲げられるような脆弱な物ではないと。

「信君とあの後二人で話したんだ。どうしたら良いかなって……でも、智ちゃんがどんなに悩んで決めた事なのかって考えたら、唯笑達じゃ止められないもんね？ 唯笑達の知ってる智ちゃんはそのうお馬鹿さんだもん。だから、ね？ それなら目一杯智ちゃんとの時間を大切に満喫しようって決めたんだ」

過去を話してしまえば二人に余計な荷物を背負わせてしまうかもしれないと、余計な心配をしていたが、二人は無理に俺を止めるつもりはないのだろう。諦めることで俺の心の重しを少しだけ軽くしてくれようと……そんなとてつもなく身勝手な俺の願いを無条件で受け止めてくれる。

一昨日の事なだけに、二人はまだ心の整理が出来ていないんじゃないかと心配していたが、どうやら俺は二人を甘く見過ぎていたらしい。

「ほら、唯笑も来年は自由に時間が取れなくなるし、信君だってやりたい事があるみたいなんだ。だから、少して良いんだ。少して良いから、せめて智ちゃんと信君と唯笑で、いつもの唯笑達でいたいから……」

唯笑の声がこれ以上哀愁に濡れてしまわぬよう、俺は唯笑の頭を軽く叩いてやる。

まったく、本当にどうしようもねえな俺は。俺も彩花も唯笑の本気の我俣に一度も逆らえた事なんか無い。その我俣はあまりにも甘く優しい純粹さで出来ていて、笑い飛ばす事なんて出来ない。

「あく！クツソ、陵に休みの連絡するの面倒臭えく！」

「智ちゃん」

「言っておくが、今回だけだからな！ただでさえ低賃金で団交間際だったのに！」

「団交のメンバーに唯笑達は入れないでね？ありがとう智ちゃん。……やったよ信君（ボソツ）」

「あんだって？」

「なんでもないよ。旅行楽しもうね？」

「そうだな。そうと決まれば買い物に行かないとな！」

静岡に行くとなったら浜松だろ？ 浜松と言えば名物は一つしかない。

「か、買いい物？ 何か用意するものあつたっけ？」

「何を言つとるんだお前は！ 人が一人お持ち帰り出来るぐらいのでつかいバッグを買わねばなるまい！ 浜松名物といえは常識だろうが！」

「しようがないなあ、智ちゃんは……とか言つてくれる浜松の名物は売切れたつて知らないの智ちゃん？」

「……なん、だど？」

「売切切れ？ 馬鹿な！ 俺の情報網にそんなファツキンクライシスな情報なんてどこにも……！」

「あ、あつた。ほら、一人目が産まれたつて」

インスタに上がっている画像には、産まれたばかりの赤ん坊を抱いて幸せそうに微笑みながら涙を流す家族三人の姿があつた。

その画像に俺も号泣。

「ほんとに良かったねえ。奥さん左腕が動かなくてね、旦那さんが……つて、智ちゃん目から流血してるよ!？」

「かか、感動的だなあ！ ふはははは！ ちくしよー！ ちくしよー!!」

「笑うか怒るか嫉妬するか泣くかどれかにしてよ！」

「あく、この世全てのイケメンが憎い〜！」

「もう、ほんとにしようがないなあ、智ちゃんはある」

「お前がその台詞を汚すな〜〜〜!!!」

こうして、俺は名物がただ一人の物となつてしまつて品切れとなつた静岡へと旅行に行くこととなつた。ちくしょう、一生爆発してろ！里伽〇は仁の嫁！うわあくん！

「あのさ、なんだかんだ言つて、智也つて俺達に甘いよね」

「激甘だよ」

陽気な曲が流れる車中でそんな不本意な会話が交わされる。

「誘つておいて言いたい放題だな！誰が運転してると思つてんだ！」

唯笑はぺろつと舌を出し、信がそうじゃないかと口答えをする。

道中、快晴だつたおかげで富士山があまりに綺麗で、三人言語中枢をやられる不可解な動物のようなテンションだつたり、パーキングでは名産のお茶に舌鼓を打つたり、抹茶ソフトを食べさせ合つたり（戦争）していた俺達は、テンションが落ちる事もなく浜松へと突入。

「う〜な〜ぎ〜お〜いし、は〜ま〜ま〜つ〜♪」

「…………ふるさとの替え歌まで歌つてるんだけど」

「信君、貯金は？」

「破産の心配レベルかよ!？」

後部座席で財布を見ながら儂げにしている親友がバツクミラーに映る。お財布事情が深刻なのに俺との思い出が作りたいただなんて……へへ、泣かせるじゃないか。俺は良い親友を持ったなあ!

「唯笑、宿までの道の案内よろしくな」

「合点だよ。あ、その先のT字路を右だね」

それにしても楽しみだなあ。どこを向いてもうなぎの文字がでかどかど書かれたのぼりばかり。むふ、むふ。

想像したら涎が出てきた。ふつくらふわふわの身に、香ばしく芳しい皮、その店によつて味わいが違う秘伝のたれ……昇天しそうだ。

「うおっほおー!早く荷物置いて食べに行こうぜおい!」

「ゆ、唯笑ちゃん?お金を少しだけ貸してくれないかな?」

「十一で?」

「友情はプライスレスじゃないの!？」

ははは、あいつ等も楽しそうぞ何よりだ。信の顔が青褪めているが、車酔いか?

「ん〜?次はどつちに曲がれば良いんだ?」



「えっとねえ、ちよつと待つてて」

忙しくスマホへと視線を移し、ふんふんと頷いている。スマホのカーナビでも確認しているのだろう。

「もう少し行くと、赤い屋根の三浦商店っていう小さなお店があるんだって。そこを左に行つて……」

やけに高性能なカーナビだな。そんなに詳しく案内してくれるなんて。今の時代、スマホさえあれば迷子になる事もないんじゃないだろうか。

そうして唯笑の案内通りに道を進むのだが、どうしたことか温泉街どころか旅館もあるようには見えない住宅街へと入ってしまう。その証拠に、歩道には学校帰りの黄色い帽子をかぶった小学生が多数歩いている。

「な、なあ？ここ通学路じゃないか？この時間に車で通つて良いのか？」

「え？ちよつと待つてね……はい、はい。へえ、そうなんですな」

待つて待て、イヤホンをして会話つて、お前誰と話ているんだよ。旅館で働いているおばさんの知り合いだろうか？

「なんかね、この時間は一方通行で、今向かつてる方向は大丈夫みたい」

あゝ、時間帯で通れる道が変わるタイプの道路か。地元民じゃないと良く間違えて警察に止められるんだよな。事情が分かると見逃してくれる優しい警察官もいるんだけ

どな。

複雑な道を案内通りに進むと、閑静な住宅街の中に迷い込んでしまう。そこまで来て、さすがに俺も不安になり唯笑に間違っていないか問い詰めようとすると……

「あ、ここじやなかったっけ唯笑ちゃん？」

「おう、信君ナイス。良く覚えてたねえ」

「伊達に何度も遭難してないからね」

「そうなんだねえ」

クツソつままない会話にげんなりだ。信の場合海外での迷子で命の危機にあつてから笑えない。

「智ちゃん、そこの駐車場に停めてって」

「そこって……」

おもつくそ見知らぬマンションの駐車場なんだけど。勝手に停めて怒られないか？

「仲の良いご近所の方の駐車場に停めさせてくれるんだって」

「あ、ああ、そうなのか？ じゃねえ。旅館はどうした？」

「まあまあ、良いから良いから。シャツチョさんいらっしやうい」

やけに陽気な唯笑に首を傾げつつ、渋々車を停めて外へと出る。

後部座席から降りた二人が、一緒のタイミングで背伸びをして行こうかと軽やかな足

取りで駐車場を出ていく。

「おい、待てよ！お前等どこに行くんだよ！」

俺の慌てた問い掛けに二人が晴れ晴れと笑い……

『疲れを癒す場所だよ』

なんて堂々と言つてのけた。

疲れを癒すつて温泉か？こんな住宅街に温泉なんかあるのだろうか？それとも、地元民だけが知る名湯でもあるつていうのかよ。

迷わずに歩き続ける二人の後ろをついていくが、温泉どころかコンビニの影すらも見えない。こんなところに何があるつていうんだ。

「あつたあつた。智也、着いたぞ。ここがお前の疲れを癒すつておきの場所だ」

そうして信が足を止め、両手を広げて示す場所は、なんの変哲もない一軒家。

見渡せばいくらでも建っている沢山の一軒家の内の一つを、どうだとばかりに紹介される。

「どうだも何も、わけが——ッ!？」

不敵に笑う信の横、そこに目を向けた瞬間、目が見開き、足が縫い付けられ鼓動が止まる。

「し、ん……唯笑……お前等、これが目的か？」

「おお、怖い怖い。随分余裕がないじゃないか、双壁の片割れさん」

「その舐めた口を閉じろ。お前でも容赦しねえぞ。唯笑、自分が何をしようとしているのかわかってんのか？」

叱るなんて生易しい。叩きつけるような声を、あろうことか守るべき存在へと放つていた。唯笑と信を気遣う余裕はとつくに失われている。

「ごめんね智ちゃん……でも、智ちゃんの覚悟を挫くにはこれしかないんだよ。唯笑達じゃ駄目なら、智ちゃんを救えるのは過去だけだから」

唯笑の指がインターホンへと伸びる。最悪で卑劣な仕打ちに俺は憤り、伸ばされる唯笑の腕を止めようと足を進めようとした。蒔田と表札に文字が刻まれているその家は、俺が足を踏み入れる資格を持たない聖域なのだから。

しかし、止めようとした俺を視線で釘付けにする存在がその家の庭先にいた。

「三上君、いらつしやい」

「蒔田、さん」

蒔田淳さんの妹、蒔田透子さんが太陽に目を細めてそこにいた。

いらつしやい？彼女は何を言っているんだ。俺が足を踏み入れて良い場所じゃないだろ。知っているじゃないか、あなただけは。何があろうと俺は貴方達に一生顔を見せられない、それを許されない人間だって。

踵を返そうにも彼女の視線が俺から外れない限りこの金縛りは解けることがない。

む、りだ……俺はここにはいけない人間だ。信と唯笑が何を思つてこんな馬鹿な事をしてかしたのか知る気もないが、二人は知らないんだ。俺の存在がどれだけ蒔田さん一家を追い詰めたのか。俺が目の前にいるだけで、俺が生きているだけで彼等を追い込んでしまう。今のこの状況が証拠じゃないか。

先日、蒔田透子さんから多少の事情は聴いていた。蒔田さん達が県外に引越した事だけは。詳しい事は語つてはくれなかつたが、理由は想像に難くない。

あの事故の後、新聞記者やゴシップ誌の記者が何人も蒔田さん一家へと取材を試みたはずだ。実際、当時彼等が住んでいた家の写真や現場の写真が、心ない雑誌に大きく取り上げられていた。社会的にも、精神的にも、肉体的にも、彼等は俺の想像なんかじゃ補えないほどに誹謗中傷に晒されたはずだ。そして、その原因を作つたのは紛れもなく俺だ。蒔田さんを死に追いやる事がなければ、世間はあんなにも彼等に注目しなかつた。俺は、自分の手を直接下さないで彼等家族を粉々に踏みつけたんだ。

肌が泡立ち、小刻みに震える身体。あ、えない。会つてはいけない。これ以上俺は彼等を傷つけたくないッ!!

声もなく、金縛りを歯を食い縛つて解き、ゆっくりと背を向けようとした。

「逃がすか馬鹿」

だが、そんな俺の腕を決意を宿した瞳で力強く掴んで離さない手が一つ。

「——信ッ!!」

「彩花ちゃんの墓前でお前は俺を逃がさなかっただろ。なら、今度は俺が逃がさない」

それは、あの日俺が信へと送った皮肉であり思い遣り。

「放せ信!あの時と今じゃ違うんだ!お前と俺は違う!俺は——」

——ようやく、会うことが出来た——

信を振り解こうとする俺に落ち着いた男性の穏やかな声が掛けられ、全身から力が抜けて立ち尽くす。決して顔を上げずに。

「久しぶりだね、三上智也君。病院で一度だけ会った事があるのだけれど、君は覚えているだろうか?」

何を、言えば良いのだろうか? 忘れるはずがない。忘れて良い人達じゃない。いつだって貴方達は俺の心にいた。頭に浮かばない日はなく、毎晩毎晩繰り返される記憶の中にいつだっていたんだ。

俺の罪の象徴であるその人が声を掛けてくれている。何か、なんでもいい。答えなければいけない。だのに、喉はひりついて焼け爛れてしまいそうで、声を出そうにも出て

はくれない。口を開き掛け、何かに縫い留められてしまったかのようにすぐに閉口してしまう。

「お父さん、ここじゃなんだから上がってもらったら？」

上がってもらったら？何を彼女は……

「そうだね。透子もいつまでも庭にいないで中に入りなさい。せつかく帰ってきているんだ、ゆつくりしていればいいだろう」

「だって、三上君が来るんだもの。私がここにいなかったらきつと逃げてたわよ」

「おや、そんなのかい？」

きつと俺へと声を掛けているのだろう。首を振る事も出来ない俺の代わりに、その人に応えたのは信だった。

「まさか。俺が逃がさないから安心して下さい」

ぐつと、握られた手に力が加わり、もう片方の腕にも新たに俺の枷が増える。

「逃げるのはもうなしね、智ちゃん。五年も逃げ続けて飽きたでしょ？」

そうじゃない。そうじゃないんだよ唯笑。逃げるとか、逃げないとか、そんな問題じゃないんだ。

二人に手を引かれ、玄関へと連れていかれる。蒔田さん達に俺が逆らえるわけがない。この先、彼等にどれだけのナイフを突き立てられようと俺は耐えられる。そうじゃ

なきやおかしいんだから。

玄関を潜った二人の足が止まる。引き連れていた俺が岩のように動けなくなつてしまつたから。

「智ちゃん……」

だ、めだ。これ以上は進めない。俺は俺が誰よりも穢れていると知つている。蒔田さん達にとつて俺は猛毒であり、悪臭を放つ泥なんだ。入つてはいけない。彼等の家をこれ以上俺が汚してしまふわけにはいかない。

「ああゝつたく。智也！駄々を捏ねるのは幼稚園で卒業とけよな！せえゝのツ!!」

息を合わせて二人が俺を引つ張り、無理矢理中へと歩かされた。その際、ちよつとした段差に足を取られ転びそうになり、勝手に足が踏ん張ろうとした。そうして体勢が崩れてしまつた所為で、俺はついに目に入れてしまふ。顔を向けることが許されないその人の顔を。

「本当に仲が良いんだな君達は。大丈夫かい三上君？」

まだ、50代だというのに最初に目に入つたのはその髪だつた。どこを探しても黒はなく、灰を被つたかのように真っ白になつた髪。目尻の皺は何本も深く刻まれ、頬を瘦せこけて骨ばつてゐる。お世辞にも50代には見え、70代のようなその顔に心臓を締め上げられたかのような苦しさが襲つた。



老いを感じさせる穏やかな笑みに、ようやく声が出た。

「すみ、ま、せん」

「いやいや、気にしなくても良いよ。そう固くならずにながって上がって」

すみません。本当にすみません。あなたをそれほどまでに苦しませて……俺の口にしたすみませんはそういう意味だった。

居間に通されると、俺達を老いを感じさせながらも上品な声が出迎える。

その声に、俺は目を逸らさぬよう自分を叱咤して、声の主と向き合う。

「初めまして、で合っているかしら？こうして顔を合わせる機会は初めてですものね。あなたが三上智也くんね」

柔らかな視線は彼女の精一杯の心遣いなのだろう。旦那さんと以上にやせ細り、お茶の乗ったお盆を持つ手は病的にさえ思える様だった。その腕の細さを俺は何度も目にしている。あの手は……

(みなもちゃんと同じだ)

病を患ったのかもしれない。健常者の身体との違いが顕著に表れていた。

唇を噛み締め、口にしてはいけない言葉を飲み込んで、せめてもの気持ちをと目礼をする。

挨拶をしなければならぬのに、俺は何も口に出来ない。礼儀知らずな態度に気を悪くしないだろうかと心配になるが、俺の存在自体が彼等の害悪なんだ。余計な心配だろうと、無言を貫く。

そんな俺の失礼な態度にも関わらず、旦那さんは気に留める事もなく椅子に座るようにと促してくる。

「ふふふ、遠慮しないで座って下さい。お茶も用意してしまいましたし。さあ。稲穂さんと今坂さんも、先日はわざわざありがとうございます」

「いえいえ、自分の好きなように動いているだけです。あ、おはぎですか!?俺めっちゃ好きなんですよ!」

「もう信君はしやがないでつてば!あ、ごまおはぎもあるんですね!」

……先日?!

和やかに会話する面々に、そういうことかと拳を握る。余計な事をしてくれたものだ。誰の入れ知恵だよ。

「お母さん、私のごまおはぎは取っておいてよねえ。三上君は……こりやまた予想通りね」

苦笑する蒔田透子さんを尻目に、俺を置き去りにして団欒の空気が場を包む。

なるほど、な。つまり唯笑達は俺の与り知らぬところで蒔田一家と関係を持っていた

んだ。こんな事を入れ知恵しそうなのは……まあ、おばさんだよな。

一分、二分と時間がどんどん過ぎていく。その間、胃から込み上げそうな吐き気を我慢しながら、出されたお茶にも手を出せずに沈黙し続ける。

何も口に出来ない。声を出すことは許されない。出してしまえば俺は自分が最も恥ずべき言葉を口にしてしまうに違いなかった。

「三上君、突然の事で驚いただろう？」

俺を慮った言葉に俺は沈黙をもって答えた。

「実はね、君と会わせて欲しいと頼んだのは僕からなんだよ。だから、もしも君が彼等に憤りを感じているのなら、それは違うよ。本当なら僕が足を運ぶべきなんだが、情けない話でね。僕は君に会いに行く勇気が湧いてこなかったんだ」

予想もしていなかった言葉に思わず顔を上げてしまった。

「正直な事を言うと、先日までの僕は最低な人間だった。だが、彼等と話をした事でそんな自分に気付けたんだよ。だから、今の君の気持ちに僕には良くわかる」

なぜあなたが自分を卑下するんですか。貴方達が自分を最低だなんて思う必要はどこにもない。だからどうかお願いします。お願いしますから——

「君が何も語らないようにしているのは……」

この五年という月日の中で積もり積もった何もかもで俺を殺して下さい。

「謝罪の言葉を言いそうで怖いからじゃないかい？」

「——ッ」

どくと、心臓が跳ねる音が耳の奥に響く。

どう、して？と何もかも見透かしているかのような目に問いかける。

「謝罪の言葉を口にする事自体を君は卑怯と自分に言い聞かせて、少しでも肩の荷を降ろしてしまわないように歯を食い縛っている……違うかな？」

旦那さんの推測が正解だろうが間違っているところが、俺はその問い掛けに応える気はない。例えば見透かされてしまったとしても、それだけが俺の誠意の形と信じているから。

いつまでも沈黙を続ける俺に諦めたように笑い、彼は……

「それなら僕から、かな。三上君」

嫌な、とてつもなく嫌な予感が胸中に過る。それをさせてはいけないと咄嗟に動いた左手。だが、俺の愚鈍な手は彼の行動を阻止するにはあまりに遅すぎた。

「この五年間君を苦しめ続けてしまい、申し訳なかった。どうか許して欲しい」

「情けない大人でごめんなさい」

対面に座る二人が、自分の半分も生きていない子供に頭を下げている。俺が下げさせてしまった。

そんな二人を目前にし、ついに沈黙は破られてしまう。

「な、何しているんですか！止めて下さい！」

お願いではなく、懇願だった。なぜ被害者の二人が頭を下げているのか、なぜ俺はこんなに戸惑っているのか……頭の中が真っ白になり思わず二人へと手を伸ばしてしまっていた。

「いいや、止められないんだ。僕は本当に最低な人間なのだと思い知った。僕は君を恨むなんて大層なことが出来る人間じゃない。ぼくは、僕はね……」

続く言葉に俺は何も言えなくなってしまった。その言葉は俺が当然に受け取るはずの言葉なのに、その声は自責の念に満ちている物だった。

「君が自殺を凶つたと聞いて当然の報いだと心の中で嗤った……そんな小さな人間なんだ」

そうして語られたのは、俺の知らないたった一日の出来事だった。

「つまり君達はどう言いたいわけか？この五年の間、彼はずっと息子を忘れないまま苦しみ続け、この先も自分を罰し続けようとしてる、と……」

「はい」

目の前の少女、今坂唯笑さんという名前だったか、挫けぬ意思を目に宿して強く答える。

隣の青年、稲穂信くんもまったく同じ表情で頷いた。

透子がお客様を連れてくるというから何かと思えば、連れてきた二人は、私達家族を引き裂き粉々にしたあの忌々しい少年、三上智也の家族のような関係の二人。

今更彼の関係者が私達に何の用だと苛立ちそうになったが、透子に話を聞いてあげて欲しいと頼まれては断る事など出来なかつた。

三上智也、最愛の息子を死に追いやつた張本人。息子が自殺という最悪の形で人生を終えて以降、私達がどれだけ世間から疎ましい視線を浴びせられてきたか彼等には想像も出来まい。あの少年の顔を忘れたくても、いつだつて頭に汚れのようにこびりついている。思い出したくなくても、思い出すたびに煮えくり返る怒りが顔を覗かせた。

あの少年が苦しんでいる？結構な事じゃないか。息子の一生を奪つたのだ、一生を掛けて苦しみ続ける事が義務だろう。そんな事で息子は帰つてきたりはしないが、花向けにはなるだろう。

「なるほど。彼の現状はわかつたが、僕にだからどうしろと言うんだい？まさか彼を救う為に会つて欲しいとでも言うんじゃないだろうね？だとしたら冗談じゃない。なぜ僕がわざわざ敵とも言える相手を救わなければいけないんだ」

「それは違います！息子さんが亡くなつてしまったのは元を辿れば俺が原因の一端です！」

「君が居合わせた事はさつき聞いたよ。だが、君と息子が死んだことは無関係だ」  
「どうしてですか！あの事故で俺が彩花ちゃんを助けることが出来ていたら、智也も貴方達もこんな事にはなりませんでした！ですから、智也だけの責任じゃありません。その責任は俺にもあります！お願いします、少して構いません。あいつと、智也と会っては頂けませんか？」

「勝手な言い分だね。極論ですらない。僕には君がただ彼を庇っているようにしか見えないんだ。彼だけの責任じゃない、少しだけでも彼の罪を自分にも……不愉快極まりない。それに、彼が苦しんでいるだつて？私は彼の苦しんでいる姿を見た事もない。どのように彼は苦しんでいるんだい？心優しい君達のような友人に囲まれて、家族が隣にいて、どうして苦しんでいると？」

わざわざ浜松まで彼の為に足を運ぶ人達がいる。それがどれほど得難い友人かなんて言わなくてもわかる。彼らがいる限り三上智也は不幸になる事なんて……

「……自殺、しようと思いました」  
「なんだつて？」

口にするべきか迷っていたのか、か細い声が耳に届く。

「智ちゃん、あの事故の後すぐ自殺しようとしたんです。荒れた川に身を投げて」

彼女の言葉に衝撃を受けなかったと言えば嘘になる。だが、僕以上に動揺し、血の気

の引いた顔をしていたのは透子だった。

「それ、いつの事？」

「彩ちゃんの葬儀があつた次の日です」

口を抑え、透子は全身を震わせていた。葬儀の次の日？ 葬儀の日は確か透子が用事があるところからと出掛けた日ではなかったか？

ああ、今僕はどんな顔をしているのだろうか。透子のようにショックを受けている？ いいや、違う。自覚して口元を左手で隠した。とても人に見せられる表情ではないと確信があつた。

私達の様子に彼女は目を静かに伏せる。遠い日を思うかのように。

「智ちゃんを助けたのは私の母と、智ちゃんのお父さんでした。正直、智ちゃんが川に身を投げたと知って私は生きた心地がしませんでした。なぜ智ちゃんがそんな事をしたのか、恥ずかしながらい最近まで理由を知らなくて……それから一か月ほど、智ちゃんはずいぶん話をすることもなく、自分の部屋から一歩も外に出ないようになりました。でも、一か月後によくやくです。ようやく智ちゃんが泣いたんです。何も語らずに、静かに私に抱き着いて声も出さずに泣きました。智ちゃんが泣いたのはその一度だけで、今に至るまで涙一つ見せる事はありません。きつと、智ちゃんはその日が最後だったんです。本当の自分を曝け出すのはあの日だけで、それ以降は何百、何千と自分



を殺してきたのでしょうか。だからと言って、智ちゃんに同情して欲しいわけでも、許して欲しいと願うわけでもありません」

万感の想いが込め、彼女は揺らがぬ強さを身に纏ったまま頭を下げる。

「どのような形でも構いません。どうか智ちゃんと会っては頂けませんか？どんなに辛辣な言葉でも、それが少しでも智ちゃんを救う希望になるはずです」

その願いがどれだけ厚かましいか理解して尚逡巡もなく堂々と願いを口にする。こちらが気圧されてしまいそうで、知らず歯噛みしていた。

「……頭を下げてもらって申し訳ないが、帰って欲しい。そして、もう二度とこの家の敷居を跨ぐことは許さない」

「お父さん！」

「透子、お前が連れてきたんだ、二人を送って差し上げなさい」

これ以上話すことはないと立ち上がり、居間を後にしようとする、透子に腕を掴まれる。

「……ごめんね二人共。ちよつと外で待つてもらえる？少しお父さんと私だけで話をさせて」

透子の言葉に二人は目配せをして、失礼しますと言葉を残して出ていく。

二人が出ていくのを確認した後……

「お父さん、私が言えた事じゃないけど」

そう前置いて、透子は産まれてから初めて僕を睨みつける。

「お父さんに三上君を責める資格はどこにもないわ。もちろん、私にもよ」

「なにを」

突然の娘の反抗的な言葉に目を剥く。

「責める資格がない？じゃあ誰にその資格があるというんだ！彼は僕の家族を殺したいわば殺人犯だ！そんな人間をどうして責めるなど言うんだ！淳は、淳はあんな死に方をするために産まれてきたわけじゃないんだぞ！」

こんなに簡単な事がわからないわけじゃないだろう。誰よりも兄を慕っていた透子の言葉は気が狂っているとしたか思えなかった。

自分は間違っていない。間違えたのは三上智也だ。そう自分に言い聞かせる言葉はしかし、透子によって剥がされてしまう。

「お父さん、笑ったでしょ？三上君が自殺未遂をしたって聞いて笑ったよね？」

見られていた？いや、だからと言ってその何が悪い。当然じゃないか。淳が自殺をしてしまったんだ。ならば、同じように三上智也が苦しむ事に喜びを感じることがそんなに悪い事か？偽善だろう、そんなものは。

「気付かないの？そうやって憎しみで塗り潰して笑って！それじゃあ、あの日！病院で

お兄ちゃんに詰め寄った三上君と何も違わないじゃない！」

目に一杯涙を溜めて、透子が僕を責め立てる。

同じ、だと？僕が三上智也と？

「ううん、三上君のがもつとマシよ！自分の間違いに気付いて、この五年間お兄ちゃんを大切に、忘れないように彼は生きてきたもの！お父さん達だって本当は気付いているんですよ！なのに見えない振りをしてきたッ！私も！お父さん達も！向き合ってしまったら自分の間違いに気付くのが怖かったからッ！」

僕の胸を両手で押して引き離し、僕だけじゃなく自分自身を罰するように、厳しく辛い言葉を羅列していく。

「知っているでしょ！いつもいつも、私達がお兄ちゃんのお墓に行くとき雑草一つなくて綺麗なんだよ？誰が掃除してくれていると思う？この五年の間！どうして見ないの！いつも同じ花が絶対供えられているじゃない！わかってるから見ないようになっているでしょ！だから三周忌からその花を捨ててたんじゃないの!？」

「透子、黙りなさい」

「黙るのはお父さんよ！聞こえてたんでしょ!?!お兄ちゃんの事を忘れない、ずっと贖罪し続けます、ごめんなさいって！言葉にしないでずっと花に想いを込めてくれてたんだよ！私達は一度も松月さんのお墓に足を向けようともしないのに！どんなに怖くて、ど

んなに逃げ出したい気持ちで殺してきたか、お父さんだつてわかるでしょ！私達の気持ちを思って、顔を合わせないように一人で、たつた一人で三上君は償い続けているんだよ！私達が出来ない事を彼はしてきたの！私達より子供の彼がツ!!」

「——黙りなさいッ!!」

透子に向けて初めて僕は声を荒げてしまっていた。これ以上透子の言葉を聞いてしまえば、これまでの五年間が、苦難に満ちた日々が否定されてしまう気がして怖かった。僕の初めての怒声、だけど透子は怯むことはなかった。

「陽花里（ひかり）さん、お兄ちゃんが亡くなつて二年も経たずに他の人と付き合つてた。私ね、どうして？つて陽花里さんに詰め寄つたんだ。そしたらね、ごめんなさいつて謝るばかりで理由を話してくれなくて……でもね、今ならわかるよ。過去は大事だよ。大切に忘れちゃいけない事ばかり。でもさ、過去だけを大切にしたら生きていけないんだよ。だって、それつて現在（いま）も未来もどうでも良いつて捨ててるのと一緒だもん。だから、私達は全部を大事にしていくの。それが生きるつて事でしょ？なのに、いつまでお父さんも三上君も死んだように生きていかなきゃいけないの？お父さんは、倍以上に年下の三上君にそんな事を強要しているんだよ？それを喜んでるんだよ？お父さんだつて、これまでの私だつて三上君を殺してきた立派な殺人犯じゃない！」

声を詰まらせて透子は泣き崩れる。そんな娘の肩に手を置こうとしたが、僕の手は情

けない程に震えていて、娘を慰めるにはあまりに弱々しい手だった。

震える手を握り、目を瞑る。

じゃあ、じゃあどうすれば良かったというのか。僕は淳を守りたかったただだけだ。それだけなのに、それを間違いだと透子に否定され、しかもこんなに動揺してしまうほどに言葉が突き刺さっている。

間違えたと言うのならどこで間違えた？

過去の記憶を掘り起こそうとすると、いつだつてあの日の、あの霊安室での光景が浮かんでしまう。

あの時、あの少年が淳に詰め寄った時、僕は何を感じていた？理不尽な言葉をぶつける少年への憤り？違う。そうじゃない。大切な愛娘を失わせてしまった事に対する罪悪感で一杯で、淳を守るとか、少年を憎むとか、そんな感情なんて湧いてこなかった。

そう、僕はあの時点では少年を恨んでいなかった。それどころか、この先の心配ばかりしていた。遺族の方にどのように償えばいいか、刑事罰は適応されるのか、息子の将来はどうなるとか、そんなリスク回避の下らない事ばかりが頭にあった。そんな汚い大人の思考ばかりだったんだ。

記憶を掘り起こしながら、はっとして額に手を置いた。

そう、だ。僕は少年をあの時まで恨んでなんていなかった。ただ、今後どうすれば世

間から家族を守れるかばかりで、松月さん達の事なんて頭から消えていた。そんな曇った目で過ごして……だから、か？だから淳の様子がおかしい事にも気づかないで……

「あ……あ、ああ……」

三上君の家族は三上君を救えたのは、世間や常識よりも彼の事を本当の意味で大切に想っていたからだ。だから間に合った。それに引き換え、僕は息子が精神的に限界まで追い込まれているのを知っていたのに、それなのに向き合おうとしていなかった。救えたはずの息子を、僕は……

「情けない親だろうか？君に罪を押し付けて、親としての責務を放棄していた事から目を逸らしていたんだ。それどころか、松月さんに花を添える事もしないで……恥知らずにも程がある」

ち、がう。こんな想いをさせる為に俺は蒔田さんに花を手向けていたわけじゃない。

唯笑と信を睨む。

「お願い、します。頭を上げて下さい。間違つて、ませんから……俺は、殺人、犯で……貴方達の大切な息子さんを、俺が殺してしまつて……」

どうしてだ。なんでこんなことになっている。まるで罪のない彼等がどうして頭を下げているんだ。

被害者は貴方達で加害者が俺で、頭を下げようにも俺にそんな資格はないと戒めていた。それなのにどうして！

一度口を開いてしまえば、もう止まらないと知っていた……許しを請う事なんて贅沢は許されないと。

「――申し訳、ありませんッ」

膝から崩れ落ち、床に手をついて頭を低く、許しを請わず、願わず、俺は頭を下げるしかなかった。そうすることでは、蒔田さん達の謝罪を止めることが出来ない自分が悔しくて仕方ない。

「俺は、彩花の両親の居場所も、蒔田さん達の家族の時間も、場所も、なによりも大切な息子さんを失わせてしまいましたッ。浅慮な子供が身勝手に、衝動に任せてみんなを苦しめてッ」

こんな俺なんかの謝罪に価値はない。それでも、最低だとしても伝えなければ。

「本当は、貴方達に顔を向けられるような人間ではありませんが、せめてこれまでの時間の謝罪をさせて下さい。あの日の自分の恥ずべき言葉と、これまでの五年という短くない時間、息子さんを僕の所為で失わせてしまい、続いていくはずだった家族の幸せな時間を壊してしまった事……申し訳、ありませんでした」

感情を殺して本音を口にする。そうでもしないと、俺は誓いを破ってしまう。せめて

蒔田さん達の前では堪えなければいけない。

「三上君、顔を上げてはくれないかな？」

掛けられた優しい言葉に、俺は首を振って拒否する。こんな程度じゃ償えないとしても、それでも一度頭を下げたのならこの程度の謝罪では、蒔田さん達が苦しんだ時間の償いさえ出来ていない。

「はあくあ！三上君、起立！」

容赦ない言葉に俺は顔を上げると、蒔田透子さんが人差し指をくいくいと曲げて立てと示す。

「いや、でも……」

「ぐだぐだ言わない！立ちなさい！直立不動！」

「……はい」

何をしようというのか、わけもわからず立ち上がると……

「いつまでもめそめそと——」

「透子！止めなさい！」

「透子ちゃん、止めてッ！」

振りかぶる腕、固く握った拳が振り下ろされるのがやけに遅く感じた。

止めようと立ち上がる。両親に構わず、これまでの苦痛な時間の十分の一でも込めら



れているかのような拳が、俺の頬を捉えた。

目を逸らさぬよう、力を込めて立っていたおかげか、尻もちをつくという無様は避けられたが……

ぼた、ぼた……

「と、智ちゃん鼻から血が出てるよ！」

「うはあく、猛烈〜」

俺を支えようとする唯笑を手で止めて、これ以上床を汚してしまわないように鼻を押さえる。

「透子ちゃん謝りなさいッ！なんて事をするのッ！」

「うるさいなあ！みんなで頭下げて、自分が悪い自分が悪いって馬鹿じゃないの？そんな事の為に呼んだわけじゃないんでしょ？」

諫めようとするお母さんを逆に叱り、彼女は清々したかのように歯を見せて笑った。

「てことで、これでチャラよチャラ。どう？これで気が済んだでしょ。ていうか済め」  
そんな彼女の様子に笑い声をあげる馬鹿が二人。

「あは、あははは！透子さん格好いい！」

「智也を殴り飛ばすとか、男前ってか女前ですなあ！」

「でしょ？良い三上君。今のは病院での君の言葉への本当の意味での罰よ。言っておく

けど、これ以上の罰は用意出来ないんだから、これで満足してよね。それとお父さん、言いたい事が他にもあるんじゃないの？」

透子さんの行動に面食らっていたお父さんが、ああと頷く。よほど驚愕していたのか、少しばかり放心していた様子だ。

「三上君、僕が言いたかったことはあと二つあるんだ。一つは、身勝手で難しい願いなのだけれど、どうか聞いて欲しい」

お父さんがゆっくりと俺との距離を詰めて、皺枯れて力を感じさせない……でも、しっかりとした温もりを感じさせる手で、俺の両手をぎゅつと掴んでくれる。

「この先も息子の、淳の事を忘れないでやってくれ。もちろん、償ってほしいとかそういうわけじゃないんだ。絶対ではないが、おそらく君の方が僕達よりも長く生きるだろう。僕達が人生を終えた時、淳を偲んでやれるのが透子だけじゃあ可哀想だね。君には辛い頼みだが、どうか聞き届けて欲しい。そして、忘れないまま、今度は自分の人生を生きて欲しい。償いに費やした君の時間は、五年の内に何十年分の贖罪が詰め込まれていたのだから……君が自分を責めて前を向けない人生を歩むなんて事は、それだけは絶対にしてはいけない。これ以上、僕達を加害者にしないでくれないうか」

これ以上私達を加害者にしないでと、以前陵に透子さんが言った言葉……その真意を実感する。

な、んだよそれ。俺が幸せになってもいいと言うのか？息子の仇を前に、こんなにも穏やかな温もりを見せるなんて……

「どうかনা？」

こんなの、どうしたって断れない。こんな優しさを見せられて、どうして無下に拒否できるだろう。

「すぐ、には無理かもしれませんが、頑張つて、みます。それ……蒔田淳さん、の事を忘れるなんて、俺には出来ません」

俺の答えに、ほんの少し寂しさを滲ませた笑顔で頷き、そしてもう一つと言って俺から離れ、お父さんだけじゃなく、お母さんまでもが一緒に俺へ……いや、俺達三人へと頭を下げる。

「次の松月彩花さんの命日に、花を添えに行かせてくれないかな？お願いします」

「今まで、貴方が淳に捧げてくれた気持ちと同じように、私達にも彼女に謝らせて欲しいのだけれど……駄目かしら？」

なんてささやかで、胸が詰まるお願いなのだろう。二人の真摯な気持ちに、俺も真摯に応えなければいけない。

頭を下げる二人の隣では、透子さんが場を和らげるためか両手を合わせてお願いしている。なんだよこれ……こんなのってねえよ。

「むしろ、こちらから頭を下げてください。是非、彩花と会ってやって下さい」

蒔田さん達が会いに来たら、あいつはあたふたと慌てて、泣きながら逆に頭を下げるんだらうな。想像すると、少しだけ笑えた。

「ありがとう」

「いえ、その代わりと言ってはあれですが……俺からも一つだけお願いがあります」

「なんだい？」

蒔田さん達が誠意を見せてくれたのに、俺がそれに背く事なんて出来ない。二人の目を今度こそ真つ直ぐに見つめ……

「蒔田淳さんにお線香を上げさせて頂いてもよろしいでしょうか。お願いします」

ただ純粋に蒔田淳さんを偲び、深く頭を下げた。

砂浜を歩きながら夕日に染まる幻想的な景色を眺める。弁天島海浜公園は地元でも有名という事でやってきたのだが、確かにこれは溜息を吐いてしまうほどに綺麗で、いつまでも見ていたい気持ちにさせられる。

「ねえ信君！海に入ろうよ！」

「なんの罰ゲームだよ！風邪引くから駄目だつて！」

本当に海に入ろうとする唯笑ちゃんを止める。テンションが上がり過ぎでしょ。

後ろを見ると、智也はずっと黙ったまま着いてくる。あいつの胸中にある物を俺達はきつとこの先も知る事は出来ないかもしれない。でも、全部は共有できなくても、その一部だけなら持たせて欲しい。いいや、持たせて欲しいじゃないな。無理矢理搔つ攫つてやる。今日のように、さ。

「智ちゃん！智ちゃんは海に入るよね〜！」

「入らせないから！唯笑ちゃん達が入ったら俺まで入る流れになるから！」

唯笑ちゃんの声にもなんの反応も示さない。車内でもずっと黙ったままだったしな……これはマジで俺達に怒っている可能性が高い。

そもそも、どういう繋がりなのかは探らなかつたけど、透子さんの連絡先を唯笑ちゃんのお母さんが知っていて、あとは俺達の好きにしろってぶん投げてきたのが原因なんだよなあ。俺達じゃ無理なら、当事者同士を引き合わせりやなんとかなんじやね？とか言つて。理屈は間違つてないんだけど、基本適当なんだよ。杜撰どころの計画じゃない。一步間違えば智也は再起不能だったんだ。なのに、なんとかなるとか暴論振りかざして、酔つ払つて俺と一蹴にあんなことをし始めるし……何があつたかは社外秘。

「唯笑ちゃん、これ謝つた方が良くないか？」

「どして？」

「どしてって、完璧怒ってるでしょあれ」

蒔田さん達と話している時、何度か智也と目が合ったが、ぶつちやけ殺されるかもしれないと感じるような眼で睨んで来たし。智也としては、あの人達に頭を下げさせる事も、自分の所為で追い詰めてしまう事も絶対にしてはいけない事だったんだ。荒療治とはいえ、さすがに勝ち過ぎた感は否めない。

やきもきしていると、唯笑ちゃんはんくと、唇の舌に指を当ててにへらとだらしく笑った。

「あのね信君、あれは怒ってるんじゃないやなくて、多分ねえ〜って智ちゃんツ?!」

「は? 智也がどう——どわあツ!!」

突然背中に衝撃を受けて、俺は間拔けな声を出しながら、唯笑ちゃんはいやつほくと笑いながら……そして智也の表情は見えないまま三人は、肌に刺さるような冷たさの海へとダイブ。

予期しない事態に俺は驚き、唯笑ちゃんは「あく、やつぱり!」と呑気に発しながら智也の抱擁に嬉しそうに抱き着く。

智也の両腕に俺達はロツクされたまま、唯笑ちゃんと俺は背中から、智也は正面から海水浴。なんにも楽しくない! 海水が痛いんだけど! ……いや、外の気温が低い所為か、ちよつとあつたかいかも。じゃねえよ!

「お前、いきなり何すんだよ智也! それとも仕返しがこれか!」

死なば諸共と怒りを放出したんだな！そうに違いない！こんな真冬に何が悲しくて海に入んなきやいけないんだ！

あ、駄目だこれ。完全にスニーカーもジャケツトもアウターもご臨終だ。高かったのに……高い代償だなあ！クソ！

「違うよ信君、智ちゃんはね……」

唯笑ちゃんがしようがないなあと微笑みながら、智也の背中をぽんぽんと優しく叩いている。

「ようやく帰ってきたんだよ。だって、久しぶりに見たもん。智ちゃんが泣き出す前兆」  
この上ない歓びを唯笑ちゃんは抱き締めている。そう、なんだな。唯笑ちゃんはだからあんなにも上機嫌だったんだ。俺の知らない本当の智也、唯笑ちゃんが知っている大切な家族……ようやく、五年もの日々を家出していた不良息子が帰ってきたんだ。

「う、あ……ああ……俺、俺えッ！」

波を被った頬から流れる雫は、海へと溶けて消えていく。  
長かった。こんなにも長い間独りにさせてしまっていたんだ。

誰にも気づかれないう、誰も傷つけないよう、孤独が智也の精神をどんなに蝕んできたのだろうか。助けを求めず、救いを拒絶して、誰も彼もの傷を自分の中だけで抱えて……

そんなどうしようもない孤独が、涙と海水が混じった雫に込められている。その雫が俺と唯笑ちゃんを濡らす。

今日、この日、智也は帰ってきたんだ。涙を、自分を諦めずに殺し続けた三上智也が、俺達の求めた智也が目の前にいる。

「ば、か……やろ……五年も意地張りやがってッ……」  
「う、せ……う、く……あッ……」

智也の鼓動が俺達と重なる。

ようやく共有出来た想いに、とうとう三人同じ顔。

智也の五年は絶望だけが救いで、それ以外の何も目に映っていなかった。唯一彩花ちゃんだけなんだろう、本当の智也に寄り添う事が許されていたのは。

ここにいない愛する人を抛り所に、智也はいつ力尽きても仕方ない時間を生きてきた。だけど、そんな危ない橋をもう渡らせたりなんてしない。そこに向かつて歩こうものなら俺はこいつをどんな手を使ってでも止めてやる。誰を傷つけたとしても、こいつと唯笑ちゃんを俺は絶対に手放さない。

雨の中にいるこいつに、もう傘なんか差そうとなんてしない。傘なんか放り投げて雨の中駆け出してやる。馬鹿みたいに笑って、気持ちいいって叫んで、こいつと肩を組んでやるんだ。それでいい、それがいい。



「もうツ、絶対ツ！独りになんかさせないからな！覚悟しとけよ馬鹿ツ!!」  
 「何があつてもずくずくツと一緒だからね！四人一緒だよ！」

「う、はあツ……あ、あ……そ、だなあツ……そう、うつく、うあ……」

三人鼻水垂れ流して、泣いて笑つて……傍から見たらとんでもなく気が狂っているように見えるんだろうな。

唯笑ちゃんと目が合い頷き合う。俺達が掛けるべき相応しい言葉を、大きく息を吸い込み――

「おかえり智ちゃんツ!!!」 「おかえり智也ツ!!!」

「――ただいまツ!!!」

お腹を空かせて帰ってきた不良息子を、ありつたけのおかえりの気持ちを入れて二人で抱き締めて迎える。

この先、四人が別たれる事なんてない。四人じゃなければ、それは独りと同義なのだから。どこにしようかと、俺達はもう大丈夫。重なる鼓動がその証明だ。

さあ始めよう。ここからが智也の、俺達の本当の始まり。

四人の歓びも悲しみも、今日この日、この瞬間から始まったんだ――

## 彼女のバースデイ、彼女の一人恋愛

「はい、というわけで大掃除を始めようと思う」

ほとんど物が置かれていない広いリビングで、久しぶりに気合を入れて掃除をしようと三上さんは息まき、白いエプロンと頭巾、それにマスクを着用した三人。私と今坂さん、それに三上さんだ。

三上さんと今坂さんはよおしとテンション高めなのだが、私は意味が解らず首を捻る。

「え、これどういう状況ですか？」

「だから言っただろ、大掃除だって」

「……聞いてません。聞いてないんですよこんなの」

今日は12月15日の土曜日。普段なら家庭教師の時間まで寝ているのだけれど、朝にいきなり三上さんに電話で叩き起こされて、今日は午前中からだからと問答無用で呼び出された。

のこのこと従ってしまった私が馬鹿なのだけれど、それにしてもこの仕打ちはないのではないかと。

この間の三上さんの問題以降、どこか吹っ切れたかのような三上さんは、どこか以前とは違っていて、無理に作ったような笑顔は鳴りを潜めていた。その事はとても嬉しいですし、三上さんもようやく自分の事を真剣に考えられるんだなど感極まりもしました。もしかしたら、私にもう少し優しさをくれるのではとも期待しなかつたわけでもない。その矢先に起きたのがこれですよ。

三上さんの家に着いた途端、お前舐めてんのか？ユニフォームに早く着替えろと、お掃除コスチュームだなんだと手渡され、着替え終えてみれば行くぞと三上さんの家を出て隣へ。隣の家の前では今坂さんが万全の服装で待っていて、わけもわからぬままに今坂さんが持っていた鍵で隣の家へと上がる。まあ、松月さんの家ですね。そうしたらいきなりの大掃除宣言。もうわけがわかりません。

「いやな、実は今日は彩花の誕生日なんだよ」

「それで？」

「それだけだが？」

よし帰ろう。

回れ右をして帰ろうとすると、今坂さんに止められてしまう。

「いのりちゃん待って！智ちゃんはこの前の事でお礼をしたくていのりちゃんを呼んだんだよ」

「この状況のどこを見てお礼だと？節穴ですか」

「そうじゃなくてね、いのりちゃん達にも楽しんでもらおうって、大掃除の後は全部、唯笑達持ちでパーティーを用意していてね。信君は夕方からしか来れないんだけど、三人で二人にお礼がしたいねって話し合ったの」

そんな殊勝な心掛けを持っているのだろうか？でも素直じゃない人ですし、口や態度とは裏腹に本当に感謝の心を持っているのかも。

ちらりと三上さんへと視線を移すと、アメリカカン人のように舌を出して白目を剥き、中指を立ててH A H A H A！と凶悪に笑っていた。

「今坂さん、あの人の目を抉る傘を下さい。大至急」

「と、智ちゃんなりの照れ隠しなんだよお〜！智ちゃんいい加減にしてー！」

今坂さんに叱られ、ふんと鼻を鳴らしてそっぽを向く。なるほど、これが素の三上智也さんですか。私の堪忍袋の破壊工作員ですね。良い大人が小学生のような態度を取ると、こんなにも腹立たしいだなんて。

「つうかよお、小僧も連れて来いって言ったよな？」

そんな世迷言もほざきなさっていた気がする。

「無理ですよ。一蹴はもうすぐ就職活動でならずやを辞めないといけませんから、働ける時間がある時はなるべくは出るそうです。なので、夜に合流することです。それ

に、同僚の野々原さんも辞めるそうですし」

野々原さんの名前に今坂さんはのんちやんが？と渾名を口にし、三上さんまでもがのんが？と親し気に呼んだ。

「あれ、知り合いなんですか？」

「うん。中学の同級生なんだけどね、唯笑はあまり話したことがないというか、のんちやんと一番仲が良かったのが智ちやんなんだよ」

「そうかあ？黒須と花祭のが仲が良かったろ」

「そりゃあ、あの三人は仲が良かったけど、いっつも休み時間にのんちやんが智ちやんのところに来てたじゃん」

中学の同級生という事には驚きはないけれど、まさか三上さんと仲が良かったなんて知らなかった。一蹴も私も彼女の会話についていけない……ああ、なんとなく読めてしまいました。

「のんちやんと智ちやんの会話を聞いてると食欲がなくなるって皆言ってたもん」

「やっぱり」

「やっぱりってなんだ小娘」

「つまり、異次元的な会話を繰り広げていたわけですね」

「お前、そののんにも失礼だからな。何もおかしな会話なんかしてねえよ。普通に挨拶

して、昨日何してたとか、さっきの授業がどうだったとか、普通の話しかしてない」

本当かどうかを確認するため今坂さんに目を向けると、ないないと手を振っている。

そうですね、では確かめてみましょう。

「じゃあ、試しにどんな話をしていいのか忠実に再現して見て下さい。三、二、一、はい」

『トモりん、トモりん、あのね夜が来て朝が来てね、その当たり前の事象が不変である確率はね、実は奇跡的な確率なんだってね、のんは気付いちやっただ』

『つまり夜と朝は世界の終わりなんだな、特異点なんだな。その瞬間の奇跡の中俺達はあるんだよな。ところでのん、俺達がいるこの空間が幻ではないと証明するためには、まずカメレオンとマブダチにならないといけないんだが、どうしたら俺はそこに辿り着けると思う？』

『でもね、それだとオウムとにやんことも友達になるべきだよな。歩いてたらね、ビビビって周波数が合ったんだよ』

『学校じゃあの周波数はないんだよな。まずは小さな世界二つ分の存在を確定させないとうどうにもならないしな』

『そうだよね！トモりんはいつもそこにいるためには、次元の高低を安定させないといけないもんね。みんなの笑顔はそこにあるんだね』

『ああ、そうだ。おけらだつてアメンボだつて——』

「もういいです」

胃が逆さまになってしまったかのような、それとも脳が波の中を揺蕩っているような不思議な感覚に見舞われて、額を抑えながら三上さんにストップをかける。

「全然意味が通じないんですけど、本当に地球の言葉ですか？」

「お前こそ頭大丈夫か？」

「……二重に突っ込みたいですが、どういう内容の会話なんですか今の」

「どういふもなにも、そのままだろ」

「浅学な私にわかるようにお願いします」

三上さんは私の態度に気をよくしたのか、腕を組んで得意気に答える。ただ単に、気持ち悪くなってプライドとかどうでも良くなったただけですけどね。

「仕方ねえなあ。この三上智也様が、貴様みたいなミトコンドリアのような知能しか持たない微生物にもわかるよう、丁寧に教えてやろうじゃないか」

「……………」

「い、いのりちゃん落ち着いて。気持ちはわかるけど、その窓ふきスプレーとライターは本気で怖いからやめようね」

いつの間にか凶器を持っていた私の手から、今坂さんが慌てて凶器を取り上げる。無意識に私はなんてことを！

「今の会話は訳すところなる」

『三上君おはよう！今日は珍しくすんなり起きられたんだよ』

『俺は眠り足りん。なんで学校なんかに来なければいけないのか、布団の中で一日中寝ることが正義だ。寝る子は良く育つて言うだろ？つまり寝ることが正しいんだと世界が認めてるんだよ』

『凄い理論だね。でも、のんは三上君と話したいからなるべく休まないで欲しいかな』

『お前友達少ねえもんなあ〜！愛い奴め！がはは！』

『それよりも、さっきの授業中に先生の怒鳴り声が聞こえたけどどうしたの？』

『いやな、数学の林田いるだろ？あいつが平等に——』

「となるんだが、どうしたげんなりした顔して」

「いえ、野々原さんと三上さんがいれば、世界中の女性はダイエットに成功するんだろかなと思ひまして」

「ならずやでのんちゃんがいると、尻尾を振って出迎えてくれる子犬みたいに智ちゃん



のところにくるもんね」

「あいつの友達なんて五本の指で足りるかどうかの数しかいねえからな。その所為だろ」

「でも、バレンタインにチョコレート貰ってたじゃんか」

「あん？あれは日頃の礼らしいぞ。なんなら、その時のあいつと俺の会話も「本気で止めて下さい！」ガチで泣きそうになりながら止めるなよ！」

これ以上私の脳みそを掻き乱さないで下さい！聞いた私が馬鹿でした！なんの拷問ですかこれは！

頭を抱え蹲る私に、今坂さんが小声で話し掛けてくる。

「黒ちゃんと言ってたんだけど、智ちゃんのんちゃんの初恋だったらしいんだ」

「でしようね」

恋愛観がまったく成長の見込みがない三上さんが気付いていたとは思えませんが、好意を持たない相手に休み時間の度に会いに行くなんてしませんし。松月さんは大変苦労なさったのでしようね、このお子ちゃまに。

「……？」

「どうしました？」

「いや、誰かに馬鹿にされたような気がしたんだが気のせいかな」

「こういうところだけ化け物染みた鋭さを持つているんですね。ある意味持つてますねこの人。」

「与太話はこの辺で良いだろう。とつとと掃除を始めるぞ」

「何を当たり前のように巻き込もうとしているんですか」

「ああ、彩花の両親は夕方頃に来るらしいから、それまでにある程度は終わらせるぞ。おばさんや親父がまともにも掃除してるとも思えんし、水道も通つてないから、うちまでバケツに水を汲んで来ないといけないな。おら！ハリーハリーハリー！ポッター」

「私の反論を無視しないで下さい！それと下らない冗談を言うの止めて下さいね。しかも自信なさげに小声で。中途半端なギャグは不快なだけです」

「強引なことじゃなくて、智ちゃんギャグへの批判の方が強烈だね」

自分でも駄目だった事は自覚しているらしく、若干肩を落として、今のは俺だつて無理だつてわかつてたとかぶつぶつ言いながら、自分の家まで水を汲みにとぼとぼと歩いて行った。すべつた時の落ち込み方がプロ意識を持つているようで、何様なんだろうと口元が緩んでしまう。

「どうしよう、唯笑胃が痛くなつてきたよ」

冷笑を浮かべる私を見て、今坂さんは胃を押さえた。

「じゃあ、お前はここな」

了承もしていないのに、当たり前のように連れて来られたのはトイレだった。やりますけどね、ええ。でも普通はトイレは男性の担当区域じゃないです？

不満そうな私に気付いたのか、三上さんは頭を掻きながら面倒そうに口を開く。

「あのな、俺は玄関と台所と客室やるし、唯笑は二階全般担当なんだよ。リビングは少しばかり手伝ってもらうが、その、なんだ。無理に手伝わせちまつてるし、スペースが狭い方が、あれだ、疲れないかもとか思わないでもない感じでだな」

……そっか。ちゃんと私の事も考えての事だったんですね。

「だから、ちよつと手伝ってもらえば夜まで勉強でも休んでいても、だな」

普通に考えたら二人で掃除をするには広すぎるから、本来は稲穂さんが手伝うはずだったのを、渋々私に頼むことになったのでしょう。それならそうと素直に言えば良いのに、余計な事ばかり言って、態度だけで本音を示すなんて……ほんと、私の先生は面倒な性格の人ですね。

「別に嫌だなんて言ってますよ。その代わり、夜のパーティーは期待していますからね」

人差し指を三上さんの胸に向けて悪戯に笑う。すると三上さんも人好きのする笑顔で応えてくれる。

「お、おう。もちろん俺様達が今世紀最大の宴……を？」

「三上さん？」

見ていて嬉しくなるような笑顔が突如としてフリーズしてしまふ。冷凍されたマグロのような三上さんは、そのまま健闘を祈るといふ言葉を残し、私にゴム手袋を渡して扉を閉めた。

なんだろう？私、気に障る事しちゃったかな？

思い返してみても、三上さんの機嫌を損ねるような言葉を口にしていないはずと首を捻る。

「まあ、いつかな」

事の真相は後で三上さんに確かめましょう。

ゴム手袋を両手に装着して、よしと便器へと振り返ると――

「きゃあああああああああッ——!!!」

トイレの中から陵の闇を切り裂くかのような悲鳴。その悲鳴に耳を塞ぎ、俺は目を閉じて首を振る。

すまない、陵。仕方なかったんだ。俺はお前を……クソツ!!俺にもつと力があればお

前を救えたはずなのに！俺にとつて初めての生徒を俺は！

ガチャガチャガチャガチャッ!!!

「あ、開かない!?三上さん！扉の前にいますよね三上さん!!」

縋るような陵の聲が、耳を塞ぐ手のひらを超えて伝わる。

「ごめんな、ごめんな陵！」

「謝るくらいなら開けて下さいッ!!ていうか全体重で閉めてますよね?」

「違うんだ陵！扉の鍵が壊れちまつたんだよ！」

「嘘つかないでって、いやあああああッ!!見えます！こっち見えます！開けて下さい

三上さん！」

「大丈夫か陵！クソッ！開けよこのやろお！」

「開ける振りの茶番はいりませんッ!!」

ドンドンドンッ!!!

チツ、こいつドアを蹴り破ろうとしてやがる！やらせるかッ！

「お前、彩花の家を壊す気か！器物破損だぞ馬鹿！」

「うるさい出しなさい！なんかおかしいなって思ったら！アレを見つけたからだっただ

ですわね！」

アレってどこのカマドウマさんですかね。もしかするとあれかな？便器の横の壁に

スマートに立っていた彼かな？中忍試験の為に壁に足を付けてへばりつく練習をしていたのだろう。

ていうか陵のSUN値が危険域だな。言葉がもう丁寧じゃなくなってきた。ちよつと面白いのもう少しこのままでお送りします。

「ひやう！きました！近づいてきましたあッ!!さき、殺虫剤はどこですかあ！」

「こんな真冬にあるわけなからう！まさかこんな真冬に彼が健在と思わなかったんだ！」

注、室内では冬でもカマドウマは普通に生きている事があるから気を付けろ。

「はっはっはっ！お前の毒舌で毒殺すれば良からう！」

「下らない事言つてないで開けなさいッ!!!」

下らない事とは心外な。では、有益な情報を与えようではないか。

「陵く！カマちゃん肉食で、壁を蹴つて三角飛びをするほどの運動神経の持ち主だつてしつてたかあ〜!?!」

「あの禍々しいフォルムでさえ有害なのに!?!なんて知らない情報を！て、飛びました！飛びましたよ！」

わかるぞ陵。本能があいつを怖れるんだよなあ。なんだよあの脚と触覚。不気味な凶器にしか見えねえもん。そんな彼を野に放つわけにはいくまい。

「出して！一刻も早く出してえ〜〜!!!!」

「ふははは！泣け、喚け、叫べ！そして死ぬふあッ!?」

名言を気持ちよく高らかに叫ぼうとした俺を、騒ぎを聞きつけた唯笑がはたきで遠慮なく打ち付けてきた。

「もううるさいよ二人共！ふざけてないで掃除をしてよ！」

唯笑の声が中にも聞こえたらしく、陵は恥も外聞もなく唯笑に助けを求めた。

「今坂さん開けて！助けて下さい！カマドウマが、大きいカマドウマがあーう、うう、ふえ……」

後頭部を押さえて蹲る俺を、ジト目で唯笑が見下ろしてくる。

「智ちゃん、虐めはよくないよ」

「虐めじゃないんだ唯笑！獅子は子を千尋の谷に突き落とすとぐあッ?!?!」

ま、また叩いた！親父にも三日に一回しか打たれたことないのに！

「しょうがないなあ、もお」

無言で俺を成敗しながら、唯笑はトイレの扉を開ける。すると中から勢いよく脇目も振らずに陵は唯笑に抱き着いた。涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔で。

「い、今坂、さん」

「はいはい、怖かったねえいのりちゃん。もう大丈夫だからね」

小さな子供をあやす様に優しく抱き締め、ちよつと待つてねと陵と俺を残してトイレの中へ。そんな唯笑をずびずびと鼻を鳴らしながら陵は見送りながら、ついでに俺の足を容赦なく踏みつけてくる。

ちくしょう、文句を言えないのをいいことに調子に乗りやがって。唯笑がいなけりやこいつの毒素も退治できたかもしれんのに……

一分後、唯笑は何事もなく出て来ると、玄関へと向かう。なんとなくそれに従い、唯笑の後ろについていくと、玄関を出て外に出て、俺の家と彩花の家を遮る壁へとてくてくと歩いていく。

なんだ、何をする気だあいつ？

「それじゃ、達者で暮らすんだよ」

誰に挨拶をしているのかと疑問に思った瞬間、唯笑は大きく振りかぶり――

「ジャイロボ~~~~ル！」

手の中に掴まえていたらしい何かを俺の家へと思いつき投げやがった！ていうかさっきのカマドウマジやねえかよッ!!

「ふう、これで一件落着だね。喧嘩両成敗」

一仕事終えた唯笑は清々しい顔。俺は引き攣った笑顔。

「ゆゆゆ、唯笑？おま、お前何してくれちゃっているのかな？」



「何って、智ちゃんの家で暮らしてねって放してあげたんだよ」

「あげたんだよって、お前そんな」

「女の子を泣かせる男の子に人権はないってお母さんが言ってたでしょ。智ちゃんだってそう教わってるはずなのに、どうして意地悪をするのかなあ？」

「ぐ、む……」

おばさんを出されると俺も逆らえない。反論しようものなら、あの面白おかしい天災に何をされてしまうかわかったもんじゃない。

ちくしょう、今日家に帰りたくないよお！と素直に口に出来たらどれだけ楽だろうか。誰か家出青年を泊めてくれる優しいお姉さんはいませんか!?おじさんはノーサンキューで！

「というか、今坂さん素手で捕まえたんですか？」

「ほえ？そうだよ」

何でもない事のように言う唯笑に、陵は尊敬の眼差しを注いでいる。

「か、かつこいいです今坂さん……どこかの最低で度胸貧弱な三上なんとか智也さんと違って。本当にありがとうございました！」

「鼻水垂らしながらほざく小娘。俺はお前に少しでも強くなってもらおうと、親心で試練を与えてやったんだ」

俺の言葉を意図的に無視しやがる陵。

この時、俺は気付くべきだったのだ……陵の目に仄暗い復讐の炎が燻っていることに  
「今坂さん、私今まで今坂さんのこと誤解してました！」

「も、もお、いのりちゃんったら。そんなに大したこととしてないのに照れちゃうなあ」  
「そんなことないですよ！これまで能天気でちよつと無防備で不器用で、更に三上さんの事が好きだなんて、最大の欠点を持つている可哀想な人だなんて思っていましたけど、本当は凄い頼りになる素敵なお姉さんなんですわね！」

「あはは、そんなに褒めないで……あれ？褒められてないねこれ」

称赞の声に混じる以前までの評価に複雑なご様子だ。

「しかも俺への批判を混ぜてきやがった。唯笑、今のこいつを見てもまだ助けてよかったですか？」

俺の問い掛けに苦笑で応え、同類嫌悪なんだねと俺と陵を評価する。

名誉棄損だ。俺はこいつのように近づくもの全て傷つけるかのような、有害指定されるような人間じゃない。隙を見せたら斬りつけないところちが殺られる。くつくつくつ、これで済むと思わない事だ小娘。

「智ちゃん、余計な事考えて笑ってないで、掃除しようよ。このままじゃ結ママ達が来る

までに全然終わらないんだからね」

へいへいと適当に応えながら掃除に戻る。なんか唯笑の態度が浜松から戻ってきてから変わったよなあ。俺に対して年上目線と言うかなんというか……世話を掛けたから何も言えないけどな。親離れしてしまったかのようにちよつと寂しい……なんて思つてなんかいいんだからな！

ひとまず騒ぎは治まり、我が家で元気に暮らそうとしているであろう、カマ男(お)に想いを馳せて溜息をつきながら掃除に戻ろうとすると、俺の袖をちよんと摘まむ感触に立ち止まる。

肩を小さくして俯く陵が、さつきはすみませんでしたと耳を疑うような言葉を口にす  
る。

「その、ですね。さつきは大袈裟に騒いで迷惑を掛けてしまったので、他の場所もお掃除させて頂いてもいいですか？」

なん、だど？あの立てば爆薬、座れば劇薬、歩く姿はメデューサと名高いあの陵が、こんなにも殊勝な態度を見せるなんて……

そうか、そうなんだな！ついに俺の真心を込めた指導が、荒んで乾ききつた陵の心に届いたんだ！俺が教えたかったのは勉強じゃない。勉強なんかよりもずっと大切な心

のダムを、潤いのないサハラ砂漠のようなその心に築いてやりたかったんだ。

感無量とはこの事か。熱くなる目頭を手で抑え、ああ、よろしく頼む。と一言言うだけで精一杯だった。

俺の言葉に花が咲いたかのような笑顔を咲かせ、はいと気持ちの良い返事を残して陵が去っていく。

その背中をうむうむと見送り、卒業する生徒を見送る恩師のような穏やかな心でリビングへと向かった。

「なんだよ、あいつも可愛いところがあるじゃねえか」

ちよつと俺も悪乗りしちまって悪かったよな。掃除が終わったら少しばかり労つてやるか……

鼻歌を歌いながら俺はリビングの掃除に取り掛かる。マクベスが開演している事にも気付かずに。

ふんふんふくんと上機嫌で掃除をしていると、こんこんとドアを叩いて陵が俺を呼ぶ。

「お掃除中すみません。ちよつと三上さんをお願いしたい事がありました」

「おう、なんだ？」

「実は、浴室の掃除をしていたのですけど手が届かないところがありました」

あゝ、確かに女の身長じゃきついところもあるよな。浴室だと、台座とか使つて掃除するのも少し危ないし、仕方ない。可愛い教え子の為だ、今日一日は優しくしてやるか。

「わかつた。どこだよ？」

「え、いいんですか!？」

おいおい、そこまで驚くことないだろう。俺の方が年上なんだ、教え子の些細な頼みぐらいいくらでも聞いてやるさ。

まあ、これまでのガキだった俺しか知らないもんな。ここは頼れるお兄さんだと心に刻んでやろうじゃないか。

「おう、俺に任せろよ。頑固な油汚れもちよちよいのちよいだぜ」

爽やかな俺に若干引き攣つた顔を見せる。

「……罪悪感がチクチクとして……くるわけ 아닙니다けどね」

「なんか言つたか？」

「いえ、凄く助かりますつて言つたんです」

心が洗われるとこんなにも純粹な少女がいたとはな。いつもこうなら俺だつてみんなちゃんへの接し方のように、もつと優しく出来るんだよ。人間素直が一番だよな、うんうん。

## ——計画通り——

緩んでしまいそうな頬を引き締め、三上さんを浴室へと連れていく。まだ、まだだよ私。油断は禁物。勝利を確信して笑うと負けるルルーシ〇にならないように、気を引き締めないよ。

それにしても、なんの警戒もしないで愚かな人ですね。まさか、自分のお陰で私の心が洗われたとでも思っているんじゃないでしょうね？ふふ、そこまでおめでたくはないですよ？

立てば騒然、座れば愚物、歩く姿は裸の王様と名高い三上さんの教え子の私ですよ？あなたの卑劣な挑戦状を無視するわけがないじゃないですか。ふふ、あはははは！

「で、どこが届かないんだ？」

あらあら、警戒もせずに死地に飛び込んでしまいましたか。可愛いですね、食べちゃいたいくらいです。

三上さんの背後に回り……

「あそこです、バスタブの隅の真上なんですけど」

と言いなながらある生餌を三上さんの背中に投げ、扉を気付かれないように閉める。も

ちろん、つかえ棒を門のように差し込んで。

『あそこつてどこだよ陵……陵?』

私がない事に気付いた獲物の声が、浴室で反響する。ふふ、狂乱の幕が上がりますよ。

『なんだよ連れてくるなりいなくなりやがつて。えつとバスタブの隅の真上な。真上真上……ま……うえええええええええ——!!!』

どうやら気付いたようですねえ。

『な、あ、あー陵テメエツ!!』

「どうしました三上さん?」

摺りガラスの向こうにモザイクのように映る三上さんの姿。きつと物凄い形相をしている事でしょう。その顔を想像すると、つい毒島冴〇さんの名言を叫んでしまいです。はしたないですね私。てへ。

ガラスを割るかのような勢いで叩かれる。

『あ、開かねえツ!!クソサギごらあツ!!』

「三上さん、この家は大切な桜月さんのお家なんですよねえ?まさかそんな大切な家を三上さんは壊したりなんてしませんよね?」

『ふっざけんなツ!!開けろブササギツ!!開けないと鼻フック動画を晒してやんぞツ!!』

あはは、愚民の遠吠えのなんて心地いい事でしようか。ブサカミさん。

そんなに怖いですか。私の心強い生物兵器、アシダカクモ、アシダカ軍曹は。

『でかッ!!おい、なんか俺を狙ってねえかあいつ?!』

「それはないと思いますよ。アシダカさんは臆病ですから……主食がなければですが」

そう、彼等は益虫として名高いんです。家の守り神として共生する人もいるくらいなんですから。

アシダカクモさんは人間の味方なんです……先程三上さんの服に密かに付けた視覚害虫を捕食するハンターとして。

『それはないって、おい!なんか物凄い速さで走ってッ!!やめ、なんで来るんだよッ!!』  
好物が三上さんの服についているからです。台所を隅から隅まで血眼になって探し出したGという御馳走が。

注、真冬でも室内には大きなアシダカクモさんとゴキブリさんは顕在している可能性があります。特に、アシダカクモさんは日影が好きなので、軒下や天井にいる事が多いので探してみてくださいね。

アシダカクモさんの特性についてはテラフオ○マーを参照してください♪

『ひゃッ!!やめ、のぼ、え?のぼのぼッ?!?!ま、謝るから!ごめ、ごめんなさいマジ無理無理無理無理無理無理ッ!!たすけ、背中、しえなかやいふあがあああ——!!!』



意味不明な言語を叫びながら、何かが倒れたような音が聞こえた。

そうして数分待っても何も聞こえなくて、そつと扉を開けると……

「……あく、強烈ですねこれは」

白目を剥いて泡を吹きながら倒れている情けない大人のお腹の上で、むしやむしやと満足そうにお食事中のアシダカ軍曹。

そんなアシダカ軍曹に私はグツジョブと親指を立てると、軍曹も捕食しながら前足を上げて応えてくれた。

「よくぞやってくれました軍曹。叙勲は間違いない働きです。ありがとうございます」  
さてさて、この爆笑必至の姿をカメラに収めましょう。

恐怖に気絶する三上さんを背景に、私も入ってツーショット。きや、恥ずかしいです。陵家の家宝にしようかと心に決めてスマホを仕舞った時、阿修羅を彷彿とさせるかのような怒れる今坂さんが浴室の前に立っていた。

「いのりちゃん？なに、しているのかなあ？」

「愚問ですね。復讐です」

「愚答だよ!!?こうなるかもって思ってたけどね!!」

どうして仲良く出来ないかなあと呟きながら、今坂さんは躊躇いもなくアシダカ軍曹を抱きかかえる。うっわ、お腹側から見る足の動きがえげつないですね。ていうか良く

平然と抱きかかえられますね!? 私の知っている人達の中で断トツで格好いいじゃないですか!

「ごめんねアシダカ君。ここだと騒がしいから、少しだけお引越ししようね」

そうしてテクテクとまた玄関を出て、三上さんの家へと今度は優しく解き放つ。

何者ですかこの人。畏敬すら抱けますよ。

「さてと、いのりちゃんはこちらよつとりビングで待つててね……正座で」

「え、いや私はただ被害者でして」

元を辿れば三上さんが全ての原因なわけで、これも自業自得の為せる技ではないかです。すね。

「なあに?」

機械的な満面の笑みでのたった一言に、戦慄を禁じえない。

「はい、すみませんでした」

これは勝てないと悟り、戦略的撤退を余儀なくされてしまう。

「じゃあ、智ちゃんを起こしてくるから待つててね」

その後、正気を取り戻した三上さんと私は一時間正座させられて、親戚の余計なお世話焼く叔母のようにグチグチと説教と言う名のお導きを受け……

「陵、ごめんな（今日は許してやるが、今日が終わったら朝陽が拝めると思うなよ?）」

「いえ、私も生意気でした。本当にすみません（また泣かされたいんですか？良いでしょう、いつでも歓迎します）」

爽やかに笑顔でギリギリと音がしそうなほど、結束の固さを思わせる握手を交わしたのでした。

今日は毎年恒例の彩花ちゃんの誕生日。これまでは智也の部屋で三人、もしくはみんなもちやんを混ぜての四人で祝っていたのだが、今年はずいぶん早く解決したこともあり、特別に彩花ちゃんの家でパーティーをする事となった。

この間の事で、いのりちゃん達に世話になったこともあり、珍しく智也が一蹴といのりちゃんも呼ぼうと提案してきた。残念ながら、みなもちやんは都内の病院で一日掛かりの検査があり不参加なわけだけだ。

バイト上がりに適当にビールやカクテル等を買って込んで、食材もある程度買うと重量はとんでもない事になり、自転車が軋む音を立てた。

ひいひいと、息を切らしながら漕ぎ続け、真冬なのに汗が額から流れて止まらない。そうして体力が落ちた事に密かなショックを覚えつつ、なんとか彩花ちゃんの家に着する。

今頃は三人で仲良く掃除しているのだろうか、想像しながら家の中へと入ると……

「あ、信君……お疲れ様……」

いや、それは俺のセリフなんだけど。リビングには見るからにげっそりしている唯笑ちゃん。何があつたのか聞こうと思つたけれど、唯笑ちゃんの背後にむつつりとしたいのりちゃんの姿がある。

「そつちこそお疲れ。ところで一蹴とおばさん達は？」

「ううん、まだまだよ。残念な事にね」

ほんとに何があつたんだよ。なんとなくは想像出来るけどさ。

ここまで唯笑ちゃんを疲れさせた原因その一は、俺を目にすると造花ですと言わんばかりの素敵な笑顔で挨拶をくれる。花が咲いたようにのに対になる表現だけどさ。

「お仕事お疲れ様です稲穂さん。あ、荷物預かりますね。わあく、こんなに沢山！疲れたんじゃないですか？わざわざありがとうございます」

外面満点な回答に俺は苦笑する。間違いない、これは智也となにかあつたんだ。しかも壮絶に下らない戦争がな。

なんなんだよこの二人。第何次まで大戦するんですかね？人類滅亡するまでやつてろよもう。

「あく、唯笑ちゃんごめん。一人でよく耐えたね」

「信くくん！唯笑、彩ちゃんの家をちゃんと守れたよお！」

「家を守るつてなに!?被害範囲おかしくない!」

これが冗談だったら大袈裟など笑えるけれど、相手が智也だけに洒落にならないからどうしようもない。

「で、唯笑ちゃんを疲弊させた原因の片割れはどこにいるの?」

「二階に隔離してるよ」

「賢明な判断だね。正解だよそれ」

何があつたのかは詳しく聞く勇氣もなく、何をやってるんだあいつはと二階に上がる。

二階に上がるといくつか部屋があり、夫婦の寝室と彩花ちゃんの部屋、その他に二部屋程あつた。

で、智也はどこにいるんだと目を配らせても、智也の姿は見えない。きつとどこかの部屋の掃除をしているのだろうと、適当に一部屋ずつ開けていこうとすると、ローマ字で彩花と名前が書かれた札が下がっている扉の中から、なにやら穏やかな声が聞こえた気がした。

扉の前まで行くと、微かに聞こえる声に耳を澄ませる。

『はは、懐かしいな。あいつと言えばこれだよなあ』

彩花ちゃんの部屋の中で智也が愛おし気に語り掛けている。多分、彩花ちゃんの部屋

の中は当時と変わっていないのだろう。普通は遺品の大半は処分するものだが、彼等の親がゴミとして扱うとは思えない。捨てずにあの頃のまま残しているのだろう。

優しい人達だ。彩花ちゃんの為だけじゃない、智也達の為に残してくれていたんだ。『冬になるといつもだったよな。唯笑と俺しか知らない秘密だったけど、からかうと顔を真っ赤にして怒ってたよなあ』

智也の温もりに満ちた声に、扉を開けることを躊躇してしまふ。二人の大事な思い出に土足で踏み込んでしまう気がしたから。

どうするかな……でもまあ、来たことだけは伝えるか。彩花ちゃんの部屋がどんなのか気になるしな！

気遣いなんてなんのその。好奇心に便乗して俺は二人の思い出に土足で入る。俺と智也達の間に遠慮なしってな！

ドキワクしながらドアを開けると、目に映る景色は想像通りの綺麗に整頓されながらも、女の子らしいさを感じさせる雰囲気の一部屋だった。小物やぬいぐるみ、壁紙やベッドも女の子らしい配色で、どことなく良い匂いがしそうな、そんな素敵な部屋……なのだが、とてつもない異物が混ざっていた。

彩花ちゃんのタンスを開け、ふふふと哀愁を漂わせながら下着を見て笑う馬鹿がそこにはいた。

「何やってんだお前は!？」

「おう、ようやく到着か。おっせえぞ馬鹿」

「馬鹿はお前だよ!何してんだマジで!？」

綺麗な思い出に浸ってるかと思えば、とんでもねえ浸り方してやがった!どうしたら下着を持つて哀愁を漂わせられるんだよ!どんなメンタリテイしてんのこいつ!？」

「何って、ああ!見ろよ信!これだよこれ!」

嬉々として俺に下着を見せつけようとしてくる智也。頭狂ってんのか!？自分の彼女の下着を他の男に見せつけるって、どんな高度なプレイだよ馬鹿野郎!

などと心の中で抗議しながらも、ちらつと見てしまう俺だけどね!

「おま、止めろよ!彩花ちゃんが悲しむ……だ、ろ?」

と加速しようとした鼓動が緊急停止。そわそわ乗車したのに駅に着くことはなかった。なぜなら……

「これ、毛糸のパンツか?」

智也が手に掲げていたのは、水色の毛糸のパンツで、お尻になぜか牛井のマークがあった。

「な?な?傑作だろ!?!あいつ、なんでか冬は毛糸のパンツを履いてたんだよ!しかもわけわかんねえのが、全部井シリーズでさあ!どこで買ってんだって話だよなあ!」

本当に訳が分からない。井シリーズって需要どこだよ。俺の彩花ちゃんのイメージはさ、白とかちよつと大人な黒とか、こう女の子って感じの下着を着ているものとかばかり想像してただけ。

智也がタンスを漁ると、親子井、鉄火井、いくら井、ウニ井、うな重、ロコモコ等々……女子力皆無じやないかよ！

よくよく部屋を見渡すと、ベッドにあるぬいぐるみはや○し師匠と鶴○師匠だし、窓の上の壁には誰かのサイン入りのハリセンが飾られていて、机の上の小さな門松にはクリスマスっぽい飾りつけが施されている……なんだよこの部屋。どこに女の子要素があるって？俺の目は節穴かよ。

「はあく、笑った笑った。あとはなんか面白い下着ねえかなあ」

まだ飽き足りない智也は笑いの為の物色に勤しむようだ。俺の中の清楚な彩花ちゃんがこれ以上失われないよう、俺は部屋を出ようとしたのだが……

「智也、お前もう止めとけよ」

「あん？何言ってるんだよ。俺の記憶じゃ、これよりもんでもねえ物があつたはずなんだよ」

「いや、お前と彩花ちゃんは恋人であり家族以上だったのはわかる。わかるけど、ほら？彩花ちゃんだって女の子なわけで、つまりそういう事をするのはどうかと俺は親友とし



てだな……」

「んだよ、ぐちやぐちや煩いな。別にやましい事してるかもしれないが、やらしい事をして  
いるわけじゃ「ないとほごくか愚息？」……おい、なんでもつと早く教えてくれない相  
棒」

心なしか震えた声で抗議してくるが、俺に一切非はない。出ていこうと振り向いたそ  
こには、雷神風神も裸足で逃げ出す形相のおじさんが仁王立ちで立っていた。

「そ、宗吾さん、お、おお、お帰りなさい」

「ああ、ただいま智也。そしてさよならだ愚息」

あ、これ死亡フラグ立ったわ。さすがにこれは助けられない。助けようと手を伸ばせ  
ば、俺諸共奈落へ一直線だもんな。というわけでヘルプの視線を向けてくる親友へ俺は  
……

チーン、合唱。

「は、ははは、ち、違うんだって宗吾さん。これは、その……アレですよ」

「どれだ？俺を納得させられる言い訳を必死に考えてみせろ」

おじさんの迫力に気圧され、智也の喉がぐくりと鳴る。言い訳出来ても延命は無理だ  
ろうけどさ。

しょうもない言い訳をしようと、かつてない速度で脳を回転させる智也に、俺は憐れ

みの目だけを注ぐ。

そうしてどれだけの時間がたったのか、智也は何もかも悟ったかのような静かで穏やかな目をおじさんへと向けた。どうやら覚悟を決めたらしい。

サスペンスで追い詰められた犯人のように、物憂い気に窓へとゆったりと歩き……

「宗吾さん、さっきのあれは違うんだよ。あれは、そう！愛ゆえに暴走してしまった結果なんだ！」

「……ほお、愛しているから娘の下着をくんかくんかしていたと？」

冤罪だが、そう見られても仕方ないことをしていたのは確かだ。俺も同じように誤解したし。

「誰が色気もねえあいつの下着なんか「シヌカ？」いえ、そうです。あまりに愛おしくて魅力的で、彩花の誘惑に勝てなかった結果と申しますか……」

お前が勝てなかったのはおじさんだろ。

「なるほど。確かに彩花は世界でも屈指の美しさを持つ娘だったからな。決して親の鼻真目ではなく、世の中の男を狂わせてしまう魅力を持っていた。そう考えれば智也、お前が狂ってしまうのも頷け「るわけねえよ！」……なんだと？」

いつの間にか智也は窓を開け放ち、屋根へと飛び出していた。

そうか！窓に近付いたのは鍵を開けて抜け出す為だったんだな！

「ふはは、甘い甘い！宗吾さん甘いなあ！俺が誰に育てられたと思ってるんだ！」  
「くっ、忘れていたよ智也。お前は人類が到達してはいけないクズの境地と呼ばれた、あの慧の愛弟子だったことをな」

誰だよそのセンス溢れる呼び方した奴。激しく同意しちまう。

「ふははははは、あばよとつつあゝん」

そうして、微妙な物真似をしながら智也は自分の家の屋根へとジャンプ！

「待て〜！と〜もや〜！」

おじさんもノッチャったよ！しかもクオリティたっけえなおい！

思わず尊敬の目を向けそうになると、視線の先にいるべき姿がない事に気付く。

あれ？と窓に近付くと、向かいの部屋に智也の姿がない。もしやと思い下を見ると

……

「すげえな。こんな昭和なオチありかよ」

三上家の庭でもんどり打つ馬鹿一匹。

「……馬鹿息子め、また同じことを繰り返すなんてな」

「繰り返し返すって、何度もやってるんですか？」

「ああ、懐かしいものだ。落ちて白目向いて気絶している智也を見て、親子揃って良く

笑ったものだ」

「まともな人間が見当たらない!」

こうして、今日のメンバーがほぼ揃ったのだった。

「で、俺は忘れ去られていたわけなんだ」

陵の紹介を兼ねた結さん達への挨拶を済ませ、ある程度掃除も終わり、女性陣での食事の準備も滞りなく終わり……いや、嘘ついたわ。滞ってたからな。実は水道も電気もガスも通っていて、わざわざ家まで水を汲みに行かなくても良かった事実が判明し、陵と第何次かもわからない戦争が勃発したわけで。なぜ水道などが使えるようになってたかと言えば、宗吾さんの仕事の関係で戻ってくるのが三月から来月に変わり、それなら今のうちに手続きを済ませておいた方がいいと、手を回していたのだと言う。そんな事夢にも思わなかった俺を、年下とは思えない威圧を持って陵が糾弾。あとは言わなくてもお解りだろう。そういうことだよ。

と、なんかやかんやイベントを消化して、食卓に温かな料理の数々が並んだ時、ようやく重役出勤してきた馬鹿が現れたのだった。

「あ? おいおい、今のもしかして俺達をデイスってんのか?」

拗ねたように食卓に加わる鷺沢が漏らした一言に、俺を筆頭に一同が愕然とした瞬間だった。

「そうじゃねえけど、違うじゃん！俺が来た時なんて言つたか覚えてんすか？あ、忘れてたわとか言つてたじゃんか！」

「そうじゃねえって。そんな話を俺はしてねえよ。俺は、何一つ手伝つてないのに、何を拗ねた事を言つてんのかつて言つてんだよ」

「まあ、それはそうだけど、だからちゃんとケーキ持つてきたじゃないっすか」

「ケーキ？」

「そうっすよ？松月さんの誕生日だつて話だったから、こうしてお土産として持つてきたのに、そんな言われるの俺？」

「オーケー。それは嬉しい。素直に嬉しいけどな驚沢。だつたら聞くけどよ、お前、そのケーキはちゃんと買つてきたんだよな？」

「……いや、それは」

「買つてきたんだよなあ!!まさか売れ残りのケーキなわけねえよなあ!!なあ!!」

「だから、それは……ちよ、見てないでいのりも信も助けてくれねえかな!!」

「一蹴、彩花さんの誕生日なのに売れ残つたものを貰つてきたの？嘘、だよな？一蹴は優しいから、そんなことしないよ、ね？」

「智也も落ち着けて。まさか一蹴がそんな失礼な事するわけないだろ。俺達にとつて大切な女の子の誕生日に売れ残りとかさ。そんなの、俺達はまだいいけど、おじさんや

おばさんに失礼過ぎるしや」

「ああ、そうだな。確かに疑う必要もなかったよな。ごめんな鷺沢」

「あ、え、まあ……謝られても……売れ残りだし」

「帰れツ!!!」

怒鳴りながら鷺沢に強烈な肩パンを一発喰らわせ、むおおと小さく呻きながら鷺沢がガチで痛そうに崩れ落ちた。

「結ママ、宗吾パパ、気にしないでね。ここまでで1セットだから」

「相変わらず賑やかなのね智くんは」

「ははは、懐かしいなこの雰囲気」

賑やかな中、一人だけ口もきけない状態なんだけどな。

「ところで智くん、売れ残りの彼の紹介をしてもらえないかしら?」

「そうだな。売れ残りを押し付けに来た彼の名前を教えてくれないか?」

「追い打ちのかけ方容赦なさ過ぎじゃないっすかねえ!」

「黙れ売れ残り」

「俺が売れ残ってるみたいない方止めろよ!」

皆に可愛がられて嬉しそうにしている。どうせおいしいかと思ってるんだろ。

「すみません。初めまして、いのりと付き合っている鷺沢一蹴です。今日はお邪魔して

すみません」

あれあれ？俺に対して一度も畏まったことないくせに、結さん達にはしつかり敬語で話すのか。さては、エセ体育会系な言葉遣いは俺を舐めている証拠だったんだな？

畏まる鷺沢に、結さんはなぜか俺と鷺沢を見比べて……

「智くん、残念なお知らせがあるわ」

「聞きたくないけど聞きましょう」

「あのね、智くんより彼の方が格好良いの。どうしましょう」

「どうすれば良いか教えましょうか？その口を閉じればいいんですよ」

「智ちゃん、唯笑も結ママと同じ事ずっと思ってたよ」

「便乗して逆襲しようとしてんじゃねえぞ！」

「まあ、当然ですわね」

「勝ち誇るな腹黒」

「いや、そんな事ないっすよ？マジで三上の方が格好いいっすもん」

「上から目線でなにほざいてんだテメエツ」

せつかくの豪華な食卓もなんのその。心と心を殴り合うという、醜い争いとなつてしまった。

「まあまあ、それよりも折角用意したんだし始めようぜ。彩花ちゃんの二十歳の誕生日

をさ」

場を沈めようと皆を信が宥め、そうしてようやく場が整う。唯笑の馬鹿め、ここまでが1セットなんだよ。

それぞれに飲み物が行き渡り、乾杯の音頭を取ろうと俺が立ち上がると、あれ？と首を傾げて陵が口を開いた。

「今、彩花さんが二十歳って言いましたよね？」

「そうだが？なん」「三上さん達、いつからお酒を呑んでいたんですか？」……彩花誕生日おめでどう！乾杯ツ！！」

『おめでどうツ！！！！かんぱい！！！！』

陵の疑問を無視して乾杯する。そんな俺達についてこれず、え？え？と戸惑うばかりの陵。

「あの、私の質問は？」

「うるせえな。いいか？お前は高校生だよな？」

「そうですね」

「じゃあ、俺達はなんだ？」

「大学生です」

「信は？」



「社会人です」

「そういうことだよ」

「どういう事ですか!?!」

暗黙の了解を知らない人間はこれだから困る。空気を読めもしやがらない。お酒は二十歳になつてからなんて常識だろ。俺達は皆高校生以下じゃない、つまり大人だ。なんにも悪い事なんてしてないやい!

鷺沢と陵の二人だけはウーロン茶を飲み、大人組はビールを口にする。もちろん唯笑もビールだ。こいつ、カクテルとか飲みそうな見た目のくせに、日本酒とか平気で呑むんだよなあ。

「美味しい〜!働いた後のビールは格別だね智ちゃん」

「疲れた体に染みるよなあ。あ、宗吾さん焼酎もありますけど?」

「ああ、悪いな。芋はあるか?なければ麦でも良いが、お湯割りで頼む」

「了解。信はどうする?」

「俺はまだビールで良いけど、唯笑ちゃんは?」

「ハイボールがいいなあ」

「智くん、私もハイボール貰えるかしら?」

「はいはい」

早くも居酒屋のような雰囲気の中、素面の二人はちびちびと飲みながら食べる。酒を呑むと食べるよりも呑む事に集中するため、大量の料理を消費するために二人は貴重な戦力だ。

「そういえば、プレゼントとかないんですか？」

「ないない」

素朴な陵の質問に軽く答える。

彩花の誕生日を口実に騒ぎ倒すだけの嬉しい一日というだけだ。プレゼントを用意したところで、渡した相手の笑顔がそこにはないなんて、そんな虚しい行為をしたいなんて……そんなの喜劇にもならない。ただの自己満足だ。

「でもまあ、あいつが欲しい物はわかるけどな」

「へえ。じゃあ松月さんが今欲しい物ってなんなんすか？」

素面二人が暇をしないように話を続けようとしたのだが、逆に俺が面倒な事になったぞ。あいつが今欲しい物か……そんなもの、誰に聞かなくても一番俺がわかっている。答えは一つ……

「金」

「それいらぬ人間がいぬですよね!?!汚い大人ぢやないですか!?!」

「臆面もなく真面目な顔で最低な事を言ったぞこの彼氏!!」

ラブなロマンスを期待していた子供二人には悪いが、これが綺麗事のない真実ってやつだ。

「文句あるのか？ じゃあ聞くが、お前等は何が欲しいんだよ？」

「私ですか？ 私は……今欲しい物ですよ？ えっと……あ、最近ポーチが壊れてしまったのでポーチですわね」

「ポーチね。それ金で買えるよな？」

「……選んでくれた気持ち嬉しいんです」

「ほお、じゃあギラツギラなシルバーのメッキのポーチでも良いんだな？ ゲ○模様のポーチでも良いんだな？ 淫○がプリントされたポーチでも嬉しいんだよな？」

「普通は選ばないですよ、そんな狂氣的な柄なんて」

「なんでだよ？ 価値観が破壊的な奴が、一生懸命悩んで迷って真剣に選んだかもしれないだろ。それでも嬉しいんだろ？」

「子供みたいな追い込み方し始めたよこの人」

「黙れイケメン。けど、そういうことだろ？ なのに、え？ 嬉しくないとか今更言うのか？」

「それは、だってそんなの選ぶ人なんて」

「いないって言いきれないだろ？ 鷺沢がもしだ、万が一そういうプレゼントを選んだと

して、お前は心から喜べるのか？喜べるのかって聞いてんだよ」

「……嬉しくないです」

「だよなあ？じゃあ俺の答えは間違ってる？」

「ないです」

「まったく。でだ、さっき俺を盛大にデイスってくれたわけだが、なんか言う事はねえのか？」

「……すみませんでした」

「鷺沢、お前の彼女が謝ってるのに、お前はあやまぎヤッ!!!」

喋っている途中で後ろから思いきり叩かれて、とんでもねえ強さで舌を噛んでしまった。

「悪・即・斬」

「ふえ、てふえ〜!!」

両腕を組んで仁王立ちの唯笑に陵が涙を潤ませて抱きつく。

「もう大丈夫だよいのりちゃん。智ちゃん、イジメ格好悪い」

標語のように言われ、ぐむむと押し黙ってしまう。

「一蹴君も、彼氏なのに彼女を守れないなんてかっこ悪いよ」

「……すみません」

ちくしょう。今日は唯笑に全部良い所を持っていかれてる気がする。

「唯笑さくん！性根が逆走している三上なんとか智也さんから守ってくれてありがとう  
い）ぎ）います」

「唯笑！そいつを放せ！お前の薄っぺらい胸じゃあそいつぐふあッ!!」

「やられるのわかつてて言うなんて、勇者だなあんた」

漢には殺られると確信していても、やるべき時があるのだよ小僧。ところで唯笑さんや？ここ最近しつかりしすぎじゃないかい？しつかりどころか、俺への突っ込みが容赦なさ過ぎですよ。昔から三上智也の賢い飼育マニユアルを愛読しているからわかるよな？三上智也が我侂な時は、頭を撫でて優しくしてあげて下さい。そうすればあなたもたちまち幸福になるでしょうって。

彩花の誕生日を口実にしたどんちゃん騒ぎ。そんな俺達をどこか遠い景色を、いや、懐かしい光景を慈しむような二人の穏やかな視線。

そんな二人の胸中を俺は推し量ることが出来ない。

陵の事はおそらくだが、母さんかおばさんから耳にしていたはずだ。だが、実際に本人と対面して宗吾さんと結さんは何を胸に抱えたのだろうか？強制収容所に送られた俺が心配する事じゃないかもしれないが、そこは唯笑が上手くとりなしたのだと信じた  
い。

他愛ない会話にそれぞれが笑顔を咲かせ、彩花との懐かしい記憶を少しでも語り合いつつ、気持ちの良い酔いに未成年以外が身を委ねようとしていた時だった。

「イ○ポ○ンと夜も更けようかという非常識な時間に非常識な音の呼び鈴が鳴った。

さすがに今の音はおかしい。随分と下品な怪奇現象だな、変質者の地縛霊じゃねえかとケラケラ笑い、陵だけはドン引きしていた。

「とにもかくにも、音がおかしがるうがなんだろうが来客には違いないと、一番酔っていない俺が玄関へと向かったのだが……そこで事件が起きた。

「玄関まではいいくらいと陽気な声で向かった俺は、扉の向こうから聞こえた声に一気に酔いが冷め、それどころか吐き気を堪えてるかのような青ざめた顔をしてリビングへと引き返す。

「リビングに飛び込んだ俺を、酔っ払いの飢餓長髪野郎が顔を真っ赤にして笑いながら「どうしたあ〜？変態仮面でも来たのかあ？」などと事態を把握していない馬鹿。お前を変態仮面にして警察署の前に放置してやろうか!？」

「なんて、それどころじゃない俺は、どうにかしてこの九死に一生が目前に迫っている危機感を皆に伝えようか必死に頭をフル回転させた結果……

「やつべえ！マジやつべえ！」

とてつもなく頭の悪い言葉しか出なかった。

そんな狼狽した俺の言葉に、さすがに危機感を覚えたのか……

「さあ、第二ラウンド開始しよー！」

「そうね、あらあら唯笑ちゃん、シヨットガン四杯目じゃない」

「唯笑ちゃんはどこかの馬鹿息子と違って漢らしく育ったようだな。それにこんなにも可憐になつて」

「一蹴、はいあーん」

「いのり、さすがに皆の前では恥ずかしいって……なんつって、あーん」

拾つて！雑な振り方だったかもしれないが、誰かレシーブくらいはしてくれ！

クソツ！せめてこの場で一番まずいのは……

「唯笑！とにかく今だけは一時避難だ！彩花の部屋から俺の部屋へ避難するぞ！」

「もう、本当におかしいよ智ちゃん。はい、スピリタスあーんしてあげる」

「致命的なあーんを強要してんじやねええええッ!!!俺はともかく、お前はあのモンスターに狩られるぞ！逆モンハンになつちまう前に！あのタイラントに捕まる前……に

……」

「智ちゃん？」

唯笑の肩越しに見えるのは、庭に面する窓。そこに俺は異様な行動をする不可思議な影を目にし、眩暈で崩れ落ちそうになる。

影は鍵の近くにガムテープを何重かにして張り付け、空き巣の常習犯のようにそのガムテープ目掛けて肘鉄。音もなくその箇所だけ割れる窓。そこから手を伸ばして鍵を開け、まるで玄関から普通に正攻法で来ましたみたいなの顔で奴はリビングへと舞い降りた。

奴の出現を目撃した唯笑はようやく状況が飲み込めたらしく、スピリタスのアルコールが空気に溶けて消えたかのように、紅潮していたはずの頬から赤が消え、土気色へとみるみるうちに変わっていく。

唯笑だけじゃない。結さんと宗吾さんと俺を除く全員が同じ死相を浮かべていた。

「おいおい、随分と冷てえじゃねえの？あたしへの招待状はどうしたよ結」

「招待状って、慧ちゃんに昨日連絡したじゃない。なのに、うつせえって一言で切ったのは自分でしょ。麻雀か何かしてたんでしょ、どうせ」

「よくわかってんじゃねえか。よお、宗吾。相変わらず陰気くせえなてめえは」

「黙れ。土足で上がったのは今更怒る気にもならんが、まずは貴様がたつた今割った窓の修理費と慰謝料を財布ごと置いていけ」

「お前、久しぶりに会ったつてのに喝上げか？上等だよこら」

「無理よあなた。慧ちゃんのことだから、お財布に一円もないもの。昨日しこたま負けたんでしょから。喧嘩以外は最弱なのに、無駄に張り合うんだもの」



「うっせえ。あたしのギャンブルの才能は全部嘲笑に吸い取られちまったんだよ」

和気藹々とは結構な事だ。仲良きことは美しきかな。どうぞどうぞ、旧知の仲を心行くまで温めて下さい。温め過ぎて破裂してしまえ。

さて、奴がタイラントらしからぬ笑顔と言語で話している間に、俺だけは逃げさせてもらおう。

ちなみに、俺以外の四人は足をかくかく震わせてその場から一步も動けないようだ。嘲笑はわかるが、信達はどんなトラウマを植え付けられたのか。トラウマ製造機め、俺の下僕達を骨の髄まで怯えさせたな。

まあ、今日だけは許してやろう。どうぞ、その四人の贄を存分に味わってくれたまえ。ふはははは！

「で、誰がタイラントでトラウマ製造機だった？」

なんなのこの人。いつの間に俺の背後にいらっしやったのでしょうか？ AT フィールド破つてくるとか、暴走初号機並みにエグいんですけど。

「さて？ なんのことでしょうか？ 俺はおばさんの事を楊貴妃？ クレオパトラ？ アフロディーテ？ いやいや、そんなちよこざいな存在とは格が違う、全宇宙の美の集大成だと、いつもいつも恋焦がれているのに、そんな事言うわけがないじゃないですか」

完璧な俺の本音に、しらゝつとした視線を送りつけてくる一匹の野良小娘。

「頭悪いのに一生懸命煽てる言葉を考えました感が凄いですね」

こんな非常事態でも俺を貶せるお前の胆力に脱帽だわ。

「はっはあ！その通りだ弟子！あたしの美しさに敵うやつあ、ちいっとばつかしいねえよなあ！とところで、随分と久しぶりじゃねえか？あんだだけ世話してやったつてのに」

「その節はどうも」

蒔田さん達の一件にこの人が関わっているなんてのは火を見るより明らかだったわけで、世話してやったの意味を正しく汲み取り、形だけの感謝だけはしてやる。

「つうわけで、まずは智？あたしの足を舐めな。つま先から丹念に丁寧に愛情を持って」  
「結さん、シユールストレミング用意して。食べてから存分に舐めてやるよ耄碌ババ

………！！！！

突如の衝撃に声を失くすと同時に、おぼさんの足が俺の視線の先に見える。

あ、れ？景色が逆さに……なんだよ、これ？

冷たいフローリングが頬を伝っている。つまり、俺は倒れているらしい。

身体を動かさそうにも指先一つ動かさず、徐々に遠のく意識。唇を噛んで、痛みで何とか意識を保つ。

「もお、慧ちゃんったら。正中線五連突きは命の危険があるから封印してねって、学生の時に協定を結んだじゃない」

「良いんだよ、こいつはこの程度で死ぬような鍛え方してねえもんよ」

「確かにな。貴様が小さい智也を引き連れて旅に出て、樹海に一週間置き去りにしたこともあったな。ふっ、懐かしい思い出だ」

あ？樹海に一週間置き去りにされた思い出なんて俺には……ッ!?

思い出そうとするとこめかみに鋭い痛みが奔る。

うむ、これはあれだな。思い出してはいけないパンドラの箱だな。脳裏にツキノワグマよりも大きいエゾヒグマや、捕まえた蛇の皮を剥いで焼いている光景が過るが……待て待て！樹海どころの騒ぎじゃ無くね!?

これ以上はまずいと記憶をぼいっとゴミ箱へ。

「唯笑ちゃん、普通に笑顔で話せる思い出じゃないんだけど。てか、笑いながら話してるこの人が人間に見えない」

「まだ人間だと思ってたんだ信君。死刑になつてないのが不思議なんだよ。国際手配されていても唯笑は驚かないよ」

「今、初めて三上さんの人間性が歪んでいる一端を垣間見た気がします」

「三上……辛い子供時代を過ごしていたんだな。今度から少し優しくしてやろうかな」

ちよいちよい俺への評価が気になるが、とにもかくにも何とか立ち上がれるくらいには意識がはつきりしてきた。

がくがく震えながら立ち上がると、シカの子供かよ情けねえなあツ!!と最高峰のクズが笑う。

憐れみの視線を向ける唯笑達を無視して、無言で部屋を出て一旦家へと戻る。

「ふはは、負け犬が帰んぞお！遠吠えもしねえのかよ、だつせえ！」

などと戯言が背後から聞こえたが、怒りを通り越している俺の燃料としかならない。

キレちまつたよ俺。こんなにキレさせるなんて、さすが俺の天敵だよなあ。もう泣いて謝つても許さん。

「え？え？本当に三上さん帰ってしまいましたよ？」

「さすがに帰るだろ。俺だったら病院に搬送されてる自信あるし」

「あのさ、智也をフォロワーしなくてもいいの？」

「智ちゃんを？どして？」

「どして？つて、だつて今のはさすがに……」

「わかつてないなあ信君達は。今の智ちゃんは昔の智ちゃんなんだよ？」

「つまり？」

「見てればわかるよ。今から面白いものが見れるから」

## ——数分後

智也がいなくなつてしばらくすると、玄関が開いた音がした。どうやら智也が帰つてきたらしいと、リビングの扉の前に視線を向けていると、静かに扉が開きそこにいたのは……

「……………（しゅたっ!）」

挨拶のつもりなのか、四角いフォルムのロボットの着ぐるみが片手を挙げた。

何が何だかわからない俺と一蹴、いのりちゃんは無言で頭にクエスチョンマークを浮かべ、唯笑ちゃんは親指を立ててロボットにエールを送る。おじさん達は、そそくさとテーブルの上の料理などを茶の間の方へと移動させ始めた。

状況が飲み込めない俺達は、どうする事も出来ないまま成り行きを黙つて見ていたのだけれど、異常な反応を示す人物がいた。

「——ひきッ!?!」

あのクズの境地が顔を青褪めさせ、喉から絞り出したかのような悲鳴を上げたのだ。

「慧、さん?」

ロボットはそんな慧さんにてこてこと可愛い足取りで近づいていくが、慧さんはぶるぶる震えながら立ち上がり、後退りし始める。

「おお、おま、お前、やめ、智也なんだろう？なあ智也、テメエこんなことしてわかって……」  
その問い掛けに応えることなく、無言で距離を詰める。

「と、智也、だよなあ？」

「おいおい、心なしか暴君の眼が潤んでないか？声も震えているし、どういふことなんだよ。」

不安を解消して欲しい問い掛けは、ロボットの無言に掻き消される。

「な、なんだよテメエ！く、来るなよお〜！」

壁際まで追い詰められた暴君は俺の位置からでは表情ロボットに遮られて見えないが、確実に泣いている。

「ねえ、唯笑ちゃん？あれ何？」

「何って見たまんまだよ。お母さんの唯一の弱点でね、着ぐるみ恐怖症なんだよ」

暴君のくせになんでそんな可愛い恐怖症持ってたんだよ。ちよつとギャップで可愛く見えちゃうんだけど。

確かに着ぐるみ恐怖症の人は割といる。何かしらの恐怖感があるというのだが、普通の人には理解出来ない恐怖らしい。

「あの着ぐるみは智ちゃんがお母さん撃退用に用意してた最終兵器なんだ。成長に合わせていくつも用意してるんだよ」

「智也つて裁縫出来たの!？」

「命と引き換えにめきめき上達してたなあ」

たまに手先が器用だなあとと思う事はあつたが、命の危機に瀕した結果だったのか。しようもねえ〜!

ロボットが暴君の前で手を振ったり、顔を極限まで近づけたりして、その度に暴君とは思えない可愛い悲鳴が響く。

「く、来るなよお〜!か、帰るから〜!もう何もしねえよお〜!」

「ロボ、ツイテク。ケイ、ツイテク」

キャラ設定守ってるなあ。あいつ復讐が怖くないのかよ。

「ひうツ!?も、もう嫌だよお〜!唯笑助けるよお〜!」

「助けたら家までついてくるけどいいの?」

鬼かこの幼馴染連合は。もうヤダこの血筋。

「うう、助けてよお〜……優紀〜」

優紀?彼女是谁の事を……

「はいはい、もう帰ろうね慧」

いつからそこにいたのか、気配もなく暴君の肩を抱くひよろつと背の高い眼鏡をかけた男性。

「ごめんねお父さん。お母さんのこと頑張つて宥めてね」

「お父さん?! いやいや、いつの間にかいたんだよ!?!」

「いつの間にか、やだなく信君。お母さんが来る前からずっといたよ」

「いなかった! あんな人いなかった!」

「……? 何を言つてるのかわからないけど、ほら、窓を見てみてよ。お父さんが直してくれてるでしょ?」

窓を見てみると、割れていたはずの窓がいつの間にか修復されていた。職人がやったかのように、新しい窓に替わっている。

「もうホラーだよね!?! 一蹴達は気付いてたか!?!」

一蹴といのりちゃん、ぶんぶん、首を横に振った。

「えく? 一緒に料理も食べてたのになあ。確かに影は薄いかもしれないけれど、ちよつと失礼じゃないかな皆」

父親が好きなのか、ぶんぶんと怒る唯笑ちゃんだが、俺達はそれどころじゃない。俺達三人のうち誰一人その存在を認識していなかった事実、に驚愕してしまい絶句となる。

そうこうしていると、いつの間にか知らぬ間に暴君と唯笑ちゃんの父親? らしき人は部屋からいなくなっていた。

「ふう、これで化け物退治は完了つと。おじさんがあとは上手くやつてくれるだろう」



着ぐるみを脱いでばたばたと手で仰ぐ智也の言葉に耳を疑う。

「おじさんって、智也？いつから唯笑ちゃんのお父さんっていたかわかるか？」

「いつって、俺が屋根から落ちた時に彩花の部屋にいただろ。何言ってるんだお前？宗吾さん、おじさんずっと宗吾さんと話してたよね？」

「ああ、久しぶりで話が弾んでな。慧にはもったいない男だよ彼は」

「本当にねえ。ふふふ」

当たり前のように話す四人の姿に背筋が寒くなる。

「……一蹴、俺正常だよな？」

「異世界に迷い込んだ気分なんだけど」

「今坂さんの家って普通の人がいないんだね」

知ってはいけない世界を覗き込んでしまった俺達の耳には同じ曲が聞こえていたに違いない。

ちやらららん、ちやらららん♪という世にも奇妙な曲が……

宴もたけなわとなり、いのりちゃん達を送り出して残った面々で後片付けをしていると智也と唯笑ちゃんはおばさんに呼ばれて二階へと行き、俺はおじさんと茶の間に残された。

最初は普通に二人で片づけをしていたのだが、どこか言い辛そうに少し良いかなとテーブルへと誘われる。

席につくと、真っ直ぐな視線が俺へと向けられ……

「稲穂君、私の家族を、息子を助けてくれてありがとう」

恥も外聞もなく下げられた頭に、俺はわけがわからず慌てて頭を上げてもらおうとするが、おじさんは俺の願いを聞いてはくれなかった。

「本当なら、彼等にも感謝しなければならなかったが、智也の前では言い出せなくてな。今後また会えたのなら伝えるが、どうかこんな情けない大人だが感謝の言葉を受け取って欲しい」

「感謝だなんてそんな……俺はただ、俺の自己満足であいつを放っておけなかっただけで、感謝されるようなことはなにも……」

誰がどう鼻唄目に見ても勝手な罪悪感を抱いて、勝手にあの馬鹿の隣にいたくて、勝手に一緒に雨に濡れてやりたくて……ほんと、それだけで……

「いいや、君がどう思おうと君は智也を、いいや智也だけじゃない。私達のこと、彩花の事も救ってくれたんだ。本当なら、私が智也を救ってやらなければいけなかったのに、智也に全てを押し付けて一人にしてしまった。慧や智一に何と言われようと、私達が智也の傍に在るべきではなかったかと、何度も何度も自分で自分に問うてはみたが、情け

ない事に正解がわからずに智也を追い詰めるばかりで……」

おじさんが抱え続けた苦悩を、親としての絶望を俺が推し量る事は出来ない。俺には想像も出来ない苦痛がこれまでの年月に詰め込まれているのだろう。そんなおじさんを責める気になんてなれない。それどころか、俺を責める権利がおじさんにはある。

でも、こんな雨なんかもうごめんなんだ。俺も唯笑ちゃんも智也も、きつと彩花ちゃんもこの連鎖を終わらせることを望んでいるんだから。蒔田さん達から頂いた希望はきつと、その連鎖を終わらせる為のものなんだ。だから言わなければいけない。俺にその資格があるかはわからないけれど……

「おじさん、頭を上げて下さい。偉そうなことを言うかもしれないませんが、もう止めましょう」

もう俺達はただ雨の中佇む事に飽きた我侷な子供なのだから。

「これまでの罪悪感、苦悩、苦痛……俺達は傷を大切にすればかりで、彩花ちゃんの笑顔を曇らせてばかりでした。そんなの、何も生みません。何一つ解決しない。俺は智也と唯笑ちゃん、おじさん達への罪悪感から目を逸らせないままで、でも真つ向から向き合う事も出来ずにいました。だけど、それは俺だけじゃない。蒔田さん達も、おじさん達も、智也も唯笑ちゃんも……そして多分彩花ちゃんもそうだったのかもしれない」

勝手に誰かの罪を自分だけのものと抱え込んで、のた打ち回って足掻いて、そうし

てその誰かを更に傷つけて……どうしようもない輪の中で生き続けてきた。

「どうしたらいいのか、どうすれば罪悪感が消えるのか……過去と同じように消えるはずがないのに、どうにかしなければと躍起になって……そんな全部が今はどうでも良いんです」

消えないなら、過ちを正せないのならどうすれば良い？ 答えは簡単だ。俺と唯笑ちゃんが得た答え、蒔田さん達に望む希望、智也が必死に掴もうとしている未来。俺達が進む道は一つだけだ。

「消えないなら、消したくないのなら……」

ああ、そうだ。智也と唯笑ちゃんと彩花ちゃんと俺と、四人でずっと一緒だと約束したあの燈火は今もこの胸にある。この燈火だけはどんなに激しい雨でも消えることはない。

「これまでの全部を均等に抱えて笑えばいい。一人の強がりじゃ壊れてしまうけれど、四人で抱えて強がって、馬鹿みたいに笑って泣いてこの先を生きていけばいい」

誰かの燈火が消えたのなら、三人の燈火をそっと灯してやる。心に傷を負ったのなら、その傷に手を当てて自分の心にも少し分けてもらう。他人には無理でも、俺達四人にはそれが出来る。あの日の智也の涙がその証明だ。

「だから、頭を上げて下さい。そして、これからの俺達四人を見守っていて下さい。俺

が、俺達が強がる姿を見て下さい。きつと、何があつても俺達は笑つてみせますから。泣くときは、大声で泣いて見せますから。だから、過去を想う時は三人の笑顔を出して、笑つて下さい。それだけで、俺達は肩を組んで笑い合えると、そう思うから」俺の言葉を頭を下げたまま黙つて聞いていたおじさんの口から、ふつと呆れたような声が聞こえた。

「四人、か……君は凄いな」

「いえ、そんな」

「三人の世界にまさかもう一人加わることが出来るなんて思いもしなかつた」

顔を上げたおじさんの顔はどこか嬉しそうに目尻が下がっていた。

「見てみたかつたな、彩花が今の君達という姿を」

そんな言葉に、俺は悪戯をする子供の様に笑つて……

「え？見えませんか、俺達と馬鹿をやってお腹を抱えて笑つている彩花ちゃんの姿が」  
そう返したのだった。

彩花の部屋の電気を点け、俺は机の椅子へと腰かける。

唯笑は先に帰るねと満面の笑みで、結さんにありがとうと抱き着いてから帰つた。

多分、彩花が俺達の前からいなくなつて初めての心からの満面の笑みだったんじゃないな

いだろうか。

「やっぱ結さんには敵わねえよなあ。さすがお前の母親だよ」

机の上に伏せてある写真立てを直して悪態をつく。

写真立ての中には、悪ガキの両腕に鎖のように絡みつくアホ二人。唯笑が陵に気を遣って伏せていたんだろう。そこまであの小娘を気にする必要もないだろうが、あの二人には彩花の姿は少々刺激が強いかもしれないからな。

「ああ、そういえば忘れてたわ」

と、ジャケットに入れていた小さな箱を取り出す。一応、約束の年になっちまったから仕方ない。別に俺と彩花が約束したわけじゃないが……

「ほらよ。デザインが気に入らないとか文句言うなよ」

最低でも二十歳には結婚……なんて、呑気な親達は勝手に将来を決めつけていたからな。とはいえ、これと言った不満もなかったのも事実だが。

箱を開けて写真の前へ。決して安くはない小さな宝石が煌めく指輪に苦笑してしま

う。  
詩音はクリスマスプレゼントなんて言っていたが、残念。これは昔からの契約であり約束の印だ。

「ていうか、文句を言ったら問答無用で泣かす。これ買う為にどんだけ働いたかわかる

だろ？高校からずっと細々と貯めて買ったんだからな」

その資金の中にはかきこおろぎで得た賃金も少しばかり。犠牲になったコオロギ達に涙を流して感謝する事だな。

「これ買うのめっちゃ恥ずかしかったんだぞ。なんか高級な店の中に場違いな服を着た奴が来たって感じでよ、ああいう店ってなんで上品ないらっしゃいませって特徴的な挨拶すんだよ。びびるわ」

そりゃ、こんな見るからに子供な俺が結婚指輪を買うだなんて思いもしないだろうけどな。だからって、なにも近くのアクセサリーショップを斡旋しなくても良からうに。地味に傷ついたからな。

ちなみに、俺の指輪はチェーンに通して首にぶら下がっている。指に嵌めて周りに詮索されるのもなんだし。べ、別に恥ずかしいわけじゃないんだからね！ふん！

「でだ、渡して早速だけど……わりい、この先二股するかもしれん」

関白宣言どころの話じゃないが、こればかりは言っておかないと話にならん。心なしか頭を何かに叩かれてるかの様に痛い気がするが。

「嘘はいかんからなあ。ほら、この先どうなるかわからんし。つつても、相手にも二股を許してもらわにやらんわけ……」

そんな心広いマザーテレサみたいなのやっついているのだろうか？マザーテレサが二股許す

かどうかは知らないが、許してくれそうじゃないか？なんとなく。

「ま、この先の話だ。今のところそういった心配はなさそうだが、それなりには前を向いてみようと思う年頃なんだ。許せ貧にゆっげふッ?!?!」

喉を原因不明の激痛が襲った。地獄突きじゃねえかよ!?

寒い室内が更に寒くなった気がしたが、気の所為だろう。鶴○師匠のぬいぐるみの目尻が吊り上がっているが、断固として気の所為だ、うん。

「あまり心配するなつて。まあ、その……なんだ。お、お前を、その、あれなんだな、あ、あ、あ、あい……愛して、るるるるるう……のかなあ?う、うむ。それだけは変わらん自信がないわけでもなかったりあったりでだな」

今のこの場面を誰かに見られたら死ぬぞ。穴があつたら入りたい。てか入るわ。彩花のベッドにダイブして布団にくるまる。

「い、今際の際まで、こ、こんなこと絶対言わんからな!」  
寒いはずなのに顔が火照って仕方ない。

ちくしよー。こんなんで二股出来るのかよ。いやいや、夜王智也を目指すと決めたじゃねえか。俺なら楽勝だ。

首から下がっているリングに触れる。愛の証と、もう一つ……彩花の想いの証の二つに……



『智くん、唯笑ちゃん、これ受け取ってくれるかしら』

『結ママこれ、指輪？そんな、こんな高価な物貰えないよ！』

『違うのよ、この指輪はね？』

「メモリアルリング、ね」

遺骨を加工して出来たダイヤモンドのリング。彩花が亡くなってから遺骨で造ったこの指輪を、結さんはずっと大切に持っていたのだそう。俺達二人に渡すためにずっと。

あの頃の俺達に渡してしまうと、ずっと過去に囚われてしまいそうで渡すわけにはいかず、こうしてあの日の事故とちやんと向き合えるようになってから渡そうと結さんは心に決めていたらしい。今の俺達なら大丈夫だろうと、この指輪を渡す意味をしっかりと理解してくれると。

「唯笑のやつ、薬指に丁度合うとか言つて飛び跳ねて喜んでたぞ。いつでも一緒だあつてさ」

冗談じゃない。口煩い幼馴染に二十四時間監視されるなんて拷問だぞ。生理現象の時はどうすりゃいいんだよ。彩花の視線が気になって出来ない……いや、恥ずかしがつ

て顔を隠すだろうから問題ないな。じゃあいいや。

「この先、唯笑を幸せにしてくれる奴かどうか、あいつの前に現れる男をお前が審査してやればいい」

俺を選ぶ目利きが確かなお前だ、あいつの相手を任せられる相手を厳選してくれ。今の俺の胸の内に疑問を持ちやがったら髪の毛を半分切るからな。

「でもってだな、俺の相手もお前が見てくれや」

「こいつなら二股を許してもいいっていう、稀有なやつをさ。」

「ふあ〜」

布団にくるまってたら、少し眠くなってきたな。今日はこのまま寝ていくか。

ぼくつとし始めた意識の中、ぼんやりと大切で大事なお約束を忘れていたことを思い出し、礼儀を重んじる俺は小さく、そつと、たつた一人にだけ聞こえるようにその言葉を呟いた。

——なあ彩花？俺と、結婚、しようぜ？

乱痴気騒ぎから解放されて、私は一人で家路についた。

最近は一蹴の部屋か、私の家でずっと二人でいた。私の部屋には入れてあげられない

けれど、狡く誤魔化して入らないようにしていた。だけど、今日は少しだけ体調が悪いからと、一人で過ぎすことにした。

家に帰り私はすぐさまバッグを玄関に放り、ドクン、ドクン、と大きく脈打つ心臓と共に洗面所へ走る。

『ツ?!……あ、え?』

夕暮れの公園で初めて目を合わせた時、あの人は挙動不審なほどに狼狽えていた。いつも挙動不審だけれど、でもあの時の狼狽え方はこれまでの三上さんを見ている限り、明らかにおかしかいと今になって思う。

そう、あの時だけ……あの瞬間だけなんだ。蒔田さんとの一件を忘れて、三上さんはただの三上智也を表に出してしまっただけのは。

「どうして、気付かなかったんだろう」

鏡に映る自分の姿、その姿に手を伸ばす。

「どうして、気にしなかつたんだろう」

彩花さんがどんな人なのか、三上さん達の話の中でしか知らなかつた。意図して、三人は隠していたのだろうと今ならわかる。彩花さんの写真を、私は一度も目にしたこと

がないなんて、どう考えてもおかしいもの。

ないわけがない。三上さんの部屋に、彩花さんの写真がないなんてことあり得ない。なのに、子供の頃の写真や卒業アルバムを私は目にしたことがない。そんなこと、あり得ない。誰かが意図して隠していない限りは。

今日、私は彩花さんの部屋に入っただけではない。今坂さんがやんわりと遠ざけていたんだ。もしくは、私達が家に入る前にあらかじめ隠していたのかもしれない。

だから、今坂さんに落ち度は何も無い。ただ、彩花さんの家の中全部を知っているわけじゃなかっただけの事。おじさん達の寝室の本棚、そこに収納されていた建築の専門書の間挟まっていた……その一枚を除いては。

掃除をしていて、本からはみ出していたそれが気になって手に取ったのは偶然だったけれど、その偶然は私に衝撃を与えた。

写真には、三上さん一家、彩花さん一家、今坂さん一家がお花見をしている時の、誰もが桜舞う中で幸福に笑う姿で写っていた。その中には、中学生の頃だろうか？あどけない三人の子供。真ん中の少年は馬鹿みたいに笑っていて、両脇に少女二人。片方は能天気な笑っていて、そしてもう一人は頬を膨らませて怒っているようで、でも柔らかく笑っているようでもあった。

最初は、あく、この人が彩花さんなのかと不思議な感覚の中で眺めていて、でも違和

感がどこかにあって……どこかで、ううん。いつも見ているかのような既視感が付き纏った。拭えない違和感、その正体に辿り着くにはそれはあまりに身近過ぎた所為で遅くなつてしまった。

どうして三人は彩花さんの写真を隠していたの？

「当然、だよな」

どうして三上さんは初めて目を合わせた時に狼狽えたの？

「幽霊でも見た気分だったのかな？」

桜の中で三上さんの隣で、三上さんを愛していると誰にでもわかる目で訴えている少女……彩花さんに見覚えがあるのは？この既視感の正体は？

「目の前に、いるよ、ね？」

ああ、良かった。今この場に一蹴がいなくて本当に、本当に良かった。

「ふふ、そうか、そうだったんだあ」

こんなにも恍惚に蕩けた表情（かお）を、教え子の私が、一蹴の恋人の私が絶対にしてはいけないのだから……

どんな表情で彼女は彼に愛を囁いたのだろうか？どんな表情で彼女は彼を抱いたのだろうか？どんな表情で彼女は彼の唇を……

「三上さん、三上さん三上さん」

一人でいる時間だけのこの想いだけなら許してもらえますか？貴方が愛する人と瓜二つだという事に悦びを感じても許してくれますか？どうか、今だけは——

「う、ふっ、うう……」

自然と伝う涙と零れる嗚咽。

洗面台に手をついて膝から崩れ落ち、嗚咽を止めるかのようにもう片方の手で口を抑える。

どうか、こんな事で自分を満たす惨めな私を、許して下さい。

——今だけは、この愛を許して下さい——

## 彼等の聖夜、彼女のサンタ

街中に響く一年で最も幸せ色のメロディー、親と手を繋いで歩く子供も、腕を組む恋人達も一緒に同じ表情で街を歩いていく。

ああ、今日と言う日がこんなにも待ち遠しく、前日は早く時間が過ぎないかと一分一秒を待ちわびて夜も眠れなかった……こんなにも期待で胸が高鳴る日だなんて知らなかった。

藤川の駅前に飾られている大きなクリスマスツリーの前で、双海詩音は白い息を両手にはあくど吹きかけ、待ち人を心なし程度にそわそわと待っていた。もしもきよろきよろと辺りを見回して待ちわびている姿を待ち人に見られたら……という懸念があり、彼女は誰にもわからないように指を後ろ手で忙しく絡ませている。

基本的に本と紅茶にステータスが極振りされており、流行のファッションというものに興味がない彼女は、清楚さと可愛らしさを均等に両立させたデザインの手エックのコートと、その下には黒のセーターと深緑のカーテンスカートという、トレンドなんて無視したファッション。だが、それがいい……と、道行く初心なDT達は彼女にチラチラ視線を投げかけながら、どこぞの傾奇者の名言を心の中で唱えている。流行りに流さ

れず、かといつてダサイわけではない。むしろ流行りに乗らない今時ではない雰囲気、男達の心はノックアウト。トナカイの引くソリを救急車がわりに病院に行けば、不治の心不全だろうと診断が下される馬鹿が多数続出している事に彼女は全く気付いていなかった。

だがそこじゃないと、通な者は別な場所へと視線を向ける。

彼女の素晴らしさはそこじゃない。その程度ならそこが知れると言うものよと、コミケ四天王の林田萌希（はやしだもえき）は一昔前のオタク御用達の眼鏡を人差し指で上げながら笑う。四天王かどうかはさておき、つまり初心なDT変態紳士連合の一人なわけだが、彼は詩音の姿が良く見える喫茶店の中で、コーヒーを優雅に飲みながら「あちゃー！……恰好付けた結果舌を火傷しつつ、涙目で詩音へと視線を向ける。

確かに彼女は聖夜に地に舞い降りた天使であることに異論はない。だがしかし、彼女がただの天使であると思わぬことだ。彼女の天使の羽には白の中にわずかな背徳の色が混じっている……黒ストと言う名の墮天使がなあ！

くわつと目を見開き、林田は詩音の足首を凝視する。

なんとという事だ、清楚で純粹無垢な見た目とは裏腹な危うさが、その奥に蠟燭の炎のように小さく揺らめいている。馬鹿な！天上から舞い降りた天使は、墮天という魅惑さえもその身に宿しているというのか！



わなわなと自然と握った拳が震えている。

なんとということだ、ここまで距離を取っているにも関わらず、これほどのプレッシャーがあるとは……彼女は人間ではないな！

そんな鼻息荒く眼鏡を曇らせている林田の横を、店員の女性が「……うつわ」とわざわざ聞こえるように声にして通り過ぎる。その声に若干傷つきはしたが、それでも林田は店を出ようとは思わなかった。

ああ、きつとこんな冴えないキモオタにサンタクローズが初めて微笑んでくれたのだ。彼女の姿をこの目に焼き付けろという光栄を自分に与えてくれた。そんな思いが彼の胸の中に宿り、うつすらと視界が滲んだ。

思えばこれまでの人生、自分に与えられたプレゼントと言えば、自分へのご褒美にと買った美少女ゲーム数本や、幻の同人誌や声優イベント……の列に並ぶ自分を射貫くようなリアル雌共の、殺傷力抜群の汚物へと送る視線だけ。

サンタは死んだのだと何度言い聞かせた事か……だがしかし、サンタは死んでなどいなかった。自分の枯渇しそうな生きる気力を、こうして与えてくれたのだ。

両手を組み、ミサに参加する参列者のように彼は詩音へと祈りを捧げた。

「てんちよ、警察呼んでください。あのオタクに心まで犯されそ〜」

黙れ汚豚（おぶた）。貴様なんぞに触れたら心が腐り落ちるわ！と毒づきながら、一頻

り祈りを捧げ終えてコーヒーへと口を付ける。

そうしていつもよりも芳しいコーヒーの香りを堪能していると、先程とは打って変わって、満面の可憐で美しく清らかな笑みを浮かべて手を挙げようとし……たのも一瞬、すぐにその神々しいまでの笑顔を俯いて隠した。

その様子に首を捻る林田だったが、詩音の前に現れた人物になるほど……と得心し――

「てんちよー！オタクが急にコーヒーを自分の頭に掛けてますけどー！」

「ジーザスッ!!!」

ザラメのようにドロドロと甘い空気が、駅前の大きなクリスマスツリーの下に滞っている。

その空気の発信源が、子宮から発情しているかのような声で彼氏に話し掛けている彼女諸君達だけならともかく、粘っこいヘドロのような洗い流しても取れない異臭を放つ、頭があられもない欲望だらけの獣からも発信されているのだから質が悪い。煩惱バスターズ！とでも歌い出して処理したい衝動に駆られてしまう。

そんな異空間に唯一静謐な空気を放つ存在を見つけ声を掛ける。

「よお、悪い悪い待たせたな」

どんな茨の道も本と紅茶があれば事もなし主義のお姫様、双海詩音。そこに痺れる麻痺しちゃう。

「あ、智也さ……こほん。いえ、私も先程来たところです」

そんな詩音にそうかとだけ応えた。

どうせ詩音の事だ、俺よりもずっと先に待っていたのだろう。その証拠になぜか手袋をしていない雪のように白いはずのその手は、赤鼻のトナカイのように赤みを帯びている。

途中、缶コーヒーでも買って渡そうかとも思ったのだが、隠しもしない不満気な顔をするのは目に見えていたので断念。ちよつとトラウマなんだよなあ、あの缶紅茶を飲ませた時の詩音。

「それよりも、買い物に付き合って欲しいとの事でしたが、どこに行かれるのですか？」  
悴んですぐにでも手を摩りたいだろうに、俺に気を遣わせまいと何でもないかのように振る舞う。見掛け通り強情なんです、ええ。

しかも、一緒にいても周りに恥ずかしくないように、ちゃんと洒落た服装で来てくれたのか。気を遣わせてしまったな。

「ん？あゝ、その前にちよつと昼飯に付き合ってくれよ」

「え？はい、それは良いですけど……」

「サンキューー！一人で食うのは味気ねえし、もう腹が減って死にそうなんだ！もちろん、遅れちまったから俺の奢りで！」

「いえ、そういうわけには「さあさあ！我に続けー！」って、もう！どんどん勝手に行かないで！」

だって、強引に進まないとごちやごちやうるさいんだもんよ。少し強引なくらいがこいつには丁度良いと学生時代に学んでるわけで。

早くしないと端から端までメニュー頼むぞおー！と発破をかけると、本当にやりそうじゃないと素の言葉が返ってくる。

そんな詩音を眺めて笑いを噛み殺していると、駅横にあるカフェが何やら騒々しいのでこちらに目を向けると、なぜか店員から蹴り出されたかのような、絵に描いたかのようなオタクの見本のような男が、地面に這いつくばりながらなぜか俺に真っ直ぐ視線を注いできた。

知り合いだろうかと首を傾げると、そいつはずれた眼鏡を直しながら立ち上がり、両目から滝の様な涙を流しながら笑顔で親指を立ててきた。

追いついた詩音が俺の視線の先を追って、同じく首を傾げた。

「知り合いですか？」

「かもしれない。うちの大学はちよつと頭が可哀想な奴の宝物庫だからな」

「そうかもしれないですね。智也さんがその宝物庫で最も値の張る方ですから」

「よし決めた。最上級に不味い紅茶を出す喫茶店に連れて行ってやる！」

「逆に興味が出来ます。どのような紅茶なのか」

「アル中の親父がやつてる店でな、酒を呑んでるときは最上級の紅茶を出してくれるんだが、酒が切れている時は地獄のような紅茶を楽しむんだ」

「よく営業出来てますねそのお店」

そんな下らない話に微笑んでくれる詩音を伴い、伝説の隠れた迷店へと向かう。

こうして俺のクリスマスは幕を開けた……怨念のような思念が渦巻く事になるとも露知らず。

世界中のあちらこちらで幸せのライスシャワーが飛び交う今日と言う日、そんな幸せを享受する人々の中で間違ひなく一番ハッピーな男は俺だと胸を張つて言える。俺のその自信の源である彼女、陵いのりが俺の手をこうね？指と指を絡ませるいわゆるく？恋人く？繋ぎく？とかしちやつてたりなんかしたりして。

この世の男性諸君の理想と言う名の欲望を体現したかのような、非の打ち所のない彼女こそ、俺の幸せの形だ。

今日はクリスマスという事もあって、どこかに出掛けてちよつと値の張る食事でもしようかと持ち掛けたのだけれど、いのりは今日は自分が腕によりをかけて御馳走したいと息巻き、二人でここらで一番大きなモールまで買い物に来ていた。

いやいや、もちろん俺だって彼氏という贅沢ポジションにいるわけだから、多少の見栄を張り、金の事なら気にしないで良いと言ったさ！心の中で血涙しながら！仕方ないだろ！最近はあるのたんでも年上ズに搾取され続けて、リアルに年を越せない事確定してたんだから！鷺沢の家で泣く泣く食事の世話をして頂いてたさ！今年の事件で教訓を得た事が一つ。年末にあの三人に関わるな、だ。

そんな状態でも俺のヴィーナスに捧げるお布施はもちろん確保していた。けどまあ、いのりには俺の懐事情などお見通しなわけで……

「わあく、ねえ一蹴！見て！綺麗だね！」

情けなさを嘸み締める俺の心情とは裏腹な無邪気な笑顔で、モールの中央に聳え立つ壮大なツリーを指差して俺から離れて駆けていく。

ツリーの周りには俺と同じような恋人や、将来いずれはいのりとあなりたいなという家族が、ツリーの下でそれぞれの時間を過ごしていた。

そのふわふわとした雰囲気頬が緩みながら……

「はは、待てよいの——ッ?!?!」

「凄いねえ、ねえ写真撮ろうよ一蹴……あれ？一蹴？」

いのりの元へ行こうとした俺は何者かに突然口を塞がれ、腕と肩を極められてトイレへと続く通路へと攫われた。

振り解こうとすると、肩のあたりから激痛が走り、とてもじゃないが振り解くことが出来ない。プロか何かかよ!?

突然の事にせめてもの抵抗と、足をじたばたさせると、耳元に恐ろしい声が――

「よお、楽しそうじゃないかね、非リア充の心をぼこぼこにした罪現行犯」

よし殺そう。

犯人の正体を即座に見抜いた瞬間、俺は理性を水洗トイレに投げ捨て、口を塞ぐ手に容赦なく噛みついた。

「いつてえ……!!!」

口から手が離れたと同時に、思いっきり踵でそいつの足を踏んでやる。

「ぐがあッ!!!て、めえ……手加減してやったのに調子に乗りやがって!もう勘弁ならん!戦争だごらあッ!」

俺から離れ、涙目になりながら頭がおかしい事を平然と叫ぶ奴を俺は一人しか知らな

い。いのりの反面家庭教師である三上馬鹿也しかな!

「何が戦争だ!アホですかあんだ!今時小学生でもこんな悪戯しねえよ!」

松月さんの家で会って以来遭遇する事もなく平穩な日々を過ごしていたつてのに、なんだってこんなロマンスの神様が降臨する日に疫病神まで降りてきやがったんだ!

「何するんだよいきなり!」

なるべくならこいつには会いたくなかった。いや、会いたくなかったんじやない。正確には会わせたくないと言う方が正しい。理由は明白で、いのりが三上に会ってしまうのが俺は怖いんだ。

どうにか三上がここにいる事がいのりに気付かれないう、頭を巡らせていると……

「何って?いや、お前が俺の目の前にいたから」

「いたから?」

「それだけだが」

「自分の小屋に帰ってくれないですかねえツ!」

とんでも理論で襲ったつてのか!

理解不能な思考に脱力してしまう。誰かあゝ!この壊滅的な思考のペットの飼い主〜!リード放してんじやねえ〜!

どうせ今坂さんか信が目を離れたに違いない。出て来い!猛烈に噛みついてやる!



と息巻いていると、こちらに声が掛けられる。その声は柔らかな女性のもので、今坂さんだなど判断しこの野郎!と勢いよく振り返ると……

「もう、どうして勝手にどこか行ってしまうんですか!」

「……OH」

なんて海外ホームドラマのようなりアクションになつてしまった。

振り返った先にいたのは、日本人とは違う透明感を持つ超絶美女が困った顔で三上を咎める。

ははは、俺夢でも見てるのか?こんな美女が三上と親しいだなんて、そんなことが許されるわけない。許されるのだとしたら、神は死んだに違いない。

「ああ、すまん詩音。つい見知った顔を見て可愛がつてやりたくてな」

あ、神死んでたわ。

「詩音?」

詩音さんつてどこかで聞いたような……

細い糸を手繰り寄せなんとか思い出そうと試みる。そう、確か今坂さんがなんか言っていたような……そう、確かライバル宣言がどうか……

「あ、ああ〜!まさか今坂さんが言つてたあの詩音ちゃんつて!」

「……唯笑さんが?」

突然の俺の声に困惑する女性を前に冷静になる。

「ちが、えっと、すんません。俺鷺沢一蹴です。今坂さんから貴方の事を聞いていたので  
っい」

「なるほど、そうでしたか。唯笑さんのお知り合いなのですね。私は双海詩音と申しま  
す」

俺の失礼な態度に嫌な顔一つせず、丁寧に自己紹介をしてくれる。うわあ、なんだこ  
れ。こそばゆい感覚が全身に走り、緊張で顔が紅潮してしまう。

「おやあ、何を恥ずかしがってるのかなあ、むつつりイケメン君」

ぶつつん三上が何か囁っているが、目の前の美女を前にして緊張しない雄がこの世に  
いてたまるか。もちろんいのりのりが魅力的だけどな！

ただまあ、そういう次元じゃなく、とてつもなく品のある女優さんに会ったりすると  
こんな感覚なんだろうなと思う。

「智也さん、私を置いて彼をイジメに向かっておいて、他に言う事はないんですか？」

「だから謝ったじゃないか。なあ？小僧」

「あんたは煙突から落ちて複雑骨折してくれねえかな」

「せつかくのクリスマスだってのに荒んでんなあ」

さつきまでは最上級の幸せを噛み締めていたんだ。

それにしても、信が絶賛してただけあって確かに双海さんは正に美女と言うに相応しいルックスだ。もしかすると静流さんよりも……

「そーいやよ、陵はどうした？振られたか？」

「あゝ、いのりなら……あ」

ヤバイ！忘れてた！双海さんが予想以上の美女で思考が停止してしまっていた！早く戻らないと！

いのりのことだ、心配して探しているに違いない！そりゃ俺が神隠しというか下衆隠しにあつてたら心配するだろう。

ともかくにもここは逃げるが勝ちだと、話を有耶無耶にしようと最速で脳を回転させようとしていた時だった。

「一蹴どうしたの？」

俺の最速を上回る速度でいのりが通路に来てしまった。神は死んだって？残念、正解は今から俺が神を凹るでファイナルアンサー。

恋人達を祝福するかのような曲が流れるモールの中、多分に漏れず俺も甘々な空気に身体を汚染されている最中だった。

智也が双海さんとデート？という事もあって、寂しそうにしている唯笑ちゃんに駄目

元で俺と出掛けない？と誘つてみた稲穂信、一世一代の告白がまさかまさかの奇跡が起きて成功し、ロマンスの神様ありがとうと感涙の涙を流して感謝している今日この頃。

本当に一緒に出掛けてくれるだなんて思つていなかった俺は、急いで一張羅を引つ張り出して、高鳴る胸の鼓動を楽しみながら彼女の元へ……

「何してるの信君？早くしないと置いて行つちやうよ！まだまだ買うものが沢山あるんだから！」

「早いんだよなあ。もうちよつと妄想に浸らせてくれてもいいじゃんか。せめて手を繋ぐところまではさあ」

アメリカかな？とでも思えるような量の買い物、俺の両腕とカートの中を賑わせている。どこの大家族の買い物だよ。

「何言ってるの？」

「なんでもないよ」

とまあ、俺の妄想のような出来事は一切なく、今晚ならずやで開催されるクリスマスパーティーの準備に俺と唯笑ちゃんは駆り出されている。参加費をそれぞれから集めており、メンバーはイナケン、たるたる、双海さん、静流さん、小夜美さん、正午、飛世さん、エトセトラエトセトラ。それなりの参加人数という事もあつて資金は潤沢。カナタからは良いワインとシャンパン用にと、おいそれと言えない額も預かつている。

本来ならば智也も俺と同じ目に遭うはずだったが、双海さんとデートという事もあって無理に連れ出すことは出来なかった。どこか上機嫌で出掛けた智也を俺と唯笑ちゃんは見送り、智也の機嫌と反比例して唯笑ちゃんの機嫌が墜落寸前。あいつ、買い出しから逃げるためだけに双海さんを利用したんじゃないよな？

「……うゝ」

「まだ心配してるの？」

眉を☒の字にして不安を隠そうともしない。智也が出掛けてからというもの、唯笑ちゃんはずつとこの調子だ。まあ、気持ちにはわからないでもないけど。

「だってえ、信君だって知ってるじゃん。智ちゃんってなんか詩音ちゃんという時だけ格好つけるんだもん」

いや、本人にその自覚はないだろうけど、確かに常識人のような振る舞いをしているな。もちろんその理由も察しが付くけれども、察しが付くから唯笑ちゃんは不安なんだろうな。

察してはいても俺達は何も言えない。その理由はあまりに痛いものだから。無意識のうちに出してしまう智也の優しさ、特別な誰かのためのソレは多分……

「重ねて見ているわけじゃないんだらうけど、無意識に出してしまうものはどうしようもないし」

「うん、わかってるよ」

高校の頃からの双海さん専用の悪癖は今も健在しているわけで。唯笑ちゃんもわかってはいても割り切れない部分があるのだろう。

どうにか唯笑ちゃんの機嫌を上昇気流に乗せなければと思考を巡らしていると、モールの中央に聳え立つツリー……に差し掛かる前の脇の通路で面白そうな玩具を見つけてしまった。

「唯笑ちゃん唯笑ちゃん、あれ見て」

ん？と可愛らしく首を傾げて俺の指さす方向に視線を向けると……

「信君、良い仕事するね」

「お褒めに授かり恐悦至極。で、どうする？」

「どうするも何も、邪魔しちや悪いよお……だから邪魔しないように観賞しよっ」

「合点承知」

天使の笑顔の背後には黒い翼がご機嫌に揺れている。

いやあ、同じ場所に示し合わせもしないで集まるだなんて、なんて出来た奴なんだ。

なあ、親友？

ネタの宝庫の四人へと、俺と唯笑ちゃんは嬉々として忍び寄った。

ああ、やつぱり……

いなくなつた一蹴を探していたら、今日だけは出会いたくなかつた二人が目の前にいた。

私がこんな苛立ちを抱く資格がない事は重々に承知しているけれど、それでも心の内でそう溜息を洩らしてしまう。

よりによつて恋人達に一日に――

今更三上さんの隣に澄んだ空気を纏っている美しい女性が誰かだなんて聞かなくてもわかっている。双海詩音さん。千羽祭で三上さんと特別な時間を過ごした女性。

その服……誰かに、ううん。三上さんに見てもらいたくて着てきたんですね？多数の羨望の視線等気にも留めず、たつた一人大切な人の為だけの特別。彼女の服装がそれを如実に語っている。

ぎゅつと、バッグを持つ手に力が入る。それでもしないと、私は誰にも見せてはいけない表情をしてしまいそうだったから。

「ナイスタイミングだな小娘」

そんな私の気持ちも知らず、能天気と言う言葉が服を着ているかのような三上さんがじーつと私を頭から爪先まで眺めてくる。

「ほほ、なるほどなあ。馬子にも衣裳つてやつだな。それなりに見れなくもないじゃ

ないか。やっぱデートともなると気合が入るらしいなあ。鷺沢もいつちよ前に大人びた格好しやがって。うむうむ、中々にお似合いじゃないか！」

——止めて、下さい……

がははと品無く笑いながら、商店街の居酒屋にいる酔っぱらいの方のように一蹴の背中をバシバシ叩く。叩かれている一蹴は、いや、まあ……と似合わない愛想笑いを浮かべていた。

「智也さん、こちらは？」

一人置いてけぼりになってしまった双海さんが、三上さんの袖をちよんちよんと引張って紹介を促す。

——親し気に名前で呼ばないで……

「あ、初めまして。双海詩音さんですよね？お噂はかねがね三上さんから窺ってました。私は陵いのです。よろしくお願いします」

「詩音、こいつはこのイケメンの彼女でな、親父経由でわけあって俺はこいつの家庭教師をしてやっている」

「そうなのですか……？え？智也さんが、家庭、教師……ですか？」

青天の霹靂のような顔で三上さんへと視線を向ける彼女に、三上さんはなんだよ？と不満気に問い掛ける。



「いえ、それはそれはさすが智也さんのお父様ですね。人の理解を超える事を平然とやってのけるのは血筋なのでしょう」

「俺と親父の両方に喧嘩売るとはやるな詩音。逞しく育ったようであれは嬉しいぞこの野郎！」

ぐわしぐわしと音が聞こえそうなほどに双海さんの髪をぐしやぐしやにし始める。

「ちよ、やめてくださ……すみません謝りますから！」

「謝罪の気持ち伝わらんぞ〜」

「もう！止めてって言ってるじゃない！」

「おっと、素が出たから一時避難つと」

ぐしやぐしやの髪をバッグから櫛を取り出して梳かしながらも、双海さんの口元はどこか嬉しそうに緩んでいた。

——その人に触らないで、下さい……

どこか所在なさげにしている一蹴の腕に、私は腕を絡めた。  
「い、いのり？」

うん、おかしいよね私。人前でこんな事普段しないもんね。でも今だけは一蹴に甘えさせて。一蹴がここにいる事を感じさせて。そうじゃないと、きつと今の私は何もかも滅茶苦茶になってしまう。三上さんの笑顔を奪ってしまう。その確信が出来てしまう。

「ほら一蹴、お二人の邪魔しちゃ悪いし、早くいこ」

出来てしまうから、脇目も振らずに逃げる事を選択する。この場に漂う毒が私の全身に行き渡ってしまわないうちに。

「あ、ああ……」

「それでは、失礼します」

目も合わせることが出来ない私に、気にした風でもなく三上さんはおうと軽く返事をした。

「なんだか可愛らしいお二人でしたね」

軽く会話でもと思ったが、何か用事でもあったのかすぐに二人は人込みに紛れて見えなくなってしまう。

「だろ？今の俺のお気に入りなんだ。あいつ等からかうの」

そう、きつと映画の時間が迫っていたとか、そんな理由なのだろう。

例え目を合わせようとしなくても、何かに耐えるように手が震えていたのを目にしたとしても……いつもならここぞとばかりに邪魔して毒を吐き散らすはずだったとしても、だ。

「それよりも、少しお手洗いに行ってもよろしいですか？」

「ん？なんだしようべ「髪を整えて化粧直しをしないとイケないの！智也さんの所為で！」……ウイームツシュ！」

まったくもうと素のままトイレに消える詩音を見送り、俺はそっぴや忘れてたと、ちやちやつと用事を済ませに行くことにした。

鏡に映る自分を穴が開くほどに見つめる。特別容姿に自信があるわけではないけれど、それでも私なりにメイクを頑張って練習してきた。普段メイクをしないため、紅茶を飲みに行った時に静流さんに教えて下さいと頭を下げて、そうしてこの日の為に頑張ってメイクを練習したのに……

「やはり、唯笑さんに比べると可愛くないものね」

唯笑さんがメイクをしたなら、智也さんは一瞬で気付いて照れ隠しでからかう姿が目に見えかぶ。

付き合いの長さの違いはもちろんあるのだろう。それでも、ほんの少し期待していたのに。気付いてなんでもないことを言うてくれるだけでも……なんて、女性の扱いに長けていたら智也さんじゃないものね。気付いてくれなくてもいい。これは私が智也さんの隣で少しでも綺麗でいたいから好きでしているだけ。子供の頃は受け入れてもらえなかった自分の容姿に自信はないけれど、智也さんはそんな私に笑顔でいられる居場

所をくれた。ありのままの私をあの人は何でもない事のように受け入れてくれる。

まあ、それでも女性としての魅力が私にはないのでは？と拗ねたくもなってしまう。朴念仁の最高峰です。ね、智也さんは。

軽く化粧直しをするだけのつもりが、少し時間が経ち過ぎてしまったみたいで、お手洗いをすると、智也さんはぼーっと壁を預けてモールを行き交う人々を眺めながら暇を潰していた。

「すみません、お待たせしてしまつて」

待たせてしまった事を謝ると、智也さんはどこか落ち着きなく頭を搔いて、あくだのうぐだの唸っている……故障したのかしら？

「待つては、いない。いないんだが……まあ、あれだ！あれなんだな！」

「どれですか？しかも、なんで大将混ぜてきたんですか。おにぎりが食べたいのですか？」

化粧直しの間に智也さんに何が起こったのか……まあ、通常運転と言えばそれまでですが、それでもいつもとは違う壊れ方をしているような気がする。業者さんと呼んで修理して頂くほかに手はなさそうに思えます。

「だからだな、その……なんか寒いよな！」

「寒い？空調が故障したのでしょうか？私は寒くないのですが」

「いや寒いんだよ！エベレストの山頂ぐらい凍えそうなんだよ！そうだよな！」

本当に何があったのでしよう。無理矢理力押しでこの場を切り抜けようとしている智也さんの様子に首を傾げつつも、そう、かもしれないねと曖昧に同意する。

そのような室温であったならクリスマス気分どころか、モールが無人の廃墟のような状態になると思いますが。

「だよな、寒いよな！」

私の仕方ない同意に満足気に頷きながら――

「……んー」

智也さんは後ろ手に隠していたどこかのブランドの袋をそっぽを向きながら私へと差し出した。

そっぽを向いた智也さんの耳は寒さの所為か微笑ましくなるほどに赤くなっている。

「これ、私に、ですか？」

あまりに突然の出来事に、それを手にして良いのかどうかわからずにきよとんととしてしまう。

智也さんは私の問いに何かを口にしようとしたけれど、何を言えば良いのかわからなかったのか、首まで真っ赤にしてただ頷いた。

差し出されたソレが何かを少しだけ期待しながら、そつと手に取る。

袋の中にはクリスマス色にラッピングされた長方形の箱が入っていた。

「開けても良い?」

呆然と夢見心地のような、地に足の着かないような、これまでに体験したことのないふわふわとした気持ちのまま尋ねると、小さくおうと聞こえた気がした。

リボンを壊さぬよう、ラッピングが少しでも破けてしまわぬよう、逸る気持ちを寸でのところを押し留めながら、一秒一秒を噛み締めるようにラッピングを解いていくと……

「これ……」

解かれた先に見つけたそれに、私は――

「――ッ」

お願い、そっぽを向いたままです。今だけは私を見ないで。

今日の為に静流さんにメイクを教わって、慣れないファッション誌を読んで、美容院で髪を整えて……女性としての努力をしてこなかった私が、興味を持つ事もなかったそんな事に頭を何日も前から悩ませた。智也さんに少しでも綺麗だと思つて欲しくて、それだけで下らないと思つていたことも楽しくて、頑張れて……

見てくれない? 見て欲しい? 馬鹿ね、私は。ちゃんと智也さんは今日の私を見てくれていた。その証拠が今この手の中にある。

私の髪の色と同じ少しだけシックな背伸びをした手袋。今日、私がしてこなかった物。

見て、くれていたのね。このプレゼントには智也さんの不器用な優しさが、温もりがこれでもかと込められている。

映画の中の俳優さんなら、黙って格好良く渡すのでしようが、智也さんは誰といても格好つけない。自分を良く見せようだなんて思いもしない。そんな智也さんだから私は……

「——ッ!!見てるこつちが寒いんだよッ。それにだな、買い物にも付き合わせちまってるし、つまり親しき中にも礼儀ありって格言がだな……詩音?」

何も言葉に出来ずにいる私へと振り向いた智也さんへと、私はこつんとその胸へ額をくつつける。溢れ出てしまう気持ちの証拠を悟られないよう、今の私の気持ちを少しでも伝えられるよう、もつと、もつと近くに——

「ありがとう……これまでの人生で一番幸せなクリスマスにしてくれて」

今、智也さんはどんな顔をしているのか見れないのが残念。顔を上げてしまってもつと止められなくなってしまういそうなもの。だけど、どんな顔かなんて見なくてもわかっ  
てしまう。

「お、大袈裟なんだよ馬鹿。ていうか恥ずかしいから離れろって詩音!すげえ向こう側

から視線集めちゃってんだけど!？」

——きつと、私と同じ顔をしているに違いないのだから——

普通に考えれば、こちら辺の奴はこのモールに買物に来る確率は高いのだから、三上が双海さんといっても何も不思議じゃない。ただ、恐ろしくタイミングが最悪だっただけで、三上は何も悪くない。クツソ間が悪いなどは思うけど。

三上と別れてからのりはずっとにこにこしている。三上と会う前以上に楽しそうに。以前までの俺ならそんないのりの様子にアホみたいに都合よく騙されていたけど、今は違う。女優のような演技の顔を俺は見逃すことが出来なくなっていた。どんなに苦しくても、辛くても、見逃すようなアホになつてはいけない。俺はいのりの全てを受け入れると誓ったんだからな。

いのりの演技に俺はいつも通りで返す。俺の苦しみなんで、いのりが受け持ってきた傷と比べたらなんでもないと強がって。

どれだけ心が疲弊しようとして俺は逃げてはいけないのだと言いつ聞かせる。モール内のクリスマスソングとライトアップが急に色褪せたように感じた。

お互いを見ているようで、あえてその気持ちと視線を合わせないように過ごしていると、フードコートから俺達を呼ぶ声が聞こえた。



「やつほー、いのりちゃん！一蹴くん！こつちこつち〜！」

声をした方を振り向くと、テーブル席にたこ焼きを頬張る今坂さんが手を振っていて、その向かいには、両脇にピラミッドを作った奴隷のがまだマシと思えるような量の荷物を置いてげっそりしている信がいた。

「今日は良く知り合いに会う日だな」

そういのりに笑い掛けると、そうだねといのりも笑って返す。

まったくしょうがねえなあと溜息をしながら今坂さん達の席へと向かいながら、俺は正直内心ほっとした自分を自覚していた。

俺達も荷物を置いて、空いている二席にそれぞれ荷物を置いてお邪魔することにした。

「何してるんすか？」

「唯笑達は今日のパーティーの買い出しだよ。ねえ、信君？」

「……買い、出し？これが？」

何を言っているんだこの既知外はと言うような目で今坂さんへと驚愕の目を向ける信だが、今坂さんは可愛らしく首を傾げて返した。正真正銘鬼の一族だよあんたは。

「二人はクリスマスデートかな？」

「はい、今日は夜まで二人でいようって」

「夜まで？ずつとじやないの？」

「あく、今日はいのりのご両親が少しの間戻ってくるらしいんですよ。俺も鷺沢の家に呼ばれてまして。いのりも連れて来いって言われたんすけど、そういうわけなんで」

そうなんだあ、と紙コップに挿しているストローを手で遊びながらいいなあくと羨ましそうに呟く。呟きながら、今坂さんは信へと何かを目配せするかのような目を向けた。

「今坂さん達も楽しそうですね。ならずやでパーティーするんですよ？ほたる先輩も参加するって連絡ありましたし、先輩達によろしく伝えておいてください」

「あ、そういえばほたるちゃんの後輩だもんね」

「そういえば、今坂さんってほたる先輩とは？」

「ほたるちゃんとは中学校からの友達だよ。中学校の子達は結構浜咲に行っちゃった子が多かったんだあ」

「へえ、そうなんすかあ……？」

という事は、先輩は三上の事を知っているのか。でも伊波先輩はその事を知っているのだろうか？いや、そういう人の繊細な部分を誰かに話すようなことをする人じやないし、伊波先輩は知らないんだろうな。

「昔はよく放課後に三人で教室で集まってたんだよ。彩ちゃんと唯笑とほたるちゃん

ね。たまに果凛ちゃんと黒ちゃんが混ざってね、智ちゃんがない時は今思えば下らな  
い話を飽きもせずにしてたなあ」

当時の事を思い出しているのか、どこか遠い眼で語る今坂さんは俺達の何倍も大人に  
見えた。普段子供にしか見えないからギャップが極振りされてる感はあるけどさ。

「一蹴君はそういう親友とかいないの？」

「あゝ、俺はそういうの無いっすね。軽く遊ぶくらいで、信と三上のような友達はいね  
えっす」

「つまりボツチなんだね」

「言い方。可哀想な目で見るの止めてくれないですかねえ!？」

「一蹴の場合はイケメンでコミュ力ないから同性に嫌われるタイプだよな。スカしてん  
じゃねえよみたいに」

「俺を弄る時だけ元気になつてんじゃねえよ!」

二人が俺を弄つて、それに俺が突っ込んで和やかな雰囲気へと変わる。そんな日常  
が、当たり前前なのが今はとてつもなくありがたいと思う。

別に意図してやってるわけじゃないんだらうけど。てか、単におもちゃを見つけて喜  
んでるだけだろこの二人。

そうして少しの間他愛ないけど貴重な時間を過ごしていると、よっこいしよと信が立

ち上がった。

「二人の時間邪魔したお詫びに飲み物でも奢ってやるよ。何がいい？」

信にしては珍しい気を遣うなど感心しながら、俺はコーヒを今坂さんはまさかのドトー○のカフェラテを頼んだ。ドールって、ここから結構離れてるのに、信と三上に対しては頭おかしくなるなこの人。

「オツケー」

いいのかよ。調教され過ぎだろ。いや、甘やかしすぎているから今坂さんがこうなったのかもしれない。

「じゃあ悪いんだけど、いのりちゃんも手伝ってくれないか？」

「え？ 私ですか？」

いのりの疑問は最もだ。わざわざカップルを引き離すような真似を……するなこいつ等なら喜び勇んで積極的に邪魔をする。

「いやさ、唯笑ちゃんが一蹴を弄りたくて仕方なさそうだから」

「今坂さんへの気遣い方おかしくね!？」

そういう人選かよ！

ある程度仲の良い奴の奢ってくれると言う言葉を無下にも出来ず、微笑んでいのりは了承した。その了承、彼氏を生贄にする罪悪感に含まれてるよな？

「じゃ、行つてくるね一蹴……今坂さんを頑張つて楽しませてね」  
「善処するわ」

信といのりが消えると、今坂さんは鼻歌を歌いながらストローを振っていた。

「まったく。てか、今坂さん飲み物必要ないんじゃないっすか？それあるし」

今坂さんの目の前に置いてある紙コップを指差して指摘すると……

「うん、そだよ。よく見てるねえ、一蹴君は」

「やっぱりね。信を扱き使つて遊び」「唯笑が一蹴くんの担当だからね」……は？」

予期せぬ言葉に俺は言葉が続かずに、その意味すらもわからずに呆けてしまう。俺の担当？この人は何を……

わけもわからず言葉が出ない俺に今坂さんはいつもの今坂さんから、年上のお姉さんへと変貌する。

「一蹴君、そのままじゃ君が疲れちゃうよ。だから私に話してみない？悩んでることも、抱えてることも。私が良い知恵貸したげるから、ね？」

「手伝つて貰つて悪いね」

「いえ、そんなことないですよ」

道中、拷問を受けた稲穂さんは疲れ切った顔をしながら、苦笑している。

悪いね、なんて謝って貰う必要なんてどこにもなかった。むしろ、感謝しないといけない。せつかく一蹴と二人で過ごしているのに、一時も頭を離れてくれない光景が邪魔をしていたから。

機械のように同じ顔をする私を自分自身自覚していた。だから、少しでも鉛を仕込まれてしまった心を軽くしてくれる、そんな二人が心底ありがたくて……

「それにしてもいのりちゃんも大変だよなあ」

「大変、ですか？」

稲穂さんは笑顔で頷き、なんでもない事のように……

「あの馬鹿、鈍感でごめんなあ。親友として代わりに謝るよ」

瞬間、私の心は自分でも驚くほどに凍り付いた。

凍り付いたのは一瞬。即座に巡る思考。

稲穂さんは親友が鈍感でごめんと謝っただけ。別に恋愛がどうのこうのといった話じゃない。ここで動揺すれば余計に勘繰られてしまうかもしれない。それだけは絶対に避けなきゃいけない。それなら私の正解は一つ。

「え？鈍感って三上なんとかさんが何かしたんですか？」

いつものようにあの人を無理にでも弄って受け流すしかない。

「何をしたか知りませんが、今度会ったら徹底的に叩きますから安心して下さい。二

度と立てないくらいにして見せますから」

唯一つの正解と信じて選択したはず。それなのに、稲穂さんは茶化そうともせず、どうしようもない我侷な子供をあやすかのように、穏やかな目をして微笑んでいる。

その目を直視出来ずに、思わず視線を外してしまふ。

「まったく、こう言えばいのりちゃんならそう返すとは思ってたけど、強情だな君は……ちよつとそこで座つて話そうか」

ロビーの端に設置されているベンチを指し示しながら、有無を言わせずそちらに歩いていく。その背中を見てようやく私は気付いた。

ああ、一蹴と私を離れたのつてそういうことだったんだつて。

「な、悩みなんてないつすよ。いきなりキャラ違うこととしてどうしたんすか？」

なんなんだよ。担当つて、そう言つたよな？てことはさ、最初から今坂さんも信も俺達を引き離す為に動いてたつて事だよな？

嫌な予感に鼓動が早くなる。

まさか、いのりも同じように……

じわりと、掌に汗が滲む。

「すみません、俺やつぱり——」

立ち上がり、いのり達の後を追おうとすると、これまでの今坂さんとは違う、静流さんとも違う温もりと慈しみに満ちた視線が俺を数舜金縛りさせた。

「お願い、少しだけ話をさせてくれないかな？少しだけでも良いんだ、ほんの少しだけ私達の恩返しを受け取ってくれないかな」

恩返し？この人は何を言っているんだ？恩を返すならなんでこんな……

「信君とね、話したんだよ？二人の事。私達は、一蹴君といのりちゃんに感謝してもしきれないような恩を貰ったの。だから、ね。そんな二人に私達は笑っていて欲しいんだよ」

意味がわからない。そう思うのなら俺達を放っておいてくれよ。そうすればいつかはきつと、去年の俺達のように笑える未来があるんだよ。俺がそうするって、そうしてみせるって決めたんだ。

今坂さん達からしてみれば些細で小さな誓いかもしれない。それでも、そんな俺の誓いを邪魔される謂れなんてないだろ！

「わけわかんねえ。何が言いたいんだよ、はつきり言ってくれないっすか？」

年上で、世話になった人への態度じゃないし、自分が子供だとも恥じ入りたくなくなる。だけど、胸の内でも暴れ狂う感情に比べれば小さなものだろう。

そんな子ども染みた俺に、ちいさく微笑みながらごめんねと謝り、次に紡がれた言葉



に俺の激情は急激に萎んでしまった。

「一蹴君の気持ち、私はわかるから。信君でも、智ちゃんでも、彩ちゃんでも誰でもなく私だけが知ってるんだよ。だからわかっちゃうんだ……このままじゃ、一蹴君もいのりちゃんも自分で自分を世界で一番嫌ってしまうって」

「実はさ、さつき双海さんと智也の二人といのりちゃん達が会ってるの偶然見かけたんだよ」

「……偶然って、嘘ですよね？」

「はは、バレたか」

「バレますよ。三上さんの親友の取る行動ぐらい」

「言えてるな」

呑気に笑う稲穂さんと、どの仮面を被って眠る自分を隠すかを必死に考える。まだどこかに抜け出せる道があるはずと、小さな隙間も見逃さないように。

「でさ、そこでどうにもおかしな行動をした子がいたんだよ。いつもなら俺の親友の楽しみを邪魔して自分が楽しむ……君はそういう子じゃなかったかな？」

確かにそれは自分でも理解している落ち度。理解して尚あの場にいる事がどうしても耐えられなかった。あんなにも自分が仮面を被っていても弱くなってしまうだなん

て知らなかったんだもの。

でも、それくらいなら別に焦る必要もない。

「おかしいですか？ 双海さんとは初対面ですし、あまり初対面の人の前で礼儀を欠くのはどうかと思っただけなんですけど……」

常識的に考えた答えで十分に満点の回答が得られる。

「うん、まあ普通はそうなんだけども」

ほら、これで稲穂さんは……

「じゃあ、なんで俺達と会った時智也と一緒にじゃないか……いや、会わなかったかを聞かなかったのかな？」

その問いに咄嗟に口を開くも、いつもならスラスラ出て来る回答が口から生まれてこない。情けない無言だけしか口から洩れる事はなかった。

「双海さんと出掛ける事は知っていた事だろ？ でも、君はモール内で二人に会ったじゃないか。それなら自然とこう聞くはずだろ？ 智也とさつき会った、もしくは会わなかったか？ つて」

そう、稲穂さんはあの場で既にチエックメイトを打っていた。それに気付くこともなかった致命的なミスに全身に寒気が走った。

「二人の邪魔をさせたくなかった？ 違うな。俺も唯笑ちゃんも双海さんと仲がいい。

会つても楽しくなるだけで二人も邪魔だとは思わない。頭が良い君ならむしろ相手が喜ぶような行動と話をするはずだ。そもそも智也に特別な子が唯笑ちゃんと彩花ちゃん以外にいないって君は嫌って程に知っているんだ。そこまで浅い関係じゃないからねいのりちゃんとは。となると、さて君はどうして俺達に智也の話をしなかったのか……これでも彩花ちゃんも混ぜて四人セットが自然だつて自負はあるからね、そんな俺達に智也の話題を避ける理由はなんだろうか？」

しまった。少しの間混乱していてするべき言い訳を先回りされて潰されてしまった。一番ベストの答えは二人の邪魔をさせないようにだったのに。私の行動としては不自然さは残るかもしれないけれど、そう口にしてしまえば強行突破出来たのに。

他に何かないかと必死に思考を巡らせる。

「そ、それは……その、聞くまでもないかなって」

「どうして？俺達を巻き込んであの二人を楽しく邪魔しに行こうとは考えなかったの？」

「ふ、双海さんに迷惑が掛かるのは、その初めて会ったわけですし気を遣うのはむしろ当然じゃないよ。こと、智也が関係していたら尚更にね——ッ!!」

次々と追い詰めてくる稲穂さんに苛立ちを隠せそうにない。下唇を噛んでなんとか苛立ちを誤魔化す。

「なるほど。いのりちゃんはずっと一蹴の為に仮面を被ってきたんだ、ちょっとやそつとの事じゃ仮面を引き剥がせないってのは知っていたけど……自分で気づいてないんじゃないか？その仮面、とつくに罅割れてるって」

「んだよ、それ……今坂さんに俺の気持ちなんて……」

「知ってるよ」

知るわけがない。何よりも、この地球よりもずっと重い存在が、いつでも傍にあった愛おしさが、俺からどんどん離れて行ってしまいう気持ちなんて！

それまで傍にあつた温もりがどんどん離れて行って身体は徐々に凍えていって……少しづつ失う恐怖を知るわけなんてないんだ！

「だって、私はずっと愛している男性（ひと）が誰よりも大切な女性（ひと）と一緒にあった事があるから……だから、一蹴君よりもずっと先輩なんだよ。知らなかったかな？」  
慰めるかのような口調で紡がれた言葉に、俺は自分の愚かしさを呪ってしまいたくなつた。知っていたはずの事を自分勝手に忘れて糾弾しようとしていた。

そう、だよな。今坂さんの言う通りだ。今俺と関わる人の中で唯一この人だけが俺の気持ちを知りも知っている。それどころか、俺なんかよりもずっと……

「……知ってたんすね、いのりの気持ち」

じゃなければ俺にこんな事を言うわけがない。

「ごめんね、余計なお世話なのもわかっただけに……それでもこのまま放っておけなくて」

椅子に座り直して俺は今坂さんの目を見て話すことが出来なかった。

「なんでですか。放っておいてくれればいいじゃないですか」

今坂さんの目を直視できないまま、項垂れたように俺は膿を出しきってしまうようにぼつぼつと、抱える気持ち垂れ流していく。

「今はそりゃ辛いっすよ。どんなに抱いてもいのりの気持ちはもう俺にはないって……抱けば抱くほど痛感するし。でも、それは今だけで俺さえ我慢して耐えればなんてことはないんですよ。また元に戻るはずなんだ」

俺の情けない言葉に今坂さんはどんな顔をしているのだろうか？

「幸いにも三上は全然いのりの気持ちに気付いてなさそうだし、気付いたとしても応える気はないわけで、いのりはいのりで俺と別れるなんて出来ないわけだし」

「そうだね」

「三上が原因で別れたなんて、三上が許すはずがない。あの天性の馬鹿の三上が誰かを傷つけてしまった原因が自分だなんて、傷つかないわけがないんだ。いのりもそれを知っているわけでしょ？つまり、三上とこれからもいるためには俺が必須なんだ」

「天性の馬鹿って、上手い表現だね」

「そんなわけだから時間なら沢山あるし、何も気にする必要なんてないですよ」

自分がどんなに情けない事を口にしてるかなんて自分が一番良く知っている。

自分がどんなに格好悪いかなんて自分が一番よく知っている。

こんな自分がいのりの隣にいる男として相応しくない事も誰よりも一番知っている。それでも、どんなに格好悪くても、情けなくても、泣いて喚いてのた打ち回つても……

どんなに醜くても俺は悔しい程にあいつに惚れてしまっているんだ。それだけが俺の心の拠り所だから、手放すことなんて微塵も考えない。考えてたまるかよ。

「……見損なつてもらつて良いっすよ」

顔を上げることが出来ないまま、後ろ向きな強がりをして口にする。

こんなだせえ俺を今坂さんは同情の目で見ているだろうか？それとも呆れているのだろうか？

「別に誰になんて思われても構わねえ。いのりとこの先も歩いて行けるなら、少しでもあいつを幸せにできるなら俺はどんな泥だつて——ッ!?!?」

不意に柔らかな温もりがゆっくりと労わるように、俺の頭に寄せられた。

まるで小さな子供をあやす様に、優しく傷つけないように、そんな気持ちが伝わってくるような手つきで、ゆっくりと撫でられる。

驚き顔を上げると……

「ほら、やっぱり自分を嫌いになっちゃってる。しょうがないなあ、もお」

俺の情けない話を聞いても尚、今坂さんの表情は崩れることなく、なんでもない事のように微笑んでいる。その笑みが俺の中の何かを震わせる。体の芯から込み上げてくる底に沈めていた感情が決壊してしまいそうで、ぐっと目に力を込めて寸でのところを押し留める。

これ以上この人に子供の自分を見せたくないと意地を張ってしまふ。

目の前にある全てを許してくれそうだと思わせる、今坂さんの穏やかな笑み。

「うん、一蹴君の気持ちは良くわかるから、だからもう自分を責めなくても大丈夫だよ」  
まったく、あのトラウマ製造機はとんでもない人を育ててしまったらしい。

名は体を表す……その通りじゃないか。

今坂唯笑。唯一の笑顔で唯笑。この人の笑顔は光の届かない暗闇の中にあってもきつと色褪せないだろうな。三上が守ろうとしていたもの……それは、どこにいてもとも日常へと引き戻してくれる、唯一不変のこの笑顔だったんだな。

「じゃあ、一蹴君にだけ特別教えたげるね。私がどうして智ちゃんと彩ちゃんが恋人になる事を望むことが出来たのか。智ちゃんも彩ちゃんも信君も、誰も知らない秘密だから、一蹴君も絶対に誰にも喋らないって約束だよ」

悪戯な笑みを浮かべて語る誰も知らない物語。

その物語は今坂唯笑という三上達にとつて絶対の存在が、決して特別なんかじゃない。どこにでもいる普通の女の子なのだ。如実に語るそんな物語を。

「誰よりも自分が一番自分の事を知ってるなんてさ、嘘なんだよ。人間つてのは自分の気持ちですらままならないんだから。今のいのりちゃんのように、恋愛感情は特にね」  
稲穂さんは私が三上さんを好きなのだと疑つてすらいらない様子で、私が認めるのを待っているかのようにもあつた。

罅割れている？何を言っているの？そんなわけがない。そんなこと、あつていいわけがないじゃない！

「ふふ、稲穂さんは私にどうしても三上さんを好きって言わせたいんですね」

「違うの？」

「違うも違わないも、私があんな人好きになるわけじゃないじゃないですか」

お願いです、暴かないで下さい。

「いつも適当で人の気持ちなんて考えもしないで突つ走つて」

あの人の傍にいさせて下さい。

「自分の行動が誰かを心配させてるなんて少しも考えてなくて」



いたいんですよ。失くしたくないんです。

「そのくせ、自分の事なんかどうでもよさそうに、なんでもない事のように勝手にどかどか人の気持ちに踏み込んで、頼んでもないのに勝手に助けた気になって」

私の気持ちなんていくらでも殺していいですから。

「迷惑甚だしいじゃないですか。見返りくらい求めてくればまだ可愛げもありますが、打算なんて考えもしない顔でとぼけて」

この心が辛くても、寂しくても、壊れても……その程度で傍に居られるのなら、この先幾夜でも独りの夜を過ごしてみせますから。

「ほんつとに馬鹿な人ですよ。頭が悪いから打算的に動けないのでしようけど、質が悪いじゃないですか。自分が壊れそうなくせに笑って、平気な顔して手を差しだして。強い？優しい？どうですかね。鈍いだけなんじゃないですか？ああ、確かに鈍感ですよ。ねあの人」

嫌い。大嫌い。こんなやり方でしかあの人の傍に居る方法を思いつかない、そんな自分が……卑怯な自分が世界の誰よりも嫌い。

「あの人を好きになる人の気持ちなんて全然理解出来ませんよ。自分勝手に鈍感で馬鹿で、優しくなんてこれっぽちもなく、どんな時もふざけて笑ってばかりで、ほんと懲り懲りで……だから私は、あの人の事なんか……」

そんな卑怯者のくせに、言うべき最後の言葉が喉から絞り出そうとも出てきてくれない。

駄目、だよ。言わないと。嘘なら慣れてるじゃない。だって、私の先生は嘘つきの天才だもの。生徒の私だって、この程度の嘘を平然とついで見せないで、ですよ？

「あの人の事なんか、大っ嫌「オーケー、もうお腹いっぱいだよ。ご馳走様。これ以上は胸焼け起こしちゃうからストップな」……はい？」

熱い熱いと眩きながら稲穂さんはぱたぱたと顔を手で仰いでいた。

「あの、私の話聞いてましたか？」

「聞いてたよ。いやあ、青春だねえ。俺にもあつたよそんな時期が」

「青春の話なんてしてませんでしたけど!？」

まるで四十代の親戚のおじさんのような反応。何がどうしてそうなるんですか!？」

「してたじゃんか。智也の事が好き好き愛してるくって」

「してません!!しかもなんで子供みたいな揶揄い方なんですか!？」

「ま、いいんじゃない。うんうん、君の好きにしたらいよいよ。俺は観客として君らのコメデイを楽しませてもらうからさ」

「どこをどうしたらコメデイになるんですか!?!別に好きじゃないですけど、仮にそうだとしたら一昔前のドラママのようにドロドロになりますよ!?!」

「いや、あの手のドラマってコメディじゃん。まさかリアルで観ることが出来るとはね。しかも、あの智也相手に！智也の時点でギャグだよねもう」

やっぱり稲穂さんはあのとんでも人類代表の三上さんの親友だ！この状況でお腹を抱えて笑えるだなんて、一般市民じゃないもの！

「なんなんですか、もう」

「はは、ごめんごめん。じゃあさ、特別にいのりちゃんに教えてあげようか？」

「……もういいです。早く飲み物買いに行きましょう」

涙目で笑われたことに多少なりとも腹が立ち、私は椅子から立ち上がったのだけれど  
……

「ああ、じゃあ歩きながら話そうか。彩花ちゃんには出来なくて、いのりちゃんには出来る当たり前のことをさ」

……

……

……

「あの、別に好きじゃないんで聞く意味ないんですけど」

「もはやツンデレに思えてきた!!」

「コーヒーを買って戻ると、唯笑ちゃんは俺に向けて手を振り、一蹴はおっせえぞとぶつくさ文句を言ってお出迎えてくる。」

「どうやら一蹴の方は問題ないようだ。最初はやたら居心地悪そうな顔をしていたものだから心配したが、唯笑ちゃんが上手くやったのだろう。吹っ切れたような快活な笑顔をしている。」

「そつちはどうだったの？」と唯笑ちゃんから目配せが送られ、俺は肩を竦める。これからどうなるかは俺の知った事じゃないし、いのりちゃんが鬱々としているのも正直そこまで心配はしていない。」

「少しでも素の彼女を知っていれば、違和感バリバリの笑顔でいるものだから、つい出しゃばってしまったけど、恋愛なんて時には鬱々とするもんだしな。しかもいのりちゃんには一蹴という好きな彼氏もいるわけで。ただ、それは智也も一緒なんだよな。基本的にあいつと付き合うという事は、彩花ちゃんの事も受け入れる必要があるわけで、つまり二股ってこと。あいつの場合はだからっていのりちゃんのようにここまで鬱々としないし、なんだつたら清々しい顔で二人に好きだと言いつうだな。どこの結婚詐欺師かホストだよあいつ。」

「ほら、コーヒー」

「ああ、サンキュ。そんじやいのり」

コーヒーを受け取ると、一蹴は小さなガキ大将のように歯を見せて笑い……  
「ゲーセンで一緒に遊ぼうぜ！」

いのりちゃんの手を取って駆けだす。

「え、え？ちよ、一蹴ゲーセンって、一緒に食事に行くって言ったのに!？」

「そんなの後回し！今日は思いつきり遊ぶんだよ！まずは太鼓な！」

「えく!?私苦手って、一蹴待ってよお！」

「二人共く！夕飯までには帰ってくるんだよおく！」

走り出す一蹴と、嵐に連れ去られるいのりちゃんに唯笑ちゃんが手を振りながら声を掛け、それに一蹴がこれまた元気に返事をして消えていった。

「……唯笑ちゃん、いったいどんな魔法使ったわけ？」

突然の一蹴の変貌に何が起こったのか気になって聞いてみる。

「ふっふっふっ、内緒。名カウンセラー唯笑って呼んでも良いんだよ？」

何が何やら。怪しい薬でも使ったんじゃないか？

「さてと、それよりも信君？」

「ん、何？」

「あとその二倍は買わなきゃだから覚悟してね？」

「待って、今から智也呼ぶから。なんだったら捕まえてくるから！」

一蹴といのりちゃんがどうしたつて？地下労働を命じられている俺より苦しくないだろうが！

とりあえず姫にパフェを献上して食しておられる間に、モール内にいる羊二匹を決死の覚悟で捕獲しに向かった。

「別に私は綺麗事で彩ちゃんを応援したわけじゃないんだよ。あのね、私はただ私自身を嫌いになりたくなかったの」

「どういうことですか？」

「だって格好悪いじゃんか。二人の事を祝福出来ない自分を想像したらね、もう壮絶にダサかったの。想像してみても、そんな唯笑……じゃない、私の事」

「確かにクソだせえけど」

「でしよう？それにさ格好良いじゃない？二人の幸せを想って身を引くつて。しかもそうすることで二人の傍にもいれるわけだし、一石二鳥だよね」

「えく？でもそれって今坂さんの気持ちはどうなるんすか？」

「どうなるもなにも、智ちゃんの事好きのままだよ」

「そうじゃなくて、もう勝ち目ないじゃないですか」

「あゝ、お子様だなあ一蹴君は。あのね、恋愛なんて何があるかわからないんだよ？どん

な事で別れるかわからないもん」

「うっわ、隙見て奪おうってことっすか？」

「人間きが悪い言い方するなあ。そういう可能性もあるって話。少しはそういう考えもなくはなかったよ」

「俺の中の今坂さん像が崩れてく」

「幻想抱き過ぎだよ。そういう打算がなかったわけじゃないし、だから少しでも二人の傍に居られる方法を選択しただけだもん」

「あんたの親の顔が……二度と見たくねえや」

「それに考えても見てよ。彩ちゃんのこと大好きで、智ちゃんの事も大好きで、その二人の笑顔がずっと見れるって凄いいお得だよ。唯笑のおかげで」

「自分の功績だつて言っちゃったよ！デメリットよりメリットの多い方選択したってわけですよ!」

「人間関係ってデメリットとメリットって大事だよお」

「まあ、最近染み染み感じてますけど……なるほど。つまり今坂さんは見栄っ張りなんですわね」

「その言われ方は嫌だなあ」

「だってそうじゃないっすか。世間的に格好悪いのは嫌で、自分が綺麗なままでいられ

る方を選んだわけでしょ?」

「黙ってれば格好いいもん」

「だから秘密だったわけっすか。確かに三上や信には言えねえ」

「言ったらお母さんを派遣するからね」

「来世でも守りますから勘弁!にしても、卑怯ですな今坂さんって」

「でしょ、だから一蹴君も打算的に「そうじゃなくて」にや?」

「だって、今坂さん信じてるでしょ?万に一つも二人が別れる事なんて前世だろうが現世だろうが来世だろうが、どこだろうとどんなに時間が経とうと、あり得るわけがないって。今の三上が松月さんに心底惚れ続けているのがその証拠じゃねえかな」

「ふふ、バレちゃったか。そうなんだよね。二人が別れるなんて、奇跡的な確率だからね。だから真剣に元旦に一夫多妻制を毎年神様をお願いしてたんだもん」

「毎年初詣に行くたびに何願ってたんだあんな!?!」

「良いんだよそれくらい凶々しくても。二人は許してくれるもん」

「甘え方えげつないな!!」

「だからね、もつともうつと一蹴君も凶々しくて良いんだよ」

「……え?」

「いのりちゃんと一緒にいたいなら狡くても何しても一緒にいればいいの。どんな事が



あつたつて一緒にいれば良いんだよ。大事なのは一蹴君が笑顔でいられるかどうかかなんだから」

「今坂さん」

「一蹴君はどんな自分なら笑顔でいられるか、それだけを考えて。そうすればきつと智ちゃん、ううん。私がどうにかしてみせるから、ね？」

「……良いんすかね、それで」

「いいのいいの、昔の智ちゃんなんか彩ちゃん、私の気持ちなんて考えた事もないんだから。あ、二人が戻ってきたよ。一蹴君、今の内緒だからね！」

閑静な住宅街に店を構える『ならずや』。本日は一日貸し切りとなっており、常連の大学生諸君、もしくはは社会人によるクリスマスマスパーティーが行われる。

店内は参加者により煌びやかに装飾され、小さな簡易ステージも用意されている。

いつもは騒々しく謎に満ちた看板娘と、近所のマダムを虜にするイケメン店員はそれぞれ予定があり不在。店長はいつも通り厨房の妖精となり、唯一静流だけがカウンター内でなぜかサンタコスの上で立ちでフロアを楽しそうに眺めている。

立食形式でテーブルの上でこれでもかと言うほどのオードブルがひしめき合い、参加者の手にはお洒落なシャンパングラス。

楽し気に会話している参加者たちの前に一人の男がステージに上がり、全員がようやくかとその男に視線を注いだ。

マイクを手に持ち、男はフロア全体を見回し……

「この道を行けばどうなるものか……危ぶむなかれ、危ぶめば道はなし。踏み出せばその一足が道となり、その一足が道となる。迷わず行けよ！行けばわかるさッ！」

間違っていた。壮絶に徹底的にシチュエーションを彼は間違えていた。

ここはリングの上でもなければ、上裸の筋肉質な男達もない。

顎をしゃくれさせ、微妙な物真似に白けた空気が漂うが本人は一切気にしない。彼の宿敵とも呼べる伊波健が、彼のネタを全力無視して恋人といちやつこうとも気にしない。少々腹が立って、もう少し長々とネタをしてやろうかとも思ったが気にしない。日本の文化に疎い詩音が首を傾げていてもなんのその。

「それではあ、御唱和ください。いくちーに〜！さ〜ん！」

『メリークリスマスマースッ!!!』

こうして一年で一番賑やかで、一番鬱陶しく、一番嬉しい夜が幕を開けたのだった。

「本気でないと思わない静流!」

一年に一度の聖夜。特別なはずのパーティーで、一人スーツ姿でセクシーサンタに絡む酔っ払いが一人。社畜お姉さん小夜美である。彼女がその場にいるだけで、パーティーとは名ばかりに居酒屋へと変貌していた。

「だから嫌なのよね女がそこそこにいる職場つて。ちよつとしたことでグググ言つてさあ! 大したミスでもないんだから黙つてフォローしろつてのよ。一々その程度の事で仕事止めてたら仕事が回らないつての。こっちは残業したくないのに、うちの社員の男連中も可哀想よねえ! 口を開けば悪口ばかり。SNSだけじゃ物足りないらしく、リアルでも炎上させてんのよ。そのまま燃え尽きちゃえばいいのに」

だが、そんな親友の社会人あるあるに慣れている静流は涼しい顔で、本当に大変ねえく。うんうん、わかるわ。小夜美は頑張つてるもの。という定型句を繰り返してちびちびとワインを飲む。

ここで炎上している小夜美への消火器はどこかしら? と思案していると……

「クリスマスまで社畜の憂鬱振り撒いて何してんだあんたは」

小夜美を灰に変えるほどの燃料がわざわざ顔を見せに来た。

「何よお? なんか文句あんの? どうせね、智也君だつてあと何年もしないうちにこうなるんだから。今はまだ良いかもしれないけどね、社会に出れば嫌つて程女の醜い部分を

見るんだから」

「今正に見てるのは醜くないのかよ」

「失礼ね！どの角度から見ても完璧美人でしょうが！」

「どの角度から見ても飲んだくれの親父なんだよ！ねえ静流さん！」

厄介な絡みをしてくる小夜美の矛先を変えようと智也は静流へとパスを出したつもりだったのだが……

「そそそ、そうね。うん、良いんじゃないかしら。ブツシユドノエルでクラシックシヨコラなのよね」

智也から目を逸らし、顔をこれでもかと紅潮させ、目をぐるぐるさせて頭からは煙が昇っている。端的に言えば修理に出すレベルだった。

彼女が故障するのも無理はない。智也に意識がなかったとはいえ、彼を前にすると自分の初めてを捧げた夜が鮮明に蘇ってきて、まともに智也の顔を見ることが出来なくなっていた。

これまでの人生、彼女ほどの美しさを持つ女性にしては珍しく、男性経験などほぼ皆無。手を握ったのはいつだったか……小学校の時のフオークダンスだけという悲しい過去だけ。

そんなおぼこな彼女が大胆な行動をとったのだ。この程度の故障で済んでいるのが

奇跡なのかもしれない。

あの夜以来、智也を前にすると動悸が激しくなり、何かと逃げるようになっていた。

「ん〜？ 静流さん、なんかこの前から思ってたんですけど……」

窺うような視線と言葉に、静流の心臓が止まりそうになつてしまふ。もしや自分の気持ちに気付かれたのではと。

そうだとしたら智也はどんな反応をするだろうか？ 想像すると怖くもあり、どこかで都合の良い期待もしてしまう自分がいた。

「日焼けしました？ やたら顔が赤いけど」

期待した自分、雪に埋もれて息絶えて。

静流は智也に限つて恋愛関連で鋭いわけがないと、安堵と少しだけ残念な気持ちが混ざつたため息が漏れた。

「あはは！ んなわけないじゃない智也君！ あのね、静流は親友を差し置いて君の——ツ！！?!」

人の恋路を笑顔で踏み躪つてレースから脱落させようとした親友に、静流は即座に柵からスピリタスをボトルごと小夜美の口へと流し込む。（良い子は真似しないでね）

「うおー！ い！！ 静流さん！ 致死量！ それ良い子が真似出来ない致死量だから！」

「大丈夫よ。小夜美は一日これを一升呑まないと調子が出ないっていつも言ってるも

の

「産まれる国どころか産まれた種族間違ってるからそれ！」

「心配しなくても大丈夫よ。ねえ、小夜美？」

「……………」

「無言で白目向いてるじゃないかよ！違う世界覗いちやつてるよその白目！」

「まったくしようがないわね小夜美は。それじゃ奥に寝かせ「ふふふ、この程度であたしを倒そうだなんて甘いわね静流」……誰かしら？死者蘇生を使ったの？」

「こ、小夜美さん？救急車呼ばなくても良いの？」

「はあ？この程度で倒れてたら社会人やつてられないわよ。世のサラリーマンはみんなスピリタスの一升や二升軽く飲む企業戦士なんだから」

「人間辞めなきや就職出来ないなら俺ニートでいいわ！」

霧島小夜美、人間辞めてみました。なんて売れないラノベのタイトルのような大人になっちゃった小夜美だが、さすがに人間としての許容量を大幅に超えていたのだから。ふらつとよろめいてしまい、そんな小夜美を智也は倒れてしまわないようにどこぞの少女漫画の主人公のように支える。

その姿を目にした静流は笑みが引き攣り、同時にその手があったかと羨望の眼差しを向ける。小夜美も汚れを知らなかったむかしく昔に戻ったかのように頬を赤らめ……

いや、アルコールのせいかもしれないが真っ赤な顔でありがとうと声にしようと顔を上げる途中……

「ありが……ん？んん？？」

智也の首に何か掛けられているのをしつかりと目撃し凝視する。

普段智也がアクセサリーをしているのを見た事がない小夜美は、なんぞこれは？ともむろに智也の胸元に手を入れた。見事なセクハラである。

あまりにあんまりな行動に静流が小夜美何してるのよ！と抗議の声を上げるが、そころではない小夜美は一気に酔いが冷めた気分だった。

そんな小夜美の突飛な行動にすでに調教済みの智也は、やっちゃったとでも言うように額に手を当てて天を仰ぐ。

「あ……………?!?!」「ええ……………?!?!」

その時、小夜美の声と同時に少し離れた場所で白河ほたるの驚愕の音が奇跡的に重なったのだった。

ところ変わって稲穂信は智也以上にカオスな状況となっていた。

「ねえ、信君。あたしは信君の交友関係の広さに今更驚かないんだけどね？」

ちびちびとハイボールを呑みながら、目の前の信へと何かしらの愚痴を言っている音

羽かおるだが、信はかおるが何を言いたいのかわからず、にへらと笑っているだけである。若干汗を掻きつつだが。

二人共高校を卒業ないし退学をして、毎日のように会う事もなくなった。だから、お互いに別な世界が出来るのは至極当然。その事に文句を言うつもりはこれっぽっちもない……はずが、かおるはどうしても言わずにはいられなかった。

その原因は……

「信、やっぱり私邪魔じゃない?」

「そんなことないって。むしろ邪魔な奴ばかり集まるのが俺達なんだから、むしろもつと邪魔して良いから」

シンデレラを片手に信から片時も離れない年下の女の子の所為である。

ルサックに最近入った子で、名前は仙堂麻尋。年の割に大人びた印象を持つ彼女は肩身が狭そうにしている。

どうにも、彼女の持つ悩みを信が手助けしているようで、息抜きのつもりで呼んだらしい。わざわざ信が彼女の会費まで払って。

そこまで深い事情を知らないかおるからしてみれば、息絶えようとしている獲物を前に、飢えて苦しんでいる雌ライオンが対峙しているかのような錯覚を受けたのだ。

もつと言うなら……せんぱあゝい、ここわからないんですけどおくと、どこから声出



してんだテメエと言いたくなる甘ったるい声に、どこがわからないんだい？後輩。と応える信……なんて妄想まで出来上がっている始末だ。

実際は居酒屋のおっさんに絶賛絡まれ中の馬鹿にとても似ていて、放っておけないだけだったりする。

「どうもお、信君がいつもお世話になってごめんね。あたしは音羽かおる、よろしくね」  
ともかくにも勘違いからの先制ジャブ。ドラマでは負け確定演出だが、本人は気付きもしない。年下に大人気なくなってしまうのが女性の本能なのかもしれない。麻尋が年下なのにも関わらず呼び捨てにしている事が気に食わないのかもしれないが。

普通ならなんだこの女？となるであろう自己紹介に、しかし麻尋はどこか驚いたようにかおるを見ていた。

「仙堂麻尋っていいいます。今日はお邪魔してごめんなさい。あの、もしかしてモデルさんか女優さんですか？」

「へ？」

「あ、不躰にすみません。すらつとしていてお綺麗だから、もしかして思ったんですけど」

やだあ、凄く良い子じゃなくらい。

社交辞令ではなく、本気で麻尋がそう思っている事がわかり、逆に失礼な妄想を展開

していた自分を引つ叩いてダストシュートへばい。澄空OGはちよろいのも有名なのかもしれない。

麻尋がかおると話し始めると、初顔の麻尋が肩身の狭い思いをしないように、もしくは珍獣を発見して群がってきたかのように、徐々に女性陣が麻尋の周りに集まり始めた。

みなも、鷹乃、荷嶋姉妹等々。特に麻尋が驚いたのは飛世巴にだった。元々俳優に与る事情から注目するようになって、巴の劇団の公演を観に行つたことがあつたらしい。巴が声を掛けると、麻尋はそれまでの大人びた雰囲気は吹き飛び、舞い上がったというか、若干飛び上がって喜びをあらわにした。彼女にしては珍しいほどに興奮している。

楽しそうな麻尋に信は胸を撫で下ろす。今日くらいは誰もが少しだけ幸せになつても良い日だろう。麻尋の問題は智也には話せない。話してしまえば智也は問題の人物たちの元へ殴り込みに向かうのは想像に難くない。だからこそ、自分が彼女の雨を優しいものへと変えてみせる。

信自身、麻尋の問題に関しては解決出来ると確信していた。なぜなら、彼は麻尋の数倍手の掛かる馬鹿と高校から絶え難い絆で結ばれているのだから。智也に比べればはるかに手が掛からないだろう。

優しい同級生に麻尋を任せて、信は隅でちびちびやっている三人の元へと向かった。  
「よお、背中が煤けてるぜシヨゴ」

伊波と扉に挟まれてやさぐれていゝる正午の肩に手を回す。

「信……今日はありがと、俺の為にこんな盛大なパーティーをしてくれてさ」

「うんうん……悪いトビー。こいつ何言ってるの？」

正午のあまりの土砂降り具合に理解が追い付かず、扉へと翻訳を依頼。

「女にすっぱかされたんだとよ。笑えるな」

「なるほど」

「一月も前から用意してたんだよ。気取ったのは嫌がるから、家で二人つきりで過ごさうって。ケーキも都内屈指の名店で予約してさ」

「へえ、どおりでこんなに美味しいと思つたよ。ありがとう正午君。ハッピークリスマス」

「よくそんな笑顔で食えるね！天使じゃなくて悪魔が舞い降りちやつてるじゃないか！」

「え？ほたるの事悪魔つて言つたの？蹴つていい？」

「自分の事だとは思わないのかなあ!?!しれつと彼女に責任押し付けようとするなよ！」

とても愉しそうに正午を肴にシャンパンとケーキを嗜む健と、人の不幸が何よりもの

ご馳走な扉。

クリスマスに暇な売れっ子タレントなんているわけでもないのは正午も重々承知している。ただ、どんなに遅くなっても良いから会いたかっただけなのに、カナタは正午に對して、とてもとても大人な言葉を送ったのだ。

『ごめんねショーゴ。あたし、ショーゴと違つて学生じゃないのよ』と。

血も涙もなく、学生の自分には確かにわからないと、反論も出来ずに正午はごめん、仕事頑張つてくれと涙を吞んで返したのだった。

夜が明ける前にサンタのコスプレをしたカナタが正午の部屋に尋ねてくることになるとも知らず……それはまた別のお話。

「見てくれよコレ。クリスマス限定のアンクルなんだけど」

「ほお、良い趣味してんな」

「わかんのトビー？」

「まあな。俺のグローブもそのブランドだからな」

ボンボンの正午が選んだブランドが安いわけがない。悪者ぶつていながらも本物思考の扉が認めているブランドだ、よほど価値があるに違いない。

「ほんとだ、良い趣味してるね。ありがとう、ほたるの為に」

「ジャイアンかよー！」

「え、違うよ。正午君の物は皆の物じゃない」

「まさかの全員ジャイアン説!?!お前の親友やつてる中森に畏敬の念すら抱き始めたんだけど!?!」

「……いいよ翔太なんて。せつかく誘ったのに、バイトで来れないって。ずっと楽しみにしてたのに」

「気持ち悪ツ!!中森が恋人みたいになつてんじやねえか!」

「ちよつと!翔太は恋人じゃないよ!……絶対に縁が切れない、かけがえのない存在なんだから」

「白河に土下座してこいよ!こんなBL誰も得しねえんだよ!」

「そういえば、イナケン。たるたるといなくて良いのか?」

「ん、この後僕の部屋に泊まる予定だから。久しぶりに今坂さんと話したいんだろうし」

「唯笑ちゃん?」

「ほら、あの二人って中学一緒だったから」

「ああ、そうか」

確かにそう言っていた覚えがある。

周りを見渡すと、それぞれが思い思いに楽しんでいる。

智也はアダルトチームの介護に向かい、唯笑はほたると思い出話をし、双海さんは紅

茶の事を質問されたのか、望と深歩に紅茶講義をし始め、麻尋は前述のとおり。

中々に良いクリスマスになったなと一息つこうとすると、二人の姦しい声が響いたのだった。

「ほたるちゃんメリークリスマース！」

「メリー……クリスマア……！」

高らかに鳴るシャンパングラスが重なる音。旧友との再会に喜び合う。

「元気だったほたるちゃん？」

「うん、中々日本に帰って来れなくて寂しかったけどね」

「伊波君に会えなくてでしょ？」

「毎日電話はしてるんだけどやっぱり会いたくなっちゃうんだよ。唯笑ちゃんは智ちゃんとは？」

智也とは？と聞かれても変わらないと答えればいいのかそれとも、年下の強力なライバル出現と答えればいいのか唯笑は迷っていた。聞くところによると、いのりはほたと近しい間柄でもあるわけで……

「実は近々入籍「お姉ちゃんシャンパンおかわり」唯笑の冗談そんなにつまらないかな！？」

気を遣って誤魔化そうとした唯笑の努力は水泡に帰す。シャンパンの泡となって。

「え、だつて智ちんだよ？」

「どゆこと？」

「智ちんは有名だつたもん。智ちんと付き合うのつて、ハーワード大学の特待生になるレベルで難しいって」

そういえばそんな噂は中学でも高校でもあつた。理由の一つとして、いつも彩花と唯笑が智也の隣にいた事も大きいが、そもそも彩花とは付き合う前から熟年夫婦のように周りの目には映つていた。智也がお茶が欲しそうなときは、言う前から彩花は用意していた。完成された絵画のような二人に挑む猛者がいなかったこともないが、二人共やんわりと笑顔でその申し出を断り続けたのだ。

ガ〇ツでも二人には太刀打ちできないともつぱらの評判だつた。

「……今は別の意味で難しいかも」

「ほえ？」

「ううん、なんでもない」

蒔田一家との確執が解け、過去に縛られることがなくなつたのは素晴らしい事なのだが、逆を言えば智也はようやく中学三年の自分から時が進んだということ。つまり、恋

愛観もあの頃のままなわけで、今の智也はまごう事なきピュアボーイというわけだ。

「そういうほたるちゃんこそ、伊波君とはどうなのかな？」

「どうって、健ちゃんが就職するまでわからないよ。でもでも、就職したら健ちゃんは絶対ロマンチックにプロポーズしてくれる気がするんだあ〜」

「伊波君なら夜の海辺で指輪をとかありそうだよね！」

「うんうん！ふへへ」

「涎出てるよほたるちゃん」

「あいやく。失礼仕ったでござす」

今日も今日とてほたるは全力で白河ほたるだった。

「でもねでもね！最近心配なんだよ！」

「何が？」

「……智ちゃんに悪影響されてないか」

「むしろ智ちゃんがいつも撃退されているように見えるけど」

「そうなんだけどね、前に智ちゃんが健ちゃんの誕生日によくわからないパンツをあげただけどね、たまにそれを見てしよがないあつて顔をして笑うんだよ！」

「それなんてBL？」

まさかの健ツンデレヒロイン説に、さすがの唯笑も若干引いていた。



「もしもこのまま影響を受け続けたら、プロポーズが漫才ライブの客席で、しかも関西弁でされちゃうかもしれない！」

「唯笑は想像の羽の広さにびっくりだよ！」

さすがに智也でもそこまで人の恋路をコントにするようなことは……ないとは言いきれない。むしろ率先してやる想像が出来てしまう。

「ま、まあその時は唯笑が全力で止めるから」

「うん！頼りにしてるからね唯笑ちゃん！智ちゃんを止められるのはもう唯笑ちゃんだけだから！頼りにしてるよ！」

「クリスマスなのに重い信頼を貰っちゃった」

苦笑しながらシャンパングラスに手を伸ばすと、あれ？とほたるがようやく気付いた。

「唯笑ちゃんその指輪って……ダイヤ、だよ、ね？」

わなわなと震えながら指差してくるほたるの様子に、ちよつとした悪戯心が芽生える。

しまったと慌てる演技をしながら左手を背中に隠す。

「あ、えつと……これは、その……」

「そ、それってファッションとかじゃないよね？だってダイヤだもんね？」

あははと頬を掻きながら視線をずらす。こういう小細工に余念がないのは母親と智也の悪影響なのは間違いない。

「う、ん。実は、唯笑の一番大切な人から貰った、何よりも大切な宝物なんだ」  
健がBLならば唯笑は百合路線である。

間違った事は言っていないし嘘でもない。誰に聞かれても胸を張って答えられる。言い回しを多少変えただけなのだから。

そんな唯笑の答えにはたるは驚愕の声を発したのだった。

その声と同時に居酒屋と化している一画からも声が木霊したが、そんなことに構ってられないほたるは唯笑へと詰め寄る。

「まさか唯笑ちゃん、智ちゃんと婚約したの!?!?」

周囲に聴こえる声。その声に反応した人数は数えるまでもなかった。

鬼ごっこする人この指とくまれ!と掛け声をかけたかのように押し寄せる面子は、みなもと巴である。ちなみに、アダルト二人は修羅の如く智也をダブルブレンバスター。

「なにそれどういう事よ!」

「ゆ、唯笑ちゃん智也さんとは付き合っていないって言ったのに」

慌てて詰め寄る二人に満更でもない顔の唯笑と、カタカタと紅茶のカップを持つ手が震えている詩音。聞き耳だけは草食動物かのように立てている。

「あはは、そんなに慌てなくてもちちゃんと話ッ!? いたたたた!」

優越感に浸る唯笑の元へ、額からダラダラ流れちゃいけない赤いものが流れている智也が鬼の形相で背後を取り、万力の力を持って梅干しを敢行する。

「痛い痛い痛い~~~~!! 智ちゃん女の子にやっちゃ駄目な力だよおー!」

「うるせえ! お前の所為で出血多量だろうがゴラァッ!」

「トミー! どういうことよ! あたしというものがありません!」

「智也さん、私が結婚するまで結婚しないって言つてたのに!」

「ほえ、やるね智ちゃん!」

「うるさいうるさい! ちよつと落ち着けお前等! あとみなもちゃん、大丈夫。俺は君がお嫁に行くまでちゃんと「結婚式はいつにしよつか智ちゃん?」黙つて死んでろテメエはッ!!!」

収拾のつかなくなった現場にニトログリセリンの二人、小夜美と静流も合流。

その現場を間近で傍観していたほたるは……

「めでたしめでたし!」

「締めるの下手だなテメエは!」

ギャグの才能が枯渇しているほたるを一喝。

地味に傷ついたほたるは健に泣きつき、暴○団幹部のような雰囲気醸し出して健も

合流。

智也は思う。今この時幻魔拳を授けて欲しいと。聖夜だけに……

なんとか唯笑の嘘を力技で鎮火させ、みなもには後でちゃんと説明すると約束した智也は、もう女子会なんか滅びれると呟いて信達の元へと逃げていった。

そもそも、唯笑の左手に指輪があれば相手は一人しかいないと誰もが勘繰るし、その説得力も絶大だ。嘘に聴こえなくても仕方ないだろう。結局唯笑が嘘だと弁明し、智也と自分がとある事情で母親から譲り受けたもののだと語ると、納得はしないものの、それならと解散。

思った以上の騒動になって、唯笑は今後このネタは封印しようと思った。

「じゃあ、その指輪って結局どういう物なの？」

喧騒が収まりました二人で呑み始めるとほたるが素朴質問をする。

さっきの場では彩花を知らない面々もいたため話すことはしなかった。みなもと巴だけなら話しても問題はなかった。

だから、彩花の事を知り、それだけじゃなくとも仲が良かったほたるに黙っている理由は、どこにもない。

「ほたるちゃんなら良いかな。これはね……あ、ちよつと待つてて」

席を立ち、智也の元へと向かう。自分だけの問題ではない為、許可を取りに行くと、智也は好きにしろと答えた。智也もほたるが彩花と仲が良かったことを知っていたのもあるが、中学の頃ほたるに智也は恩があった。その恩に報いるのであれば断る事はない。むしろ智也の身に起きた事を全て話しても良いと、自分の罪を話すことを許した。指輪を譲り受ける経緯を話すうえで、それは避けては通れない道なのだから。

智也の元から許可貰ったよおくと戻ってきた唯笑は、ほたるへと語り出す。自分達四人が四人でいられる幸福へと続く途上の話を。

話を聞き終えたほたるは、言葉もなく、声を失ったかのようにだった。

「これが、智ちゃんとお母さん達が隠してきた事で、彩ちゃんと一緒に笑えるようになった話なんだけど……ほたるちゃん？」

語り終えてほたるの顔を覗くと、ほたるは声もなく涙を流していた。

知らなかった、彩花の死からの四人の絶望を。

知らなかった、三人の笑顔の裏にあつた涙を。

会いたくなつた、親友と呼べるかもしれない少女の笑顔に。

唯笑の話を聞き終え、ほたるは悔しくなる。なぜ自分と同じ年月を生きてきた彼等がこんなにも過酷な目に遭わなければいけないのかと。なぜ自分は彼等を支えてあげら

れなかつたのかと。

世の中には沢山の不幸が溢れていて、彼等の不幸はその一つに過ぎない。ほたるのピアノに一時でも心が救われる貧しい人だって、彼女はその目で見てきた。

それでも、なぜ自分は過去にあんなにも近くにいた彼等を救えなかつたのか……

健との事で乗り越えてきた障害を決して小さいとは思わない。あの時の自分は健と一緒にいる為に必死だった。だけれど、自分が苦しんでいた時彼等はずっと孤独に耐え続けていた。

(ごめんね、あやびん)

思い出すのは過去の眩い光景。

彩花と共に過ごした掛け替えのない日々。

いつか彼女は言った。ほたるのピアノには人の心に寄り添う優しきがあると。きつと沢山の人が救われると。

(そんな力、そんな優しきほたるにはないッ。あやびんの大切な人が苦しんでいたのに、ほたるは何もしなかつた！)

唯笑の言葉一つ一つがほたるの心に突き刺さった。

(ごめん、ごめんねあやびん。あやびんはあんなにほたるに笑顔をくれたのに、ほたるはそんな事も忘れて何もしてあげること出来なかつた……ごめんね)

自分の無力に涙を流す彼女の目の前に……

「ほたるちゃん。泣かないで。唯笑ね、今幸せなんだ。智ちゃんも信君も彩ちゃんも、みんな気兼ねなく馬鹿みたいに笑えてるんだよ？だから、悲しい話でも何でもないの。ただほんのちよつと躓いちやつたつてだけの話なんだよ。智ちゃんも、彩ちゃんと仲が良かったほたるちゃんだから話しても良いつて許してくれたの。彩ちゃんなら何でもない事のように、馬鹿だよねつて話すんだろうつて唯笑もそう思うから……だから、はい」  
左手の薬指から離れた指輪。その指輪をほたるの手に握らせる。

「この指輪があると彩ちゃんと話せる気がしない？」

「いい、の、かな？」

ほたるの言葉には二つの意味があった。

こんなに大事な形見を少しの間でも預かってもしも良いのか……そして、何もしてあげられなかった自分が彩花と話しても良いのか、と。

止めどなく涙が零れているほたるに、唯笑は満面の笑みで……

「ほたるちゃん知らないでしょ。彩ちゃん、いつもほたるちゃんのピアノの話をしていたんだよ。音楽室でいつも弾いてもらつてるんだあつて。唯笑よりもほたるちゃんに夢中で、ちよつと嫉妬してたんだから……だから、会つてあげて欲しいな。それと、今度ピアノ聴かせてほしいな」

もう、無理だった。

ほたるは唯笑の言葉に深く頷き、指輪を握り締めて外へと出ていく。

誰に憚ることなく友と語る為に。友の腕の中で、去来する想いを何もかも吐き出す為に。

そうして静かな夜に、在りし日の友と彼女はようやく再会を果たした。

「ねえ、智也君？」

「なんだよ」

「今、ほたるが泣いて出ていったんだけど、どういふことかなあ？」

「俺の所為じゃねえよ!？」

「でも、なんで泣いてたのかは知ってるでしょ？」

「……さてな」

瞳を閉じて智也は想う。放課後の夕日が射しこむ音楽室で、友の為に優しい音を奏でるほたると、嬉しそうに楽しそうに、目を細めて優しい音に酔い痴れる愛しい人の幸福な光景を。

「白河に聞けばいいさ。白河のもう一人の親友の話だな」



白い息が部屋の中に昇っては消えていく。

悴む指を擦り合わせ、毛布を羽織りベッドに背を預けて座り込んでいた。

食事をした後、一蹴の携帯に連絡があり、縁ちゃんから早く帰ってくるようにと言われたのか、わたわたと帰宅していった。

そういえば一蹴、唯笑さんと何を話したのかは聞かなかったけれど、吹っ切れたように晴れやかな顔で遊んでたなあ。私もそんな一蹴に手を引かれて遊ぶのはすごく楽しかった。まるで三上さんと遊んだ時の様で……

暖房を付ければ良いのかもしれないけれど、とてもそんな気にはなれず、自室でオブジェのようにじっとしているだけ。

クリスマスなのに、私の部屋はライトどころかキャンドルも灯っていない。

真つ暗な部屋は月明かりだけが頼りで、月明かりに浮かぶのは一蹴から貰った赤いふわふわとしたコート。

私に似合うかな？喜んでくれるかなって一生懸命に選んでくれた姿を想像すると少し嬉しくなつて、小声でありがとうと呟く。

こんな私なんかの為に、ありがとう。ごめんね。

そうだ、夜中の内に部屋を片付けなくちゃ。お昼にお母さん達が帰ってくる。

本当は今日は帰ってこないのに、嘘、ついちゃった。だって、一蹴といってしまうば私

は一蹴に際限なく甘えてしまう。今日だけはおかしくなってしまう。

双海さんと三上さんが夜を共にしている姿を想像してしまう。

そんなわけがないって、ならずやでパーティーをしているってわかつてる。それでも、嫌な映像が……心が軋んで潰されてしまう二人の姿が勝手に浮かんできてしまう。

『智也は恋を知らないんだ。彩花ちゃんとは恋を最初から恋を超えていたからね。だから、二人共恋を知らない。ね？彩花ちゃんに出来なくて、いのりちゃんには出来る事だろ？』

そう、ですね。でも、それは私じゃなくても出来るじゃないですか。それに、こんな想いをするくらいなら恋なんて知らないほうが良いんです。狂ってしまうような恋心なんて、誰も幸せにしないじゃないですか。

囁かでも温かい、陽だまりのように落ち着ける恋で良い。狂ってしまう恋なんて苦しいだけ。

「わかつてるのに、どうして？」

貴方が欲しくて欲しくて、理性とは別な本能があの人を求めてしまう。

あの人の中へ伸びてしまう腕を、何度も何度も堪えて、それでも伸ばそうとしてし

まう。

いつまで続くのだろう、この苦痛が。いつまでこの甘美な苦痛の中に居続けるつもりなの？

「三上さんとケーキ、食べたかったなあ」

初めて私は、ケーキも温かな料理も、クリスマスツリーもライトもない、誰も傍に居ない……そんなクリスマスを過ごした。

——ハッピー——!!!  
!!!クリスマス~~~~スツ!!!  
!!!——

急いで掃除を済ませた後、疲れが溜まっていたのか毛布にくるまるとすぐに眠ってしまい、深い夢の中でそんな陽気な騒音が聞こえた気がした。

「手伝ってくれてありがとう」

パーティーが終わり、使用した皿を洗っていると静流さんに礼を言われ、首を傾げる。「いや、さすがに一人じゃ大変だし、それにこれくらいはね」

信と唯笑が飾りを取ってフロアの掃除をしてくれている。こんな状況をさすがに静流さん一人に任せるわけにはいかないし、何より……

「静流さんにはあれの片づけを任せないだからね」

指を差した先には、椅子を三脚使つて豪快に眠るおっさんのような美人？が横たわっている。

「あら、気にしなくていいのよ。あした燃えるゴミの日だから外に出すだけだもの」  
「猟奇的な友情に感動するなあ〜」

本当にやりかねないのが素晴らしい。

「みんなは二次会に行つたのに、智也君達はいいの？一応主催者でしょ？」

「まあ、俺達はいいつ等とは別に用事があるんで。伊波の相手をするの疲れますしね」

「健君が智也君の相手をしているんじゃないくて？」

「逆ですつて。見たでしょ？あのプレゼント交換」

それぞれに料理とケーキ、そして談笑を楽しんで落ち着いてきた頃を見計らい、今回の目玉企画のプレゼント交換を行った。

といつても、持ち寄つたプレゼントに番号を適当に張り、ビンゴゲームをして早く上がった人が一番から持つていくという、ランダムにプレゼントが渡される企画。もし自分が上がつたのが三番で、三番のプレゼントも自分の持つてきた物の場合、四番と交換するといふ仕組みだ。

で、伊波が一番最初に上がり、一番は俺のプレゼントだったわけだが……

『ふはははは！俺のプレゼントを貴様が得ることになるとはな！頭を低くして受け取れ！』

『頭低くしてもいいからゴミ処理券もセットで貰えるかな？』

『態度も低くしろや！』

『だって、智也君のでしょ？』

『お前な、俺をどんな目で見てるんだ？』

『ゴミを見る目』

『抉って捨ててしまえ！ゴミはお前の目じゃねえか！』

『はいはい……ちよつと大きいね。なにこれ？』

『開けて確かめて良いぞ』

『そうするよ。静流さん、ゴム手袋貸して下さい』

『笑顔でキレ倒すぞああん？』

『冗談だよ。えつとどんなゴミが……』

『お前の俺への態度がゴミじゃねえかな』

『あ、れ？ねえ、智也君？』

『んだよ』

『これは何?』

『何って、本棚だよ。組み立て式でな、コンパクトで持ち運びも楽なんだよ』

『いや、本棚は知ってるけどさ』

『これすげえんだぞ! 組み立てても簡単なんだけど、ほら! 折り畳めたりもするんだよ! さらに車輪が内蔵されてて、模様替えするときも簡単に移動させられる優れもので!』  
『DIYでテンション上がってる父親みたいになってるから! いや、待つてよ! そうじゃなくて!』

『あん?もしかして気に食わなかったか?』

『いや、普通に嬉しいけど……違う。違うんだよ! 智也君に求めてるものはこうじゃないんだよ! なんて普通に嬉しい物買ってきちやうのさ!』

『珍しいクレーマーだなおい』

『奇人変人僕智也の智也君でしようが! もっと突っ込みがいのある物買おうよ! 期待を裏切らないのが君じゃないか!』

『クソみたいなフレーズありがとうゴミ野郎。じゃあ返せよ』

『ありがたく使わせてもらおうよ馬鹿!』

『めんどくせえ! 伊波めんどくせえ!』

てなことがあつたわけで。見事にあいつの期待を俺は裏切れて気分が良かった。

「二人がこんな仲良くなるなんて、初めて会った頃は思いもしなかったわ」

「仲良くはないけど」

俺と伊波が仲が良いなら、サイコパスとキリストだつて親友になれるだろう。

そうしてならずやの掃除と片付けを済ませ俺達三人は店を出た。女性らしからぬ寝相のおっさんの処理を静流さんに任せて。

「じゃあ、行くか」

車の運転がある為吞まずに過ぎした俺は、ほんのりと酔っている二人に声を掛ける  
と、二人は準備していた赤い帽子をかぶる。それに倣い俺も赤い帽子をかぶり……

「悪い子にはサンタは来ないらしいからな。サンタの代行をしてやりに行こうじゃないか」

朝、ぼくつと寝ぼけ眼で辺りを見回し、寒いのであと二時間ともう一度寝ようと目を閉じ……ふと違和感を覚えてもう一度、今度はしっかりと目を開ける。

「……はい?」

カーテン越しに、窓になにかのシルエットが見えた。誰かがいる!?!とドギマギしてしまつたけれど、よくシルエットを見ると、どうにも人じゃないみたい。

昨日眠るまではあんなシルエツトなんてなかったし、もしかして不審者が？

ドクン、ドクン、と鳴る胸に手を当てて落ち着いてから、私はカーテンを開けた。

「え？」

すると、窓には大きな吸盤がべったり張り付いていて、吸盤の先には紐で括りつけられた子供が入りそうなくらいの大きさの靴下がぶら下がっている。

こんなにも大きなものを取り付けられているのに気づかない自分の眠りの深さに寒気がした。もしも不審者が部屋に入っても気づかないかもしれない。

とにもかくにも取り付けられている靴下を慌てて素早く回収する。なぜなら、道行く人や子供が指をさして笑っているのが見えるから！

吸盤を取る暇はなく、靴下だけを回収して窓を閉める。

あく！もう！恥ずかしい！

思い出すのは夢の中で聞いた声。こんな事を思いついて実行するのは一人しかない人。もしくは三人。

「こんな事をするなら直接渡してくれればいいじゃないですか！」

無駄な事に労力を割く天才ですね！

なんて文句を口にしながらも、どうしてかな？なんでこんなに頬が緩んでしまうのだろうか。



一人っきりの、なんでもない、過ぎていくだけのただの一日だつて言い聞かせていたのに……双海さんというんじゃないかって、勝手に想像して、嫉妬して……

「嬉しくさせないで下さい……馬鹿」

靴下の中にはいくつかラッピングされた物があり、高鳴る胸の鼓動を心地よく感じながら、心地よい期待と共に一番上にある手のひらサイズの物をまずは手に取る。

紐を解いて中からそれを取り出して期待に胸を躍らせ……即座に捨てた。

中に入っていたのは、虚ろな目をした人型の何かだった。何今の!?

袋の中には手紙も入っていたので読んでみる。

『この埴輪は三上智也様が幼少のみぎり、授業で粘土で』

読む価値なしと破り捨てる。

あの人は私の家をゴミ収集車か何かと勘違いしているの?返して!私の期待を返して下さい!

放り投げた埴輪?に目を向ける。

吸い込まれてしまいそうな目?口?に良からぬ不安を覚え、うん、やつぱりゴミだったと確認する。

呪いのアイテムを送り付けてきて、嫌がらせばかり。

色気のあるものを期待したわけじゃないけれど、それでも少しは私の事を考えてくれ

ていると思って嬉しかったのに……

落胆する気持ちに頭を振り、三上さんがおかしいだけで二人は違うはずと他のプレゼントを手に取る。

ピンクのお洒落な包みは多分唯笑さんかな？

壊さないように開けると、中には可愛らしい化粧ポーチが入っていた。

「さすが唯笑さん、わかっている……素直に嬉しいもん」

そのセンスをどうか幼馴染に分け与えて下さい。私の精神衛生の為に。

もう一つは柔らかな包みでクリスマスカラーの包装紙で包まれていた。

包装紙だから慎重に破かないように開けると、フリルの付いたエプロンが顔を覗かせた。

私が料理をよくすることを知っている稲穂さんならではのプレゼント。その気の利き方を親友に伝授して下さい。

「どうしよう。今度二人にはちゃんとお返ししないと」

一人には復讐をしないと。

まさか二人からこんなにも良くして貰えるだなんて思わなくて、笑みが零れてしまう。

何を上げたら喜ぶだろうかと考えていると、靴下がまだ重くてもう一つ入っている事

に気付く。

もしかして三人で選んでくれた何かが？

なんて期待しながら最後の一つを手に取ると、掌二つ分よりも少し大きめの箱がラッ  
ピングもされずに入っていた。

箱には私の知らないフランス語？のブランド名が印字されていて、なんだろうと蓋を  
開けた……

「——、れ」

箱を開けた私は中に入っていた物を吸い寄せられるように手に取る。

「覚えて、いたんですね」

淡いグリーンの上品なポーチ。

以前私がポーチが欲しいと話したことがあるのを思い出し、このポーチが誰のプレゼ  
ントなのか……誰かと書いていないのに、あの人からの贈り物なのだと思えるほどに  
わかってしまう。

ぎゅつと胸に引き寄せようとする、ポーチにしては少し重いことに気が付き、ポー  
チの中を覗くと、そこには二冊の本が入っていた。

本を手にとると、翻訳されていない英語の原本と、翻訳されている同じ本が入ってい  
た。

パラパラと捲り、本の間に何かが挟まっているのを見つけて手に取る。

『英語が苦手ならこれを読むと良いらしい』

と汚い字で綴られていた。

『詩音は俺の友達で、帰国子女のクォーターでだな、しかも紅茶マニアで紅茶の話になると一日は語るといふ病気を持つやつだ。キャラ強すぎだろ』

「そういう、事だったんですね」

だから三上さんは双海さんと？自分じゃ英語の事なんてわからないから、帰国子女の双海さんに教えてもらうために……私の、ために……

「馬鹿、ですよ」

ぎゅつとポーチと本を胸のへと抱き寄せる。今この時の気持ちを抱き締めていられるように、この瞬間を失くしてしまわぬように。

「馬鹿な人……こんな事されたら、こんな気持ちを貰ったら、忘れられるわけないじゃないですか。こんなにも嬉しい気持ち、忘れたくなくなるじゃないですか」

毎日毎日、一人になる度に自分の愚かさに、弱さに涙していた。いつになればこの気持ちちは消えて、貴方の傍にいられるのかって、苦悩しない日はなかった。

「だけど、今は……」

「あなたみたいな馬鹿なサンタ……好きにならないわけないのに」

嬉しくて嬉しくて、これまでの人生の何よりも心があつたかくて、ポカポカしてずっと包まれていたくなつて。

もう、無理。この気持ちを消し去るなんて、それこそ私の全部が死んでしまう。

「大好きです。私とこの先もずっと一緒にいて下さい」

いつかこの言葉が伝えられる私になろう。

貴方に胸を張つて、最高の笑顔で、声高らかに貴方に伝えられる、そんな私になろう。誰に憚る事もなく、貴方の胸に飛び込める、そんな私になろう。

踏ん切りの付いた気持ちと共に私は……

「これ不燃ごみかな？」

埴輪の処理に頭を悩ませたのでした。

## 彼等の合コン、彼女等の獲物～前編～

今この瞬間、世界が止まれば良いのにと、私は浅はかな願いを胸にする。

今まで生きてきて今が一番安らぎを感じている。

満たされてはいけないのに、どうしようもなく満たされてしまう。触れてはいけないと知っているのに、その安らぎに触れてしまいたい。例え触れれば壊れると知っていても。

眼下には、背負いきれるはずもない重荷を背負い続けた臆病で、強がりでも、誰よりも自分への優しさを忘れてしまった人。そんな愚かな人が、今だけは私の膝の上で疲れ切つて眠っている。

ゆっくりと起こさないよう、労わるよう、この時だけは良い夢が見れるよう、子供の様に眠る彼の髪を撫でる。

限界なんてとつくに越えてしまっていた事に、誰も気づいてあげられなかった。稲穂さんや今坂さんでさえ気づけなかった。気付かせないよう、嘘で自分を隠していたこの人が悪いのだけれど、その嘘は悲しい程に優しく、その優しさは自分自身を何度も何度も殺していた。

彼の頭を撫でながら、知らず涙が頬を伝っていた。

どうしよう。この気持ちなんて言葉にすればいいの？

自分の大切な人達の為に、心を自分で何年もずっと殺してきた馬鹿な人。きっとこの人を深く知った人は同じことを願うだろう。誰でもいい、誰か彼を幸福にしてあげて……と。

髪を撫でながら、憔悴したその寝顔。

ああ、そうね。そう、なんだよね。

壊れている狂っている裏切っている。世界中の人が私を批判するだろう。間違っている、これは一蹴への裏切りで、リナちゃんを傷つける気持ち。

それでも、わかっていても溢れ出てしまうこの想い。

世界で一番の優しい嘘つきなこの人の傍にずっといたい。この人を私が幸せにしてあげたい。何よりも、誰よりも私は三上智也さんを愛してしまっている。

愛しているからこそ、私は……

「嘘、つかないですよね？」

三上さんの傍に居続ける為に彼の愛おしい寝顔を眺めながら、この溢れ出てしまう想いを殺す覚悟を決める。

だって、三上さんなんだもん。自分を大事にするなんて出来ない、馬鹿な人なんだも

ん。きっと三上さん、私の気持ちを聞いたら困るから。絶対、私の告白を断るもの。

簡単に想像出来てしまう未来に、少しだけ笑ってしまおう。

なんて矛盾なんだろう。この人を愛したければ、愛する気持ちを殺さなければいけないだなんて……残酷にもほどがある。

「ほんの少しでいいのに。ほんの少し、自分に優しくなってくれたらそれだけで」

本当に酷い人ですね、と呟きながら手を止める事はしない。あと少し、もう少しと、この愛しい時間を引き延ばしていた。

「ほんと、しょうがない人ですね。仕方ないから、ずっと私がいてあげます」

それは雪が道路をうつつすらと白く染める、そんななんでもない一日の終わりの事だった。私が誰かを愛する事を知った、なんでもない一日の事。

恋をするなんて簡単な話。恋なんて、街の中のどこにでも溢れている。どこかのファミレスや、カラオケに駅前。探そうとしていなくても勝手に飛び込んでくるような、特別な何かなんかじゃ決してない。

高校生にもなれば、この間見つけたパンツがマジ良くて買っちゃった。みたいなノリで恋を買っては、飽きて売るを繰り返すことも良くある。ようは恋なんてファッションと変わらない。



明日はこの服を着よう、ちよつとトレンドからはずれてるよねえコレ。そういう重みなんて何もない、日常の一コマなんだ。

純愛や本物の愛なんてワードが出ると、乙女かよと笑ってしまふし、そんなものは幼い幼女が見る夢物語とみんなが知っている。

綺麗なラブストーリーを映画やドラマで観ては感動し、現実ではそれをあり得ないと笑う。綺麗な物に憧れはするけれど、この世界にソレはないのだと諦める。女子とはそういうった、砂糖とスパイスと素敵な何か……そんなものなんかで出来てなんていない。女子を知らない男子だけの下らない妄想の産物でしかない。二次元でだけ夢見てろよと唾を吐きかける。

つまり、あたしはそういうありふれた女子の一人に過ぎなくて……だから知らなかったの。知る機会なんていくらでもあったはずなのに。

初めて男子と付き合い合ったのは中学の頃。よく知りもしない見てくれの良い男子から告られて、なんとなく付き合い始めた。

彼と付き合い合つてすぐに友達から羨ましがられ、どこまでいったの？なんて定型句を何度も聞かれた。正直、気分が良かったのは否定しない。皆からの羨望が気持ち良かったのだ。

休日に初めてデートをした。中学生という事もあり、あまり金銭的余裕なんてなかつ

たから、その頃世間を騒がせていた映画を二人で観に行つた……それだけ。映画は面白かつたし、彼と手を繋いで歩くと少しだけ大人になつた気がした。街中を歩くカッブルと一緒にんだと安心出来た。

ファーストキスは三回目のデートだったっけ？確か、カラオケに二人で行つて、室内でしたんだつたかな？よく覚えていないけど、そうだった気がする。だってどうでも良かったし。今時、キスぐらいで騒ぐほどでもない。

交際は順調だった。だけど、半年後には彼と別れていた。浮気とか喧嘩が原因じゃない。お互いがお互いに飽きただけの、面白くもなんともない理由。恋とはそういう物。涙なんてなくて、泣いたとしてもそれは自分に浸っているだけ。相手を想つての綺麗な物じゃない。

彼と別れて一月と経たず、あたしは今度は少し年上の人と付き合つた。前の彼の事なんて思い出すこともなく、未練が入ることもなく。

こうしてあたしは高校三年の今まで生きてきた。普通の女子として道を踏み外すこともなく。それがこれまでのあたし、香川美代（かがわみよ）の人生だった。

だからだろうか？こんなにも今の状況に戸惑っているのは……

「これで少しは汚れが取れたんじゃないやねえか？アルコール消毒も出来ただろ。感謝しろよ」

呆然とするあたしの髪や頬を伝ってポタポタと床に染みが出来ていく。

一瞬何が起きたのかわからず、自分の濡れた服を見てようやく状況を理解する。

目の前の男、三上智也に彼が飲んでいた焼酎の水割りを突然頭から掛けられたのだ。

頭に血が上り、カツとなって口を開こうとしたけれど、あたしの喉から言葉が出て来  
ることはなかった。

なぜなら、彼の顔は怒っているのでも呆れているのでもなく、何かに怯えるように、耐  
えるように下唇を噛んで……それでも気丈に振る舞っているかのようで、わけがわから  
なかったから。

彼はあたしに怒っているんじゃないの？なのに、どうして……

全てがあたしの知っている男とは違う、全く知らない感情と行動ばかりであたしは戸  
惑う。

これがあたし、香川美代と三上智也の最悪にして最低で……そして、自分の異性への  
価値観を粉々にされた……そんな出会いだった。

最近、一年の時からそこそこに仲の良い友達の陵いのり、通称いのりんの様子がおか  
しい。

いのりんは入学当初から異質で、ちょっとあたしの周りにはいないタイプの女の子

だった。

良く言えば純粹、悪く言えば世間知らず。男子とはあまり話をしようとしなければ、物腰は柔らかかで分け隔てなく皆に優しい。勉強も出来る優等生の見本のような女の子。

クラスは一緒でもあたしと彼女の接点はなく、近づくようだなんて思ったこともない。正直に言えば気に食わない気がした。ぶつているように見えてしまい、一部の女子から嫌われてもいたしね。

そんないのりんに興味が出てきたのは、鷺沢と付き合っていると耳にしたからだ。

男子と付き合ったり出来るんだなって感心したのと、彼女はどんな恋愛観を持っているのか……あたし等と一線画していたように思えたのは幻想だったのか。いろんなことに興味が出て、何気なく話し掛けたのが切っ掛けだった。

話してみると、いのりんはぶっているのではなく、これが天然らしい。つまり自然体で美少女だった。鷺沢と付き合った理由については、少し誤魔化されてはいたけれど、鷺沢の事が本当に好きで、ずっと一緒にいたいという強い想いが伝わってきた。

衝撃というにはあまりにも自分が廃れているようでアレだけど、こんな純粹な女の子が生息していたのかと驚いたのと同時に、彼女を嫌いになれない自分にも驚いてもいた。

いのりんと話していると、自分が汚れているかのような気持ちになる気がするんだけど、彼女の性格が卑屈になるのも馬鹿らしくなるくらい良い所為かな？ なんだか微笑ましく思えてしまうのだから不思議だ。

お昼をいのりんと一緒にするのが日課になると、彼女の口から出てくるのは鷺沢の事ばかりで笑ってしまった。一蹴が昨日、一蹴が明日、一蹴が可愛い、一蹴が一蹴が……きつとこの子は鷺沢で半分以上が構成されていると確信するのはとても早かった。

だから、かな。いのりんが鷺沢と死ぬまで一緒にいる。私達女子が昔夢見た純愛を貫いてくれるって期待してしまっただけのは。

自分には綺麗な感情を持つ彼女が羨ましくて、でも憎めない。どうかこのまま彼女の人生を傍観させて欲しいなって思っていた。思っていたんだけど、どうにも最近の様子がおかしかった。

いつものようにお昼を一緒にしていると、思わず箸を落としてしまいそうな言葉がいのりんから零れだしたのだ。

「それでね美代ちゃん！三上さんってほんとうに最低なんだよー！」

まさか、いのりんの口から鷺沢以外の男性の名前が出てくるとは思わなかった。出てきたとしてもお父さんの事だったのに。

どうやら偶然公園でピンチを助けてくれた男性が三上という人で、それがご両親と旧

知の仲の人達の息子で、これまた偶然家庭教師となったのだと。どんなご都合主義の二次元だよと突っ込みたかったけれど、いのりんの口から三上への文句が止まることはなかった。

そもそも誰かの悪口を言うなんて一切なかったいのりんが、苛烈な言葉を羅列するところが異常事態だし。

それからというものの、彼女の口から三上の名前が出ない日が一日もなかった。彼への文句が留まることも。

毎日毎日文句ばかり……でも、どうしてだろうか？その顔が全然文句を言っているようには見えなくて、それどころか鷺沢との事よりも活き活きとして映ってしまう。ただ、逆に鷺沢の名前が出てくる頻度が減ったのが不思議で、もしかして別れたのだろうか？とも考えたのだけれど、別れてはいないらしい。

ある日、三上と稲穂さん？なる人とゲーセンに言ったことを、わざと不満そうに言いながらもニヤついているいのりんについて……

「あんさあ、もしかいのりんって三上んこと好きだったりすんの？」

と尋ねると、いのりんは強く否定するわけでもなく、かといって肯定するわけでもなくて、ただ静かに「違うよ」と寂しそうに呟いた。まるで自分に無理に言い聞かせているかのよう。

そんないのりんだったのだけれど、最近いのりの口からは三上の名前が出なくなつた。そして以前にも増して鷺沢の事ばかりが話題に上がり始めた。それがあまりに不自然で、これは何かあつたんじやないかな?と思ひ、いのりに三上の話を振つたのだけれど、その時一瞬だけ口元を歪めただけで、すぐに普段通りの顔となつた。

もう、絶対に何かをひた隠しにしているのがまる分かりなのに、必死に隠そうとするいのりに突っ込んだことを聞くのは気が引けた。

そうして何日か普段通りなのにどこかおかしいいのりと過ごしていると、ひよんなことから面白い話が出てきたのだった。面白いというか、美味しい話だけれどね。

「あ、あのね美代ちゃん、ちよつとお願いがあるんだけどいいかな?」

こうして改まつてお願いされるのは珍しい。あまり頼み事をするような子じやないし、そこら辺はどこか一線を引いているはずなのに。

「ん、なにに?面白い話なん?」

「ううん、面白くはないんだけどね。あのね、稲穂さんの友達の西野さん?つて人からお願いがあつてね」

稲穂さんは日頃お世話になつていている人で、西野さんつてのは……なんだつけ?千羽祭どうたらこうたらの人だつけ?

「えつとね、もし良かったらなんだけれど、西野さん達がね?合コンをしたいつて、その

……」

「あく、なぐる。ウチ等と合コンセッティングしてとかもしかして頼まれたん？」

「察しが良くて助かるよお」

「どうにも、いのりんはその人達に借りを作ってしまったらしく、浜咲の子と合コンを頼まれたらしい。」

なるほどねえと、箸を唾えながらふむふむと考える。

「あ、無理なら良いんだよ！ちゃんと稲穂さんに断ってもらえるようお願いするから」

「おっけ〜」

「うんうん、やつぱり駄目だね。じゃあ稲穂さんにオツケーつて……へ？」

あたしの返事に目を点にするいのりん。愛い奴じゃのお。

「よっちゃんとか集めるし、あの子ら今フリーつってたし、年上のオトコ欲しいとか言ってたしタイミングバッチじゃん」

「い、いやいやいやいや！でもだよ美代ちゃん！西野さんも稲穂さんもアレなんだよ！」

アレつてどれよ？

「んじゃ、とりあえず西野つて人のラインおせ〜て」

乗り気なあたしにどうにも混乱している視線を向けられる。ぶっちゃけ合コンとかあたしにはどうでも良い。それよりも確かめたい事があるだけ。つまり、好奇心を満た



しただけだ。

迷いながらも連絡先を教えてもらって、あたしはいのりんの前でニヤつきながらフリックしていく。そしてそれをわざといのりんの前にかざす。

「こんなんで良い?」

「良いも何も……ッ?!?!」

デイスプレイの文章を読んで、おもむろに咳をするいのりん。あく、良い反応するなあ。飼いたい。

「な、みみみみ、美代ちゃん何を!」

デイスプレイの文字。そこには『初めましてえ、いのりんの友達の美代でえくす。いのりんから合コンの話されたんだけどお、オツケーしましたあ。四人ぐらい集めるんでえ、場所決まったらラインして下さい。ただあ、条件としてく三上智也さんだっけ?を絶対に参加させてくれる事おく。じやなきや無しなんでよっしくでえくす』と。

「待って美代ちゃんそれは!」

慌てて止めようとしてくるけど遅いんだなあ。はい、送信。ぽちつとな♪

「あつはつは。いやあく、楽しみだわあく。噂の三上さんに会えんのお」

ちよつとした悪戯と好奇心からの行動。

だって、あんなにもいのりんにいるんな表情をさせる三上って人がどんな人なのか気

になってたし、会ってみたいと思うのは普通の事じゃん？だからあたしは何も悪い事はしていないはずなのに……

「美代ちゃんッ！」

それなのに初めていのりんがあたしに感情を隠そうともしていない怒りの表情を見せた。まるで、誰にも見せるわけにはいかない、携帯の中身を見られたかのように。

つまりいのりんにとって三上という人は誰にも見られたくない人物。いのりんの中でそれほどの比重を持つ人物なんだ。

自分の怒りがそれを肯定している事にも気付かずいのりんはムスツとして、あたしからあからさまに顔を背けてお弁当を食べる。そんないのりに形ばかりのごめんつてえくという謝罪をするも、結局その日は一度も口を利いてくれなかった。その態度が余計にあたしを楽しませると知らずに。

あく、こんなに楽しみな合コンは初めてだなあと、私はワクドキしながら西野さんからのラインを待ったのだった。

その日、西野和之（かずゆき）は明らかにモテを意識したファッションで藤川駅へと降り立った。普段は付けない香水は、不快感を与えないハーブ系の爽やかな物を選択し、幅広の帽子とカジユアルなジャケットを着用。狙い過ぎて引くレベルではあるが、初対

面の女子が相手ならば引く事はまずない。

西野の本気、中学時代サッカー部だった彼が一度も試合で見せた事のない本気の姿。中学時代の同級生が今の彼を見たら、聞こえるか聞こえないかの舌打ちをするであろう。

そんな彼とは対照的に、普通にジーンズとトレーナー、それに野暮つたいアウトターを着た地味な男が一人。西野の本日の戦友であり贄となるパートナー、田中ケンシロウだ。

なぜ彼が西野と共にいるのか、それは一重に地味だからである。西野はあえて地味な後輩を選別し、自分の株を上げるといふ、男を下げる戦略を選択したのである。先輩からの強制を毅然と断る事の出来ない彼は、嫌々ながらも西野に連行されてきた。

駅構内を二人が出ると、西野は残り二人の不安要素を探す。

不安要素とはもちろん稲穂信と三上智也である。

半分冗談で頼んだ浜咲女子との合コン。それがまさか実現するとは思っていなかった西野は、七転八倒して喜んだのだが、合コン開催にあたって一つ条件を付けられた。三上智也を必ず参加させること、と。

その条件に西野はとてつもない苦渋の顔をしたものだ。

第一に、三上智也は絶対に合コンには参加しない。これは過去に誘って、何度も断ら

れているから重々承知していた。一度、しつこく誘ったら彼はこう宣言したものだ。

『今後二度と合コンが出来ないような惨状を繰り広げてもいいなら喜んで行くぞ』と。

暗に、都市伝説のように最悪な噂になるような合コンにしてみせると。三上智也がどういう既知外か、その身をもって知っている西野はそれ以降彼を誘う事はしなかった。

だが、だがしかした。今回の合コンにおいては、西野は三上智也の意思を曲げさせてでも参加させる決意をしたのだ。理由は明白で、単純にこれまでの合コンにはないほどの美少女力を備えたメンバーが相手だからだ。

そもそも浜咲の女子のレベルが全国でも群を抜いているというのもある。全国でも浜咲学園は女子のレベルの高さで、ネット界限では有名校なわけだ。

そういう理由で、三上智也というICBMを参加させる為、三上智也の発射スイッチを握る男、稲穂信を参加させるといふ最終手段を取らざるを得なかった。稲穂信が誘えば三上智也が参加しないわけがないからだ。

不安要素は三上智也だけではない、稲穂信という澄空の双壁の一人もその要因だ。

基本的には害がなく、三上智也の奇行に上手く付き合える埒外な彼だが、問題は至極単純明快。ぶつちやけ稲穂信は西野よりも数段上のイケメンなのだ。

三上智也も見てくれだけは稲穂信と同等だが、彼の場合は言動行動が突飛過ぎて特殊な女子以外は近づこうとはしない。特殊な女子が多い気はするが、それはそれ。だが、

稲穂信は三智也が絡まなければ、普通に女子が群がるルックスと良く気の付く性格をしている。西野にとつては三上智也よりも稲穂信をどう御するかで頭が一杯だった。

まあ、合コンが始まってしまえば稲穂信は三上智也の面倒を見てばかりになるだろうし、相手の事を気遣う余裕はないだろう。などと希望的観測をしつつ、待ち合わせの場所。時計の下のベンチへと目を向ける。

目を向け……彼はもう一度目を擦つてその場所へと目を向ける。

何度か同じ行為を繰り返し、目の前が自然と暗くなつて意識が薄らいでいきそうになるのを、寸でのところで自分の頬を張つて堪える。

ああ、もしかしたら自分はこの日の為に徹夜をした疲れが残っているのかもしれないと、横にいる後輩に三上はまだみたいだなと口にする。

西野の継るような言葉、それを田中ケンシロウは口先一つでダウンさせる。

「先輩、間違いありません。夢でも幻覚でも二次元でもなくて、あれは三上先輩です」  
「いつもはどもるくせに、こういう時は流暢なのか君は」

あまりの衝撃的な光景に、西野は回れ右をして今日の合コンを中止にしようと思つたのだが、時既に遅し。西野の背中を不安要素である稲穂信の声が引き留める。

「お〜い、西野こつちこつち〜」

「ケンシロウ君、彼等の秘孔を突いてくれね？」

「むしろ、僕達の秘孔を突きにきてます。というか、稲穂さんでしたっけ？よく普通にしていられますね」

「感性が異次元なんだろうな」

口の端を引くつかせながら振り返ると、あく、やつぱり現実だよねアレと頭を抱える。手を振る稲穂信の横には確かに三上智也がいた。合コン開催の最低条件は仁王立ちをして西野を直視している。

「なんでだよお。なんでこうなつちやうんだよお」

仁王立ちの馬鹿の戦闘服に目を伏せる。

本日の三上智也のファッション。迷彩服にタモと虫籠、それにやたらとでかいリュックを背負っている。頭を見ると、ヘルメットとライトも装着しているようだ。

何がどうしてそうなった？馬鹿の秘境はここにはねえよ、赤道でも歩いてるよと心で毒づく。

周りの女子学生等が遠慮なくスマホで三上智也を撮影していたり、クスクス横目で笑って通り過ぎていく。そんな人々を、愚民共がと唾を吐きそうな三上智也……というか本当に吐いていた。

朝に時間が戻って欲しいと心から願いながら、西野達は二人へと近づく。

「よお、遅かったじゃねえか！というかなんだその格好！貴様死にたいのか！」

「お前が死にたいのか？ つうかどういふことだよ保護者ツ!!」

三上に何を言つても無駄と経験則で知つてゐるため、保護者の胸倉を鬼の形相で掴むが、保護者の稲穂はにへらくとだらしなく笑う。

「いやあ、悪い悪い。西野がどんな手段を使つてもつれて来いつて言うからさ」

「どんな手段を使えばご覧の有り様になるんだよツ！」

「それは話せば長くなるんだけどな」

「手短に話せ」

「了解。じゃあ、智也に電話したところから話すか」

『おう、どうした信？ 今日には陵も鷺沢も来ないが……』

『ああ、あの二人は今日は関係なくてだな。それよりも智也、とんでもない事が起きてい  
るんだ』

『とんでもない事？ 唯笑とついに付き合う事になつたか？』

『唯笑ちゃんは不沈船だろ。そうじゃない、多分お前にはこう言えば伝わると思ふんだ  
が……』

『なんだよ、俺は今ワールドカップ観戦している伊波をどう邪魔してやろうかという計  
画を』

『狩りの時間だ』

『了解。場所はどこだ？』

『藤川駅前。駅前は今パニックに陥っている』

『となるとB装備か。すぐに行く。お前はそこを動くなよ』

『ふっ、わかつてるよ相棒』

「てなやり取りがだな」

「どういうことなの!？」

あまりに脈絡のない会話について西野のキャパが限界を迎え、横で聞いていたケンシロウに至っては興味がないのか、駅前のアニメイトへと目を向けている。

「おい西野、責める相手を間違えるな。責めるのなら軽装で来た愚かな自分だろうが」

「お前の軽装脳みそはどうしたら良いんだろうな！良いから、その何もかも勘違いした服の理由を寄越せ！」

「勘違い？馬鹿を言うなよ西野。狩りと言えばなんだ？」

「芝でも刈ってる」

「馬鹿野郎ツ!!狩りと言えばツチノコに決まってるだろうがツ!!」

「……は？」



開いた口が塞がらないとはこの事だろう。

稲穂は、俺は嘘は言っていないと飄々とした態度で嘯く。

「俺は嘘は言っていないぜ？今日は（女の子を）狩りにいくし、藤川の駅前には（智也の姿を見て）パニックだろ」

「確信犯じゃねえかッ!!」

どんな手段でも良いとは言ったのだが、西野はこの結果を想定してはおらず右往左往しそうになる。

「さあ、ハントしに行こうぜ！まずは自販機の下を「ちよつと黙れ」あ、はい」

西野が鬼のオーラを纏う。さすがの三上もさすがごと引き下がる。

さすがにこの状況は合コンどころじゃない。未成年が相手だから酒を避けて、人気の食べ放題の店を予約して、何日も前から計画を進行してきたというのに、これではこの場で全ての努力が泡と消える。

彼女等ともここで合流する手筈となっているのに、これでは――

「あゝ！どもども、西野さんですよねえ〜?」

「ジーザスクライスト」

「え？シーザーサラダっすか?」

神も仏も魔王もない。笑いの神だけしか微笑まないタイミングに、西野はすぐさまど

うにか状況を好転させようと、わざと大きいモーションで彼女等を出迎えた。

「あ、ああ！どうも西野でくす！今日は来てくれてありがとね、決まってからずっと楽しみにしてて！」

せめて彼女等の視線だけでも遮らなければ！

「そつすか？こちらは別にそうでもなかったけど、てかなんか動き大袈裟じゃねつすか？」

「そうかなあ？なんか運動不足っぽいから、なんか大きく動かし方がいいのかなあゝって！おいつちに、さんし！」

「いやいや、いきなり体操とか寒いんすけど」

「そうそう！寒いから少しでも身体を温めようかなあつてね！はは、あはははは！」

こうして時間を稼いでいるうちに稲穂へとアイコンタクト。俺が犠牲になっているうちにどうかしてくれと。

そんな西野に応えたのは稲穂ではなかった。

「は？お前、こんな公衆の面前で体操って、精神的に大丈夫か？」

いつの間にか気合が入り過ぎててもいなくて、ダサくもない服装の三上が答えたのだつた。

「なんでだよッ!!」

あまりのビフォーアフターつい声を荒げてしまう。

よく見ると、三上の背負っていたリュックがなくなっている。なるほど、リュックの中身は服だったらしい。きつとりリュックはどこかに預けたのだろうか、この短時間でどこに？

確かに彼は精神をずたずたに壊されているのかもしれない。

「アイドルもびつくりな早着替えじゃねえかよッ！」

「……本当に何言ってるんだよ西野。大丈夫か？」

「智也、西野は最近疲れてたんだ。仕方ねえよ」

「先輩、今日はもう帰って休みませんか？」

今年一番の手のひら返しに、藤川駅全体を揺るがすかのような西野の絶叫が轟き、街に待った合コンが開催されたのだった。

「じゃ、飲み物も揃ったところで軽く自己紹介ね。今日の合コンを仕切らせて頂く西野和之こと、ゆつきーです。よろしく。じゃ、まず男性陣からテンポ良く紹介しちゃって」

誰だよゆつきー。お前がそんな呼ばれ方してた瞬間知らねえよ。

一番通路に近いところに座る俺。俺から順に、信、田中、西野と座っている。ちなみ

に、通路側にいる理由に関しては言わずもなだらう。ぶっちやけ帰りたい。

「あ、えっと、た、田中ケンシロウです、今日は、よよ、よろしくお願ひしまう」  
やると思つたよ。お前なら絶対嘔み芸を披露してくれると確信していたさ。

対面の女子三人が嘔んだ瞬間に嘔き出して、緊張しすぎウケるゝとか爆笑している。良かったな、掴みばっちりじゃないか。やるな田中。しかし、ケンシロウって名前に誰も突っ込まないとか温（ぬる）いんだよなあ。

「俺はこいつらの保護者の稲穂信ね。名前はまあ好きに呼んで構わないから。よろしく」

田中とは女子の反応が違い、ひそひそと何やら話している。陰口だったら最高だが、かつこ良くない？とか言っているあたり、俺にとつて美味しい反応じゃなさそうだ。

「じゃあ最後に端にいる「店員さーん！タコ唐お願ひしまーすー」ぶっ殺すぞ三上ー」  
ただ注文しただけなのに激怒するとか、チエック厳しすぎだろ。軟骨でも食べさせよう。

仕方ない、無難に不愛想にやるとするか。

「三上智也だ、呼ぶときは様を付ける家畜共」

「うん、お前は今後一切口を開くなクソ野郎」

俺の小粋なトークに女子は色めき立ち、西野は殺気立つ。一般的な自己紹介なのに、

何が不満だと言うんだ。

俺の自己紹介に軽く愛想笑いする女子二人。だが、一人だけはふくんと興味深げに俺を観察してくる。目潰しして欲しいのかよ。

「そんじゃあたしから。あたしは香川美代、みよぼんとか、みよちーとか呼ばれてます。よっしく〜」

シヨートの髪の毛の女子が、敬礼をしながらウィンクをする。自衛隊志望か何かですかね？

よっしくつてどこの挨拶？年上には敬意を払えつて教わらなかつたのかよ。

「斎藤良枝(さいとうよしえ)です。年上の方と知り合えたらなつて思つてたんで、今日すつごい楽しみにしてましたあ。今日は楽しみましたようね？」

ぶりっ、とか擬音が聞こえそうな雰囲気だな。臭いんだよなあ。ところで西野君、君はなにうんうん笑顔で頷いてるのん？ツインテールとか狙い過ぎな子だよ？ちよろいよお前。

「早海鈴(はやみずず)です。あんまりこういう場合は苦手ですけど、よろしくお願ひします」

おいおいマジかよ。苦手なわりにメイク決まつてるじゃん。眼鏡掛けて上品なパーマなんだけどさ、狙つてるだろそれ。男のツボ掴んでる感じが出まくりじゃねえか。

「そっかあ、じゃあ今日は楽しめるように俺頑張っちゃおうかなあ」

西野のツボ突いちゃったか。田中、ソイツをひでぶさせちゃってくれ。

「あれ、そういえばそっちも四人じゃなかったっけ？」

「あ、そうなんだけどちよつとあの子遅れるみたいなんで、あたしただけでとりあえずスタートつてことで」

それはそれは朗報だな。会社だったなら説教もんだが、今日は許してやろう。

そうして恙なく合コンは進行していくと、いつの間にかいくつかの組み合わせが出来ていた。

田中×斎藤。信×早海。そんなもって憤慨な事に、俺×香川。

「なんでだよッ!!」

一人あぶれた西野の抗議の声。

「いやいやいやいや、三上と稲穂は納得出来るさ！ルックスだけなら特上だからな！」

「軽く性格をデイスるなよ」

「智也はともかく俺は性格に問題はないだろ」

「炙るぞ行き倒れ」

「だけど、なんでだ後輩！なんでお前がいい感じになっちゃってんの!?!」

「そ、そういうわけでは……」

「えー、良枝は良い感じになりたいけどおー、田中先輩は違うんですかあ〜？」

「い、良い感じって……ぼ、僕はその、あのですね……」

「もー、マジ可愛い〜。先輩持ち帰りたいたいですう〜！」

「ええええええ!!?!」

ははは、面白いな田中。動画でも撮ってあの素直じやない後輩に見せようかなあ。

「落ち着けよ西野。お前の気持ちは分かったからさ。とりあえずみんなで会話して、お前の良さを分かってもらおうぜ」

「……稲穂、やっぱお前と友達で良かったよ」

「やっぱってのが気になるが、まあいいか」

信が上手く西野を宥め、それを俺が更にフォローしてやる。

「てなわけだ、ぶっちゃけ西野の何が駄目なのか教えてくれ」

「必死過ぎなとこ」

「がつつき過ぎて引く」

「狙い過ぎててちよつとないですねえ〜」

「もうちよつと謙虚な意見にしてくれないかなあ!?!てか、このタイミングでなに聞いちやつてくれてんの!?!」

ハートブレイク寸前の西野を横目に、俺と信はハイタッチ。これぞ黄金コンビの為せ

る技。

「いいさ別に。遅れてくる子を狙い撃ちしてやるからさ」

この面子では諦めたらしいが、遅れてくる子の話が出た時の女子の反応が少し気になった。あく、あははく。という苦笑いが。

どうやら西野、今回は望み薄らしいな。

西野がいじけ、田中と信は接客モードで会話を進行。そこで俺はと言えば……

「それですね、最近あたしの友達がずっと三上さんの話ばつかするんですよ」

なぜか陵の友達らしい香川から、最近の小娘の日常を聞かされている。あの馬鹿は何を話してくれちゃってるのやら。

ラジオを聴くように、ビールを呑みながら枝豆を摘まむ。この香川つてのは何がしたいんだかな。

「で、あたし聞いたんですよ。三上って人の事好きなのかって」

……あ、枝豆を落としてしまった。いかんいかん。手元が狂うほど呑んでいないはずなんだがな。

「そしたらなんて答えたと思います？」

「違うって答えたんだろ、どうせ」

捻った答えを出せないつまらん小娘だからな。



俺の答えに香川がにんまりと頬を緩める。

「へえ、良くわかつてるじゃないですか。正解です」

「正解したんだ、何か賞品はないのか？」

「そうですね、あたしとのデート券とか？」

「それは西野にやってくれ。三万までなら出すはずだ」

「マジですか!？」

「マジなんだよあいつは」

さすがに三万という金額に心が動いたのか、多少本気で迷っている。一日付き合つて三万なら悩む必要が……相手は西野かあ……うむ、悩むのが正解だ。俺が同じ立場ならもう一声欲しいところだ。

「じゃなくて!その時のいのりんはいつもと」「やつほお、お待たせです」

香川が俺へと何かを告げようとすると、同じタイミングで遅れてきた最後の一人がやってきた。

あまりのタイミングに香川は小さく最悪と呟く。

俺は興味もなくそっぽを向いたためどんな小娘が現れたのかはわからなかった。だが、西野はその娘を目に入れるなり狂喜乱舞し、田中がぼろっと可愛いと零し、美少女を見慣れている信でさえも驚きを隠せていない。

そんな周りの反応に俺も興味が沸いて振り返ると――

「いやあ、すんません補習で遅れちゃって――え？」

そいつは俺の姿を目にすると言葉を失い、俺はそいつの成長した姿に一瞬思考が追い付かなかつた。

すらりとした長身、花祭のような華やかさ、黒須のように異性を惹き付ける雰囲気、長い髪は綺麗に編み込まれていて、そいつの華やかさを更に引き立てる。

だが、俺はそんな事に驚いたんじゃない。それは相手も同じ事だろう。

「智、先輩？」

「くるみ？」

お互いに視線がぶつかり合い、二人の時間が止まる。

止まる思考を力づくで回転させ、なんとか俺は口を無理矢理動かす。

「お前、なにや――」

無理矢理紡ぐ言葉はしかし、くるみの零した涙に奪われてしまう。

「智先輩……なんで、ですか？」

「くるみ」

「なんで私を一人にしたんですかッ！先輩がいなくなって、どれだけ私が辛かったと思っっているんですか！」

隠すこともない悔しさと憤りと悲しみが込められた声。その声が俺を弾劾する。これ以上ない程徹底的に。

「ひ、酷いですよッ！どれだけ私が辛かったと思ってるんですか！今先輩がいてくれたならって、何度……な、んども……」

「そ、そんなの俺だつてそうだ！あの時お前がいてくれたならって、今いてくれたならって……それに、俺から離れたのはお前じゃないか！」

「私は、離れて……なんか……」

突然の再会に驚いているのは俺よりも周囲の人間だった。

西野達だけじゃない、信までもが俺を信じられないような目で見てくる。

そんな中、おかしいと思つたんだよねえと声が出た。

「特に仲良くもないし、あたしらのグループを馬鹿にしているような長谷川（はせがわ）が、三上さんの名前を耳にしたらすぐに喰い付いてくるんだもんねえ。なるほど、そういう関係だったわけですかあゝ」

香川の険のある言葉に、くるみが目を伏せて顔を背ける。香川の言葉を否定するどころか、肯定するような態度に信も恐る恐る口を開く。

「智也、お前その子と……え、いやでも、後輩つて中学のだよな？それつてどういう？」

彩花と恋人だったんじゃないのかと暗に言っているのだろう。動揺する信の後ろに

は、リア充消滅すればいいのにと囁く田中と、血涙しそうな西野が齒噛みしている。何度目かわからないが言っておく。西野自重しろ。

そんな信達を無視して俺は立ち上がり、涙を拭うくるみの頭へと手を伸ばす。両拳をなツ!!

「めちやくちや誤解されるネタ振ってんじやねえぞゴラアツ!!」

こめかみを拳で挟み込んで思いきりねじ込んでやる。手加減など無用!

「イダダダダダダダツ!!イテエつすよ智先輩ツ!」

「うるせえツ!!乗ってやっただけでも感謝しろ!マジな泣きの演技しやがって!」

「智先輩なら合わせられるじやないっすかあ!」

「そういう問題じやねえだろ!」

突然のシリアスをいい加減ぶち壊すと、どういう事だといくつもの視線が問い掛けてくる。

「えっと、智也?その子とお前って……」

「あん?俺とこいつ?こいつは俺の「初めての人っす」ある意味間違いじゃないが……まあ、なんだ。弟子みたいなものだ。わかるだろ?」

「わかってたまるか」

ふむ、信にしては察しが悪いな。さっきの動揺の影響がまだ残っているらしい。

「つまりな、くるみは俺の中学の後輩で「初めての人っす」お前の中でそれ流行ってんのかよ!？」

未だに俺とくるみの関係を理解出来ない様子の面々に、なんと説明したらいいかと頭を悩ませる。

「ちよ、ちよつと待つて。一旦整理していい?」

敬語を止めた香川が率先して周囲を落ち着かせ、えつとと何を聞くかを考えながら言葉にする。

「まずさ、一人にしたってのはなんなわけ?」

「……?高校が離れただけっすけど」

嘘じゃない。だから俺は俺から離れたのはお前だつて言ったんだ。澄空に入っていればそんな事は言わない。

「いやいやいやいや、じゃあ今いてくれたらとか言つてたのは?」

「あく、それはアレっすよ。クラスでの自己紹介の時、私がちよつとやらかしちやつたみたいなの自己紹介になつたじゃないっすか?あの時、智先輩がいてくれたら的確に突っ込んできて笑いに変えられたのについて意味っすよ」

早海と斎藤は、あく、あの伝説の自己紹介ねえくと納得している。何をやらかしたんだこいつは。ああ、ちなみに俺も似たような意味で応えたわけだ。俺のネタにこいつは

ついてくるからなあ。

そこまで質問に答えると、今度は信がなるほどと腕組をしながら頷く。

「つまり君は智也の系譜って認識でいいのかな？」

「おい待て、俺はこいつほど狂ってない！」

「まあ、間違いないじゃないです。私にネタを仕込んだのは智先輩と彩先輩ですから」

「つまり二人の子供ってわけだね」

「こんなイカれた奴を俺達の子供になんかしたら彩花が泣くぞ。確かにこいつに笑いを仕込んだのはあいつだけだ。」

「あつれ、智先輩？」

俺と彩花の子供認定されてしまった馬鹿が、首を捻りながら信を指差す。

「その人、彩先輩の事知ってるんすか？てか、二中の先輩にいましたっけ？」

なるほど。彩花の事を知ってるのは二中のやつだけだと思ってたのに、他に知っている人間がいる事が不思議なわけだ。

「ああ、こいつはちよつと事情があつてな」

「へえ、そうなんすか。ま、どうでもいいっすけど」

トレンチコートの刑事のように、ちよいとごめんよと片手で謝罪しながら席に着く。

何歳だよこいつ。

遅れてきたことも何のその、罪悪感はトイレに流してでもきたのだろう。さすが俺達の弟子。

そんなくるみをため息混じりに見やり、よっこらせと俺と同時にくるみも座って滞っていた会議をリスタート。

「で、何話してたんだっけか？」

「あれじゃないっすか？ 智先輩のボクサーパンツデビュー記念日」

「お前のブラ記念日を答えたら教えて」「あ、自分は小五っす」誰だよこいつの教育係。恥じらいどこに売ってきちやっつてんだよ」

「強いて言うなら智先輩の背中が語って育ててくれたんじやないっすかね」

「お前が俺の真似する度に彩花と唯笑に説教喰らったの思い出したわ」

あの二人はくるみを異常に可愛がってたからなあ。アイドルにしようと思論む二人の思惑とは裏腹に、どんどん立派な奇行種に成長しちまって。初めて会った頃はあんなに……

懐かしい光景が脳裏に過ろうとした時、なぜか白けた視線に俺達二人は晒されていた。隣にいる信までもが俺を奇妙な生物を発見したかのように見てくる。西野は西野で目から紫の何かを垂れ流している。西野を人体解剖でナサ的な何かに売り渡したら巨万の富を得ることが出来るだろう。俺等の中で比較的まともなケンシロウまでもが

ブツブツと、死、死、死、デスと胡乱な瞳で呟いていた。

何かおかしいことがあるだろうか？ほんの少し昔馴染みと仲睦まじくしているだけだというのに。首を捻る俺とくるみに香川が苛立ちを押し殺した声で……

「あんさ、なんで長谷川普通に三上さんの膝の上に乗ってんの？」

その指摘に俺とくるみは目をぱちくりとさせ……

「あゝ、つい昔の癖で流してたな」

「そういやそうっすね。でもまあ、このままでも良いんじゃないっすかね？」

「良いわけないじゃん！どんな合コンよ！」

香川の怒号に軽い舌打ちをしてくるみは俺の膝の上から降りて、信と俺の間へと無理矢理座った。

「どっすか？これで満足っすか？」

「満足なわけではないでしょ！こっち来なさいよ！」

「良いじゃないっすか別にいい。自分恋愛とか興味ないし、気に入ったら好きに持ち帰って良いっすから……まあ、無謀っすけどね」

「なんか言った？」

「かがわん達レベルじゃ正直プログラム書き換えないと攻略出来ねえって話。そっちの二人はわっかんないけど、多分智先輩とこっちの……」



「あ、俺は稲穂信ね。こいつの親友やってます」

「この人は攻略無理ゲー」

「は？あんたに関係なくない？」

「これがあるんすよねえ。特に智先輩のパートナーは自分が一次審査するんで。すよね、先輩？」

「え、何その制度。うちの人事部にこんな性格破綻者雇った覚えねえけど」

「ほら、先輩もこう言ってるわけ」

「めっちゃ解雇宣言されてんじゃないのよ！」

ぎゃーすかうるさい二人をよそに、信がくるみの背中越しに……

「後で説明しろよ」

「……唯笑にでも聞いてくれ」

くるみと俺達の関係は一言で言えばこいつにとって俺達は保護者だったのだ。嘘偽りもなく、あの頃の俺達はこいつにとって姉と兄であり、父であり母だった。

それに中学の後輩というのも正確ではない。正確には小六の時にこいつと出逢ったのだから。

あの頃のくるみとの事を信に話すのは吝かではないが、決して楽しい話ではないのが心苦しい。今のくるみからは想像も出来ないこつてりと、食後には胃にずしりと重いど

ろどろの濃厚な……そんな吐き気のする過去がある。

くるみを泥濘から掬い上げたのは紛れもなく彩花と唯笑だ。俺に出来たことはごくわずかで、だからこそくるみが初めて泣いた時……そして、ぐしやぐしやの顔をして笑った時俺達もまた同じ顔でくるみを三人で抱き締めた。

目の前で同級生と嬉々として口論しているくるみの姿に、当時の姿を重ねて笑う。こいつが立派になって本当に良かったなど。

「智先輩、かがわんが智先輩の質素なジュニアを捕食しようとしてるっす！」

「してないわよ！……え、質素なんですか？」

「巻き込み事故起こしてんじゃねえ！」

天国の母さんや。娘はこんな外道に育ったぞ……

ヒールレスラーよりも突然で突拍子もないくるみとピッチ代表の香川の口論をなんとか西野と信が宥め、俺にとっての苦痛な夜がさらに更けていくのであった。